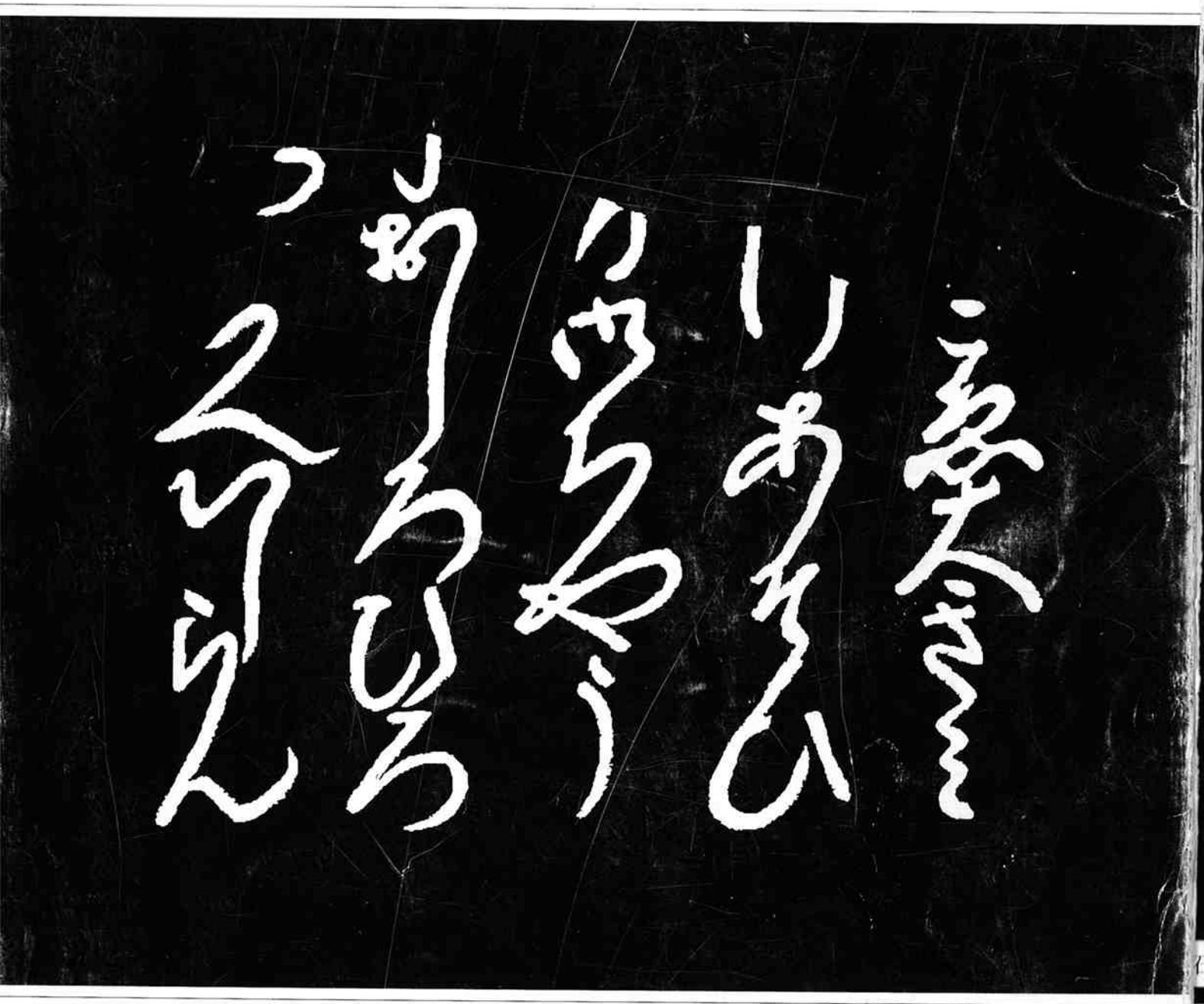
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第３集

首里城跡

―下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書―



２００１年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第３集

首　里　城　跡

－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－

２００１年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

巻首図版　上：ミャンマー産褐釉陶器
　　下：下之御庭跡（現況）

序

今回報告する『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』は、平成元年度～平成２年度に発掘調査を実施した建設省の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）に係わるものであります。

平成12年度は、首里城跡京の内から出土した貿易陶磁器類が国の重要文化財に指定され、また、首里城跡をはじめとした琉球王国の遺産群が世界遺産に登録された年でもありました。戦災を受け廃墟と化していた首里城跡を沖縄県教育委員会による十数年来の調査成果をもとに、国及び県が復元整備したことが評価されたと考えております。

さて今回の報告書では、去る大戦で消失した門や建物の跡などの成果が報告され、首里城の歴史的な解明と復元整備に貴重な資料を提供出来たものと考えております。

これらの遺構とともに、中国や東南アジアからもたらされた貿易陶磁器が多量に得られております。本地区からの出土遺物の中にはこのたび国の重要文化財に指定された京の内の資料に優るとも劣らない希少価値の高い貿易陶磁器類が多くみられます。

沖縄県はかって琉球王国を形成し、独自の文化を発展させました。これらの出土品は、首里城が琉球王国の政治、経済、外交及び文化の中心として繁栄していたことを示す貴重な資料であります。本報告書の刊行が首里城及び本県の歴史研究に寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、今回の報告書を作成するにあたりまして、資料整理のご指導をいただきましたは亀井明徳先生をはじめ、発掘調査に際しご協力を賜りました関係各位に対し深く敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

平成13年３月30日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　知念　勇

例　　言

1　本報告書は、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）に伴い平成元年度～平成２年度にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2　発掘調査は沖縄総合事務局より依頼を受け沖縄県教育庁文化課が実施した。資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて行った。

3　出土遺物の同定及び資料整理にあたってのご指導は下記の諸先生方によるものであります。記して深謝いたします（職名等は当時）。

陶磁器……亀井　明徳（専修大学 教授）
〃　……手塚　直樹（鎌倉考古学研究所 所長）
〃　……大橋　康二（佐賀県教育庁文化財課 副課長）
〃　……金武　正紀（那覇市教育委員会文化財課 課長）
〃　……鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課 普及係長）
〃　……金　　立言（慶應義塾大学大学院）
高麗青磁……尹　　龍二（圓光大学博物館 館長）
タイ産褐釉陶器……吉良　文夫（小学館）
〃　……向井　　亙（金沢大学大学院）
ベトナム産磁器……西村　昌也（ハノイ国家大学ヴェトナム文化交流センター 客員研究員）
〃　……西野　範子（　〃　）
武具……久保　智康（京都国立博物館 主任研究員）
銭貨……嶋谷　和彦（堺市立埋蔵文化財センター 学芸員）
脊椎動物遺体……金子　浩昌（早稲田大学 講師）
石質鑑定……神谷　厚昭（沖縄県立博物館 指導主事）
石碑……富島　荘英（前那覇市史料編集室）
〃　……島尻　勝美（那覇市史料編集室）

4　本報告書は西銘を中心に、金城敬子、友利映子ほかの協力を得て編集を行った。各節の執筆は以下のとおりである。

西銘　　章　第Ⅰ章～第Ⅲ章、第Ⅳ章第３・６・15・21・22・28・38節、第Ⅴ章
城間　　肇　第Ⅳ章第１・４・５・８～14・16～20節
比嘉　優子　第Ⅳ章第２・37・39・40節（ヤコウガイをのぞく）・41節
島袋　　洋　第Ⅳ章第７節
新垣　　力　第Ⅳ章第23節
田里　一寿　第Ⅳ章第24～27節
藤崎　　京　第Ⅳ章第29節
山本　正昭　第Ⅳ章第30～32節
古屋　聡洋　第Ⅳ章第33～36節
島袋　春美　第Ⅳ章第40節貝類（ヤコウガイ）、付篇
譜久嶺忠彦　第Ⅳ章第42節

5　遺物の写真撮影は長田　剛（埋文センター嘱託職員）・宮崎典子（同賃金職員）が行った。

6　貝類・脊椎動物遺体の同定は県立埋蔵文化財センター保管のサンプルと照合して瑞慶覧尚美（埋文センター賃金職員）が行った。

7　今回報告した出土品、図面・写真等は全て県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

8　編集の都合上、瓦を付篇とした。また、一部出土遺物は編集の都合上、省略した。次回刊行予定の『首里城跡ー右掖門地区発掘調査報告書ー』において報告する。

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと
書名	首里城跡
副書名	下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書
巻次	沖縄県立埋蔵文化財調査報告書第３集
シリーズ名	
編著者名	城間肇、島袋洋、島袋春美、比嘉優子、西銘章、藤崎京、古屋聡洋、田里一寿、新垣力、山本正昭、譜久嶺忠彦
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県西原町字上原193番地の７
発行年月日	2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわけん なはし 沖縄県 那覇市 しゅりとうのくらちよう 首里当蔵町	47201 那覇市		26° 12′ 46″	127° 43′ 14″	平成元年 10月10日 ～ 平成３年 ３月26日	5,240㎡	国営記念公園 （首里城地区） 整備

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	城館	中世～近代	礎石 石積み遺構 石畳遺構 側溝遺構 水路状遺構	青磁、白磁、青花、瑠璃釉、紅釉、ベトナム産磁器、高麗青磁、中国産・タイ産褐釉陶器、中国産色絵、彩釉陶、黒釉陶器、鉄釉染付、鉄絵、中国産無釉陶器、タイ産半練、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、陶質・瓦質土器、硯、石製品、石球、坩堝、武具、釘・釘状製品、銭貨、簪、煙管、ハブラシ、骨製品、土製品、貝製品、貝類、脊椎動物遺体、人骨、円盤状製品、瓦、石碑	

目　次

序
例　　言
報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査体制…… 1
　第３節　調査経過…… 2

第Ⅱ章　首里城跡の環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3

第Ⅲ章　遺構と層序…… 5
　第１節　遺　　構…… 5
　第２節　層　　序…… 5

第Ⅳ章　出土遺物…… 7
　第１節　青磁…… 7
　第２節　白磁…… 33
　第３節　青花…… 40
　第４節　瑠璃釉…… 48
　第５節　紅釉…… 49
　第６節　中国産褐釉陶器…… 52
　第７節　タイ産褐釉陶器…… 62
　第８節　色絵…… 66
　第９節　釉裏紅…… 67
　第10節　彩釉陶…… 70
　第11節　黒釉陶器…… 79
　第12節　鉄釉染付…… 79
　第13節　鉄絵…… 81
　第14節　中国産無釉陶器…… 83
　第15節　褐釉磁器…… 85
　第16節　高麗青磁…… 86
　第17節　ベトナム産磁器…… 88
　第18節　タイ産半練…… 92
　第19節　本土産染付…… 94
　第20節　本土産色絵…… 99
　第21節　本土産印判手…… 101
　第22節　本土産陶器…… 102
　第23節　沖縄産施釉陶器…… 105
　第24節　沖縄産無釉陶器…… 117
　第25節　土器…… 125
　第26節　陶質土器…… 128
　第27節　瓦質土器…… 133
　第28節　硯・石製品…… 138
　第29節　円盤状製品…… 140
　第30節　坩堝…… 142
　第31節　武具…… 143
　第32節　石球…… 144
　第33節　釘・釘状製品…… 148
　第34節　銭貨…… 151
　第35節　簪…… 154
　第36節　煙管…… 156
　第37節　歯ブラシ様製品…… 158
　第38節　石碑…… 160
　第39節　骨製品・貝製品・土製品…… 160
　第40節　貝類…… 164
　第41節　脊椎動物遺体…… 164
　第42節　人骨…… 175

第Ⅴ章　結語…… 176

付篇：瓦…… 272

挿図目次

第１図　遺跡の位置…… 4
第２図　首里城跡平面図…… 4
第３図　遺構検出状況…… 6
第４～23図　青磁…… 14
第24～26図　白磁…… 37
第27～31図　青花…… 43
第32～33図　瑠璃釉・紅釉…… 50
第34～39図　中国産褐釉陶器…… 56
第40～42図　タイ産・ミャンマー産褐釉陶器… 64
第43図　色絵…… 68
第44図　釉裏紅…… 69
第45～49図　彩釉陶…… 74
第50図　黒釉陶器・鉄釉染付…… 80
第51図　鉄絵…… 82
第52図　中国産無釉陶器…… 84
第53図　褐釉磁器…… 85
第54図　高麗青磁…… 87
第55～56図　ベトナム産磁器…… 90
第57図　タイ産半練…… 93
第58～59図　本土産染付…… 97
第60図　本土産色絵…… 100
第61図　本土産陶器…… 104
第62～69図　沖縄産施釉陶器…… 110
第70～73図　沖縄産無釉陶器…… 121
第74図　土器…… 127
第75～77図　陶質土器…… 130
第78～80図　瓦質土器…… 135
第81図　硯の各部名称…… 138
第82図　硯・石製品…… 139
第83～84図　円盤状製品…… 140
第85図　坩堝…… 142
第86図　石球…… 145
第87図～88図　武具…… 146
第89図　釘・釘状製品…… 150
第90～91図　銭貨拓影…… 152
第92図　簪…… 155
第93図　煙管…… 157
第94図　歯ブラシ…… 159
第95図　石碑…… 161
第96図　骨製品，貝製品・土製品…… 162
第97図　ヤコウガイの各部名称…… 167
第98図　明式瓦軒丸・平様式各部名称…… 273
第99図　文様の変遷（上軒平・下軒丸）…… 273
第100～102図　明朝系瓦（軒平瓦・軒丸瓦）… 277

図版目次

巻首図版　上：ミャンマー産褐釉陶器
　　下：下之御庭跡（現況）
図版１　青花…… 43
図版２　褐釉磁器…… 85
図版３　石碑・高欄羽目板…… 161
図版４　人骨…… 175
図版５　調査状況…… 177
図版６～25　青磁…… 178
図版26～28　白磁…… 198
図版29～32　青花…… 201
図版33～34　瑠璃釉・紅釉…… 205
図版35～40　中国産褐釉陶器…… 207
図版41～43　タイ産褐釉陶器…… 213
図版44～45　色絵・釉裏紅…… 215
図版46～50　彩釉陶…… 217
図版51　黒釉陶器・鉄釉染付…… 222
図版52　鉄絵…… 223
図版53　中国産無釉陶器…… 224
図版54　高麗青磁…… 225
図版55～56　ベトナム産磁器…… 226
図版57　タイ産半練…… 228
図版58～59　本土産染付…… 229
図版60　本土産色絵…… 231
図版61　本土産印判手…… 232
図版62　本土産陶器…… 233
図版63～70　沖縄産施釉陶器…… 234
図版71～74　沖縄産無釉陶器…… 242
図版75　土器…… 246
図版76～78　陶質土器…… 247
図版79～81　瓦質土器…… 250
図版82　硯・石製品…… 253
図版83　円盤状製品…… 254
図版84　坩堝…… 255
図版85　石球…… 256
図版86～87　武具…… 257
図版88　釘・釘状製品…… 259
図版89～90　銭貨…… 260
図版91　簪…… 262
図版92　煙管…… 263
図版93　歯ブラシ…… 264
図版94　骨製品・貝製品・土製品…… 265
図版95　貝類（巻貝）…… 266
図版96　貝類（ヤコウガイ）…… 267
図版97　貝類（二枚貝）…… 268
図版98～101　脊椎動物遺体 …… 269
図版102　明朝系瓦(軒平瓦）…… 280
図版103　明朝系瓦(軒平瓦・軒丸瓦）…… 281
図版104　明朝系瓦(軒丸瓦）…… 282

表　目　次

第１～６表　青磁観察表…… 8
第７～８表　白磁法量一覧…… 36
第９～11表　青花観察表…… 40
第12～14表　中国産褐釉陶器…… 53
第15表　中国産無釉陶器観察表…… 83
第16表　タイ産半練観察表…… 92
第17～18表　本土産印判手観察表…… 101
第19～21表　沖縄産施釉陶器観察一覧…… 107
第22～23表　沖縄産無釉陶器観察一覧…… 119
第24表　土器観察表…… 126
第25表　陶質土器観察一覧表…… 129
第26表　瓦質土器観察一覧表…… 134
第27表　硯・石製品観察表…… 138
第28表　完形品299点の各大きさの個体数 …… 140
第29表　武具…… 144
第30表　釘・釘状製品観察表…… 149
第31表　銭貨観察表…… 151
第32表　簪観察一覧…… 154
第33表　煙管観察一覧…… 156
第34表　キセル計測項目…… 156
第35表　歯ブラシ様製品法量一覧…… 158
第36表　骨製品（鏃）法量一覧…… 163
第37表　骨製品法量一覧…… 163
第38表　土製品法量一覧…… 163
第39表　貝製品法量一覧…… 163
第40表　貝類出土状況（巻貝）…… 165
第41表　貝類出土状況（二枚貝）…… 166
第42表　ヤコウガイ蓋…… 167
第43表　ヤコウガイ…… 167
第44表　ヤコウガイ残留部位…… 167
第45表　イノシシ出土表…… 168
第46表　ウマ出土表…… 169
第47表　ヤギ出土表…… 169
第48表　ウシorウマ出土表…… 169
第49表　イノシシorブタ出土表…… 169
第50表　カメ出土表…… 169
第51表　ネコ出土表…… 170
第52表　ネズミ出土表…… 170
第53表　イヌ出土表…… 170
第54表　ジュゴン出土表…… 170
第55表　イルカ・クジラ出土表…… 170
第56表　ウシ出土表…… 171
第57表　サカナ出土表…… 172
第58表　ウシ歯牙出土表…… 173
第59表　ウマ歯牙出土表…… 173
第60表　イノシシ歯牙出土表…… 174
第61表　ヤギ歯牙出土表…… 174
第62表　イヌ歯牙出土表…… 174
第63表　軒平観察一覧…… 274
第64表　軒丸観察一覧（１）…… 275
第65表　軒丸観察一覧（２）…… 276
第66表　軒丸地区・分類別出土状況…… 276
第67表　軒平地区・分類別出土状況…… 276

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

首里城跡下之御庭跡ほかの発掘調査は、平成元年度～平成２年度の間に行われた。この調査は正殿跡に始まる首里城跡における国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）に伴う事前の発掘調査で、約5,240㎡が調査対象となった。

首里城跡は大正14（1925）年に正殿ほかが国宝に指定されたが、去る沖縄戦で全てが灰燼に帰した。戦後、首里城跡内には昭和25（1950）年から琉球大学が建設され地形も大きく改変を受け、往事の面影を残すものは昭和32（1957）年に復元された園比屋武御嶽などの周辺の一部に限られるものとなった。その中で、昭和42（1967）年に琉球大学が当地から移転することが決定しその跡地利用計画が検討され、沖縄県は首里城跡など戦災文化財の復元整備計画を立案した。昭和47（1972）年の日本復帰に伴い沖縄開発庁の補助を受け、その手始めとして観会門が昭和49（1984）年に復元の運びとなった。昭和61（1981）年には正殿跡の調査も開始されている。その後、発掘調査がすすめられ久慶門などが順次復元される。

昭和57（1982）年度に第二次沖縄振興開発計画が打ちだされ、昭和59（1984）年度に沖縄県による「首里城公園基本計画」を復元整備とする整備がすすめられ、首里城跡の本格的な復元整備への機運が高まっていった。さらに正殿などの主要な建造物の復元が検討された結果、昭和61（1986）年度には首里城公園計画区域とされた約18haのうち、正殿を一帯とする内郭部分約４haが日本復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として整備復元することが閣議決定された。これにより正殿をはじめとする建造物が復元された。

併せて外郭などの残りの約14haを沖縄県による県営公園事業（首里城公園整備事業）として事業が行われ、首里城跡やその周辺の整備がすすめられている。また、城郭を同じく県の事業（首里城城郭等整備復元事業）として整備が行なわれている。

今回の事業は国営沖縄記念公園首里城地区に伴うもので、沖縄総合事務局より委託された沖縄県教育委員会が主体となって調査を実施することとなった。

第２節　調査体制

調査は平成元年度～平成２年度に現地での発掘調査を実施し、平成12年度に本格的な資料整理と報告書の刊行を行った。体制は下記のとおりで実施した（職名等は当時）。

平成元年度～平成２年度（発掘調査）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教　育　長	高良　盛敏	
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　　長	宜保榮次郎	
事業総括	同　上	課長補佐	上江洲　均	
	同　上	課長補佐	平田　與進	
	同　上	主幹兼係長	安里　嗣淳	
事業事務	同　上	文化振興係長	仲里　哲雄	
		同　主事	波平　　淳	
事業実施	同　上	埋蔵文化財係	主任専門員	大城　　慧
	同　上	同　上	専門員	長嶺　　均
	同　上	同　上	嘱託職員	矢沢　秀雄
	同　上	同　上	同　上	島袋　　洋
	同　上	同　上	同　上	城間千栄子
	同　上	同　上	同　上	上地千賀子
	同　上	同　上	同　上	照屋　　孝
	同　上	同　上	同　上	比嘉　優子

発掘調査作業員

島尻三郎、新里造一、上原美枝、金城春江、兼城光子、諸見里豊子、呉屋正一、呉屋光子、古波津芳子、古波津夏子、玉城富子、幸地ヨシ子、城間ハル子、小橋川幸子、呉屋救、山畑キミ、新垣シゲ子、知花まさ子、屋比久孟松、屋比久春、儀間トヨ、比屋根トミ、仲村ツル、比嘉キク、津波古よし子、平良ツル、島袋文子、上原美枝子、与那原寛喜、諸見里幸子

平成12年度（資料整理）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教育長	翁長　良盛
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	知念　勇
事業総括	同　上	副所長兼庶務課長	知念　廣義
事業事務	同　上	副所長兼庶務課長	知念　廣義
	同　上	庶務課主事	上原　浩
事業実施	同　上	調査課長	島袋　洋
	同　上	指導主事	西銘　章
	同　上	専門員	山本　正昭
	同　上	嘱託職員	城間　肇
	同　上	同　上	與那国充子

資料整理作業員

吉村綾子、宮崎典子、大城陽子、真栄田章子、比嘉美和子、譜久村泰子、與古田愛、梅田倫代、幸地真弓、玉寄智恵子、瑞慶覧尚美、池原直美、玉城恵美利、新垣利津代、田中俊朗、金城恵子、上良早美、栄野元左季

第3節　調査経過

調査は奉神門地区から引き続き調査を行い、平成元年度～平成2年度の間で下之御庭跡ほかを実施した。調査対象になったのは、下之御庭跡、用物座跡、瑞泉門跡、漏刻門跡、廣福門跡、木曳門跡に係る一帯で、発掘総面積は約5,240㎡である。以下、調査経過を略記する。また、今回の調査は平成9年度に報告書を刊行した御庭跡・奉神門跡地区とも一部並行して行っている。

調査は平成元年10月10日～平成3年3月26日の間に実施した。調査区域一帯には、戦前には第一小学校、戦後は琉球大学の道路敷設や図書館棟が建っており、主に盛り土造成が行われていた。そのため、まず重機を使用して盛り土を除去し、続いて人力による掘り下げを行った。

調査区の設定は、正殿跡の調査以来踏襲されているグリッド配置に準じて行った。グリッド設定は一辺が4mの正方形として、南から北へアルファベット、東から西へ算用数字を割り当てた。

詳細は後述するが、調査で確認された遺構の多くは第一小学校に伴うものであり、特に図書館棟の建っていた漏刻門跡一帯は、遺構を確認することがほとんどできなかった。ただ、廣福門跡一帯では門に伴う遺構を一部確認することができた。

平成12年度は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて本格的な資料整理を開始した。調査で得られた遺物は遺物収納用コンテナ（大きさ約40㎝×60㎝×20㎝）に換算して約1,600箱以上にも及ぶ膨大なものであった。そのうち瓦・磚がほとんどを占め、約600箱余に上る。

資料整理は調査から10年を経ていることもあり、出土グリッドの再確認や遺物の再整理、さらに、隣接する京の内（平成9年度報告分）出土の遺物と接合確認ができるなど、事前の作業に時間を要した。これらの確認後、実測、トレース、図版作成及び原稿執筆を行い、報告書刊行に漕ぎ着けることができた。

第Ⅱ章　首里城跡の環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、沖縄県那覇市首里当蔵町に所在する。形状は東西方向に伸びた長楕円形をなし、面積は46,000㎡を越える県下最大級のグスクである。海抜120～130ｍの丘陵上に立地、最大標高は136ｍで、広く沖縄本島中南部一帯を遠望することができる（第２図）。

周辺の遺跡は崎山御嶽遺跡などグスク時代以降の遺跡がほとんどで、首里城跡内で先史遺物がみつかっている他は先史遺跡は確認されていない（第１図）。

首里城跡一帯の地質は上位に琉球石灰岩（更新世）、下位に島尻層群（鮮新世）からなる。琉球石灰岩は水を浸透しやすいが、島尻層群は不透水層であるため湧水が豊富であり、瑞泉門下の龍樋から流れ出す水がそれである。島尻層群はクチャやニービと呼ばれ、首里城跡一帯にみられるものはニービである。琉球石灰岩は島尻層群を不整合に覆い、城跡南側の一部には石灰岩の崖が形成され、露頭が城内各所にみられる。首里城跡周辺は、東に弁ヶ嶽、北に末吉一帯の丘陵、さらに前述の水の豊富さから各河川の源流がみられる。これら起伏に富んだ様々な地形に囲まれた首里城跡は風水的に恵まれ、『球陽』にあるように「国都の高処に発祖し、最も好」く王城として最適な場所に占地しているといわれる。

第２節　歴史的環境

首里城跡はこれまでの発掘調査の成果から、14世紀中頃に築かれたと考えられている。また、史書等からの推察では、14世紀後半に王位にあった察度により築かれたとされ、1392年に建てた高楼がそれにあたるとする意見がある。首里城跡は「内郭」と「外郭」の大きく２つに分けられ、今回調査対象となったのは内郭である。内郭は創建当初の部分とされ、城内の主要施設が集中する。外郭は第二尚氏の尚真王以降に拡張されたもので、防備の強化を目的としたものなどとされる。石積みの高さは内郭が２～４ｍ程度、外郭が４～８ｍ程度あり、もっとも高いところでは15ｍ程の高さを持っていたという。城内には観会門をはじめとした門があり、今回は瑞泉門他が調査対象となった。以下、これらについて略記する。

瑞泉門は内郭第一の門で、門下にある泉の「瑞泉」から命名したとされる。そのため、「樋川御門」とも呼ぶ。正確な創建年代は不明で、第一尚氏の時代（15世紀）と考えられている。門の構造は石積みに桁を渡した櫓門で、木造本瓦葺きの入母屋造りであった。外郭第一の門である観会門が拱門上に櫓を載せる点とは異なる。門前左右に獅子を配する。戦前は正殿とともに国宝に指定されていた。

漏刻門は瑞泉門を上った次の門で、瑞泉門と同様に櫓門、木造本瓦葺き、入母屋造りの構造である。この門で時を計り報せていたことから命名された。また、この門で駕籠から降りることになっていたため「かごゑせ御門」の名がある。第一尚氏の時代に創建されたと考えられる。櫓は昭和初期に撤去されている。

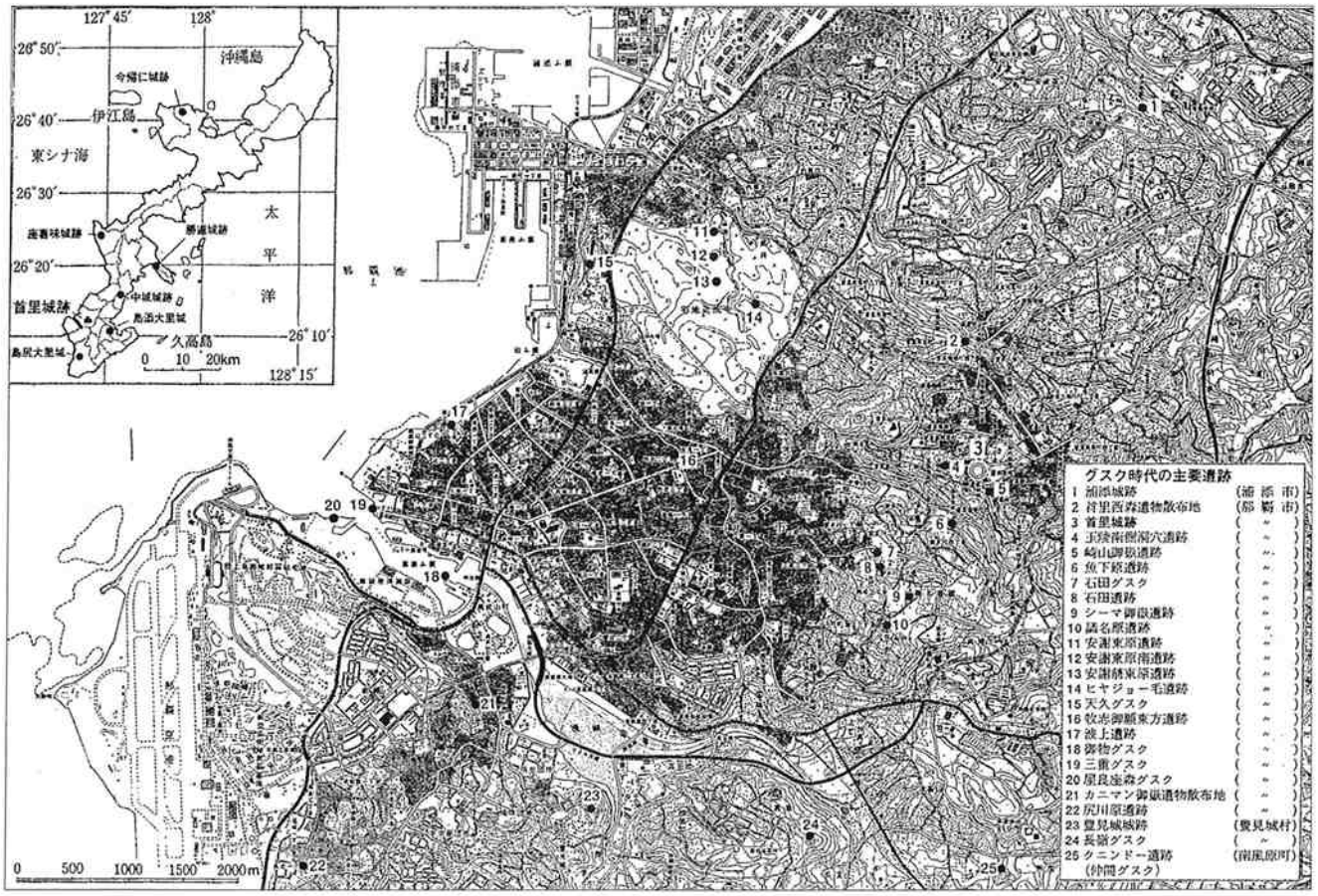
廣福門は、瑞泉、漏刻門に続く門で、前二者と異なり楼門で木造平屋の造り。両脇には、東に民事や犯罪を扱う大与座、西に寺や神社を扱う寺社座があり、役所としての機能を併設していた。創建年代は不明。明治45（1912）年の第一小学校の建設に際して奉神門とともに取り壊された。「長御門」とも称する。

木曳門は内郭のもっとも西に位置する門で、形状は拱門。平時は石積みで閉じられ、城内へ木材の搬入等を行う際のみ開かれたとされる。創建年代は不明。

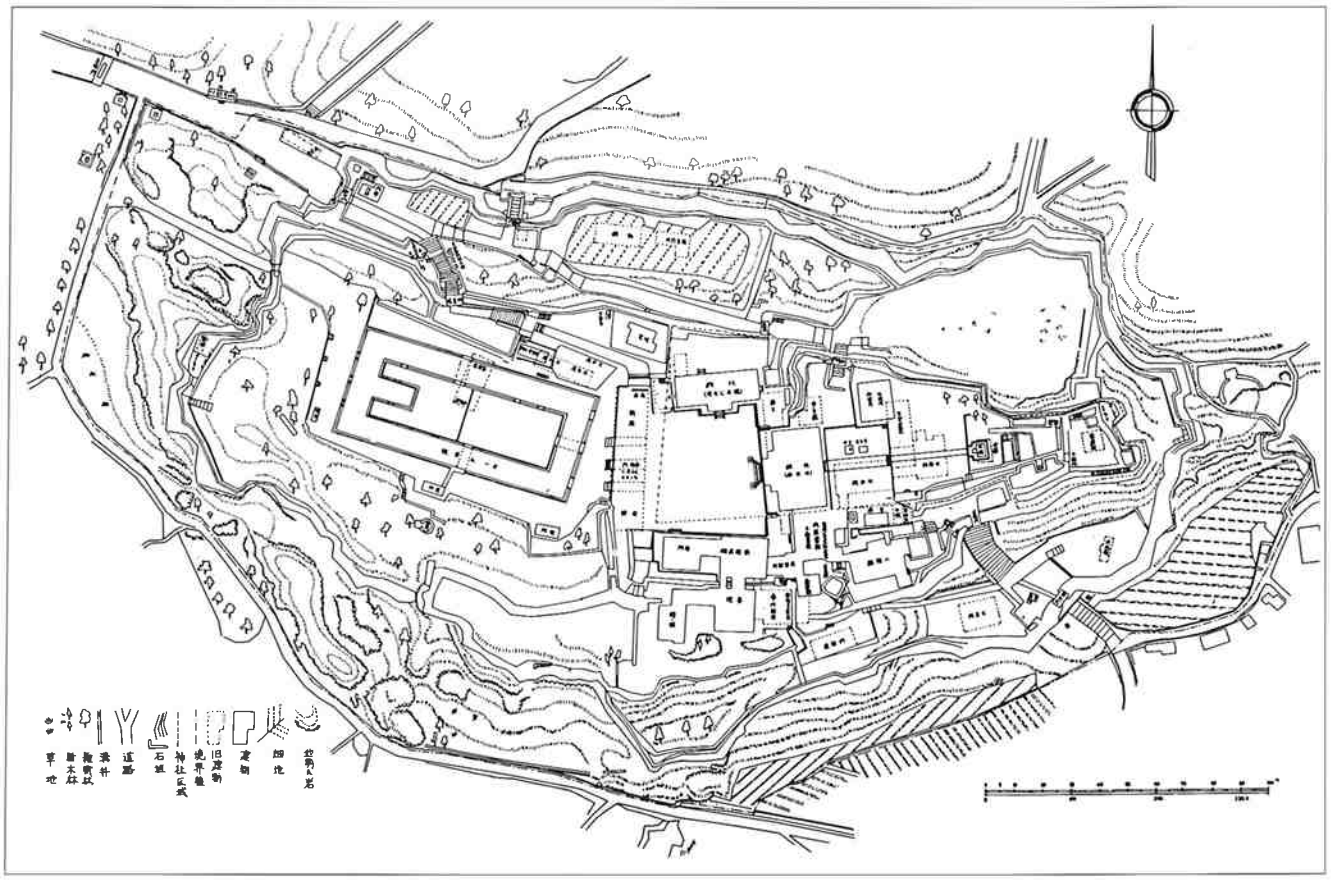
下之御庭は、廣福門・京の内・奉神門にはさまれた空間で城内施設の中核部分とされ、正殿前の御庭に対する前庭的な位置付けを持つとされる。また、ここには城内に所在した十嶽のひとつである首里森御嶽があった。明治45（1912）年には京の内から下之御庭一帯に第一小学校が建設された。

用物座は下之御庭西側に所在し、貢納や礼物などを取り扱った。また、系図を管轄する系図座が併設されていた。創建年代は不明であるが、1689年に系図座、1733年に用物座が機関として設置されている。建物は、1896年以前には撤去されたようである。

これらは、戦前の学校建設や沖縄戦等で消失したが首里城跡整備の中で復元がすすみ、瑞泉門跡ほかが平成４（1992）年度、用物座跡は平成12（2000）年度に再現された。



第１図　首里城の位置



第２図　首里城平面図（昭和６年頃）

第Ⅲ章　遺構と層序

第１節　遺構

今回調査対象となった区域は下之御庭跡をはじめとした６ヶ所であった。遺構は沖縄戦や琉大造成で破壊されており、ことに瑞泉門跡、漏刻門跡一帯には図書館棟が建設された。そのため、確認した石積みの多くが根石付近のみで、瑞泉門跡、漏刻門跡は門自体の遺構は確認できなかった。また、第一小学校に伴うものと思われる遺構も検出した。以下、検出遺構についての概略を記す。

１）下之御庭跡

下之御庭跡は調査の結果、往事の旧地盤面を保っていることが確認できた。遺構は、下之御庭跡と京の内を区画する石積み遺構と、京の内側に首里森御嶽にあたるものと推察される石灰岩の露頭を確認した。また、下之御庭と京の内を区画する石積みに沿い、さらに下之御庭を南北に横断する水路と思われる遺構を確認した。

前述のとおり下之御庭一帯には第一小学校が建設されており、今回の調査で確認できた遺構の多くは小学校校舎に属する側溝や礎石などであった。

２）瑞泉門跡

調査の結果、門の遺構自体は検出できなかった。磴道は階段中ほどのけあげ石（Ｌ字状に加工した石）がわずかに確認できたのみでその大部分は検出できなかった。ただ、昭和59年度に行われた観会門跡・久慶門跡の調査においては瑞泉門跡の磴道の一部を確認している。

３）漏刻門跡

漏刻門跡も同じく門や磴道の遺構を確認することはできなかった。一部で第一小学校期に増設されたと思われる階段（門東側）を検出したのみである。

４）廣福門跡

廣福門跡では一部で門に伴うと思われる礎石と、門の両脇にとりついていた石積み遺構を確認した。大部分は琉球大学時のパイプ敷設工事のため破壊されていたが、礎石は建物東側のもので４基確認しこれに伴うと思われる狭間石がわずかに確認できた。また、石積み遺構は東西両方の根石を確認した。

５）木曳門跡

木曳門跡では門自体の遺構を確認し、併せて周辺の石積み遺構を検出した。

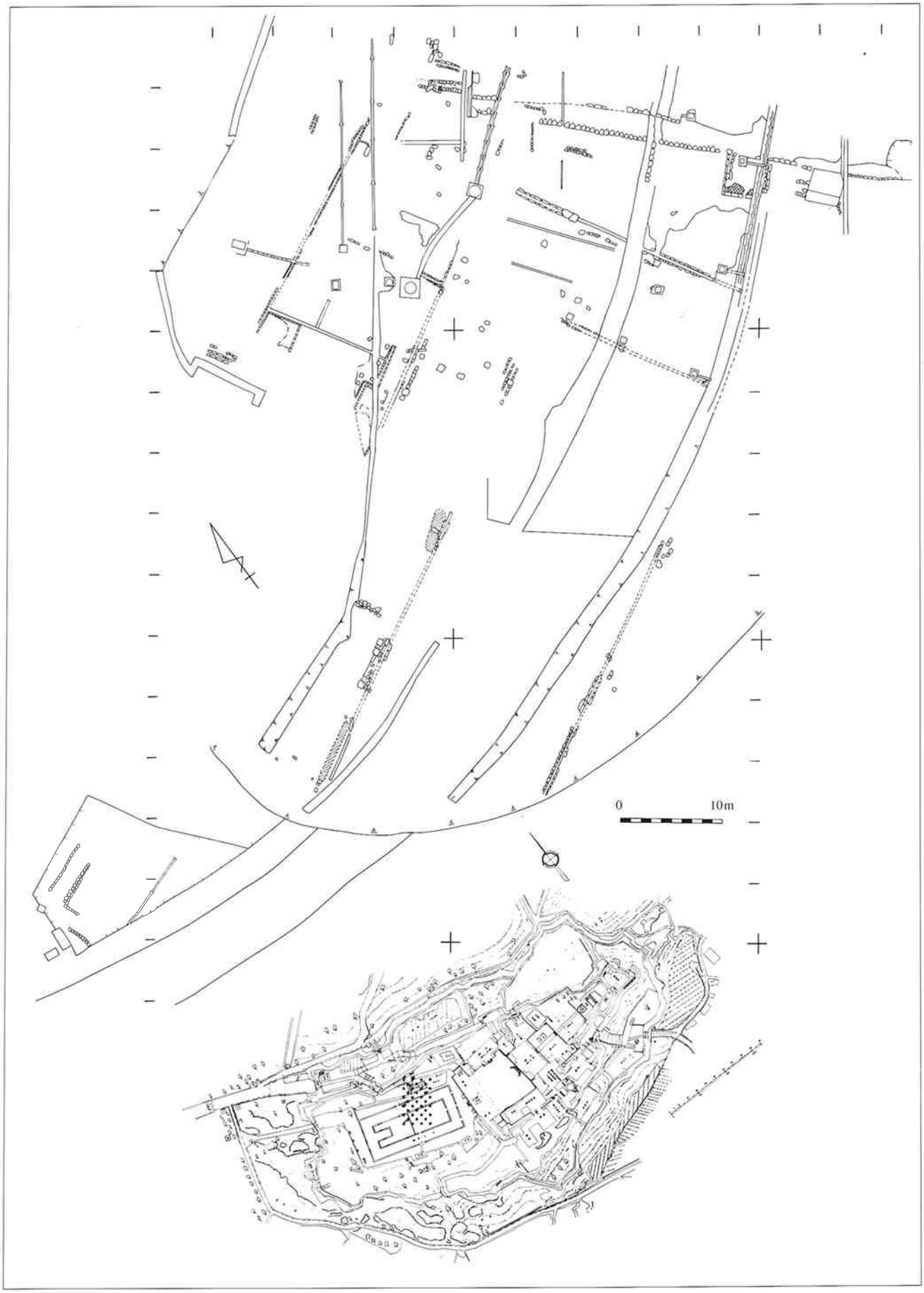
６）用物座跡

用物座跡では、建物に伴うと思われる礎石を一部確認した。また、周辺からは石積み、石畳遺構を検出した。礎石は３基確認され建物南端側のものである。また、礎石に伴う地覆石を確認した。石畳遺構は用物座の東側で確認したもので、残存状況は良好である。石積みは用物座南北両サイドに設けられたもので、各絵図等にも描かれているものである。今回の調査では南側の石積み根石を確認した。

第一小学校時代の遺構は側溝を確認し、一部で用物座跡の遺構を切るものや重複した部分がみたれた。

第２節　層序

首里城跡は、戦前の第一小学校や戦後の琉球大学建設により建物・石積みの撤去や大きな地形の改変を受け、特に後者では大規模な盛土、切り土を伴う造成がなされている。今回調査対象となった地区は小学校建設や導水管敷設などにより破壊を受けていたものの、大半は盛土であり、旧地形には大きな影響がないと思われる。ただし、今回の調査で確認できた層の多くが後世の造成層もしくは撹乱層であるため、層序については割愛する。また、遺物に関しても層序による区別は行っていない。



第3図　遺構検出状況

第Ⅳ章　出土遺物

首里城跡下之御庭地区・瑞泉門地区・漏刻門地区・廣福門地区・木曳門地区・用物座地区の調査において、青磁・白磁・青花・瑠璃釉・紅釉・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・色絵・釉裏紅・彩釉陶・黒釉陶器・鉄釉染付・鉄絵・中国産無釉陶器・褐釉磁器・高麗青磁・ベトナム産磁器・タイ産半練・本土産染付・本土産色絵・本土産印判手・本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・土器・陶質土器・瓦質土器・硯・石製品・円盤状製品・坩堝・武具・石球・釘・釘状製品・銭貨・簪・煙管・ハブラシ・石碑・骨製品・貝製品・土製品・貝類・脊椎動物遺体・人骨・瓦が出土した。以下に報告する。

第１節　青磁

確認された青磁の器種は、碗・皿・盤・壺・大瓶・大鉢・瓶・鉢状製品・摺鉢・香炉等がある。泉州窯系青磁も本節で取り扱った。以下、その概要を述べ、個々の詳細については観察表で述べる。

碗（第４図１～14）

第４図１、２は劃花文碗の口縁部片と胴部片である。図３、４は鎬蓮弁文碗と蓮弁文碗である。図５は雷文帯碗の完形品。図６・７はラマ式連弁文碗として扱った。図８～11は線刻細蓮弁文碗である。図12は無文の薄手直口碗である。13～14は底部資料である。

皿（第５図～第11図15～94）

皿は口縁形態により分類した。図75～84の八角皿は京の内跡よりも出土例が多いようである。第５図15～25は口折皿である。図25以外は外面に蓮弁文を表す。図26～34は直口皿である。外面にヘラ削りによる蓮弁や細蓮弁を表す。図35～39は口縁部を玉縁状に成形するグループである。図40～61は外反皿である。外面に龍を表したものもある。図62～74は稜花及び輪花皿である。図75～84は腰折れの八角皿である。内面の口縁直下に雷文帯を表すのがほとんどである。図85～94は底部資料である。

盤（第12図～第16図95～141）

盤は口縁形態により分類した。鍔縁盤・口折盤・外反盤・直口盤・稜花盤の５つに分類してみた。第12図95～105、第13図107～112は鍔縁盤である。図106、115～122は口折タイプの盤である。図123～125は外反タイプの盤である。図126～134は直口タイプの盤。図113、114、136～141は稜花タイプの盤である。

壺（第17図142～147）

壺は特徴的なものを図化した。第16図141、第17図143は蓋である。図144～147は身である。

大瓶（第18図148～155）

花瓶と大花瓶に分類した。第18図148～151は花瓶である。図152～155は大花瓶である。

大鉢（第19図156～165）

第19図156～159は直口口縁で雷文帯を有するグループ。図160～162は無文直口口縁のグループ。図163は直口タイプの底部資料。図164は外反タイプ。図165は碁笥底の底部資料 である。

瓶（第20図166～175）

瓶は双耳環瓶（第20図166、167）と玉壺春瓶（図168～175）の２つに分けられる。

その他（第21図～第23図）

第21図176～182は内部に「蓮池水禽」を表現したものと思われる鉢である。片切彫りによる青海波等や貼り付けの蓮華文等が観察できる。図183～185は器種不明。図186は水滴か。図187は魚形をあしらった型物で、水滴か。図188は何らかの蓋であろうか。図189は 人形である。図190～193は摺鉢。図194～197は杯。図198～200、202、203は香炉である。図201は器台である。図204～206は袋物。図207、208は蓋。図209は瓶か。図210は仙盞瓶の一部であろうか。図211は瓶の耳であると思われる。図212は馬上杯か。図213は瓶の頸部もしくは馬上杯の足である。図214は把手である。図216～226は泉州窯系青磁の碗であ る。

第１表　青磁観察表

図番号		器種	法量（cm）			器形・文様・素地・釉調等	出土地区
			口径	器高	底径		
4図	1	碗	—	—	—	口縁部は微弱に外反する。内面に片切彫りによる文様を表している。外面に轆轤痕。灰白色の微粒子。淡黄緑灰色の釉を両面に施す。	下之御庭
	2		—	—	—	胴部片。両面に片切彫りによる文様を表している。淡灰白色の細粒子。淡緑灰色の釉を両面に施す。両面に貫入。	用物座
	3		17	—	—	直口タイプで口唇は尖る。外面に片切彫りによる鎬蓮弁文を丁寧に表している。素地は淡灰白色の微粒子。	漏刻門
	4		15.2	7	4.2	直口タイプ。高台は低くて小さい。外面に片切彫りによる蓮弁文を表している。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に粗い貫入。	漏刻門 M3-126
	5		15.2	7.5	6	直口タイプ。外面に片切彫りによる雷文帯と刻花文を表し、内面には刻花文と見込みに印文を表している。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉を施す。	下之御庭 L6-123
	6		16.2	8.4	6	外反タイプ。外面に片切彫りのＯ・Ｖの組み合わせを縦位の二重線で区画する。内面にはラマ式蓮弁文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。見込みには砂が付着する。	廣福門北西
	7		—	—	—	外反タイプ。両面に片切彫りによるラマ式蓮弁文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。両面には貫入が入る。	廣福門北西
	8		14.2	5.2	7.6	直口タイプ。外面に線刻による細蓮弁を表し、内面見込みには印文を表している。素地は淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面には細かい貫入が入る。	木曳門 L3-154
	9		13.6	5.4	7.7	直口タイプ。外面に線刻による細蓮弁を表し、内面見込みには刻花文と印文を表している。素地は白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。	用物座 K6-123
	10		13.8	—	—	直口タイプ。外面に線刻による細蓮弁を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡灰白色の釉を施す。両面に雑な調整痕が見られる。	木曳門 L4-154
	11		12.9	5.9	5.9	直口タイプ。外面に線刻による波状文と細蓮弁を表す。素地は淡桃褐色の粗粒子。両面に淡灰白濁色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	木曳門 L4-154
	12		16.5	5.9	6.7	薄手の直口タイプ。逆「ハ」の字状に開く。内外面ともに無文である。素地は淡灰白色の細粒子。両面に灰白色の釉を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎ。両面に細かい貫入が入る。	木曳門
	13		—	—	7	両面にヘラ削りによる菊花文もしくは蓮弁文を描いている。淡灰白色の細粒子。淡緑色の釉を両面に施している。外底面は蛇の目状に釉を掻き取る。	木曳門
	14		—	—	8.8	無文碗の底部と思われる。淡灰白色の微粒子で両面に淡青灰色の釉を厚く施す。外底面は露胎である。	用物座
5図	15	皿	12.7	4.4	5.3	口縁部を「L」字状にして口折とする。外面にヘラ掻きによる蓮弁文。見込みに印花文。素地は淡灰白色の細粒子。外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。	木曳門 L4-154
	16		10.2	—	—	口縁部を「L」字状にして口折とする。外面にヘラ掻きによる蓮弁文。素地は灰白色の細粒子。両面に淡灰緑色の釉を施す。	用物座 L3-124
	17		—	—	5.9	外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。内面胴部にも片切彫りによる文様。見込みには印花文。素地は淡灰白色の微粒子。畳付以外に濃緑色の釉を施す。	廣福門北西
	18		—	—	5.6	外面に片切彫りによる鎬蓮弁文を雑に表す。見込みには印花文。素地は淡灰白色の微粒子。外底面以外に濃緑色の釉を施す。	漏刻門M3-126 木曳門L10-132
	19		11.9	3.3	5.9	口縁部を「L」字状の口折とする。外面に片切彫りによる蓮弁文を表すが調整痕も顕著である。見込みに双魚と青海波の印文。素地は淡灰白色の細粒子。外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。	下之御庭 用物座L0-124
	20		12.1	—	—	口縁部を「L」字状の口折とする。外面に片切彫りによる蓮弁文を表す。内面に片切彫りによるラマ式蓮弁文か。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉を施す。	用物座 K9･10-124
	21		—	—	6.2	外面に片切彫りによる蓮弁文を表す。見込みには陽刻の双魚文。素地は淡灰白色の微粒子。畳付以外に淡緑色の釉を施す。	木曳門 L5-143
	22		10.2	—	—	口縁部を「L」字状にして口折とする。外面に片切彫りによる蓮弁文を表す。素地は灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉を施す。	下之御庭 用物座K9-123
	23		12.8	—	—	口縁部を「L」字状にして口折とする。外面に片切彫りによる蓮弁文を表す。素地は灰白色の細粒子。釉調は淡灰白色を呈しており、焼成不良もしくは二次的被熱を受けたと見られる。	廣福門北西
	24		—	—	5	外面に片切彫りによる鎬蓮弁文。見込みに圏線。素地は淡灰白色の微粒子。畳付及び外底面以外に淡緑灰色の釉を施す。	廣福門北西
	25		12.6	—	—	口縁部を「L」字状にして口折とする。外面には雑な調整痕が見られる。素地は淡灰白色の細粒子。淡緑色の釉を両面に施すが細かい貫入が入る。	下之御庭
6図	26	皿	10.2	—	—	直口タイプ。外面に片切彫りによる蓮弁文、内面にはヘラ掻きによる蓮弁文もしくは菊花文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。	下之御庭
	27		10	3.4	5.2	直口タイプ。外面に片切彫りによる雑な蓮弁文、内面にはヘラ掻きによる菊花文。見込みには印花文。素地は淡灰白色の微粒子。外底面以外の両面に淡緑灰色の釉を施す。	下之御庭
	28		10.6	—	—	直口タイプ。腰折気味である。両面とも無文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。	用物座
	29		10.3	—	—	直口タイプ。ヘラ削りにより、外面に細蓮弁文。内面に菊花文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが二次的被熱により痘痕状を呈す。	用物座 K2-122
	30		10	—	—	直口タイプ。片切彫りにより外面に細蓮弁文と圏線、内面に細蓮弁文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	下之御庭
	31		9.4	3	4.7	直口タイプ。ヘラ削りで外面に細蓮弁文。淡灰白色の微粒子。外底面以外に緑灰色の釉を施している。	下之御庭
	32		11.6	—	—	直口タイプ。ヘラ削りで外面に縦位と圏線の組み合わせ。内面には線刻の細蓮弁を表す。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施すが二次的被熱で痘痕状を呈す。	下之御庭
	33		12	—	—	直口タイプ。内面に片切彫りの蓮弁文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。	用物座
	34		7.6	—	—	直口タイプの小皿である。両面にヘラ削りの蓮弁文もしくは菊花文を表している。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	廣福門北西
	35		10.1	—	—	玉縁状の口縁部。外面に片切彫りによる蓮弁文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉を施している。	用物座
	36		12.3	—	—	玉縁状の口縁部。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	用物座
	37		—	—	—	玉縁状の口縁部。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	木曳門
	38		12.8	3.7	6	玉縁状の口縁部。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	廣福門北西

第２表　青磁観察表

図番号		器種	法量（cm）			器形・文様・素地・釉調等	出土地区
			口径	器高	底径		
	39		13.1	—	—	玉縁状の口縁部。外面に片切彫りによる蓮華文状の文様を表している。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが両面に細かい貫入が入る。	木曳門 L6-129
7図	40		12.8	—	—	外反タイプ。両面にラマ式蓮弁様の文様を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。	首里城不明
	41		12	—	—	外反タイプ。両面に片切彫りの文様を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。両面に貫入が入る。	漏刻門 廣福門
	42		13.1	—	—	微弱に外反するタイプ。外面に龍と雲文を表し、内面にはラマ式蓮弁様の文様を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。	廣福門北西
	43		—	—	8	外面に龍と雲文を表し、内面にはラマ式蓮弁様の文様を表す。素地は白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。外底面は一部露胎である。	木曳門 L3-147
	44		12	—	—	外反タイプ。外面にラマ式蓮弁様の文様、内面には菊花文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	用物座 K6-124
	45		—	—	—	内面に櫛文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の透明釉。全体に粗い貫入と気泡。	木曳門
	46		12.6	—	—	外反タイプ。内面にラマ式蓮弁文を表す。素地は淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉。	用物座
	47		11.6	—	—	外反タイプ。内面にヘラ削りによる細蓮弁文。素地は淡灰白色の細粒子。両面に濃緑色の釉。	下之御庭
	48		11.6	3	5.2	外反タイプで腰折状に成形。内面にラマ式蓮弁文。見込みに印花文。素地は淡灰白色の細粒子。畳付以外の両面に淡緑灰色の釉。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	首里城試掘
	49		—	—	5.6	外反タイプの底部として分類したが、特定はできない。腰折状に成形。外面にラマ式蓮弁文。見込みには双魚の印文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。外底面は蛇の目剥ぎ。	廣福門北西
8図	50		9.4	2.6	4.4	外反タイプ。内面に印花文と圏線を表す。素地は淡灰白色の微粒子。外底面以外の両面に淡緑灰色の釉を施している。	木曳門
	51		11.6	3.5	6	外反タイプ。内面に印花文と圏線を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施している。外底面は蛇の目釉剥ぎ。外底面中央に溶着痕。	用物座
	52		12.6	3.3	6	外反タイプ。内面に印花文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施している。外底面は露胎。両面に粗い貫入。	用物座 L1-124
	53		12.6	3.3	5.4	外反タイプ。内面に印花文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡青灰白濁色の釉を施している。畳付及び外底面は露胎。両面に粗い貫入。	用物座 L2-124
	54		12.2	3.3	5.6	外反タイプ。内面に印花文を表す。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡青灰白濁色の釉を施している。畳付及び外底面は露胎。両面に粗い貫入。	用物座 L0-124
	55		12.4	3.4	5.2	外反タイプ。内面口縁直下に２本ないしは３本の圏線。素地は淡灰白色の粗粒子。両面に淡青灰白色の釉を施している。畳付及び外底面は露胎。見込みは釉を掻き取る。両面に粗い貫入。	廣福門北西
	56		12	4.1	5.4	外反タイプで厚手。両面無文。淡灰白色の細粒子。両面に厚い濃緑色の釉。外底は露胎。	木曳門
	57		11	3.5	6	外反タイプ。両面無文。淡灰白色の細粒子。両面に淡青緑濁色の釉。外底は露胎。粗い貫入。	木曳門
	58	皿	11.6	3.6	6.6	外反タイプで厚手。両面無文。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑色の釉。外底は露胎。	木曳門
	59		14	4.2	8	外反タイプ。両面無文。淡灰白色の細粒子。両面に厚い淡緑色の釉。外底は露胎。	下之御庭
	60		12.6	—	—	外反タイプ。両面無文。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉。両面に細かい貫入。	木曳門
	61		7.6	—	—	外反タイプの小皿。両面無文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	木曳門
9図	62		13.2	—	—	稜花タイプ。外面櫛描文、内面は櫛描の青海波文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。	用物座
	63		—	—	—	稜花タイプ。外面には片切彫りのラマ式蓮弁、内面櫛描等により青海波文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。	用物座
	64		—	—	5.8	稜花タイプ。外面櫛描文、内面は櫛描の青海波文。見込みには魚状の印文淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。外底面は蛇の目状釉剥ぎ。	廣福門北西
	65		12.8	3.8	6.2	稜花タイプ。外面には片切彫りの蓮弁文やラマ式蓮弁、内面も片切彫りによりラマ式蓮弁文と見込みに印花文を表す。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉。両面に粗い貫入。	木曳門 M6-147
	66		11.2	2.8	5.1	稜花タイプ。内面に片切彫りの文様。見込みに溶着痕。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。	下之御庭
	67		13.2	3.5	6.5	輪花タイプ。両面ヘラ削りにより菊花文を表す。淡灰白色の微粒子。外底以外は淡緑灰色の釉。	用物座
	68		12	—	—	輪花タイプ。両面ヘラ削りにより菊花文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に濃緑灰色の釉。	下之御庭
	69		11.2	2.5	4	輪花タイプ。全体に雑な調整痕。両面無文。淡灰白色の粗粒子。畳付、外底以外灰白色の釉。	廣福門
	70		12.6	—	—	輪花タイプ。両面無文。淡灰白色の微粒子。両面に濃緑色の釉。両面に粗い貫入。	廣福門
	71		13.2	—	—	口折の輪花タイプ。外面に線刻の蓮弁文か。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に粗い貫入。	下之御庭
	72		11.4	—	—	直口の輪花タイプ。両面に線刻の蓮弁文か。灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉。粗い貫入。	廣福門北西
	73		13.3	—	—	口折の輪花タイプ。内面に菊花文。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉。粗い貫入。	木曳門地区
	74		1.5	2.8	5.6	直口の輪花タイプ。外面に線刻蓮弁文、内面に菊花文を表す。見込みには「玉」の印文。灰白色の細粒子。緑黄色の釉。粗い貫入。	木曳門
	75		15.4	4	6.8	腰折の八角皿。内面を８つに、さらに１面を上下に区画する。上部に雷文帯、下部に雲文。見込みに圏線と印花文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。外底を蛇の目釉剥ぎ。	下之御庭
	76		15.4	3.6	7.4	腰折の八角皿。内面を８つに、さらに１面を上下に区画する。上部に雷文帯、下部に雲文。見込みに圏線と印花文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に緑色の釉。外底を蛇の目釉剥ぎ。	用物座 L0-124

第３表　青磁観察表

図番号		器種	法量（cm）			器形・文様・素地・釉調等	出土地区
			口径	器高	底径		
10図	77	皿	14.8	3.8	7.1	腰折の八角皿。内面を８つに、さらに１面を上下に区画する。上部に雷文帯、下部に雲文。見込みに圏線。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。外底を釉剥ぎ。	下之御庭
	78		14.8	3.7	6.8	腰折の八角皿。内面を８つに、さらに１面を上下に区画する。上部に雷文帯、下部に雲文。見込みに圏線と印花文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑色の釉。外底を蛇の目釉剥ぎ。	廣福門北西
	79		15	—	—	内面を８つに、さらに１面を上下に区画。上部雷文帯、下部雲文。淡灰白色微粒子。淡緑色釉。	用物座
	80		15	—	—	内面を８つに、さらに１面を上下に区画。上部雷文帯、下部雲文。淡灰白色微粒子。淡緑色釉。	廣福門北西
	81		—	—	—	１面を上下に区画。上部雷文帯、下部雲文。淡灰白色微粒子。淡緑色釉。	廣福門北西
	82		—	—	—	１面を上下に区画。上部雷文帯、下部雲文。淡灰白色微粒子。淡緑色釉。	廣福門北西
	83		10	—	—	腰折の八角小皿。内面を８つに区画し、中に雲文を表す。淡灰白色粗粒子。緑灰色の釉。	廣福門
	84		8.7	—	—	腰折の八角小皿。内面を８つに区画し、中に雲文を表す。淡灰白色粗粒子。緑灰色の釉。	廣福門北西
11図	85		—	—	7.7	外面に片切彫りの蓮弁文、内面に三角状り連続文、見込みに圏線と印花文。淡灰白色の微粒子。外底面以外に淡緑灰色の釉。	用物座
	86		—	—	7.4	内面に片切彫りの文様と見込みに印花文。淡灰白色の微粒子。両面に濃緑色の釉。外底は蛇の目釉剥ぎ。内面に粗い貫入が入る。	用物座
	87		—	—	9.8	外面に片切彫りの文様を表す。見込みには龍の印文。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色釉を施す。外底蛇の目釉剥ぎ。	木曳門
	88		—	—	10.4	外面にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の細粒子。畳付以外の両面に淡青灰色の釉。	漏刻門
	89		—	—	5.2	皿で分類したが、碗の可能性もある。腰折状になる。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。畳付及び外底面以外に淡緑灰色の透明釉。両面に粗い貫入が入る。	木曳門
	90		—	—	5	腰折状になる。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。畳付及び外底面以外に淡黄灰色の釉。見込みを釉剥ぎ。両面に細かい貫入が入る。	木曳門表採
	91		—	—	6.4	腰折状になる。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。畳付及び外底面以外に淡黄灰色の釉。見込みを蛇の目釉剥ぎ。両面に細かい貫入が入る。	木曳門 下之御庭
	92		—	—	6	腰折状になる。両面とも無文である。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。見込みと外底面を蛇の目釉剥ぎ。	用物座
	93		—	—	5.2	碁笥底に成形。外面に蓮弁文。見込みに双魚の印文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色。	用物座
	94		—	—	4	碁笥底に成形。両面とも無文か。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色。両面に細かい貫入。	下之御庭
12図	95	盤	22.6	5.8	7	推定復元資料。高台断面三角形。胴部を逆「ハ」の字状に開き口縁部を鍔縁状に成形。内面にヘラ削りの蓮弁文。外面は雑な調整痕。淡灰白色細粒子。両面に淡緑灰色釉。両面に細かい貫入。	用物座 L 9-125
	96		26.5	5.7	11	胴部を逆「ハ」の字状に開き口縁部を鍔縁状に成形。内面にヘラ削りの蓮弁文。見込みに印花文か。淡灰白色細粒子。両面に淡緑黄色釉。外底蛇の目釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	木曳門 L 10-160
	97		26.2	6.3	9.4	推定復元資料。高台断面三角形。胴部を逆「ハ」の字状に開き口縁部を鍔縁状に成形。内面に櫛削りの細蓮弁文。淡灰白色細粒子。両面に緑灰色釉。外底面は露胎。両面に粗い貫入。	下之御庭 用物座
	98		21.4	—	—	口縁部を鍔縁状に成形。内面櫛削りの細蓮弁文。桃褐色の粗粒子。濃緑黄色釉。細かい貫入。	木曳門
	99		24.6	—	—	口縁部を鍔縁状に成形。内面櫛削りの細蓮弁文。淡灰白色の微粒子。緑灰色釉。細かい貫入。	木曳門
	100		—	—	—	口縁部を鍔縁状に成形。内面の口縁部に雷文帯。淡灰白色の微粒子。緑灰色釉。	下之御庭
	101		—	—	7.6	全体が非常に雑。内面にヘラ削りの蓮弁文。淡灰白色の微粒子。外底面以外に淡緑灰色釉。	用物座
	102		—	—	12	やや厚手の成形。素地は淡灰白色の微粒子。両面に淡緑黄色の釉。全体に粗い貫入。	漏刻門
	103		—	—	9.4	高台逆三角形。内面には櫛描細蓮弁文。見込みに印花文。淡灰白色の微粒子。濃緑黄色の釉を施す。細かい貫入。	用物座
	104		24.2	—	—	口縁部を鍔縁状に成形。内面にラマ式蓮弁文か。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を施す。粗い貫入が入る。	木曳門
	105		—	—	9.8	高台逆三角形。内面には櫛描の細蓮弁文。見込みには印花文。淡灰白色の微粒子。淡緑黄色の釉を施す。細かい貫入が入る。	木曳門
	106		24	—	—	口縁部を口折状に成形。両面とも無文。淡灰白色の微粒子。両面に緑黄色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	用物座
13図	107		38.6	—	—	厚手で、口縁部を鍔縁状に成形する。内面にはヘラ削りの蓮弁文。淡灰白色の微粒子。濃緑灰色の釉を施している。	廣福門北西
	108		—	—	23	厚手に成形。内面にはヘラ削りの蓮弁文。淡灰白色の微粒子。濃緑色の釉を施している。全体に粗い貫入が入る。	廣福門北西
	109		—	—	21	厚手に成形。内面にはヘラ削りの蓮弁文。見込みには印花文。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉。外底面は露胎である。全体に粗い貫入。	廣福門
	110		42.2	—	—	厚手に成形。両面とも無文。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉。全体に気泡が見られる。二次的な被熱を受けている。	廣福門北西
	111		—	—	—	見込みに鳥もしくは龍を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。外底面を蛇の目釉剥ぎ。粗い貫入が入る。	廣福門北西
	112		—	—	26.6	高台は低くて小さい。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。外底面は蛇の目釉剥ぎ。粗い貫入が入る。	下之御庭
	113		32.2	—	—	口縁部を口折れさせて稜花状に成形。両面にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の粗粒子。両面に濃緑黄色釉。全体に細かい貫入。	廣福門北西
	114		—	—	—	口縁部を口折れさせて稜花状に成形。外面にヘラ削りによる蓮弁文。内面には櫛掻による波状文とラマ式蓮弁様の文様を表す。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色釉。全体に細かい貫入。	廣福門北西

第４表　青磁観察表

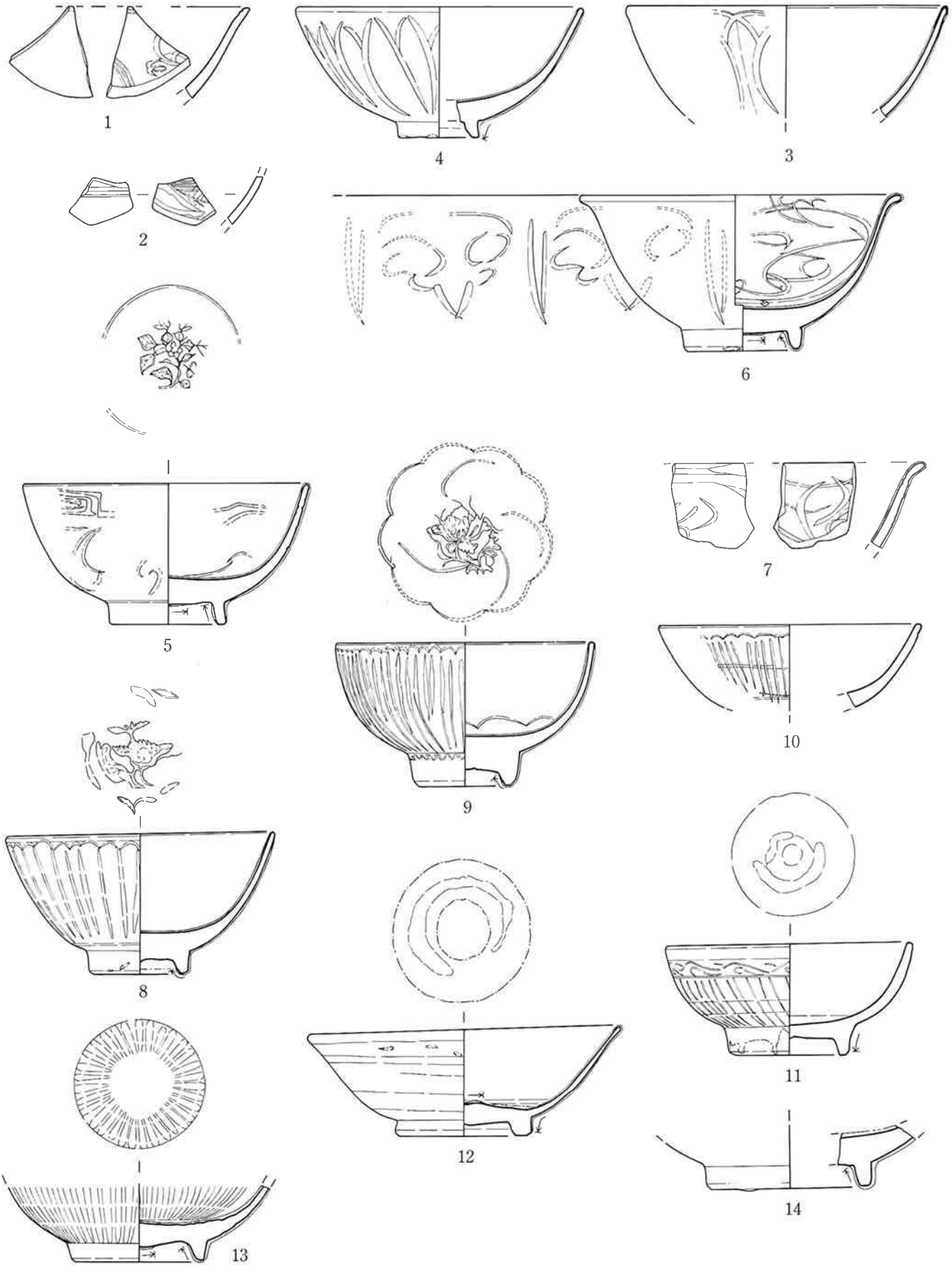
図番号		器種	法量（cm） 口径	器高	底径	器形・文様・素地・釉調等	出土地区
	115		41.4	—	—	口縁を口折状に成形。内面口縁部に波状文と唐草文か。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施している。	用物座
	116		33	—	—	口縁を口折状に成形。内面に片切彫りで波状文と唐草文か。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を施している。	木曳門
	117		—	—	21	推定復元資料。胴部を逆「ハ」の字状に開き口縁部を口折状に成形か。内面にヘラ削りのラマ式蓮弁文か。淡灰白色細粒子。両面に緑灰色釉。両面に細かい貫入が入る。	下之御庭
14図	118		24.5	—	—	口折状に成形。内面に櫛描で波状文。外面には雑な調整痕。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を施している。	廣福門北西
	119		29	—	—	口折状に成形。内面に刻花文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	下之御庭
	120		27.8	—	—	口折状に成形。外面は櫛描蓮弁文。内面には刻花文。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を施す。粗い貫入が入る。	木曳門
	121		24.2	6.9	11.6	推定復元資料。口縁部を外反させる。内面にヘラ・櫛削りによる文様。淡灰白色の細粒子。緑灰色の釉を両面に施す。	廣福門 漏刻門
	122		—	—	12.4	高台内刳りは低い。内面に片切彫りの窓を表し、中には片切彫りや櫛掻の文様を表す。見込みに圏線。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の透明釉。外底は蛇の目釉剥ぎ。細かい貫入。	下之御庭
	123		—	—	18.6	外面に片切彫りと櫛描による蓮弁文と圏線、内面に櫛描による青海波。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色釉を両面に施す。全体に細かい貫入。	木曳門
	124		—	—	—	口唇部を稜花状に成形する。両面に刻花文。淡灰白色の微粒子。両面に淡青緑灰色の釉を施す。全体に粗い貫入が入る。	用物座
15図	125	盤	—	—	—	外反タイプ。両面にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰濁色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	木曳門 M2-145
	126		—	—	12	高台断面逆三角形。内面にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の微粒子。外底面以外は緑灰色の釉を施す。全体に粗い貫入が入る。	下之御庭
	127		23	—	—	直口タイプ。外面に２本の圏線を廻らせる。内面に線刻による縦位の連続文と口唇部に弱い抉りを加えて菊花文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	用物座 L3-126
	128		23.2	—	—	直口タイプ。内面に線刻による縦位の線の連続文と口唇部に弱い抉りを加えて菊花文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。	木曳門 M1-151
	129		25	—	—	直口タイプ。内面に線刻による縦位の線の連続文で菊花文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	木曳門
	130		25	—	—	直口タイプ。内面に櫛描の連続文と波状文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	廣福門北西
	131		—	—	14.6	高台内の刳りは低い。外面に２本の圏線。内面に刻花文。見込みに圏線。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。外底を一部掻き取る。両面に細かい貫入が入る。	木曳門 L6-129
	132		26.8	—	—	直口タイプ。両面とも無文。淡灰白色の微粒子。濃緑灰色の釉を施すが、二次的被熱を受ける。	木曳門
	133		—	—	8.4	底部資料。直口タイプかは不明。高台外面に鉋目か。見込みに印花文。淡灰白色の微粒子。濃黄緑色の釉を施す。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	首里城不明
	134		—	—	9.6	底部資料。高台断面逆三角形。内面に櫛描きの蓮弁文か。見込みに印花文。淡灰白色の細粒子。外底面以外は緑灰濁色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	廣福門北西
	135		—	—	7.2	底部資料。見込みに印花文と雑な圏線か。淡灰白色の微粒子。外底面以外に緑灰色の釉。全体に粗い貫入が入る。	木曳門
16図	136		26.9	—	—	口縁部を口折状に成形して口唇部を稜花もしくは輪花に仕上げる。両面ともヘラ削りによる蓮弁文を表す。内面の口縁部には波状文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。	木曳門 K10-133
	137		23.9	—	—	口縁部を鍔縁状に成形して口唇部を稜花もしくは輪花に仕上げる。外面にヘラ削りによる蓮弁文を表す。内面の口縁部には波状文。淡桃褐色の粗粒子。両面に黄緑色の釉。全体に細かい貫入。	用物座 L0-125
	138		17.6	—	—	口縁部を鍔縁状に成形して口唇部を稜花もしくは輪花に仕上げる。両面にヘラ削りによる蓮弁文を表す。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	廣福門 M0-123
	139		26	—	—	口縁部を口折状に成形して口唇部を稜花状に仕上げる。外面にヘラ削りの蓮弁文を表す。内面の口縁部には波状文。胴部には刻花文。淡灰白色の微粒子。緑黄色の釉。細かい貫入が入る。	下之御庭
	140		28.4	—	—	口縁部を口折状に成形して口唇部を稜花状に仕上げる。両面にヘラ削りの蓮弁文を表す。淡灰白色の微粒子。緑灰色の釉を施す。	用物座
	141		—	—	—	口縁部を口折状に成形して口唇部を稜花もしくは輪花に仕上げる。外面にヘラ削りによる蓮弁文を表す。内面には刻花文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。	廣福門北西
17図	142	蓋	外径 27.8	内径 17.6	—	蓋端部に一部抉りを加えて波状とする。蓋甲面には叉状の工具による文様を描く。撮みの外周には溝状の圏線。裏側には印花文。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉。全体に細かい貫入が入る。	廣福門北西
	143		外径 24.2	内径 15.2	—	蓋端部を下方に折る。蓋甲面には片切彫りの蓮弁文を描く。撮みの外周には２本の圏線。淡灰白色の微粒子だが、一部に焼成不良もしく二次的被熱の痕跡が残る。淡緑灰色の釉。全体に細かい貫入が入る。	下之御庭
	144	壺	21.2	—	—	胴部は丸みを持って内傾し、角度を変えて立ち上がり口縁部に移行する。外面に片切彫りによる文様を表すが判然としない。淡灰白色の微粒子。口唇部以外に淡緑灰色の釉を施す。	下之御庭
	145		—	—	16.8	外面胴下部に片切彫りの蓮弁文。胴部に刻花文。淡灰白色の微粒子。畳付以外の両面に淡緑灰色の透明釉が施される。全体に細かい貫入が入る。	廣福門北西
	146		23.2	20	16.8	推定復元資料。底部から胴部を大きく開き、丸みを持って内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部とする。外面にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の微粒子。口唇部・畳付以外に淡緑灰色の透明釉を施す。全体に粗い貫入が入る。	用物座
	147		10.4	13	8.6	推定復元資料。胴部を大きく開き、丸みを持って内傾して角度を変えて立ち上がり口縁部とする。外面ヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の微粒子。口唇部・畳付以外に淡緑灰色の透明釉を施す。全体に粗い貫入が入る。	木曳門
18図	148	大瓶	13.9	—	—	口縁部が盤口状を呈す。外面に芭蕉文を片切彫りにより表す。頸部に刻花文様が入る。淡灰白色の微粒子。口唇部以外に緑灰色の釉を施す。全体に細かい貫入。	木曳門
	149		—	—	—	外面に片切彫りによる芭蕉文を表している。内面には調整痕が確認できる。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが、二次的被熱のため一部赤く変色する。	用物座 L1-125
	150		—	—	—	推定復元資料。頸部には櫛描きの芭蕉文。肩部には片切彫りによる牡丹唐草文か。淡灰白色の微粒子。両面に厚く淡青緑灰色の釉を施すが、両面とも二次的被熱により煤痕状をなす。	木曳門
	151		—	—	9.9	高台上部は玉縁状に大きく肥厚する。胴下部には櫛状の工具により芭蕉文を表す。内面には調整痕が確認できる。淡灰白色の微粒子。畳付以外に淡青緑灰色の釉を施す。	木曳門

第５表　青磁観察表

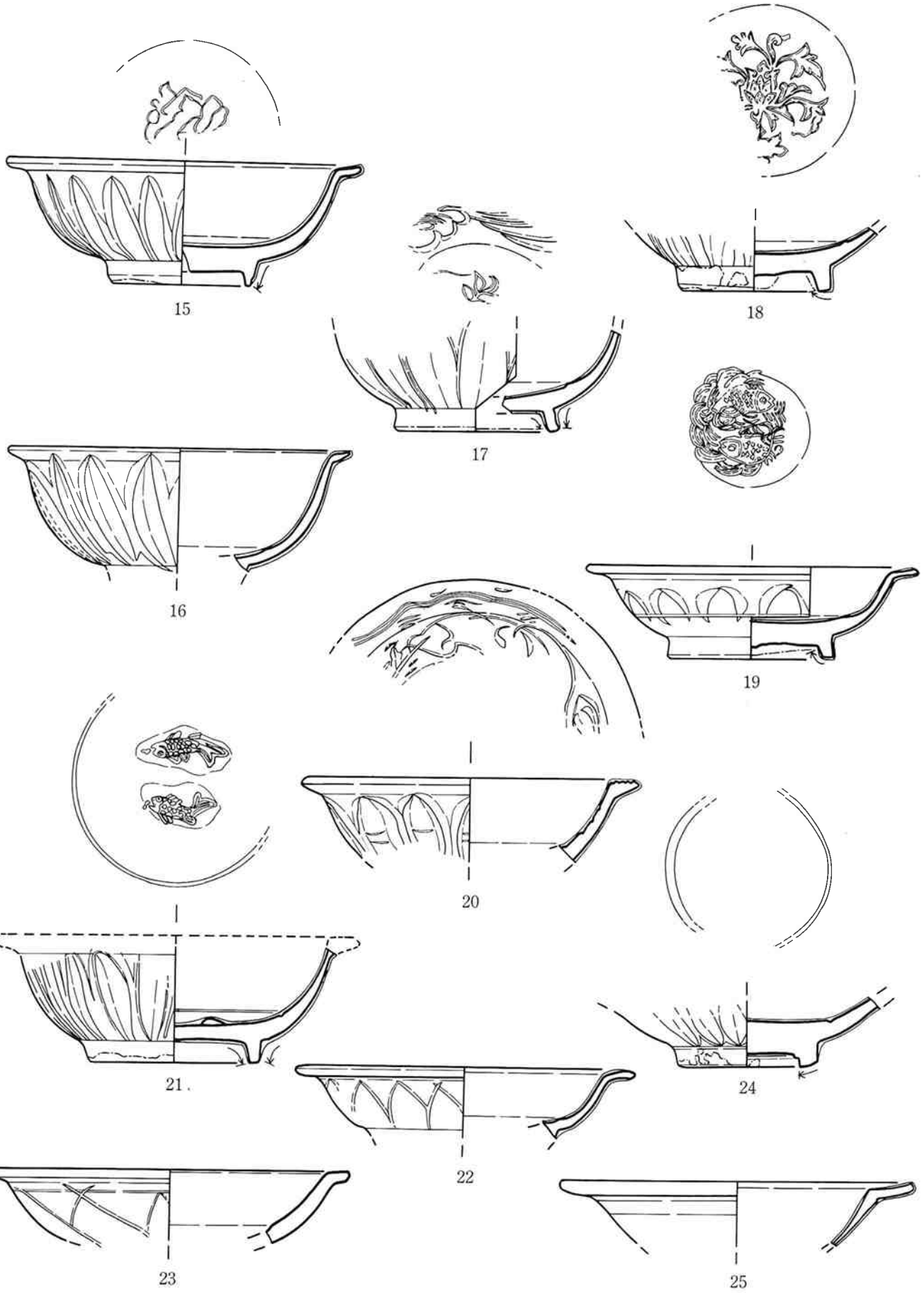
図番号		器種	法量（cm） 口径	器高	底径	器形・文様・素地・釉調等	出土地区
	152	大瓶	24	—	—	口縁部を大きくラッパ状に開く。頸部にはヘラ削りによる7つの圏線を廻らせ、段状に成形する。内面には調整痕が確認できる。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を施すが二次的な被熱により表面が痘痕状をなし、一部が赤く変色する。	廣福門北西
	153		—	—	20	推定復元資料。肩部から胴中上部に片切彫りによる牡丹唐草文。中央部には雲文。胴下部には鏑蓮弁文。胴最下部には三角形状の肥厚帯。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが、両面ともに細かい貫入が入る。	下之御庭 用物座
	154		—	—	—	外面に龍を表現する。龍の背面には櫛描きの波状文。下部には片切彫りによる牡丹唐草文か。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが、龍の部分は露胎に仕上げている。その他の表面部には二次的な被熱により痘痕がみられ、一部赤く変色する。胴部に積み痕が確認できる。	用物座 L3-125
	155		—	—	—	推定復元資料。胴部に片切彫りによる牡丹唐草文。胴下部には鏑蓮弁文。胴最下部には三角形状の肥厚帯。灰色の微粒子。両面ともに細かい貫入が入る。二次的な被熱により一部、素地が淡橙褐色を呈し、釉調は淡青灰白色を呈し、表面が痘痕状をなす。	用物座 K10-125
19図	156	大鉢	25.7	—	—	直口タイプ。外面口縁直下に雷文帯。胴部には片切彫りによる刻花文。内面にも片切彫りによる刻花文と圏線。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。全体に粗い貫入が入る。	用物座 下之御庭
	157		28.2	—	—	直口タイプ。外面口縁直下に雷文帯。胴部には片切彫りによる刻花文。内面にも片切彫りによる刻花文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。全体に粗い貫入が入る。	下之御庭
	158		28.2	13.1	11.2	直口タイプ。外面口縁直下に雷文帯。胴部には片切彫りによる刻花文。内面にも片切彫りによる刻花文。見込みには崩れた四方襷文を印文により表す。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。外底面は蛇の目釉剥ぎ。全体に粗い貫入が入る。	下之御庭
	159		24.6	—		直口タイプ。外面口縁直下に雷文帯。胴部には片切彫りによる蓮弁文。内面は無文である。淡灰白色の細粒子。両面に緑灰色の釉。	下之御庭
	160		28.4	—	—	直口タイプ。両面ともに無文である。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。全体に粗い貫入が入る。	下之御庭
	161		—	—	11.6	直口タイプ。見込みに印文による四方襷文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施す。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	用物座 L3-124
	162		27.4	12.6	11	直口タイプ。外面口縁直下に１本の圏線。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	用物座 下之御庭
	163		—	—	10.2	厚手で高台は低く成形する。外面に片切彫りによる蓮弁文。見込みには圏線印花文。淡灰白色の微粒子。外底面以外の両面に淡緑灰色の釉。全体に細かい貫入。	廣福門北西
	164		20.2	—	—	外反タイプ。外面に片切彫りによる縦位の線と横位の線。内面にはヘラ掻きによる縦位の線の連続文と口唇部に弱い抉りを加えて菊花文をなす。淡灰白色の細粒子。両面に濃緑色の釉。	用物座 L0-124
	165		—	—	9	底部は碁笥底を呈する。外面に抉りを加えて蓮弁状に成形か。内面には印文による波状文、雲文、鳥様の文様を表している。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが、二次的な被熱により表面は痘痕状を呈す。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	用物座 下之御庭
20図	166	瓶	—	—	—	推定復元資料。外面に片切彫りによる文様を表し、胴部の一部には双耳環の痕が観察できる。淡灰白色の微粒子。両面に淡青緑灰色の釉を施すが二次的被熱を受ける。	用物座 下之御庭
	167		—	—	—	推定復元資料。外面に片切彫りによる文様を表し、胴部には渦「福」の文字。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施すが二次的被熱を受ける。	木曳門
	168		—	—	—	外面に陽刻の雲文。淡灰白色の微粒子。両面に緑色の釉。	下之御庭
	169		—	—	—	外面に雷文帯様の文様を表すが判然としない。淡灰白色微粒子。両面に淡緑灰色釉。	用物座
	226		—	—	—	外面に片切彫りの縦位の文様と２本の圏線。内面は調整痕。淡灰白色細粒子。淡青緑色釉。	用物座 廣福門
	170		—	—	—	外面に雲文と蓮弁文。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉。細かい貫入。	用物座
	171		—	—	—	外面に櫛描きの青海波と陽刻の花文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	廣福門北西
	172		—	—	—	外面に櫛描きの片切彫りの花文。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。	木曳門
	173		—	—	7.4	推定復元資料。外面に片切彫りによる牡丹唐草文。下部にヘラ削りによる蓮弁文。淡灰白色の微粒子。外面に淡緑灰色の釉。畳付は露胎。	用物座 下之御庭
	174		—	—	7.3	高台は「ハ」の字状に開く。内面に轆轤痕が顕著である。淡灰白色の微粒子。畳付以外の外面に緑灰色の釉を施す。	木曳門
	175		—	—	7.7	高台は「ハ」の字状に開く。外面にヘラ削りによる蓮弁文。内面に轆轤痕。淡灰白色の微粒子。畳付以外の両面に緑灰色の釉を施す。	下之御庭
21図	176	その他	—	—	—	直口タイプ。片切彫りにより外面に襷状の文様痘。内面には貼り付けの花弁等。背面には片切彫りによる文様。灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。全体に粗い貫入。	用物座 K10-124
	177		—	—	—	直口タイプ。片切彫りにより外面に襷状の文様痘。内面には貼り付けの蓮華等。背面には片切彫りによる文様。灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。二次的被熱により一部変色する。全体に粗い貫入が入る。	用物座 L3-123
	178		21.4	—	—	直口タイプ。片切彫りにより外面に襷状の文様痘。内面には片切彫りによる青海波文。灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。二次的被熱により一部痘痕状。全体に粗い貫入が入る。	用物座 下之御庭
	179		—	—	—	直口タイプ。口唇部には抉りを加えている。片切彫りにより外面に襷状の文様等。内面には片切彫りによる青海波文。淡灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。二次的被熱により一部痘痕状を呈する。全体に粗い貫入が入る。	木曳門 L3-124
	180		—	—	—	胴部片。片切彫りにより外面に襷状の文様。内面には貼り付け文。背面には片切彫りによる文様。淡灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。二次的被熱により表面痘痕状。	木曳門 L3-124
	181		—	—	—	胴部片。内面には貼り付け文。淡灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。二次的被熱により表面が痘痕状を呈し、一部変色する。	下之御庭
	182		—	—	—	胴部片。片切彫りにより外面に襷状の文様。内面には貼り付け文。背面には片切彫りによる文様。灰白色の微粒子。濃緑色の釉を厚く施す。全体に粗い貫入が入る。	用物座 K10-124
	183		—	—	—	器種不明資料。外面に貼り付けによる渦文等や背面に片切彫りによる文様。内面には突起文。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。	下之御庭
	184		—	—	—	器種不明資料。外面に型押しによる文様。内面には布目が観察できる。淡灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。端部と内面の一部は露胎である。	木曳門 L5-131
	185		—	—	—	器種不明資料。外面に雷文帯。内面に雑な調整痕。淡灰白色の細粒子。両面に緑灰色の釉を施す。端部と内面の一部は露胎である。両面とも二次的な被熱により痘痕状を呈する。	首里城不明
	186		—	—	—	水滴と思われる資料である。外面には型成形による縦位や点の連続文、「ハート」形の文様が表されている。内面には雑な調整痕が観察できる。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を両面に施すが、二次的に被熱により外面が痘痕状を呈する。	用物座
	187		—	—	—	型成形の魚形水滴か。外面に目・鱗が観察でき、先端部には注口らしき口造りがなされている。白色の微粒子で、両面に淡緑灰色の釉を施すが、全体に細かい貫入が入る。	用物座 K6-122
	188		外径 3.2	内径 1.2	—	蓋か。全体に雑な作りである。蓋甲面には型成形の菊花文。下面には管状のものが貼り付けられる。露胎部は桃褐色を呈し、蓋甲面には淡緑灰色の釉を施す。	木曳門 L7-133

第６表　青磁観察表

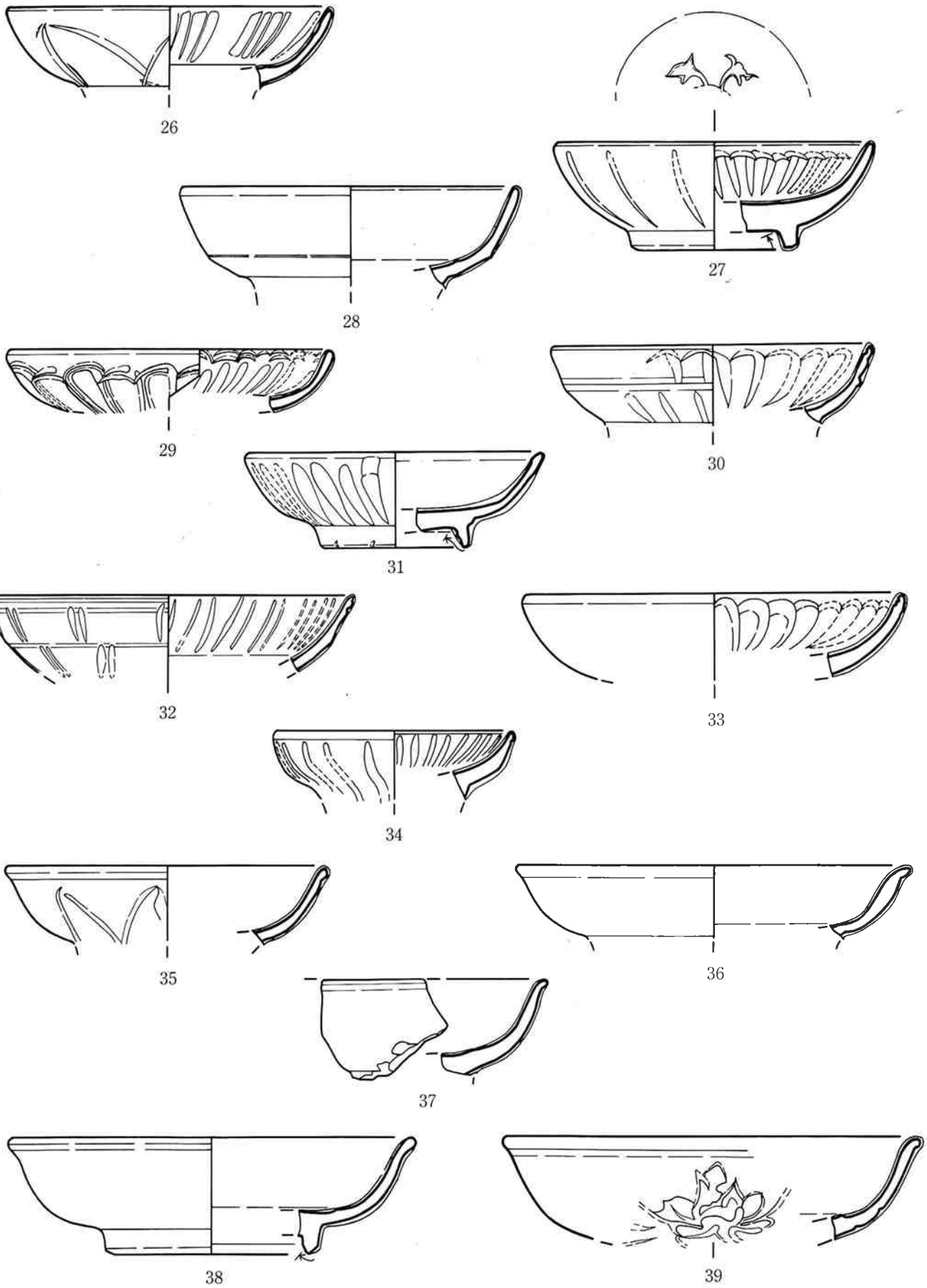
図番号		器種	法量（cm） 口径	器高	底径	器形・文様・素地・釉調等	出土地区
	189		—	—	—	人形の上半身の一部である。肩・左上腕・背中の一部・衣服の襟回りが残存する。比較的雑な成形であると思われる。淡灰白色の微粒子。外面に緑灰色の釉。全体に粗い貫入が入る。	用物座 木曳門
22図	190	その他	22.8	—	—	口縁部を微弱に外反させ、玉縁状に肥厚させる。内面には不規則な縦位の筋目。淡灰白色の細粒子。淡青灰色の釉を外面は胴中央まで、内面は口縁直下まで施す。	用物座 L2-123
	191		—	—	—	口縁部を微弱に外反させ、玉縁状に肥厚させる。内面には不規則な縦位や斜位の筋目。淡灰白色の細粒子。緑黄色の釉を内面の口縁直下から外面にかけて施す。細かい貫入が入る。	下之御庭
	192		—	—	—	内面には不規則な斜位の筋目。淡灰白色の細粒子。淡青灰濁色の釉を外面に施す。細かい貫入。	廣福門北西
	193		—	—	9.2	外面胴部及び外底面は雑に成形されている。内面には不規則な斜位の筋目。淡灰白色の細粒子。外面の一部に淡青灰色の釉が観察できる。	下之御庭
	194		—	—	—	ヘラ削りにより、両面に縦位の沈線を表す。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。	廣福門北西
	195		6.8	3.6	3.6	碁笥底で口縁部は直口である。淡灰白色の微粒子。緑灰色の釉。二次的被熱。細かい貫入。	下之御庭
	196		7.6	—	—	外反口縁。外面に１本の圏線。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉。細かい貫入。	用物座
	197		8.2	—	—	外反口縁。淡灰白色の細粒子。両面に緑灰色の釉。全体に粗い貫入。	木曳門
	198		—	—	4.3	高台内刳りは浅く、胴部を腰折状に成形する。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉を施すが、内面の見込みと畳付及び外底面は露胎である。	下之御庭
	199		—	—	—	外底に獣面状の足を貼り付ける。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を厚く施す。	用物座
	200		—	—	—	獣面を表した三足の香炉。外底面には凸面があり、愚書が確認できるが判然としない。内面には雑な調整痕が観察できる。淡灰白色の微粒子。外面に緑灰色の透明釉。	下之御庭
	201		—	—	—	器台である。垂下する五葉文の両側を空けている。上部には３本の圏線。淡灰白色の微粒子。両面に厚く緑灰色の釉を施している。	用物座
	202		—	—	2.6	逆「ハ」の字状に大きく開き、角度を変えて立ち上がる。外面には三足の足が貼り付けられる。内面には雑な調整痕が観察できる。灰白色の細粒子。外面に緑灰色の釉。全体に細かい貫入。	廣福門北西
	203		9.7	—	—	直口タイプ。外面に４本、内面には１本の圏線。淡灰白色の細粒子。淡緑灰色の透明釉。	用物座
	204		5.6	—	—	小壺か。両面に雑な調整痕が残る。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施すが、口唇部は露胎で、赤茶色を呈する。	木曳門
	205		—	—	—	外面には四方襷文が入る。内面には調整痕が確認できる。淡灰白色の微粒子。両面に緑灰色の釉を施すが、全体に粗い貫入が入る。	下之御庭
	206		10.2	—	—	壺の口縁部か。口縁断面形は三角形を呈する。外面口縁部直下にはヘラ削りによる２本の圏線を廻らせる。淡灰白色の微粒子。両面に淡緑灰色の釉。	下之御庭
	207		外径 15.6	内径 13.4	—	壺の蓋か。蓋甲面には１本の圏線。内面には丁寧な調整痕が観察できる。淡灰白色の微粒子。淡緑灰色の釉を外面にのみ施す。	廣福門北西
	208		外径 20	内径 17.4	—	壺の蓋か。蓋甲面には片切彫りによる刻花文。見受けの突起は小さい。灰白色の微粒子。濃緑灰色の釉を両面に施すが見受け部分は露胎である。	木曳門
	209		13	—	—	瓶の口縁部か。大きく外反させて口唇部を盤口状に成形する。淡灰白色の微粒子。両面に濃緑灰色の釉を施す。全体に細かい貫入が入る。	木曳門
	210		—	—	—	仙盞瓶の一部であると思われる。注口に付帯するものか。淡灰白色の微粒子。緑灰色の釉。	木曳門
	211		—	—	—	瓶の耳である。灰白色の微粒子。緑灰色の釉を全体に施す。	用物座
	212		—	—	—	推定復元資料。径は小さくなる可能性もある。全体に丸みがあり、内傾して口縁部へと移行する。内面の胴下部には微弱な凸帯が確認できる。灰白色の細粒子。両面に淡緑灰色の釉を施す。細かい貫入が入る。	木曳門
	213		—	—	—	瓶の頸部もしくは馬上杯の足である。外面には４つの凸面がある。内面には貼り付けたような痕跡も確認できることから上下が逆の可能性もある。淡灰白色の微粒子。外面に淡緑灰濁色の釉を施すが内面にも一部釉垂れが確認できる。	廣福門北西
	214		—	—	—	水注の把手であろうか。外面には４つの縦位の沈線が入る。淡灰白色の微粒子。全体に淡緑灰濁色の釉を施す。	木曳門
23図	215	泉州窯系青磁	—	—	—	薄手の外反タイプ。外面には調整痕が確認できる。淡灰白色の粗粒子で微細な黒色の鉱物を含む。内面から外面の胴中央まで施釉するが失透気味で本来の釉調は判然としない。	木曳門
	216		—	—	—	薄手の外反タイプ。両面に雑な調整痕が確認できる。淡灰白色の細粒子。両面に淡灰白色の釉を施す。	廣福門北西
	217		—	—	—	薄手の直口タイプ。口唇部の成形もラフで、両面に雑な調整痕が確認できる。淡灰白色の粗粒子。両面に淡灰白色の釉を施す。全体に細かい貫入。	下之御庭
	218		—	—	—	薄手の直口タイプ。両面に雑な調整痕が確認できる。淡灰白色の粗粒子。内面から外面の胴中央まで施釉するが失透気味で本来の釉調は判然としない。	木曳門
	219		—	—	—	薄手の直口タイプ。両面に雑な調整痕が確認できる。灰白色の粗粒子。両面に緑黄色の釉を施す。全体に細かい貫入。	廣福門北西
	220		—	—	—	薄手の直口タイプ。両面に雑な調整痕が確認できる。灰白色の粗粒子。内面から外面の胴中央まで淡灰白色の釉を施す。	木曳門
	221		—	—	5	高台「の」の字状に削り取る。全体に雑な成形。灰白色の粗粒子で、微細な茶紫色の鉱物を含む。内面に緑黄色の釉を施すが、細かい貫入が観察できる。	木曳門表採
	222		—	—	5	高台内刳りは丁寧であるが全体に雑な成形。灰白色の粗粒子で、微細な茶紫色の鉱物を含む。内面に緑灰色の釉を施す。外面にも一部確認できる。	木曳門
	223		15.2	4.4	4	薄手の直口タイプ。両面に雑な調整痕が確認できる。灰白色の粗粒子微細な黒色の鉱物を含む。内面から外面の胴中央まで淡緑灰色の釉を施す。	木曳門
	224		—	—	—	胴部資料。全体に雑な調整痕。淡灰白色の粗粒子。微細な黒色の鉱物を含む。内面に淡緑灰色の透明釉を施す。外面に一部釉垂れ。細かい貫入が入る。	用物座
	225		—	—	4.2	高台内刳りは丁寧であるが全体に雑な成形。灰白色の粗粒子で、微細な茶紫色の鉱物を含む。内面に緑灰色の釉を施す。外面にも一部確認できる。	木曳門



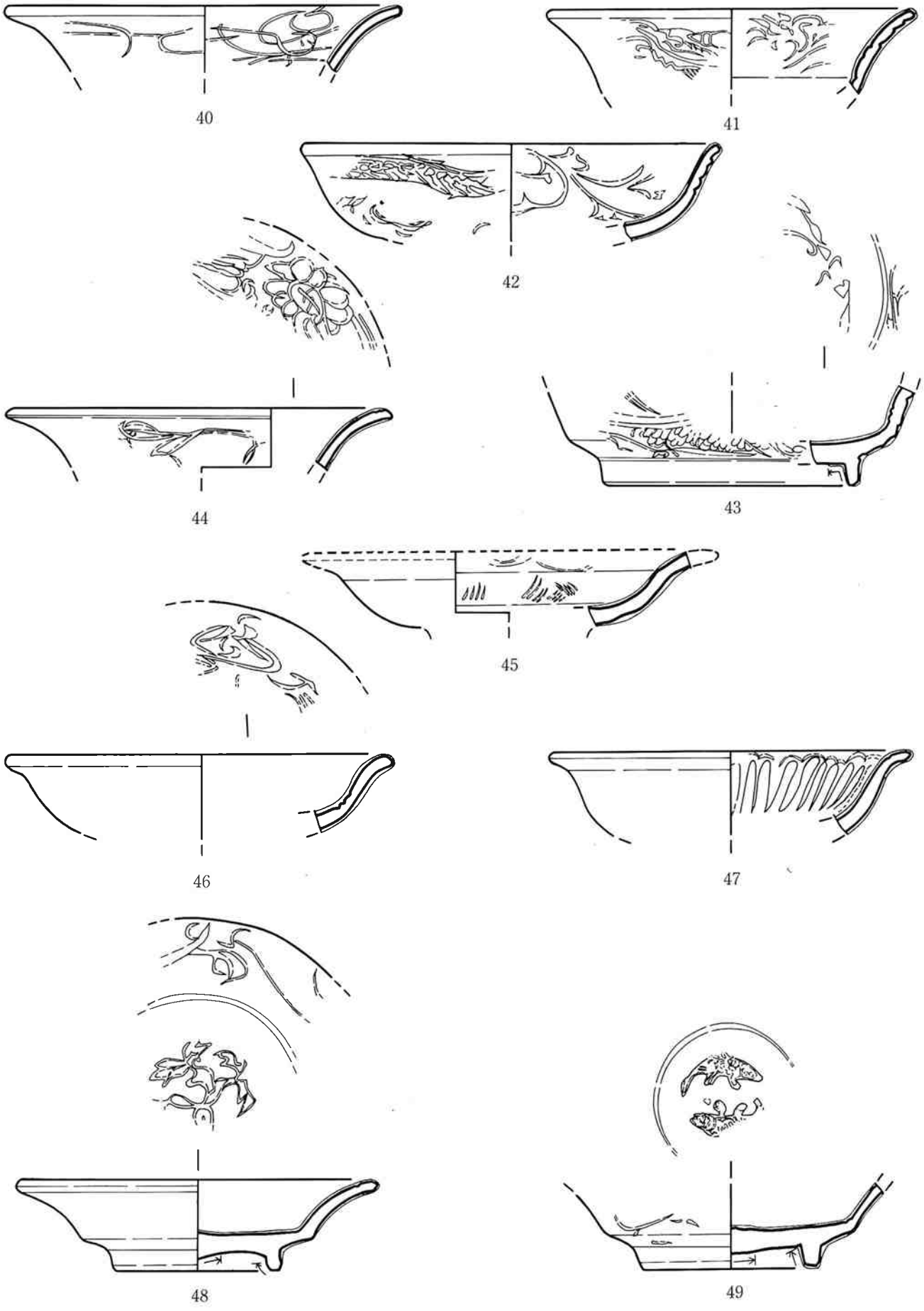
第4図　青磁



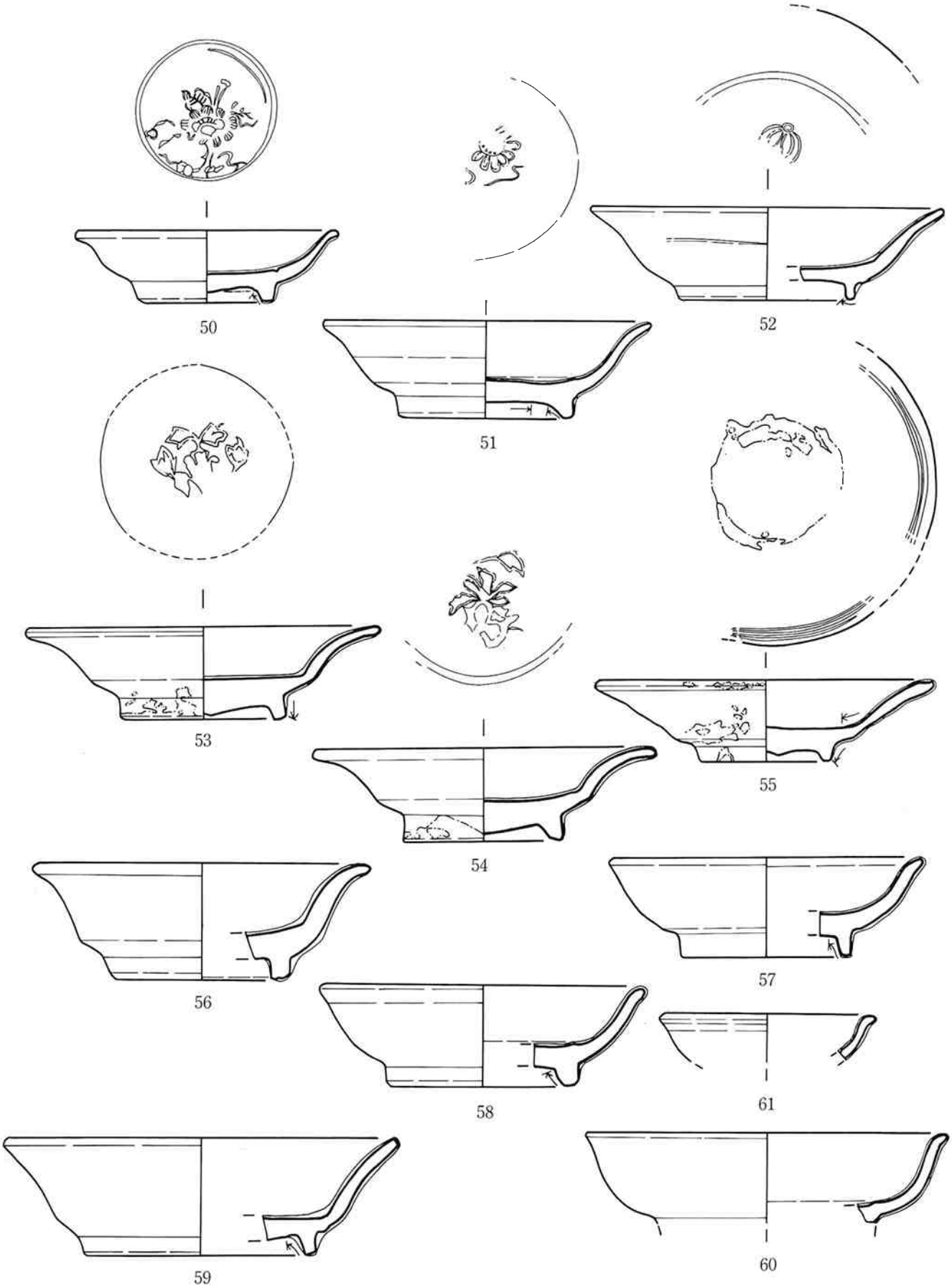
第5図　青磁



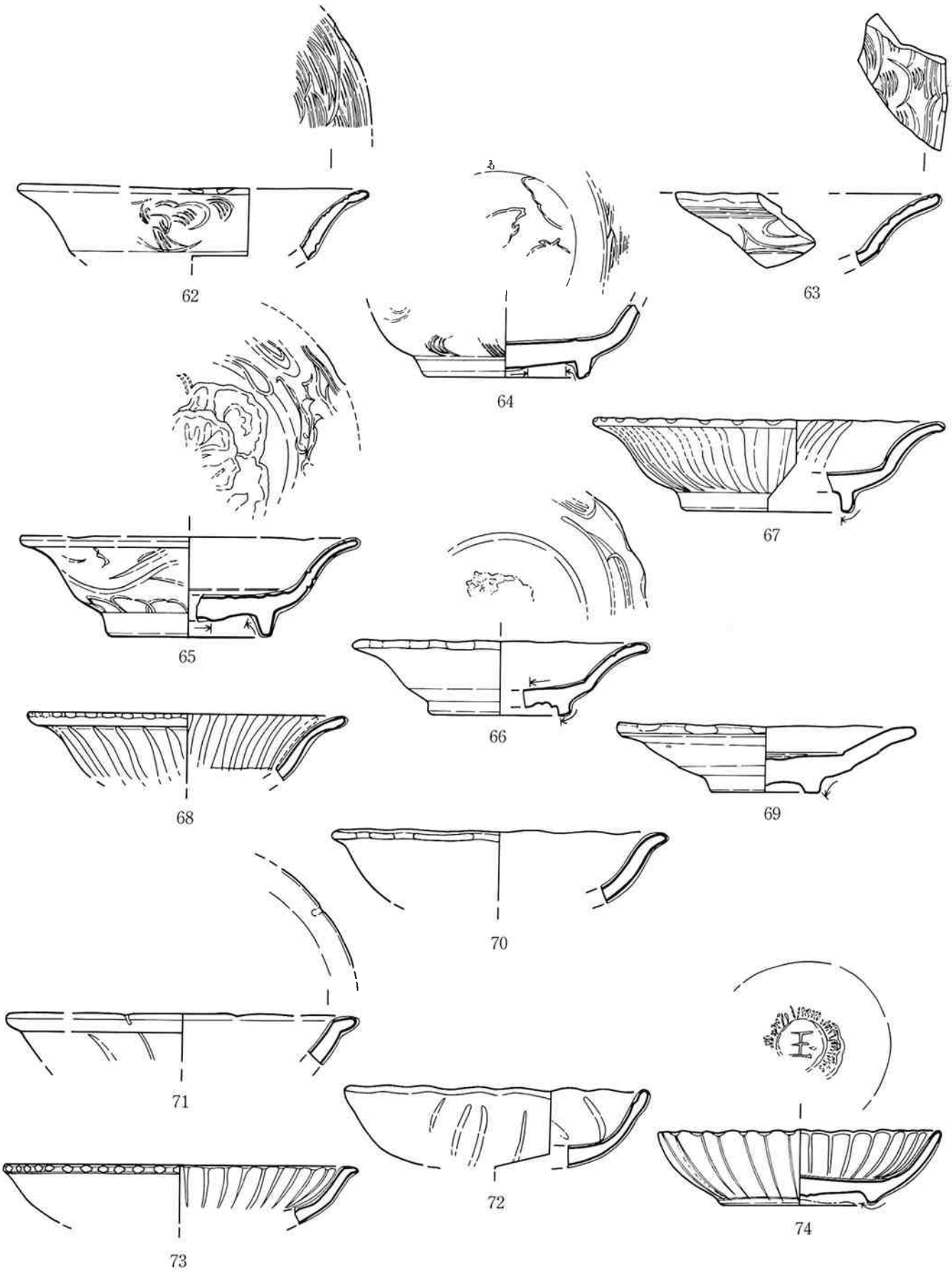
第6図　青磁



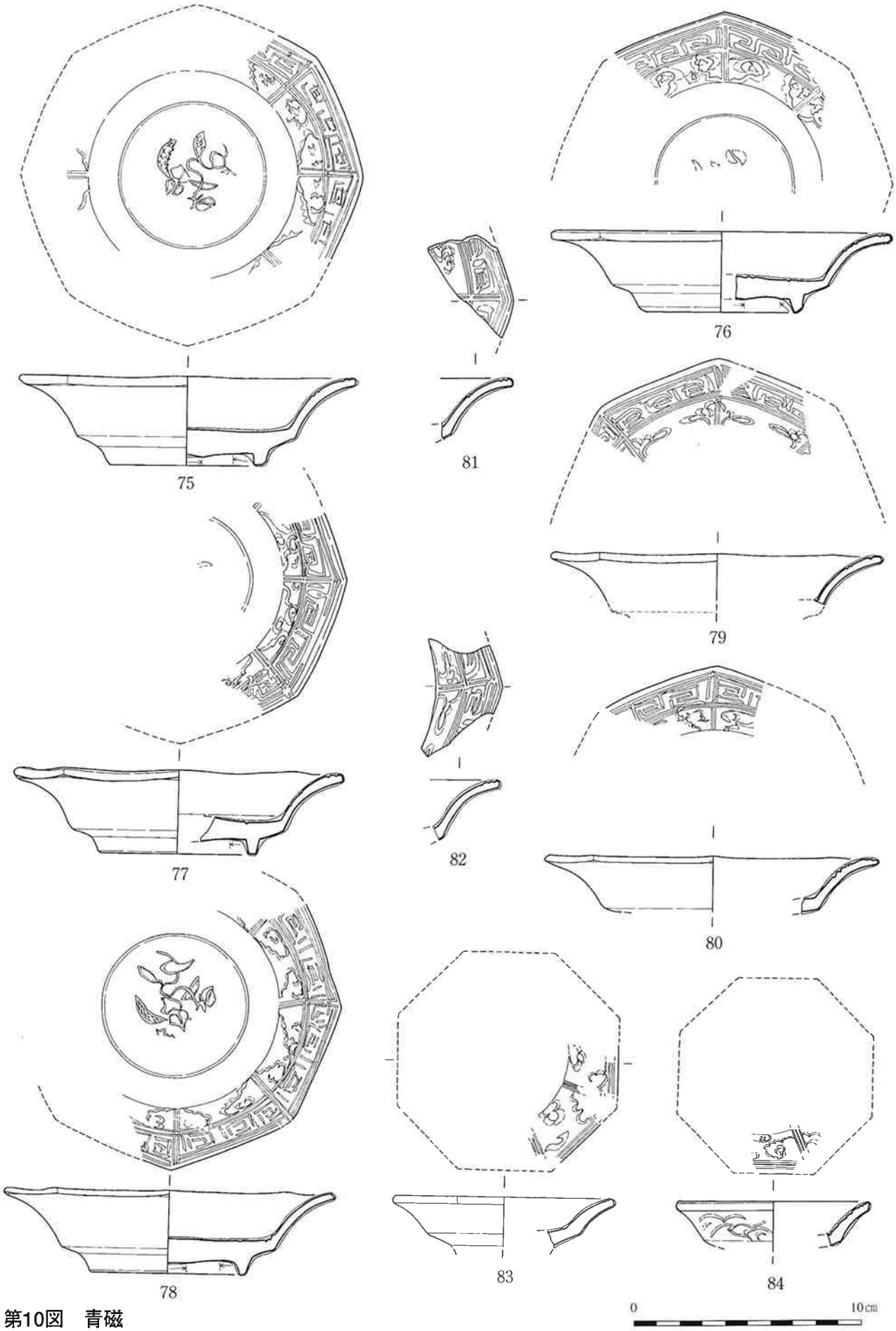
第7図　青磁



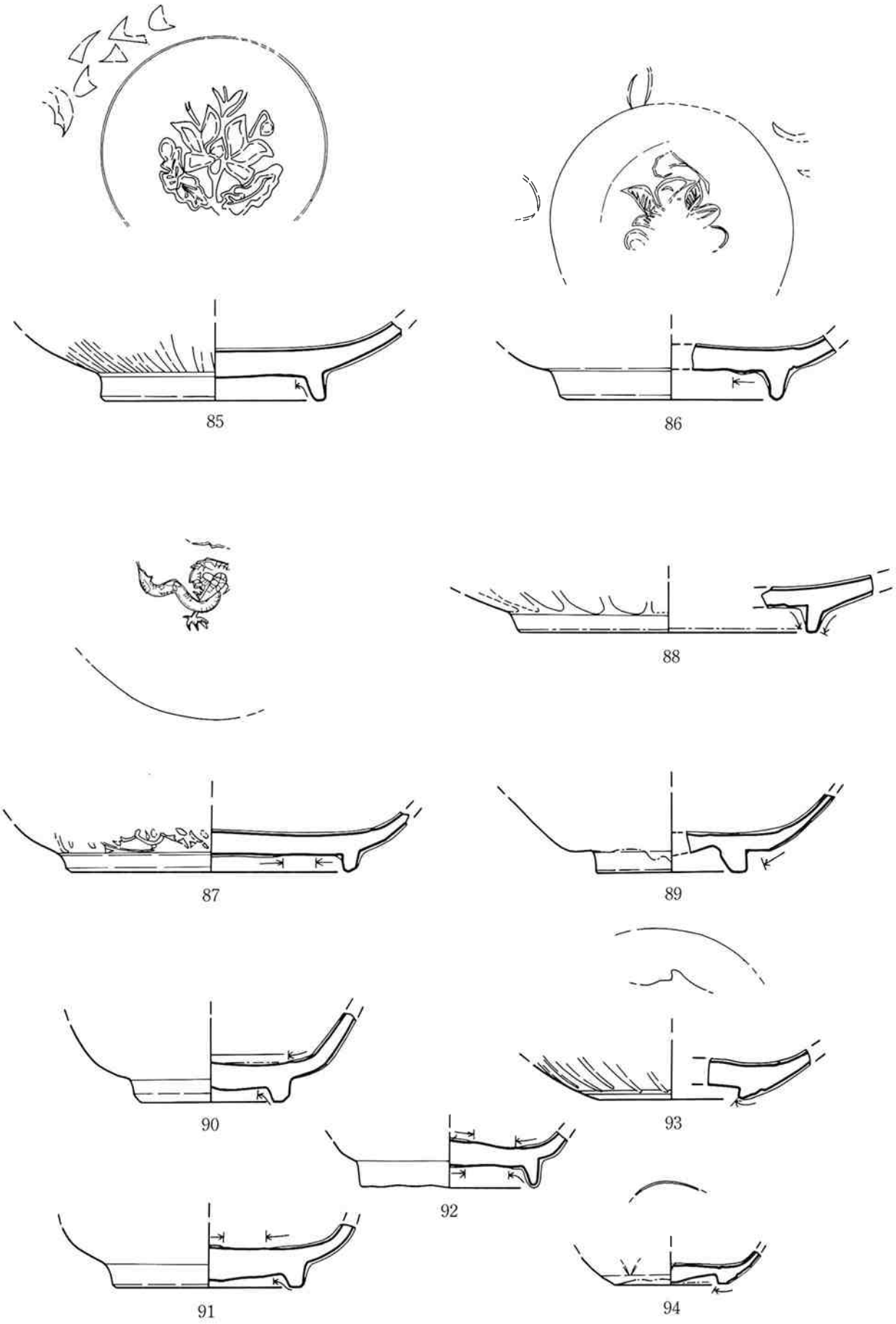
第8図　青磁



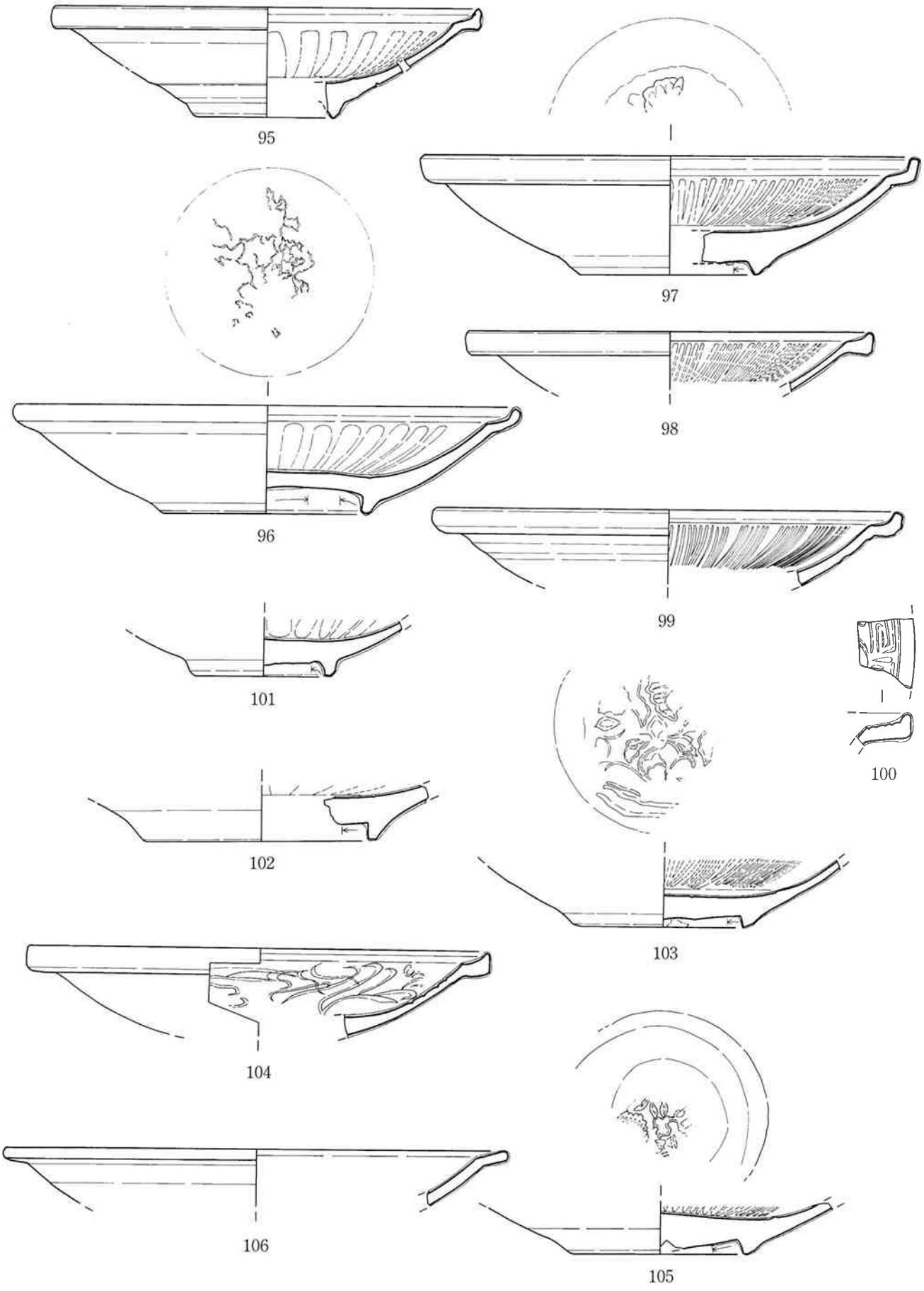
第9図　青磁



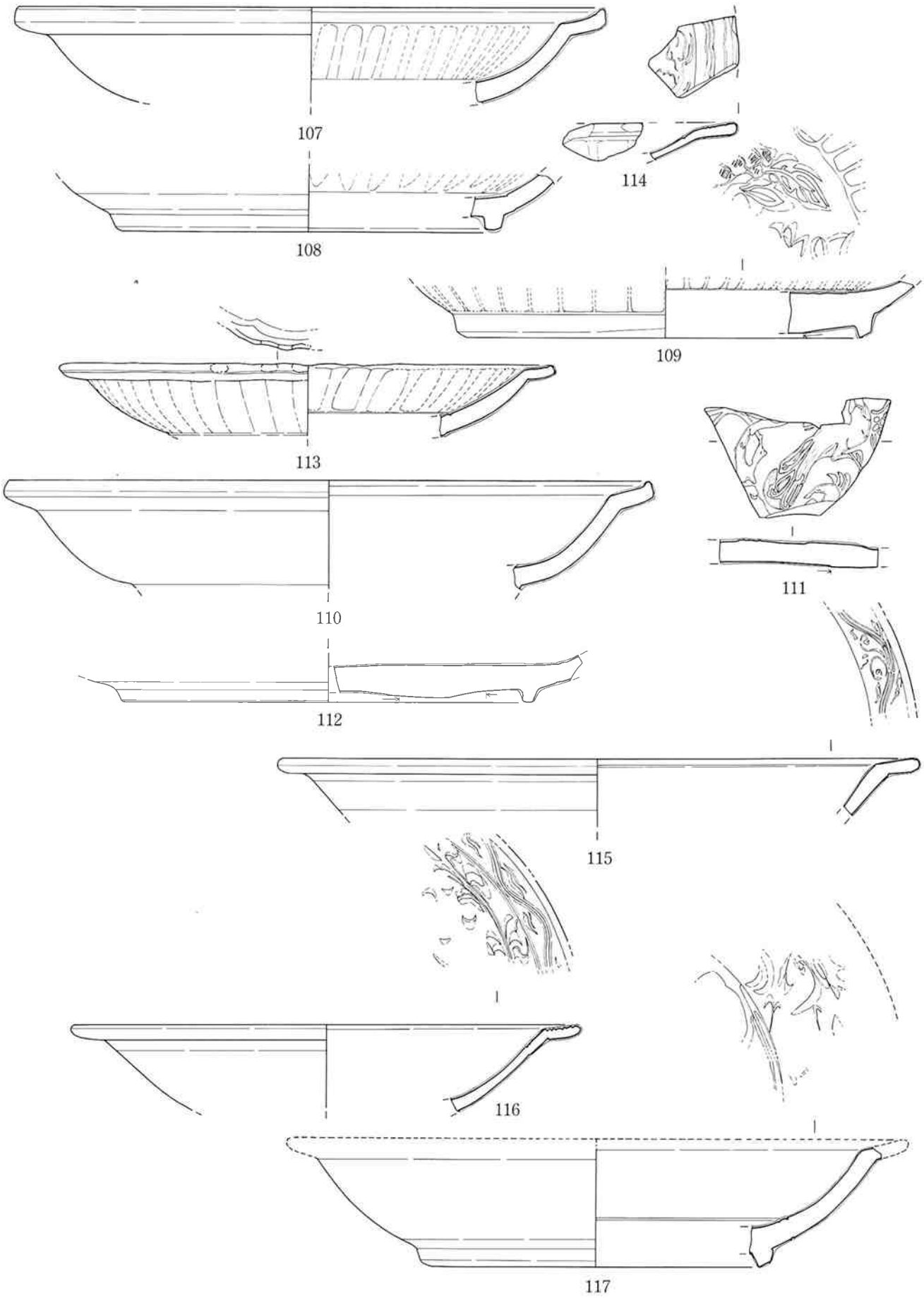
第10図　青磁



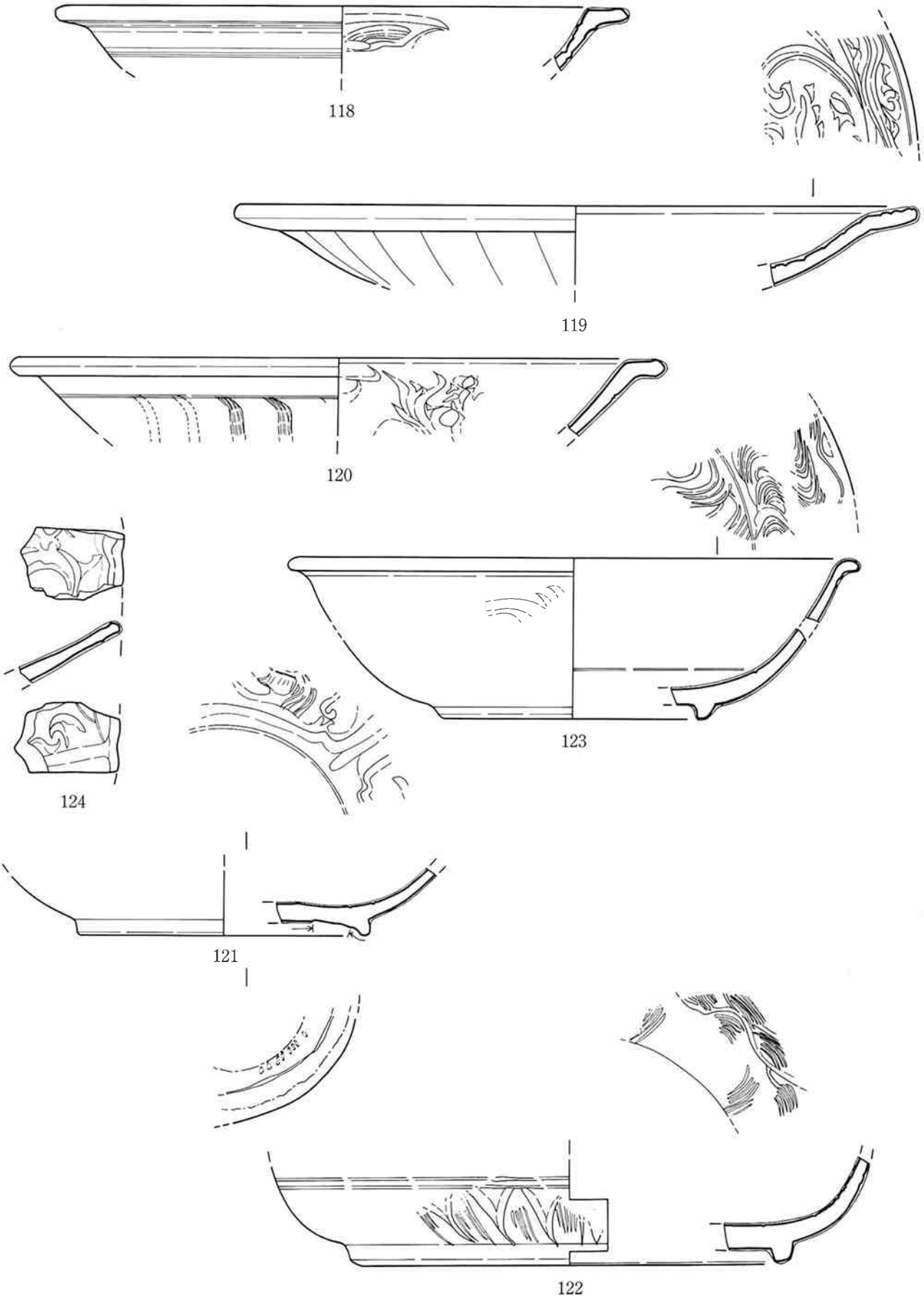
第11図　青磁



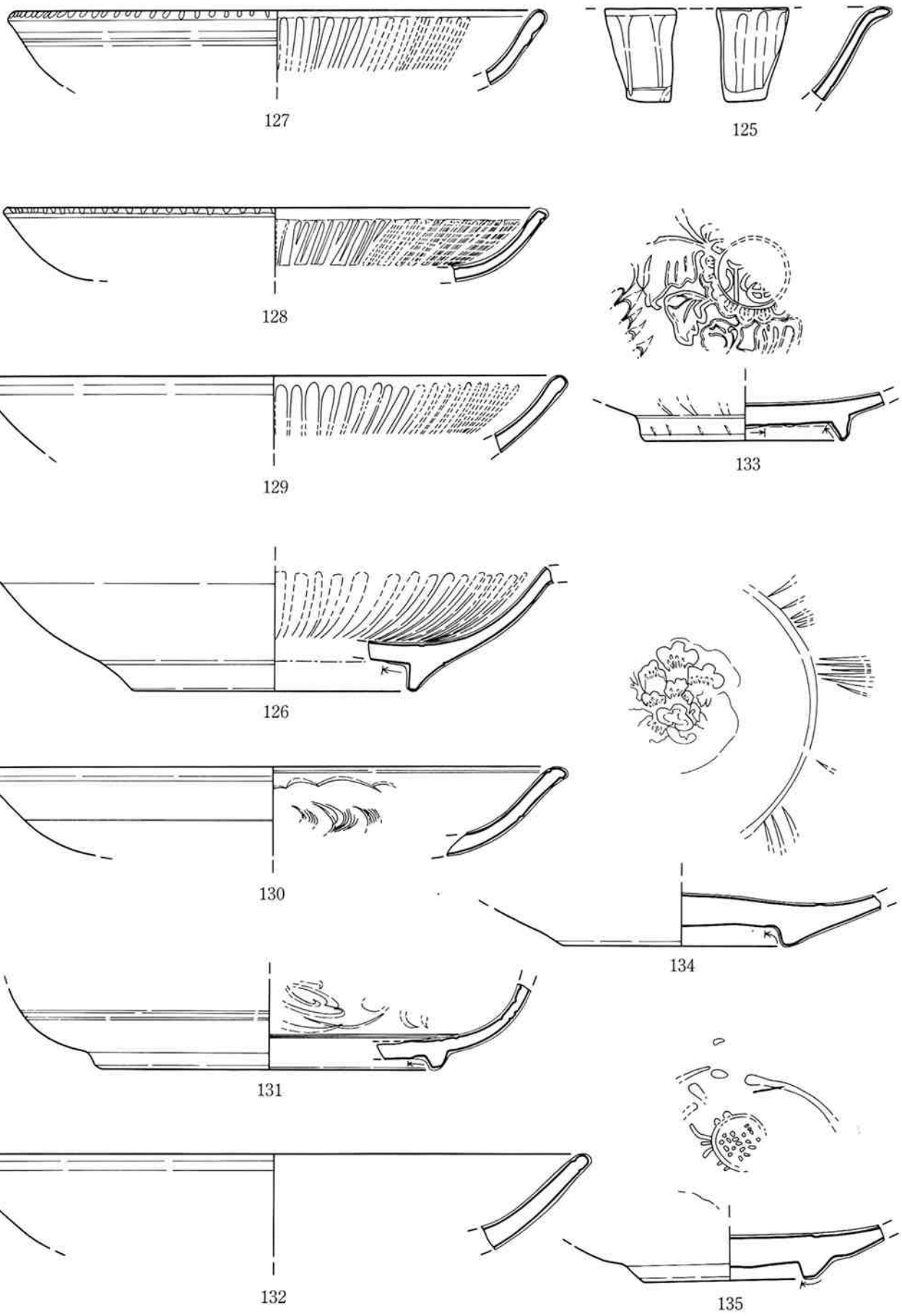
第12図　青磁



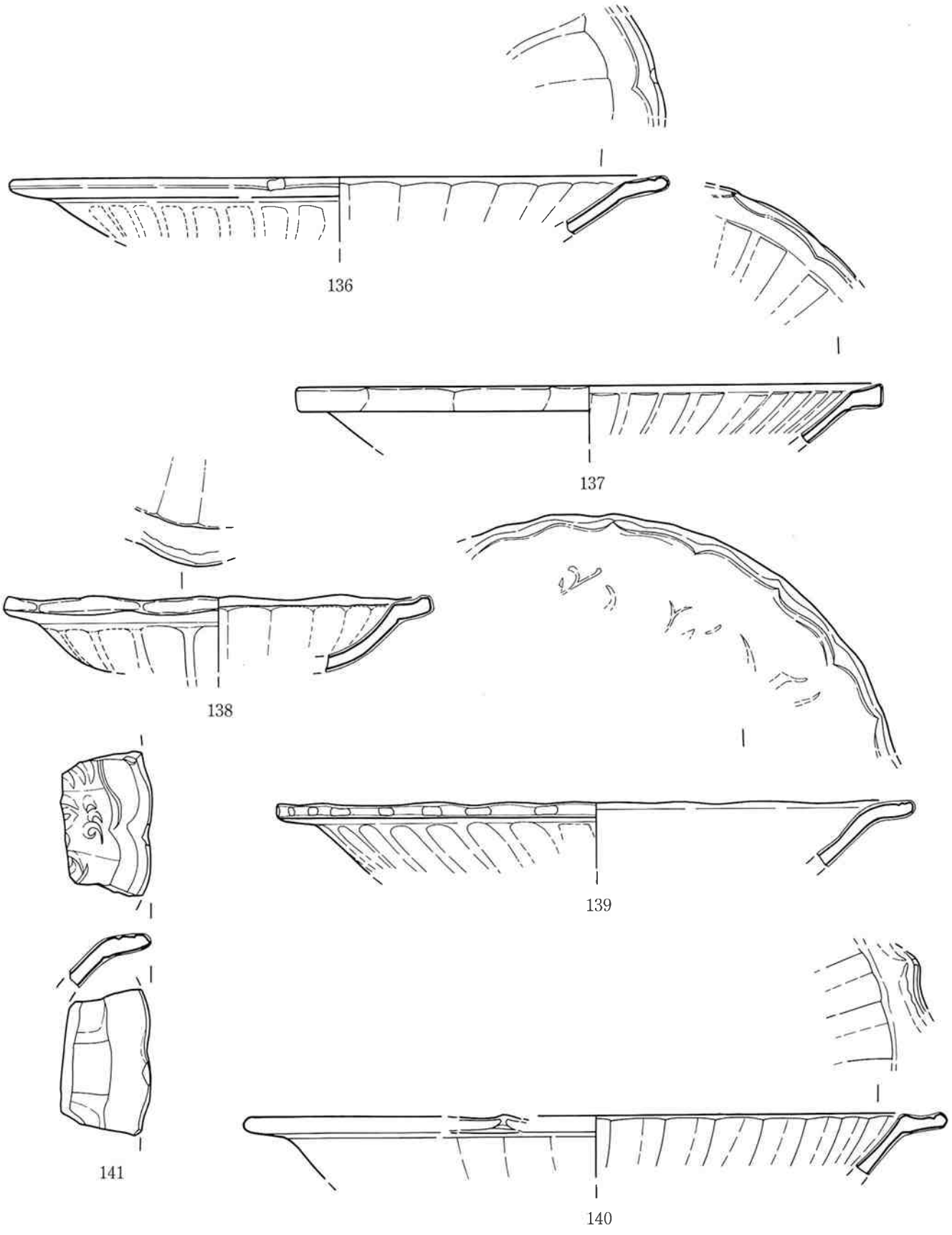
第13図　青磁



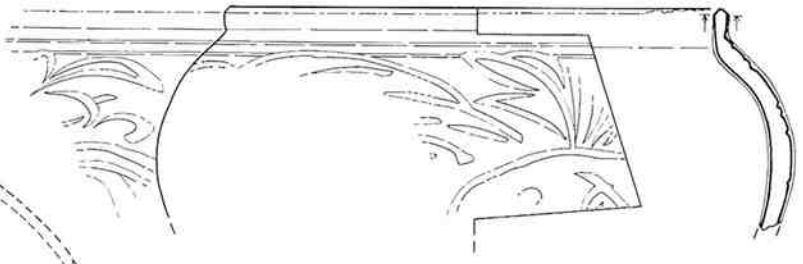
第14図　青磁



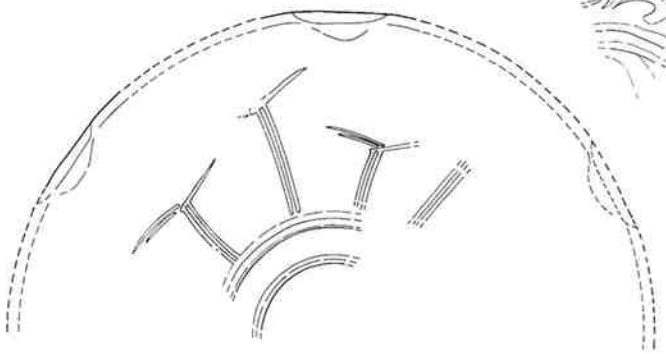
第15図　青磁

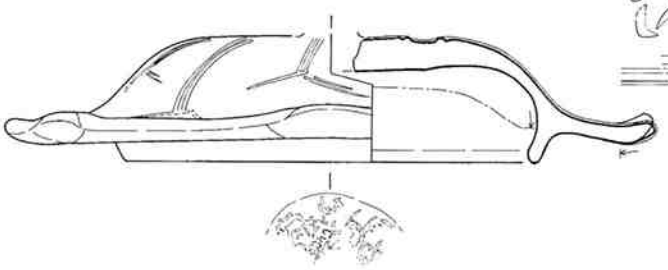


第16図　青磁

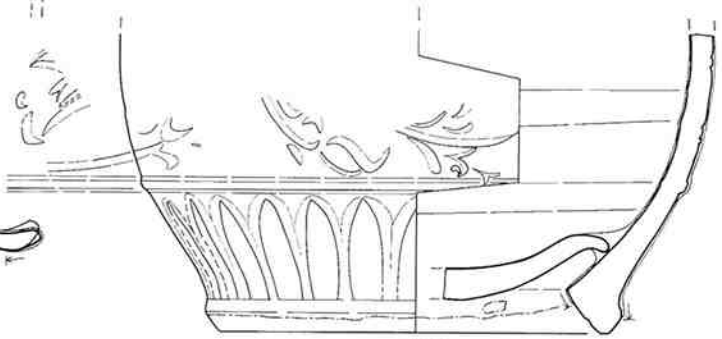


144

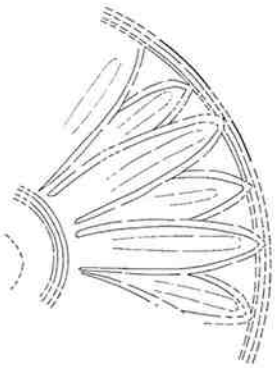


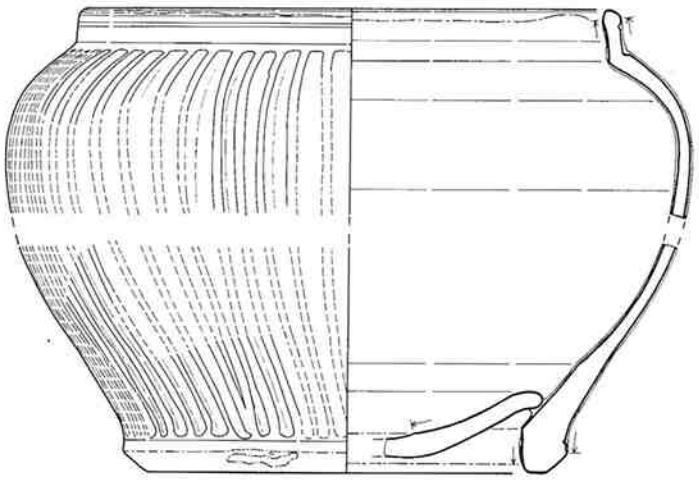


142

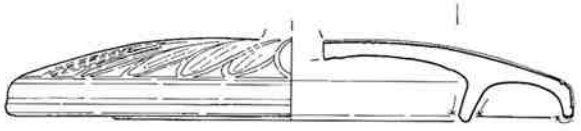


145

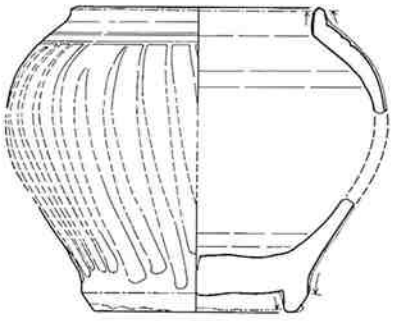




146



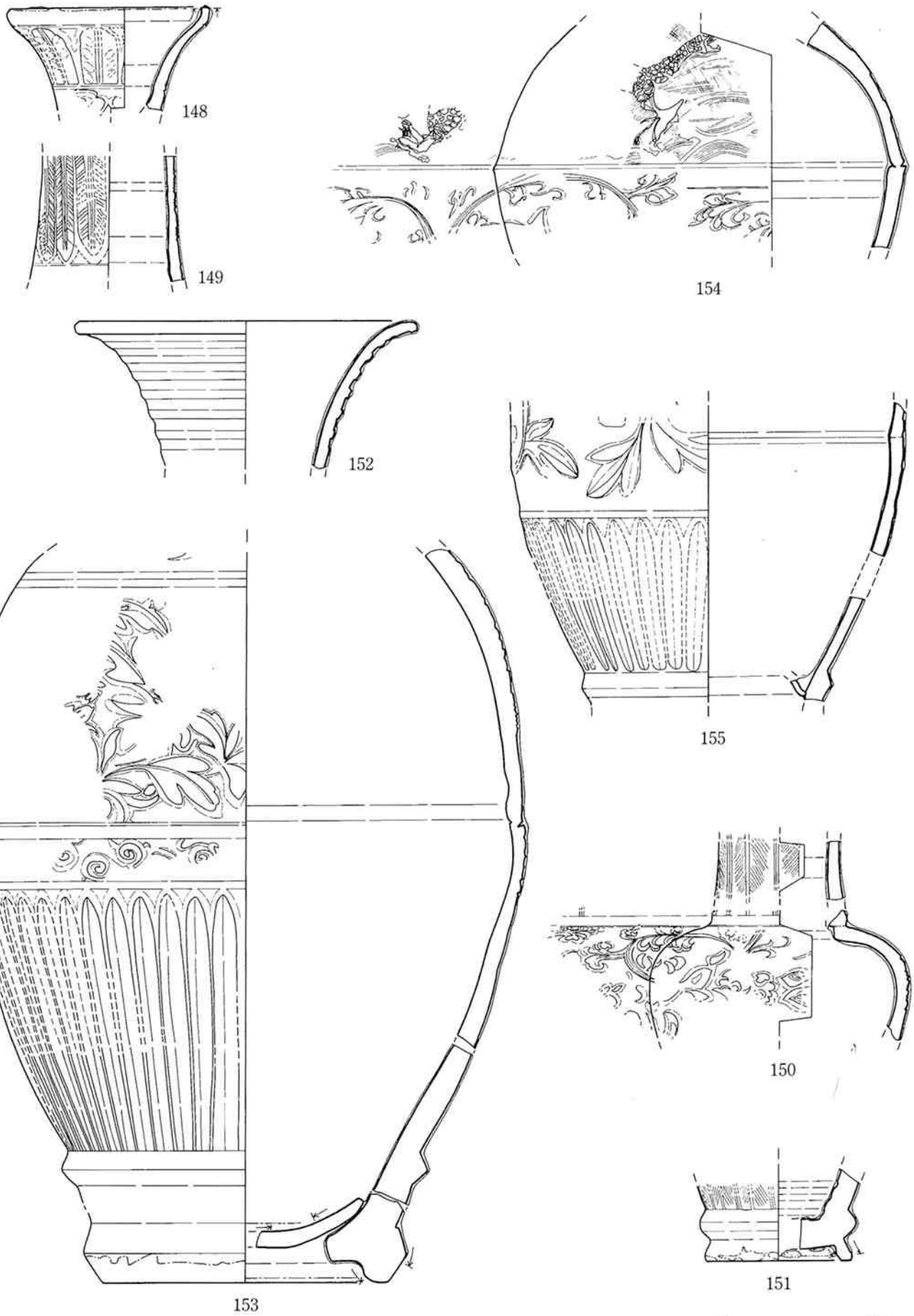
143



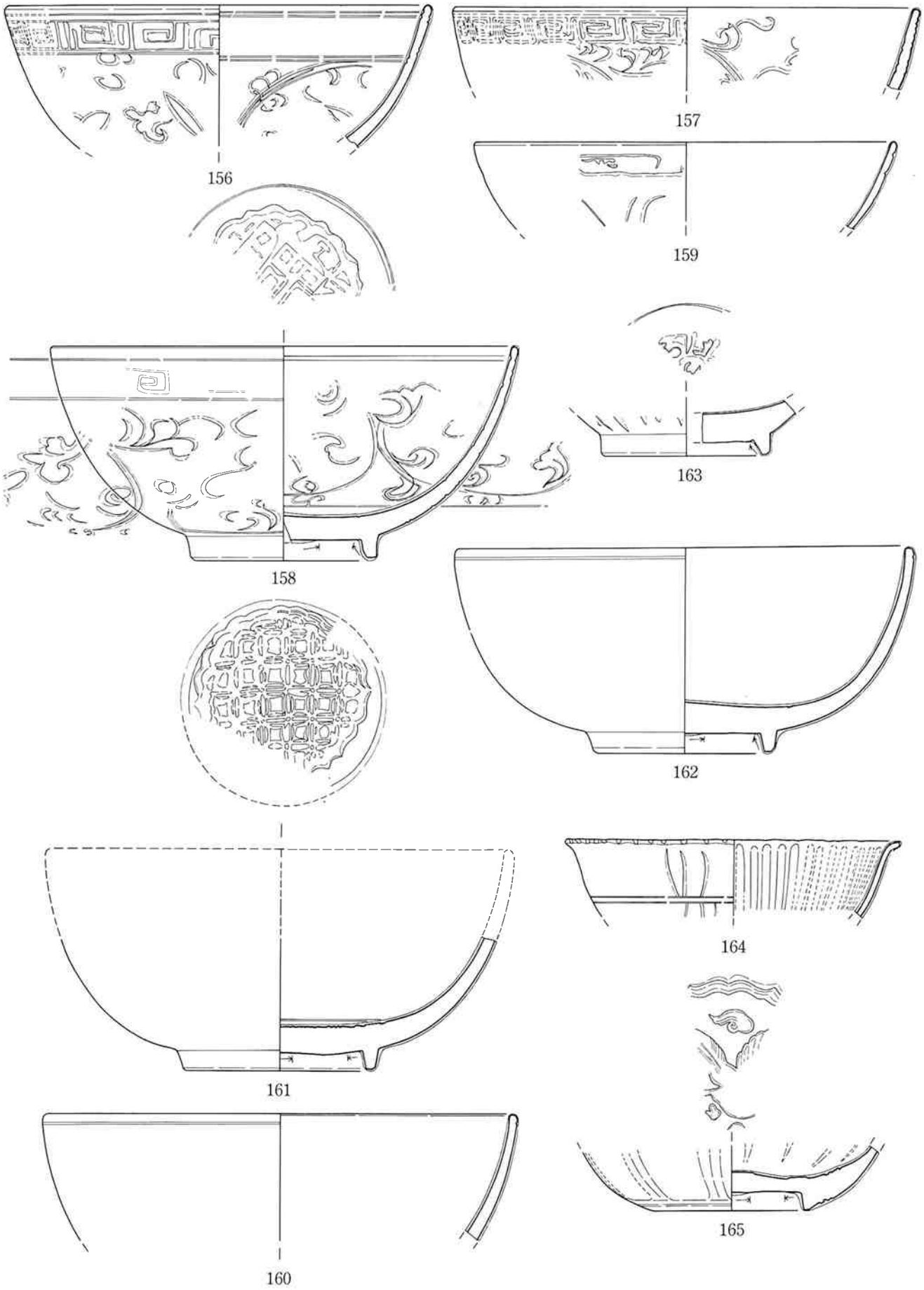
147

第17図　青磁

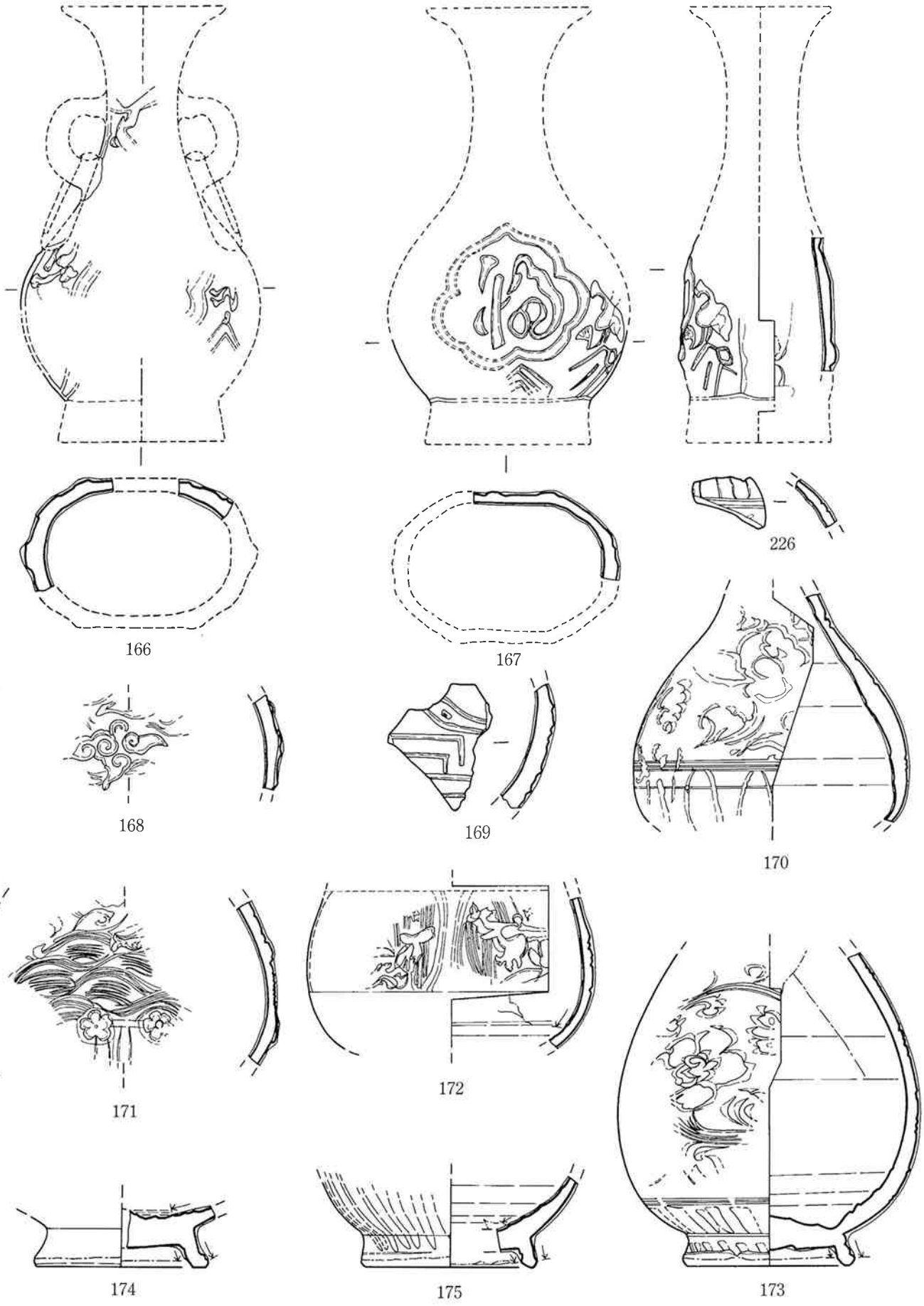
0　10cm



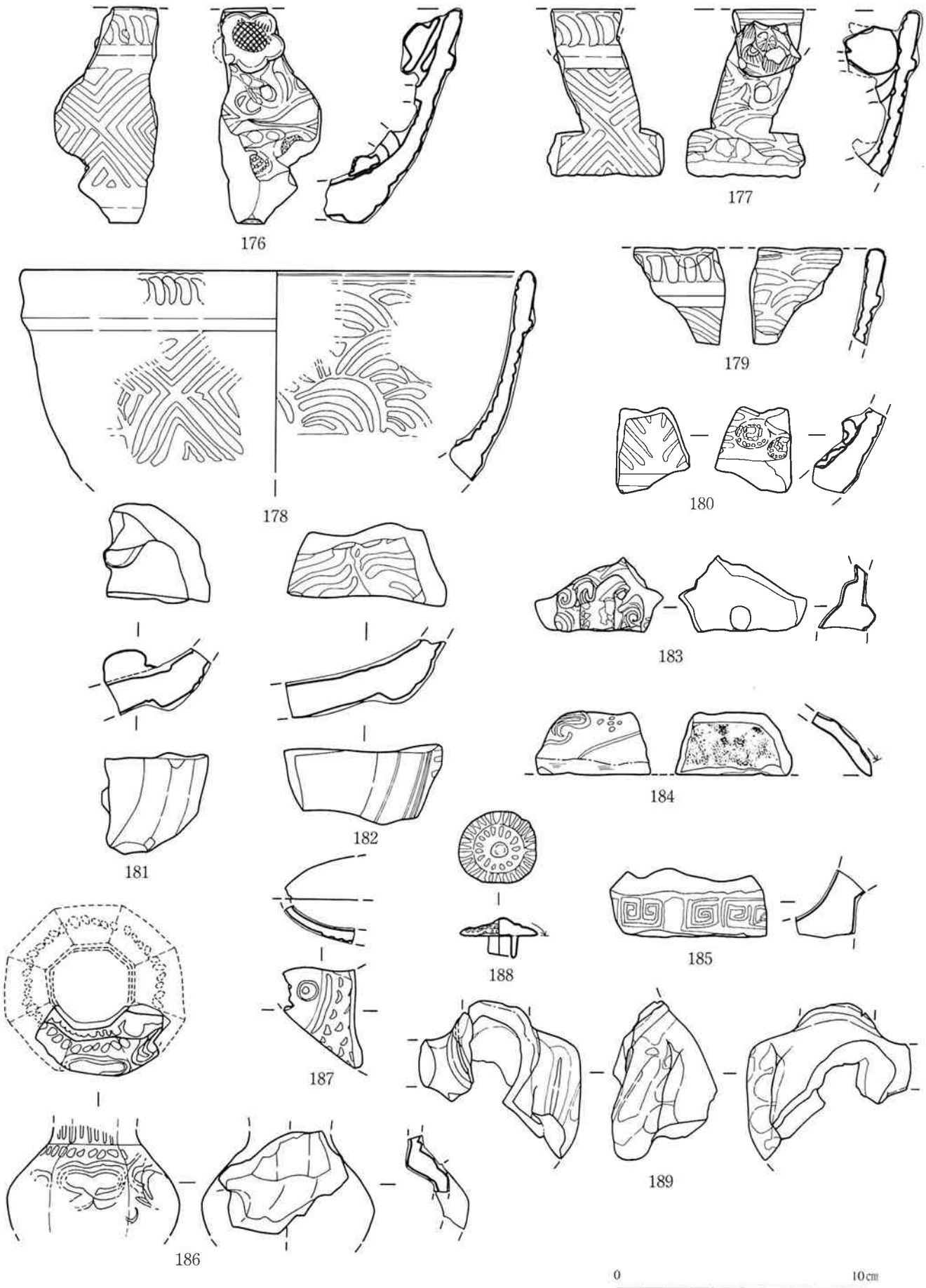
第18図　青磁



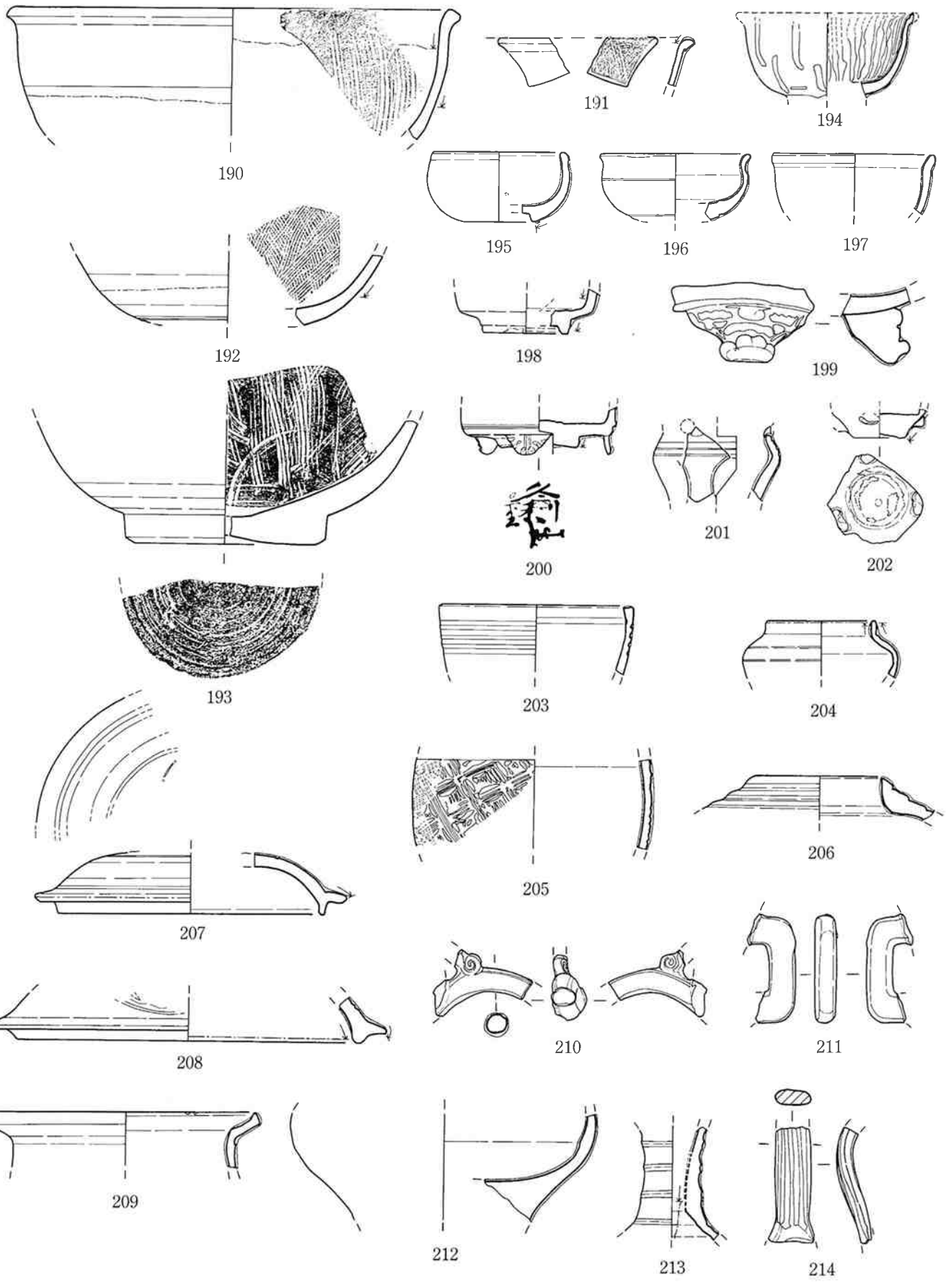
第19図　青磁



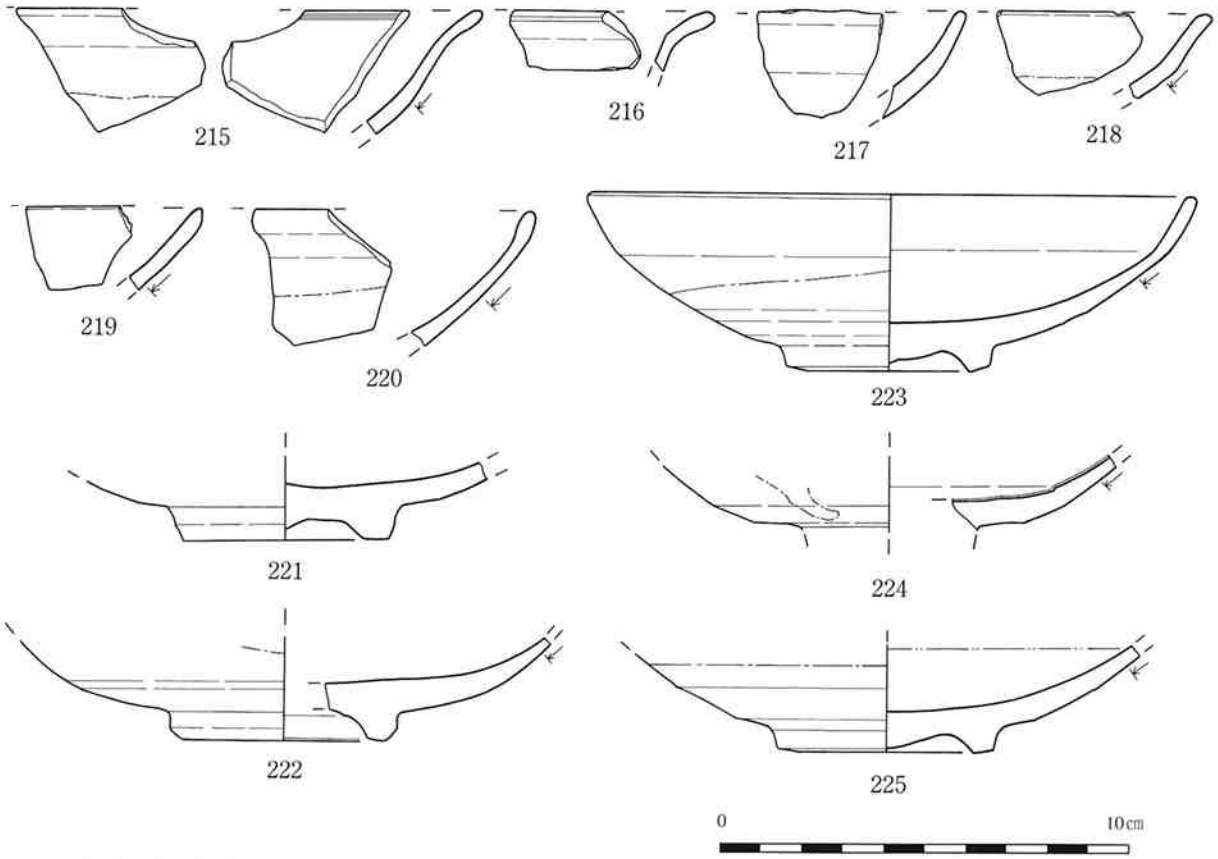
第20図　青磁



第21図　青磁


190
191
194
195
196
197
192
198
199
200
201
202
193
203
204
205
206
207
208
210
211
209
212
213
214
0
10cm

第22図　青磁



第23図　泉州窯系青磁

第２節　白磁

白磁は碗、皿、杯、壷、香炉、の５種が得られ、碗が最も出土点数が多く、次いで皿、杯とつづく、生産年代は15～16世紀を中心に、13世紀から近世のものまで出土しており年代幅を持つ。

碗　第24図·第26図49

第26図49に示したものは口縁部を欠くものの、ほぼ円筒形の碗になると思われる。外体面に片切り彫りによる蓮花を描き内底面の釉を蛇の目状に掻き取っている。高台は外向きに開き、畳付を除き外底は全面に釉を施す。胎土は白色、釉色は黄白色を呈する。河北省曲陽縣定窯のものと思われ、12世紀～13世紀に位置づけられる。注1

同図50，51は外体面に暗花文を施す胴部資料である。いずれも小破片のため詳細は不明である。50は外体に唐草の暗花文を施し、胎土が白色、釉色は黄白色を呈する。定窯のもと思われる。51は外体に龍の暗花文を施す。文様部分の釉を楕円形状に所々露胎させている。胎土が白色、釉色は白灰色を呈する。景徳鎮窯系。

第24図１は体部にやや丸みを持ちながら立ち上がり、口縁が端反りの口禿げ碗である。内体面に青海波文を型押ししている。胎土は白色を呈し、釉色は黄白色を呈する。13世紀末～14世紀中に位置づけられる。注2

２、３はいずれも端反り口縁の口禿げの碗である。３は口縁を外側に折り曲げるように開き口唇先端を上方に引き上げている。

４は腰部が丸く張り、体部上位で一旦内側にすぼんだのち口縁部を外反させ、口唇を丸くおさめる。口縁内面に３条の圏線を廻らせている。

底部は幅広の高台を有し、内底に型押しによる花文を描く。高台の断面は四角形を呈し、高台内がとがるよう斜位に削り出している。釉は腰部まで施され、外底は露胎している。胎土は白灰色を呈し、釉色は灰色を帯びる。同タイプに同図５、７があり、いずれも森田分類のＣタイプに属するものと思われる。15世紀前後に位置づけられる。注3

10、11は４、５、７に比較して、胎土や釉色はほぼ同じであるが、器壁及び釉の厚みが薄い。形態は体部が外側に開くように立ち上がり、口縁で若干厚みを増し外反する。

14は胴部から口縁部に向かって直線的に開き口縁上部で外反させるもので口唇は丸くおさめている。体部に

轆轤目を顕著に残し、胎土は白灰色を呈する。釉色は淡緑灰色を示す。福建広東系と思われる。

6は口縁が内彎気味の直口口縁である。胎土は白灰色で、釉色は淡い灰色を呈する。体面に轆轤目を顕著に残す。ビロースクタイプⅡと思われる。注4

15は、胴部から口縁部に向かって直線的に開き口唇で断面形がバチ状に肥厚する。胎土は灰白色を呈し釉色は灰色である。体部に轆轤目を顕著に残す。福建広東系と思われる。

8、9は内底面の丸枠に福や得の字の印花文を施し、内底面を露胎させたものである。胎土、釉色とも黄白色を呈する。

13は高台内中心が尖り、高台の断面が四角になるものである。外底は露胎させ胎土、釉色とも白灰色を呈する。

18、19は高台先端を外側と内側から斜位に面取りし、兜状を成すものである。釉は畳付け脇まで施釉、外底は露胎している。胎土は白色を呈し、釉色は薄青の青白磁である。

20は高台形が断面三角を示す碗底部である。胎土は白色を呈し、釉色は薄青灰。12は内底中央が盛り上がり、釉は畳み付けを除き全面に施釉している全体的に丁寧な作りである。胎土は白色を呈し、釉色は薄青の青白磁である。

21は胴部から口縁部に向かって直線的に開き口縁上部で外反する。口唇はやや尖る。胎土、釉色供に白色を呈する。徳化窯系と思われる。

皿

第25図22は体部が「ハ」字に開きながら、直すぐ口縁に至る。内体面に青海波を型押しにより施文する口禿げ口縁皿である。胎土は白色を呈し、釉色は黄白色を呈する。

13世末～14世紀中に位置づけられる。注2

24は腰部に丸みを持ち、体部が開きながら、口縁に至り、口縁で外反する。内体面に型押しの唐草を施文する枢府手の皿である。高台は、先端を三角に削り出し高台内は露胎、橙色を示す。胎土は灰白色を呈し、釉色は灰白色を呈する。14世紀に位置づけられる。注5

23は平底の皿である。外底にも施釉、胎土は白色、釉色は白灰色を呈する。

25，26は見込み部分がやや盛り上がり、内底面に印花文を施文する。底部は断面四角の低い高台を持ち外に向かって開く形を示している。畳み付け外側部を僅かに面取りする。釉は高台際まで施釉、高台及び高台内を露胎させている。胎土、釉色共に黄白色を呈する。27は内底面を露胎させ印花文を施している。高台は畳み付け際を面取りし、外底は無釉。28は26と同タイプ無文である。いずれも森田分類Ｄ群の範疇に含まれると思われる。15世紀前半～中に位置づけられる。注3

29～31は高台に3ないし4箇の弧状の抉り込みを入れるものである。29は無文の直口皿で腰部から僅かに丸みを持ちながら開くように口縁に至り、口唇部を舌状に整える。高台の3箇所に弧状の抉り込みを入れ、施釉は全面に及び内底に目痕を残す。胎土は淡黄白色を呈し、釉色は灰白色を呈する。8は高台に4箇所、比較的浅い弧状の抉り込みを入れるものである。内面に重ね焼きの目跡を残す。釉は細い貫入を多く伴い、淡黄白色を呈する。15世紀前半～中に位置づけられる。31は胴部から開きながら立ち上がり、口縁でわずかに外反する八角の皿である。高台の4箇所に弧状の抉り込みを入れ、内底に目痕を残す。外底を露胎させ胎土は淡黄白色、釉色は灰白色を呈する。これは15世紀中～後半に位置づけられる。いずれも森田分類のＤ群の範疇に含まれると思われる。注3

34～36はやや内湾する直口口縁皿である。34は口唇が肥厚し先端は尖る。35は口唇が尖り、36口唇が丸くおさめている。いずれも胎土は淡黄白色を呈し、釉色は灰白色を呈する。森田1982Ｅ群に属すると思われるものである。16世紀～17世紀に位置づけられる。注3

37は胴部が丸く張り口縁で一旦寄った後口唇部を外反させるものである。胎土、釉色ともに黄白色を呈する。福建広東系と思われる。38は直口口縁皿である。内体面に型押しの蓮弁文を施し、胎土は白色を呈し釉色は淡灰色を呈する。

39は胴部に丸みを持ちなから立ち上がり口縁で外反する稜花皿である。16世紀中～17世紀前半に位置づけられる。胎土、釉色共に褐灰色を呈する。

40は体面に型押しの蓮弁文を有する底部資料である。胎土、釉色ともに白色を呈する。

41～43はいずれも福建広東系の皿と思われるもので、腰部が「く」の字状に折曲る。41は端反り口縁を成す。42は断面三角の高台を持ち釉は外底まで施釉する。胎土、釉色ともに黄白色を呈する。43は断面四角の高台を

持ち内底の釉を蛇の目状に掻き取り外底は無釉である。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。44，45は外側に開く口縁端反りの口禿げ皿である。胎土、釉色共に灰白色を呈する。徳化窯系16世紀代に位置づけられる。

46は碁笥底の皿で内底面を露胎させ、底部外面も露胎している。畳付けに僅かに砂目がみられる。胎土、釉色共に灰白色を呈する。16世紀代に位置づけられる。

47は、無文の筒状の直口皿で腰部からまっすぐ立ち上がり口縁に至る。口唇部は尖る。高台は低い蛇の目高台を成し外底は無釉である。胎土、釉色共に淡い灰白色を呈する。徳化窯系

48は内彎ぎみの直口の皿である。胎土、釉色共に淡灰白色を呈する。

杯

第26図52は胴部下位が若干膨らみ、やや開きながら立ち上がり口縁に至る。口縁は外反し、胴部に顕著な轆轤目を残す。胎土は黄白色を呈し釉色は青味がかった白色を呈している。15世紀中～後半に位置づけられる。森田分類Ｄ群に属すると思われる。注3

53～56は型による、比較的薄作りの杯である。54～56は腰部から胴下部が若干膨らみ口縁にかけて外反する。54，55は口唇が尖り56は丸くなる。いずれも口唇部の釉を掻き取り、口禿を成す。高台に砂目痕が認められる。胎土及び釉色は灰白色を呈する。53は胴部から開きながら立ち上がり口縁に至る、口禿げ直口の杯である。胎土、釉色は灰白色を呈する。いずれも徳化窯系の16世紀後半～17世紀中に位置づけられる。

瓶　第26図57～61

58は口縁が朝顔状に外に開き、口唇部が肥厚した口縁破片である。胎土は白色、釉色は淡青色を呈する。

57は筒状の胴部に唐草と３条の圏線をはさみ草花が連続する帯文の暗花文を施す。胎土、釉色は淡黄白色を呈する。59，60は胴部に唐草の暗花文を施すものである。胎土は白色、釉色は淡青色を呈する。61は59、60と同一固体と思われる底部資料である。高台脇に圏線と連続した渦の暗花文を施している。畳付の釉を拭取っている。

壺

63，64はいわゆる「安平壺」である。63は口縁がやや四角く肥厚し、口唇は扁平で露胎している。頸部で「く」の字状に屈曲させている。胎土は灰白色、釉色は淡灰色。64は僅かに中空になる平底を成すもので、胎土は灰白色、釉色は淡灰色を呈する。

62は短頸で胴部の丸い壷で胎土、釉色ともに淡灰白色を呈する。

香炉　第26図65

獣形様の足を持つ香炉である。外底中央の高台を取り囲む様に三の足を有する。釉は高台の外側まで施し内底は露胎している。胎土は灰白色、釉色は灰色を呈する。

その他　第26図66

直径が４～５cmで、外観が竹の節の様な円柱状を成すものである。上下端を破損している為、全形を伺うことは不可能であるが、大型の高杯の付き部分とも思われる。胎土、釉色供に灰白色を呈する。

第７表　白磁　法量一覧

番号	器種	部位	産地	法量			出土地区
				口径	器高	底径	
1	碗	口	—	14.2	—	—	廣福門北西
2	碗	口	—	—	—	—	廣福門北西
3	碗	口	—	—	—	—	下之御庭 L7-119
4	碗	口	—	18.7	7	6	廣福門北西
5	碗	口	—	15.8	—	—	廣福門北西
6	碗	口	—	16.4	—	—	首里城不明
7	碗	底	—	—	—	5.4	首里城不明
8	碗	底	—	—	—	6.1	下之御庭 L3-119
9	碗	底	—	—	—	5.2	下之御庭 L5、L6-118
10	碗	口	—	15.3	—	—	木曳門 L6-132
11	碗	口	—	12.8	—	—	廣福門北西
12	碗	底	—	—	—	6.5	木曳門
13	碗	底	—	—	—	5.5	木曳門 M6-160
14	碗	口	福建広東	15	—	—	下之御庭
15	碗	口	福建広東	18.8	—	—	下之御庭
16	碗	底	福建広東	—	—	5.9	木曳門
17	碗	底	福建広東	—	—	5	下之御庭
18	碗	底	—	—	—	6	下之御庭 L3-120
19	碗	底	—	—	—	6.3	下之御庭
20	碗	底	—	—	—	5.8	下之御庭
21	碗	口	徳化窯	—	—	—	木曳門 L4-153
49	碗	底	定窯	—	—	5.6	廣福門北西
50	碗	胴	定窯	—	—	—	用物座 L6-123
51	碗	胴	景徳鎮	—	—	—	用物座 L1-125
22	Ⅲ	口	—	12	—	—	廣福門北西
23	Ⅲ	底	—	—	—	6.8	木曳門 L8-165
24	Ⅲ	口～底	枢府窯	12.4	3.7	7.6	廣福門北西
25	Ⅲ	底	—	—	—	6	漏刻門 M3-126
26	Ⅲ	底	—	—	—	4.6	廣福門北西
27	Ⅲ	底	—	—	—	4.5	木曳門
28	Ⅲ	底	—	—	—	4.1	木曳門 L3-134
29	Ⅲ	口～底	—	8.4	2.4	4.3	用物座
30	Ⅲ	底	—	—	—	4.7	木曳門 L6-132

第８表　白磁　法量一覧

番号	器種	部位	産地	法量			出土地区
				口径	器高	底径	
31	杯	口～底	—	7.6	2.5	5.6	下之御庭
32	Ⅲ	底	—	—	—	—	下之御庭
33	Ⅲ	底	福建広東	—	—	4.2	用物座
34	Ⅲ	口	—	13.4	—	—	漏刻門 小学校階段下
35	Ⅲ	口	—	9.6	—	—	漏刻門 M3-126
36	Ⅲ	口	—	11.2	—	—	廣福門北西
37	Ⅲ	口	—	9.5	—	—	廣福門東南
38	Ⅲ	口	—	8.4	—	—	木曳門 M1-129
39	Ⅲ	口	—	14.1	—	—	木曳門
40	Ⅲ	底	徳化窯	—	—	8.3	用物座 L3-124
41	Ⅲ	口	福建広東	11.6	—	—	下之御庭 L1-121
42	Ⅲ	底	福建広東	—	—	5	漏刻門 M3-125
43	Ⅲ	底	福建広東	—	—	6.2	廣福門北西
44	Ⅲ	口～底	徳化窯	11.8	3	6.6	木曳門
45	Ⅲ	口～底	徳化窯	16.6	2.9	8.2	下之御座
46	Ⅲ	底	—	—	—	4.2	木曳門
47	Ⅲ	口～底	—	6.6	2	5.65	漏刻門 M2-127
48	Ⅲ	口～底	—	7.8	11	5.6	木曳門 M1-143
52	杯	口～底	—	7.4	3.1	3.6	漏刻門 M3-126
53	杯	口～底	徳化窯	6.6	4.1	2.8	木曳門 L10-164
54	杯	口～底	徳化窯	8	4.2	3.2	廣福門北西
55	杯	口～底	徳化窯	8.2	4.5	3.4	木曳門 M0-137
56	杯	口～底	—	4.4	1.9	2	廣福門東南
57	瓶	胴	—	—	—	—	用物座 K3-124
58	瓶	口	—	7.2	—	—	廣福門北西
59	瓶	胴	—	—	—	—	用物座 K10-124
60	瓶	胴	—	—	—	—	用物座 K10-124
61	瓶	底	—	—	—	5.45	下之御座
62	壺	口	—	8.2	—	—	用物座 K7-123
63	壺	口	—	7	—	—	木曳門 K10-133
64	壺	底	—	—	—	6.4	木曳門
65	香炉	底	—	—	—	11	木曳門
66	器種不明	—	—	—	—	—	用物座 L8-122

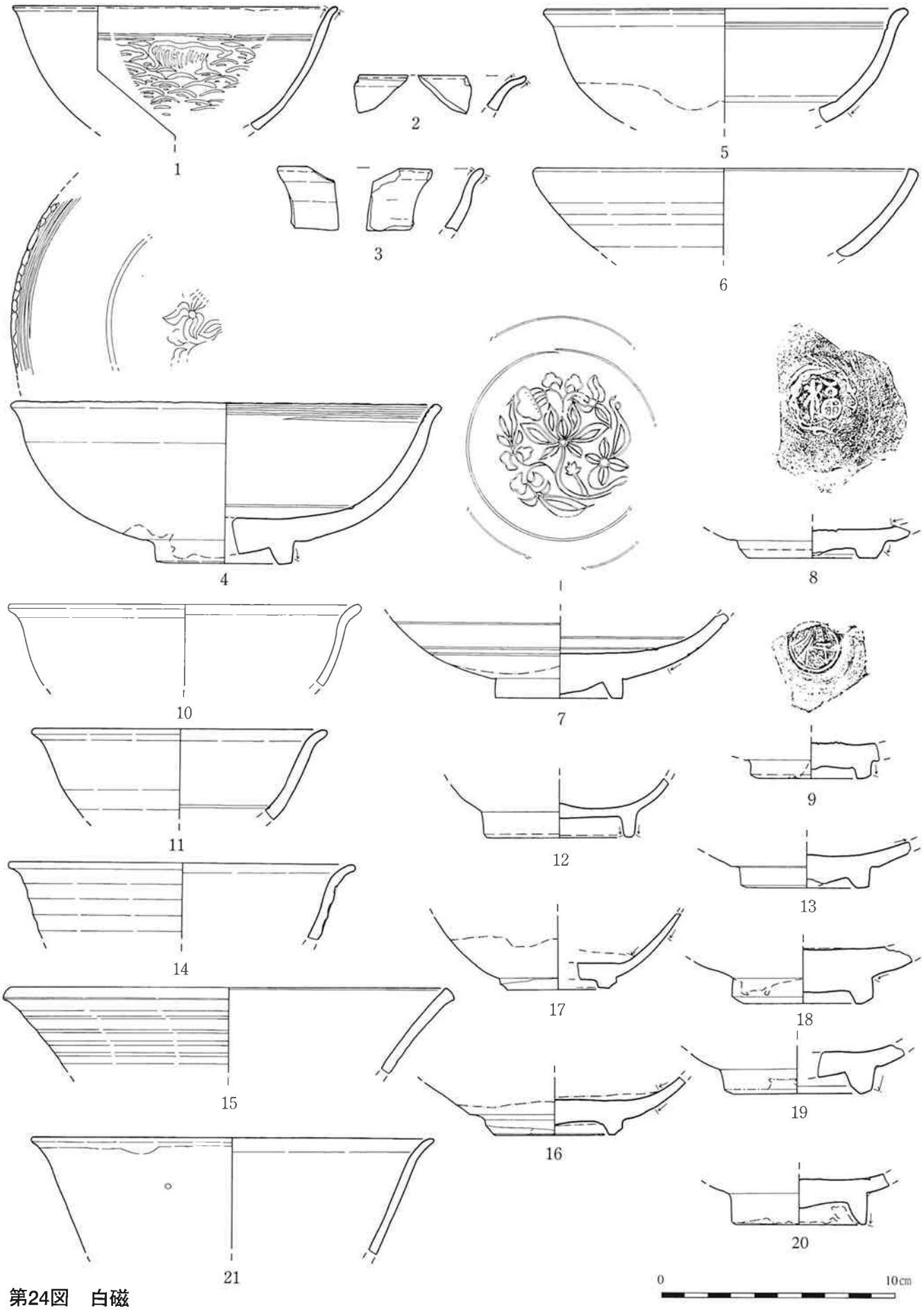
註[1] 金城亀信　他　『首里城跡　京の内跡発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書　第132集

註[2] 大城慧、豊見山禎　『湧田古窯跡(Ⅰ)　県庁舎行政棟建設に関る発掘調査』沖縄県文化財調査報告書　第111集

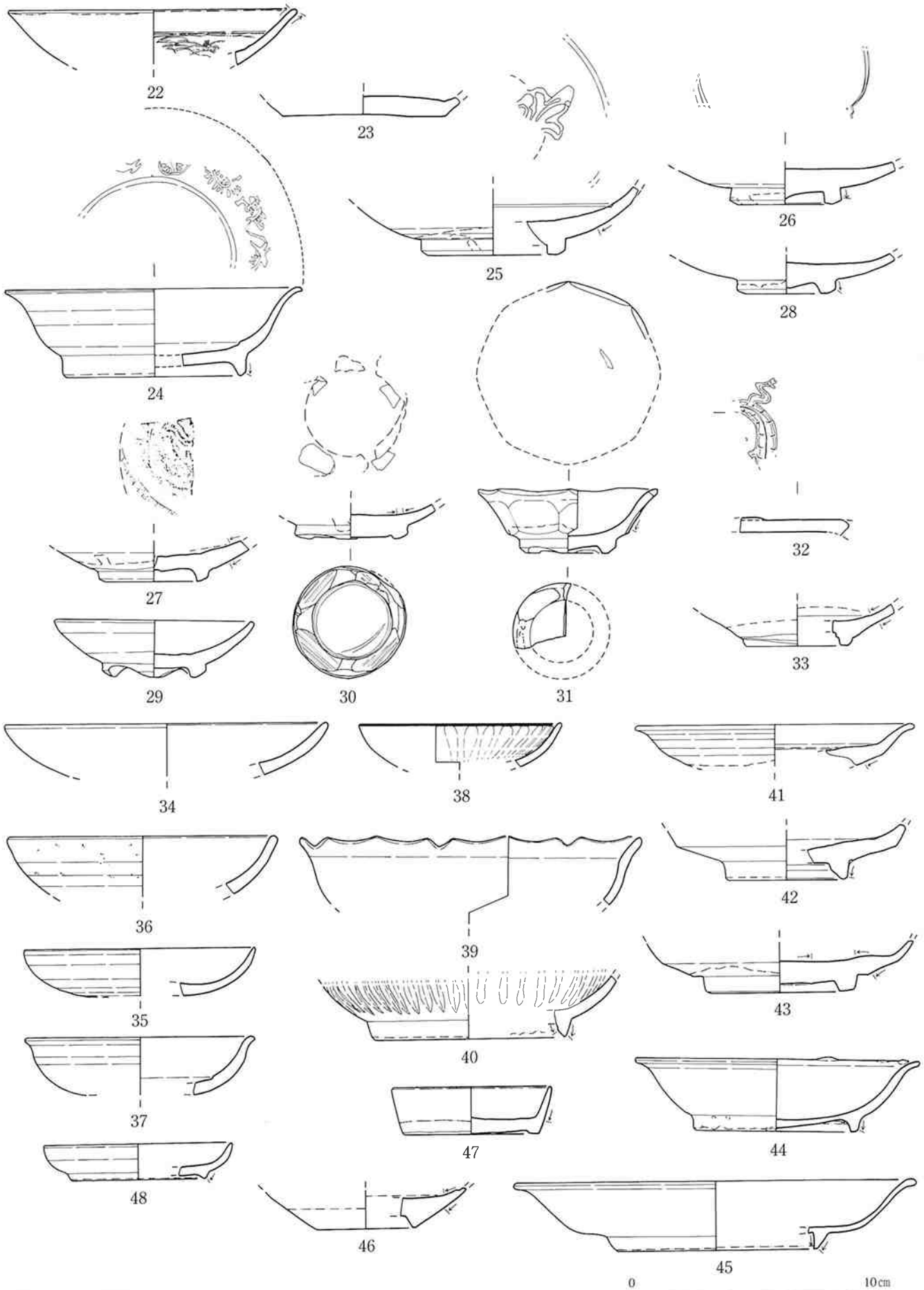
註[3] 森田勉　「14世紀～16世紀の白磁の型分類と編年」『貿易陶磁の研究第２号』1982

註[4] 金武正紀　他　『ビロースク遺跡　沖縄県石垣市新川･ビロースク遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書　第六号1983

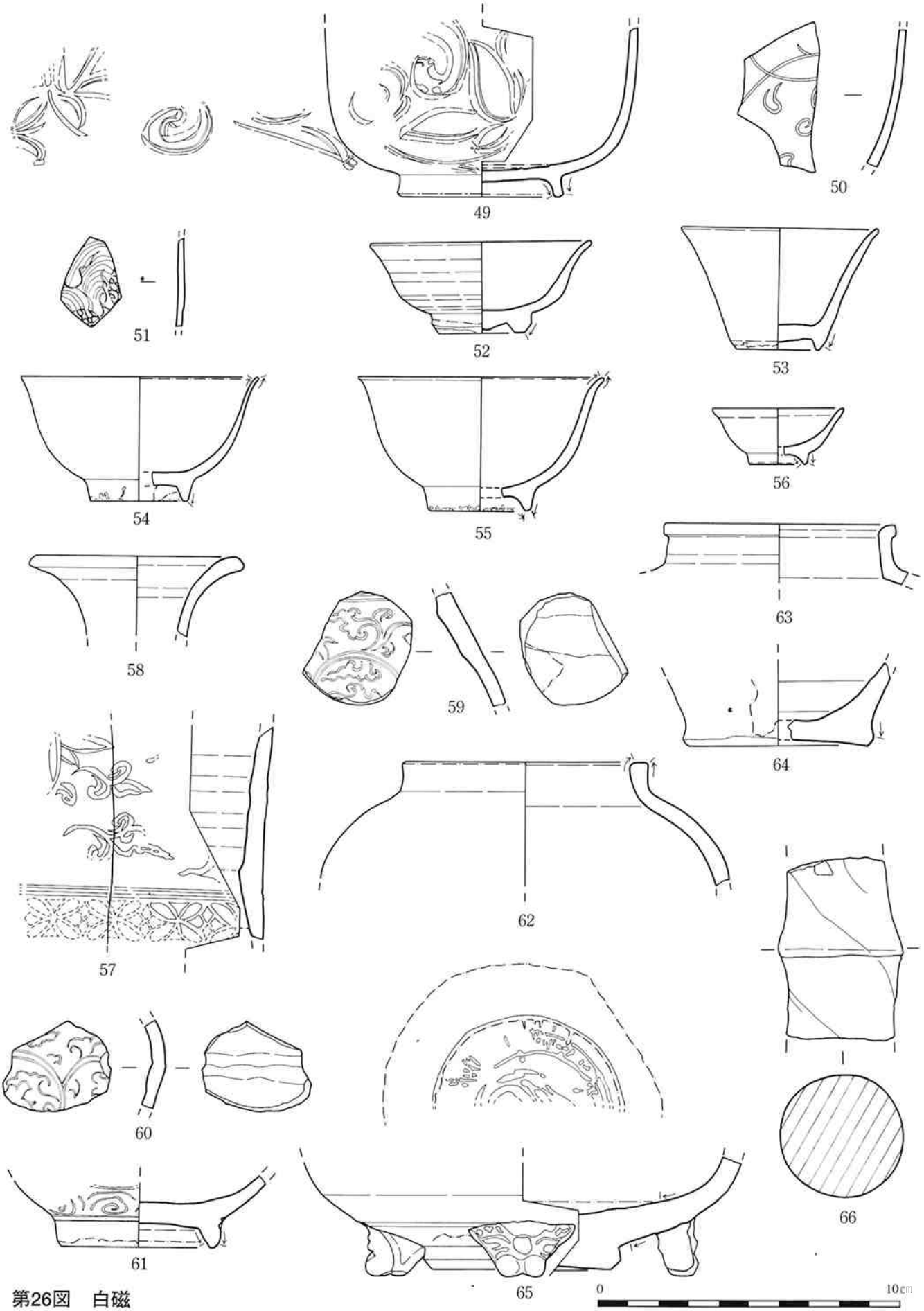
註[5] 後藤茂樹編集　佐藤雅彦　『世界陶磁全集13』「遼・金・元」1981



第24図　白磁


22
23
25
26
28
24
27
29
30
31
32
33
34
38
41
36
39
42
35
40
43
37
47
44
48
46
45
0
10cm

第25図　白磁



第26図　白磁

第３節　青花

第27図～第31図である。主体をなす器種は碗であり、皿、瓶などが伴う。今回は紙幅の都合で割愛せざるを得ないものが多く、その中から特徴的なものを抽出している。そのため細分類は行っておらず、編年的な構成等を正確に反映し得ない点はご了承いただきたい。以下、特徴等を記すが、個々の詳細は観察表で述べる。

碗は第28図１～27である。うち、同図23～27は小碗である。文様は１・２の花鳥文、３８の芭蕉文などがある。５・６は福建・広東系の碗で、釉色や呉須はくすんだ色で発色が悪く、素地も黄褐色を呈する。

皿は第27図６、29図、30図13・14である。今回は便宜的に小皿：10cm前後、中皿：15～20cm、大皿：20cm以上とした。１～７は小皿である。１・２は碁笥底をなし、７は他よりも深い器形をなす。中皿は８～15である。11は変形ひねり皿の特異な器形である。大皿は27図６、29図16・17、30図13・14である。16は口径は不明であるが、文様の展開から考えて大皿に含めてよいと思われる。第30図13は芙蓉手の大皿である。

鉢は第30図１～12。８・９は輪花鉢で、類例1)からみると15世紀中葉に位置づけられ、松竹文及び雲文などを施す。ただし、８は図示したものよりも若干開く器形になることも考えられる。11・12は厚手で福建・広東系である。盤は第27図５である。

小杯は第28図28～30である。八角杯である。高足杯は第27図７である。京の内（同図８）からも出土しており、両者を比較したところ同一固体であることが分かったため、これに準じて復元した。

瓶は第31図３～６、12・13・18である。６は梅瓶で類例をもとに数固体分から復元。18は大花瓶で同じく数固体からなる破片を京の内出土の資料（『京の内』第64図57）をもとに推定復元した。水注は同図14で注口の部分である。火焔文を施し、さほど大きくないことから小型の水注と思われる。壺は同図１・２である。いずれも肩部である。また、同図７～11は瓶か壺か不明なものをまとめた。うち、10・11は壺の底部の可能性がある。　合子は第27図１～４で、１は蓋、２・３は身、４は底部付近である。京の内からも同様な資料（『京の内』第56図）が出土しており両者を比較したところ、近似する文様構成、素地であったことから、同一固体、もしくは類似した資料であると思われる。

蓋は第31図15～17である。15・16は水注、17は瓶の蓋と思われる。

１）中沢富士雄・長谷川祥子編『中国の陶磁８　元・明の青花』（平凡社）所収の青花松竹文輪花鉢（大阪市立博物館蔵）、口径25.8cm。

第９表　青花観察表

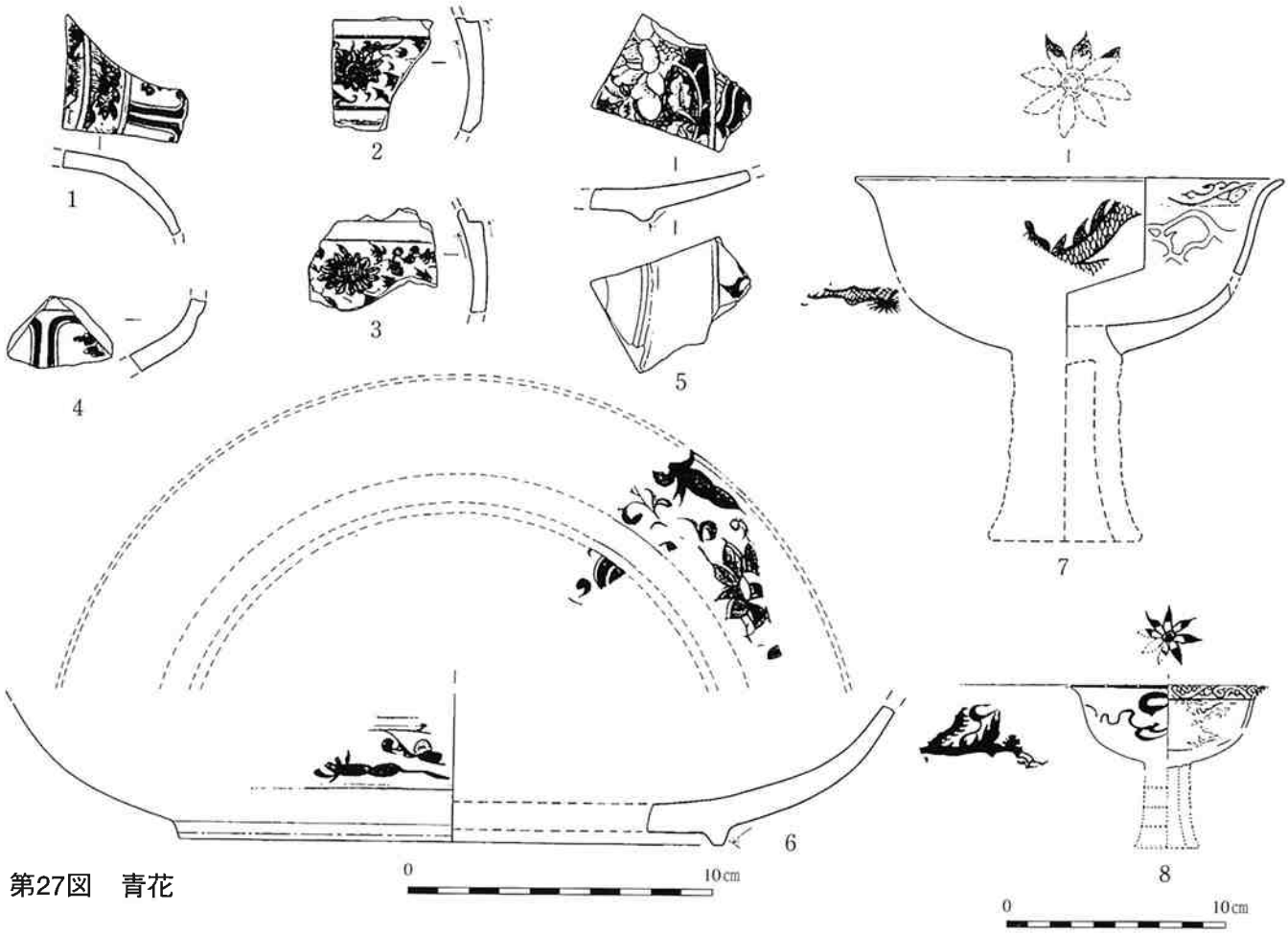
図版番号		器種	計測値（cm）			出土地区		文様・器形
			口径	底径	器高	地区	グリッド等	
27図	1	合子				下之御庭 木曳門		波涛文と松樹文の一部及びラマ式蓮弁文。外面は被熱により若干あばた状。１～４まで京の内資料（第56図）に類似する。
	2					木曳門		花文及び唐草文。外面は被熱により若干あばた状。
	3					漏刻門	M3－125埋土	花文及び唐草文。内外は被熱によりあばた状。
	4					木曳門		ラマ式蓮弁。内外とも被熱によりあばた状。
	5	盤				用物座	K6－128	外面は圏線及び不明の文様（花文？）。内面に花文。
	6	皿		25.4		木曳門	K10－133 L3－134 L7－131	大皿、比較的厚手。内外とも圏線及び草花文。被熱によりあばた状。
	7	高足杯	14.2		11.8	木曳門		外面に龍文。内面は蔓唐草文、見込に花文。同図８（京の内出土）をもとに復元。見込の花弁は８の残欠部分。被熱によりあばた状。
28図	1	碗				用物座		外面に花鳥文。内面に圏線２条。呉須の発色はやや悪く滲んだ感じ。直口口縁。17世紀。
	2			5.6		木曳門	L6･7－130	高台に圏線。見込に花鳥文。呉須の発色は良い。直口口縁。
	3		12.6			木曳門	L9－133	外面は上位に波涛文、下位に芭蕉文。内面は圏線１条。直口口縁。呉須の発色は良い。15世紀後半～16世紀前半。
	4					下之御庭		外面は上位に波涛文、下位に芭蕉文。内面は圏線１条。直口口縁。呉須の発色はやや淡い。15世紀後半～16世紀前半。
	5			5.9		木曳門	L10－164	外面に芭蕉文、高台に圏線。内面に花文。呉須の発色はやや淡く、黄褐色の素地が透ける。15世紀後半～16世紀前半。福建・広東系。
	6			5.7		木曳門	L4－130 L5－131	外面に芭蕉文、高台に圏線。内面に花文。呉須の発色は悪く暗青色を呈し、黄褐色の素地が若干透ける。15世紀後半～16世紀前半。福建・広東系。
	7			5.1		廣福門	北西	外面に芭蕉文、高台に圏線。内面に巻貝文。見込みを蛇の目釉剥ぎ。呉須の発色は悪く、灰青～暗青色を呈する。福建・広東系。15世紀後半～16世紀前半。

第10表　青花観察表

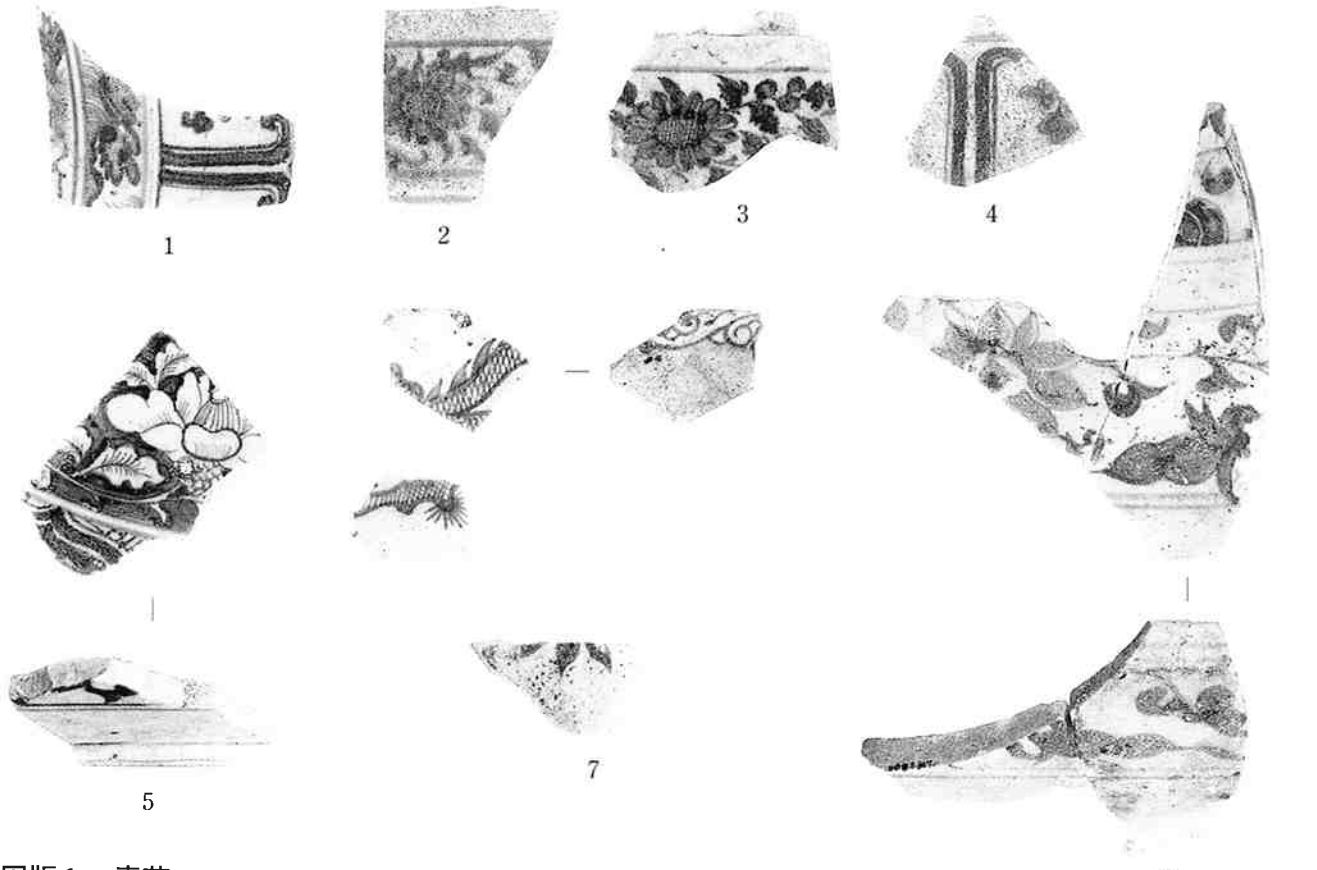
図版番号		器種	計測値（cm）			出土地区		文　様・器　形
			口径	底径	器高	地区	グリッド等	
28図	8	碗		4.9		用物座	L6−128	外面に芭蕉文、高台に圏線。内面に不明の文様。呉須の発色は悪く淡青〜暗青色を呈する。素地は淡褐色で透ける。15世紀後半〜16世紀前半。
	9			5.5		**木曳門** 用物座	L7−130 L4−128	外面アラベスク文。内面巻貝文、圏線。呉須の発色は悪く、淡青色。素地は淡褐色。福建・広東系。
	10		13.4			木曳門	L6−130･131	外面は上位に圏線及び花文、下位にアラベスク文。内面上下に圏線。呉須は発色が悪く薄墨色、釉色もやや褐色がかっている。素地は淡褐色。直口口縁。15世紀末〜16世紀中。福建・広東系。
	11		12.6	6.2	5.4	下之御庭		外面は寿字文、圏線、蓮弁文、外底面に「和美」。内面は上下に圏線、見込み丸文。呉須の発色は弱く、淡青色。直口口縁。18〜19世紀前半。
	12			7.0		廣福門	北西	外面は草花文、蓮弁文、圏線。内面は圏線。呉須の発色は良く、濃青色。
	13			7.4		下之御庭		外面は寿字文？、圏線、蓮弁文、外底面に圏線と「和美」？。内面は圏線、見込に不明の文様。呉須の発色は良く、濃青色。
	14					廣福門	北西	外面は瑞雲、丸文を圏線で挟む。内面は圏線２条。呉須の発色は良く、明るい青色。口縁は外反。
	15		13.0			漏刻門	M4−124埋土	外面は人物文。内面は四方襷文。呉須の発色は良いが、若干滲んだ感じ。口縁は外反。
	16		12.2			木曳門	L4−131	外面は圏線間に宝帯文、宝珠唐草文。内面は圏線間に不明の文様。口縁は外反。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱により若干あばた状、口縁の破片は被熱の際に付着？
	17					木曳門		外面は松葉文。内面は四方襷文。呉須の発色は良く、濃青色。口縁は緩く外反。16〜17世紀。
	18		14.6			下之御庭		外面は圏線、花文、唐草文。内面は上下に圏線２条。呉須の発色は良いが、滲んだ感じの青色。直口口縁。18世紀。
	19		14.0			木曳門	M1−141	外面は圏線、唐草文、蓮弁文。内面は下に圏線２条。呉須の発色は良いが、滲んだ明るい青色。口縁は外反。
	20		13.0			廣福門	北西	外面は圏線、花文、唐草文。内面は上下に圏線２条及び唐草文。呉須の発色は良く、線も明瞭、明るい青色。
	21			5.6		木曳門	M0−143	外面に花弁、圏線。外底面に圏線、印。見込に花文、唐草文及び圏線。呉須の発色は良く、線も明瞭、明るい青色。
	22			4.6		木曳門		外面に圏線と不明の文様。見込に圏線、外底面に「太明成化年製」銘。呉須の発色は良く、淡い青色。被熱により若干あばた状。
	23					用物座	L1−122	小碗。外面に圏線と不明の文様。内面に圏線。呉須の発色はやや弱く、淡青色。腰折碗。
	24			4.6		木曳門		小碗。外面に竹文、草花文。見込に花鳥文。呉須の発色は良く、淡い青色。被熱であばた状。17世紀。
	25			5.4		木曳門	L4−130	小碗。外面に圏線と不明の文様。内面に圏線、唐草文。
	26		9.4			木曳門		小碗。外面に圏線と梅花文。内面に圏線。呉須の発色は弱く、灰色がかった青色。被熱により僅かにあばた状？
	27			4.2		下之御庭		小碗。外面に唐草文。外底面に印。呉須の発色は良く、明るい青色。
	28	小杯	4.0	2.0	2.1	漏刻門		外面に格子文。呉須の発色は悪く、滲んだ淡青色。外底面に砂目。直口口縁。
	29		5.3	2.8	3.7	下之御庭		外面に圏線、童子文。内面に圏線、丸文。呉須の発色は良く、青色。直口口縁。
	30		6.0			木曳門	M9−150	角杯。外面に花文、区画文。内面に圏線１条。呉須の発色は良く、濃い青色。外反口縁。
29図	1	皿		3.5		木曳門		碁笥底の小皿。外面は芭蕉文。内面は圏線及び草花文。呉須の発色は良く、淡青〜濃青色。16世紀。
	2			3.2		木曳門		碁笥底の小皿。外面は芭蕉文。内面は圏線及び草花文。呉須の発色は弱く、淡灰色。16世紀。
	3		11.8	6.8	2.3	木曳門		小皿。外面は圏線１条。内面は上位に四方襷文、見込に草花文。呉須の発色は良く、青色。外底面に砂目。被熱によりあばた状。直口口縁。
	4		9.8	6.0	2.4	木曳門		小皿。外面は圏線１条。外底面に不明の印。内面は上位に四方襷文、見込に草花文。呉須の発色は良く青色。外底面に砂目。被熱により若干あばた状。直口口縁。
	5		11.2	6.4	2.5	木曳門		小皿。外面は圏線１条。内面は上位に四方襷文、下位に圏線２条、見込に草花文。呉須の発色は弱く、淡青色。外底面に砂目。直口口縁。
	6		10.3	2.5	6.2	木曳門	M1･9−150	小皿。外面は圏線２条、牡丹唐草文。内面は圏線２条と景色。呉須の発色はやや悪く、暗い青色。直口口縁。16〜17世紀前半。
	7		11.0	5.4	3.7	木曳門		小皿。外面は圏線１条。内面は上位に四方襷文、見込に圏線と「禄」の銘。呉須の発色はやや悪く、淡い灰青色。外底面は砂目。被熱により若干あばた条。やや深い器形をなす。
	8			10.9		用物座		中皿。内外面とも圏線及び唐草文。呉須の発色は良く、明るい青色。被熱？。口縁は外反。
	9		17.7	10.0	4.0	下之御庭 用物座		中皿。外面は圏線及び宝相華唐草文。内面は圏線及び四方襷文、見込は波涛文帯及び宝文。呉須の発色は良く、線も明瞭、明〜淡青色。15〜16世紀。
	10		15.4	9.4	2.8	木曳門	M1−146 M1−147	中皿。外面は圏線。内面は圏線及び園亭図。見込に「志在書中」銘。呉須の発色はやや悪く、滲んだ感じの青色。口縁は僅かに外反。18世紀。
	11		20.1	8.2	2.8	下之御庭 廣福門	廣福門北西	中皿。外面は唐草文。内面は唐草文及び宝文。呉須の発色は良く、青色。被熱によりあばた状。ひねり変形皿。
	12			8.8		木曳門		中皿。外面は圏線、外底面は圏線及び不明の文字。内面は圏線及び草花文。呉須の発色は良く、濃い青色。
	13			11.0		木曳門		中皿。外面は圏線。内面は圏線及び園亭図。呉須の発色は良く、濃い青色。外底面に砂目。被熱によりあばた状。17世紀。

第11表　青花観察表

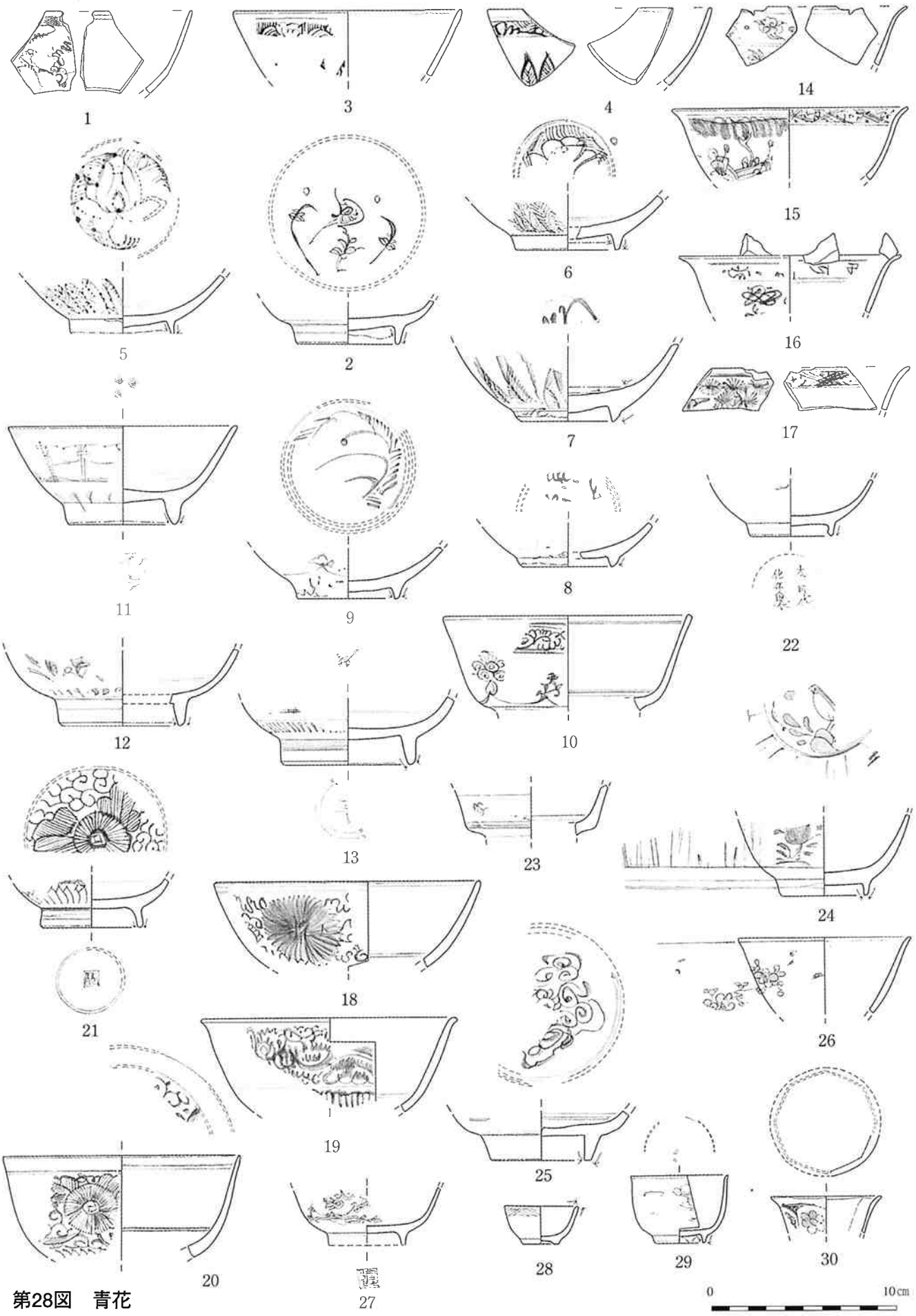
図版番号		器種	計測値（cm）			出土地区		文様・器形
			口径	底径	器高	地区	グリッド等	
29図	14	皿	18.8	9.9	3.1	木曳門	L10−164	中皿。内外とも陰刻蓮弁及び草花文。呉須の発色はやや悪く、滲んだ感じの青色。輪花皿。
	15		20.4			木曳門		中皿。口唇に圏線。内面は芙蓉文。呉須の発色は弱く、淡い青色。被熱により若干あばた状。直口口縁。17世紀。
	16					木曳門	L7−133 L8−132	大皿。見込に龍文。呉須の発色は良く、若干灰色がかった青色。文様の展開から勘案して大皿と思われる。
	17			16.4		廣福門	M1−118 M1−117	大皿。高台に圏線。見込に花文。呉須の発色は良く、明るい青色。被熱によりあばた状。
30図	1	鉢				下之御庭 用物座	L6−122	外面は口縁に雷文帯、下位に八宝唐草文。内面に圏線及び蜀葵文。呉須の発色は良く、線も明瞭、明るい青色。直口口縁。
	2		17.8			用物座 廣福門	K5−122、 廣福門北西	外面は口縁に圏線、胴部に八宝唐草文。内面に圏線及び蜀葵文。呉須の発色は良く、線も明瞭、明るい青色。直口口縁。
	3		23.2	9.0	9.5	用物座 廣福門	K9−124、L7−122、 廣福門 東西ミゾ	外面は口縁と高台に圏線、胴部に八宝唐草文、内面は口縁と見込に圏線。見込に花文？。呉須の発色はやや弱く、淡い青色。口縁は僅かに外反。
	4			5.8		用物座 廣福門	L6−122 廣福門北西	外面は唐草文及び高台に圏線。内面は見込に捻花、宝珠変形帯文などを密に施す。呉須の発色はやや弱く、淡い青空。被熱？
	5		23.4			木曳門		外面は山水文及び圏線。内面は上下に圏線。呉須の発色はやや弱く、滲んだ感じの青色。直口口縁。17世紀。
	6		16.8	7.0	6.5	木曳門		外面は上位に唐草文、下位に草花文及び鳥文からなる水禽図、高台に圏線。内面は上下に圏線。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱によりあばた状。直口口縁をなす。17世紀。
	7		23.8	10.4	9.0	木曳門		外面は草花文及び鳥文からになる水禽図、口縁及び高台に圏線。内面は上下に圏線。見込は不明の文様。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱によりあばた状。17世紀。
	8					用物座	L0・1−124	外面は蓮華文及び圏線。内面は上位に四方襷文、下位に松梅文。呉須の発色は良く、濃い青色。輪花鉢。
	9					下之御庭 用物座	L3−124	外面は松樹文、雲文、雷文帯？、高台に圏線。内面は竹文、草文？、圏線。呉須の発色は良く、明るい青色。
	10					木曳門	M0−144	外面は不明の文様。内面は圏線。見込は蛇の目釉剥ぎ。呉須の発色は弱く、淡い青色。器厚はかなり厚手。
	11			13.9		木曳門	M1−143	外面に不明の文様の一部、高台に圏線。見込に圏線及び印刻、「萬」の銘。 見込は蛇の目釉剥ぎ、重ね焼きの溶着。呉須の発色は弱く、淡く青緑色。福建・広東系。
	12			12.6				器厚は厚手。外面に丸文、内面に圏線、見込に丸文。見込は蛇の目釉剥ぎ、重ね焼きの痕あり。呉須の発色は悪く、暗い青色。福建・広東系。
	13	皿	40.0	18.6	10.5	木曳門		大皿。外面は圏線？。内面は芙蓉手。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱？
	14		28.9	18.0	6.0	用物座 廣福門	L9−126 廣福門北西	大皿。外面は口縁に渦文、下位に唐草文。内面は口縁に四方襷文、見込に渦文、山水文。呉須の発色は良く、濃い青色。すかし皿。18〜19世紀。
31図	1	壺				用物座	L0−125	外面に圏線及び花唐草文。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱によりあばた状。
	2					下之御庭		上位にラマ式蓮弁文。下位に如意頭文の区画内に花唐草文及び鳳凰文。呉須の発色は良く、やや濃い青色。
	3	瓶				用物座	L3−124	人物文。呉須の発色は弱く、淡い青色。被熱によりあばた状。錆？が多量に付着する。
	4					木曳門		馬文。呉須の発色はやや悪く、滲んだ感じの青色。被熱により若干あばた状、緑青が付着。厚手であることから、大型瓶の可能性もある。
	5					廣福門	北西	外面に松樹文。呉須の発色は良く、線も明瞭、明るい青色。
	6					用物座 廣福門 木曳門	K6−123 廣福門北西	ラマ式蓮弁、如意雲、圏線、唐草文及び龍文。呉須の発色は良く、青色。被熱により若干あばた状。数固体分から類例資料をもとに推定復元。梅瓶と考えられる。
	7	壺・瓶				下之御庭	L7−121	圏線及び不明の文様（ラマ式蓮弁？）。呉須の発色は良好で濃い青色。
	8					用物座	K6−128	ラマ式蓮弁。呉須の発色は良く、濃い青色。
	9					廣福門	L10−121	ラマ式蓮弁、圏線及び唐草文。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱により若干あばた状。
	10					用物座	L7−121	ラマ式蓮弁及び如意頭文。呉須の発色は弱く、淡い青色。壺の底部？
	11					木曳門		ラマ式蓮弁？。呉須の発色は良く、濃い青色。壺の底部？
	12	瓶				木曳門		草花文及び人物文。呉須の発色は良好で、濃い青色。被熱により若干あばた状。
	13			7.6		用物座 木曳門	K9−123・125、 L0−129	高台に櫛歯状文及び不明の文様（草花文？）。呉須の発色は良く、濃い青色。角瓶。
	14	水注				木曳門	L3−129	注口部分。火焔文。呉須の発色はやや弱く、淡い青色。被熱により若干あばた状。
	15	蓋				用物座	L8−122	草花文。呉須の発色は良く、濃い青色。被熱により若干あばた状。水注の蓋？
	16		4.8			木曳門	L7−148	草花文？。呉須の発色は良く、青色。被熱により若干あばた状。水注の蓋？
	17					木曳門		圏線及び宝文？。呉須の発色は弱く、淡い青色。梅瓶の蓋？
	18	瓶	13.9	11.0	41.2	下之御庭 用物座	L3−124 L1−123 K0−124	口縁に如意雲文、頸部に芭蕉文、獅子頭、唐草文、胴部に松樹文、高台に圏線。呉須の発色はやや悪く、滲んだ感じの青色。京の内例（第64図57）を参考に数固体分から復元。一部破片は煤が多量に付着する。



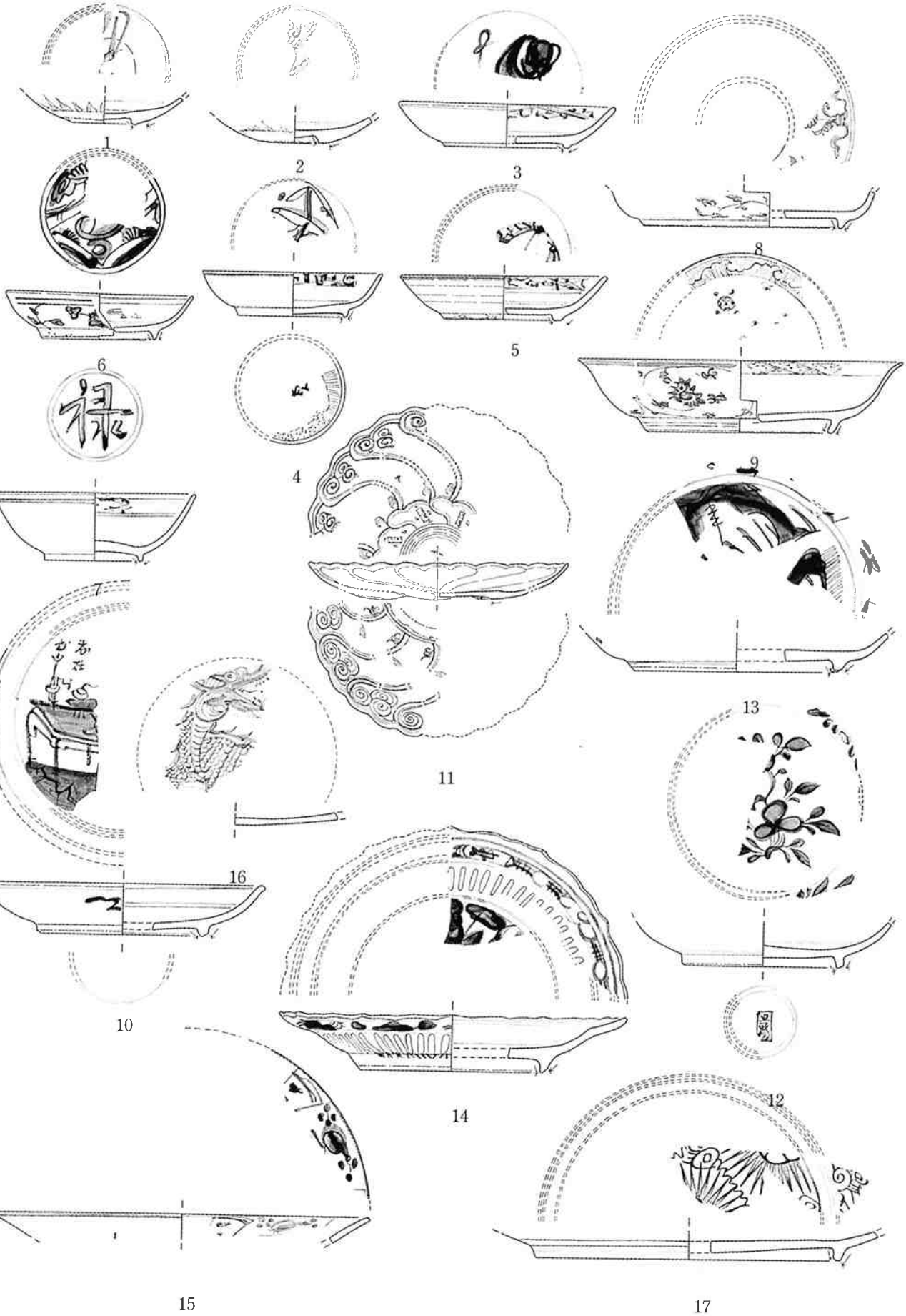
第27図　青花



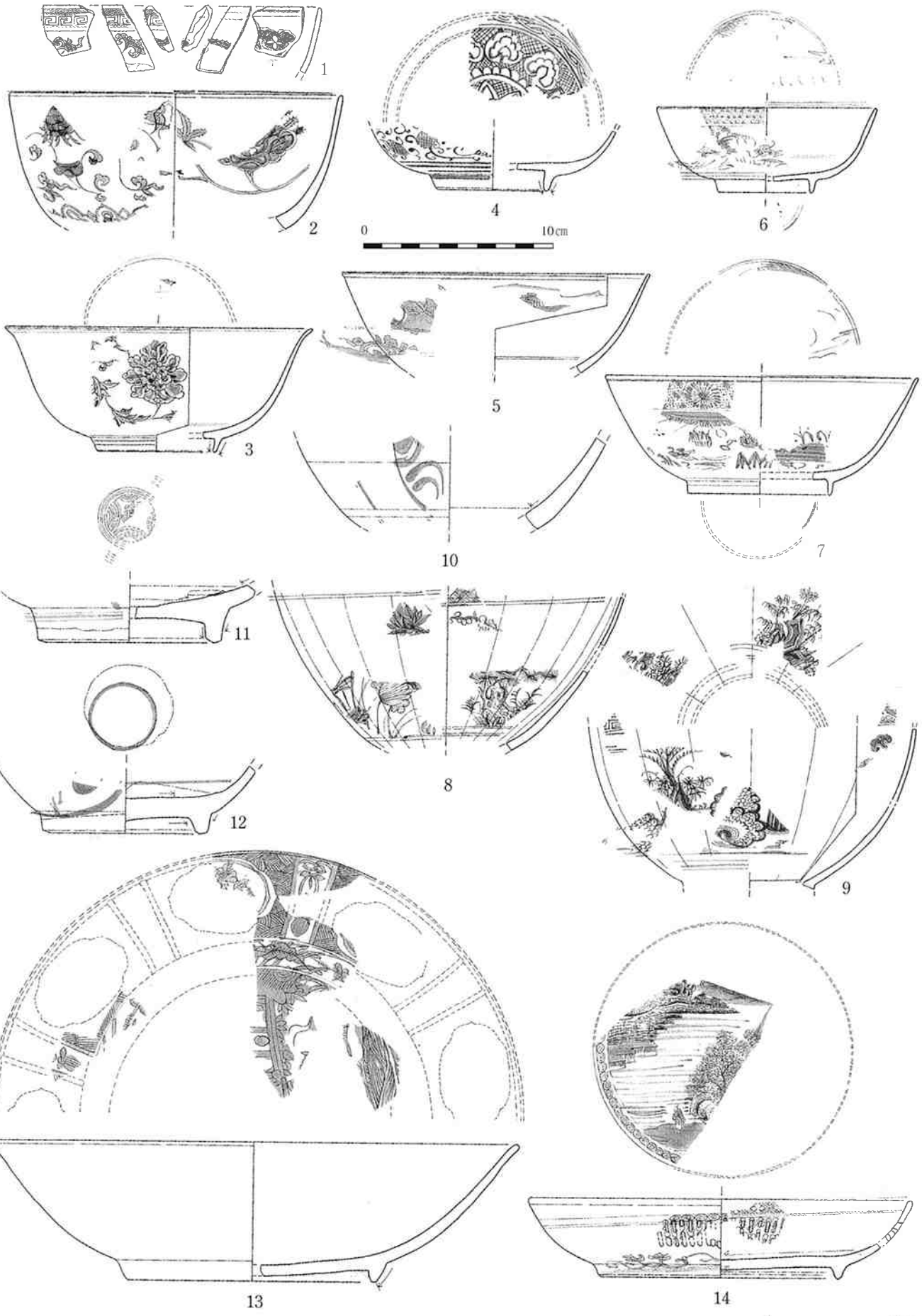
図版１　青花


1
3
4
14
15
6
16
5
2
7
17
11
9
8
22
12
10
13
23
24
21
18
26
19
25
20
27
28
29
30
0
10cm

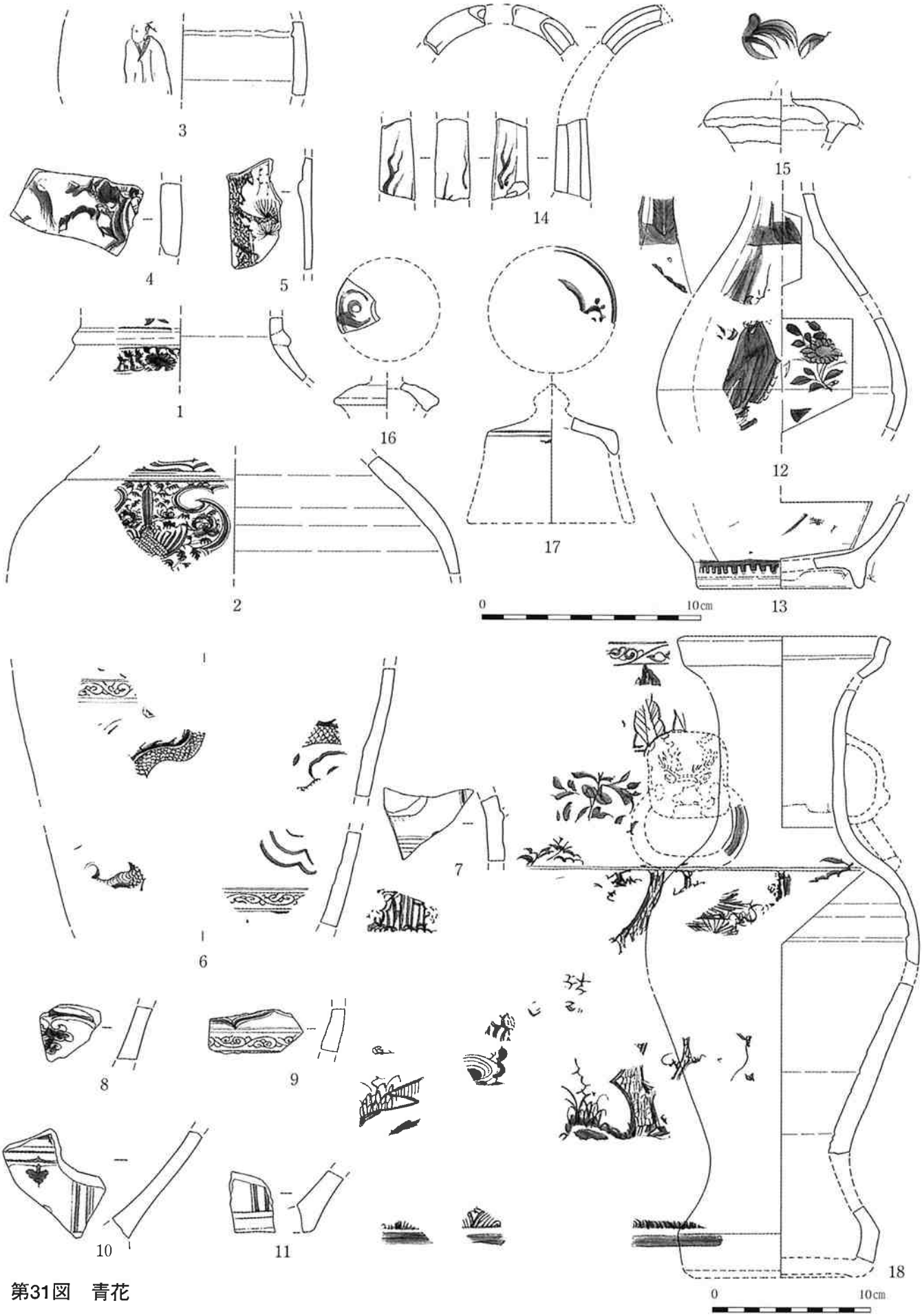
第28図　青花



第29図　青花



第30図　青花



第31図　青花

第４節　瑠璃釉

今回の調査で瑠璃釉の破片資料が検出された。確認された器種は碗・小杯・水注・壺・瓶の５器種であった。以下、特徴的な資料を図化し、個々の特徴等について記述する。

碗（第32図１～２）

第32図１は、胴部を逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁部を微弱に外反させる碗である。外面に藍濁色の釉を施し、内面には淡青白色の釉を施している。素地は白色の微粒子。推算口径は13.6㎝である。広福門地区西出土。同図２は直口口縁と思われ、器壁はかなり厚めである。皿としても考えられるが今回は碗として扱った。外面には藍濁色の釉を施し、内面には青白色の釉を施す。外面口縁直下には上絵による蓮弁文が確認できる。素地は白色の微粒子。推算口径は12.4㎝である。木曳門地区出土。

小　杯（第32図３）

同図３は型成形の小杯で、中国徳化窯産と思われる資料である。外底面に型じわが確認できる。外面に藍濁色の釉を、内底面には淡青白色の釉を施しており、両面とも二次的な被熱を受け変色してる。口径は4.0㎝、器高1.8㎝、高台径1.8㎝。木曳門地区出土。

水　注（第32図４～11）

蓋（第32図４）

同図４は仙盞瓶の蓋である。蓋甲頂部には宝珠状の摘みを貼り付け、蓋縁を下方に折り曲げ下端部に削りを加え平坦気味に成形する。蓋内面は首里城跡京の内出土の紅釉水注と同様に、中空で逆「ハ」の字状の突起を貼り付ける。外面は鍔端部から摘みまで藍濁色釉を比較的厚く施しており、内面は露胎のままである。素地は灰白色の微粒子。最大径は7.4㎝、最小径は3.0㎝である。木曳門地区出土。

注　口（第32図５～６）

同図５、６は注口の根元部分である。いずれの資料も二次的な被熱を受け変色している状況で、筒状の注口下方には浮文による獣面文が型合わせにより成形されているが、厚い釉が施され判然としない。藍色の釉を外面に厚く施している。内面には青白色の釉を施すが、一部には露胎となる部分が確認できる。素地は灰白色の微粒子である。前者が木曳門地区、後者が下之御庭地区出土。

胴　部（第32図７）

同図７は仙盞瓶か瓶の胴部と思われる。資料の中央部には積み痕も確認できる。外面には藍濁色の釉を、内面には青白濁色の釉を施す。素地は淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕。木曳門地区出土。

高　台（第32図８～11）

同図８は仙盞瓶の高台破片資料である。高台内刳りは深く、「ハ」の字状に成形。藍色の釉を高台外面まで厚く施す。内面及び外底面には青白色の釉を施すが、畳付は露胎。素地は灰白色の微粒子。高台径は8.2㎝。下之御庭地区出土。同図９は水注の高台と思われ、高台内刳りはやや浅く、「ハ」の字状に成形する。藍濁色の釉を高台外面まで厚く施し、内面及び外底面には青白色の釉を施す。畳付は露胎。素地は淡灰白色の微粒子。高台径は6.4㎝。下之御庭地区出土。同図10は仙盞瓶の高台と思われ、外面胴部には上絵による「ハート」型の文様が見られる。高台内刳りは浅く、「ハ」の字状に成形する。藍色の釉を高台外面途中まで、外底面は畳付以外に淡青白色の釉を、内面には青白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子。高台径は9.2㎝である。木曳門地区出土。同図11も仙盞瓶の高台と思われ、高台内刳りは比較的深い。外面胴部には「ハート」型の陽蓮弁の花弁状の文様が見られる。外面に藍色の釉を厚く施し、内面及び外底面には青白色の釉を施し、畳付及び外端部は露胎。胴部外面に文様等は確認できない。素地は灰白色の微粒子である。高台径は9.0㎝である。下之御庭地区出土。

酒会壺（第32図12）

酒会壺の蓋が確認されている。蓋甲頂部には宝珠状の摘みがあったものと思われるが破損しており判然としない。鍔端部は比較的広めに成形されている。身受けの突起は微弱に内傾し、畳付両端を斜位に削り取る。外面には厚めの釉を縁端部まで施し、内面には青白色の釉を身受けの突起内側まで施している。また蓋甲部の全面には下向きのラマ式蓮弁を金箔により色絵で表現している。素地は灰白色の微粒子である。最大径20㎝、最小径13.6㎝である。広福門地区出土。

瓶　（第33図13～17）

同図13は口縁・胴部・底部の破片資料を積極的に復元した小型瓶の資料である。外面は藍色の釉を施し、内面は青白色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。推算された口径は4.2㎝、器高は21㎝、底径6.2㎝である。木曳門地区出土。

口　縁（第33図14）

同図14は瓶の口縁である。外面は藍色の釉を施し、内面は青白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子である。推算口径は6.8㎝である。下之御庭地区出土。

頚　部（第33図15）

同図15は瓶の頚部資料である。内面には積み痕が確認できる。外面は藍色の釉を施し、内面は青白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子である。下之御庭地区出土。

肩　部（第33図16）

同図16は瓶の肩部であると思われる。内面には轆轤痕もしくは調整痕が確認できる。外面は藍色の釉を施し、内面は青白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子である。木曳門地区出土。

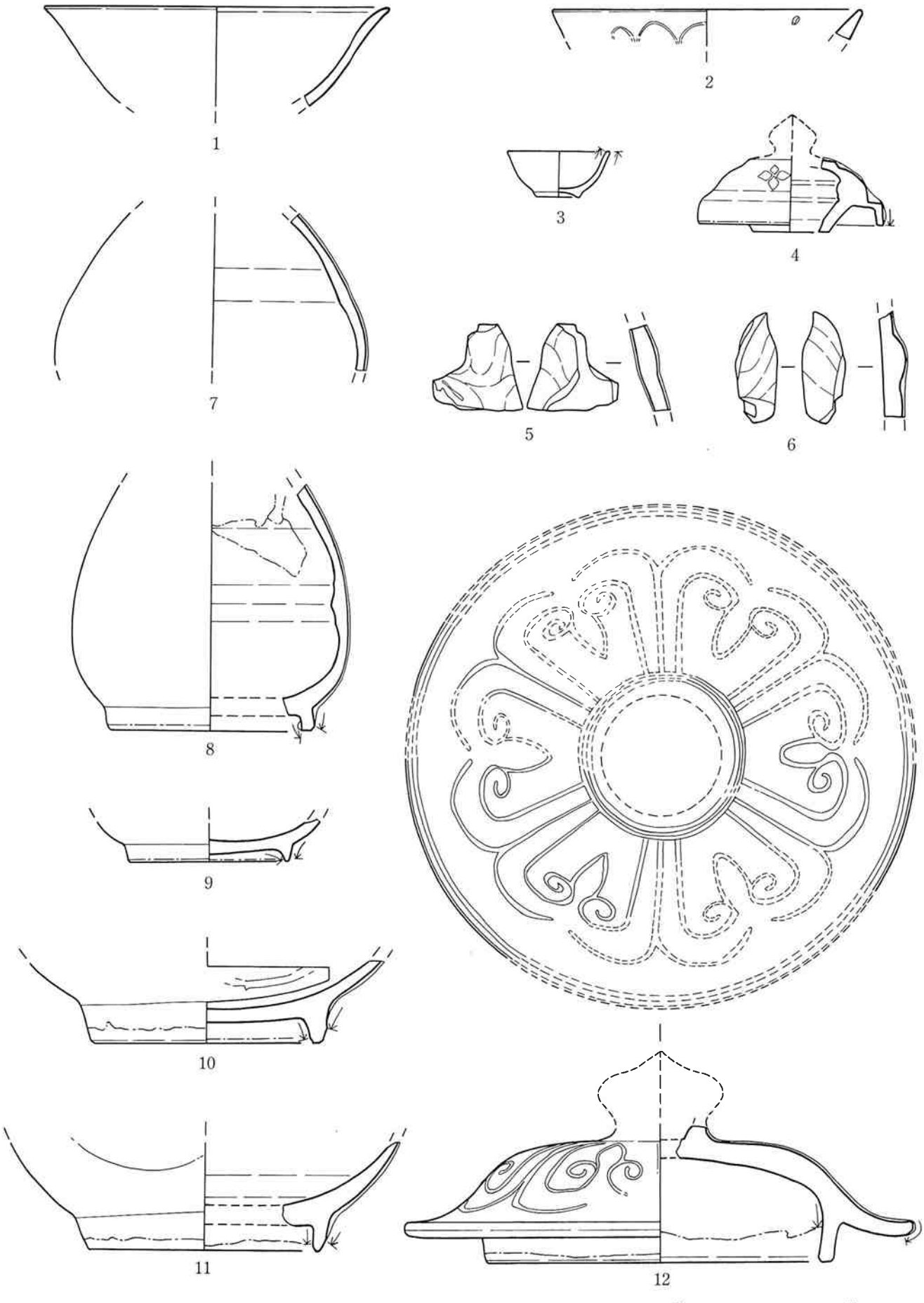
同図17は大型の瓶を積極的に復元した資料である。外面の胴下部にはラマ式蓮弁文様が上絵により表現されている。内面には轆轤痕もしくは調整痕が確認できる。藍濁色の釉を畳付外端まで施し、内面は青白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子である。推定された器高は30.9㎝、底径は10㎝である下之御庭地区・用物座地区・広福門地区西出土。

第5節　紅　釉

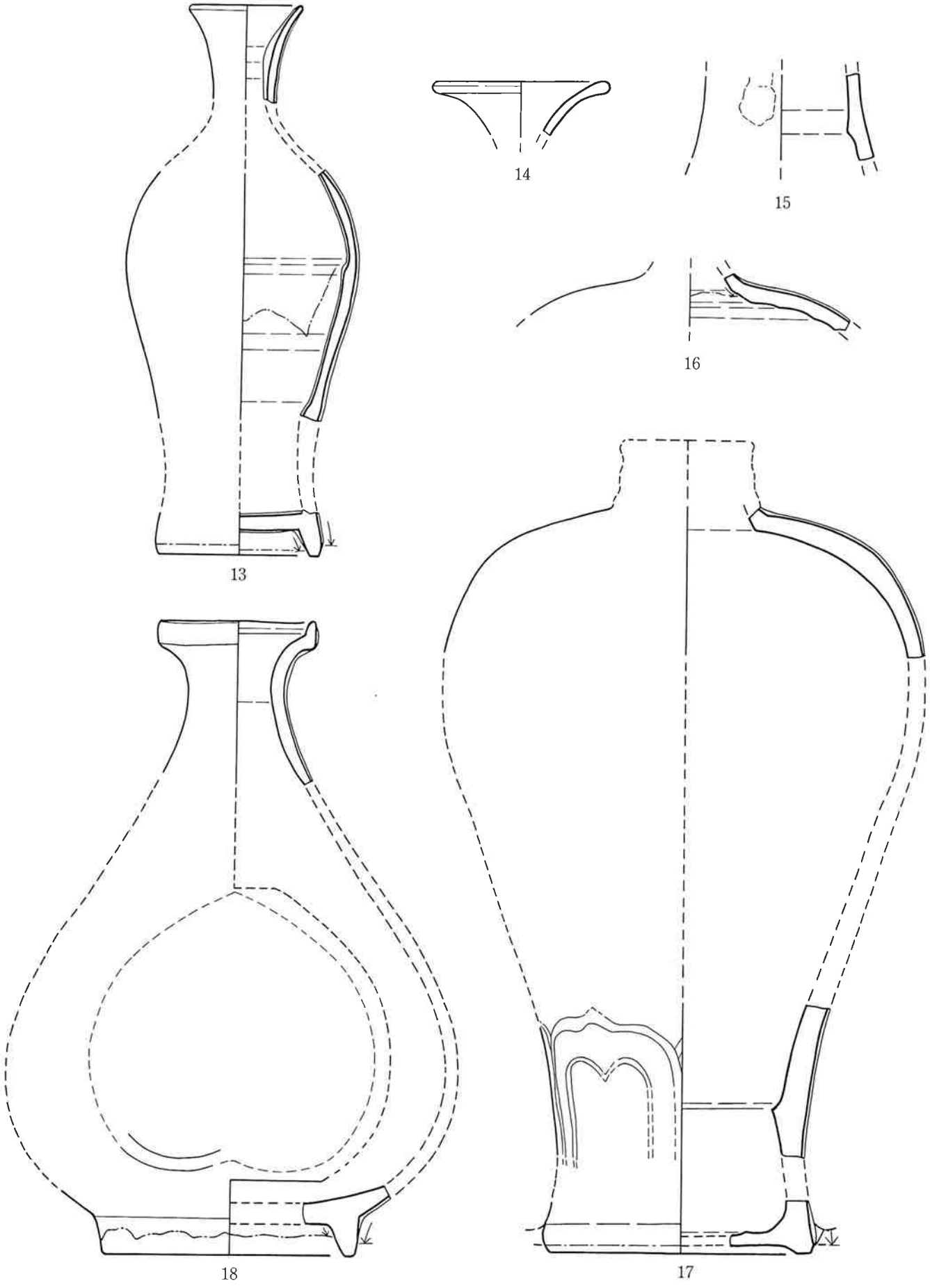
今回の調査により紅釉の破片資料が得られている。首里城跡京の内地区の発掘調査にて確認された、中国元代の紅釉水注と同一個体であるものと判断される資料である。

今回、推定復元した資料は、京の内地区において検出された資料とは、若干器形が異なるが、接合等を試みて詳細な検討を加えることにより、紅釉水注の本来の姿が窺い知れるものと思われる。以下に、特徴等を記すこととする。

第33図18は口縁部と底部の破片資料を積極的に復元した資料である。口縁部の断面形が盤口状となるものである。胴部には、高台脇から陽蓮弁の花弁を表現している。外面に赤茶色の釉を高台外面途中まで施しているが、二次的な被熱を受けているため本来の釉調は判然としない。内面には青白色の釉を施している。内外面には二次的な被熱を受けた際に付着したとみられる煤が確認できる。素地は灰白色の微粒子である。推算された口径は6.2㎝、器高は24.2㎝、底径は9.6㎝であった。広福門地区北西・木曳門地区・下之御庭地区出土。



第32図　瑠璃釉・紅釉



第33図　瑠璃釉・紅釉

第６節　中国産褐釉陶器

第34図～第39図である。今回確認できた器種は壺が主体で、わずかに甕、鉢、すり鉢、水注、急須、蓋、皿がみられる。壺は口縁部や頸部などの形態によって数パターンがみられる。壺以外の器種は個体数が少ないため分類は省略する。

１　壺

第34図（12を除く）～39図である。

今回はほとんどが撹乱層からの出土であったため、全形をうかがうことが可能な遺物が少なく器形は明確ではないが肩部から判断すると、あ：いかり肩（34図など）、い：ナデ肩（36図など）の２タイプに分けられる。

口縁部の形態は比較的バリエーションが豊富で、Ⅰ：方形（34図１～10など）、Ⅱ：丸み（35図18～22など）、Ⅲ：舌状（36図16～18）、Ⅳ：平坦（35図14～16など）の４タイプに大きく分けることができる。さらに方形のタイプは、ｉ：厚手に形成する（34図１～６など）、ii：薄手に形成する（同図７～９）、iii：微弱（35図７～９など）、の３つに細分できる。ただ、Ⅲの舌状の資料は、Ⅰ－iiiがさらに退化したものと考えることもできる。

頸部は、１：有頸（34図など）、２：無頸（36図18～28など）の２タイプに分けられる。また、有頸のものでも、①明確に頸部を形成するもの（36図１～６）、②屈曲状に形成するもの（35図７～11など）、の２つがみられる。

２　甕

小型の甕（第34図12）が１点得られた。口縁部を逆Ｌ字に形成し、口唇部は舌状をなす。黄褐色の釉を施し、器厚は比較的薄手。内面はロクロ痕が明瞭。

３　鉢（第37図１～６）は口縁部と底部が得られた。全形を伺うことができる資料はないが、サラダボウル状の器形（１・４～６）と、筒状の器形（２・３）が考えられる。同図４は底部の押し上げが大きく、深い器形になると思われる。

４　すり鉢

すり鉢は口縁部（第37図７・８）と底部（同図９）が得られた。口縁部はいずれも同様な形態で、鎌状をなす。内面の溝は浅い。底部はくびれ状をなし、外底面は平坦である。溝は浅く、単位は明瞭ではない。

５　水注

水注は口縁部から底部までの１個体分と思われる破片（第37図10）と、把手（同図19）が得られた。10は胴部に沈線を施し、蓮弁様の文様と思われる。19はしっかりとしたつくりで、大型の水注のものと考えられる。

６　急須

急須は、口縁部（第37図11・12）と注口の部分（同図13）が得られた。口縁部はいずれも「く」の字状に形成している。13は丸みを帯びた器形をなす。

７　蓋

蓋は丸みを帯びたもの（第37図20）と、平坦なもの（同図21・22）の２タイプがみられる。

８　皿

皿（第37図23）の１点である。破片から考えると角皿と思われる。底面にはボタン状で１cm程度の脚を貼付する。

９　器種不明

明らかな器種不明と、壺と思われる資料を一括した。

10　底部

底部は第38図～39図で、ほとんどは壺に含まれるものと思われる。形態によって底面、立ち上がりによって分類可能である。底面はＡ：あげ底（38図２～10）、Ｂ：平坦（38図11・12、39図13～29）、Ｃ：高台様（39図30～33）の３タイプに大きく分けられ、立ち上がりはａ：直立（38図７～10など）、ｂ：ある程度の角度を持つ（38図11・12など）、ｃ：緩く立つ（39図18など）、の３タイプに分かれる。

39図14は底部付近に「□高麗」[1]の墨書がみられる。

1）沖縄国際大学仲地哲夫先生よりご教示を頂いた。また、那覇市史料編集室田名真之氏より、『京の内』第73図11（褐釉陶器）の「明」の墨書は新しい時期に属する書体では、とのコメントを頂いた。記して感謝申し上げます。

第12表　中国産褐釉陶器

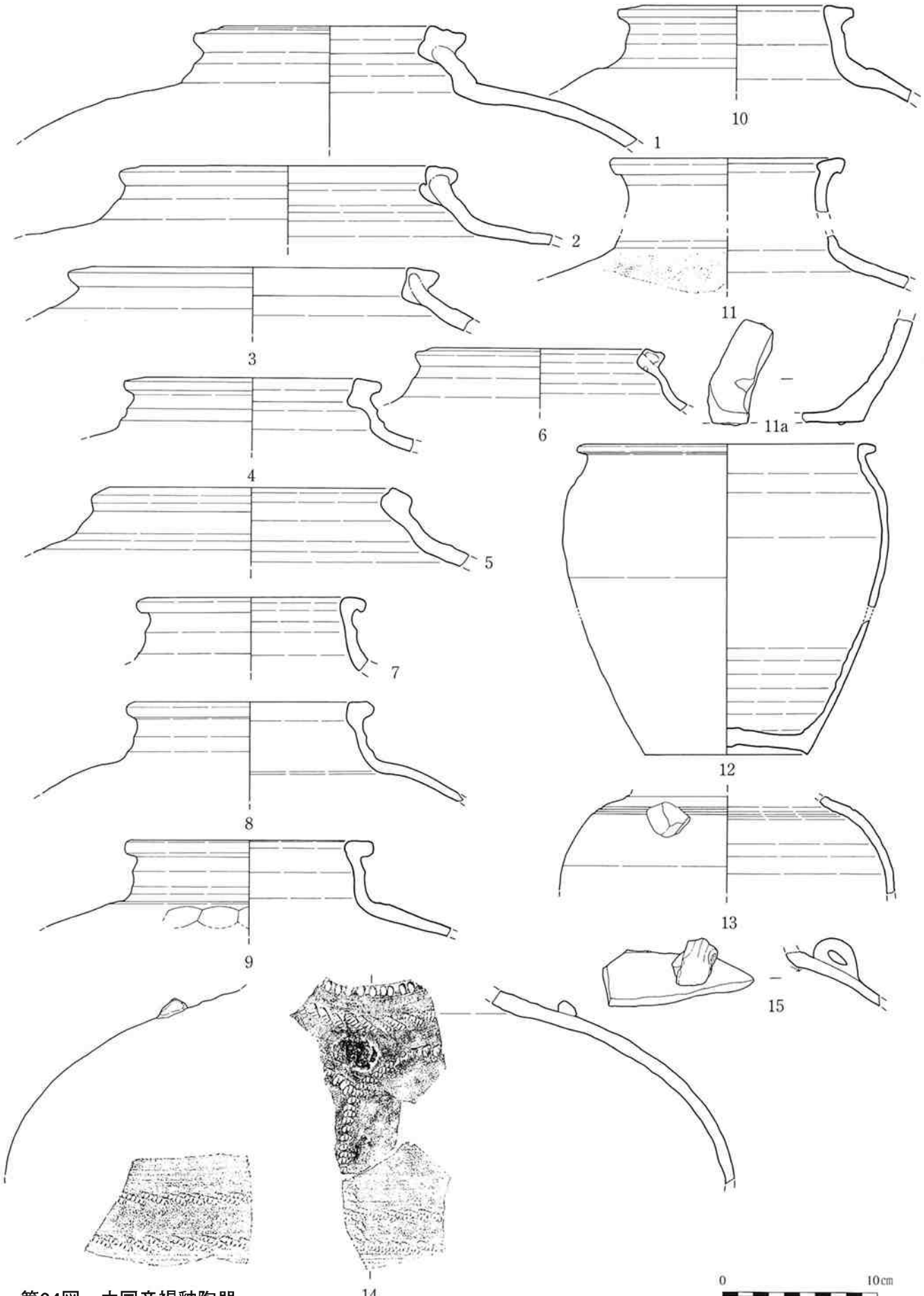
図	番号	器種	分類	計測値 口径	計測値 底径	出土地区 地区	出土地区 グリッド等	特　徴（器形、文様など）
34図	1	壺	あ、Ⅰi、1②	13.0		廣福門	北西撹乱	いかり肩の大型壺。釉色は淡暗オリーブ色。素地は灰白色で、白色鉱物を含む。
	2		あ、Ⅰi、1②	22.0		用物座		いかり肩の大型壺。釉色は暗オリーブ色。素地は灰色で、僅かに白色鉱物を含む。
	3		あ、Ⅰi、1②	24.0		試掘		いかり肩の中型壺。釉色は褐色。素地は褐色で、僅かに白色鉱物を含む。
	4		あ、Ⅰi、1②	16.7		廣福門	北西	いかり肩の中型壺。釉をやや厚く施し、色は暗オリーブ色。素地は灰色で、白色鉱物と僅かに黒色鉱物
	5		あ、Ⅰi、1②	8.0		下之御庭		いかり肩の中型壺で、頸部は穏やか。釉色は黒褐色。素地は灰色、混和材は目立たない。
	6		あ、Ⅰi、1②	13.6		木曳門		いかり肩の中型壺で、頸部は穏やか。器厚は5mm前後で薄い。釉色は淡暗オリーブ色。素地は灰白色、混和材は目立たない。
	7		あ、Ⅰii、1①	14.8		木曳門	L.8-9-140	中型壺でいかり肩をなすと思われる。釉色は淡褐色、素地は灰色で、黒色・白色鉱物を含む。
	8		あ、Ⅰii、1①	16.0		木曳門		いかり肩の中型壺。釉色は黒褐色。素地は暗灰色で、白色鉱物を含む。内面は被熱によりあばた状。
	9		あ、Ⅰii、1①	16.0		木曳門		いかり肩の中型壺で、頸部は直立。釉色は黒色。素地は灰色で、白色鉱物を含む。
	10		あ、Ⅰiii、1①	15.3		木曳門		いかり肩の中型壺で、頸部は直立。釉色は淡黒色。素地は灰色で、褐色鉱物を含む。
	11		あ、Ⅰii、1①			木曳門		いかり肩の中型壺で、頸部は直立。釉色は黒色。素地は暗灰色で、黒色鉱物を含む。肩部にタタキ痕が明瞭。素地などから同一固体と思われる。
	12	甕		18.4	10.5	木曳門	L10-160	小型の甕、器高は20.2cm。釉色は褐色で、内底面は露胎。素地はベージュ色で、白色鉱物などをわずかに含む。
	13	壺	あ			木曳門		やや肩の張る小型壺。耳を貼付、内面はロクロ痕が明瞭。釉色は淡緑灰色。素地は黒色で、白色鉱物を僅かに含む。
	14		あ			木曳門		胴の最大径は60cm越で、かなりの大型壺。器面は黒色。縄目状の文様を2条1組で施し、耳を貼付する。素地は褐色で、白色鉱物を多く含む。
	15		あ				小学校階段下3層	やや肩の張る小型壺。耳を貼付する。釉色は褐色。素地は明褐色で、白色鉱物を多く含む。
35図	1	壺	あ、Ⅳ、1①	12.4		下之御庭	撹乱	いかり肩の大型壺。頸部は直立。釉色は暗褐色。素地は明褐色及び黒色で、白色・褐色鉱物を含む。
	2		い、Ⅰiii、1②	22.8		用物座		ナデ肩の中型壺。釉色は暗灰色、表面の一部と内面は露胎で明褐色。素地は灰色、白色鉱物を僅かに含む。
	3		あ、Ⅰii、1②	14.0		用物座		やや肩の張る中型壺。釉色は黒褐色で、表面は釉が剥落。素地は灰色、黒色・白色鉱物を含む。
	4		い、Ⅰiii、1②	11.7		不明		ナデ肩の中型壺。肩部に格子状のタタキ痕。外面に淡灰黒色の泥釉。素地は明褐色で、白色鉱物を多く含む。
	5		い、Ⅰiii、1①	21.5		用物座		ナデ肩の中型壺。無釉。素地は淡褐色で、白色鉱物を多く含む。
	6		あ、Ⅰii、1①	17.2		用物座		いかり肩の大型壺。釉色は、外面が白色、内面は褐色を呈する。素地は白色で、白色鉱物を含む。
	7		い、Ⅰiii、1②	18.6		下之御庭		ナデ肩の中型壺。釉色は褐色。素地は明褐色、白色鉱物を多く含む。
	8		い、Ⅰiii、1②	19.5		木曳門		ナデ肩の中型壺。釉色は淡褐色で、泥釉。素地は明褐色及び灰褐色、白色の微細鉱物を含む。
	9		い、Ⅰiii、1①	20.0		下之御庭		ナデ肩の中型壺で、頸部は直立。釉色は淡褐色。素地は明褐色で、白色の微細鉱物を多く含む。
	10		あ、Ⅳ、1②	20.6		木曳門		いかり肩の大型壺で、短頸壺。タタキ痕が僅かに残る。釉色はオリーブ色。素地は白色で、粗い白色鉱物を多く含む。
	11		あ、Ⅰii、1②			下之御庭		いかり肩で、サイズは不明。釉色は黒褐色、一部露胎。素地は灰色で、僅かに白色鉱物を含む。
	12		あ、Ⅳ、1②	22.0		木曳門	M0-131	いかり肩り中型壺。釉色は淡褐色で、泥釉。素地は暗灰色で、白色鉱物を多く含む。
	13		い、Ⅰiii、2	15.6		木曳門		無頸壺？。釉は剥落する（本来はオリーブ色？）。素地は灰白色で、僅かに白色鉱物を含む。
	14		あ、Ⅳ、1①	14.0		木曳門		いかり肩で中型の短頸壺。釉色は黒褐色で、表面は被熱によりあばた状。素地は灰色で、白色鉱物を多く含む。
	15		あ、Ⅳ、1①	12.4		木曳門		いかり肩で中型の短頸壺。耳を貼付（未図化）。釉色は褐色。素地は灰色で、白色の微細鉱物を含む。
	16		あ、Ⅳ、1①	16.4		木曳門		いかり肩で中型壺。釉色は暗オリーブ色。素地は灰白色で、白色鉱物を多量に含む。
	17		あ、Ⅰiii、1①	18.0		用物座		いかり肩の中型壺で、口唇部を折るように形成。釉色は暗褐色。素地は明褐色で、白色・黒色鉱物を含むが目立たない。
	18		い、Ⅱ、1①	14.0		木曳門		ナデ肩の小型壺。釉色は黒色。素地は暗灰色で、微細な白色鉱物を含む。器厚は薄手。
	19		い、Ⅱ、1①	21.3		用物座		ナデ肩の小型壺。釉色は黒色で、内面は一部露胎。素地は暗灰色で、微細な白色鉱物を含む。器厚は薄手。
	20		あ、Ⅱ、2	14.0		木曳門	L3-129	ナデ肩で中型の短頸壺。釉は剥落、一部露胎。素地は褐色で白色鉱物を含む。
	21		あ、Ⅱ、2	10.8		漏刻門		いかり肩の小型壺。白色釉を厚く施す。内面は露胎。素地は暗灰色で、混和材は目立たない。
	22		あ、Ⅱ、1②	11.0		廣福門	北西	いかり肩の中型壺。釉色は淡暗オリーブ色。素地は白色で、混和材は目立たない。
36図	1		い、Ⅱ、1①	10.2		漏刻門	M4-125	小型壺。釉色は淡褐色で、一部露胎。素地は明褐色で、粗い鉱物粒をやや多く含む。
	2		い、Ⅳ、1①	9.4		廣福門	北西、小学校階段下5層	茶壺。器厚は薄手で、かなり硬質。内面はロクロ痕が明瞭。釉色は褐色で、泥釉。素地は褐色。
	3		あ、Ⅳ、1①	10.1		下之御庭		いかり肩。器厚は薄手。釉色は黒色。素地は暗灰色で、混和材は目立たない。

第13表　中国産褐釉陶器

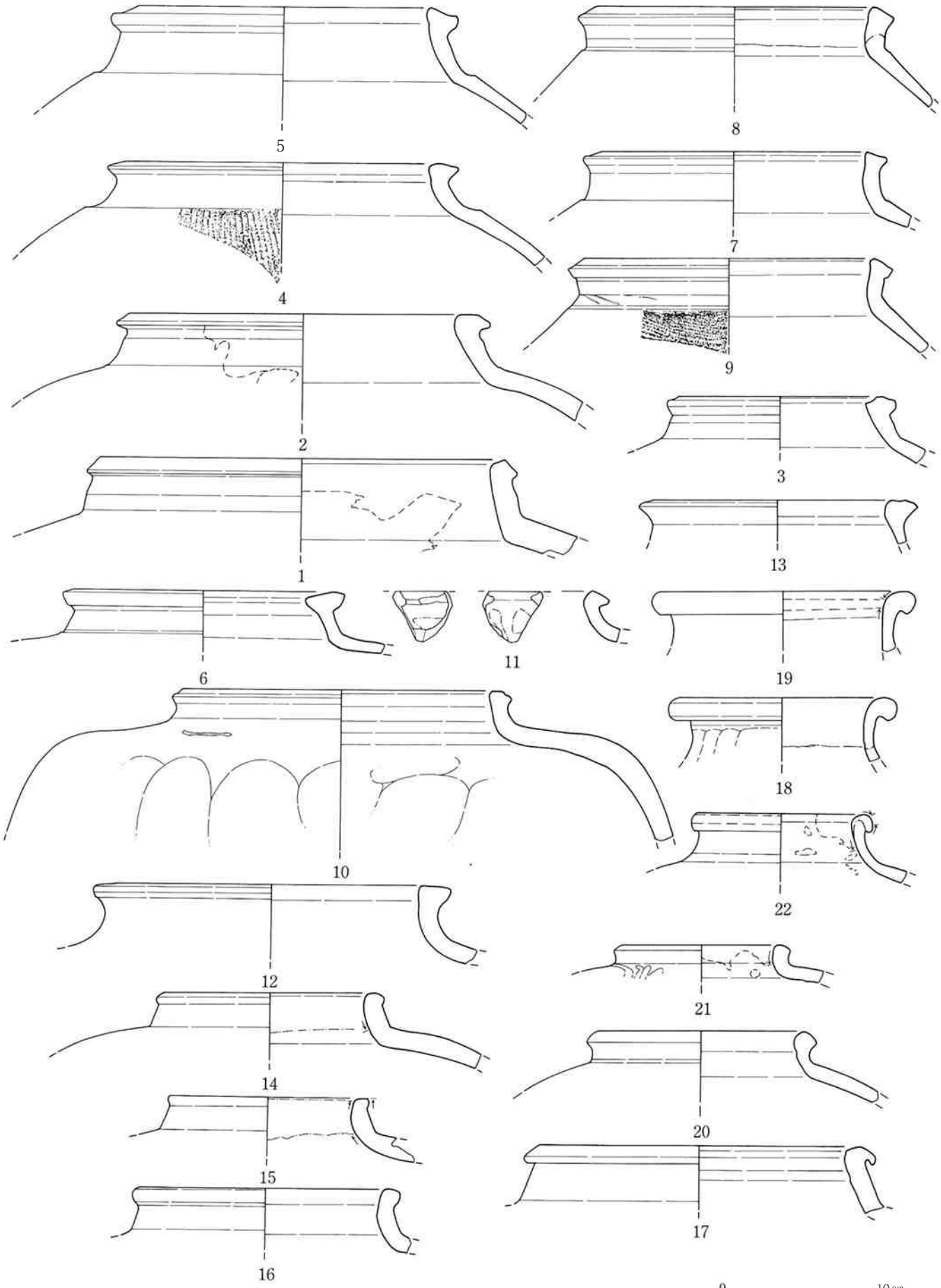
図	番号	器種	分類	計測値 口径	計測値 底径	出土地区 地区	出土地区 グリッド等	特　徴（器形、文様など）
36図	4	壺	あ、Ⅳ、1①	8.6		木曳門	L9-134	長頸で薄手の器厚。内外ともロクロ痕が明瞭。釉は褐色で、素地は明褐色。微細な鉱物粒を含む。
	5		あ、Ⅳ、1①	12.2		木曳門		いかり肩の中型壺、頸部は直立。釉色は暗褐色。素地は灰色で、混和材は目立たない。
	6		い、Ⅰiii、1②	12.1		廣福門	北西	ナデ肩の小型壺で、薄手の器厚。釉色は暗褐色。素地は黒色で、微細な白色鉱物を含む。
	7		い、Ⅰiii、1①	13.0		木曳門	L8-143	ナデ肩の小型壺で、薄手の器厚。淡褐色の釉で、泥釉。素地は明褐色で、白色鉱物を僅かに含む。
	8		い、Ⅰiii、1②	9.2		木曳門	M1-139	ナデ肩の小型壺で、薄手の器厚。釉色は褐色で泥釉。素地は明褐色で、僅かに白色鉱物を含む。
	9		い、Ⅰiii、1①	13.4		木曳門	M0-142	ナデ肩の小型壺で、頸部が直立、薄手の器厚。釉色は褐色で、泥釉。素地は褐色で、微細な白色鉱物。
	10		あ、Ⅱ、1①	11.0		用物座 下之御庭		ナデ肩の小型壺。釉色は暗褐色で、内面は露胎。素地は灰色、白色鉱物を含む。
	11		い、Ⅱ、1①	12.0		用物座		ナデ肩の小型壺。釉色は淡灰白色。素地は淡褐色、粗い白色鉱物を僅かに含む。
	12		い、Ⅱ、1①	14.4		用物座		ナデ肩の小型壺。釉色は白色で、外面は被熱であばた状。素地は暗灰色で、粗い白色鉱物を僅かに含む。
	13		い、Ⅱ、1①	12.6		下之御庭		やや肩の張る小型壺。外面に淡褐色の泥釉を薄く施す。素地は暗灰色で、微細な白色鉱物を含む。
	14		あ、Ⅰii、2					いかり肩の中型壺。釉色は暗褐色、ほとんどが剥落。素地は白色で、混和材は目立たない。
	15		い、Ⅱ、2	8.7		木曳門		ナデ肩の小型壺。釉色は黒褐色。素地は暗褐色で、微細な白色鉱物を含む。
	16		い、Ⅲ、1①	12.4		木曳門		ナデ肩の中型壺で、頸部は直立。外面はタタキ痕が明瞭。かなり硬質。釉色は黒褐色。素地は黒色で微細な白色鉱物を多めに含む。
	17		い、Ⅲ、1①	8.0		木曳門		ナデ肩の小型壺、比較的硬質。釉色は暗褐色で、泥釉。素地は暗灰色で、微細な白色鉱物を含む。
	18		い、Ⅲ、2	5.2		不明		ナデ肩の小型壺で、口縁部が特徴的。釉はほとんど剥落（褐色？）。素地は暗灰色で、微細な白色鉱物を僅かに含む。
	19		い、Ⅱ、2	12.0		木曳門		ナデ肩でやや大型の壺。内面はロクロ痕が明瞭。釉色は暗オリーブ色で、口唇部は釉がはがれる。また、肩部にも耳を貼付？した痕がある。素地は白色で、白色鉱物を僅かに含む。
	20		い、Ⅱ、2	13.4			小学校階段下	ナデ肩の中型壺。耳を貼付する。釉色は灰褐色で、薄い泥釉。素地は明褐色で、黒色鉱物などを僅かに含む。
	21		い、Ⅱ、2					ナデ肩の中型壺、薄手で比較的硬質。耳を貼付する。釉色はオリーブがかった褐色、内面は露胎で指頭痕が残る。素地は黒色で、混和材は目立たない。
	22		い、Ⅱ、2	14.5		木曳門		ナデ肩でやや大型の壺。釉色は暗褐色で、口縁内外は露胎。素地は淡灰色で、白色鉱物を含む。
	23		い、Ⅱ、2	10.0		下之御庭		ナデ肩で小型の無頸壺。釉色は黒色。素地は黒色で、混和材は目立たない。
	24		い、Ⅳ、2					いかり肩の中型壺。外面に淡褐色の薄い泥釉。素地は白色で、白色・黒色鉱物を含む。
	25		い、Ⅱ、2	22.0		廣福門	北西	無頸の中型壺、甕にも似る。釉色はにぶい黄褐色。素地は淡明褐色及び灰色。粗い黒色鉱物等を僅かに含む。
	26		い、Ⅱ、2					ナデ肩の小型壺。釉色は黒色、口唇部は露胎、外面は被熱によりあばた状。素地は淡灰色、混和材は目立たない。
	27		い、Ⅳ、2	7.7		下之御庭		ナデ肩で小型の無頸壺（急須？）。釉色は淡褐色で剥落ぎみ。素地は明褐色で、混和材は目立たない。
	28		い、Ⅳ、2	12.8		下之御庭		ナデ肩で小型の無頸壺（急須？）。釉色は褐色で、一部露胎。素地は灰褐色で、白色鉱物を多く含む。
37図	1	鉢				木曳門		ボウル状の器形。外面に刺突状の凹文。釉色は淡灰色（内面は剥落？）。素地は暗褐色で、白色鉱物を僅かに含む。
	2			17.4		木曳門		筒形の器形、口縁部を逆L字に形成する。釉色は褐色。素地は暗灰色で、混和材は目立たない。
	3					漏刻門	M3-125	筒形の器形、口縁部を逆L字に形成する。釉色は暗褐色、外面は露胎？。素地は灰白色で、褐色鉱物などを僅かに含む。
	4				12.3	木曳門	L4-153	ボウル状の器形で、深めの鉢になると思われる。底面を押し上げる。露胎。素地は灰褐色で、白色・黒色鉱物を含む。
	5				20.7	木曳門	L6-147～149	ボウル状の器形で、深めの鉢になると思われる。露胎。素地は褐色で粗い白色鉱物などを含む。
	6				7.5	木曳門		ボウル状の器形？。露胎。素地は淡赤褐色で。白色鉱物を僅かに含む。
	7	すり鉢		21.4		下之御庭		８条１組の溝が３ヶ所残る。口縁部をＴ字状に形成。釉色は褐色であるが、殆どが露胎。素地は暗灰色、混和材は目立たない。
	8			18.8		不明		溝は６条１組？。口縁部をＴ字状に形成。釉色は褐色であるが、殆ど露胎。素地は淡暗灰褐色。微細な白色・黒色鉱物を含む。
	9				8.6	廣福門	北西	やや浅い溝。外面に暗褐色の泥釉。素地は暗異褐色、混和材は目立たない。
	10	水注		11.6		用物座		小型の水注。口縁部～底部の資料で同一固体と思われる。肩部に突帯、胴部に蓮弁様？の沈線を施す。釉は暗褐色で殆ど剥落している。素地は灰色で、目立たない。
	11	急須？		14.3		用物座 下之御庭		口縁部が直立（くの字）する。内面はロクロ痕が明瞭。釉色は暗褐色で、内面は若干鮫肌状。素地は褐色で、白色鉱物を多く含む。
	12	急須		8.5		下之御庭		やや小型の器形。口唇は弱く外反。釉色は暗褐色。素地は褐色で、僅かに白色鉱物を含む。
	13					木曳門	M0-137	急須の注口部分で、丸みを帯びた器形をなす。内面はロクロ痕が明瞭。釉色は暗褐色で、胴下半部は露胎。素地は灰色で、僅かに白色鉱物を含む。
	14	壺？		14.0		木曳門		小型壺？。釉色は色の褪せた褐色。素地は淡ベージュ色、混和材は目立たない。
	15			14.0		木曳門		壺？、本土産陶器の可能性あり。比較的硬質で、釉色は黒色。素地は黒色で、混和材は目立たない。
	16	？				下之御庭		器種不明、壺もしくは鉢。口縁部をＴ字状に形成し、口唇上面を若干くぼませる。釉色は暗オリーブ色。素地は暗灰色で、白色鉱物を多量に含む。

第14表　中国産褐釉陶器

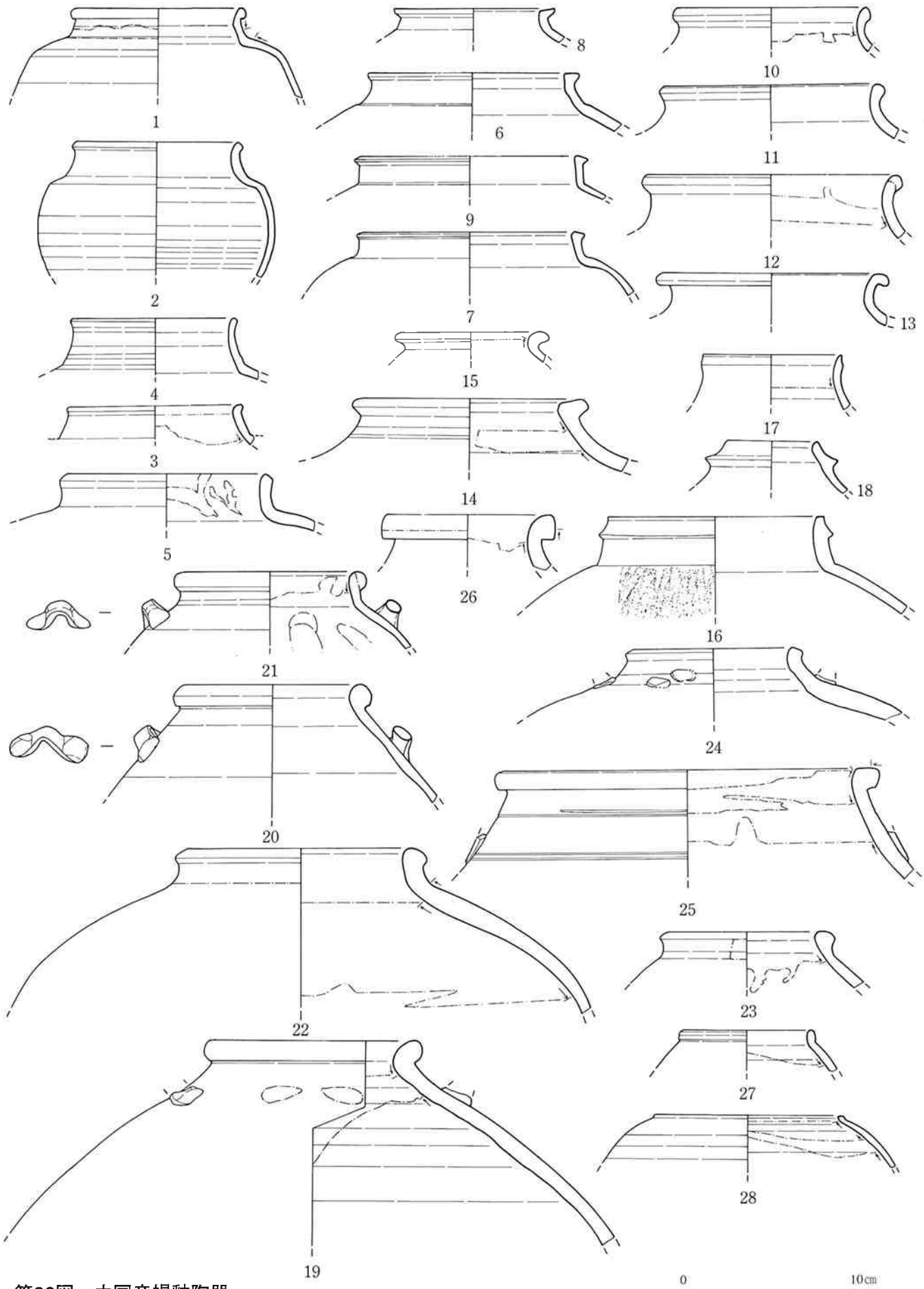
図	番号	器種	分類	計測値 口径	計測値 底径	出土地区 地区	出土地区 グリッド等	特　徴（器形、文様など）
37図	17	壺		18.4		木曳門		京の内資料（第73図６）に類するナデ肩の壺と思われる。釉色はオリーブ灰色で、口唇上面は露胎。素地は明褐色及び灰色、白色鉱物を僅かに含む。
	18	壺？		18.0		下之御庭		口縁部に２条沈線。薄手で比較的硬質。釉は殆ど剥落しているが、本来は褐色と思われる。素地は暗灰色、混和材は目立たない。
	19	水注						水注の把手。釉色は暗褐色。素地は暗灰色、混和材は目立たない。
	20	蓋		13.4	5.0	廣福門	北西	丸く盛り上がる器形の蓋。釉色は暗褐色、内面は露胎。素地は淡暗褐色、僅かに白色鉱物を含む。
	21			24.4	26.6	木曳門		平坦な器形の蓋。釉色は淡オリーブ灰色で、内面は露胎。素地は暗灰色、僅かに白色鉱物を含む。
	22			22.6		木曳門		平坦な器形の蓋。釉色は暗オリーブ灰色。素地は暗灰色、僅かに白色鉱物を含む。
	23	皿				木曳門		底面にボタン状の脚。角皿と思われる。釉色は暗オリーブ色。素地は暗灰色、僅かに白色鉱物を含む。
38図	1	壺		20.0	16.5	木曳門		器高は64.0cm、胴の最大径は48.0cm、比較的長胴な器形をなす。底面の押し上げは比較的弱い。釉色は暗褐色。素地は灰色、白色鉱物を含む。
	2		Ab		14.5	不明		外底面の押し上げが強く、内外ともロクロ痕が明瞭。釉色は暗褐色。素地は灰白色で、白色鉱物を含む。
	3		Ab		22.3	下之御庭		内面はタタキ痕が明瞭。内外とも露胎。素地は暗灰色、粗い白色鉱物を含む。
	4		Aa		14.3	用物座 下之御庭		内面はロクロ痕が明瞭。外面は濁った乳白色の釉、内面は泥釉。素地は黒色で、白色鉱物を含む。
	5		Ab		16.2	木曳門	L 8-132	外底面の押し上げは弱い。外面は調整が行き届いているが、内面は凸凹している。釉色は暗オリーブ色。素地は暗灰色、黒色鉱物を僅かに含む。
	6		Ab		11.6	木曳門		外底面の押し上げは弱い。内外とも露胎。素地は灰白色、混和材は目立たない。
	7		Aa		11.6	用物座		内面はロクロ痕が明瞭、内外とも露胎。素地は明褐色、白色鉱物が微量見られる。
	8		Aa		12.4	木曳門		外底面の押し上げは弱い。内外とも露胎。素地は黒色、白色鉱物を含む。
	9		Aa		9.6	木曳門	L 7-130	内外ともロクロ痕が明瞭。内外とも露胎。素地は褐色、白色鉱物を含む。
	10		Aa		11.2	下之御庭		立ち上がりがきつい。内外ともロクロ痕が明瞭。釉色は暗オリーブ色。素地は灰色、白色鉱物を僅かに含む。
	11		Bb		15.1	木曳門		内面はロクロ痕が僅かに見られる。内外とも露胎。素地は淡褐色、白色鉱物を含む。
	12		Bb		14.6	廣福門	北西	比較的穏やかに立ち上がる。内外露胎、オリーブ色の釉だれが見られる。素地は灰白色で、僅かに白色鉱物が見られる。
39図	13	底部	Bb		19.4	木曳門		穏やかに立ち上がり、比較的薄手。内面にタタキ痕が残る。釉は剥落、外底面に僅かにオリーブ色の釉。
	14		Bb		12.7	木曳門	M1-147	内面はロクロ痕が明瞭、底部はかなり薄手。内外とも露胎。素地は明褐色、白色鉱物を僅かに含む。底部付近に「□高麗」の墨書あり。
	15		Ba		7.8	廣福門	北西	小型の器種の底部。内面はロクロ痕がかなり明瞭。内外とも露胎。素地は黒色で、白色鉱物を僅かに含む。
	16		Ba		17.2	廣福門	北西	比較的きつく立ち上がる。内面はロクロ痕、指頭痕が明瞭。内外とも露胎。素地は暗灰色で、混和材は目立たない。
	17		Ba		10.2	木曳門		やや歪んだ器形。外面に沈線状の凹線、内面はロクロ痕が明瞭。外面に泥釉。素地は暗灰色、白色鉱物を僅かに含む。
	18		Bc		13.8	用物座		穏やかに立ち上がる器形。釉色は淡灰オリーブ色。素地は灰白色、混和材は目立たない。
	19		Bb		14.0	廣福門	北西	内面はロクロ痕が明瞭。露胎。素地は暗灰色で、白色鉱物を僅かに含む。
	20		Bc		14.2	木曳門	L 3-129	穏やかに立ち上がる器形。内面はロクロ痕が残る。露胎。素地は灰色で、白色・黒色鉱物を僅かに含む。
	21		Bb		13.4	木曳門	L 10-146	内外ともロクロ痕が明瞭。外面に僅かに泥釉が見られる。素地は暗灰色、白色鉱物を僅かに含む。
	22		Bb		17.2	用物座 下之御庭		底面は若干上げ底、内底面にハケによる同心円状の調整が見られる。釉色は淡オリーブ色。素地は灰白色で、白色鉱物を僅かに含む。
	23		Bb		14.0	下之御庭		同図22と同様に底面を押し上げ、内底面にハケによる同心円状の調整。比較的厚手。釉色はオリーブ灰色。素地は灰白色で、微細な白色・黒色鉱物を含む。
	24		Ba?			木曳門		胴下半部の資料、擦痕状の調整が見られる。外面は自然釉。素地は暗褐色で、粗い褐色鉱物などを含む。
	25		Ba		7.3	木曳門		小型の器種の底部。内面はロクロ痕がかなり明瞭。釉色は暗褐色。素地は暗灰色で、白色鉱物を含む。
	26		Ba		8.5	用物座		きつく立ち上がる。小型の器種の底部。釉は黒褐色。素地は淡灰褐色で、微細な黒色鉱物などを僅かに含む。
	27		Ba		11.6	木曳門	L 9-132	小型の器種の底部。ほぼ直に立ち上がる、筒状の器形。釉は外面上位に泥釉が見られる。素地は灰色で白色・黒色鉱物を含む。
	28		Ba		8.6	表採		僅かにくびれる。釉は殆ど剥落している、釉色は褐色。素地は淡黄白色、粗い白色鉱物を僅かに含む。
	29		Bc		13.6	木曳門		底部をくびれ状に形成。分類はCの可能性もあり。内外とも露胎。素地は淡褐色で、褐色鉱物を含む。
	30		Cc		16.0	木曳門		高台様に形成。かなり開く器形。内外とも露胎。素地は灰色で、黒色鉱物を含む。
	31		Ca		12.4	用物座		若干高台様に形成し、かなり厚手。内外とも露胎で、僅かに褐色の釉だれが見られる。素地は淡灰色で、白色・黒色鉱物を含む。
	32		Ca		17.6	廣福門	北西	きつく立ち上がる。高台様に形成、厚手。外面に泥釉。素地は灰色で、黒色鉱物を多く含む。
	33		Ca		14.6	木曳門 下之御庭		底面を高台様に形成、同様資料ではもっとも上げ底。非常に厚手。釉色は淡褐色（剥落が著しい）。素地は淡灰色で、粗い白色鉱物を多く含む。



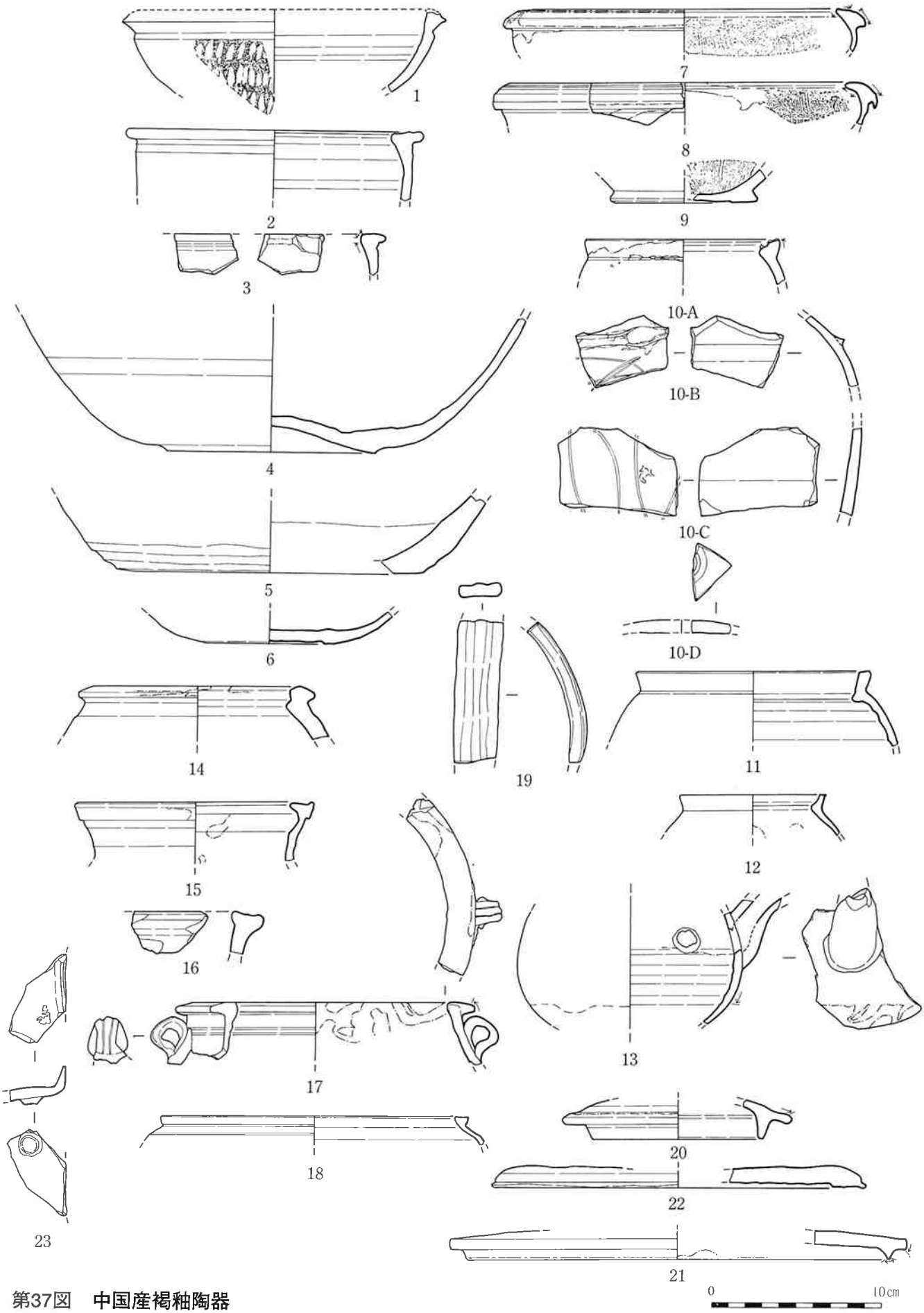
第34図　中国産褐釉陶器



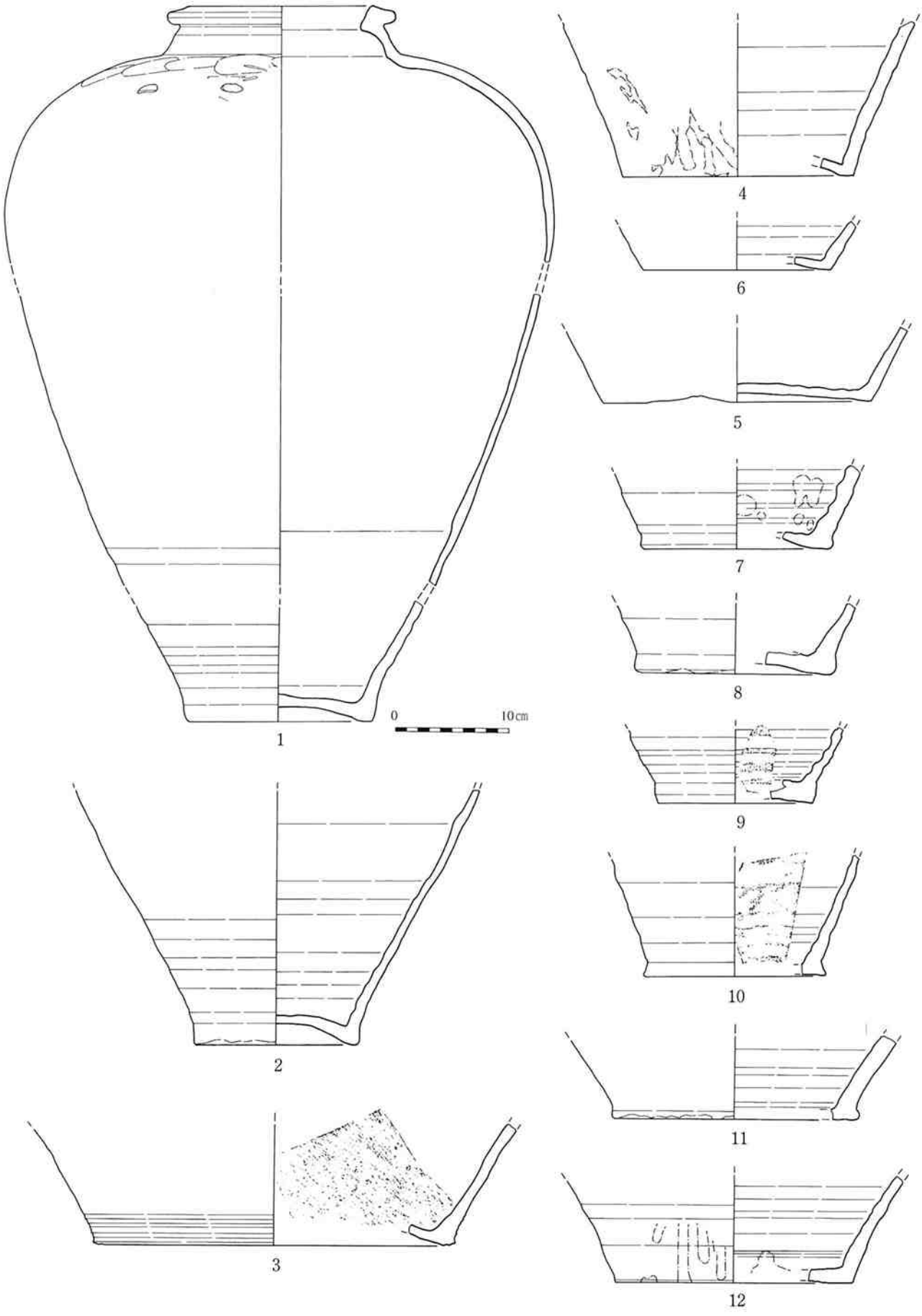
第35図　中国産褐釉陶器



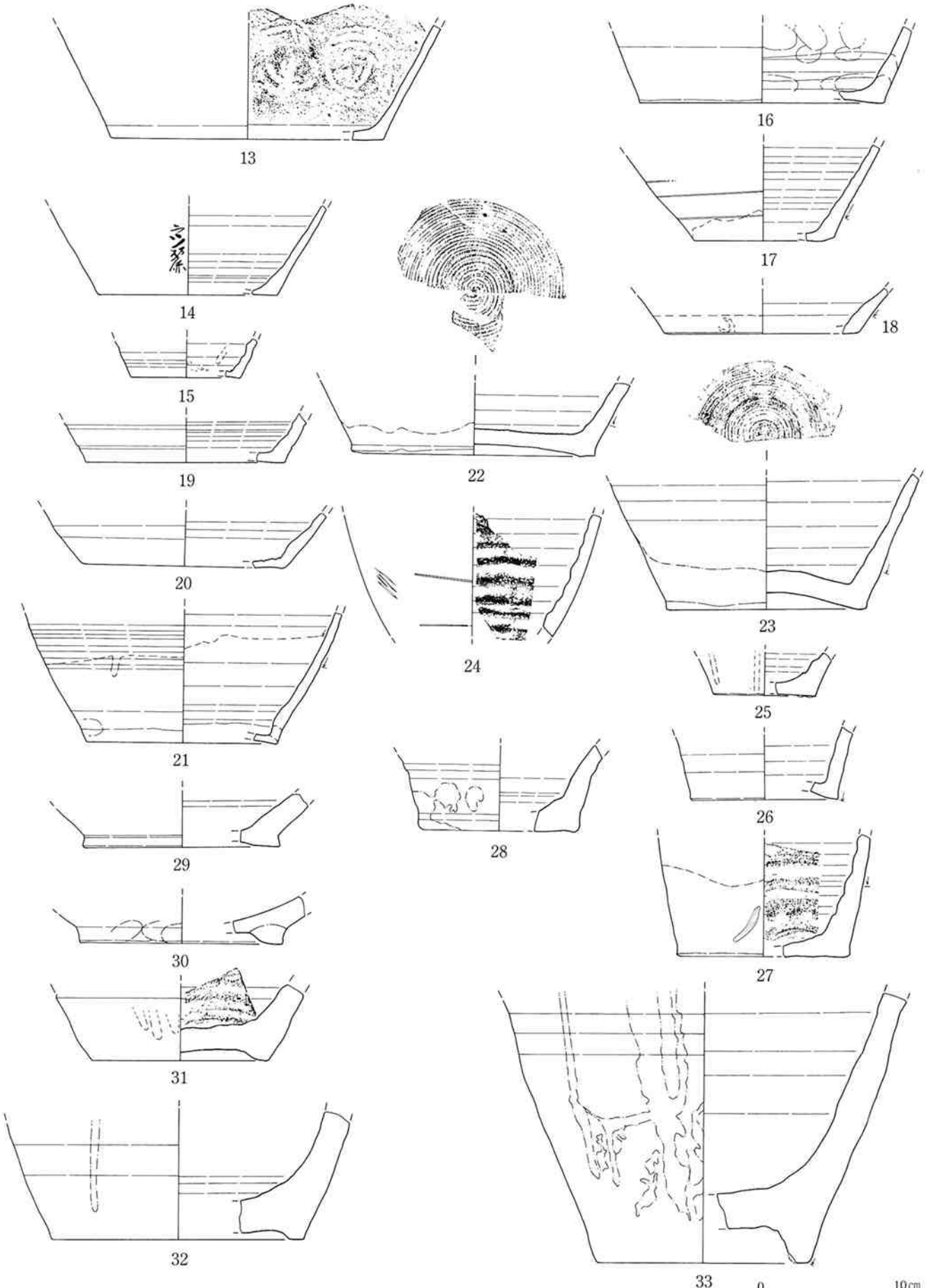
第36図　中国産褐釉陶器



第37図　中国産褐釉陶器



第38図　中国産褐釉陶器



第39図　中国産褐釉陶器

第７節　タイ産褐釉陶器

コンテナ（60㎝×40㎝×15㎝）の40箱分得られている。ほとんどが小破片の資料で、全形の窺えるようなものは見受けられない。器種的には壷形のものがほとんどで、明確に他の器種を示すものは少ない。

今回得られた資料のほとんどはタイ産のものとみられるが、第42図に示した２点はミャンマー産の褐釉陶器のようであり、注意される（註）。特徴的なものを第40図～第41図に示した。

図示したものから全体的にみると、暗～赤灰色の細かな胎土で白色砂粒や赤色粒を含む（第40図９を除く）という同じ特徴がみられる。また、壷の場合は肩部が丸味を持って張り出す四耳壷で、黒味の強い釉が施され、外面が口縁部及び頸部以下から胴下半部まで、内面が口縁部だけを基本的な施釉範囲としているものが多い。以下、概要について簡単に述べる。

第40図1～16・20～25は口縁部資料である。大雑把に言えば前者は大きめ（推算口径が22㎝前後のものが主流）の、後者は小さめ（推算口径が12㎝前後のものが主流）の壷になるかとみられる。これらの資料は口縁部の形態や頸部の状況などから細分することも可能のようである。

前者の大きめのものからみてみよう。口～頸部の状況から下記のように細分できる。

①口縁部上端が三角形状を呈し、ラッパ状に外反。頸部の最小径の位置が下端部にあるもの（1～3・5・7）。

②口縁部内面に凸帯様のものを廻らし上端を三角形状にみせ、外反。頸部の最小径の位置が中央付近にあるもの（4）。

③口縁部上端が玉縁状をなし、外反。頸部の最小径の位置が下端部にくるもの（６）と中央付近にくるもの（10・11）がある。

④口縁部上端が丸味を持って肥厚し折れ曲がるように外反。頸部の最小径の位置が中央部にあるもの(8・9)。

⑤口縁部上端が方形状を呈し、ラッパ状に外反。頸部の最小径の位置が下端部にあるもの（16）。

⑥外反口縁で、頸部中央付近からラッパ状に開くもの(12)、上端部が水平方向に折れ曲がるもの(13)がある。

⑦口縁部上端が丸く大きな肥厚を示す。頸部の最小径の位置が上端にあるもの（14・15・21）。

①の１～３・５・７は、口縁部内側に浅い溝状の部分が廻る。１・７は同一個体とみられ、口縁部外面が丸味を帯びる。2・3は口縁部の外面がほぼ平坦。5は口縁部の外面が若干凹面を形成する。胴部上端までが残る2・7をみると、その部分に凸帯様のものが1本廻る。頸部と胴部の境目をつくっているようである。７は肩部に外耳の痕跡もみられる。１・５・７は用物座地区、２は下之御庭地区、３は廣福門地区から得られている。

②の4は内面の口縁部に廻らした凸帯様のものの中央付近から先端の方へ両面を斜めに削り、先端部を尖らす。内面の凹部はより明瞭。口縁内面の凹部にみられる釉は気泡が著しい。用物座地区からの出土。

③の６・10・11をみると、6は頸部下端から直線的に開き、10・11は口縁部上端が折れ曲がるように外反。いずれも口唇部は尖り気味につくり、口縁部内面がやや凹面をなす。6は現資料に施釉の部分は見受けられない。11は口縁部内面に長さ約３㎝、幅約４㎜の胎土目様の熔着痕が認められる。11は混入物の粒子が他の２点よりも粗い。６・10は用物座地区、11は木曳門地区から得られている。

④の８・９をみると、両者とも口縁端部の下端を斜めに面取りしており、端部外面のやや下方に稜線が認められる。口縁端部が上方へとびでるため、縁部をつくる。9は薄く施釉している。８は下之御庭地区、９は木曳門地区から得られている。

⑤の16は口縁肥厚部の下端を平坦に整形。上端部は上方へとびでる感じで、口縁部内面に凹部をつくる。頸部下端には凸帯様のものが廻る。下之御庭地区からの出土。

⑥の12・13は両者とも先端部は丸味を持って仕上げている。推算口径は前者が約16㎝、後者が約15㎝と前述までの資料に比べると小さめである。13は内面の頸部に無釉の部分が散在するが、現資料はほぼ全面に施釉されている。12は木曳門地区、13は用物座地区から得られている。

⑦の14・15・21はこれまでの資料に比べて頸部が若干短くなり、外反の度合いも小さくなる。頸部と胴部の境目に凸帯様のものが廻る。15はその下方に4本の凹線を施し、その凹線上に外耳を配する。21は内外のほぼ全面に薄く施釉している。３点とも木曳門地区から得られている。

17～19は頸部から胴部にかけての資料である。17・18はブリッジ状の外耳を有する。頸部と肩部の境目に凸帯様のものを廻らし、その下方に３本の凹線を施し、その凹線上に外耳を配している。19は肩部がゆるやかに丸味帯びるもので、前２者よりも薄手のつくりである。

17は外面の頸部の上方に無釉の部分がみられ、19は胴下半部が露胎。19は肩部までは全面施釉され、下部の

方には釉溜まり部も数ヶ所みられる。そこから胴下半部までは薄く下地塗りを行い、その範囲に施釉の部分が散発的にみられる。18は外面の全面に施釉されている。３点とも木曳門地区から得られている。

次に小さめのものをみてみよう。20・22～25に示したもので、口縁の形状をみると若干のバリエーションがみられる。①肥厚口縁のもの（20）、②口縁部上端を上方へ摘み上げるようにするもの（22・23）、③口縁上端部を水平方向に折り曲げるように外反させるもの（24）、④口縁部上端を斜め方向に折り曲げるように外反させるもの（25）の4種である。20はある程度の器形が窺えるもので、肩部はナデ肩を呈し、比較的スマートな器形を示すもののようである。頸部下端に廻らされている凸帯様のものに沿うようにブリッジ状の外耳が配されている。外耳はかなり上方に弧を描く。22・23は口縁部の断面が三角形状を呈し、内面の口縁部に凹部を設ける。摘み上げ部先端だけを釉剥ぎして他は全釉。比較的薄手に仕上げている。また、④の25だけが無頸壷で、内外面のほぼ全面に釉が施されている。同一個体かと見られる26の底部資料も内底面に釉が認められる。外底面は露胎。20は外面から口唇部にかけてはほぼ全面に施釉され、内面は無釉。24は外面の頸部下半が施釉の対象のようで、そこから口唇部および内面は無釉。25・26は胎土に含まれる混入物の粒が粗い。23だけが下之御庭地区から、他の5点は木曳門地区から得られている。

27～33は底部資料である。推算底径をみると27が約13㎝と最も小さく、28が約17㎝、29が約33㎝で最も大きい。30～32は約28㎝で、33は約24㎝を測る。いずれも底面部から胴部への立ち上がり部の稜は比較的明瞭で、それほど開かずに立ち上がっていくものが目につく。また、27以外は胴下半部よりも底面部の方を薄く仕上げるものである。施釉の状況をみると胴部下半までを残す31・33は外面は両者とも胴部下半から底面部にかけては露胎としており、施釉の対象とはしていない。他の資料をみても釉垂れはみられる（28・29）ものの、基本的には無釉（30・32）のようである。ただ、27だけは底面部の近くまで施釉している。内面を施釉の対象としているのは27・33の２点で、28～30は釉垂れが認められる。31・32は内面は露胎であるが、32は内底面に直径約6.5㎝の円形状の黒味を帯びた箇所が２箇所認められる。27は黒灰色、28は暗灰色、29～33は赤灰色の細かな胎土である。27・28・32・33は木曳門地区、29は用物座地区、30・31は下之御庭地区から得られている。

第41図１～７は外耳の資料である。いずれもブリッジ状のもので、大きさには若干のバリエーションがみられる。断面をみるとほとんどが円形状を呈し、７だけがやや扁平になっている。６は凹線上に貼り付けられており、貼り付け位置はほぼ決まっていたものと考えられる。１は全面的に気泡がみられ、５は白っぽくなっている。また、１・６・７をみると外面だけが施釉されており、内面は無釉となっている。

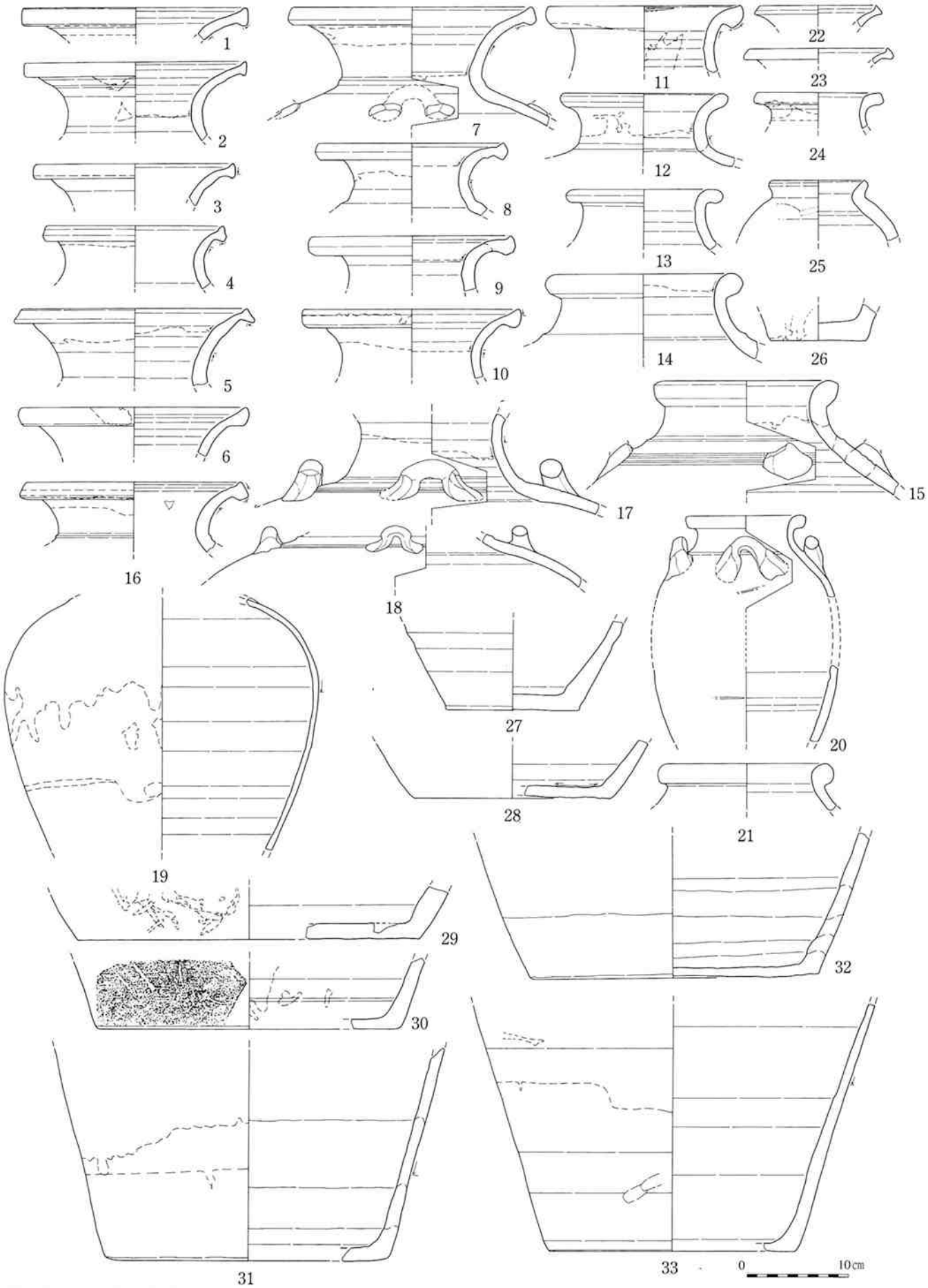
８は肩部の資料で、資料の上部に凸帯状のものが廻る。肩部は丸味を持って張り出す。９は外面にだけ黒味の強い釉を施す肩部資料である。外面に凹線様のものが廻り、その上方に何かを象った飾り付が配されている。胎土は淡橙褐色の細かなもので、黒色微砂粒の混入がみられる。中国産の可能性が高い。

10は瓶の底部資料とみられるもので、底径は約５㎝を測る。外底面の削りは非常に浅く、高台は外側へ開き気味に低くつくられる。畳付けは平坦。現資料に施釉の部分はみられない。11は蓋の資料である。甲部が頂部の方から僅かに傾斜しながら縁部へ至る。薄く仕上げている甲部に見受け部を貼り付けている。見受け部の外面は下端の方へゆるやかなカーブを示して厚さを減じ、内面はほぼ直線的で、下端部が鉤状に内側へとびでる。全体的に丁寧なつくりである。甲部の文様は、縁部の内側約８㎜の箇所に凹線を廻らしている。その内側は凸帯様になり、そこから約2.5㎝内側にも凸帯様のものが廻る。両方の凸帯間を縦方向の短線で充填している。甲部の推算径は約16cmを測る。黒味の強い釉を甲部にだけ施す。素地は淡黄白色の非常に細かなもので白色砂粒や赤色粒の微粒子を含む。漏刻門地区から得られている。

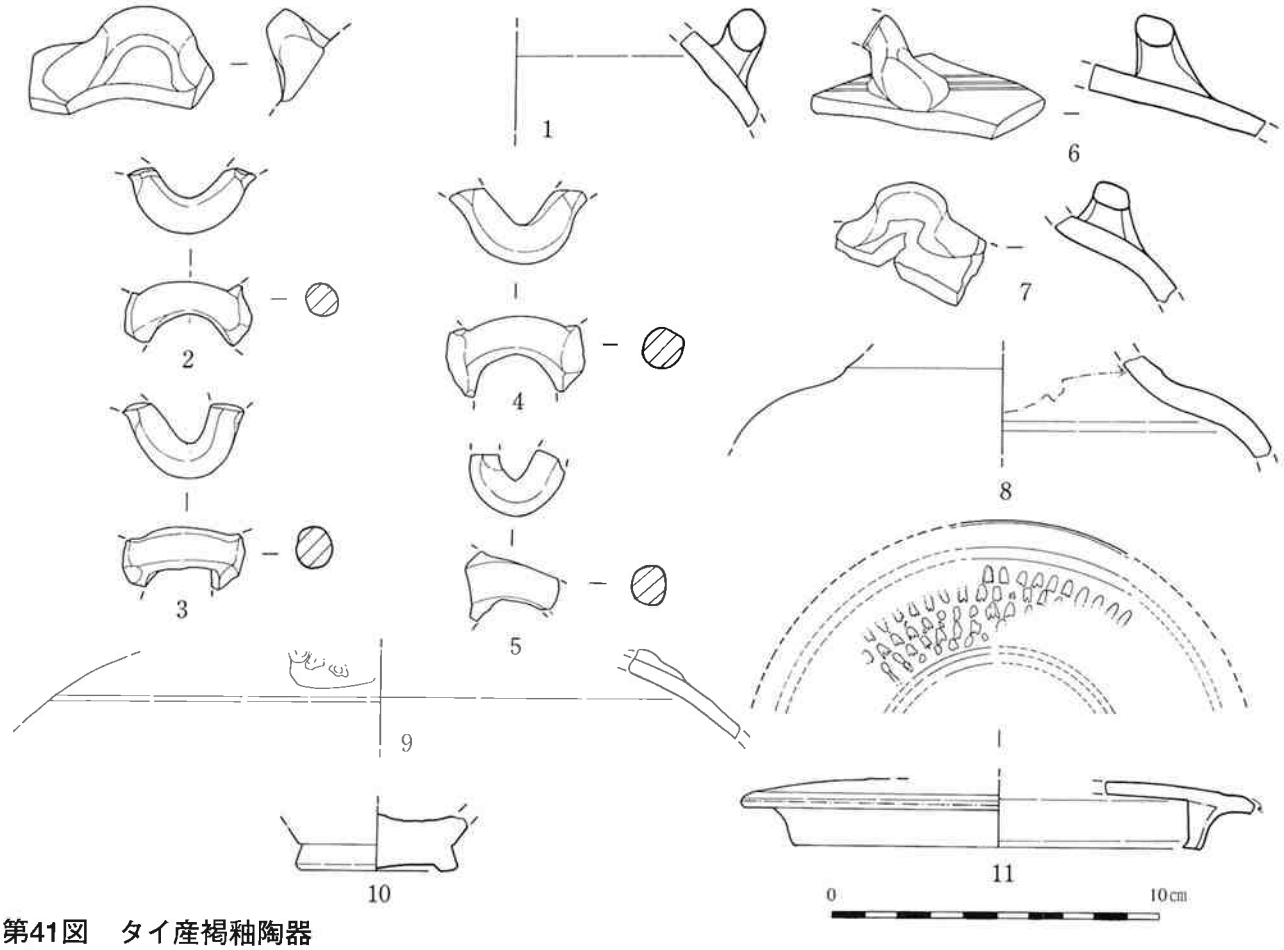
第42図１・２に示したものはミャンマー産の褐釉陶器とみられるものである。1は口縁部、2は胴部の資料である。2に関しては、この種の褐釉陶器は例がほとんどなく、註文献に掲載されているものを参考に胴部以下の推定復元図を示した。かなり横に広がる器形で、押しつぶされた感じである。両者の特徴についてみる。1は口縁部上端を丸く肥厚させるもので、肥厚部が上方へとびでる。そのため内面の口縁部に凹部が廻る。肥厚部下端からはすぼまるように頸部に向かう。推算口径は約17㎝を測る。黒味の強い釉が資料の全面にみられる。だま状に釉がはじける部分が散見される。

２は示したとおりの器形であれば、底面部からの立ち上がりが若干くびれ、胴部がかなり膨らむ。胴部中央付近と下端部には横位の凸帯が1本づつ廻る。中央付近の凸帯から上方に配される縦位凸帯が1本みられる。このような凸帯を配することも特徴のようである。黒味の強い釉が外面にだけ施され、内面は露胎としている。1・2とも胎土は暗灰色の細かなもので、粒の粗い白色砂粒や赤色粒を多量に含む。

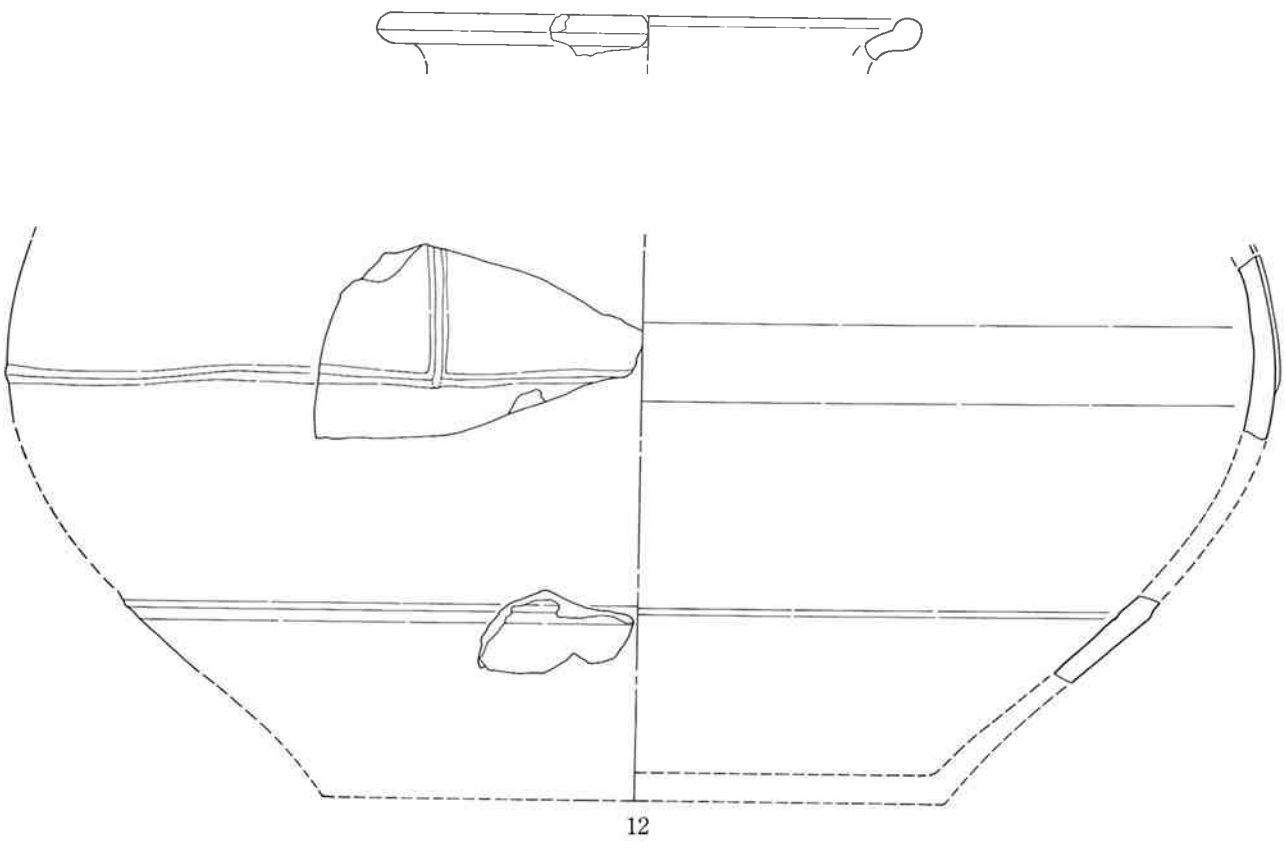
（註）*The ceramic load of the 'WITTE LEEUW'* Rijksmuseum Amsterdam 1982



第40図　タイ産褐釉陶器



第41図　タイ産褐釉陶器



第42図　ミャンマー産褐釉陶器

第8節　色　絵

中国産色絵が検出されている。確認された器種は碗・小碗・皿・盤・小杯・鉢・袋物の7器種であった。また、器種不明な資料についても特徴的なものについては図化した。また、釉裏紅についてもここで扱った。以下、産地別に個々の特徴について述べることとする。

碗（第43図1～6）

第43図1は、口縁部が微弱に外反する。灰白濁色の釉を両面に施す。内面には貫入が入る。外面は二次的な被熱を受け、上絵が一部変色する。外面に赤褐色と明緑色の二色で、主文の「寿」と花文を、上下に圏線を、腰部には縦位の線を入れる。素地は灰白色の粗粒子で微細な鉱物を含む。口径12.8cm。下之御庭地区出土。

同図2も外反タイプで、色絵は二次的な被熱を受け変色するが、外面に赤褐色釉で圏線・花文等を表す。両面に淡灰白色の釉を施す。素地は淡灰白色の微粒子で微細な鉱物を含む。廣福門地区出土。

同図3は碗の胴部片。淡黄灰白色の釉。両面に貫入が入る。両面とも上絵による圏線・雲文等が確認できるが判然としない。見込みに一部緑色の上絵が残る。素地は淡灰白色の微粒子。木曳門地区出土。

同図4も胴部片。淡灰白色の釉を両面に施す。釉下に竹等の輪郭を呉須により表した後に、上絵付けする。いわゆる豆彩である。素地は白色の細粒子である。用物座地区出土。

同図5は底部片。高台内刳りは深く、薄造りである。両面共に呉須により圏線や草花文？の輪郭線を施した後、上絵付けする。淡灰白色の釉を両面に施す。素地は白色の微粒子。底径は4.4cm。下之御庭地区出土。

同図6も底部片。高台内刳りは深く、比較的器壁は厚い。両面に淡黄灰白色の釉を施す。外面には黄色と赤で雲文と巴文を上絵付けする。素地は淡灰白色の細粒子。底径5.5cm。用物座地区出土。

小　碗（第43図7～8）

同図7は口縁部片。外反タイプで、両面に淡黄灰白色の釉を施す。両面に黒色の釉で圏線・唐草文・草花文を上絵付けする。素地は淡灰白色。口径9.4cm。用物座地区出土。

同図8は底部片。薄造りである。透明釉を両面に施す。外面に竹等の豆彩的な上絵が見られる。素地は白色の微粒子。底径は3.8cm。用物座地区出土。

皿（第43図9～15）

同図9は口縁部が微弱に外反し、高台両端とも斜位に削る。淡灰白色の釉を両面に施す。両面に赤と緑の釉で圏線・花文等を上絵付けする。素地は淡灰白色。口径18.5cm、器高3.3cm、底径10.1cm。

同図10は口縁部が微弱に外反する。両面に淡灰白色の釉を施し、見込みには青と黄色の釉で草花文？を上絵付けする。素地は淡灰白色。口径13.8cm。廣福門地区北西出土。

同図11は小皿で、型成形である。両面に淡灰白色の釉を施し、内面に上絵付けするが一部に赤・緑色の釉が残存する。素地は白色の微粒子。口径8.5cm、器高2.25cm、底径6.6cm。用物座地区出土。

同図12は底部片。薄造りで、高台は両端を斜位に削り取る。砂が付着する。両面に淡灰白色の釉を施し、両面に上絵により圏線・唐草文等を表すが、二次的な被熱により本来の釉調は判然としない。素地は淡灰白色の細粒子。底径11.3cm。木曳門地区出土。

同図13は底部片。薄手で、高台径は三角形を呈する。淡灰白色の釉を両面に施し、見込みには花文等を上絵付けするが一部に青色の釉が残る。素地は白色の微粒子。底径は10.3cm。用物座地区出土。

同図14も底部片。高台内刳りは深い。両面に透明釉を施し、見込みには豆彩的に葉等を、外面には唐草文等を表す。底面には上絵による成化年製の銘。素地は白色の微粒子。底径は5.1cm。下之御庭地区出土。

同図15は変形皿である。口縁部を角度を変えて立ち上がらせる。外面には雑な調整痕が見られる。灰白色の釉を両面に施し、内面に四方襷文・窓内に草花文等を表す。素地は灰白色の粗粒子。木曳門地区出土。

小　杯（第43図16）

同図16は小杯である。畳付以外に透明釉を施し、外面に蝙蝠と思われるものを上絵付けする。素地は白色の微粒子。口径4.6cm、器高3.1cm、底径2.1cm。出土地不明。

鉢（第43図17）

同図17は鉢である。口縁部は微弱に外反し、両面に白濁色の釉を施す。両面に圏線と草花文？を上絵により表す。素地は白色の微粒子。口径は20.8cm。廣福門地区北西出土。

袋　物（第43図18）

同図18は袋物の肩部である。淡青灰白色の釉下に呉須により圏線を描いた後、上絵で雲文等を表すが、二次的被熱のため釉調は判然としない。素地は白色の微粒子。

器種不明（第43図19～20）

同図19、20は器種不明資料である。図19は蓋か身が想定されるが袋物としても要検討である。両面に淡黄灰白色の釉を施すが、平坦部分は露胎である。両面とも上絵により四方襷文や圏線が表されるが、釉調は判然としない。素地は淡灰白色の細粒子である。木曳門地区出土。

同図20は鳥型の型物である。外面には目・羽毛が確認でき、淡灰白色の釉を施しているが、二次的な被熱のため判然としない。素地は淡灰白色の細粒子である。木曳門地区出土。

盤（第44図21～23）

同図21は同一個体と思われる破片資料を積極的に推定復元したものである。底部から口縁部にかけて丸みを持って成形されており、口縁部は口折状に成形する。高台は貼り付けて成形している。両面に濁った淡灰白色の釉を比較的厚く施しているが、外底面は露胎である。畳付には粗い砂状のものが付着する。内面には色絵により、火焔宝珠形の窓内に風景を表したものと印を交互にそれぞれ４つずつ配置するものと思われ、見込みには楼閣山水文を表しており、いわゆる仙境図的な構成になっているが、二次的な被熱を受けており本来の釉調は判然としない。素地は淡灰白色の微粒子である。推算された口径は39.8cm、器高は9.55cm、底径は18.6cmである。木曳門地区出土。

同図22も積極的に推定復元した資料である。器形もほぼ同様に成形されており、底部から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁部を口折状にする。高台貼り付け部には胴部の積み痕も観察できる。両面に濁った淡灰白色の釉を比較的厚く施しているが、外底面は露胎で、畳付には粗い砂状のものが付着する。内面には色絵により、火焔宝珠形文と印を交互に４つずつ配置するものと思われ、見込みに楼閣山水文を表しており、仙境図的な構成であるが、二次的な被熱を受け、本来の釉調は判然としない。素地は淡灰白色の微粒子。推算口径38,8cm、器高8,8cm、底径18,2cm。木曳門地区出土。

同図23は21、22と同タイプだが、口縁部を鍔縁状に成形する。両面に濁った淡灰白色の釉を比較的厚く施す。内面に上絵による文様が描かれるが、二次的被熱により構成等は判然としない。素地は灰白色細粒子。廣福門地区北西出土。

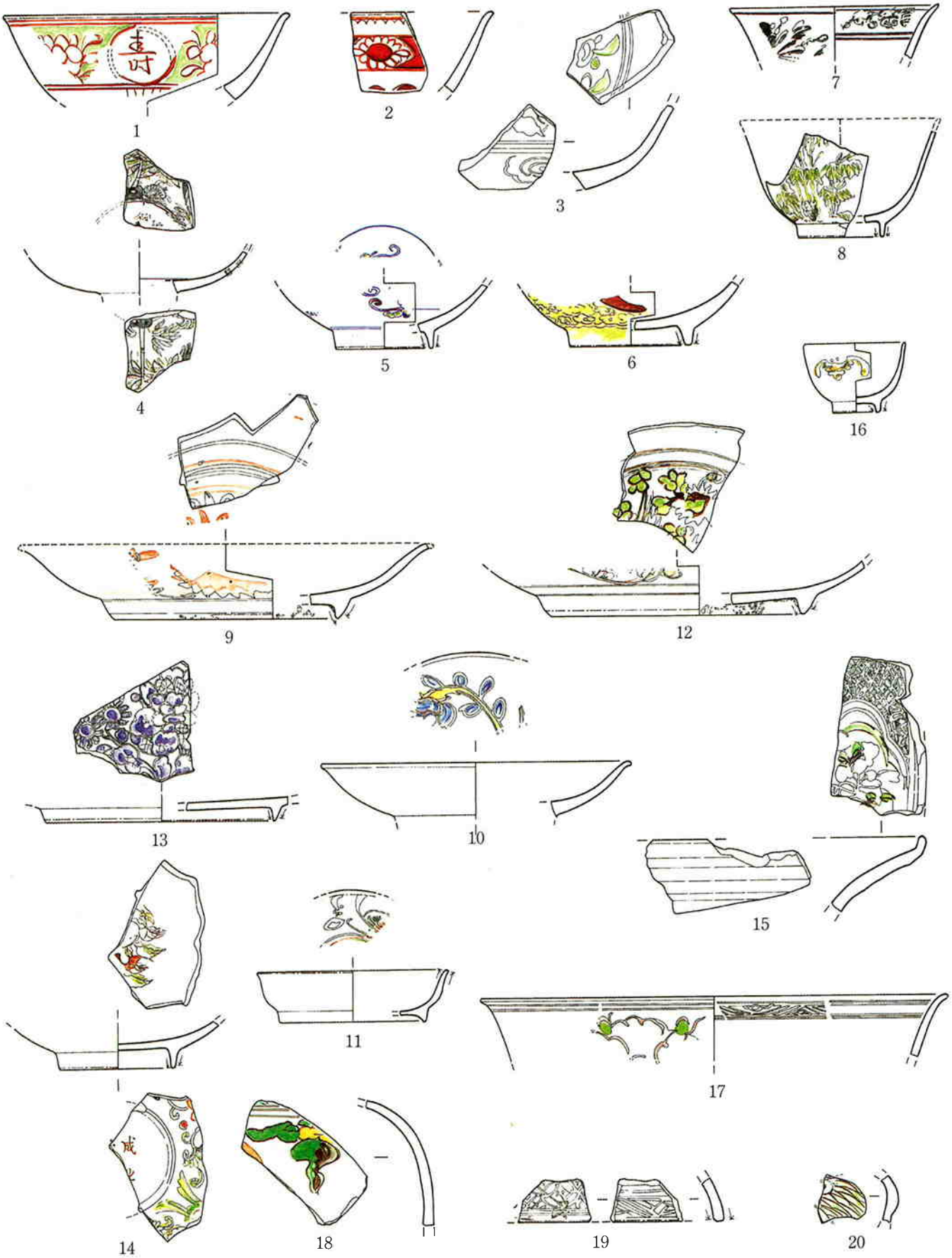
第９節　釉裏紅

同図24は碗の口縁部である。同下部から丸みを持って立ち上がり、口縁部は微弱に外反する。外面は呉須により口縁部直下に圏線、胴部には雲文と蝙蝠の輪郭線を描き、紅釉により絵付けする。内面は無文。両面に透明な釉を施す。素地は白色の微粒子。口径は15.0cm。木曳門地区出土。

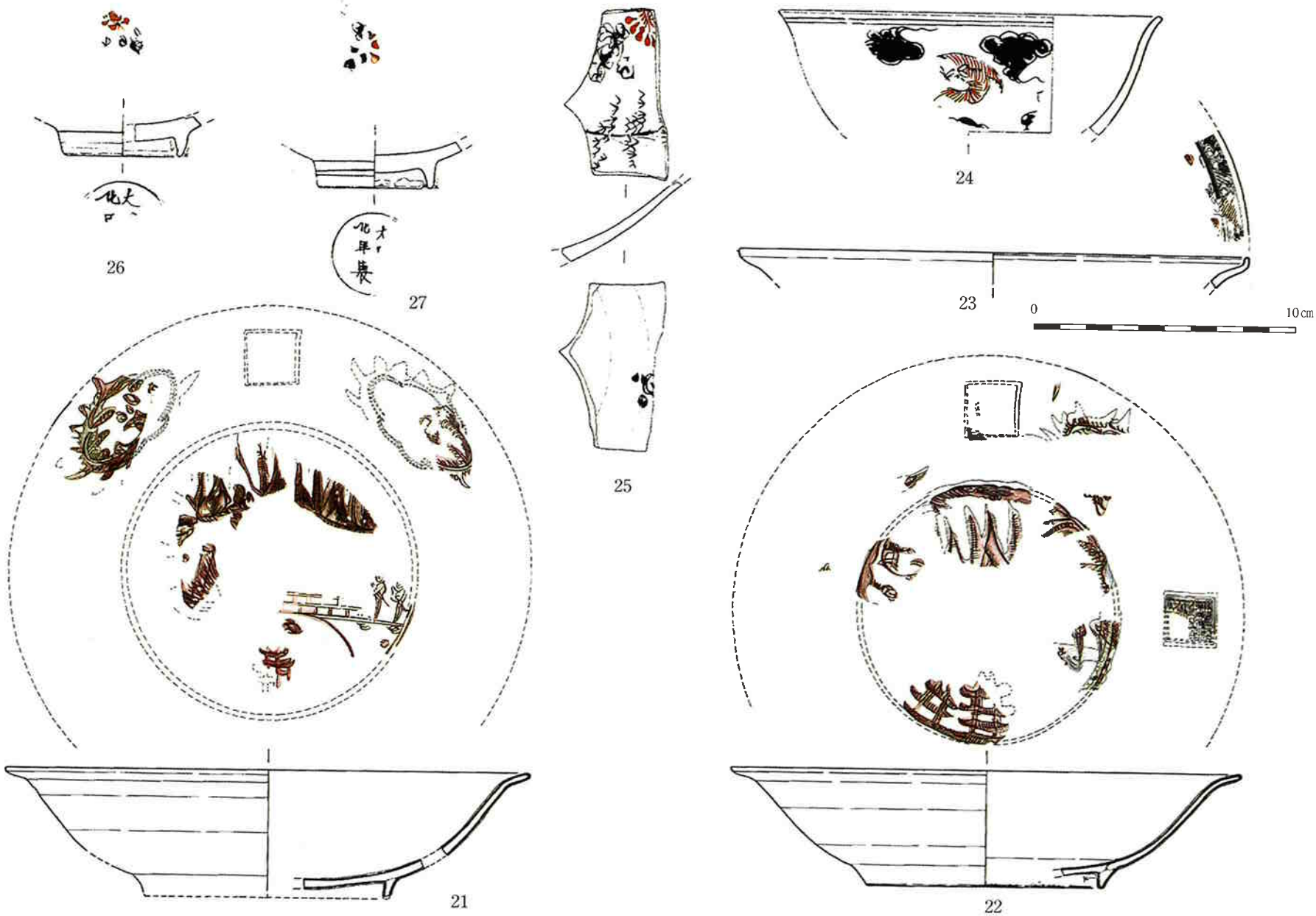
同図25は碗もしくは皿の胴部片である。外面には呉須により渦文？、内面には竹・葉を表し、紅釉で菊文を表す。両面に透明釉を施す。素地は白色の微粒子。木曳門地区出土。

同図26は碗の底部片。高台外面と高台脇に圏線を、外底面には圏線と大明成化年製の銘を描く。内面の見込みには呉須と紅釉による文様が見られる。淡灰白色の釉を畳付以外に総釉。素地は白色の微粒子。底径2.4cm。木曳門地区出土。

同図27も碗の底部片。高台外面と高台脇に圏線を、外底面には圏線と大明成化年製の銘を描く。内面の見込みには呉須と紅釉による文様が見られる。淡灰白色の釉を畳付以外に総釉。素地は白色の微粒子。底径4.2cm。木曳門地区出土。



第43図　色絵



第44図　釉裏紅

第10節　彩釉陶

中国明代に南部地域で生産された三彩・緑釉・翡翠釉・法花・銅緑釉を彩釉陶として扱った。以下に個々の特徴等について記することとする。

三　彩

三彩で確認されたのは水滴・水注・香炉・瓶・小杯・盤・人形の７器種である。器種不明であるが、特徴的な資料についても図化した。

水　滴（第45図１～11）

第45図１は琴高仙人形の仙人部分。前・後部を型成形後に貼り合わせる。目・鼻等が確認できる。外面に緑釉と黄釉を施す。木曳門地区出土。同図２は琴高仙人形の尾鰭。鱗等を型成形した後に貼り合わせ、尾鰭に黄釉、鱗に緑釉を施す。下之御庭地区出土。同図３は琴高仙人形もしくは魚形の尾鰭。型成形後貼り合わせる。外面に黄釉。廣福門地区北西出土。同図４は魚形水滴の尾鰭と思われ、鱗が確認できる。外面に緑釉を施す。木曳門地区出土。同図５も魚形の底部であると思われる。型成形により鱗等が確認できる。外面に緑釉を施す。用物座地区出土。同図６は琴高仙人形もしくは魚形の魚口？と思われる。型成形後貼り付けて孔を穿つ。緑釉と黄釉を施す。表採。同図７は琴高仙人形の頭部片。目・口・鱗等を型成形し、下部に孔を穿つ。外面に緑釉と黄釉を施す。用物座地区出土。同図８は魚形の鰭の一部。型成形により鱗と鰭を表し、外面に緑釉を施す。木曳門地区出土。同図９も魚形の鰭の一部。鰭を型成形後貼り合わせる。両面に緑釉を施す。下之御庭地区出土。同図10は魚形の鰓(えら)と思われる。型成形により鰓(えら)・鱗等を表し貼り付ける。外面に緑釉と黄釉。用物座地区出土。同図11は琴高仙人形か魚形の底部。鱗等を型成形後緑釉を施す。下之御庭地区出土。

水　注（第45図12～23）

同図12は長胴丸型水注の蓋。蓋甲頂部には型押しによる葉等が表され、中央には撮様の突起が確認できる。外面には緑釉が施されている。木曳門地区出土。同図13は長胴丸型水注の口縁部。外面の口縁部周辺には線刻による葉文が描かれる。肩部には把手の一部が確認できる。外面に緑釉。口径２㎝。木曳門地区出土。同図14も長胴丸型水注の口縁部。外面には型成形により口縁部周辺に葉文、胴部を瓜状に仕上げる。白化粧の後、緑釉と黄釉を交互に施す。口径7.6㎝。用物座地区出土。同図15も長胴丸型水注で把手の上部を爬虫類様に象る。外面に緑釉と黄釉を施す。木曳門地区出土。同図16は長胴丸型水注もしくは瓶の胴部。線刻により牡丹文を描く。外面に緑釉と黄釉を施す。廣福門地区北西出土。同図17も長胴丸型水注の胴部で、注口の一部が確認できる。図14と同様に口縁部周辺に葉文、胴部を瓜状に成形し、緑釉と黄釉を交互に施す。下之御庭地区出土。同図18は長胴丸型水注もしくは仙盞瓶の注口部。外面に緑釉を施す。廣福門地区北西出土。同図19は長胴丸型水注の底部で、線刻による蓮弁文？や沈線による圏線が見られる。外面に緑釉と黄釉を施す。底径は6.8㎝。廣福門地区北西出土。同図20も長胴丸型水注の底部。型押しによる蓮弁文と瓜状の胴部を成形する。胴部には爬虫類の尻尾が貼り付けられる。外面に緑釉と黄釉を交互に施す。底径7.0㎝。木曳門地区出土。同図21は仙盞瓶の把手の一部。外面に緑釉を施す。用物座地区出土。同図22は仙盞瓶の胴部で把手の下部が貼り付けられているのが確認できる。外面に緑釉を施す。下之御庭地区出土。同図23は仙盞瓶の破片資料を積極的に推定復元した。底部には２本、肩部に１本の圏線を廻らす。口縁部は内傾する。外面に緑釉を施す。底径は6.2㎝。下之御庭地区・漏刻門地区出土。第46図24は鶴形水注の蓋と思われる。撮を宝珠状に成形し、身受けを薄い板状に仕上げる。蓋甲部に緑釉を施す。最大径は4.0㎝。木曳門地区出土。同図25は鶴形水注の頭部である。型成形後貼り合わせる。嘴の先端に注口がある。外面に緑釉を施す。木曳門地区出土。同図26は鶴形水注の口縁部片で、外面口縁部直下に蓮弁文と波状文。外面に緑釉・黄釉・茶褐色釉を施している。口径は4.2㎝。廣福門地区北西出土。同図27は鶴形水注の胴部片。口縁下部に波状文、胴部には羽状文を型成形により表す。外面に緑釉・黄釉・茶褐色釉を施す。廣福門地区北西出土。同図28は鶴形水注の把手。型成形により羽状文を表した後、把手を貼り付ける。外面に緑釉と黄釉を施す。下之御庭地区・用物座地区出土。同図29は鶴形水注の胴部片。外面には型成形による羽状の文様が見られ、緑釉と黄釉を施す。下之御庭地区出土。同図30も鶴形水注の胴部片。型成形による羽状文を表した後、把手を貼り付ける。外面に緑釉と黄釉を施す。下之御庭地区出土。同図31は鶴形水注の胴部下部の破片資料。鶴の脚部と植物が型成形により表されている。外面に緑釉・黄釉・茶褐色釉・白濁色釉が施される。木曳門地区出土。同図32も31と同様で、植物が型成形により表されている。外面に緑釉・黄釉・茶褐色釉が施されている。用物座地区出土。同図33は鶴形水注の底部。型成形による青海

波が見られる。外面に緑釉を施す。廣福門地区北西出土。同図34も鶴形水注の底部片。外面には型成形による植物や青海波が表されている。外面に緑釉と黄釉を施す。用物座地区出土。同図35は鴨型水注の子鴨の頭部。型成形により目等が表されている。外面に緑釉と黄釉を施す。木曳門地区出土。同図36は水注かは判然としないが鳥の頭部である。型成形により目・嘴等を表す。外面に緑釉と黄釉を施す。用物座地区出土。同図37も鴨型水注の子鴨の頭部片。図35に比して小さい。型成形により縦位の線と目・嘴等を表す。外面に緑釉を施す。下之御庭地区出土。同図38は鴨型水注の親鴨の嘴による注口と思われる。外面に黄釉と白濁色を施す。木曳門地区出土。同図39は鴨型水注の胴部片。型成形による子鴨の嘴と羽状文を表す。外面には緑釉を施している。下之御庭地区出土。同図40は鴨型水注の尾の部分。型成形による羽状文が表されている。外面には緑釉と黄釉を施している。木曳門地区出土。同図41は鴨型水注の羽部分。型成形による羽状文が表されている。外面に緑釉と黄釉を施している。用物座地区出土。同図42は鴨型水注の底部である。型成形後貼り合わせている。外面には羽状文を表しており、緑釉と黄釉を施している。木曳門地区出土。

香　炉（第47図43～45）

同図43は口縁部片。口唇部の両端を突出させ、胴部には１条の凸帯文を廻らせる。外面に緑釉を施す。内面は露胎。口径18.4㎝。廣福門地区出土。同図44も口縁部。口唇部の内端を突出させる。外面に緑釉を施すが、内面の一部に釉垂れが見られる。用物座地区出土。同図45は底部片。外底面には３つの足が貼り付けられていると考えられ、雑に成形する。外面に白化粧の後に胴下部まで緑釉を施し、内面に白化粧の釉が垂れているのが確認できる。木曳門地区出土。

瓶（第47図46）

同図46は瓶の口縁部。外面に緑釉を施すが、内面にも同様の釉垂れが確認できる。口径4.8㎝。木曳門地区出土。

小　杯（第47図47）

同図47は小杯の底部片。型成形で外面には鱗状の文様が見られる。内面から外面の胴下部まで緑釉を施す。底径は2.0㎝。木曳門地区出土。

盤（第47図48～50）

同図48は盤の口縁部である。稜花もしくは輪花状に成形しているものと思われ、断面形は口折に成形する。両面に緑釉を施す。木曳門地区出土。同図49は口縁部を鍔縁状に成形する盤である。底部は上げ底で、逆「ハ」の字状に開き、口縁部は口折させた後、鍔縁状に仕上げている。内面には線刻により牡丹文が描かれている。外底面以外の全面に緑釉と黄釉を施している。口径20.0㎝、器高6.4㎝、底径16.2㎝。木曳門地区出土。同図50は底部片。上げ底状に成形され、見込みには牡丹文が線刻により描かれている。内面には緑釉と黄釉を施している。底径11.4㎝。用物座地区出土。

人　形（第47図51）

同図51は人形の頭部片である。髪型や目・鼻・口等も確認できる。型成形後貼り合わせている。外面に緑釉と黄釉を施している。下之御庭地区出土。

器種不明（第47図52～54）

同図52は型成形により外面に格子状の文様を表す。外面にのみ緑釉と黄釉を施す。用物座地区出土。同図53は非常に薄造りで文様等は判然としない。両面に緑釉を施す。木曳門地区出土。同図54も器種不明であり文様等は判然としない。外面に緑釉を施す。

緑　釉

確認された器種は壺のみである。口縁部と胴部の破片資料から積極的に推定復元を試みたのが第47図55である。胴部からゆるやかに内傾し角度を変えて立ち上がり口縁部へと移行する。口縁部は玉縁状に成形する。外面の胴部には線刻による菊花文？等が描かれている。二次的な被熱を受けており本来の釉調は判然としない。口径は13.2㎝。木曳門地区出土。

翡　翠

翡翠で確認されたのは、瓶・皿もしくは盤・袋物の３器種である。また器形・文様等は同様であるが、暗茶紫色の釉を施す瓶もここで扱った。以下、個々の特徴等について述べてみたい。

瓶（第48図１～７、10）

第48図１、２は瓶の口縁部。外反口縁で、口唇部を肥厚させて成形した後、口縁部上端には２本の沈線を廻

らす。両面に白化粧をした後に翡翠釉を施すが二次的な被熱により本来の釉調は判然としない。素地は灰色の粗粒子で胎土。口径は図１が6.8㎝。図２が7.0㎝。前者が下之御庭地区、後者が用物座地区出土。同図３は瓶の胴部。比較的薄く胴中央部に積み痕が確認できる。外面に線刻による圏線と牡丹唐草文を表す。外面に白化粧をした後に翡翠釉を施すが二次的な被熱により本来の釉調は判然としない。素地は白色の細粒子。用物座地区出土。同図４は瓶の底部。高台は「ハ」の字状に開き、高台脇から丸みを持って立ち上がる。線刻により高台外面と胴下部に２本の圏線、胴中央に唐草文を表す。白化粧をした後に翡翠釉を施すが二次的な被熱により本来の釉調は判然としない。外底面に緑釉を施す。素地は灰色の細粒子。底径7.8㎝。下之御庭地区出土。同図５も瓶の底部。厚く成形され、外面には線刻文が確認できるが判然としない。外面に翡翠釉と外底面に緑釉を施す。素地は淡灰黒色の細粒子。底径7.9㎝。木曳門地区出土。同図６も瓶の底部。かなり薄造りで、高台形は逆三角形を呈する。両面に翡翠釉を施す。素地は白色の細粒子。底径は7.0㎝。木曳門地区出土。同図７も瓶の底部。厚く成形される。文様は確認できない。外面と高台内面に翡翠釉を施す。素地は淡灰黒色の細粒子。底径は7.7㎝。下之御庭地区出土。同図10は、胴上部に積み痕が確認でき、内面の調整は非常に雑に仕上げている。外面には線刻による圏線２本と唐草文を表し、暗茶紫色の釉を施している。橙褐色の粗粒子。出土地不明。

皿もしくは盤（第48図８）

同図８は稜花皿の口縁部。口縁部を微弱に外反させ、口唇部に抉りを加え稜花状に成形し、口縁部上端を平坦に成形。外面に稜花に伴う縦位の稜線が入る。両面とも釉がほとんど剥げ落ちる。素地は黄灰白色粗粒子。木曳門地区出土。

壺（第48図９）

同図９は厚手の壺と思われる。両面に白化粧をした後に翡翠釉を施すが、二次的な被熱を受け一部の釉が剥がれる。内面には轆轤痕や調整痕が観察できる。素地は淡灰白色の細粒子で半磁胎である。木曳門地区出土。

法　花

法花で確認された器種は、皿・盤・壺（袋物）の３つである。以下に、個々の特徴等を述べることとする。

皿（第48図11～13）

第48図11は稜花皿の口縁部。口縁部外端を稜花状に、上部を水平に成形し、胴部外面は鎬状に成形する。両面に濃藍色の釉を施すが釉剥げが著しい。素地は白色の粗粒子。口径18.8㎝。用物座地区表採。同図12は皿の胴部片と思われるが判然としない。外面胴部は鎬状に成形。外面と内面の一部に濃藍色の釉を施すが、内面の見込み部分は露胎。素地は白色の粗粒子。木曳門地区出土。同図13は皿の口縁部と思われるが判然としない。口縁部を口折れさせて、端部を鍔縁状に成形する。両面に濃藍色の釉を施す。素地は白色の粗粒子。下之御庭地区出土。

盤（第48図14）

第48図14は盤の口縁部である。口縁部を口折れさせて端部を鍔縁状に成形する。上面観は稜花もしくは輪花状となる。両面に暗茶褐色の釉を施すが、二次的な被熱により藍色が変色したのか。素地は白色の粗粒子。下之御庭地区出土。

壺（第48図15～20）

第48図15は壺もしくは袋物の胴部片。厚めで外面に縦位の稜線が走る。外面に濃藍色の釉、内面の一部に緑釉を施す。素地は白色の粗粒子。用物座地区出土。同図16は壺の胴部片。外面には貼り付け文様を表し、濃藍色と翡翠釉を、内面には緑釉を施す。素地は白色の細粒子。下之御庭地区出土。同図17も壺の胴部片、外面に貼り付け文。外面には濃藍色・翡翠釉、内面に緑釉を施す。素地は白色の粗粒子。廣福門地区北西出土。同図18も壺の胴部片。外面に貼り付けの蓮弁文を表す。蓮弁に淡黄白釉、他は濃藍色、内面には緑釉を施す。素地は白色の細粒子。木曳門地区出土。同図19も壺の胴部片で、外面に貼り付けの蓮弁文。外面蓮弁に翡翠釉、他は濃藍色、内面は緑釉を施す。下之御庭地区出土。同図20も壺の胴部片である。外面に貼り付けによる花文。花文部に翡翠と濃藍色を施しているのが確認でき、内面には緑釉を施す。素地は白色の粗粒子である。木曳門地区出土。

銅緑釉

銅緑釉で確認された器種は、壺・器種不明の２つである。壺には酒会壺とそうでないタイプの２種類が確認

されている。以下に、個々の特徴等について述べることとする。

壺（第49図）

第49図１は酒会壺の蓋であるものと思われる。蓋端部は欠落しており、蓋の最大径は不明である。身受けの突起は貼り付けられており、ほぼ垂直に成形されている。蓋甲頂部には、型押しによるものと見られる鎬文が確認できる。蓋甲部等の外面には、胴緑釉が施されており、内面は露胎である。素地は淡橙褐色の細粒子である。径は12.0㎝である。木曳門地区出土。

同図２も酒会壺の蓋であるものと思われる。図１と同様に、蓋端部は欠落し、蓋最大径は不明である。身受けの突起は貼り付けられ、図１に比して器高がかなり小さくなる。蓋甲頂部には型押しによると見られる鎬文が確認できた。蓋甲部等の外面には、銅緑釉を施している。内面は露胎である。素地は淡橙白色の細粒子である。径は6.4㎝である。

同図３は壺（酒会壺）の口縁部である。断面には積み痕が確認できる。外面の口縁部下部には、銅緑釉が確認できる。内面は内面直下まで釉が確認でき、内面の一部には釉垂れが確認できるが、口唇部と口縁内面直下は釉を掻き取っている。素地は淡橙褐色の粗粒子である。口径は15.8㎝。

同図４は酒会壺の口縁部である。内傾する胴部を角度を変えて外側に大きく開いて成形する。断面には積み痕が確認できる。両面ともに口縁直下まで釉を施すが、口唇部には掻き取った後が見られる。素地は淡橙褐色の粗粒子である。口径は16.2㎝である。下之御庭地区出土。

同図５も酒会壺の口縁部である。図３、４と同様に内傾する胴部を角度を変えて、外側に大きく開いて口縁部を成形する。断面からは積み痕が確認できる。両面に銅緑釉を施すが、口唇部と内面口縁直下には釉薬を掻き取った後が見られる。素地は淡橙褐色の粗粒子である。口径は17.8㎝である。下之御庭地区出土。

同図６は壺の胴部片である。外面に型押しによるものと思われる円形の菊花状の陽刻文が確認できる。外面にのみ銅緑釉を施している。素地は淡橙褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。

同図７も壺の胴部片である。図６と同様に外面に型押しによるものと思われる菊花状の陽刻文が確認できる。外面にのみ銅緑釉を施している。素地は淡橙褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。

同図８は酒会壺の胴部片であると思われる資料である。外面には型押しによるものと思われる鎬文状の縦位の線が確認できる。外面にのみ銅緑色の釉を施している。素地は淡橙褐色の粗粒子である。用物座地区出土。

同図９は壺の底部である。外底面が上げ底状に成形され、高台断面には積み痕が確認できる。高台外面と外底面は比較的丁寧に成形する。釉薬は確認できない。素地は淡橙褐色の粗粒子である。高台径は19.0㎝である。用物座地区出土。

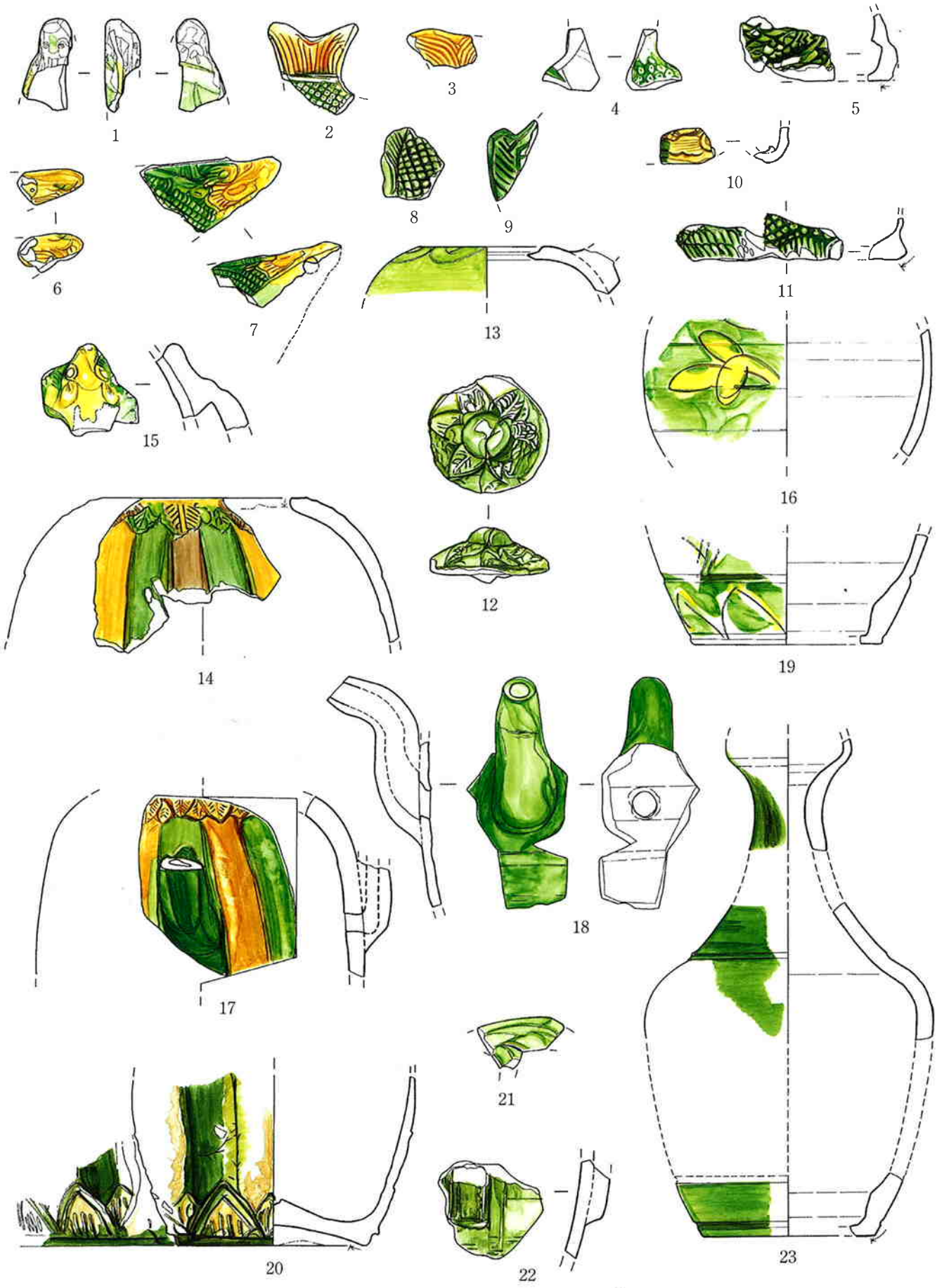
同図10も壺の底部資料である。外底面は上げ底状に成形されており、高台の断面からは積み痕が確認できる。外面および外底面は比較的丁寧に成形している。外面の一部には銅緑色の釉薬が施されているのが確認できる。素地は淡橙褐色の粗粒子である。底径は18.8㎝である。木曳門地区出土。

器種不明（第49図11～12）

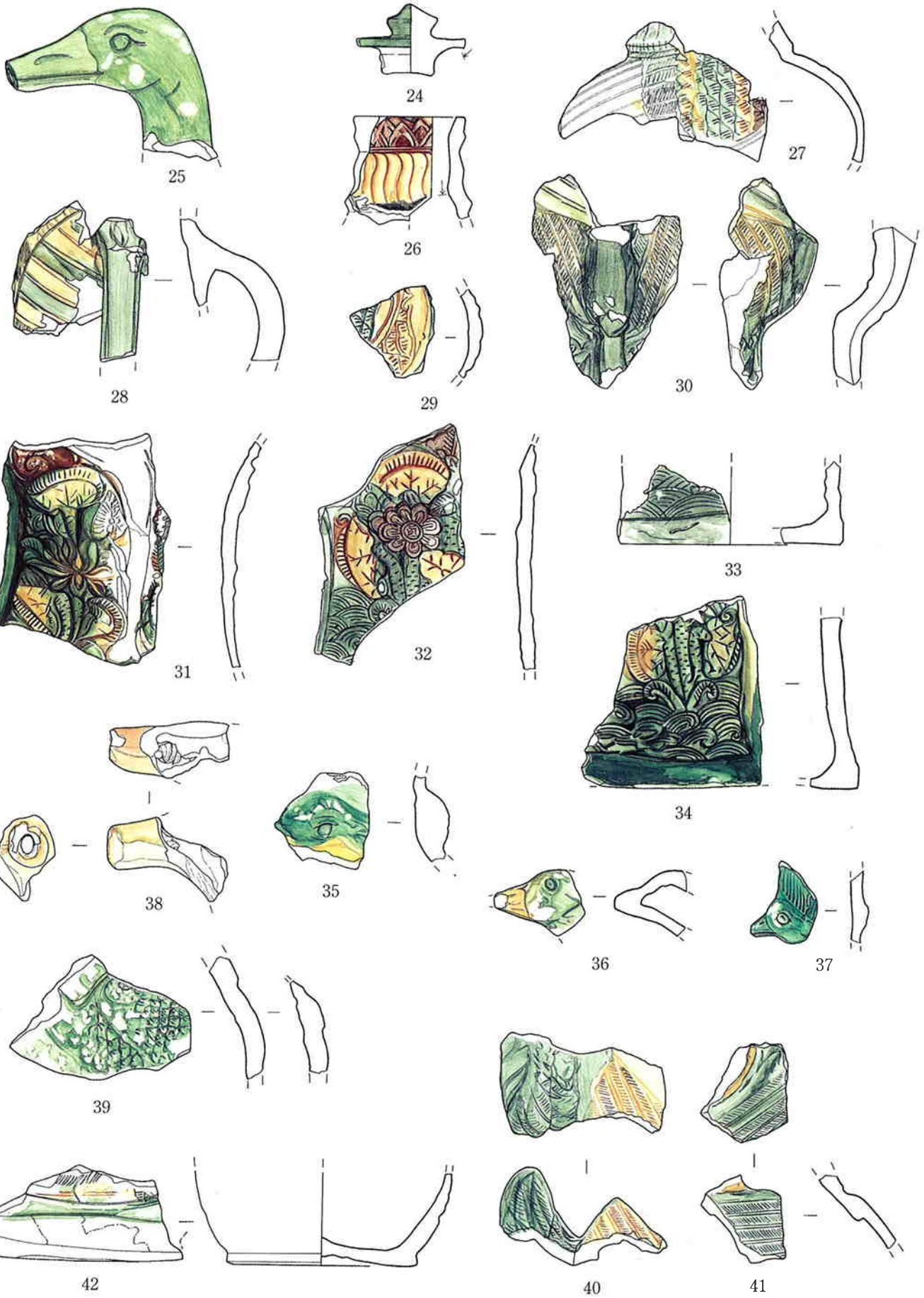
器種不明の資料が確認されている。いずれも同タイプのものであると考えられる資料である。

同図11は底部資料であると考えられる。底部を平坦に成形しており、外底面には布目状の痕跡が確認できる。底部から胴部へは若干開き気味ではあるが、ほぼ垂直に成形されている。胴部外面と内面は総釉である。外底面は露胎である。素地は淡橙褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。

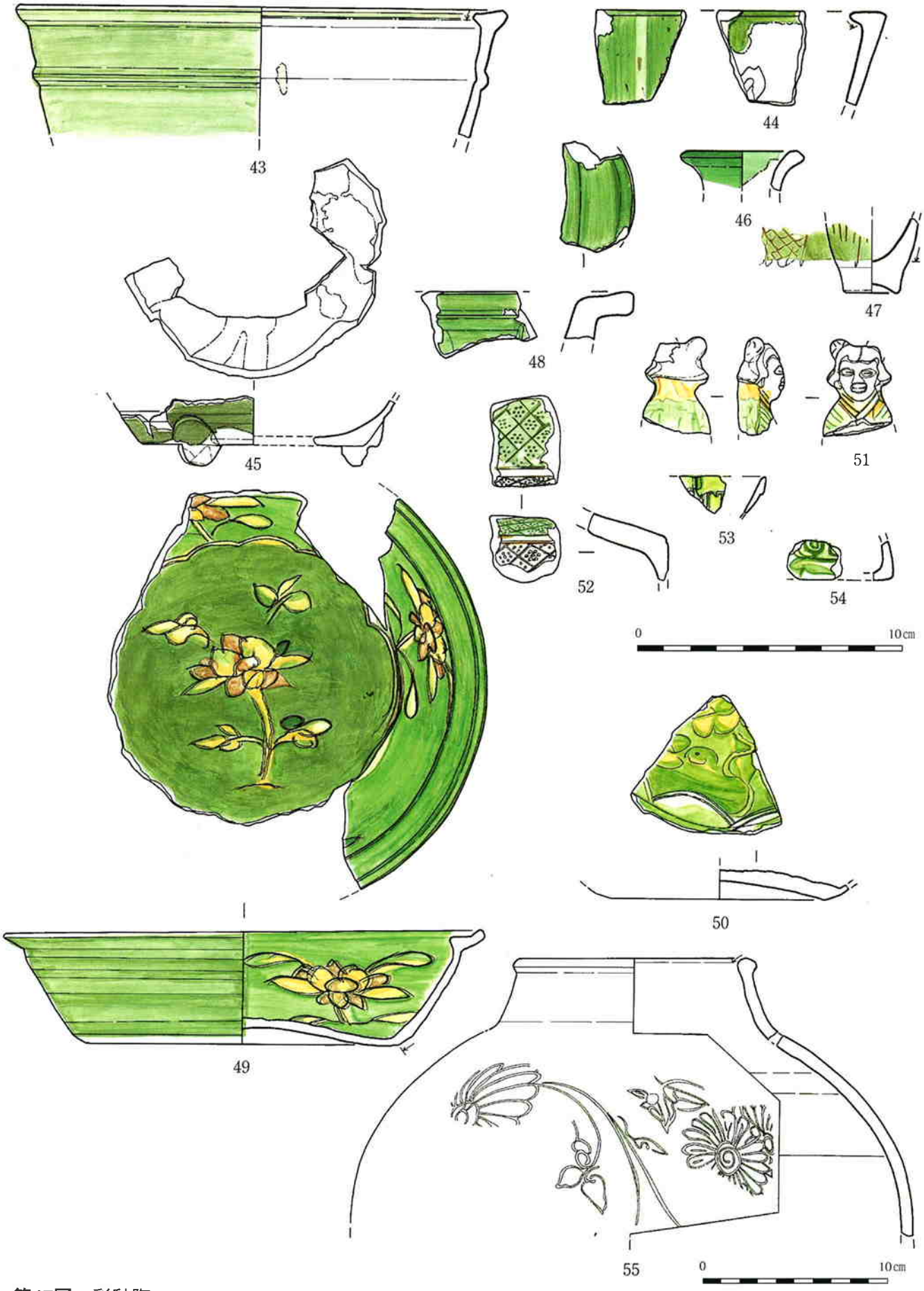
同図12も図11と同タイプの資料であるものと考えられ、同一個体の可能性も考慮される。底部からほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は舌状に尖らせて成形している。上面及び下面から楕円形をなすものと考えられている。胴部外面と内面は総釉である。外底面は露胎であるものと考えられる。素地は淡橙褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。



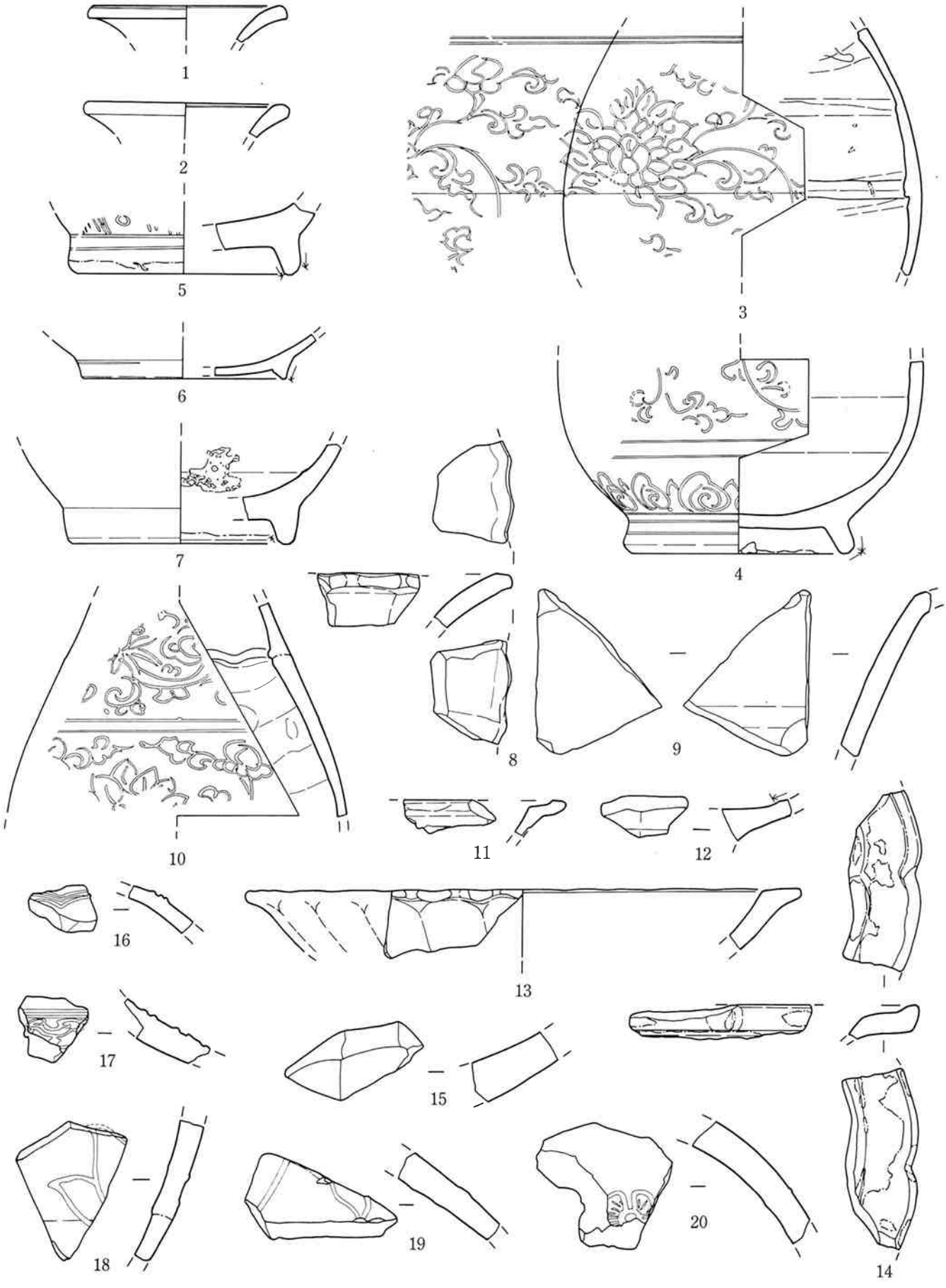
第45図　彩釉陶



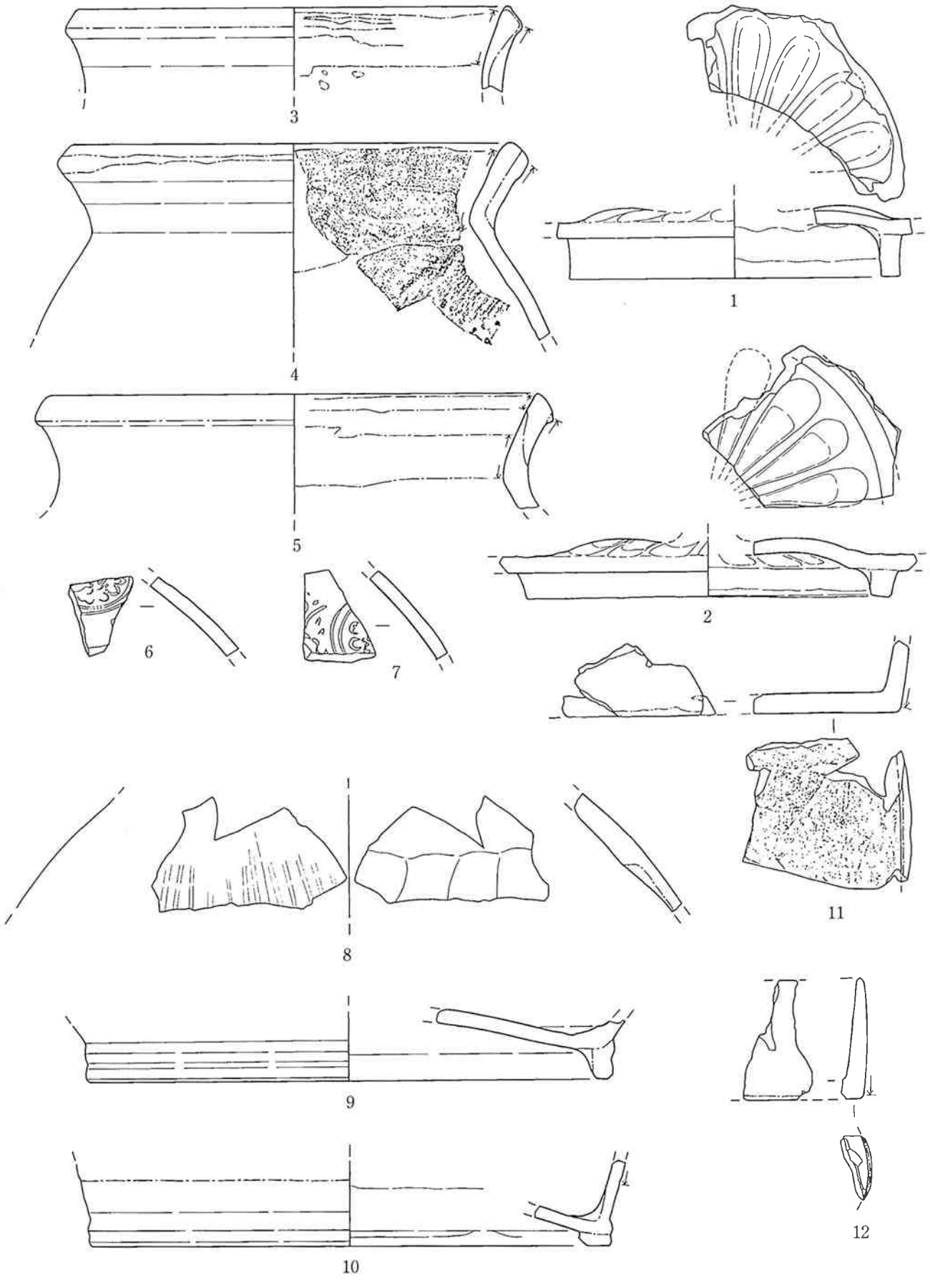
第46図　彩釉陶



第47図　彩釉陶



第48図　彩釉陶



第49図　彩釉陶

第11節　黒釉陶器

黒色の釉薬が施された陶器を黒釉陶器として取り扱った。以下、個々の特徴等について記述することとする。

黒釉天目茶碗（第50図１～16）

第50図１は口縁部片で、高台脇から逆「ハ」の字状に開き、角度を変え立ち上がる。茶色と黒色の釉を胴下部まで施釉。素地は淡黒灰色の細粒子で微細な白色の鉱物を含む。口径は12.8㎝。木曳門地区出土。同図２も口縁部片。国産の可能性も考慮される。茶色と黒色の釉を胴下部まで施釉。素地は淡橙灰色の細粒子。口径は13.1㎝。下之御庭地区出土。同図３も口縁部片。逆「ハ」の字状に開いた胴部を角度を変え立ち上がらせ、口縁部とする。両面に黒色と茶色の釉を施す。素地は淡灰白色の細粒子で微細な黒色の鉱物を含む。口径は10.2㎝。広福門地区北西出土。同図４も口縁部片。図２同様、国産の可能性が考慮される。角度を変えて内傾させた後に外反させる。両面に黒色の釉を施す。素地は淡橙色の細粒子。口径は10.2㎝。下之御庭地区出土。同図５も口縁部片。胴上部で角度を変えて立ち上がり、微弱に外反する。黒色と茶色の釉を胴下部まで施す。素地は淡灰黒色の細粒子。口径は11.5㎝。廣福門地区北西出土。同図６も口縁部破片。両面に黒色と茶色の釉を施す。素地は灰黒色の細粒子で微細な白色の鉱物を含む。口径は12.0㎝。下之御庭地区出土。同図７も口縁部片。胴上部で角度を変えて立ち上がり口縁部へと移行。両面に黒色と茶色の釉を二度掛けする。素地は淡灰黒色の細粒子で微細な黒色の鉱物を含む。口径は10.5㎝。木曳門地区出土。同図８も口縁部片。両面に黒色の釉を施す。素地は淡灰白色の細粒子。口径は10.5㎝。下之御庭地区出土。同図９は底部片。畳付外端を斜位に削り、高台内刳りは浅い。高台脇を水平にする。内面から胴下部まで茶色と黒色の釉を二度掛けしている。素地は淡橙褐色の粗粒子。底径は4.6㎝。木曳門地区出土。同図10も底部片。畳付外端を斜位に成形し、高台内刳りはやや深い。高台脇を水平に成形する。両面に厚く黒色の釉を施す。素地は灰白色の細粒子で微細な白色の鉱物を含む。底径は4.8㎝。木曳門地区出土。同図11も底部片。畳付外端を斜位にし、高台内刳りは浅い。高台脇を水平に成形する。両面に暗褐色の釉と茶色の釉を二度掛けする。素地は灰黒色の細粒子で微細な白色の鉱物を含む。底径は4.5㎝。下之御庭地区出土。同図12も底部片。畳付外端を斜位にし、高台内刳りは浅い。高台脇を水平に成形する。両面に黒色と茶色の釉を二度掛けする。素地は淡灰白色の細粒子で微細な白色の鉱物を含む。底径は4.2㎝。用物座地区出土。同図13も底部片。畳付外端を斜位にし、高台内刳りは浅い。高台脇を水平に成形する。両面に黒色と茶色の釉を二度掛けする。素地は淡灰白色の細粒子。底径は4.7㎝。漏刻門地区埋土中。同図14はかなり薄造りである。畳付外端を斜位にし、高台内刳りは浅い。内面に黒色と茶色の釉を二度掛けする。素地は淡灰白色の微粒子。底径は5.3㎝。表採。同図15は雑な成形で、高台脇を水平にするタイプである。内面に黒色と茶色の釉を二度掛けする。素地は淡灰白色の細粒子で微細な黒色の鉱物を含む。底径は4.3㎝。木曳門地区出土。同図16はこれまでのとはタイプが異なり、高台内刳りが「ハ」の字状になる。高台脇を水平に成形する。高台外面まで茶色の釉を施す。素地は淡灰黒色の細粒子。微細な黒色の鉱物を含む。底径は4.2㎝。木曳門地区出土。

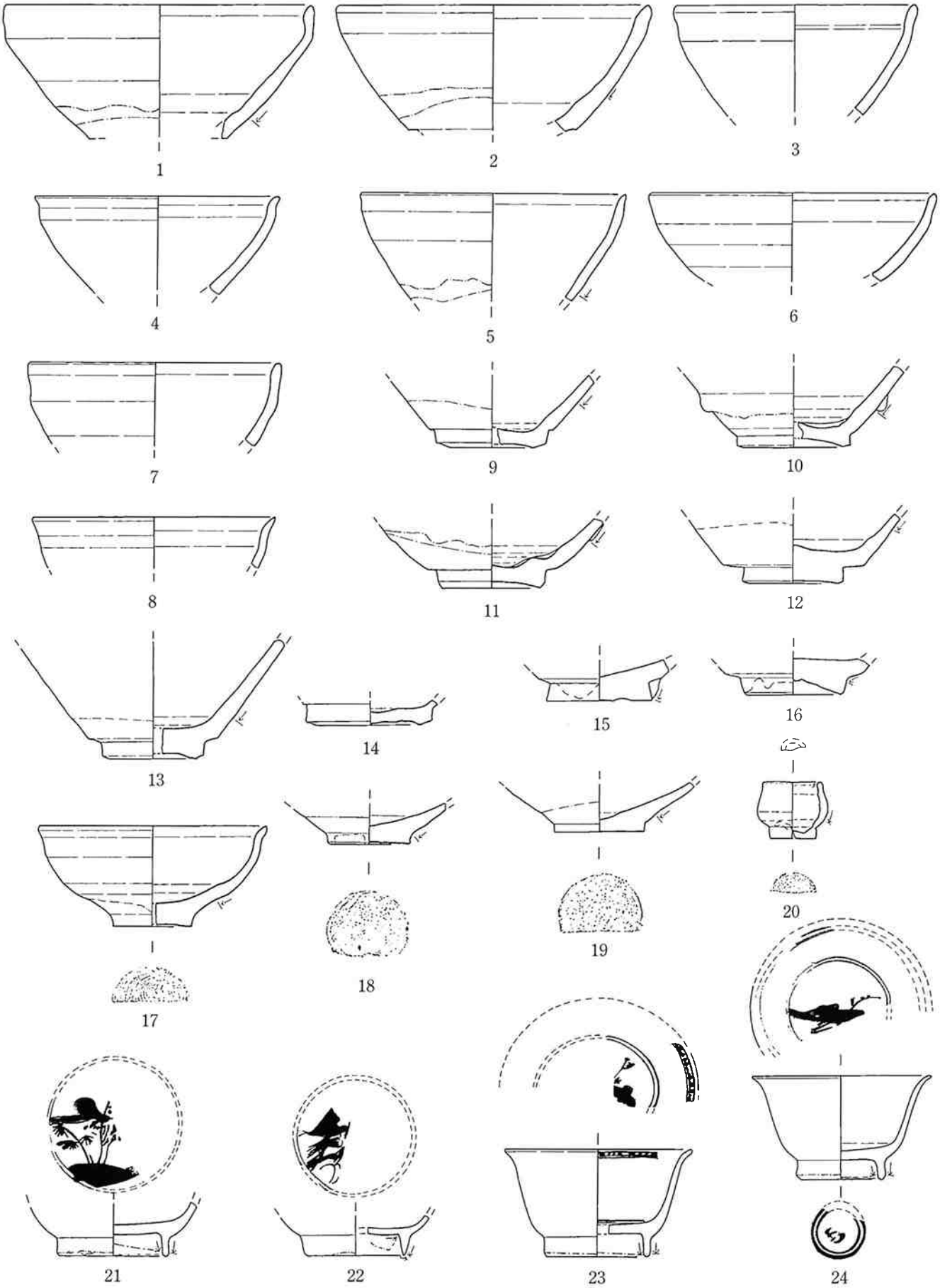
黒釉碗（第50図17～20）

同図17は底部をやや水平に成形し、丸みをもって立ち上がる。口縁部は微弱に外反する。胴下部まで暗茶色の釉を施す。素地は淡灰白色の粗粒子。口径9.5㎝、器高3.3㎝、底径4.2㎝。木曳門地区出土。同図18、19は底部片。釉調・素地ともに図17と同様。底径は前者が3.5㎝、3.7㎝。下之御庭地区、漏刻門地区出土。同図20は小杯だがここで扱った。底部は水平で、胴部は丸みを持って立ち上がり内傾する。口縁部から胴下部まで暗茶色の釉を施す。素地は灰白色の細粒子。口径2.5㎝、器高2.4㎝、底径2.0㎝。用物座地区出土。

第12節　鉄釉染付

小杯の口縁破片が４点出土している。完形品のみを図化した。

第50図21～24は口縁部が僅かに外反する小杯の破片資料である。推算径はそれぞれ底径4.4㎝、底径4.0㎝、口径7.8㎝、器高4.5㎝、底径4.4㎝、口径7.5㎝、器高4.3㎝、底径3.4㎝である。外面の釉はそれぞれ暗茶褐色を呈している。内面の釉色は淡青白色を呈する。素地は白色の微粒子である。口縁直下内面には２本の圏線やくずれた青海波文を表現する。見込みには２本の圏線と中央に山水文を表現している。外底に２本の圏線と銘がみられる。



第50図　黒釉陶器・鉄釉染付

第13節　鉄　絵

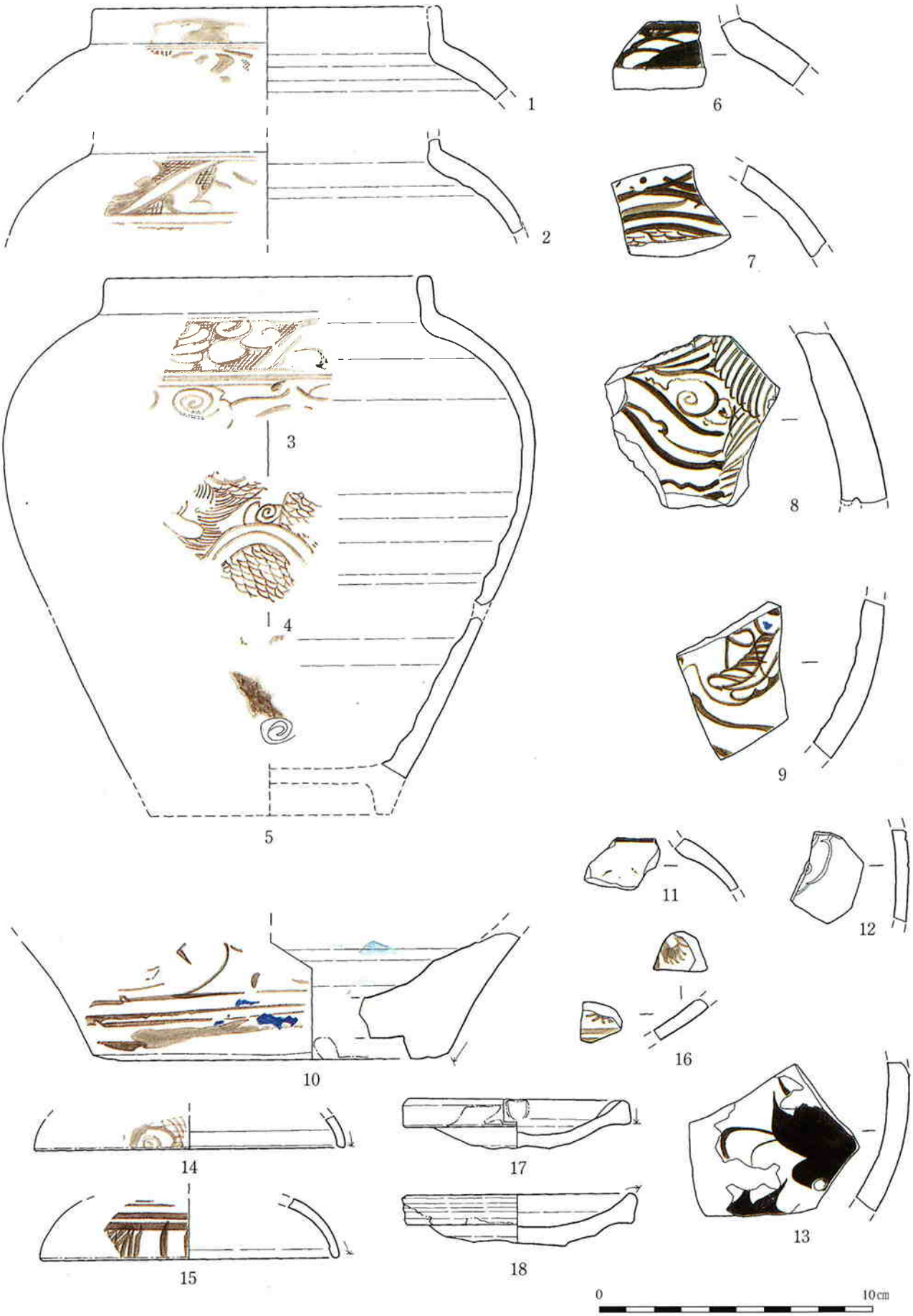
中国産とタイ産の鉄絵が検出されている。確認された器種は壷（袋物含）・蓋の２つであるが、器種不明の特徴的な資料についても図化した。以下に個々の特徴等について述べることとする。

中国産鉄絵

中国産鉄絵で確認されたのは壷（袋物含）のみである。広義の意味で、いわゆる磁州窯に属するものと考えられる。　第51図１は壷の口縁部である。内傾する胴部を角度を変えて立ち上がらせ口縁部とするが、口唇部は欠落する。比較的厚めに成形されている。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後、外面に鉄釉による文様を表すが構成は判然としない。二次的な被熱を受けている。素地は淡桃褐色の粗粒子。口径は18.2㎝である。木曳門地区出土。同図２は肩部片である。胴部を内傾させて角度を変えて立ち上がらせ口縁部とする。内面には調整痕が見られる。両面に白化粧を施した後に外面に鉄釉により圏線や格子を伴った文様等を描くが判然としない。二次的被熱を受ける。素地は淡桃褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。同図３～５は同様の資料を積極的に推定復元したものである。底部から逆「ハ」の字状に開き、肩部からきつく内傾させた後に角度を変えて立ち上がらせて口縁部とする。口唇部は丸みを帯びる。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後に外面に鉄釉により圏線・格子を伴った花文？や胴部には雲文・龍等を描いているが文様構成等は判然としない。二次的被熱を受けている。素地は淡桃褐色の粗粒子である。推定法量は口径が17.0㎝、器高が28.5㎝、底径が12.6㎝である。いずれも木曳門地区出土。同図６は壷の肩部片である。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後に外面に鉄釉により格子や花文？を描くが構成等は判然としない。素地は淡桃褐色の粗粒子である。木曳門地区出土。同図７も肩部片である。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後に鉄釉により龍？等を描くが文様構成は判然としない。素地は淡桃褐色の粗粒子である。廣福門地区北西出土。同図８は壷の胴部片であると思われる資料である。内面には調整痕が観察出来る。内面には鉄釉を施し、外面には白化粧を施した後に鉄釉により龍？の一部や雲文等を描いている。素地は淡桃褐色の粗粒子で微細な白色・黒色・茶紫色の鉱物を多量に含んでいる。下之御庭地区出土。同図９も胴部片である。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後に外面に鉄釉による文様を描いているが構成等は判然としない。一部に翡翠釉の痕跡が観察できることから、外面の全体に翡翠釉を施した翡翠釉鉄絵壷が想定される。素地は淡橙褐色の粗粒子である。漏刻門地区出土。同図10は壷の底部片である。高台内刳りは比較的浅く、胴部は開き気味に成形する。かなり厚めである。内面には調整痕が観察できる。両面に白化粧を施した後に鉄釉により、高台外面には圏線を描き、胴部外面にも文様を描くが判然としない。両面とも図９と同様に翡翠釉の痕跡が観察できることから翡翠釉鉄絵壷になるものと考えられる。素地は淡桃褐色の粗粒子である。底径は13.0㎝である。下之御庭地区出土。同図11は薄手の袋物である。比較的丁寧に成形され、内面に鉄釉、外面には白釉を施した後に鉄釉により文様を描くが判然としない。素地は灰色の細粒子である。廣福門地区北西出土。同図12は胴部片であるが、いわゆる鉄絵とは異なり、外面に鉄釉を施した後に、釉を掻き取る形で線刻の文様を表しているが判然としない。内面は露胎で調整痕が観察できる。素地は灰色の細粒子である。下之御庭地区出土。同図13は壷の胴部片である。内面には黒釉が施され、外面には白化粧の後に黒釉により文様を描く。さらにその上から透明釉を施したようである。素地は灰黒色の細粒子である。首里城出土地不明。

タイ産鉄絵

第51図14は合子の蓋である。外面に白化粧を施した後に鉄釉により渦文？や格子を描いて、透明釉を施す。内面は露胎である。素地は黄灰白色の粗粒子で微細な黒色の鉱物を含む。径は11.4㎝。同図15も合子の蓋である。外面に白化粧を施した後鉄釉により圏線・縦位の線・格子を描き、上から透明釉を施す。内面は露胎である。素地は黄灰白色の粗粒子で微細な黒色の鉱物を含む。径は11.0㎝。同図16はタイ産鉄絵の器種不明胴部片である。両面に白化粧後、鉄釉により圏線と不明の文様を描いて透明釉を施す。素地は黄灰白色の粗粒子で微細な黒色の鉱物を含む。廣福門地区出土。同図17、18は産地不明の資料であるがここで扱った。落とし蓋であると考えられ、全体に雑な成形である。上面には茶褐色の鉄釉が施される。素地は橙褐色の粗粒子である。最大径は図17が8.4㎝、図18が8.6㎝である。いずれも木曳門地区出土。



第51図　鉄絵

第14節　中国産無釉陶器

第52図である。茶器を中心に生産している江蘇省宜興窯所産の無釉陶器である。急須を中心にして、蓋、水差などが得られた。いずれも薄手で堅緻であるが、同図４・８などはやや軟質である。素地は精製された砂泥質で、紫泥と朱泥があり、前者が多いように見受けられる。器面の調整は磨き調整がなされ、内面はロクロ痕が残るものが見受けられる。無文のものがほとんどで、15のスタンプ状の沈文、16・22のように盛上げを施すものがみられる。

同図１～11は急須である。全形を伺うことのできる資料はないが、口径が５～６㎝、底径が４～６㎝の小型の急須である。丸みを帯びた器形になると思われるが、６はやや長胴形をなす。口縁部は大まかに、１・２・４のように内彎するもの、３のように立ち上がるものがみられる。２はコーヒーカップ状の形状をなす。底部は若干上げ底である。10・11は把手で、大きめの急須であると思われる。

同図12～15は蓋で、いずれも急須の蓋と思われる。12・13は饅頭形で、14・15は一段を設ける。

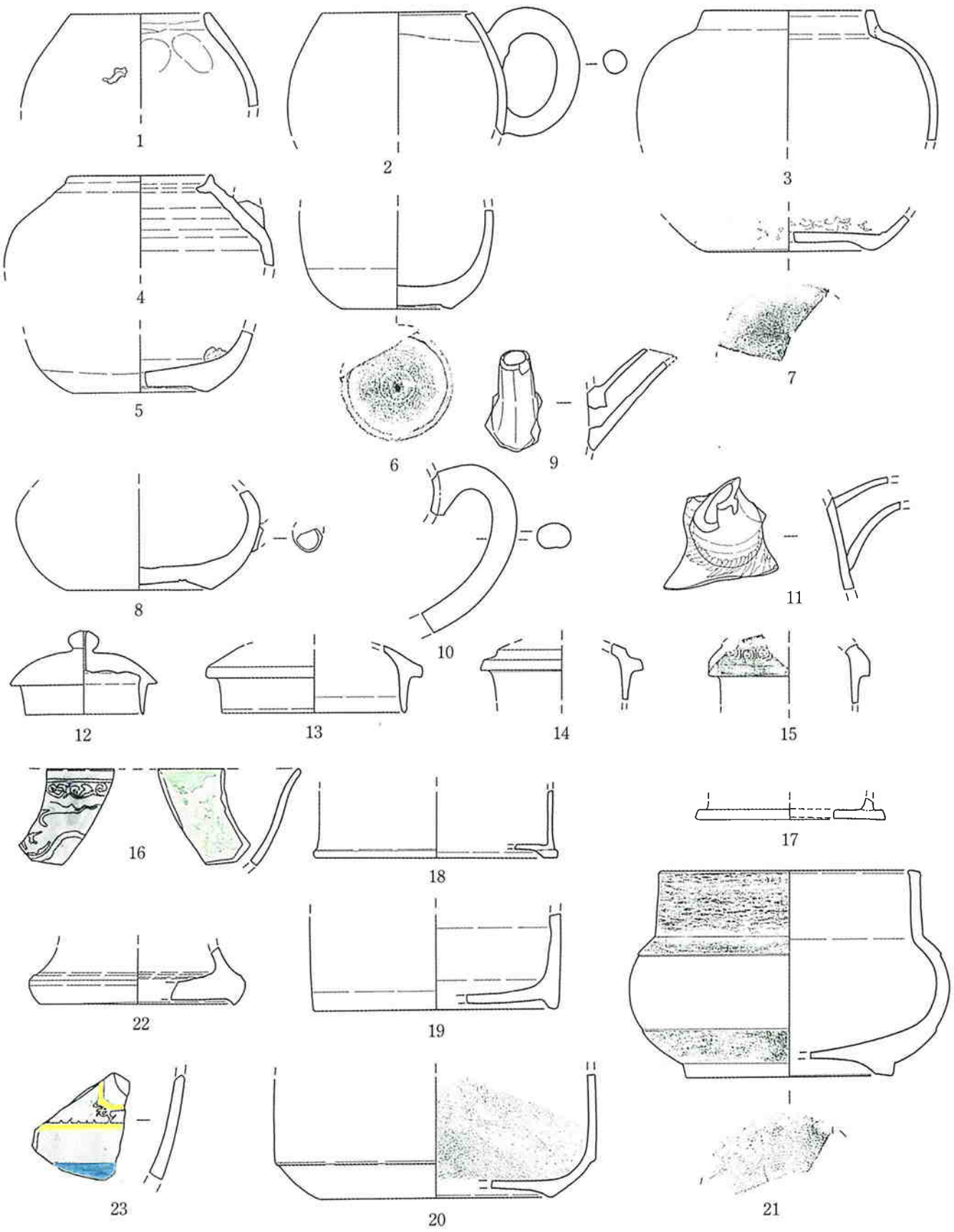
同図16は碗もしくは鉢で、口縁はわずかに外反する。内外面に盛上げによる施文。

同図17～22は水差である。17～20は直立する器形で、21は胴部が大きくふくらむ。22は腰部でくびれて立ち上がる器形である。底部は、平坦なもの（17）、上げ底（18～22）がみられる。

同図23は器種不明。内面にロクロ痕が残ることから、瓶や急須状の器種が考えられよう。外面には盛上げによる施文。

第15表　中国産無釉陶器観察表

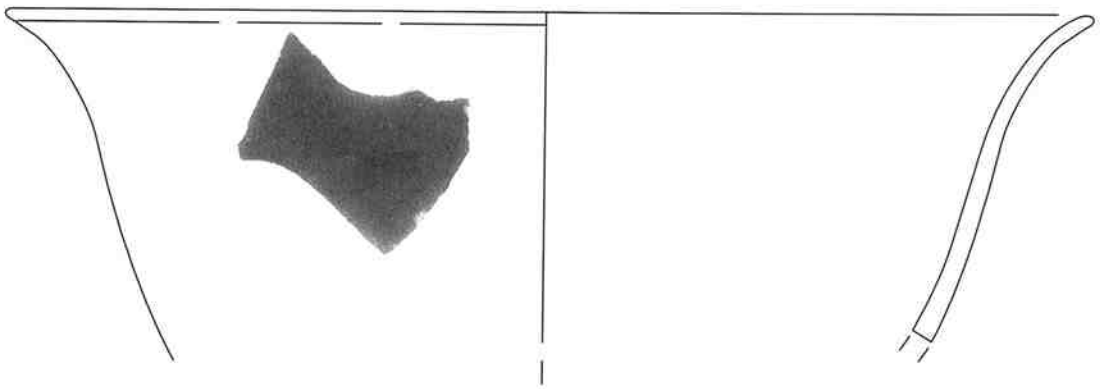
図番号	器種	計測値（cm）			出土地区		特徴等
		口径	底径	器高	地区	グリッド等	
1	急須	5.2			木曳門	M1-147	外面は磨き、内面は粗く指痕が残る。紫泥、微細な白色鉱物がわずかに入る。
2		5.6			下之御庭		コーヒーカップ状の器形。外面は磨き、内面は指痕が残る。朱泥。
3		6.3			下之御庭 木曳門	L10-143・144	口縁部が直立する。外面は磨き、内面は指痕が残る。紫泥、白色鉱物を含む。
4		5.2			下之御庭		蓋受けをつくる。把手を貼付。外面は磨きで、器面は粗れている。内面はロクロ痕。朱泥。
5			5.0		下之御庭		若干上げ底。外面は磨き、内面はロクロ痕。朱泥。
6			4.1		下之御庭		若干上げ底。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕。堅緻で厚手。紫泥、微細な白色鉱物をわずかに含む。外底面に「四」の文字。
7			6.3		木曳門	M1-137	上げ底。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕、内底面も磨き？。紫泥、微細な白色鉱物をわずかに含む。外底面に不明の文字。
8			5.4		下之御庭		上げ底。外面は磨いているが剥落が著しい。内面はロクロ痕。把手を貼付。朱泥、微細なガラス質鉱物を含む。
9					木曳門	M9-147	急須の注口。外面は丁寧な磨き。紫泥。
10					木曳門		急須の把手。外面は丁寧な磨き。紫泥、微細な白色鉱物をわずかに含む。
11					下之御庭		急須の把手で中空。外面は丁寧な磨きで把手の貼付痕が残る、内面はロクロ痕。紫泥。
12	蓋	5.5	4.3	3.1	下之御庭		饅頭形の器形。摘みは孔が貫く。外面は磨き、内面はロクロ痕。朱泥。
13		8.0	6.7		用物座		饅頭形の器形。外面は磨き、内面はロクロ痕。紫泥。
14			6.0		木曳門		段を設ける。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕。紫泥、微細な白色鉱物を含む。
15			6.0		木曳門	L10-131	段を設ける。渦文状のスタンプ文。外面は磨き、内面はロクロ痕。
16	碗・鉢				下之御庭		碗もしくは鉢、口縁は若干外反。内外に盛上げ、殆ど剥落。紫泥。
17	水差		7.0		木曳門	M1-129	底面は平坦で外に突出。外面は磨き。紫泥、白色鉱物をわずかに含む。
18			9.0				底面は上げ底で外に突出。外面は丁寧な磨きで、内面はナデ。紫泥、薄手で堅緻。
19			9.0		廣福門	北西	底面は上げ底。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕。紫泥。
20			8.6		下之御庭		腰部が丸みを帯び、段を設ける。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕。紫泥。比較的薄手。
21		9.7	7.6	7.7	下之御庭		胴部が膨らむ器形で段を設ける。外面は、胴部に磨き、口縁部と腰部はささくれ状にする。内面はロクロ痕。外底面にスタンプ文。紫泥。
22			7.2		廣福門	北西	底部が大きく膨らみ、厚くつくる。上げ底。外面は丁寧な磨き、内面はロクロ痕。紫泥。
23	不明				用物座	L6-122	瓶か急須のような器種？。外面は盛上げによる施文、内面はロクロ痕。紫泥、白色鉱物を含む。



第52図　中国産無釉陶器

第15節　褐釉磁器

第53図で、類例資料が京の内から２片出土している。今回両者と確認したところ、口縁部資料（第71図）と同一個体であることが分かったため、図上復元したものを掲載する。口縁が外反する鉢もしくは碗で、口径14.6㎝（再計測を行った）。釉色は褐色、素地は白色である。極めて薄手で硬質。景徳鎮窯とされる。木曳門L4-132出土。



第53図　褐釉磁器、図版2　褐釉磁器

第16節　高麗青磁

高麗青磁で確認されている器種としては、碗・鉢・皿・盤・瓶の５器種であった。以下、個々の特徴等について記す。

碗（第54図１～２、４）

第54図１は碗の口縁部で、ゆるやかに外反させるタイプである。両面に圏線が数条確認できる。淡緑灰色の釉を両面に施すが、二次的な被熱を受けているため本来の釉調は判然としない。素地は灰白色の微粒子で、微細な黒色の鉱物を含んでいる。口径は17.8㎝である。木曳門地区出土。

同図２も口縁部の資料である。微弱に外反させるタイプ。外面２本、内面３本の圏線が確認できる。内面の胴部にも何らかの文様が確認できるが判然としない。緑灰色の釉を両面に施す。素地は灰白色の微粒子である。木曳門地区出土。

同図４は碗の胴部片かと思われる資料である。外面には円形の窓の内に菊花文と思われる文様が確認できる。内面には４本の圏線が確認できる。両面に緑灰色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。廣福門地区出土。

鉢（第54図３）

同図３は鉢の口縁部資料と思われる。両面の口縁部直下には２本の圏線が確認できる。内面直下の圏線の下部にも文様が確認できるが判然としない。緑灰色の釉を両面に施し、細かい貫入が観察できる。素地は灰白色の微粒子である。口径は25.0㎝である。漏刻門地区出土。

皿（第54図５、７～８）

同図５は皿の底部資料である。高台内刳りは浅く成形されており、腰部で角度を変えて立ち上がる。内面の見込みには花文・圏線・点描文の組み合わせによる構成をする。素地は灰白色の微粒子。高台径は4.8㎝。用物座地区出土。

同図７は皿の口縁部である。内彎タイプの資料である。外面には１本の圏線と唐草文？と思われる文様が描かれている。内面には口縁部直下の区画内に唐草文を表し、胴部には２本の圏線が確認できる。両面に緑灰色の釉を施している。細かい貫入も確認できる。素地は淡灰白色の微粒子である。口径は20.8㎝である。下之御庭地区出土。

同図８は皿の胴部破片資料である。外面には２本の圏線による区画内に連続文を表す。内面は２本の圏線による区画帯と小珠状の連続文を表している。緑灰色の釉を両面に施している。素地は灰白色の微粒子である。下之御庭地区出土。

盤（第54図６、９）

同図６は盤の底部である。厚く成形されている。高台内刳りは比較的深い。内面見込みに印文・圏線・連続文等が確認できる。両面に緑灰色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。底径は7.7㎝である。廣福門地区出土。

同図９は盤の胴部である。外面には唐草文と思われる文様を胴中央に表し、下部には圏線と印文を表す。内面には牡丹唐草文らしき文様と圏線を表す。黄緑灰色の釉を両面に施す。細かい貫入が両面に観察できる。灰白色の微粒子である。廣福門地区出土。

瓶（第54図10～14）

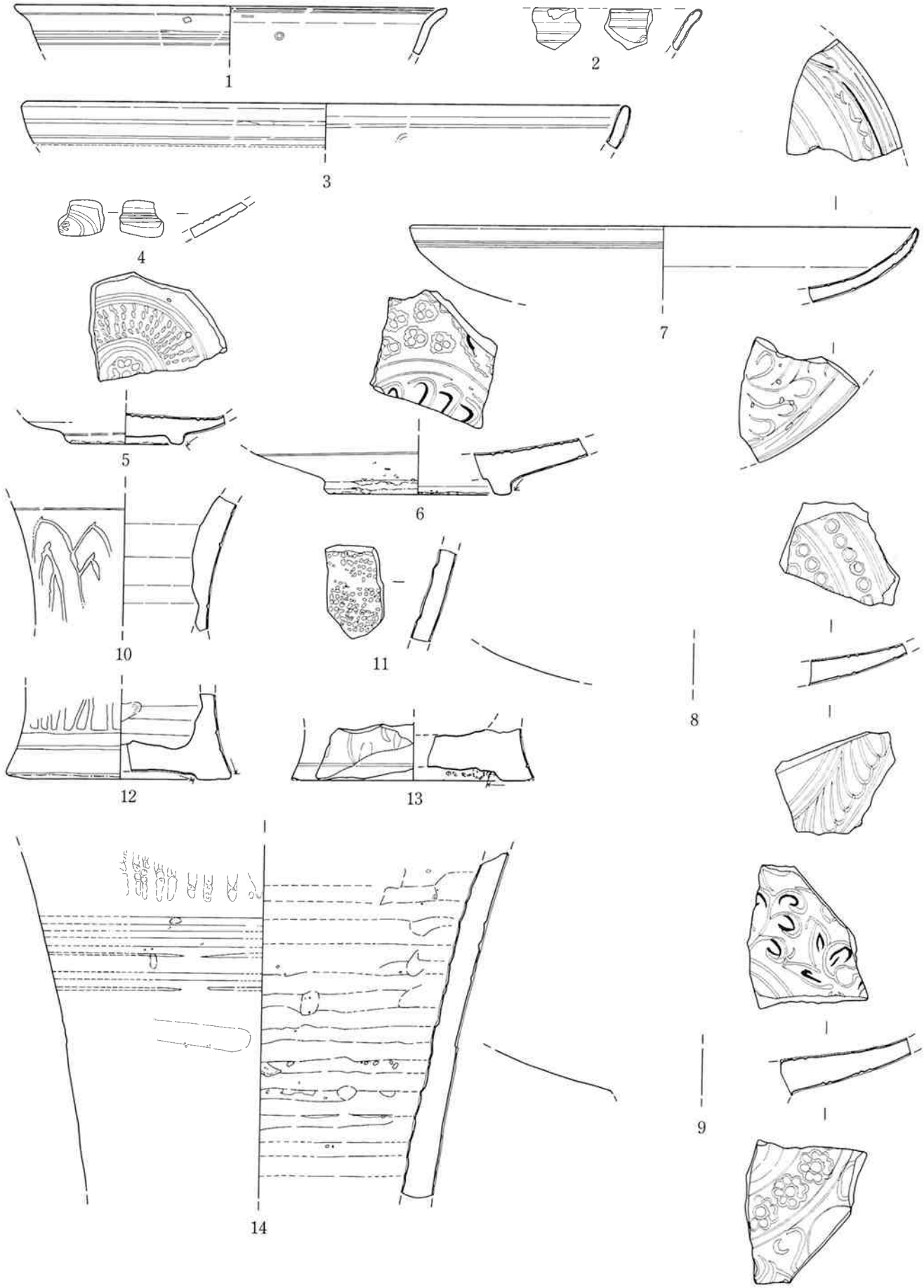
同図10は瓶の胴部資料である。外面には芭蕉文と圏線を表している。内面には調整痕が確認できる。外面にのみ濃緑灰色の釉を施す。素地は暗灰白色の微粒子。用物座地区出土。

同図11も胴部片である。外面に点描文かと思われる文様を表し、両面に黄緑灰色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子。下之御庭地区出土。

同図12は底部資料である。外面には文様が確認できるが判然としない。外面に濃緑灰色の釉、外底面及び内面は露胎。底径は９㎝である。木曳門地区出土。

同図13も底部資料で、破損が激しい。底部外面に何らかの文様が確認できる。外面のみに緑灰色の釉。素地は灰白色の微粒子。廣福門地区出土。

同図14は大型の瓶の胴部片である。外面には点描文と圏線が確認できる。両面に淡緑灰濁色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子である。首里城試掘。



第54図　高麗青磁

第17節　ベトナム産磁器

ベトナム磁器の破片資料が得られている。青花と色絵の２つがあり、確認された器種としては、碗・盤・瓶・壷・蓋・型物（水注）の６つである。また器種不明の資料も１点得られている。以下に個々の特徴等について記述することとする。

青　花

碗（第55図１）

第55図１は青花磁器の碗の破片資料である。藍濁色の呉須で、外面の胴下部に渦文を３個連結して雲文状の模様を表す。内面の見込みには、１本の圏線と連続文らしきものが確認できる。両面に灰白色の釉を施している。素地は、灰白色の微粒子で、僅かながら微細な灰黒色の鉱物を含んでいる。漏刻門地区出土。

盤（第55図２～４）

同図２は盤の胴部片と見られるものである。暗藍色の呉須により、外面には草花文を表し、内面には植物と思われるものを表現している。淡黄灰白色の釉を両面に施している。素地は灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が見られる。下之御庭地区出土。同図３は、口縁部が額縁状をなすタイプで、暗藍色の呉須により、内面口縁部直下には蔓唐草状の文様と２本の圏線を表し、見込みには判然としない文様を表す。外面には２本の圏線と判然としない文様を表している。両面に淡黄灰白色の釉を施す。素地は灰白色の微粒子で、僅かながら微細な灰黒色の鉱物を含んでいる。用物座地区出土。同図４は、盤の底部であると思われる資料である。内面の見込みには、淡藍濁色の呉須により判然としない文様を表す。両面に淡灰白色の釉を施し、外底面には鉄釉が施されている。素地は灰白色の微粒子である。底径は6.0㎝。木曳門地区出土。

瓶（第55図５～10）

同図５は玉壺春瓶型の破片資料を積極的に復元したものである。同資料は、首里城跡京の内地区より出土した玉壺春瓶型の資料と同等のものであると思われる。口縁部を８角形に面取して成形し、外面の胴部には、花弁状の窓枠を貼り付けている。高台は６面に成形されており、京の内出土の資料とは若干異なる。口縁部の内面には、淡藍色の呉須により瓔珞文状の連続文を、外面には芭蕉文を表している。胴部には宝相華唐草文と思われる文様を表し、高台脇には青海波を表している。畳付外端から外底面を除いた両面には、灰白色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子で僅かに微細な黒色の鉱物を含んでいる。推定された口径は最大で8.0㎝、最小で7.4㎝、器高は29.9㎝、底径は最大で9.4㎝、最小で9.0㎝。木曳門地区、用物座地区出土。同図６は、瓶の頚部から胴部にかけての破片資料である。外面頚部には淡藍濁色の呉須により、縦位の文様を表して２本の圏線で区画帯の内部には雷文帯を表している。胴部には交座間帯文や雲文等が描かれている。内面には積み痕が確認できる。外面に淡黄灰白色の釉を施す。素地は淡灰白色の微粒子である。下之御庭地区出土。同図７は胴部片である。外面には藍濁色の呉須により、八宝文状の文様を表している。内面には調整痕が確認できる。両面には淡灰白色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子である。木曳門地区出土。同図８も胴部片であると思われる。瓜状に型成形されており、外面には淡藍濁色の呉須でラマ式蓮弁文を表している。内面には轆轤痕が確認できる。淡灰白色の釉を外面にのみ施している。素地は灰白色の微粒子である。木曳門地区出土。同図９は底部資料である。高台内刳りは深く、「ハ」の字状に開く。淡藍濁色の呉須により、縦位と横位の線を表す。畳付外端まで淡灰白色の釉を施し、外底面には鉄釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子である。底径は7.2㎝である。用物座地区出土。同図10も底部資料である。器壁はかなり厚く、高台内刳りは浅い。外面の高台脇には渦文を３個連結して雲文状の模様を表している。両面に白化粧を施した後に、淡灰白色の釉を施すが二次的な被熱を受けており、本来の釉調は判然としない。素地は淡灰白色の微粒子。木曳門地区、用物座地区出土。

壺（第56図12～13）

同図12は壺の胴部資料である。器壁は厚く、内面には調整痕が確認できる。淡藍濁色の呉須により、草花文と圏線を表している。両面に淡灰白色の釉を施しており、貫入も確認できる。素地は淡灰白色の微粒子である。

下之御庭地区出土。同図13は大型の壺もしくは酒会壺の胴部破片資料である。器壁はかなり厚くなっており、内面には調整痕が確認できる。外面には藍濁色の呉須でラマ式蓮弁文が表されている。両面に淡黄灰白色の釉を施しており、両面に細かい貫入が見られる。素地は淡灰白色の微粒子である。下之御庭地区出土。

蓋（第56図14）

同図14は蓋である。縁端部を上部に反り返した後に稜花状に仕上げている。身受けの突起を逆「ハ」の字状に成形し、下部を平坦に仕上げている。蓋甲頂部には淡藍濁色の呉須で蓮弁文を描いている。蓋甲部の両面には淡灰白色の釉を施す。素地は淡灰白色の微粒子である。径は最大で10.8㎝、最小で5.9㎝。下之御庭地区出土。

型　物（第56図15～20）

用途はいずれも水注であると思われるが、型成形の資料をまとめてみた。同図15は器形は判然としない。外面に羽毛状の文様が確認できる。渦状の文様は鳥の尾もしくは波濤を表したのであろうか。呉須の色調は青白色である。外面に白化粧を施した後に淡灰白色の釉を施しているものと思われる。素地は淡灰白色の微粒子である。用物座地区出土。同図16は鳥形の水注になるものと思われる。外面には藍濁色の呉須で羽毛を描いている。内面には雑な積み痕が確認できる。外面に白化粧を施した後に、淡灰白色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子である。用物座地区出土。同図17も鳥形の水注であろうか。羽毛状の文様を藍色の呉須により描いている。外面に白化粧を施した後に淡灰白色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。用物座地区出土。同図18は三爪龍形の型物水注である。この資料は、首里城跡京の内地区出土資料と同等の資料であると思われる。内面には雑な調整痕が確認できる。外面には藍色の呉須により、三爪龍文を描いており、龍の三爪と思われる部分が底面近くで確認できる。底面を除いた外面には淡灰白色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子である。廣福門地区北西、下之御庭地区、木曳門地区出土。同図19も三爪龍文である。内面には雑な調整痕が確認できる。外面には藍色の呉須により、三爪龍文を描いている。外面には淡灰白色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子である。廣福門地区東西溝出土。同図20は鳥形の水注で図16と同一個体であるものと考えられる。内面及び底面は雑に調整している。外面に羽毛と脚部を描いている。外面に白化粧を施した後に淡黄灰白色の釉を施している。外底面には黒い煤状の物が付着する。素地は淡灰白色の微粒子である。用物座地区、下之御庭地区出土。

器種不明（第56図11）

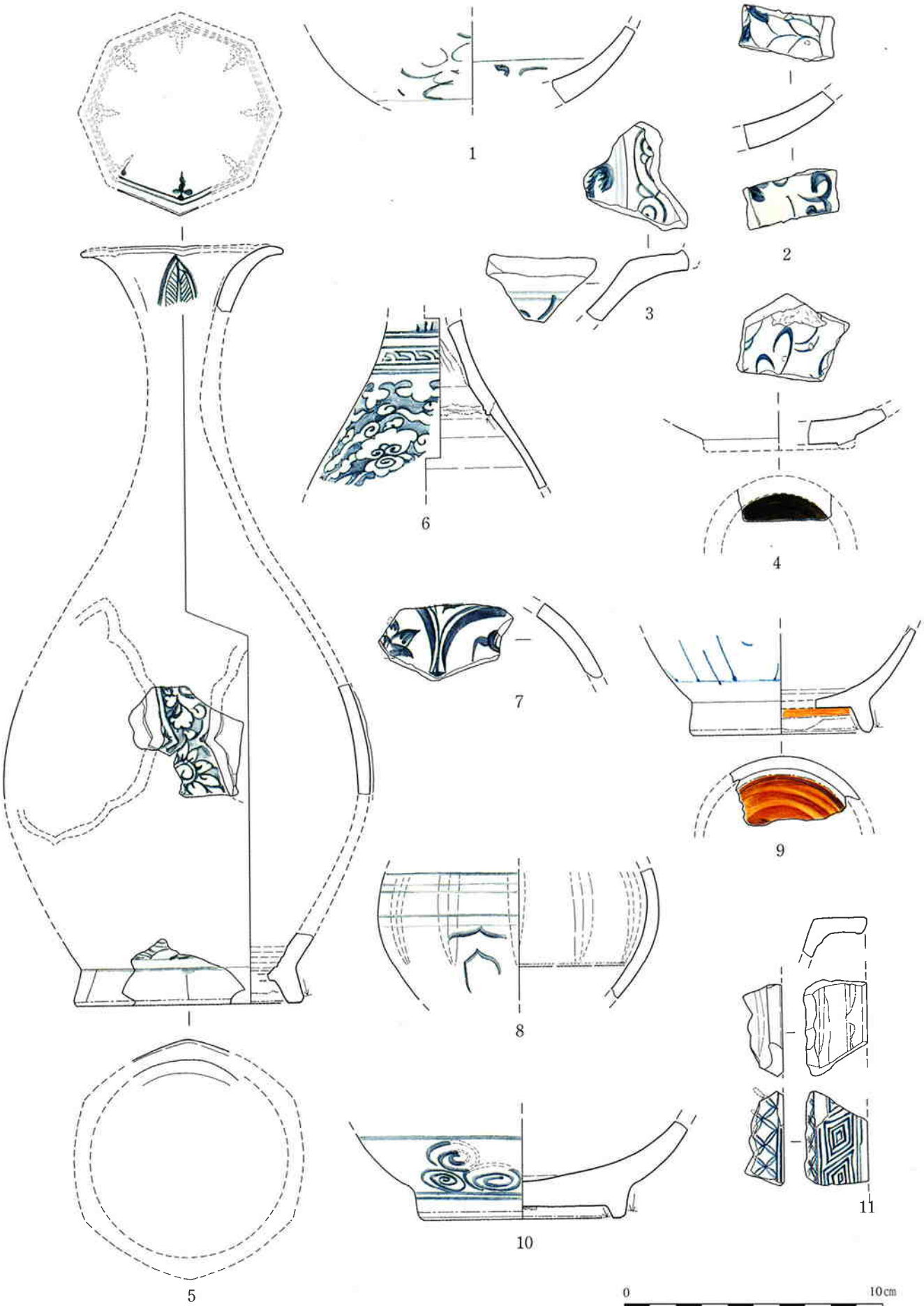
同図11は器種不明の資料である。藍濁色の呉須により七宝繋文と菱形の連続文を描くが、全体の構成は判然としない。淡青濁色の釉を一方に施し、一方は露胎である。素地は淡灰白色の微粒子である。下之御庭地区出土。

色　絵

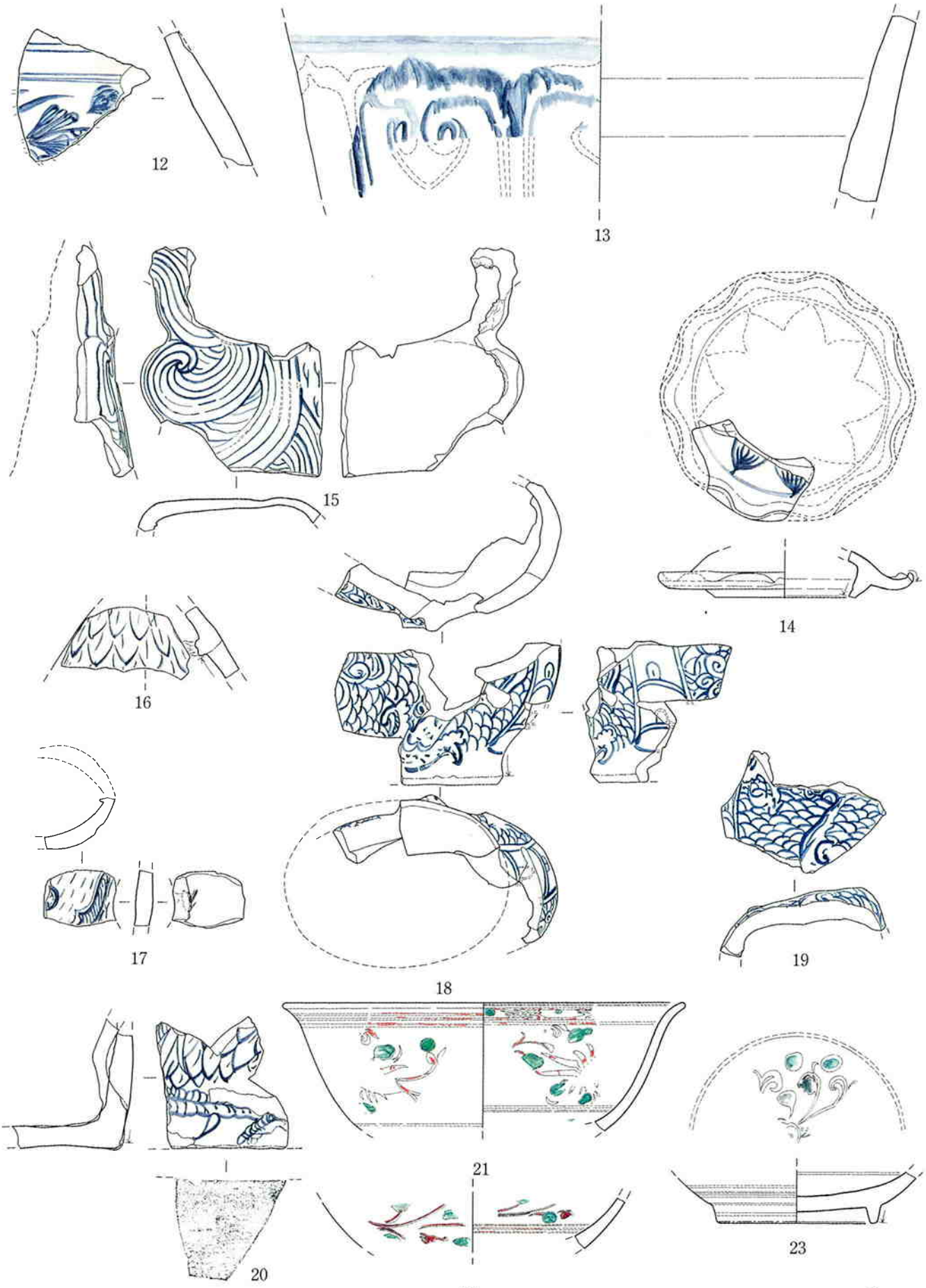
碗（第56図21～23）

同図21は口縁部資料である。外反タイプで、両面に黄灰白色の釉を施している。外面には上絵により３本の圏線と草花文が描かれており、内面には四方襷文状の文様と草花文を描いている。素地は、灰白色の微粒子である。口径は17.0㎝。下之御庭地区出土。同図22は胴部片である。両面に黄灰白色の釉を施すが、変色しているものと思われる。また両面に貫入も見られる。両面には上絵により草花文と圏線が確認できる。素地は淡灰白色の微粒子である。用物座地区出土。同図23は底部資料である。高台内刳りはやや深めで、畳付外端まで淡黄灰白色の釉を施す。内面の見込みには上絵が確認できる。素地は淡灰白色の微粒子である。木曳門地区出土。

追記　校正中に第55図10の瓶底部資料と同図11の器種不明の資料については、西村昌也・西野範子両氏により中国南部（漳州窯）との所見を頂いた。記して感謝申し上げます。



第55図　ベトナム産磁器



第56図　ベトナム産磁器

第18節　タイ産半練

今回の調査で確認された半練土器は、ほとんどが落とし蓋であり身は僅かであった。蓋・身ともに胎土が粗く、混入物に黒色粒・赤色粒・石英・白砂が混入され、焼成が良好で、色調は橙褐色系の器面に灰黒色の素地がサンドウィッチ状に挟まっているのが特徴である。その中でも第57図19は胎土が細かく焼成も悪い事から陶質土器（アカムン）の特徴に類似している。蓋は「撮み」「底面の形態」「端部の突起」の特徴から分類を行った。ただし、全形が伺える資料が乏しい為、今回の分類はそれぞれの部位の相関関係が伺えるものではない。撮みは宝珠形（第57図１～５）と饅頭形（第57図６～８）が確認できた。宝珠形・饅頭形ともに撮みの首部分をきつく調整するものと緩く調整するものがあったので詳細を第16表の観察表に記した。底面の形態は下記の①でⅠ～Ⅵに分類、端部の突起は②でａ～ｄに分類して、第16表の観察表に記した。

①蓋の形態（観察表の分類に記載）

Ⅰ：底面から穏やかに膨らみながら立ち上がり端部に至る（第57図10～20）。

Ⅱ：底面から穏やかに立ち上がり、端部付近で軽く外側に折れて端部へ至る（第57図21～26）。

Ⅲ：底面から穏やかに立ち上がり、端部が肥厚する（第57図27～31）。

Ⅳ：底面から穏やかに立ち上がり、端部付近でⅡ類よりも内側に折れて端部に至る（第57図32～33）。

②端部の突起（観察表の特徴に記載）

ａ：端部を折りたたみ、先端の突起を断面丸隅状に仕上げるもの。

ｂ：端部を折りたたみ、先端の突起を断面三角状に仕上げるもの。

ｃ：端部を折りたたみ、先端の突起を摘み上げて仕上げるもの。

ｄ：端部を折り曲げて内側に向かって水平にするもの。

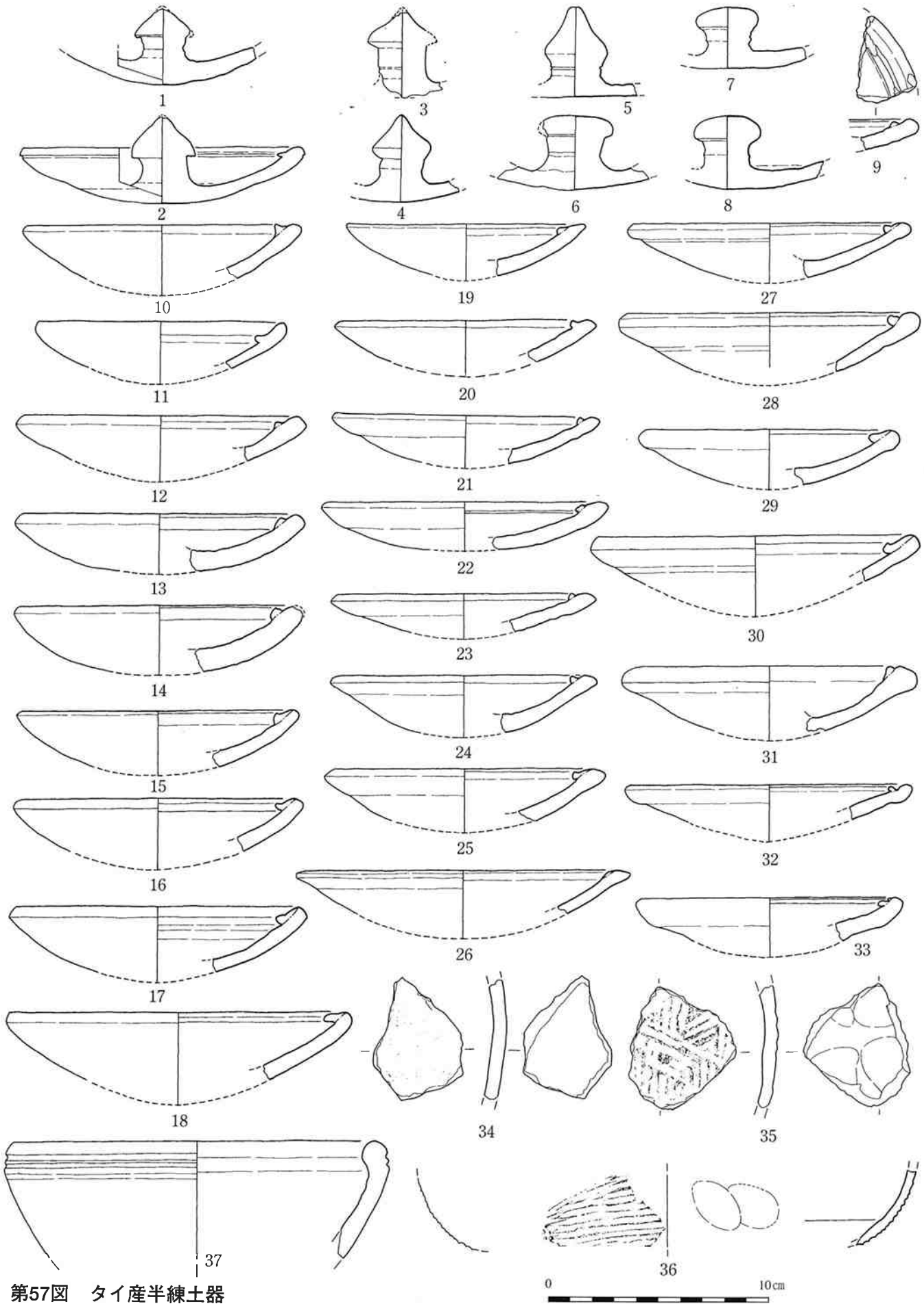
身はたたき目が確認できる胴部（第57図34～36）が確認できた。第57図37は素地・胎土の特徴から移入土器と考えられる資料で、今回は半練土器と同じ項目で扱った。半練の身は首里城跡京の内やヒヤジョー毛遺跡（註：那覇市教育委員会1994）などでも報告されているが、蓋に比べて身は出土数が極端に少ない。今回出土した資料も身は蓋に比べて少なかった。

第16表　タイ産半練・観察表

単位:cm

図・図版	番号	分類	部位	径	高さ	特　徴	器　色	器面調整	混　入　物	出　土　地	備　考
第57図・第57図版	1	宝珠	撮み	－	3.7	首部:強く調整	上面:灰白色、下面:灰褐色、素地:黄褐色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用L1-122	上面に煤が付着
	2	宝珠／蓋Ⅰ	全形	13	2.4	端部:丸い、突起:a	両面:褐色、素地:黒褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	上面の中央に煤が付着
	3	宝珠	撮み	－	2.4	首部:きつく作る	両面:黄褐色、素地:灰色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク廣北西	－
	4		撮み	－	4.9	首部:緩く作る	上面:灰色、下面:灰褐色、素地:黄褐色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	漏M4-126	－
	5		撮み	－	4.5	首部:緩く作る	両面:乳白色、素地:灰色	撮:撫で、首:削り	黒色粒・赤色粒	カク廣北西	－
	6	饅頭	撮み	－	3.5	首部:きつく作る	両面:褐色、素地:灰色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	表3083	上面の中央に煤が付着
	7		撮み	－	2.8	首部:緩く作る	両面:黄灰色、素地:灰色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	－
	8		撮み	－	3.4	首部:緩く作る	両面:茶褐色、素地:灰色	撮:撫で、首:削り	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用L0-124	－
	9	不明	端部	－	－	端部:丸い、突起:a	両面:赤褐色、素地:黄褐色	両面:撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク廣北西	－
	10	蓋Ⅰ	端部	12.4	－	端部:丸い、突起:b	両面:橙褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	木L2-129	－
	11		端部	11.2	－	端部:丸い、突起:a	上面:暗灰色、下面:灰色、素地:黄褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	表	－
	12		端部	12.6	－	端部:丸い、突起:a	両面:灰色、素地:黒褐色	両面:撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用L6-124	－
	13		端部	12.7	－	端部:丸い、突起:a	両面:灰褐色、素地:黄灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	黒色粒・赤色粒	用K10-124	上面に煤が付着
	14		端部	12.7	－	端部:丸い、突起:a	上面:灰色、下面:黄褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	上面に煤が付着
	15		端部	12.4	－	端部:丸い、突起:c	両面:灰褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用K9-124	－
	16		端部	12.65	－	端部:丸い、突起:c	両面:灰黄褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	上面に煤が付着
	17		端部	12.9	－	端部:丸い、突起:c	両面:黄褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	木L2-131,132	－
	18		端部	15.5	－	端部:丸い、突起:d	両面:橙褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	－
	19		端部	11	－	端部:舌状、突起:a	両面:橙褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク廣北西	胎土・焼成が陶質土器に近い
	20		端部	11.4	－	端部:舌状、突起:b	上面:黄褐色、下面:暗黄褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	木L7-131	－
	21	蓋Ⅱ	端部	12	－	端部:丸い、突起:a	両面:黄白色、素地:茶褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	木L8-134	－
	22		端部	12.6	－	端部:舌状、突起:a	上面:黒褐色、下面:灰褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒	カク下	上面に自然釉?付着
	23		端部	11.6	－	端部:舌状、突起:a	両面:乳白色、素地:灰色	両面:撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	木L6-130	－
	24		端部	11.5	－	端部:舌状、突起:b	両面:暗黄褐色、素地:灰褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク	－
	25		端部	12	－	端部:舌状、突起:c	両面:黄褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	漏M4-125・126	－
	26		端部	14.3	－	端部:舌状、突起:無し	上面:黄褐色、下面:赤褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用K9-123	－
	27	蓋Ⅲ	端部	12.6	－	端部:肥厚、突起:c	両面:灰褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用L6-124	下面の端部に煤が付着
	28		端部	13.1	－	端部:肥厚、突起:c	上面:灰褐色、下面:橙褐色、素地:黒褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	端部に褐釉?が付着
	29		端部	11.45	－	端部:肥厚、突起:c	両面:灰褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	用L0-124,K10-114	－
	30		端部	14.4	－	端部:肥厚、突起:c	両面:褐色、素地:黄褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	－
	31		端部	12.2	－	端部:肥厚、突起:a	両面:暗褐色、素地:黒褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	表	突起の内側に凹の浅い圏線あり
	32	蓋Ⅳ	端部	16.6	－	端部:丸い、突起:a	両面:暗茶褐色、素地:黒褐色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	突起の内側に凹の浅い圏線あり
	33		端部	11.7	－	端部:丸い、突起:a	両面:橙褐色、素地:灰色	上面:撫で、下面:削り・撫で	白砂・黒色粒・赤色粒・石英	カク下	突起の内側に凹の浅い圏線あり
	34	身	胴部	－	－	胴部:たたき目	両面:茶褐色、素地:灰褐色	内面:撫で・指圧痕	黒色粒	木L7-131	－
	35		胴部	－	－	胴部:たたき目	外面:灰色、内面:乳白色	内面－指圧痕	砂粒・黒色粒・赤色粒・雲母	下L7-119	－
	36		胴部	－	－	胴部:たたき目	外面:灰色、内面:灰褐色、素地:黒色	内面－指圧痕	黒色粒・赤色粒	カク下	外面に煤付着
	37	移入土器	口	16.6	－	口縁:二条の圏線	外面:灰褐色、内面:黄褐色	両面:撫で	白色粒・黒色粒・赤色粒	カク廣北	外面に煤付着

※下之御庭＝下、用物座＝用、漏刻門＝漏、廣福門＝廣、木曳門＝木と略記。



第57図　タイ産半練土器

第19節　本土産染付

本土産染付（有田・肥前・砥部・瀬戸・美濃）で確認された器種は、碗・小碗・皿・大皿・鉢・瓶・猪口・杯洗の８つである。以下、産地別に個々の特徴等について述べることとする。

有　田（第58図１～22）

第58図１は丸碗で外面に梵字文様と圏線、内面に圏線と見込みに「壽」の崩しを描く。畳付以外に淡青灰白色釉を施す。素地は白色微粒子。口径9.6㎝、器高5.2㎝、底径3.8㎝。下之御庭地区出土。

同図２は小碗で両面の口縁直下に圏線と四方襷文、外面胴部に花唐草文。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。口径10.2㎝。廣福門地区出土。

同図３も小碗で外面に草花文、内面に雷文帯。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。口径9.6㎝。下之御庭地区出土。

同図４は小碗底部片で高台形は逆三角形を呈する。外面に圏線と風景を描き、外底に「宣明年製」の銘。両面に白色釉を施す。素地は白色微粒子。底径4.6㎝。木曳門地区出土。

同図５も小碗底部片。高台形は逆三角形を呈する。外面に風景を描く。白色の釉を両面に施す。素地は白色微粒子。底径5.0㎝。木曳門地区出土。

同図６は腰折れの小碗底部。外面に圏線と渦の連続文、雲文？等を表す。両面に白色釉を施す。素地は白色微粒子。下之御庭地区出土。

同図７、８は同タイプの皿。口縁内面直下に垂れ綬文。外面には草文。いずれも淡灰白色釉を両面に施し、口唇部に口錆。素地は白色微粒子。色絵の生地の可能性。木曳門地区出土。

同図９、10は八角大皿の口縁部片。外面は雲文と波濤文、内面は花卉文と波濤文。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。いずれも木曳門地区出土。

同図11、12はいずれも内面にヘラ削りによる菊文を表し、口唇部に口紅。見込みに文様を描くが判然としない。淡灰白色釉を畳付以外に施す。素地は白色微粒子。

図12の口径は16.6㎝。木曳門地区出土。

同図13は皿口縁部片。内面に網目文。淡灰白色釉を両面に施す。素地は淡灰白色微粒子。漏刻門地区出土。

同図14は大皿底部片。見込みに松文。両面に淡灰白色釉を施す。両面に貫入。素地は淡灰白色微粒子。下之御庭地区出土。

同図15、16は皿底部片。どちらも高台外面に２本の圏線。見込みに荒磯文。淡灰白色釉を畳付以外の両面に施す。素地は灰白色細粒子。木曳門地区出土。

同図17は大皿底部片。見込みに海老を描いて、外底面には圏線と「太明」の文字。ハリ支えの痕も確認できる。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。首里城出土地不明。

同図18は大皿の口縁部片。外面には如意頭文唐草、内面には波濤状の文様と圏線を表す。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。口径30㎝。廣福門地区北西出土。

同図19も大皿底部片。図11、12と同タイプもしくは同一個体。内面にヘラ削りによる菊文。見込み有文。淡灰白色釉を畳付以外両面に施す。素地は淡灰白色微粒子。底径12㎝。木曳門地区出土。

同図20は鉢口縁部片。口唇部は口紅。両面とも花卉文。淡灰白色釉を両面に施す。両面に貫入。素地は白色微粒子。口径24.6㎝。木曳門地区出土。

同図21、22も同タイプもしくは同一個体の鉢口縁部片。両面の口縁直下には２本の圏線。外面に花卉文。両面に淡灰白色釉を施す。素地は淡灰白色微粒子。口径はいずれも21㎝。前者が木曳門地区、後者が廣福門地区北西出土。

肥　前（第59図23～52）

第59図23は碗で外面の口縁直下に２本の圏線、胴部には構成不明な文様、高台外面と高台脇に３本の圏線。外底面に１本の圏線。淡灰白色釉を畳付以外総釉。二次的被熱。素地は白色微粒子。口径11.6㎝、器高6.0㎝、底径6㎝。木曳門地区出土。

同図24、25は小碗口縁部片。外面には格子文。内面口縁直下に２本の圏線。灰白色釉を両面に施す。素地は淡灰白色微粒子。口径はいずれも11.0㎝。下之御庭地区出土。

同図26は24、25と同タイプもしくは同一個体底部片。高台外面に２本の圏線。外面に格子文。両面に灰白色釉を施す。素地は淡灰白色微粒子。底径3.6㎝。首里城試掘。

同図27は碗。外面に網目文を描いている。淡灰白色の釉を両面に施す。素地は淡灰白色の微粒子である。口径は12.0㎝。木曳門地区出土。　同図28は厚手の碗。波佐見焼でくらわんか碗と称されるタイプ。外面に草花文、見込みに１本の圏線。灰白色釉を両面に施す。素地は灰白色細粒子。口径13.0㎝。木曳門地区出土。

同図29は蓋付碗の蓋。蓋甲面には花唐草文、撮み周囲に連続文。撮み見込みには「長春富貴」。内面には四方襷文。見込みには松・竹・梅文。淡灰白色釉を両面に施す。素地は白色微粒子。最大径9.8㎝、撮み径3.8㎝。表採。

同図30は蓋付碗の身。外面に花唐草文を描いている。両面に淡灰白色釉を施す。素地は白色の微粒子である。廣福門地区北西出土。

同図31は薄手の丸碗である。外面には蛸唐草文を描いている。畳付以外は淡青白色釉を施す。素地は白色微粒子。底径3.7㎝。木曳門地区出土。　同図32は碗底部片。かなり厚く成形される。高台外面に２本の圏線、胴下部に１本の圏線、胴部には網目文を描く。見込みには不明文様と圏線が描かれる。畳付以外の両面に淡灰白色釉を施す。素地は淡灰白色微粒子。底径は5.6㎝。用物座地区出土。

同図33も碗の底部片である。外面胴下部に１本の圏線、内面の見込みに３本の圏線と十字文を表す。畳付以外に淡灰白濁色の釉を施す。素地は淡灰白色微粒子である。下之御庭地区出土。

同図34も碗胴部片である。高台外面に２本の圏線、外面胴部に雲龍、内面見込みに荒磯文を描いている。両面に淡黄灰白色の釉を施す。全体に貫入が観察できる。素地は白色微粒子である。木曳門地区出土。

同図35は小碗の口縁部片である。両面の口縁部直下に１本と２本の圏線。外面胴部には花卉文を描いている。見込みには２本の圏線。淡青灰白色の釉を両面に施す。淡灰白濁色の微粒子である。口径は10.8㎝。木曳門地区出土。

同図36も小碗の口縁部片である。外面に風景（山？）を描いている。両面に淡灰白色釉を施す。素地は白色微粒子である。口径は10.8㎝。木曳門地区出土。

同図37も小碗の口縁部片である。外面に２本の圏線と花卉文を描いている。淡灰白色釉を両面に施すが二次的な被熱を受ける。内面にはその際の溶着痕が観察できる。素地は白色微粒子である。口径は10.4㎝。木曳門地区出土。同　図38は輪花皿の口縁部片である。外面に如意頭唐草文、内面に花唐草文を描いている。両面に淡灰白色釉を施し、素地は白色微粒子である。木曳門地区出土。

同図39も輪花皿の口縁部片である。外面には如意頭唐草文、内面には蛸唐草文を描いている。両面に淡灰白色釉を施す。素地は白色微粒子。用物座地区出土。

同図40は浅い皿の破片資料である。内面に縦位の線と圏線、見込みに不明な文様を描いている。灰白色の釉を畳付以外に施す。素地は淡灰白色微粒子。口径14.5㎝、器高3.2㎝、底径6.5㎝。下之御庭地区出土。

同図41はなます皿。外面に如意頭唐草文と○×の連続文、内面には花唐草と帯状の連続文、見込みに松・竹・梅文。白色の釉を両面に施す。素地は白色の細粒子。底径9.2㎝。廣福門地区北西出土。

同図42も皿の底部片である。高台は低く成形され高台形は逆三角形を呈す。見込みに楼閣等を表している。畳付以外に淡青灰白色の釉を施している。両面に貫入が見られる。素地は淡灰白色微粒子である。底径は6.4㎝である。

同図43は大皿の底部である。高台外面に２本と胴下部に１本の圏線、内面見込みには濃みと印文により松・紅葉が表されている。畳付以外には白色の釉を施す。素地は淡灰白色微粒子である。底径は10.0㎝。廣福門地区出土。

同図44も大皿の底部片である。高台形は逆三角形を呈する。高台外面に２本と胴下部に１本の圏線を廻らせ、内面には２本の圏線と不明な文様を描いている。畳付以外に淡青灰白色の釉を施している。両面に細かい貫入が観察できる。素地は淡灰白色微粒子である。漏刻門地区出土。

同図45も大皿の底部である。内面の見込みには氷裂文を描いている。外底面にはハリ支えが２つ確認できる。淡青灰白色の釉を両面に施している。素地は淡灰白色の微粒子である。廣福門地区北西出土。

同図46、47は瓶である。内面には調整痕が確認でき、外面には網目文と圏線が描かれている。図46は淡青灰白色の釉、図47は淡灰白色の釉を外面に施す。素地はいずれも淡灰白色微粒子。前者が木曳門地区、後者下之御庭地区出土。

同図48も瓶である。内面には調整痕が観察できる。外面には草花文が描かれる。淡灰白色の釉を外面に施す。

素地は淡灰白色微粒子である。木曳門地区出土。

同図49は大型の徳利の胴部片である。内面には調整痕が確認できる。外面には花卉文が描かれている。外面にのみ白濁色の釉を施している。素地は淡灰白色微粒子である。下之御庭地区出土。

同図50は瓶の底部である。高台外面に２本の圏線と胴下部に連続文を廻らせており、その上部には１本の圏線を廻らせる。内面には調整痕が確認できる。淡灰白濁色の釉を外面にのみ施している。素地は淡灰白色の微粒子である。底径は8.0㎝である。漏刻門地区出土。

同図51は猪口の口縁部破片である。外面には花卉文と思われる文様を表している。内面は無文である。淡灰白色の釉を両面に施している。両面ともに粗い貫入が観察できる。素地は白色の細粒子である。口径は6.6㎝である。木曳門地区出土。

同図52は杯洗（さかずきあらい）である。高台内刳りは段状になる。高台外面には縦位の連続文と圏線を廻らせている。外面胴下部の一部には文様が確認できるが、構成等は判然としない。畳付以外の両面に淡青灰白色の釉を施している。素地は白色の細粒子である。底径は4.0㎝である。木曳門地区出土。

砥　部（第59図53～55）

第59図53、54は碗の口縁部片である。同タイプもしくは同一個体である。胴下部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部を微弱に外反させる。外面には、宝相唐草文を描いている。胴下部には崩したラマ式蓮弁文を廻らせている。内面口縁直下には波濤文と圏線を描いている。見込みにも２本の圏線を廻らせている。透明の釉を両面に施している。素地は灰白色の細粒子である。口径は図53が15.9㎝、図54が15.9㎝である。前者が漏刻門地区出土、後者が廣福門地区北西出土である。

同図55は碗の底部片である。図53、54と同一個体の可能性が高い。高台形は逆三角形を呈する。外面に崩れたラマ式連弁文を廻らせている。胴部には宝相唐草文をえがいている。見込みには２本の圏線と花卉文を表している。また蛇の目釉剥ぎも確認できる。一部を除いて透明の釉を両面に施している。素地は灰白色細粒子である。底径は7.0㎝である。漏刻門地区出土。

瀬戸・美濃（第59図56～60）

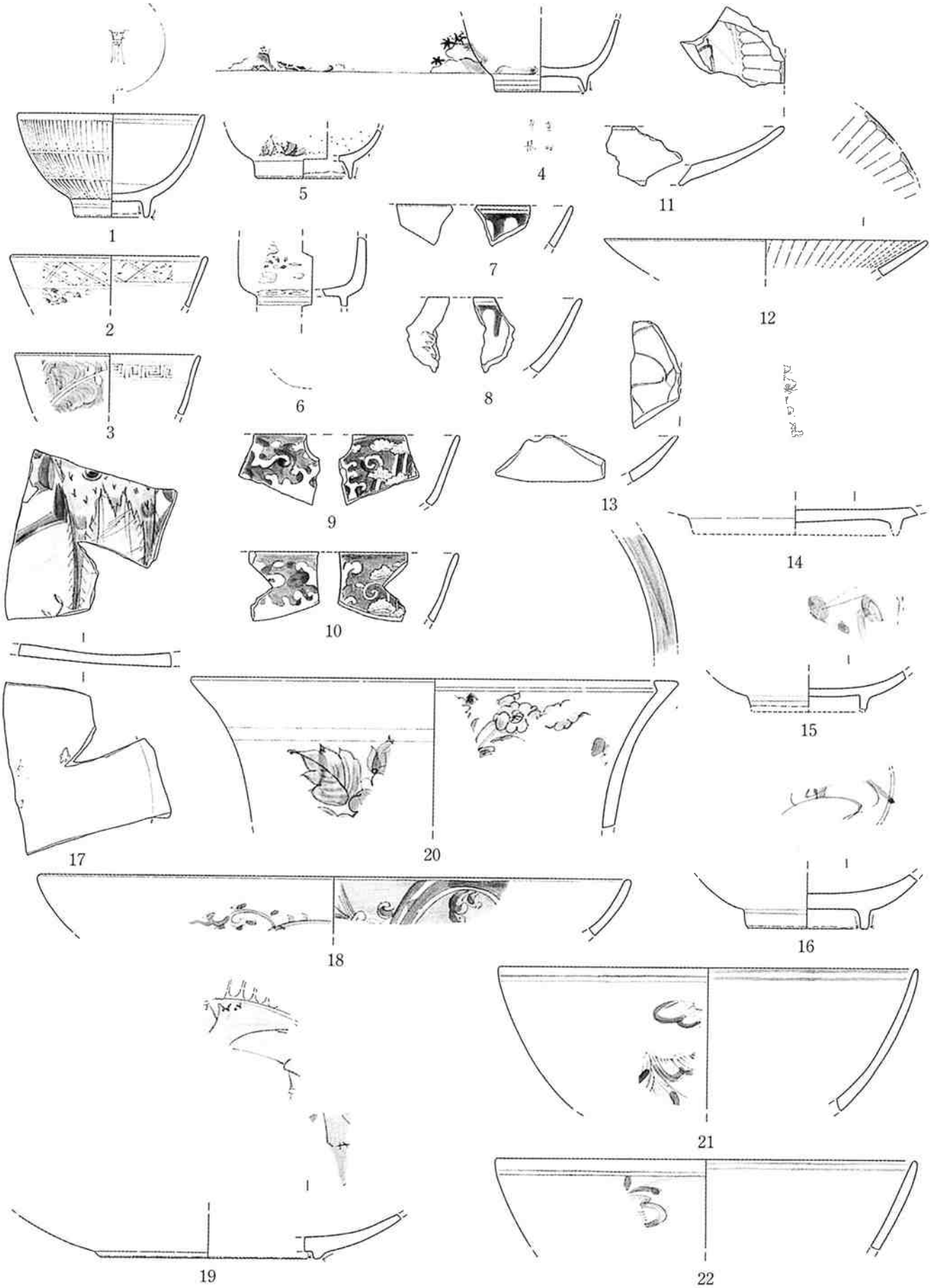
第59図56は小碗の口縁部片である。外面には花卉文を描いている。両面に淡灰白色の釉を施している。素地は白色の微粒子である。口径は8.6㎝である。木曳門地区出土。

同図57も小碗の口縁部片である。外面に草花文？を表している。口唇部には錆釉による口錆が施されている。白濁色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子である。口径は8.0㎝である。下之御庭地区出土。

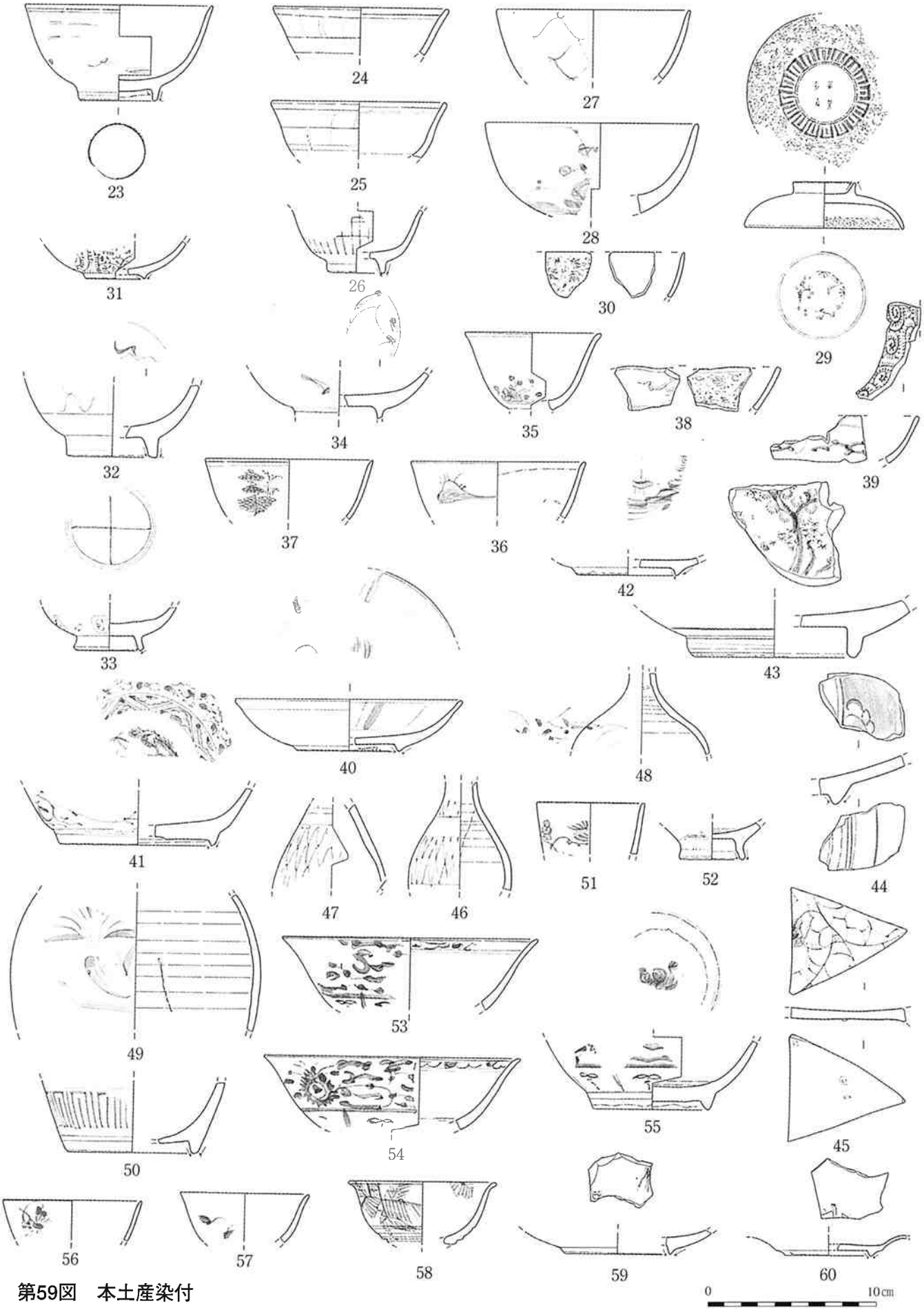
同図58も小碗の口縁部片である。胴部外面には段状の成形がなされている。口縁部は微弱に外反させる。外面には性格が不明な文様が描かれている。内面の口縁部直下にも同様の不明な文様が描かれている。淡青灰白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子である。口径は9.0㎝である。下之御庭地区出土。

同図59は皿の底部である。外面の高台脇には１本の圏線を廻らせている。内面の見込みには性格が不明の文様が描かれている。白濁色の釉を畳付以外に総釉している。素地は白色の微粒子である。底径は6.4㎝である。廣福門地区北西出土。

同図60も皿の底部片である。かなり薄造りである。若干腰折れ状に成形されている。内面の見込みには印刻した後に呉須により、絵付けがなされているが、性格等は判然としない。白濁色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子である。底径は4.8㎝である。下之御庭地区出土。



第58図　本土産染付


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
10cm

第59図　本土産染付

第20節　本土産色絵

ここでは本土産陶磁を生地とした色絵を取り扱う。確認された器種としては、碗・小碗・皿・小杯・瓶・蓋の６つである。以下、個々の特徴等について述べることとする。

第60図１は小碗の口縁部破片である。口縁部は微弱に外反する。外面に上絵による圏線と花卉文？を描いている。内面の口縁部直下にも上絵による圏線を廻らせている。両面に淡灰白濁色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子で磁器である。口径は8.4㎝。下之御庭地区出土。

同図２も小碗の口縁部破片である。直口に成形している。外面に上絵による圏線と花卉文を表している。内面の口縁部直下にも１本の圏線を廻らせている。白濁色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子の磁器である。口径は9.2㎝である。下之御庭地区出土。

同図３も小碗の口縁部破片である。丸碗タイプである。内面に紅葉状の葉を上絵付けしている。外面は無文である。両面に黄灰白濁色の釉を施している。素地は淡灰白色の粗粒子の陶胎である。口径は10.8㎝である。用物座地区出土。

同図４は小碗もしくは碗の口縁部破片である。直口タイプである。両面に上絵による圏線や花卉文？を表している。両面に白濁色の釉を施している。素地は白色の微粒子で磁器である。下之御庭地区出土。

同図５は碗の底部片であると思われる。高台内刳りは深く、高台は薄造りである。内面の見込みには上絵による青海波状の文様が描かれている。畳付以外の両面に白濁色の釉を比較的厚く施しており、全体に細かい貫入が観察できる。素地は淡灰白色の微粒子で陶胎磁器である。下之御庭地区出土。

同図６は皿の口縁部片である。胴部は大きく開き、口縁部は微弱に外反する。内面に上絵による圏線と性格が不明な文様を描いている。両面に白濁色の釉を施している。素地は淡灰白色の微粒子の磁器である。廣福門地区北西出土。

同図７は皿の口縁部片である。内面に青海波等をゴム判を用いて上絵により表すが、文様構成は判然としない。白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子で磁器である。木曳門地区出土。

同図８は皿の口縁部片であると思われる。内面に呉須による文様を描いた後に、上絵を施している。淡青白色の釉を施している。素地は白色の微粒子で磁器である。口径は14.2㎝である。下之御庭地区出土。

同図９も皿の口縁部片である。内面に上絵による文様を描いているが構成は判然としない。白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子で磁器である。口径は13.4㎝である。用物座地区出土。

同図10も皿の口縁部片である。外面には如意頭唐草文を描いて、内面の口縁部直下にも１本の圏線を廻らせている。内面の胴部には、上絵による文様が描かれているが、構成等は判然としない。淡青灰白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子で磁器である。廣福門地区出土。

同図11は皿の底部片であると思われる。内面に上絵による花卉文？を描いているが判然としない。白色の釉を両面に施している。素地は白色の微粒子で磁器である。漏刻門地区出土。

同図12は小杯の底部片であると思われる。見込みには上絵による花卉文？を描いているが、性格等は判然としない。外底面には「大明永楽」の銘が確認できる。白色の釉を畳付以外に施している。素地は白色の微粒子で磁器である。底径は3.4㎝である。廣福門地区北西出土。

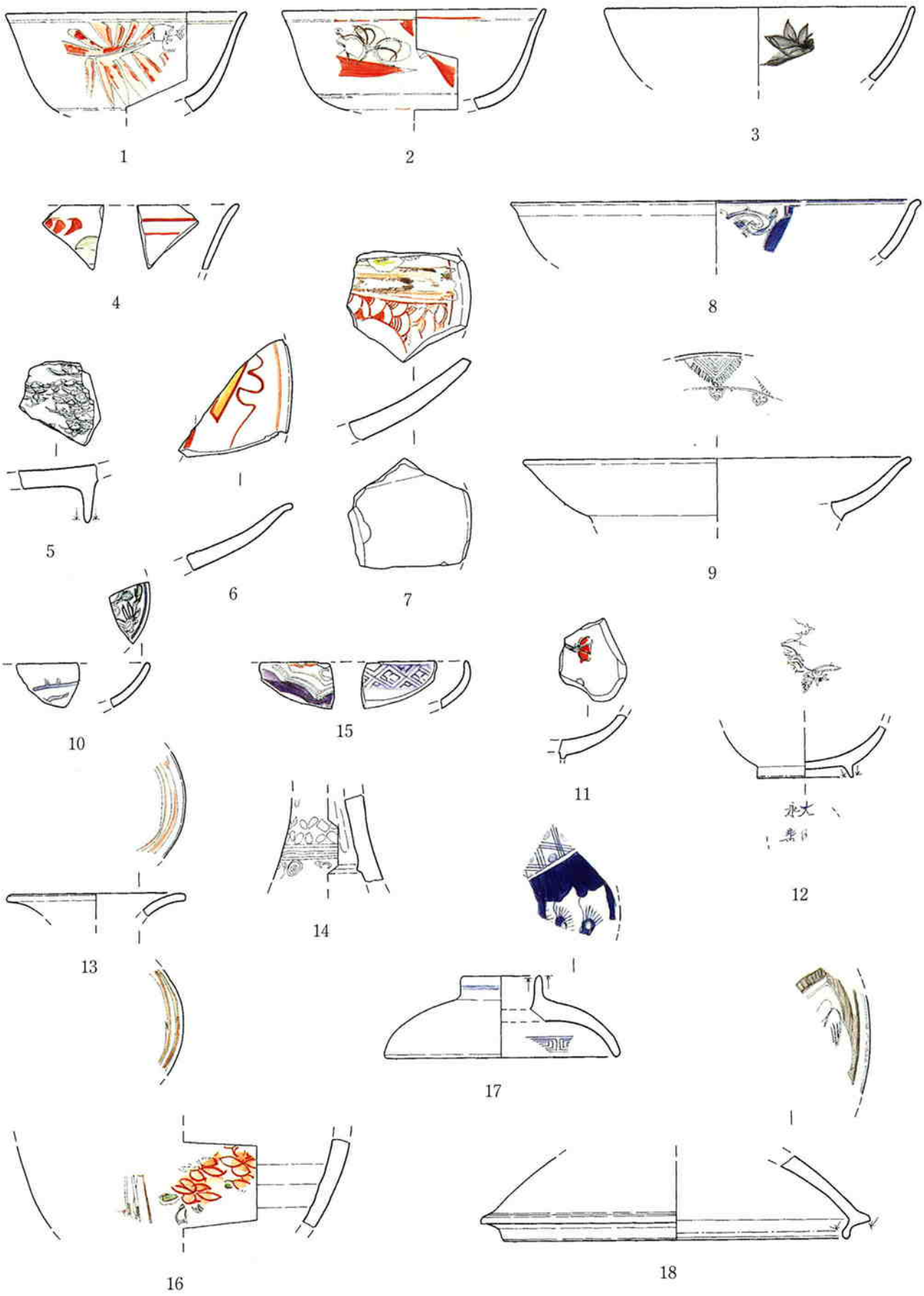
同図13は瓶の口縁部片である。口縁部の両面には上絵による２本の圏線が廻らされている。両面に淡灰白濁色の釉を施している。素地は淡灰白色の細粒子で磁器である。口径は6.2㎝である。廣福門地区北西出土。

同図14は瓶の頸部である。外面に上絵による文様を描いているが判然としない。淡灰白濁色の釉を両面に施している。素地は淡灰白色の細粒子で磁器である。下之御庭地区出土。

同図15は皿の口縁部片である。外面に呉須による窓を表し、枠内に赤絵により上絵を施す。内面には呉須による四方襷文を雑に描いている。淡灰白色の微粒子。淡灰白濁色の釉を両面に施している。木曳門地区出土。

同図16も瓶の胴部片。外面に上絵による文様が入る。淡灰白濁色の釉。素地は白色の微粒子で磁器。漏刻門地区出土。　同図17は蓋である。甲面に呉須により文様を描いていた後、上絵による文様を描く。素地は白色の微粒子。最大径は8.1㎝、撮み径は2.8㎝。木曳門地区出土。

同図18も蓋である。段重の蓋か。甲面に呉須により文様を描いた後に上絵で装飾する。両面に白濁色の釉を施す。素地は白色の微粒子である。 最大径は11.4㎝である。木曳門地区出土。



第60図　本土産色絵

0　10cm

第21節　本土産印判手

いわゆる「スンカンマカイ」と称される近代の本土産染付を一括して扱う。産地は砥部、瀬戸・美濃などである。器種は碗が主体で、皿、筒碗、小碗・小杯といった日用雑器がほとんどである。また、文具である水滴が比較的多く得られた。絵付けは型紙によるものが主体で、その他に銅版転写や型紙と銅版の組み合わせ、ゴム判などがみられる。文様は地に点描や微塵唐草文を密に施すものがあり、区割り文として幾何学状の文様や鶴、花文などを施す。見込には三友文を施すのが主体である。

碗は器形によって、Ⅰ：丸碗、Ⅱ：直口碗とし、Ⅰはさらに、ⅰ：外反口縁、ⅱ：直口口縁に分類できる。このうち、Ⅰは砥部系の、Ⅱは瀬戸・美濃系の印判手に属すると思われる。また、39・40の蓋は碗に付属するものである。

第17表　本土産印判手観察表

図版番号		器種	計測値（cm）			出土地区		分類・文様等
			口径	底径	器高	地区	グリッド等	
図版61図	1	碗	12.8	4.8	5.0			Ⅰⅰ。外面は点描の地文、主文は菊花文と円く巡らせた三角文の組合せ、腰部に圏線と三角文。内面は口縁に点描の地文と、半弧の丸文、見込は圏線と花文。また、見込には目痕。呉須の発色はやや弱く、淡い濃青色。高台を斜めに削る。
	2		13.2	4.6	4.5	試掘		Ⅰⅰ。外面は亀甲状の地文、主文は円線文と鶴文の組合せと松と笹、腰部に圏線と三角文。内面は口縁に点描（四角）の地文と菊、見込は圏線と不明の文様。見込に目痕。呉須の発色は良く、濃青色。高台は比較的薄手。
	3					廣福門	北西	Ⅰⅰ。外面は微塵唐草文で、主文は竹。内面は口縁に同様の地文と笹、見込に圏線。呉須の発色は良く、濃青色。
	4		13.8	4.2	5.1	用物座	K6-123	Ⅰⅰ。外面は花唐草文、腰部に圏線と八卦状の帯文。内面は口縁に圏線と花文、見込に圏線と花文？呉須の発色は良く、濃青色。高台は斜めに削る。
	5		14.4			木曳門		Ⅰⅰ。外面は蔓唐草文。内面は口縁に瓔珞文。呉須の発色は良く、明青色。
	6		9.4	5.0	6.5	試掘		Ⅰⅱ。外面は点描（菱形）の地文に主文は菊花文？高台に圏線。内面は口縁に圏線と同様の地文に「壽」、見込みに圏線と花文（龍文）？。呉須の発色は良く、明青色。高台は斜めに削り、他よりも若干高い。
	7		10.8	4.1	5.7	下之御庭		Ⅰⅱ。外面は微塵唐草文の地文に圏内に花文など、また地文上にも松葉文、腰部に圏線と雷文帯、高台に圏線。内面は口縁に瓔珞文、見込に2条の圏線と三友文。呉須の発色はやや悪く滲んでいる、暗青色。高台を斜めに削る。
	8		10.6			下之御庭		Ⅰⅱ。外面は青海波、点描、微塵唐草に菊花文？草文、藤の組合せからなる区割り文、高台近くに連続する短線、さらにそれぞれは破線で区画。内面は口縁に瓔珞文、下位に圏線。呉須の発色は良く、濃青色。
	9		10.0			用物座		Ⅰⅱ。外面は竹垣に菊。内面は口縁に瓔珞文。呉須の発色は良く、明青色。
	10		11.6	3.2	4.3	下之御庭		Ⅱ。外面は青海波、微塵唐草文、菊花文の連続からなる区割り文。腰部は雷文帯と2条の圏線。内面は口縁に瓔珞文と花文の組合せ。呉須の発色は良く、明青色。
	11		11.2	3.4	4.6			Ⅱ。如意頭風に区画し、上位に青海波、点描、下位に梅花文と円内に葉文、腰部に短線を巡らせる。内面は口縁に瓔珞文と花文の組合せ。呉須の発色は良く、濃青色、ただし内面は滲んでいる。高台径は小さい。
	12		12.0	4.6	5.1	下之御庭		Ⅱ。外面は唐花文、微塵唐草で充填。高台に圏線。内面は口縁に圏線と瓔珞文。呉須の発色は良く、濃青色。高台を斜めに削る。
	13		11.6	4.4	5.0	下之御庭		Ⅱ。外面は人物（奴）文。高台に圏線2条。内面は口縁に圏線と瓔珞文。高台は薄手。図版60、40の身である。
	14	皿	12.6	8.2	3.2	下之御庭		輪花皿。外面は幾何学文、高台及び腰部に圏線。内面は菊花文を密に施し短線で充填、窓絵に花文、見込に三友文。呉須の発色は良く、明青色。外底面は釉を掻き取る。
	15		13.6	8.0	2.4	下之御庭		輪花皿。外面は花と蔓唐草、腰部に2条圏線。点描等を密にし、口縁近くに梅花文。見込みに花文と竹文。呉須の発色は良く明青色。見込に目痕。外底面は釉を掻き取る。
	16		10.4	6.0	2.1	下之御庭		内面に点描と詩文文、菊花文の区割り。見込は青海波と菊花文？。呉須の発色は悪く、淡青色。
	17		10.0	5.6	2.0	下之御庭		内面に点描と詩文文からなる区割り。見込は短線と不明の文様。呉須の発色は悪く、淡青色。
	18		10.8	6.5	2.2	下之御庭		内面は口縁に波文を巡らせ、見込に牡丹、扇など、「□島の大和さくら」。緑で絵付け。口唇に錆釉。
	19		10.8	5.8	2.5	下之御庭		口縁に丸文、見込に「富貴長春」銘の銭。呉須の発色は良く濃青色。口唇に錆釉。
	20		11.0	6.0	2.1	下之御庭		口縁に大根、地は青く塗りつぶす。見込に「摩制」。呉須の発色は良く、濃青色。口唇に錆釉。
	21		27.0	15.4	3.0	漏刻門	M2-127他	大皿。外面に草花文、高台近くに3条の圏線。内面は七宝文による区画、区画内は不明の文様。口唇に錆釉。
	22	筒碗	8.0	5.2	7.6	下之御庭		外面に菊花、牡丹、葉文を密に施す。高台及び腰部に圏線3条。内面は口縁に瓔珞文。呉須の発色は良く、明青色。
	23		7.2					外面は窓絵に梅木、笹、藤、菊花文で、隙間を微塵唐草文で充填する。腰部は雷文帯。内面は口縁に瓔珞文。呉須の発色は良く、濃青色。
	24		7.4			用物座		外面は微塵唐草文。内面は瓔珞文（手書き？）。呉須の発色は良く、暗青色。
	25		7.0			下之御庭		外面は一面に青海波文。腰部に圏線。内面は不明の文様と太い圏線。呉須の発色は良く、濃青色。
	26			3.8		下之御庭	L8-118	腰部に稜を持つ。銅版転写と型紙摺りの組み合わせ。花樹文、褐色は銅版で絵付け。青（明青色）は型紙で行う。腰部及び高台に圏線。高台内に「屋満登製」。

第18表　本土産印判手観察表

図版番号	器種	計測値（cm）			出土地区		分類・文様等
		口径	底径	器高	地区	グリッド等	
27	小碗	8.0	3.9	4.5	下之御庭		外面に蔓唐草、花文。口縁に瓔珞文。高台に２条の圏線。高台内に「東洋軒製」。呉須の発色は弱く、淡青色。口唇に錆。
28		7.4	3.7	5.2	用物座	L10-125	腰部から直に立ち上がる。外面に山水図。呉須の発色は弱く淡暗青色。
29		7.8	3.8	4.3	下之御庭		腰部に稜を持ち開くように立ち上がる。外面には庭園図。高台に圏線。緑と褐色で絵付け、発色は良い。
30		7.4			用物座		口縁に瓔珞文、下位に唐子と蝶（童子虫遊び文？）、高台近くに２条の圏線。
31	小杯	7.0	3.3	4.4			丸みを持った器形。絵付けは緑で、松樹唐子文と童子虫遊び文、発色は良い。
32		7.0	2.5	2.7	下之御庭		開く器形。内面に山水図。発色は弱く、淡青色。
33		8.0			用物座	L9-126･127	口縁が内彎。外面に唐草。呉須の発色は良く、青色。口唇に錆釉。
34	急須				漏刻門	M4-124	急須の注口。口の部分に丸文を施す。呉須の発色は弱く、淡青色。
35					用物座	K10-124	小型の急須の注口。不明の文様、呉須の発色は弱く淡青色。
36	蓋物	10.3	7.1	8.1	下之御庭		碁笥底。幾何学文を密に施し区画内に花唐草文、腰部に雷文帯。緑は銅版転写で絵付け、青は型紙摺りで行う。腰部及び口縁内面は釉を掻き取る。
37					漏刻門	北西	外面は口縁に雷文帯、下位に不明の文様。呉須の発色は弱く滲んでいる、淡青色。内面は無釉。
38	段重	10.2	8.8	2.0	下之御庭		外面に不明の文様。型紙摺りと銅版転写の組合せ。
39	蓋	10.2	4.1	2.8	下之御庭		碗の蓋。外面に菊花唐草文、摘みは楕歯状文、内面は瓔珞文。呉須の発色は良く、明青色。
40		8.8	4.3	2.4			碗の蓋。外面に人物（奴）文、摘みは２条の圏線、内面は瓔珞文。呉須の発色は良く、濃青色。13の蓋である。
41		10.8	8.8		木曳門	M2-128･129	蓋物の蓋。口縁部近くに四角で区画された菊花文を連続的に施す。上位は草花文。呉須の発色は良く、濃青色。
42					試掘		蓋物の蓋。外面は草花文。呉須の発色は良く、明青色。
43		10.8	10.0	1.8	下之御庭	L3-119	蓋物の蓋。牡丹と蝶、緑は銅版転写で絵付け、青は型紙摺りで行うが滲んでいる。
44		10.8	9.2	1.7	廣福門	北西	蓋物の蓋。花唐草と蝶、呉須の発色は弱く滲んでいる、淡青色。
45	水滴	8.5	6.8	2.8	下之御庭		牡丹を陽刻。周辺を呉須で塗りつぶす。釉を比較的厚く施す。
46		6.5	3.5	2.0	下之御庭		文箱を模す。草花文を施す、呉須の発色は良く、濃青色。
47	香炉	9.6			漏刻門	M2-122	口縁部は平坦。外面は青海波の地文に白抜きの笹文。波線の区画内は不明（太極？）。内面は口縁部以下は無釉。若干退色しており呉須は不明瞭、淡青色。
48		8.0			試掘		口縁部が膨らむ。外面は四角で区画された菊花文を連続的に描く。内面は口縁部以下は無釉。呉須の発色は弱く、淡青色。
49					廣福門	北西	口縁は花文を巡らせ、下位に不明の文様。内面は口縁を施釉するが、下位は無釉。

第22節　本土産陶器

第61図である。産地でみると薩摩、肥前などがあり、その他に南九州系、関西系がみられる。産地ごとに述べる。

薩摩及び南九州系

１～８である。１～４は黒薩摩で、壺、甕がみられる。１はやや長頸で、口縁は大きく屈曲。口径20.2㎝。木曳門M1-143出土。２は無頸壺で、口径20.8㎝、口唇部を厚くつくる。用物座K9-125出土。３は口径19.0㎝、口唇は三角形。下之御庭出土。４は大型甕で、口径44㎝、口唇端部と上面を縄目状文に形成。釉は剥落。下之御庭。５は南九州系の壺で、黒色釉を厚く施す。口縁は大きく外反、口径16.0㎝。木曳門。６～８は龍門寺系で、急須、香炉があり、鮫肌を特徴的とする。６は筒形の香炉で、口径10.6㎝、口唇部が内面に張り出す。淡黄褐色の釉。下之御庭。７は香炉の底部で突起状の脚を貼付。淡黄褐色の釉を施す。木曳門M9-148。８は急須で口径5.8㎝のやや平低な器形。赤みを帯びた釉。下之御庭。また、図は省略したが、白薩摩も得られている。

肥前系

９～11で、内野山、唐津、武雄がみられる。９は内野山の碗、底径は4.5㎝、青緑の釉を施すが剥落。漏刻門M2-128埋土。10は錆絵で内底面に山水を描いた碗、淡い黄褐色を呈する。底径は4.9㎝。下之御庭。11は平低

な器形の碗で、くすんだ青色の釉を施す。底径は5.0㎝。木曳門M2-137出土。

備　前

12～16である。12・13は擂鉢である。12は口径36.0㎝、底部近くまで残る。立ち上がりがきつく、口縁部のつくりは薄く鍔状に形成。木曳門。13は口径28.0㎝、口縁部は厚く方形をなす。表採。14は甕で無頸。内面はロクロ痕が明瞭。下之御庭。15は口縁部を逆L字に形成し、かなりの厚手であることから大型の壺と思われる。白色鉱物を多く含む。下之御庭。16は壺もしくは甕の底部で、底径24.8㎝。内外に輪積み痕が残る。地区不明。

京・信楽及び関西系

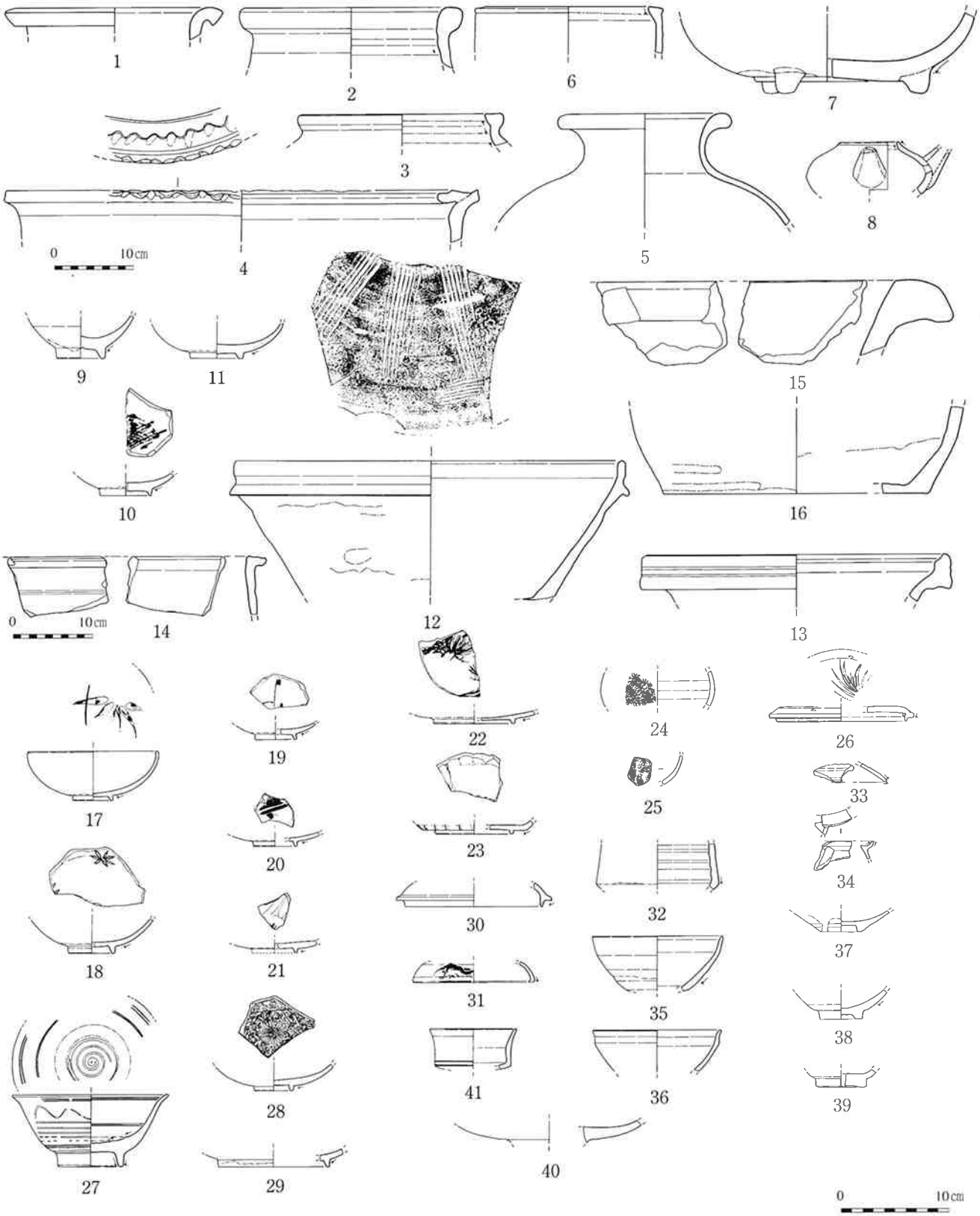
17～26は京・信楽、27～34は関西系である。

17・18は碗である。17は丸碗で、口径12.2㎝、底径3.8㎝、器高は4.6㎝。内底面に笹文。18世紀後半の所産。木曳門L5-134。18は底径4.3㎝、内底面に草文。17世紀末～18世紀前半。木曳門M9-148。19～23は皿である。19は内底面に鉄絵、底径は3.9㎝。廣福門北西。20は底径4.1㎝、内底面に不明の文様。用物座。21は底径4.2㎝、内底面に不明の文様、顔料は剥落。地区不明。22は内底面に松樹文。底径は7.7㎝で、つくりは薄手。18世紀後半～19世紀。下之御庭。23は輪花皿、底径は7.2㎝、内底面に不明の文様。17世紀末～18世紀前半。下之御庭。24は袋物で、胴の最大径は10.6㎝。外面全体に草花文を描くが、顔料は剥落。用物座K10-124。25は急須もしくは土瓶、外面全体に草花文を描くが顔料は剥落。26は蓋で、底径13.6㎝。木曳門L6-133～135。

27・28は碗である。27は、口径14.6㎝、底径6.2㎝、器高6.7㎝。口縁部は外反。内外に白土で圏線及び渦文。19世紀。地区不明。28は丸碗で、底径3.6㎝。内面に緻密に草花文を描くが顔料は剥落、一部に赤い顔料が残る。18世紀後半～19世紀前半。瑞泉門。29は皿で、中皿程度の大きさ。底径は10.6㎝。くすんだ青色の釉。木曳門M1-141。30・31は蓋である。30は底径12.8㎝、口径14.7とやや大きな器形。19世紀。漏刻門M2-123。31は底径11.5㎝。外面は褐色の釉、絵付けは顔料が剥落。木曳門L6-130。32は袋物で、腰部が折れる。胴の最大径は11.2㎝。18世紀後半～19世紀前半。表採。33・34は行平鍋で、いずれも淡黄褐色の釉を施す。33は蓋。下之御庭L3-119。34は身で、片口の部分。蓋受けの部分は無釉。試掘。

瀬戸・美濃

天目を中心に得られた。天目は35～39で、35は口縁が直線的なもの（口径12㎝、廣福門北西）、36は屈曲するもの（口径11.8㎝、廣福門北西）である。底部は37の碁笥底をなすもの（底径3.8㎝、下之御庭）と、38・39の高台をつくる二者に分かれ、38は高台内を削り出すもの（底径4.0㎝、木曳門L6-132・133）、39は削り出さないもの（底径4.7㎝、用物座L1-123）に分けられる。40は大皿で、淡青色の釉を施す。17世紀、御深井（おふけ）系。漏刻門M3-124。41は杯で、胴部が若干くびれる。外面に圏線３条。18世紀後半～19世紀初。下之御庭L8-120。


1
2
6
7
3
8
0 10cm
4
5
9
11
15
10
16
12
0 10cm
14
13
22
24
26
19
17
23
25
33
20
34
18
30
32
21
37
31
35
28
41
36
38
39
27
29
40
0 10cm

第61図　本土産陶器

第23節　沖縄産施釉陶器

器の表面に釉薬を施す一群で、「上焼（ジョウヤチ）」とも呼ばれる。施釉される釉薬には灰釉・鉄釉・黒釉・白釉（白化粧＋透明釉）などがあり、その上から緑釉を流し掛ける例もある。器種は碗・小碗・小杯・皿・大皿・小鉢・大鉢・鍋・壺・急須・蓋・酒器・小壺・瓶・火炉・火取・灯明具などが確認されている。以下に各器種の分類概念を記し、個々の詳細は観察表に譲る。（第19表）

1．碗（第62図）：Ⅰ類－灰釉単掛けの直口碗でフィガキー。外面や内底に鉄絵や白土で文様を施す（1、2）。Ⅱ類－外反口縁でフィガキー（Ⅱ－a）と内底蛇の目釉剥ぎ（Ⅱ－b、c）がある。aは黒釉単掛けで内面及び内底に鉄釉で文様を施す（3～5）。bは黒釉と白釉を掛け分ける（6）。cは白釉単掛けで外底に墨書を施すもの（7）、飴釉や呉須で文様を施すもの（8～10）、赤絵や緑釉を施すもの（11～15）がある。Ⅲ類－外面に六角形の面取りが巡るもので、白釉単掛けで無文（16）。Ⅳ類－筒碗と呼ばれる円筒形の碗で、内底蛇の目釉剥ぎを施す。腰部が丸みを持つもの（Ⅳ－a）と腰部に稜を持つもの（Ⅳ－b）がある。aは灰釉または白釉の単掛けで、白土象嵌を施すもの（17）や呉須で文様を施すもの（18）がある。bは白釉単掛けで呉須や飴釉で文様を施す（19）。

2．小碗（第63図20～43）：Ⅰ類－内湾口縁で灰釉単掛け（Ⅰ－a）、鉄釉単掛け（Ⅰ－b）、白釉単掛け（Ⅰ－c）に分類される。aはフィガキーあるいは底部露胎で、無文のもの（20、21、23）、白土で「西」の銘を施すもの（22）、外面に線彫りと鉄釉で文様を施すもの（24）、白土象嵌を施すもの（26、27）がある。bは底部露胎のもので、外底に鉄釉で文様を施す（25）。cは畳付露胎、内底蛇の目釉剥ぎのもので、外面に呉須で文様を施すもの（29）、赤絵と緑釉で文様を施すもの（30）がある。Ⅱ類－器形が筒形のもの。白釉単掛けで総釉後口唇部、外面腰部、畳付を露胎にする。外面に呉須と飴釉で文様を施す（28）。Ⅲ類－外面に六角形の面取りを巡らせるもので、灰釉または鉄釉の単掛けで畳付露胎（31、32）。31は外面に呉須で「院」の銘を施す。Ⅳ類－外反口縁。灰釉単掛けで高台露胎、内底蛇の目釉剥ぎを施すもの（Ⅳ－a）、白釉単掛けで畳付露胎、内底蛇の目釉剥ぎを施すもの（Ⅳ－b）、灰釉と白釉の掛け分けで畳付露胎のもの（Ⅳ－c）がある。aは外面に鉄釉で文様を施す（33）。bは外面または内面に呉須で文様を施すもの（34～38、40、41）や、内底に呉須で「沖縄神社」の銘を施すもの（42）がある。cは外面に呉須で「共進會（？）」の銘を施す（39）。Ⅴ類－胴上部をすぼませる外反口縁のもの。灰釉単掛けで無文（43）。

3．小杯（第63図44～47）：口縁部が外反するもので、灰釉単掛けで無文のもの（44、45）、透明釉単掛けで外面に呉須で文様を施すもの（46）、呉須と飴釉で文様を施すもの（47）がある。

4．皿（第64図）：Ⅰ類－内湾口縁で口唇部を稜花状に成形するもので、白釉単掛けで内底蛇の目釉剥ぎを施すもの（Ⅰ－a）、鉄釉と白釉（52）あるいは緑釉と白釉（53）を掛け分け内底蛇の目釉剥ぎを施すもの（Ⅰ－b）、透明釉単掛けで底部露胎のもの（Ⅰ－c）に分類される。aは無文のもの（51）、内底に圏線を巡らすもの（48、49）、外面及び内底に文様を施すもの（50）がある。cは両面に線彫りと呉須の文様を施すもの（54、56）と、内底に赤絵を施すもの（55）がある。Ⅱ類－口縁部が逆「ハ」の字状に立ち上がる器高の低い皿で、灰釉単掛けでフィガキー（57、58）。Ⅲ類－口縁部が外反するもので、白釉単掛けで畳付露胎、内底蛇の目釉剥ぎを施す。内面に呉須で文様を施すもの（59～63）、内面に呉須と飴釉で文様を施すもの（64）、内底に緑釉で文様を施すもの（65）がある。Ⅳ類－全形は不明だが底部は平底を呈する。白釉単掛けで無文。袋物の可能性もある（66）。

5．大皿（第65図67）：内湾口縁。鉄釉と白釉の掛け分けで畳付露胎、内底蛇の目釉剥ぎ。無文。

6．小鉢（第65図68、69）：内湾口縁。68は灰釉単掛けで外面に白土象嵌を施す。69は緑釉単掛けで無文。

7．大鉢（第65図70～91）：Ⅰ類－内湾口縁で高台を持つもの（Ⅰ－a）と平底のもの（Ⅰ－b）がある。aは鉄釉と灰釉（70）、または鉄釉と白釉の掛け分け（71）で内底蛇の目釉剥ぎ。bは飴釉と灰釉の掛け分けで畳付露胎である（72）。Ⅱ類－口縁端部を肥厚させるもの（Ⅱ－a）と口折のもの（Ⅱ－b）がある。aは灰釉単掛けのフィガキーで無文（73）と両面に鉄絵を施すもの（74）がある。bは鉄釉単掛けのフィガキーで内底に鉄釉で文様を施すもの（75～78、90）、鉄釉と灰釉の掛け分けで内底蛇の目釉剥ぎ（88）、鉄釉と白釉の掛け分けで内底蛇の目釉剥ぎ（79～82）がある。91は鉄釉と白釉の掛け分けで総釉。内底に目跡が残る。Ⅲ類－外反するもので平口縁（Ⅲ－a）と波状口縁（Ⅲ－b）がある。aは鉄釉と灰釉の掛け分け（83）と鉄釉と白釉の掛け分け（84）がある。87は大形のもので口縁内面に蓋受部を設ける。bは白化粧の上に黒釉を施釉するもの（85）と緑釉と灰釉の掛け分け（86）がある。

8．鍋（第66図92～105）：Ⅰ類－口縁部が「く」の字に屈曲し胴部が球形のもの。鉄釉単掛け（92、94、95）と灰釉と白釉の掛け分け（93）がある。Ⅱ類－口縁内面に蓋受部を設け腰部が張るもので、小形（100、101）と大形（98、99）がある。鉄釉単掛け、または鉄釉と白釉の掛け分けで外底と口縁内面を露胎とする。102～105は小形の鍋の蓋で、鉄釉単掛けのものと鉄釉と灰釉を掛け分けるものがある。102は外面に丸彫りの文様を施す。Ⅲ類－楕円形の胴部に注口と把手を持つもので、いわゆる行平鍋。96は飴釉単掛け、97は鉄釉と灰釉の掛け分けである。

9．壺（第66図106～112）：Ⅰ類－「アンダガーミ」と呼ばれる小形の四耳壺。黒釉あるいは鉄釉単掛けで無文（106～110）。Ⅱ類－口縁が朝顔状に開く大形の壺。黒釉単掛けで無文（111、112）。

10．急須（第67図113～125）：Ⅰ類－胴部が球形で腰部が張るもの。白釉単掛け（113、114）、黒釉単掛け（115、116、119、120）、灰釉単掛け（117）、白化粧の上に瑠璃釉を施釉するもの（118）がある。113は外面に呉須で「院」の銘を施すもので、小碗31とセット関係にあると思われる。114は外面に呉須と飴釉で文様を施す。Ⅱ類－高台と陶製の把手を持つ大形の急須で、アンビンと呼ばれるもの。121は白釉単掛けで外面に呉須と飴釉で文様を施す。122～125は黒釉単掛けで無文。

11．蓋（第67図126～136）：Ⅰ類－急須の蓋で、摘を持ち庇上面が平坦なもの（Ⅰ－ａ）、庇上面が緩やかに傾斜するもの（Ⅰ－ｂ）、滑り止めを持たないもの（Ⅰ－ｃ）とに分かれる。ａは鉄釉単掛けで外面に白土で文様を施すもの（126）、灰釉単掛けで白土象嵌を施すもの（130）、白釉単掛けで呉須や飴釉で文様を施すもの（127～129）がある。ｂは灰釉単掛けで無文（134）。ｃは鉄釉で文様を施す（133）。Ⅱ類－小碗の蓋で、摘の中央がくぼみ庇上面が膨らむもの（Ⅱ－ａ）と庇上面が段をなし端部を内側に折り曲げるもの（Ⅱ－ｂ）がある。ａは白釉単掛けで外面に呉須と飴釉で文様を施す（131、132）。ｂは黒釉単掛けで無文（135）。Ⅲ類－庇が「ハ」の字状に開くもので、滑り止めを持たない。灰釉単掛けで無文（136）。

12．酒器（第67図137～142）：Ⅰ類－胴部に稜を持ち口縁部を階段状に成形する。外面に呉須や飴釉で文様を施す（137、138、140）。Ⅱ類－胴部が球形のもの。白釉単掛けで外面に呉須や飴釉で文様を施すもの（139）と、褐釉単掛けで丸彫りの文様を施すもの（141）がある。Ⅲ類－上面観が五角形を呈するもの。飴釉単掛けで無文（142）。

13．小壺（第68図143～149）：Ⅰ類－無頸壺で口の小さいもの（Ⅰ－ａ）と広口のもの（Ⅰ－ｂ）に分かれる。ａは水滴と呼ばれるもので、143は黒釉単掛けで無文、144は灰釉単掛けで線彫りの文様を施す。ｂは鉄釉単掛けで口唇部露胎（145）。Ⅱ類－口縁が朝顔状に開くもので、いわゆる油壺。黒釉または飴釉単掛けで胴部に稜を持つもの（146、147）と、黒釉と灰釉の掛け分けで胴部が球形のもの（148、149）がある。

14．瓶（第68図150～153）：Ⅰ類－玉縁口縁を呈する瓢箪形の長頸形で、嘉瓶と呼ばれるもの。黒釉単掛けで無文（150）。Ⅱ類－中形の長頸瓶。白釉と鉄釉を掛け分け外面に丸彫りの文様を施す（151）。Ⅲ類－いわゆる抱瓶。灰釉単掛けで外面に線彫り文様を施す（152）。Ⅳ類－筒形の花生。白釉単掛けで外面に呉須と飴釉で文様を施す（153）。

15．火炉（第68図154～163）：Ⅰ類－円筒形の火炉で口縁部に火窓を持つ。154は鉄釉単掛けで外面に丸彫り文様を施す。155は脚を貼付するもので、灰釉単掛けで無文。156と157は褐釉単掛けで高台を有する。157は外面に丸彫り文様を施す。Ⅱ類－胴部中位をすぼませ腰部が張るもので、肩部に獣面の外耳を貼付する。灰釉単掛けで内面露胎（158）。Ⅲ類－胴部が球形を呈するもので、底部に高台を持つもの（159～162）と脚を貼付するもの（163）がある。159と160は黒釉単掛けで160は外底に墨書を施す。161と162は鉄釉単掛けの大形の火炉である。163は灰釉単掛けで内底に釘穴（？）を穿つ。

16．火取（第69図164～178）：Ⅰ類－円筒形を呈するもの。164は黒釉単掛けで無文。165～167は鉄釉単掛けで、166は外面に丸彫り文様を施す。168は褐釉単掛けで外面に丸彫り文様を施す。白釉単掛けのもの（169～172）は無文（171）、口縁部に緑釉を流し掛けるもの（169、170）、外面に呉須で文様を施すもの（172）がある。173は外面に白釉と灰釉を掛け分けるもので、内面は露胎。174と175は灰釉単掛けで外面に白土象嵌を施す。176は鉄釉の上に緑釉を流し掛け、外面に白土象嵌を施す。Ⅱ類－胴部が丸みを帯び口縁部が内湾するもので、胴部が球形に近いもの（177）と胴部中位をすぼませるもの（178）がある。外面に鉄釉と灰釉を掛け分け、口縁部に飛鉋で文様を施す。

17．灯明具（第69図179）：内底に灯心受を持つ脚付の小杯。黒釉単掛けで底部露胎。無文。

第19表 a　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	特徴	出土地点
第62図（図版63）	1	碗	胴～底	—	—	7.0	Ⅰ：外面に鉄絵で圏線２条、外底に鉄絵で丸文、内面に鉄絵で圏線２状。	表採
	2		底	—	—	6.4	Ⅰ：内底に鉄絵と白土で丸十字文（？）。内底に砂粒溶着。	木Ｌ8-140
	3		口～底	13.0	6.1	6.6	Ⅱ－ａ：内底に鉄釉で圏線、丸文。内底にアルミナ溶着。畳付に白土塗布。	廣北西撹乱
	4		胴～底	—	—	6.2	Ⅱ－ａ：内底に鉄釉で圏線、丸文。外底に墨書で丸文（巴文？）。畳付に白土塗布。	下撹乱
	5		胴～底	—	—	6.2	Ⅱ－ａ：内底に鉄釉で圏線、丸文。外底に「寄」の墨書。内底にアルミナ溶着。畳付に白土塗布。	試掘
	6		口～底	13.2	6.0	5.7	Ⅱ－ｂ：内面気泡状に釉が剥離。畳付に白土塗布。	漏M2-124埋土中
	7		口～底	13.9	5.9	6.5	Ⅱ－ｃ：外底に「南京□□」の墨書。内底にアルミナ溶着。畳付に白土塗布。	下撹乱
	8		口～底	12.0	6.1	5.2	Ⅱ－ｃ：外面に飴釉で格子文。内底にアルミナ溶着。	木Ｌ10-131
	9		口～底	13.0	5.9	6.2	Ⅱ－ｃ：外面に呉須で巴文。内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	10		口～底	13.0	6.2	5.4	Ⅱ－ｃ：外面に呉須で菊花文。内底にアルミナ溶着。	木M1-133
	11		口～胴	13.4	(6.0)	(6.3)	Ⅱ－ｃ：外面に赤絵で圏線、斜格子文を施すが剥落。内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	12		胴～底	—	—	6.3	Ⅱ－ｃ：外面に呉須で圏線、内底に呉須で二重圏線を施すが剥落。	下撹乱
	13		胴～底	—	—	6.4	Ⅱ－ｃ：外面に赤絵で巴文を施すが剥落。内底にアルミナ溶着。	木Ｌ10-146
	14		胴～底	—	—	5.8	Ⅱ－ｃ：内底に緑釉を施釉するが剥落。内底にアルミナ溶着。	下表採
	15		胴～底	—	—	6.8	Ⅱ－ｃ：外面は白釉の上に緑釉を施釉。外底に鉄釉を施釉、内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	16		胴～底	—	—	5.4	Ⅲ：面取りは胴部と腰部の２段。外底に鉄釉を施釉。	木Ｌ9-137
	17		胴～底	—	—	6.4	Ⅳ－ａ：外面に白土象嵌で葉文（？）。内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	18		胴～底	—	—	5.6	Ⅳ－ａ：外面に呉須と飴釉で斜格子文、花弁文、圏線。内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	19		口～胴	9.6	—	—	Ⅳ－ｂ：口唇部を露胎にする。外面に呉須と飴釉で斜格子文、花弁文、圏線。	下撹乱
第63図（図版64）	20	小碗	口～底	8.8	4.2	4.1	Ⅰ－ａ：内面に鈍黄褐色の石灰質付着。	木M1-143＋下撹乱
	21		口～底	10.0	4.1	4.0	Ⅰ－ａ：外面に気泡あり。	下撹乱
	22		口～胴	10.0	—	—	Ⅰ－ａ：外面に白土で「西」の銘。外面の灰釉の発色は不良。	廣東西溝
	23		口～底	8.8	5.6	4.1	Ⅰ－ａ：畳付に白土塗布。内底に目痕が溶着。	下撹乱
	24		胴～底	—	—	3.8	Ⅰ－ａ：外面に鉄釉で巴文。	用Ｌ1-125
	25		胴～底	—	—	3.8	Ⅰ－ｂ：外底に「日」の墨書。内底に黄緑灰色の石灰質付着。	木Ｌ10-166
	26		底	—	—	3.8	Ⅰ－ａ：外面に白土象嵌で葉文（？）。畳付に砂粒溶着。	用撹乱
	27		胴～底	—	—	4.2	Ⅰ－ａ：外面に白土象嵌で葉文（？）。	木Ｌ10-130
	28		口～底	8.3	5.5	4.4	Ⅱ：外面に呉須と飴釉で斜格子文、花文、花弁文、圏線。腰部にアルミナ溶着。	下撹乱
	29		口	8.8	—	—	Ⅰ－ｃ：口唇部に鉄釉塗布。外面に呉須で巴文。	木M0-140
	30		口～底	8.2	4.1	3.6	Ⅰ－ｃ：外面に赤絵で「二」の銘。内底に緑釉で巴文。内底にアルミナ溶着。	下撹乱
	31		口～底	8.8	5.2	3.9	Ⅲ：面取りは胴部と腰部の２段。外面に呉須で「院」の銘。畳付に白土塗布。	下撹乱
	32		胴～底	—	—	3.9	Ⅲ：面取りは胴部と腰部の２段。畳付に白土塗布。	木
	33		口～底	9.4	4.3	3.8	Ⅳ－ａ：外面に鉄釉で丸文（？）。外面の灰釉の発色は不良。	下撹乱
	34		口～底	8.2	3.9	3.8	Ⅳ－ｂ：外面に呉須で山水文。	木
	35		口～底	8.6	4.3	4.0	Ⅳ－ｂ：内底に呉須で草花文（京焼の模倣か？）。畳付に白土塗布。	下撹乱
	36		口～底	8.8	4.4	3.8	Ⅳ－ｂ：外面に呉須で菊花文。内面に呉須で唐草文。畳付に白土塗布。	下撹乱
	37		口～底	10.2	4.9	3.8	Ⅳ－ｂ：外面に呉須で菊花文、外底に「院」の銘。内面に呉須で唐草文、内底に二重圏線、花文。	不明
	38		底	—	—	3.8	Ⅳ－ｂ：外面に呉須で鎬文。畳付に白土塗布。内底にアルミナ溶着。	木Ｌ10-142
	39		胴～底	—	—	3.4	Ⅳ－ｃ：外面に呉須で「共進會(？)」の銘。畳付に白土塗布。	廣北西撹乱
	40		底	—	—	3.4	Ⅳ－ｂ：内底に呉須で花文。外底に鉄釉塗布。	木Ｌ7-134
	41		底	—	—	3.7	Ⅳ－ｂ：外面に呉須で印花文（？）。内底にアルミナ溶着。外底に石灰質付着。	用M2-128埋土
	42		胴～底	—	—	4.0	Ⅳ－ｂ：内底に呉須で「沖縄神社」の銘。	漏M3-126
	43		口～胴	8.8	—	—	Ⅴ：口縁形態はべっ甲口。内面轆轤跡明瞭。	下撹乱
	44	小杯	口～底	3.1	1.8	1.5	高台削りは雑。	木M8-147
	45		口～底	3.4	2.0	2.0	外面の灰釉の発色は不良。外底中央に灰釉塗布。	廣北西撹乱
	46		口～底	4.6	2.4	2.0	外面に呉須で豹皮文。	下撹乱
	47		口～底	5.0	2.5	2.4	外面に呉須と飴釉で横線文を施す。外面腰部は削り成形跡明瞭。	下撹乱
第64図（図版65）	48	皿	口～底	13.2	4.5	6.4	Ⅰ－ａ：口唇部に鉄釉塗布。内底外縁に二重圏線２条。	下撹乱
	49		口～底	13.5	4.0	6.6	Ⅰ－ａ：口唇部に鉄釉塗布。内底に二重圏線と「の」字形圏線。内底露胎部にアルミナ溶着。	下撹乱
	50		口～底	13.6	3.7	6.2	Ⅰ－ａ：口唇部に呉須を塗布するが剥落。外面に呉須で丸文（家紋？）、内底に呉須で巴文。	下撹乱
	51		口～底	13.6	4.5	6.6	Ⅰ－ａ：口唇部に鉄釉塗布。内底露胎部にアルミナ溶着。	不明
	52		口～胴	13.0	—	—	Ⅰ－ｂ：口唇部飴釉状に発色。内底露胎部にアルミナ溶着。	廣北西撹乱
	53		口～胴	13.2	—	—	Ⅰ－ｂ：緑釉の下に薄く白化粧を施す。内底に圏線。	用K10-124
	54		口～底	13.8	4.7	9.4	Ⅰ－ｃ：口唇部に鉄釉塗布。外面に唐草文・巴文、菊花文、斜線文、内底に巴文。	用撹乱
	55		口～底	9.8	2.6	5.0	Ⅰ－ｃ：口唇部露胎。外面に圏線４条、内底に赤絵で丸文（家紋？）	不明
	56		口～底	10.0	2.9	4.2	Ⅰ－ｃ：口唇部に鉄釉塗布。外面に唐草文、内底に巴文。	下撹乱
	57		口～底	17.0	2.5	10.6	Ⅱ：畳付と外底に砂粒溶着。	木M1-141
	58		口～底	16.0	4.6	6.7	Ⅱ：鍋等の蓋の可能性あり。	下撹乱
	59		口～底	14.0	3.2	6.7	Ⅲ：内面に呉須で鋸歯状文、蘇鉄文（？）。内底露胎部にアルミナ溶着。	下撹乱
	60		口～底	13.6	4.2	5.6	Ⅲ：内面に呉須で縦位の区画文・梅花文。内底露胎部にアルミナ溶着。	下撹乱

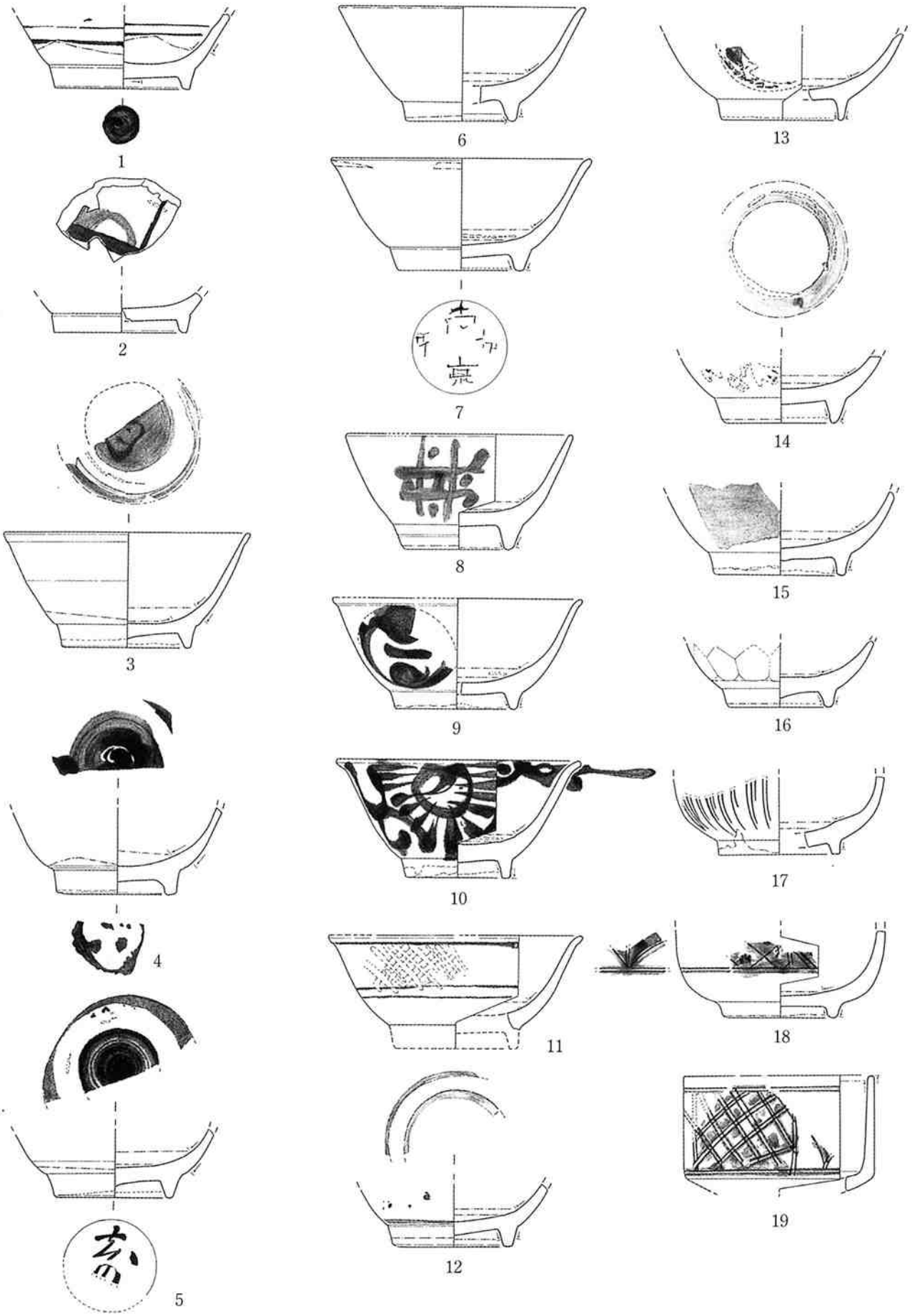
第20表ｂ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	特徴	出土地点
第64図（図版65）	61	皿	口～底	14.2	3.7	6.8	Ⅲ：内面に呉須で「三」字形文を５個施す。内底露胎部にアルミナ溶着。	下攪乱
	62		口～胴	14.0	—	—	Ⅲ：内面に呉須で斜格子文（四方襷文を意識か？）。	下攪乱
	63		底	—	—	8.3	Ⅲ：外底中央を円形に削る。内底に二重圏線・呉須で丸文（家紋？）。	下攪乱
	64		口～底	13.4	3.8	5.8	Ⅲ：内面と内底に呉須と飴釉で染花文。内底露胎部にアルミナ溶着。	下攪乱
	65		底	—	—	6.8	Ⅲ：外底中央を円形に削る。内底に緑釉で巴文。内底露胎部にアルミナ溶着。	下攪乱
	66		底	—	—	4.1	Ⅳ：外底露胎部に砂目、黒色粒溶着。	漏M2-127
第65図（図版66）	67	大皿	口～底	22.0	6.2	10.6	内底露胎部は２mm幅、４mm幅、６mm幅の同心円形。６mm幅にアルミナ溶着。	下攪乱
	68	小鉢	口	14.4	—	—	灰釉の発色は不良。外面に白土象嵌の葉文、圏線。	用L6-123
	69		口	15.0	—	—	緑釉の発色は口縁部のみ良好で、他は不良。	下攪乱
	70	大鉢	口～胴	22.8	—	—	Ⅰ－ａ：灰釉の発色は不良。内面に鈍黄色の石灰質が付着。	木L9-148
	71		口～底	24.2	10.8	12.4	Ⅰ－ａ：口唇部に一部溶着痕あり。内底露胎部にアルミナ溶着。	下攪乱
	72		口～底	20.2	8.7	9.8	Ⅰ－ｂ：両面に飴釉の釉垂れあり。	下攪乱
	73		口	26.0	—	—	Ⅱ－ａ：両面に轆轤跡明瞭。	用L7-124
	74		口～胴	26.0	—	—	Ⅱ－ａ：両面に鉄絵で草花文、横線文。口縁部に鉄錆が付着。	廣M0-121
	75		口	27.6	—	—	Ⅱ－ｂ：鍔上面は部分的に露胎。	木M0-143
	76		口	28.0	—	—	Ⅱ－ｂ：鍔の外側と内側で釉の発色が異なる。内面轆轤跡明瞭。	下攪乱
	77		胴～底	—	—	9.2	Ⅱ－ｂ：内底に鉄釉で圏線と丸文（蛇の目か？）。外底に「全」の墨書。	木M0-144
	78		底	—	—	7.6	Ⅱ－ｂ：内底に鉄釉で丸文。内底露胎部に目跡（？）が溶着。	木M0-132
	79		口～底	27.0	11.4	11.9	Ⅱ－ｂ：内底露胎部に素地土溶着。畳付に白土塗布。	下攪乱
	80		口	—	—	—	Ⅱ－ｂ：焼成不良で一部釉が剥落。	下攪乱
	81		胴～底	—	—	11.0	Ⅱ－ｂ：内底に白土で施文。露胎部に砂粒、アルミナ（？）が溶着。	漏M3-127
	82		底	—	—	11.6	Ⅱ－ｂ：外底に鉄釉で花文（？）。内底露胎部にアルミナ溶着。	木M0-143
	83		口～胴	26.0	—	—	Ⅲ－ａ：灰釉の発色は不良。内面に圏線（？）。	用攪乱
	84		口	24.0	—	—	Ⅲ－ａ：口縁部に約1.5cm幅の注口を持つ。	木M2-136
	85		口・底	27.5	(13.8)	9.8	Ⅲ－ｂ：黒釉の下に白化粧を施す。内面と内底に緑釉流し掛け。	廣M1-121・L10-124
	86		口～胴	—	—	—	Ⅲ－ｂ：内面轆轤跡明瞭。口縁部に約1.5cm幅の注口を持つ。	木L3-134
	87		口～胴	31.9	—	—	Ⅲ－ａ：蓋受部の幅は約1.5cm。両面に淡黄色の石灰質付着。	木L10-144
	88		底	—	—	10.2	Ⅱ－ｂ：内底に鉄釉で丸文。畳付に白土を塗布。	下攪乱
	89		底	—	—	10.0	Ⅱ：内底に白土と鉄釉で印花文（？）。内底に墨書（判読不可）。	用攪乱
	90		底	—	—	10.2	Ⅱ－ｂ：内底に鉄釉で丸文。外底に「近」の墨書。	下攪乱
	91		底	—	—	10.6	Ⅱ－ｂ：内底に重ね焼きの目跡２個残存、わずかにアルミナ溶着。	下攪乱
第66図（図版67）	92	鍋	口	18.4	—	—	Ⅰ：外面口縁部に紐状の横耳を貼付。内面胴部に鉄釉を薄く塗布。	用K3-128
	93		口	15.4	—	—	Ⅰ：外面口縁部に白釉塗布。	試掘
	94		口～胴	15.2	—	—	Ⅰ：蓋受部は釉を掻き取り、砂粒が付着。	下攪乱
	95		口	19.0	—	—	Ⅰ：蓋受部に黒色粒が付着。内面轆轤跡明瞭。	下攪乱
	96		胴	—	—	—	Ⅲ：外面に明赤灰色の石灰質が付着。内面轆轤跡明瞭。	木M1-141
	97		把手	—	—	—	Ⅲ：先端が算玉形に膨らむ器形。内面轆轤跡明瞭。	下攪乱
	98		口	18.2	—	—	Ⅱ：両面轆轤跡明瞭。蓋受部に砂粒（？）が付着。	下攪乱
	99		口～底	22.8	12.0	9.8	Ⅱ：外面に釉垂れ、外底面に糸切り跡明瞭。蓋受部は露胎でアルミナ溶着。内底に白土溶着。	下L7-118
	100		口～底	13.6	7.3	7.3	Ⅱ：外面に飛鉋。蓋受部と内底は釉を掻き取り、蓋受部に白土塗布。	下攪乱
	101	鍋	口～底	13.7	8.9	6.4	Ⅱ：蓋受部と内底は釉を掻き取る（内底は蛇の目）。蓋受部に白土塗布。	下攪乱
	102	蓋	撮	4.1	—	—	外面に花文（？）。内面轆轤跡明瞭。	木M1-134
	103		撮	4.8	—	—	撮頂部に白土塗布。内面に目跡（？）溶着。	用L0-124
	104		撮～庇	4.3	3.6	12.2	庇端部と撮頂部に白土塗布。内面に施釉工具跡明瞭。	下攪乱
	105		撮～庇	4.8	4.0	11.6	外面に紫黒色の窯壁溶着。庇端部に白土塗布。内面に施釉工具跡明瞭。	下攪乱
	106	壺	口	12.2	—	—	Ⅰ：口唇部は施釉跡釉を掻き取る。内面に釉垂れあり。	試掘
	107		口	15.0	—	—	Ⅰ：口縁部断面に積み上げ跡が確認できる。	試掘
	108		口	10.0	—	—	Ⅰ：頸部断面に積み上げ跡確認。素地は沖縄産無釉陶器に類似。	下攪乱
	109		胴	—	—	—	Ⅰ：外面の鉄釉の発色は不良。内面轆轤跡明瞭。	廣L10-125
	110		胴～底	—	—	10.4	Ⅰ：外底の施釉は雑。内面轆轤跡明瞭で、内底にアルミナ溶着。	下攪乱
	111		口	16.4	—	—	Ⅱ：内面口縁部の施釉は雑で気泡あり。（112と同一固体か？）	漏M4-126埋土中
	112		底	—	—	20.6	Ⅱ：畳付に白土塗布し、その上にアルミナ溶着。（111と同一固体か？）	漏M4-126埋土中
第67図（図版68）	113	急須	口～胴	6.3	—	—	Ⅰ：外面に呉須で「院」の銘。内面の灰釉の発色は不良で、轆轤跡明瞭。	下攪乱
	114		胴～底	—	—	4.4	Ⅰ：外面に呉須と飴釉で雲龍文。内面に一部アルミナ（？）と鉄錆が付着。	下攪乱
	115		口～胴	6.6	—	—	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭で、注口裏に７mm程度の孔を縦に２個穿つ。	木L5-134
	116		口～胴	7.8	—	—	Ⅰ：口唇部は釉を掻き取る。両面轆轤跡明瞭。	下攪乱
	117		注口	—	—	—	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭で、注口裏に約７mmの孔を三角状に３個穿つ。外面に白土象嵌で線条文。	木M1-147
	118		注口	—	—	—	Ⅰ：外面は白化粧の上に瑠璃釉を施釉。内面の灰釉の発色は不良で、轆轤跡明瞭。	木M1-139
	119		底	—	—	6.1	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭。	木M1-141
	120		底	—	—	2.7	Ⅰ：外底中央を円形に削る。内面に浅黄橙色の石灰質付着。	木L10-143
	121		口～胴	8.6	—	—	Ⅱ：口唇部に白土塗布。外面に黒釉と呉須と飴釉で圏線、花弁文(？)。把手及び注口基部に緑釉流し掛け。内面注口裏に約６mmの孔を三角状に３個穿つ。	下攪乱

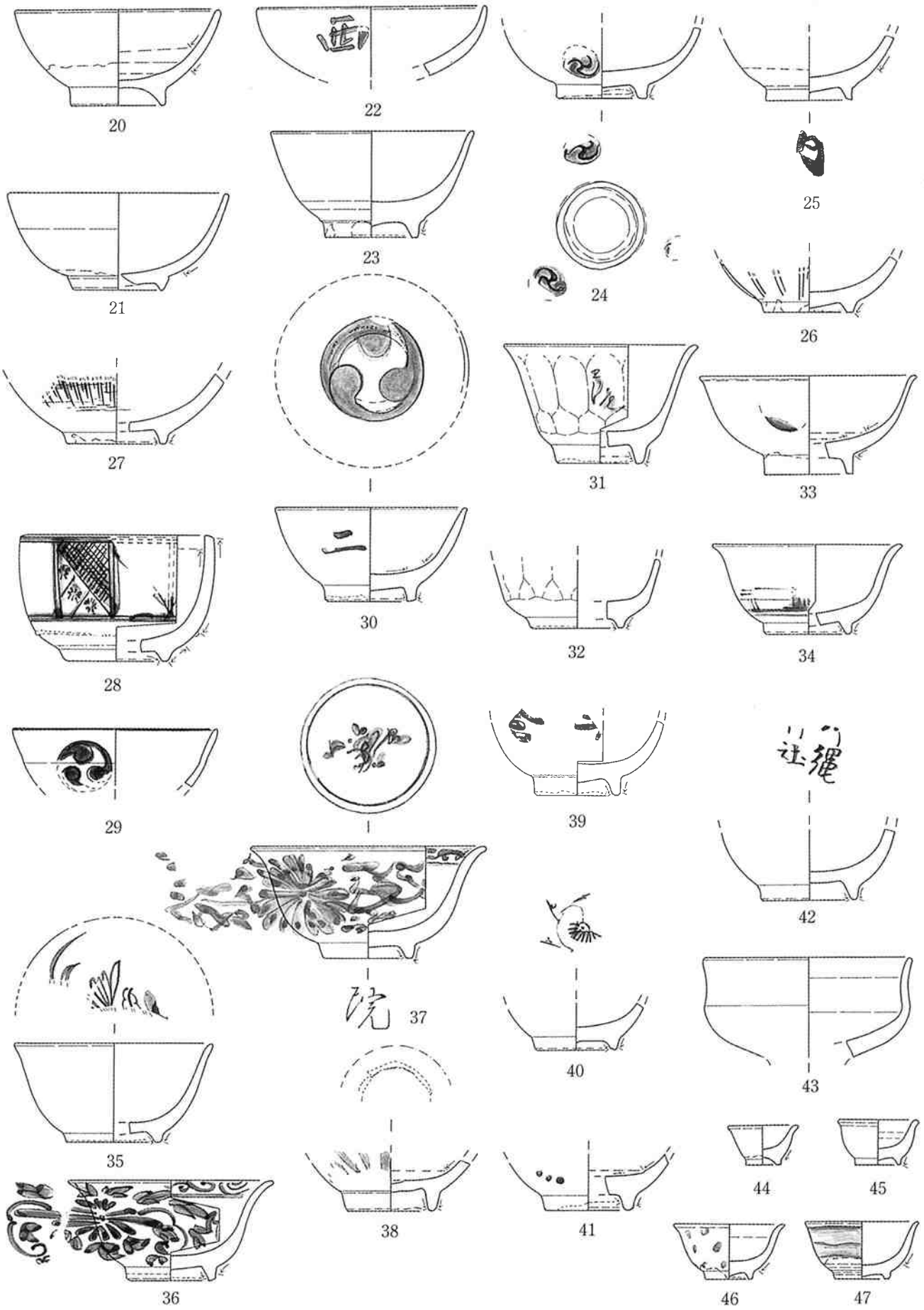
第21表ｃ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	特徴	出土地点
第67図（図版68）	122	急須	把手	—	—	—	Ⅱ：内面の施釉は雑で、紫黒色の窯壁（？）溶着。	廣北西撹乱
	123		口	11.0	—	—	Ⅱ：外面に灰赤色の窯壁溶着。内面轆轤跡明瞭で、浅黄橙色の石灰質付着。	木M0-144
	124		胴	—	—	—	Ⅱ：両面に灰白色の石灰質付着。内面轆轤跡明瞭。	漏M2-127
	125		胴～底	—	—	10.6	Ⅱ：内面轆轤跡明瞭で、黒釉が一部溶着。	木M0-146＋用撹乱
	126	蓋	庇～底	6.0	—	3.9	Ⅰ－ａ：外面に白土で豹皮文。素地は沖縄産無釉陶器に類似。	廣M0-122
	127		庇～底	9.0	—	6.6	Ⅰ－ａ：外面に呉須で巴文。内面に白土塗布。	下表採
	128		庇～底	7.0	—	4.4	Ⅰ－ａ：外面に呉須と飴釉で花弁文、圏線。	下表採
	129		庇～底	6.8	—	5.0	Ⅰ－ａ：外面に呉須で「院」の銘。内面中央のみ施釉。	下撹乱
	130		庇	7.6	—	—	Ⅰ－ａ：外面に白土象嵌で斜格子文、花弁文（？）。	下撹乱
	131		撮～底	8.0	3.1	6.8	Ⅱ－ａ：外面に呉須と飴釉で牡丹文。	下撹乱
	132		撮～底	10.2	3.4	9.0	Ⅱ－ａ：外面に呉須と飴釉で圏線、丸文、葉文、斜格子文、花文。外面に目跡４ヶ所あり。	下撹乱
	133		庇	7.2	—	—	Ⅰ－ｃ：外面に鉄釉で花弁文（？）を施す。	木M3-138
	134		庇～底	—	—	8.6	Ⅰ－ｂ：鉄釉を薄く施釉した上に灰釉を施釉。	木L10-141
	135		撮～底	5.2	2.6	13.2	Ⅱ－ｂ：庇内面端部の釉を掻き取る。両面に気泡あり。	漏
	136		庇	16.6	—	—	Ⅲ：庇端部の釉を掻き取り、白土塗布。内面に釉垂れあり。	下撹乱
	137	酒器	口～底	4.6	10.9	7.4	Ⅰ：外面に呉須と飴釉で花弁文、斜格子文。注口基部に緑釉流し掛け。	下撹乱
	138		胴～底	—	—	7.1	Ⅰ：外底面蛇の目釉剥ぎで露胎部にアルミナ溶着。内面轆轤跡明瞭で鉄釉を雑に施釉。外面に呉須と飴釉で圏線、花弁文、斜格子文。注口基部に緑釉流し掛け。	下撹乱
	139		胴～底	—	—	6.8	Ⅱ：外底面蛇の目釉剥ぎで露胎部にアルミナ溶着。内面轆轤跡明瞭で鉄釉を雑に施釉。内底に器物片が溶着。外面に呉須と飴釉で花弁文、圏線。	下撹乱
	140		胴	—	—	—	Ⅰ：外面に呉須で柳文（？）。内面轆轤跡明瞭。	木M8-149
	141		胴～底	—	—	7.2	Ⅱ：外面に竹葉文。外面腰部に器物片溶着。内面轆轤跡明瞭。	不明
	142		胴～底	—	—	10.4	Ⅲ：外底中央を円形に削る（碁笥底か？）。	漏M5-124埋土中
第68図（図版69）	143	小壺	口	7.6	—	—	Ⅰ－ａ：外面気泡あり。内面轆轤跡明瞭。	下撹乱
	144		口～胴	3.4	—	—	Ⅰ－ａ：外面に花弁文、斜格子文。内面に砂粒が溶着。	下撹乱
	145		口	6.0	—	—	Ⅰ－ｂ：口唇部は施釉後釉を掻き取る。内面轆轤跡明瞭。	木L10-132
	146		口	4.7	—	—	Ⅱ：外面から内面頸部まで黒釉を施釉。内面轆轤跡明瞭。	木
	147		胴	—	—	—	Ⅱ：外面から内面頸部まで飴釉を施釉。内面轆轤跡明瞭。	下撹乱
	148		口～胴	2.5	—	—	Ⅱ：外面から内面頸部は黒釉、内面頸部以下は灰釉施釉。内面轆轤跡明瞭。	下撹乱
	149		底	—	—	3.4	Ⅱ：外面は黒釉、内面は灰釉を施釉。内面轆轤跡明瞭。	下撹乱
	150	瓶	口・胴	6.0	—	—	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭。口縁直下の施釉は雑。黒釉の下に鉄釉を薄く施釉。	木＋下撹乱
	151		胴	—	—	—	Ⅱ：内面轆轤跡明瞭。外面鉄釉部分に線条文。	木
	152		胴～底	—	—	23.4	Ⅲ：外面に松竹梅樹文。	漏M2-127＋廣M1-125
	153		胴～底	—	—	11.4	Ⅳ：内面轆轤跡明瞭。外面に呉須で竹文、呉須と飴釉で横線文。	木M3-137
	154	火炉	口～胴	13.5	—	—	Ⅰ：内面口縁に逆「Ｌ」字形の器物受を貼付。外面に圏線、斜線文。	下撹乱
	155		底	—	—	10.5	Ⅰ：外底面調整（ナデ）跡、内面轆轤跡明瞭。	木
	156		口～底	16.1	12.4	11.0	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭。外面に蘇鉄葉文。内底に砂粒がわずかに溶着。	木M0-145
	157		口～胴	—	—	—	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭。外面に圏線２条	廣北西撹乱
	158		胴～底	—	—	11.0	Ⅱ：外面に獣面（獅子）の外耳を１対貼付。外面に鈍橙色の石灰質付着。	木M10-143
	159		口～底	14.2	14.0	10.7	Ⅲ：高台に半円形の抉りを３ヶ所入れる。内底に目跡？溶着。	下撹乱
	160		胴～底	—	—	10.9	Ⅲ：外底に「御座敷所」の墨書。外底に器物片溶着。	下撹乱
	161		口・底	28.0	(23.7)	16.4	Ⅲ：外面に灰白色の石灰質が付着。内面内面轆轤跡明瞭。素地は沖縄産無釉陶器に類似。	木M8-149
	162		底	—	—	19.0	Ⅲ：両面に浅黄橙色の石灰質が付着。内底に器物片溶着。	下撹乱
	163		底	—	—	10.6	Ⅲ：内底（脚）に釘穴（？）を穿つ。内底に釉が一部付着。	用撹乱
第69図（図版70）	164	火取	口～底	11.1	9.1	7.7	Ⅰ：外面に圏線２条。内底に煤跡（？）が付着。	下撹乱
	165		口～底	10.6	8.0	7.3	Ⅰ：外面全体に丸彫りの横線を施し、杉状の器形を呈する。	下撹乱
	166		口～胴	9.9	—	—	Ⅰ：内面轆轤跡明瞭。外面に圏線、線条文。内底に淡黄色の石灰質が付着。	下撹乱
	167		底	—	—	7.5	Ⅰ：外底は碁笥底状を呈する。内底は中央を除き灰釉を施釉。	木M0-140
	168		胴～底	—	—	10.6	Ⅰ：外面に竹葉文（？）、圏線。畳付に白土を塗布。内面轆轤跡明瞭。	用K10-125
	169		口～底	10.8	8.2	7.2	Ⅰ：白釉の上から口縁部に緑釉を施釉。畳付に白土を塗布。	木M9-149
	170		胴～底	(10.6)	7.9	7.1	Ⅰ：白釉施釉後腰部を掻き取り、口縁部に緑釉を施釉。畳付に白土を塗布。	下表土
	171		口～胴	10.8	—	—	Ⅰ：外面に圏線。内面に煤跡が付着。	木
	172		口	—	—	—	Ⅰ：器形は直口口縁で面取り。外面に呉須で印花文（？）。	下撹乱
	173		胴～底	—	—	4.0	Ⅰ：外面腰部まで白釉、腰部から底部まで灰釉を施釉。畳付に白土を塗布。	下撹乱
	174		口	8.8	—	—	Ⅰ：外面に白土象嵌で圏線、葉文（？）。	廣北西撹乱
	175		胴～底	—	—	7.0	Ⅰ：外面に白土象嵌で圏線、花文。	木M1-143
	176		口	—	—	—	Ⅰ：器形は直口口縁で面取り。外面に白土象嵌で斜格子文を施した後、緑釉を施釉。	下撹乱
	177		口～胴	10.8	—	—	Ⅱ：外面に鉄釉と灰釉を掛け分け、露胎部に飛鉋。	廣北西撹乱
	178		口～胴	10.0	—	—	Ⅱ：外面に鉄釉と灰釉を掛け分け、露胎部に飛鉋。	下撹乱
	179	灯明具	口～底	5.4	4.8	4.1	外底面は糸切り跡明瞭。中央に釘穴を穿つ。	下撹乱

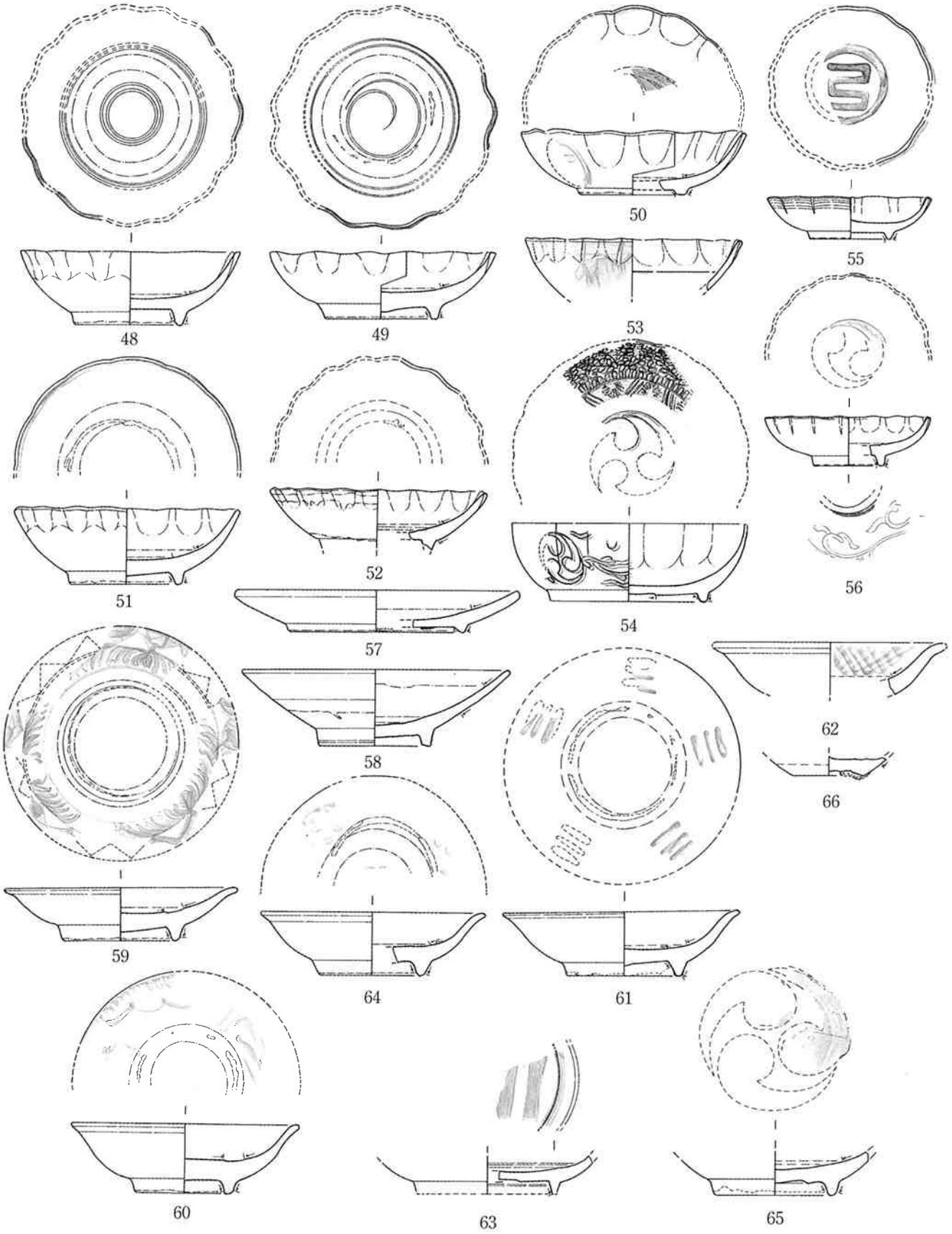
※口径・器高・底径の単位はcmで、（）内は推定値。下之御庭＝下、用物座＝用、漏刻門＝漏、廣福門＝廣、木曳門＝木と略記。接合は＋と表記。



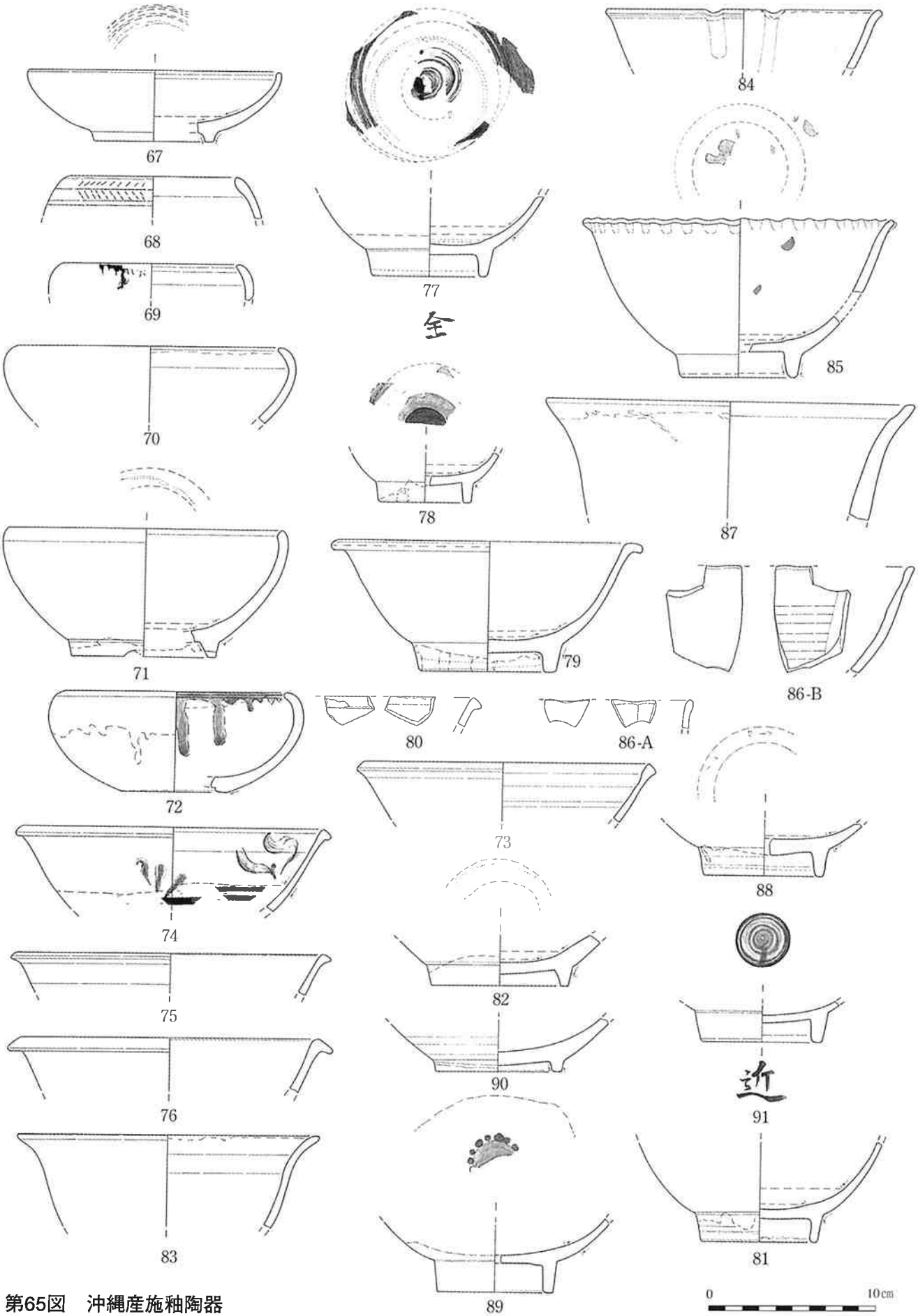
第62図　沖縄産施釉陶器



第63図　沖縄産施釉陶器

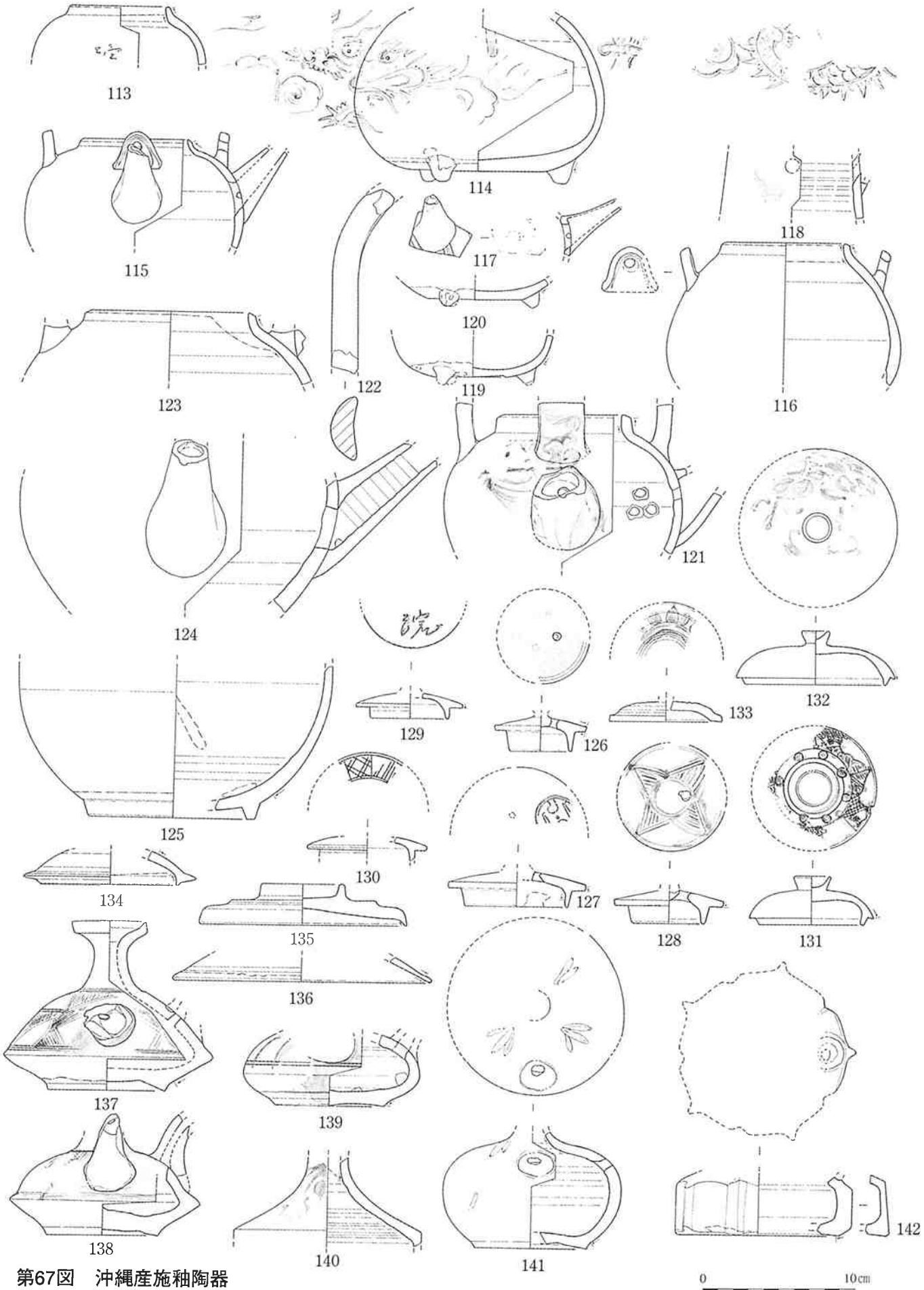


第64図　沖縄産施釉陶器

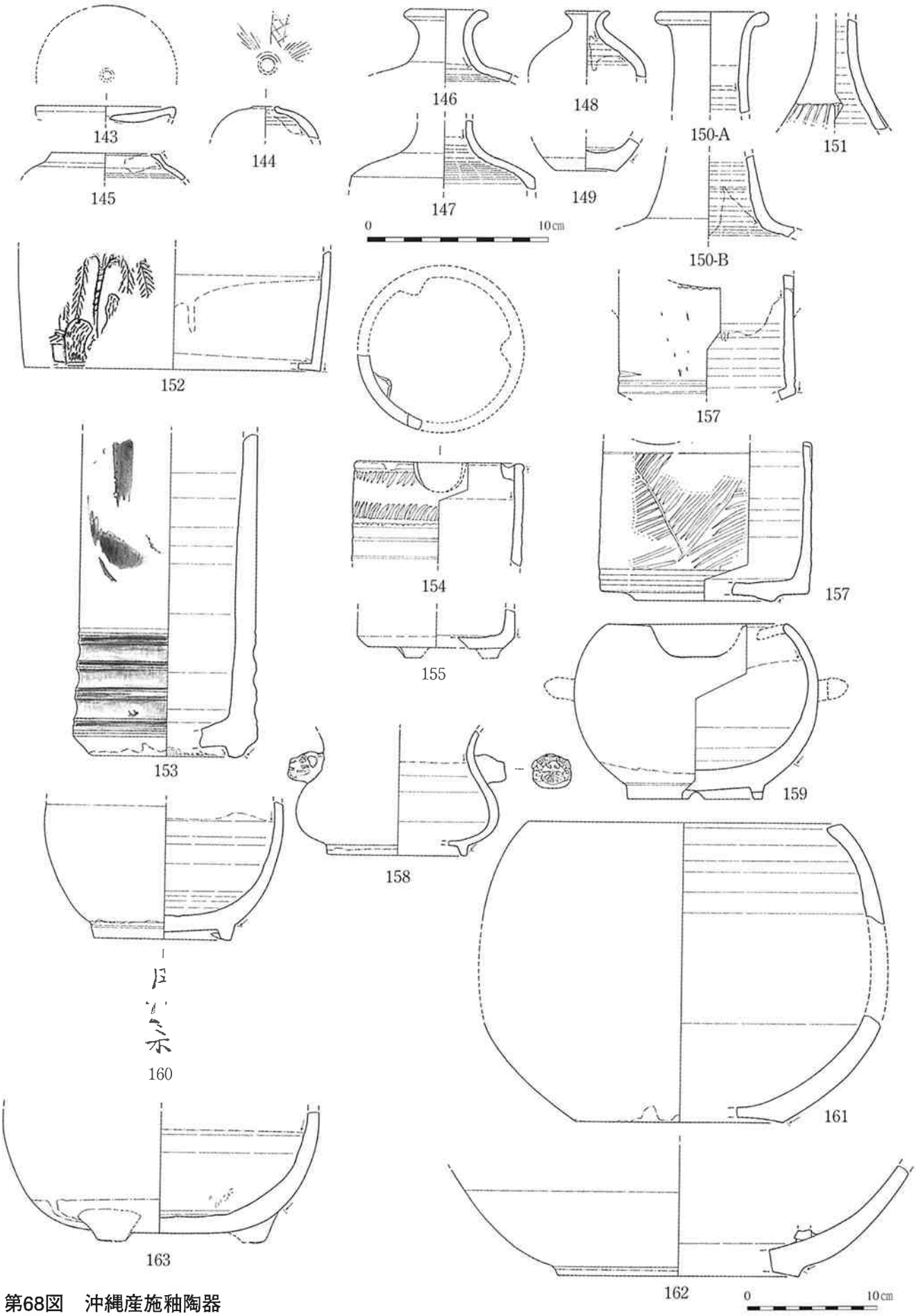


第65図　沖縄産施釉陶器

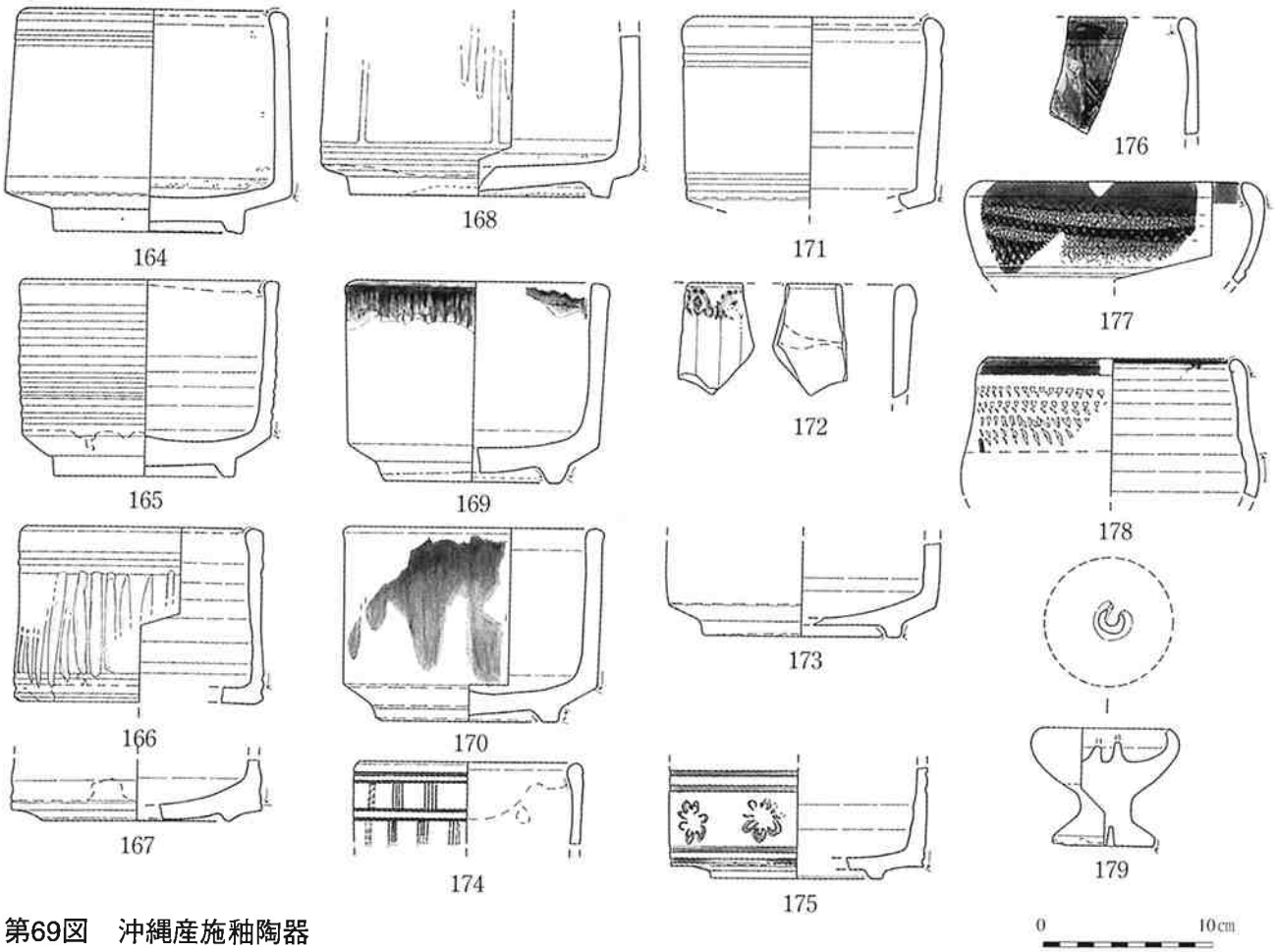
第66図　沖縄産施釉陶器



第67図　沖縄産施釉陶器



第68図　沖縄産施釉陶器



第69図　沖縄産施釉陶器

第24節　沖縄産無釉陶器

「荒焼（アラヤチ）」とも称される高火度焼成された焼き締め陶器である。基本的には無釉だが、マンガン釉や泥釉などの自然釉が施釉される例もある。器種は碗・小杯・皿・急須・火取・火炉・燭台・鉢・擂鉢・壺・徳利・蓋・水滴・瓶・蔵骨器・甕などが確認されている。以下に各器種の概要を記し、詳細は観察表に譲る。（第22表～第23表）

1．碗（第70図1～10）：Ⅰ類－高台削りの浅い直口碗（1、2）。Ⅱ類－直口口縁で腰部が張るもの。高台削りはⅠ類に比して丁寧。無文のもの（5、6、8、9）と外底に判を記すもの（3、4）がある。3と5は黒色の釉を施釉する。Ⅲ類－口縁端部を外側に折り曲げる筒形の碗で、両面胴上部に黒褐色の釉を施釉する（7）。Ⅳ類－皿形を呈する器高の低い碗で、内底に判を記す（10）。

2．小杯（第70図11、12）：腰部が張り口縁部が外反するもので、薄手で高台の成形も丁寧。無釉のもの（11）と外面に黒褐色の釉を施釉するもの（12）がある。いずれも無文。

3．皿（第70図13～18）：Ⅰ類－口縁部が逆「ハ」の字状に開く小皿で、外面の一部に黒色の釉を施釉する。鍋等の蓋の可能性もある（13）。Ⅱ類－大形の皿で口縁部の形態は不明だが、Ⅰ類と同様の器形を呈すると思われる（18）。Ⅲ類－高台を持たない平底の小皿で、腰部に稜を持つもの（14）。内湾気味に立ち上がるもの（15～17）がある。後者は灯明皿として使用されるため、口唇部に煤跡が付着するもの（16）もある。

4．急須（第70図19～23）：Ⅰ類－球形の胴部を持つもの。口縁内面に蓋受部を設け、外面胴部に淡黄色の釉を流し掛けるもの（19）や、無文のもの（20、21）、有文のもの（22）がある。Ⅱ類－筒形で内面口縁部に蓋受部を設けるもので、内面上部に灰色の釉を施釉する（23）。

5．火取（第70図24）：腰部に稜を持つ筒形のもの。底部は平底で口縁部は方形を呈する。

6．火炉（第70図25～28）：Ⅰ類－肩部で内側に屈曲し方形の把手を1対貼付するもの。25は把手直上に圏線

を巡らす。28は円盤状の脚を貼り付け、外底面に線彫りで文様（判か？）を施す。Ⅱ類－筒形を呈するもので、半円形の火窓を設け外面に文様を施すもの（26）と、口縁端部が外側に張り出し内面にL字状の器物受を貼付するもの（27）がある。27は両面に褐灰色の釉を施釉する。

7．燭台（第70図29）：底部に逆台形の脚を貼付するもので、上半部は欠落しているが灯心受の存在が予想される。

8．器種不明（第70図30）：高台脇に削りを入れる薄手の底部片で、高台刳りは施されず平底を呈する。

9．鉢（第71図）：Ⅰ類－平底の底部からほぼ直口する桶形のもの。口縁部の断面形態がT字状のもの（31）と方形のもの（32～34）があり、外底に判を記すもの（35）もある。また、口縁部が逆「ハ」の字状に開く大形の浅鉢（36）もある。Ⅱ類－「ミジクブサー」と呼ばれる内湾口縁の平底鉢で、頸部がすぼまるもの（37）、口縁部が断面三角形状に肥厚するもの（38、39）、舌状のもの（40、41）とに分かれる。外面に櫛描きで文様を施すもの（38～41）が多いが、無文のもの（37）もある。39は両面に褐灰色の釉を施釉する。Ⅲ類－口縁部を外側に折り曲げ鍔縁状を呈するもので、鍔や胴部に線彫りで文様を施すもの（42、43、47）や無文のもの（45、46、48、49）がある。また、口縁部の張り出しが弱いもの（44）もある。42は両面に褐灰色の釉を施釉する。

10．擂鉢（第72図）：Ⅰ類－口縁部が逆「ハ」の字状に開く器形で、口縁部直下に抉りを入れ稜を形成する。内面全体に擂目を施し、口縁部のみ擂目をナデ消す（50～57）。底部は平底が主だが、高台を持つもの（58、59）もある。50と56は外面の一部に黒褐色の釉を流し掛ける。Ⅱ類－口縁部を外側に折り曲げ鍔縁状を呈するもの。内面全体に擂目を密に施し、口縁部のみ擂目をナデ消す。底部は平底で高台を持たない（60～66）。

11．壺（第73図67～72）：67と69は肩部に紐状の横耳を貼付する玉縁口縁の壺で、外面に灰褐色の釉を施釉する。68は肩部に文様を施すもので、外面に黒褐色の釉を施釉する。70は肩部に紐状の縦耳を貼付する大形の無頸壺で、外面にタタキ調整の跡が残る。71は口縁端部を外側に折り曲げるもので、口縁部に黒褐色の釉を流し掛ける。72は丸みを帯びる中形壺の胴部で、内面に暗青灰色の釉を施釉する。

12．徳利（第73図73、74）：Ⅰ類－胴部が砲弾形を呈するもので、「ターワカサー」あるいは「鬼の手（ウニヌティー）」と称されるもの（73）。Ⅱ類－胴部が楕円形を呈する大形の徳利で、内面に暗灰色の釉を施釉する（74）。

13．蓋（第73図75～77）：Ⅰ類－庇上面を膨らませ端部が外側に張り出すもので、庇頂部には宝珠状の摘を貼付する。急須あるいは壺に対応するものと思われる（75）。Ⅱ類－壺に対応するもので、摘を持たず庇上面を平坦に雑に成形する（76）。Ⅲ類－「ハ」の字状に庇が傾斜するもの。滑り止めを持たず摘の有無も不明である（77）。

14．水滴（第73図78、79）：Ⅰ類－胴部に突帯を巡らすもので、外面に黄緑黒色の釉を施釉する（78）。Ⅱ類－胴部が横長の楕円形を呈するもので、外面に淡黄色の釉を施す。肩部に「申」の銘を1対施す（79）。

15．瓶（第73図80）：口縁が内湾する長頸の瓶で、外面に明赤灰色の石灰質が付着する。胴部以下の器形は不明。

16．蔵骨器（第73図81～83）：Ⅰ類－有頸の甕形蔵骨器で、口縁内面に「光緒十九年癸…」の銘書を施す（81）。Ⅱ類－肩部に瓦屋根を模した庇を持つ甕形のもので、外面に線彫りと貼り付けで文様を施す（82、83）。蔵骨器はいずれも外面にマンガン釉を施釉する。

17．甕（第73図84～88）：Ⅰ類－肩部に最大径を持ち、口縁部を外側に折り曲げ鍔縁状を呈するもの。84は外面に線彫りと貼り付けで文様を施し、淡黄色の釉を施釉する。85は口径が1ｍを超える大形の甕で、両面に線彫りと貼り付けで文様を施す。86は甕の底部で、外面腰部及び内底に灰白色の石灰質が付着する。87は鉢Ⅱ類に似るもので、外面に線彫りと貼り付けで文様を施す。Ⅱ類－口縁部をわずかに開きながら直線的に立ち上がるもので、口縁部は断面半円形を呈する。（88）。

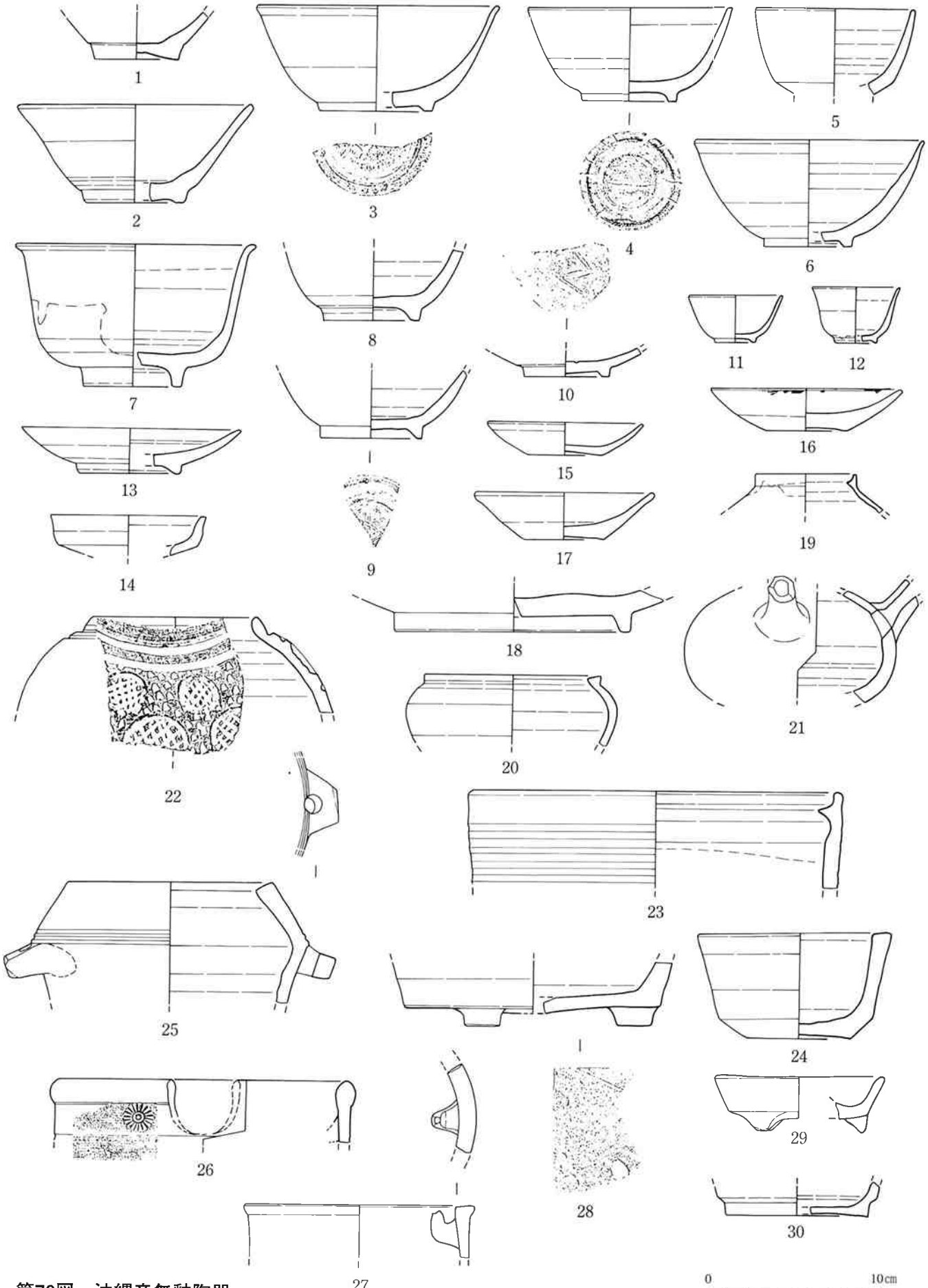
第22表　沖縄産無釉陶器観察一覧

図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	特徴	出土地点
第70図（図版71）	1	碗	底	—	—	5.0	Ⅰ：素地は淡橙色粒子で微砂粒混入。内面轆轤痕。高台刳りは円錐状で浅い。	木 L5-133
	2	碗	口～底	14.0	5.8	5.6	Ⅰ：素地は灰赤色粒子で堅緻。両面轆轤痕と回転擦痕。高台刳りは浅い。	下 撹乱
	3	碗	口～底	14.8	6.0	6.6	Ⅱ：素地は黒褐色粒子で砂粒混入。外面回転擦痕。外底に「二(?)」の判を記し黒色釉を施釉。	木
	4	碗	口～底	12.1	5.6	5.6	Ⅱ：素地は灰色粒子で器色は灰赤色。外面回転擦痕、内面轆轤痕。外底に「一」の判。	木 L7-131
	5	碗	口～胴	10.0	—	—	Ⅱ：素地は鈍赤褐色粒子。内面轆轤痕。両面に黒色釉を施釉。	下 撹乱
	6	碗	口～底	13.6	6.3	5.2	Ⅱ：素地は鈍赤橙色粒子で砂粒混入。外面回転擦痕。内面轆轤痕。外面石灰質付着。	木
	7	碗	口～底	14.3	8.4	5.5	Ⅲ：素地は暗赤褐色粒子。内面轆轤痕。外底に「一?」の判か。両面胴上部に黒褐色釉を施釉。	木
	8	碗	胴～底	—	—	5.7	Ⅱ：素地は灰赤色粒子で堅緻。外面回転擦痕、内面轆轤痕。	木
	9	碗	胴～底	—	—	6.0	Ⅱ：素地は灰色粒子で砂粒混入。外面回転擦痕、内面轆轤痕。外底に「＊？」の判。	木
	10	碗	底	—	—	5.1	Ⅳ：素地は鈍橙色粒子で微砂粒混入。内面轆轤痕。内底に「五」の判。蓋の可能性あり。	下 撹乱
	11	小杯	口～底	5.6	2.8	2.3	素地は褐灰色粒子で堅緻。器色は灰褐色。外面回転擦痕。	木 L7-131
	12	小杯	口～底	5.2	3.3	2.4	素地は灰褐色粒子で堅緻。外面回転擦痕。両面に黒褐色釉を施釉。	下 撹乱
	13	Ⅲ	口～底	12.9	2.7	5.8	Ⅰ：素地は暗赤褐色粒子で微砂粒混入。外面に黒色釉を施釉。蓋の可能性あり。	木
	14	Ⅲ	口～底	10.2	1.6	8.2	Ⅲ：素地は暗灰黄色粒子。両面回転擦痕とナデ。全形は不明。	木 L3-131
	15	Ⅲ	口～底	9.2	1.9	4.5	Ⅲ：素地は褐灰色粒子。外面回転擦痕。外底に「ニ？」の判か。全体的に薄手。	木
	16	Ⅲ	口～底	11.4	2.4	4.8	Ⅲ：素地は明赤褐色粒子で黒色粒混入。外面轆轤痕と回転擦痕。外底の成形は雑。口唇部に煤跡付着。	用 撹乱
	17	Ⅲ	口～底	10.7	2.8	4.5	Ⅲ：素地は赤灰色粒子で器色は灰赤色。外面轆轤痕と回転擦痕。外底の成形は雑。	廣 北
	18	Ⅲ	底	—	—	13.9	Ⅱ：素地は灰赤色粒子で器色は鈍赤褐色。両面回転擦痕。蓋の可能性あり。	下 撹乱
	19	急須	口	6.0	—	—	Ⅰ：素地は灰色粒子で微砂粒混入。内面回転擦痕とナデ。外面に黄釉流し掛け。	廣 南北溝
	20	急須	口～胴	10.4	—	—	Ⅰ：素地は黒褐色粒子で器色は灰赤色。外面回転擦痕とナデ、内面回転擦痕。	木
	21	急須	胴	—	—	—	Ⅰ：素地は鈍赤褐色粒子で微砂粒混入。外面回転擦痕とナデ、内面轆轤痕。	M1-143
	22	急須	口～胴	9.6	—	—	Ⅰ：素地は灰赤色粒子で堅緻。内面轆轤痕。外面に圏線、点刻文、斜格子文。現代遺物の可能性高い。	下 撹乱
	23	急須	口	22.0	—	—	Ⅱ：素地は灰色粒子で器色は鈍赤褐色。外面に条線？内面口縁部に灰色釉を施釉。	下 撹乱
	24	火取	口～底	11.4	6.3	6.0	素地は灰赤色粒子で堅緻。外面回転擦痕とナデ、内面回転擦痕と轆轤痕。	木 L10-136・M0-130
	25	火炉	口～胴	12.0	—	—	Ⅰ：素地は鈍赤褐色粒子。内面回転擦痕とナデ。外面に圏線。把手の孔は直径約1cm。	下 撹乱
	26	火炉	口	17.0	—	—	Ⅰ：素地は橙色粒子で器色は褐灰色。外面に菊花文。内面に器物受あり。両面にマンガン釉を施釉。	不明
	27	火炉	口	13.6	—	—	Ⅱ：素地は鈍赤褐色粒子。両面回転擦痕とナデ。口縁部は断面三角形状。	下 撹乱
	28	火炉	底	—	—	14.2	Ⅱ：素地は灰赤色粒子で堅緻。外面回転擦痕とナデ、内面轆轤痕。外底に「一？」の文様（判か？）。	木 L8-134
	29	不明	胴～底	10.0	3.3	8.2	素地は鈍橙色粒子。両面回転擦痕とナデ。全形は不明。	木 L5-132
	30	不明	底	—	—	8.8	素地は鈍橙色粒子。外面回転擦痕、内面轆轤痕。外底糸切り痕明瞭。全形は不明。	漏 M3-127
第71図（図版72）	31	鉢	口～底	21.6	7.7	16.2	Ⅰ：素地は橙色粒子。外面回転擦痕とナデ、内面轆轤痕。口縁部は断面T字形で肥厚帯下部に抉りを入れる。	木 M0-142
	32	鉢	口～底	23.0	10.1	16.7	Ⅰ：素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。器色は灰赤色。外面回転擦痕、内面轆轤痕。口縁部は断面方形で内側端部が張り出す。外底の成形は雑。	木 L10-144
	33	鉢	口～底	21.7	10.6	11.0	Ⅰ：素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。器色は灰赤色。外面回転擦痕、内面轆轤痕。口縁部は断面方形で内側端部が張り出す。	廣北西撹乱
	34	鉢	口～底	17.8	5.9	13.1	Ⅰ：素地は橙色粒子。外面回転擦痕、内面轆轤痕。底部脇の成形は雑。	木 M2-147
	35	鉢	胴～底	—	—	10.8	Ⅰ：素地は鈍赤褐色粒子で堅緻。外面回転擦痕とナデ、内面回転擦痕。外面に圏線。外底に「キ？」の文様（判か？）。	木
	36	鉢	口～底	48.8	5.9	37.8	Ⅰ：素地は灰赤色粒子で石灰粒混入。外面回転擦痕とケズリ、内面回転擦痕。	木
	37	鉢	口～胴	13.8	—	—	Ⅱ：素地は暗赤褐色粒子で堅緻。両面回転擦痕。内面に黒褐色の釉を施釉。	木
	38	鉢	口	21.0	—	—	Ⅱ：素地は鈍赤褐色粒子で器色は灰褐色。両面回転擦痕。口縁部は断面三角形で肥厚帯下部に抉りを入れる。外面に6本櫛の波状文。	用 L1-124
	39	鉢	口～胴	15.8	—	—	Ⅱ：素地は灰赤色粒子。両面回転擦痕。口縁部は断面三角形で肥厚帯下部に抉りを入れる。外面に5本櫛の波状文。両面にマンガン釉を施釉。	廣 北西撹乱
	40	鉢	口	21.4	—	—	Ⅱ：素地は灰赤色粒子。両面回転擦痕。外面に圏線、5本櫛の波状文。	下 撹乱
	41	鉢	口～胴	21.4	—	—	Ⅱ：素地は鈍橙色粒子。両面回転擦痕。外面に圏線、6本櫛の波状文。	下 撹乱
	42	鉢	口～胴	33.2	—	—	Ⅲ：素地は赤褐色粒子で堅緻。器色は暗赤褐色。内面回転擦痕。鍔端部に縄目文。外面に唐草文？両面にマガジン釉を施釉。	木
	43	鉢	口	—	—	—	Ⅲ：素地は鈍赤褐色粒子。外面回転擦痕。内面轆轤痕。鍔上面に圏線2条、端部に縄目文。	下 撹乱
	44	鉢	口～胴	17.7	—	—	Ⅲ：素地は鈍赤褐色粒子で器色は灰褐色。両面轆轤痕と回転擦痕。鍔端部に圏線。	木 L0-137
	45	鉢	口～胴	37.6	—	—	Ⅲ：素地は橙色粒子。両面轆轤痕と回転擦痕。	下 撹乱
	46	鉢	口	37.4	—	—	Ⅲ：素地は鈍赤褐色粒子で器色は褐灰色。両面回転擦痕。外面に圏線。	木 M1-145
	47	鉢	口～胴	44.0	—	—	Ⅲ：素地は橙色粒子。外面回転擦痕、内面轆轤痕。鍔上面に圏線、外面に圏線と波状文。	下 撹乱
	48	鉢	底	—	—	22.8	Ⅲ：素地は鈍赤褐色粒子で器色は赤褐色。外面回転擦痕とナデ、内面轆轤痕。外面に突帯？底部中央に孔を1個穿つ。底部成形は雑。	下 撹乱
	49	鉢	胴～底			20.8	Ⅲ：素地は橙色粒子。両面轆轤痕と回転擦痕。底部成形は丁寧。	下 L7-118

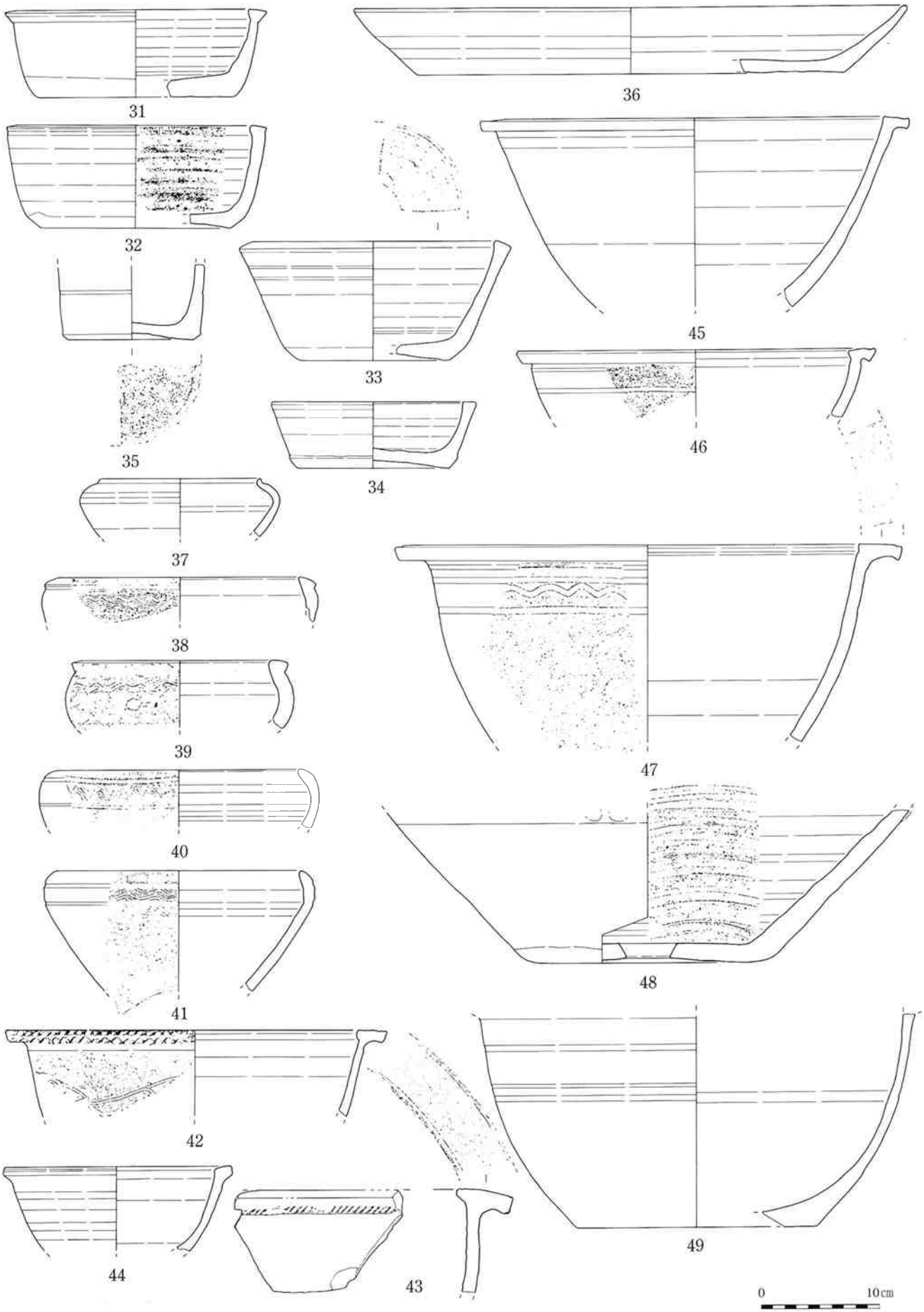
第23表　沖縄産無釉陶器観察一覧

図	番号	器種	部位	口径	器高	底径	特徴	出土地点
第72図（図版73）	50	擂鉢	口～底	28.4	12.8	10.4	Ⅰ：素地は純赤褐色で微砂粒混入。両面轆轤痕と回転擦痕。内面に16本櫛の擂目を右回転で施し、口縁部はナデ消す。外面一部に黒褐色釉を施釉。	下攪乱
	51	擂鉢	口	31.4	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子で器色は灰赤色。両面回転擦痕。内面に６本櫛の擂目を施し、口縁部はナデ消す。	下攪乱
	52	擂鉢	口	26.8	—	—	Ⅰ：素地は灰色粒子で微砂粒混入。器色は黒褐色。内面に16本櫛の擂目を右回転で施し、口縁部はナデ消す。	用攪乱
	53	擂鉢	口	—	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子で器色は純褐色。外面回転擦痕。内面に13本櫛の擂目を右回転で施し、口縁部はナデ消す。	木M0-142
	54	擂鉢	口	—	—	—	Ⅰ：素地は橙色粒子。両面轆轤痕。内面に10本櫛？の擂目を施し、口縁部はナデ消す。	下攪乱
	55	擂鉢	口	—	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子。両面回転擦痕。内面に15本櫛の櫛目を施し、口縁部はナデ消す。	廣北西攪乱
	56	擂鉢	口	—	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子で堅緻。両面回転擦痕。内面に擂目を施す。外面に黒褐色釉を施釉。	木
	57	擂鉢	口	22.2	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子。内面に擂目を施し、口縁部はナデ消す。	木L9-140
	58	擂鉢	底	—	—	14.8	Ⅰ：素地は橙色粒子。両面回転擦痕。畳付に刻目、外底に櫛目。胴部との接合面に櫛目を施す。	廣L10-125
	59	擂鉢	底	—	—	17.0	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子。両面回転擦痕。外面に圏線。内底に擂目を施す。	下攪乱
	60	擂鉢	口～胴	23.0	—	—	Ⅱ：素地は純赤褐色で堅緻。両面回転擦痕。内面に15本櫛の擂目を右回転で施す。鍔上面に圏線。	下攪乱
	61	擂鉢	口	25.8	—	—	Ⅱ：素地は赤褐色粒子。両面回転擦痕。内面に擂目を密に施し、口縁部はナデ消す。鍔上面に圏線。	下攪乱
	62	擂鉢	口	29.2	—	—	Ⅱ：素地は赤橙色粒子。両面回転擦痕。内面に擂目を密に施し、口縁部はナデ消す。鍔上面に圏線。	木M0-144
	63	擂鉢	口	—	—	—	Ⅱ：素地は赤褐色粒子。外面回転擦痕。内面に擂目を密に施し、口縁部はナデ消す。鍔上面に圏線。	下攪乱
	64	擂鉢	口	32.4	—	—	Ⅱ：素地は赤橙色粒子。内面に擂目を密に施し、口縁部はナデ消す。鍔上面に圏線。	木L9-143
	65	擂鉢	胴～底	—	—	11.2	Ⅱ：素地は明赤褐色粒子。外面回転擦痕とナデ。内面に擂目を密に施す。外面一部に墨？が付着（文様か？）。	下攪乱
	66	擂鉢	胴～底	—	—	7.5	Ⅱ：素地は橙色粒子。外面回転擦痕とナデ。内面に擂目を密に施す。焼成不良。	下攪乱
第73図（図版74）	67	壺	口～胴	12.0	—	—	肩部に紐状の横耳を貼付。外面に灰褐色釉を施釉。	木
	68	壺	胴	—	—	—	素地は赤褐色粒子。両面回転擦痕。外面に花文を押印。両面に黒褐色釉を施釉。	木
	69	壺	胴～底	—	—	12.7	素地は赤褐色粒子。両面轆轤痕と回転擦痕。外面に灰褐色釉を施釉。	下攪乱
	70	壺	胴	—	—	—	素地は灰赤色粒子。外面回転擦痕とタタキ痕。肩部に紐状の縦耳を３個貼付。	木L3、L4-153
	71	壺	口	10.0	—	—	素地は暗赤灰色粒子。口縁部外面に黒褐色釉、内面一部に黄釉流し掛け。	木
	72	壺	胴～底	—	—	8.0	素地は橙色粒子で器色は灰赤色。両面回転擦痕と轆轤痕。内面にマンガン釉を施釉。	下攪乱
	73	徳利	胴～底	—	—	6.6	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子。外面回転擦痕。外面に圏線。内面にマンガン釉？を施釉。	下攪乱
	74	徳利	口～底	7.5	35.0	12.6	Ⅱ：素地は純赤褐色粒子。外面回転擦痕とナデ、内面轆轤痕。外面に圏線。内面にマンガン釉を施釉。	下攪乱
	75	蓋	摑～底	12.0	3.7	10.0	Ⅰ：素地は暗赤褐色粒子で堅緻。両面に浅黄橙色の石灰質が付着。急須か壺に対応。	廣北西攪乱
	76	蓋	庇～底	14.0	5.5	8.2	Ⅱ：素地は橙色粒子。両面回転擦痕とナデ。壺に対応。	不明
	77	蓋	庇	25.0	—	—	Ⅲ：素地は純赤褐色粒子。外面回転擦痕とナデ、内面回転擦痕。外面に褐灰色釉を施釉。対応する器種は不明。	廣北西攪乱
	78	水滴	口～底	1.8	4.6	4.6	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子。内面指頭痕。外面に縄目文と突帯。両面にマンガン釉を施釉。	漏M2-118攪乱
	79	水滴	胴	—	—	—	Ⅱ：素地は純赤褐色粒子。内面轆轤痕、外面に「申」の字を１対施す。外面上半部に黄釉、下半部に赤灰色釉を施釉。	下攪乱
	80	瓶	口	8.0	—	—	素地は褐灰色粒子。外面回転擦痕、内面轆轤痕と回転擦痕。	木
	81	蔵骨器	口	33.0	—	—	Ⅰ：素地は橙色粒子。内面轆轤痕と回転擦痕。外面に圏線、蓮花文、内面に「光緒十九年癸…」の墨書。外面にマンガン釉を施釉。	廣北西攪乱
	82	蔵骨器	胴	—	—	—	Ⅱ：素地は純赤褐色粒子。庇上面を軒瓦状に、庇端部を縄目状に成形。両面にマンガン釉を施釉。	木M1-129
	83	蔵骨器	胴	—	—	—	Ⅱ：素地は純赤褐色粒子。内面轆轤痕。外面に蓮花文、縄目文、丸文、葉文。外面にマンガン釉を施釉。	試掘
	84	甕	口	63.8	—	—	Ⅰ：素地は赤褐色粒子で石灰粒を多量に混入。内面回転擦痕。外面に圏線、丸文。外面に黄釉を施釉。	木L10-144
	85	甕	口～胴	102.2	—	—	Ⅰ：素地は赤橙色粒子。外面回転擦痕、内面轆轤痕。鍔上面に圏線、外面に圏線、突帯、内面に圏線。	下攪乱
	86	甕	胴～底	—	—	37.0	Ⅰ：素地は純赤褐色で石灰粒混入。器面はアバタ状。外面回転擦痕、内面轆轤痕と回転擦痕。内底に石膏付着。	下攪乱
	87	甕	口	66.8	—	—	Ⅰ：素地は純赤褐色粒子で器色は灰赤色。両面回転擦痕とナデ。鍔端部に縄目状、外面に唐草文（牡丹か？）。	下L3-119・攪乱
	88	甕	口～胴	76.0	—	—	Ⅱ：素地は純橙色粒子で器色は明赤褐色。外面回転擦痕、内面轆轤痕。外面に圏線、丸文（丸文は圏線の上に貼付）。	下攪乱

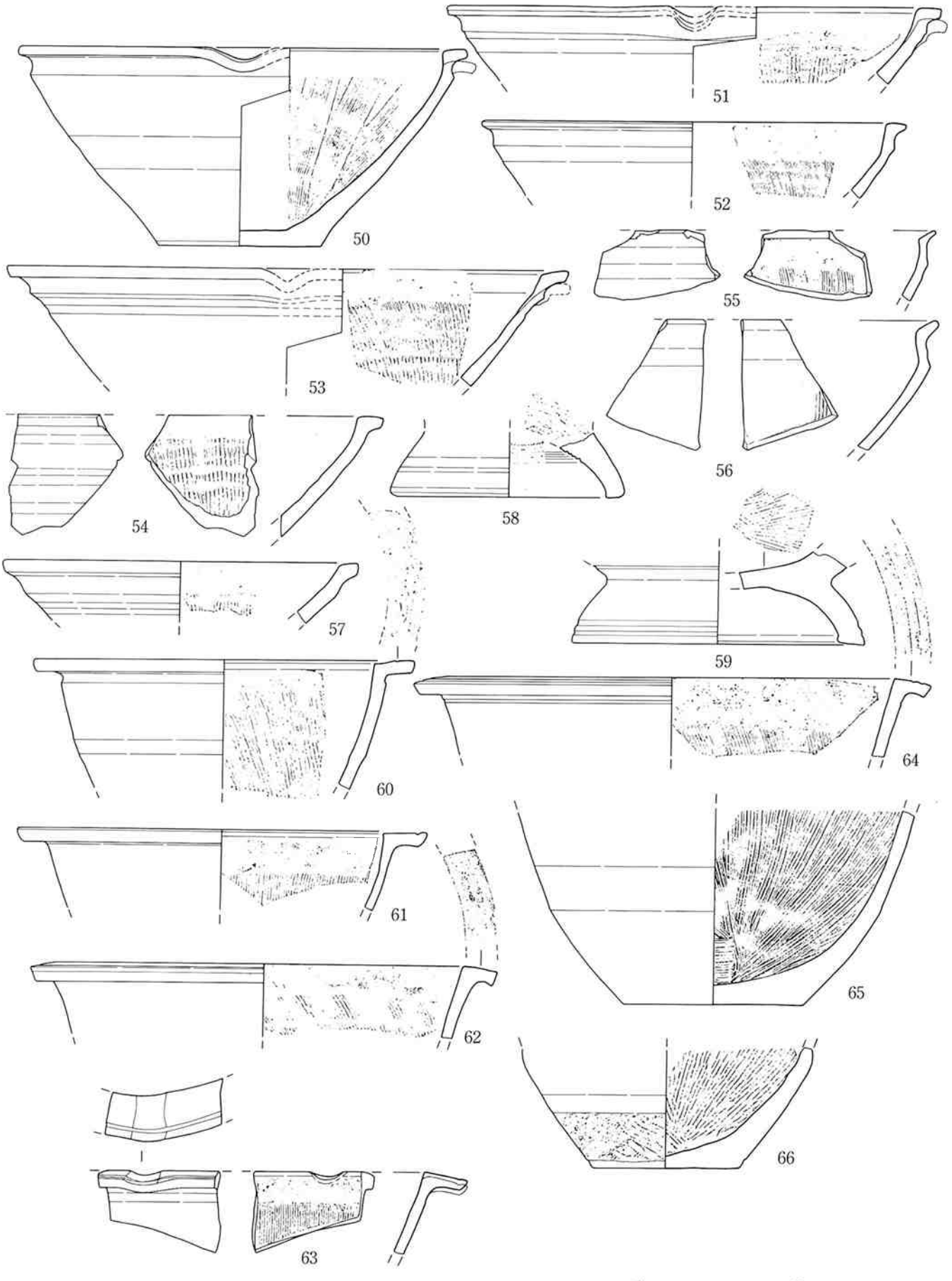
※口径・器高・底径の単位はcm。下之御庭＝下、用物座＝用、漏刻門＝漏、廣福門＝廣、木曳門＝木と略記。



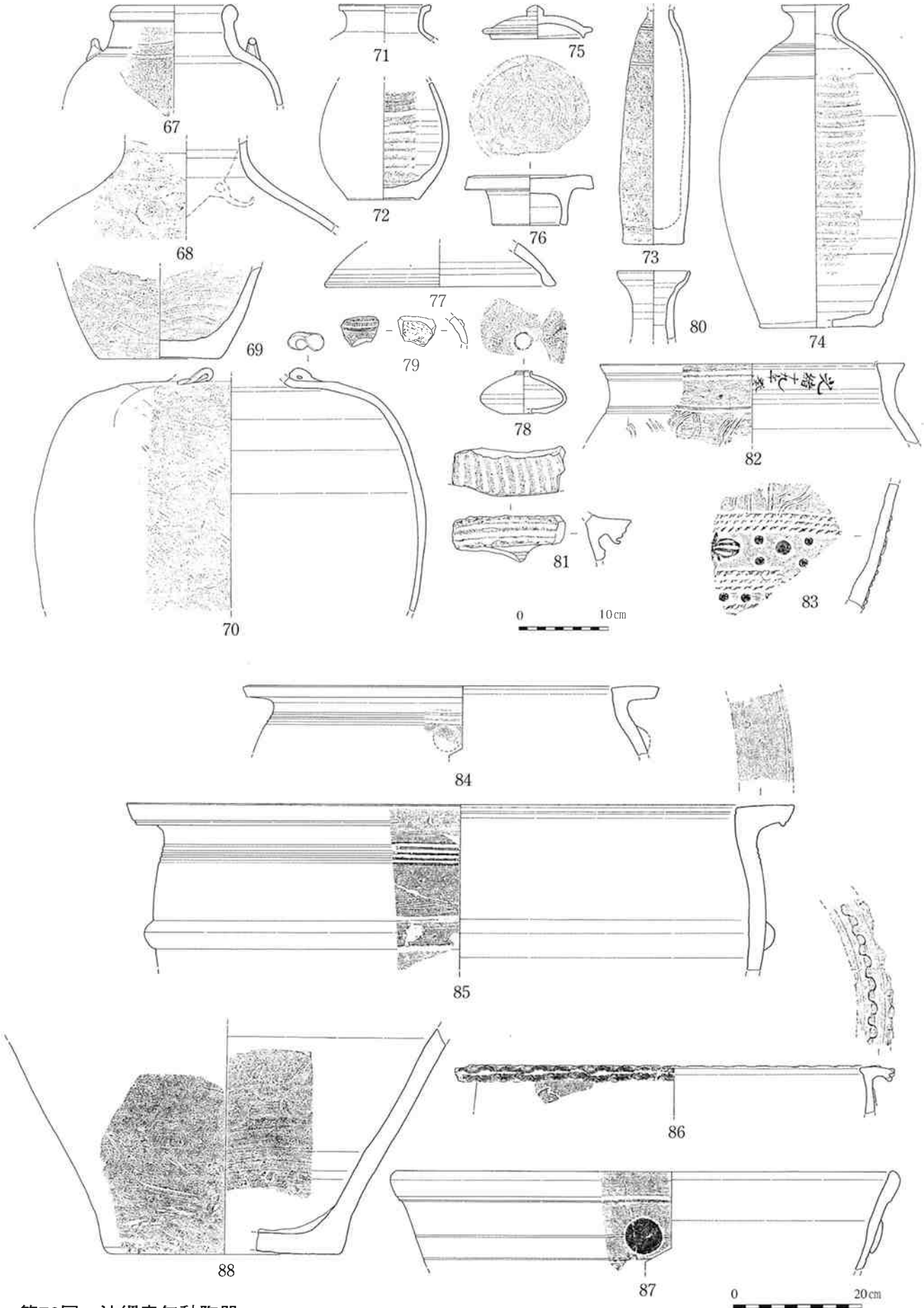
第70図　沖縄産無釉陶器



第71図　沖縄産無釉陶器



第72図　沖縄産無釉陶器



第73図　沖縄産無釉陶器

第25節　土器

１．沖縄貝塚時代前期の土器

沖縄貝塚時代前期に相当すると考えられる土器片が出土している。第74図１・３は奄美系土器である面縄東洞式の系統と考えられる資料であるが、３は仲泊式の可能性もある。同図２も同じく奄美系の嘉徳Ⅱ式の系統と考えられる。これらの資料の出土は首里城跡に先史時代からの遺跡が存在した可能性を示すものであるが、戦後の開発によって攪乱された層から出土している為、詳細は不明である。

２．沖縄貝塚時代後期の土器

沖縄貝塚時代後期に相当すると考えられる土器の口縁部と底部が出土している。第74図４の壺の口縁部は焼成が良く硬質である為、時代が更に新しくなる可能性もある。貝塚時代後期と考えられる資料は量的にも少なく細片である為、詳細は不明である。

３．グスク土器

一般的にグスク土器と呼称されている土器が出土している。第74図６は口縁部が「く」の字に外反するもので、口径が大きいことから鍋もしくは鉢と考えられる資料である。同図７は胴部が膨らみ口縁部は直口する壺で、同図８は胴部が膨らみ口縁部は緩やかに外反する壺である。同図９は器種不明の底部片である。同図10は口縁部が外傾する皿である。同図11・12・13は口縁部が外反する鉢と考えられる資料である。同図14の小型の土器は胎土や素地などの特徴からグスク土器の範疇に含まれるものとして本項で扱った。

４．宮古式土器

第74図15は宮古式土器の壺で、混入物に多量の砂が含まれているのが特徴である。

５．硬質土器（炮烙）

ここで扱う硬質土器とは、胎土は精選され、砂粒・黒色粒・赤色粒・雲母を混入し、轆轤引きや指撫によって成形され、焼成は悪く触れると粉末が指に付着するもので、器体表面は乳白色を基本とし、灰色の素地をサンドウィッチ状に挟み込むようになっている。今回の調査では浅鉢（第74図16～18）の破片とそれに付属すると考えられる把手が確認できたが、そのほとんどは小破片であったので詳細は不明である。壺屋古窯跡Ⅰ（註１）で報告されている「フライパン状製品」や鹿児島県の浜町遺跡（註２）で報告されている炮烙（ほうろく）と呼ばれているものに器形は類似している。『炮烙とは素焼き土鍋の一種で物を炮るのに用いる庖厨具である。また河内国埴田・筑前国柳河よりでるものは埴田炮烙といわれ茶器として賞用される。茶の湯では炭手前に必要な道具で土鍋ともいい、炭手前は風炉の灰を入れ、灰杓手の付属品を添えて持ち出すようである（註３）』。平成13年2月10・11日に開催された九州近世陶磁学会にて今回出土した硬質土器の所見を求めたところ、学会に集まった各都道府県の埋蔵文化財関係者から炮烙であるという意見を頂いた。以上の事から出土した硬質土器は炮烙とし、本来は土器の範疇から外れるものであるが、今回は本項で扱った。

註１：島　弘『壺屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年

註２：『浜町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　2000年

註３：加藤唐九郎　編『原色陶器大辞典』株式会社淡交社　1993年

６．蓋状製品

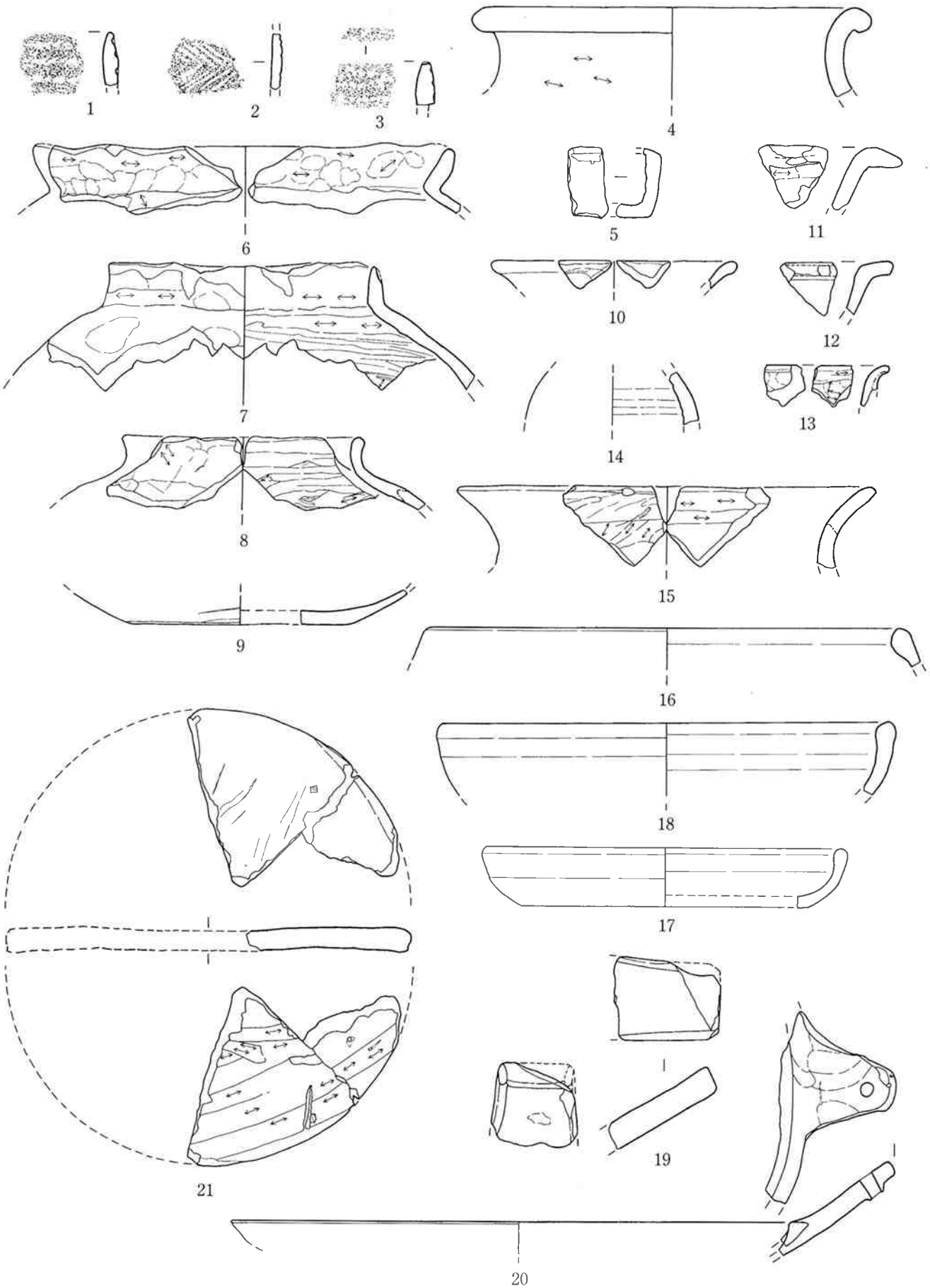
本製品は摘みを付けない被せ蓋と考えられる資料で、焼成は悪いため、触れると粉末が指に付着するのが特徴である。首里城跡京の内の出土例では、蓋の平面観が円形となるものと方形となるものが確認されている。今回の調査で出土した資料は平面観が円形のもの（第74図21）のみが確認できた。本資料も本来は土器の範疇から外れるものであるが、今回は本項で扱った。

第24表　土器　観察表

単位：cm

図図版	番号	分類	器種	部位	口径	底径	特　徴	器　色	焼成	器面調整	混入物	胎土	出土地	備　考
第74図・第75図版	1	前期		口	—	—	口唇:丸、口縁:やや外反 文様:押引き文	外面:暗茶褐色 内面:茶褐色	良好	両面:撫で	砂粒・貝殻片 石英	粗	木L9-165	面縄東洞系
	2			口	—	—	文様:綾杉文	両面:灰褐色	良好	両面:撫で	砂粒・貝殻片 石英	粗	木	嘉徳Ⅱ系
	3		鉢	口	—	—	口唇:平、口縁:やや外反 文様:刺突文	外面:黄褐色 内面:赤褐色	良好	両面:撫で	砂粒・貝殻片 石英	粗	木	面縄東洞系? 仲泊系?
	4	後期	壺	口	20.1	—	口唇:肥厚、口縁:外反 器面:条痕(外面)	両面:黄褐色	硬質	両面:磨き	砂粒・貝殻片・雲母 赤色粒・黒色粒	細	木L6-131	時代が新しくなる 可能性あり
	5		不明	底	—	不明	底部:稜が明瞭	両面:暗黄褐色	悪い	両面:撫で	砂粒・雲母 赤色粒・黒色粒	細	下	—
	6	グスク	鍋? 鉢?	口	21.1	—	口唇:舌状、口縁:外反	両面:褐色	良好	外面:指圧・撫で 内面:指圧・撫で	砂粒・雲母 赤色粒・黒色粒	粗	下	内面:煤が付着
	7		壺	口	13.5	—	口唇:舌状、口縁:直口 成形:輪積、器面:あばた	外面:暗褐色 内面:暗黄褐色	良好	外面:指圧・撫で 内面:刷毛目	砂粒・貝殻片・雲母 赤色粒・黒色粒	粗	木L7-158	外面:煤が付着
	8		壺	口	12.1	—	口唇:丸、口縁:やや外反 成形:輪積	両面:黄褐色	硬質	外面:撫で・削り 内面:撫で・削り	砂粒・雲母 赤色粒・黒色粒	細	用	—
	9		不明	底	—	11.2	底部:稜が不明瞭	両面:黄褐色	硬質	外面:磨き 内面:指撫・指圧	砂粒(多)・雲母 赤色粒・黒色粒	粗	廣北	—
	10		皿	口	12.4	—	口唇:丸、口縁:外反	外面:赤褐色 内面:黄褐色	良好	外面:撫で 内面:削り	雲母 赤色粒・黒色粒	粗	木L6-157	—
	11		不明	口	—	—	口唇:舌状、口縁:強く外反	外面:赤褐色 内面:灰褐色	良好	両面:撫で	砂粒・雲母 赤色粒・黒色粒	粗	下	—
	12			口	—	—	口唇:平、口縁:外反	両面:褐色	良好	両面:撫で	砂粒・雲母 赤色粒・黒色粒	粗	木M1-134	外面:煤が付着
	13			口	—	—	口唇:丸、口縁:外反	両面:褐色	良好	外面:撫で 内面:磨き	貝殻片 黒色粒	粗	木L7-158	外面:煤が付着
	14			胴	—	—	成形:輪積	外面:暗赤褐色 内面:暗灰色	良好	両面:撫で	貝殻片・砂粒 赤色粒・黒色粒	粗	木L9-139	—
	15	宮古式	壺	口	20.6	—	口唇:舌状、口縁:外反 成形:輪積	両面:橙褐色	硬質	両面:磨き	砂粒(多)・貝殻片 赤色粒・黒色粒	粗	木M0-131	宮古式
	16	硬質	焙烙	口	23.1	—	口縁:丸 成形:轆轤	両面:乳白色 素地:灰色	悪い	—	赤色粒・黒色粒	粗	木L2・L3-136	—
	17			口	22.2	—	口縁:丸 成形:轆轤	両面:乳白色 素地:灰色	悪い	—	赤色粒・黒色粒	粗	下	—
	18			口/底	17.8	—	口縁:丸 成形:轆轤	両面:乳白色 素地:灰色	悪い	—	赤色粒・黒色粒	粗	下	—
	19			把手	—	—	把手:方形状	両面:乳白色 素地:灰色	悪い	—	赤色粒・黒色粒	粗	下	—
	20			把手	28.6	—	把手:丸	両面:褐色	悪い	—	赤色粒・黒色粒	細	下	陶質土器に近い
	21	蓋状製品	蓋?	—	—	—	器体:円盤状の蓋?	両面:黄褐色	悪い	両面:撫で	白色粒・赤色粒 黒色粒	細	首不明	煤が付着

※下之御庭＝下、用物座＝用、廣福門＝廣、木曳門＝木、首里城＝首と略記。



第74図　土器

第26節　陶質土器

陶質土器とは「アカモノ」と呼ばれるもので、胎土は精選され、混入物に白色粒・赤色粒・黒色粒・雲母粒を含み、轆轤引きによって成形され、焼成が悪く触れると粉末が付着する事が特徴である。器色は褐色を主体に橙褐色や黄褐色になるが、火炉・鍋・急須・皿（灯明）等の火を受ける器種には煤が付着している。今回の調査は火炉・鍋・急須・蓋（鍋・急須）・鉢・皿などが確認できた。詳細は下記の通りである。

火炉　口縁の内側には器物を乗せる突起を貼付し、胴部には有孔の把手を貼付するもので、形態から下記の5種類に分類を行った。

Ⅰ：胴部は球状に膨らみ、口縁部が内傾する器形である。器体の外面に白化粧土で圏線を描くもの、出土数は僅かだが墨書で文字が書かれたものも今回の調査では確認できた（第75図１～７）。

Ⅱ：底部から胴部までは膨らみをもって至り、胴部から口縁へは直線的に至るもの（同図８）。

Ⅲ：胴部は球状に膨らみ、口縁部はほぼ直口するもの（同図９）。

Ⅳ：底部から胴部へ外傾して至り、口縁部は内側に「く」の字に折れるもの（同図10・11）。

Ⅴ：底部から口縁部へ逆「ハ」の字に外傾するもの（同図12・13）。

Ⅵ：底部から口縁部へほぼ直線的に至るもの（同図14・15）。

手焙り　第75図16・17は手焙りの落し蓋である。焼成は良好で底面は穴を七つほど設けると考えられる。胎土などの特徴から陶質土器の範疇から外れるものであり、本来ならば別項で扱う資料であるが、今回は陶質土器の項で一括して扱った。

鍋　蓋：皿に似るが内面よりも外面を丁寧に仕上げ、高台状の摘みは外傾して摘み易く作り、端部はズレ防止の為に僅かに折ったり肥厚させたりしている事などが特徴である（第76図18・22）。

身：鍋はその形態から下記の２種類に分類できた。

Ⅰ・口縁部は外反して蓋の受け皿を作り、胴部は球状に膨らみ、紐状の把手を貼付するもの。

※Ⅰ類は口縁部の折れ具合から下記の３種類に細分して第25表の観察表に記号で表記した。

A　口縁部が外反して受け皿をつくる（同図19・20）。

B　口縁部が台形状に折れて受け皿をつくる（同図21）。

C　口縁部を明確に折って受け皿をつくる（同図23・24）。

Ⅱ・胴部に膨らみを持たず、羽釜状の鍔を巡らせるもの（同図25）。

急須　蓋：急須の蓋はその形態から下記の３種類に分類を行った。

Ⅰ・頂部に饅頭状の摘みを付け、底面に高台を作るもの（第76図26）。

Ⅱ・摘みを付けず、底面に高台をつくるもの（同図27）。

Ⅲ・端部は水平に折れ、高台をつくらないもの（同図28）。

身：身はその形態から下記の3種類に分類を行った。

Ⅰ・口縁部はほぼ直口して長い頸部をつくり、胴部は「く」の字に折れるもの（同図29・30）。

Ⅱ・口縁部は微弱に立ち上げる事で短い頸部をつくり、胴部は球状に膨らみを持つもの（同図33）。

Ⅲ・口縁部が外反する事で蓋の受け皿をつくるもの（同図34）。

また、同図31の外耳（紐が残存している資料も確認）や同図32の注ぎ口も出土している。

鉢　鉢はその形態から下記の３種類に分類を行った。

Ⅰ：口縁部が内傾する器形で、丸彫りの圏線と櫛描の波状文を描く（第77図41・42）。

Ⅱ：底部から口縁部に向かって直線的に至り、口縁部を水平に外反させるもの（同図43）。

Ⅲ：底部から口縁部へやや外傾しながら直線的に立ち上がるもの（同図44・45）。

皿　口縁部付近に煤が付着している事から灯明皿として使われていたと考えられるものである。陶質土器の範疇に含まれる資料は第77図47のみで、確認した資料のほとんどが陶質土器の特徴と異なるものである。本来ならば別項で扱うべきだが、陶質により近いという事から今回は陶質土器の項で一括して扱った。これらの資料は火災などによって２次的に火を受けた可能性も考えられる。器形は底部から口縁部に向かって「逆ハ」の字になるもので、胴部が僅かに膨らむものをⅠ類（同図46～54）、僅かに外側に開くものをⅡ類（同図55）、器形が不明の底部資料（同図56～59）として分類を行った。

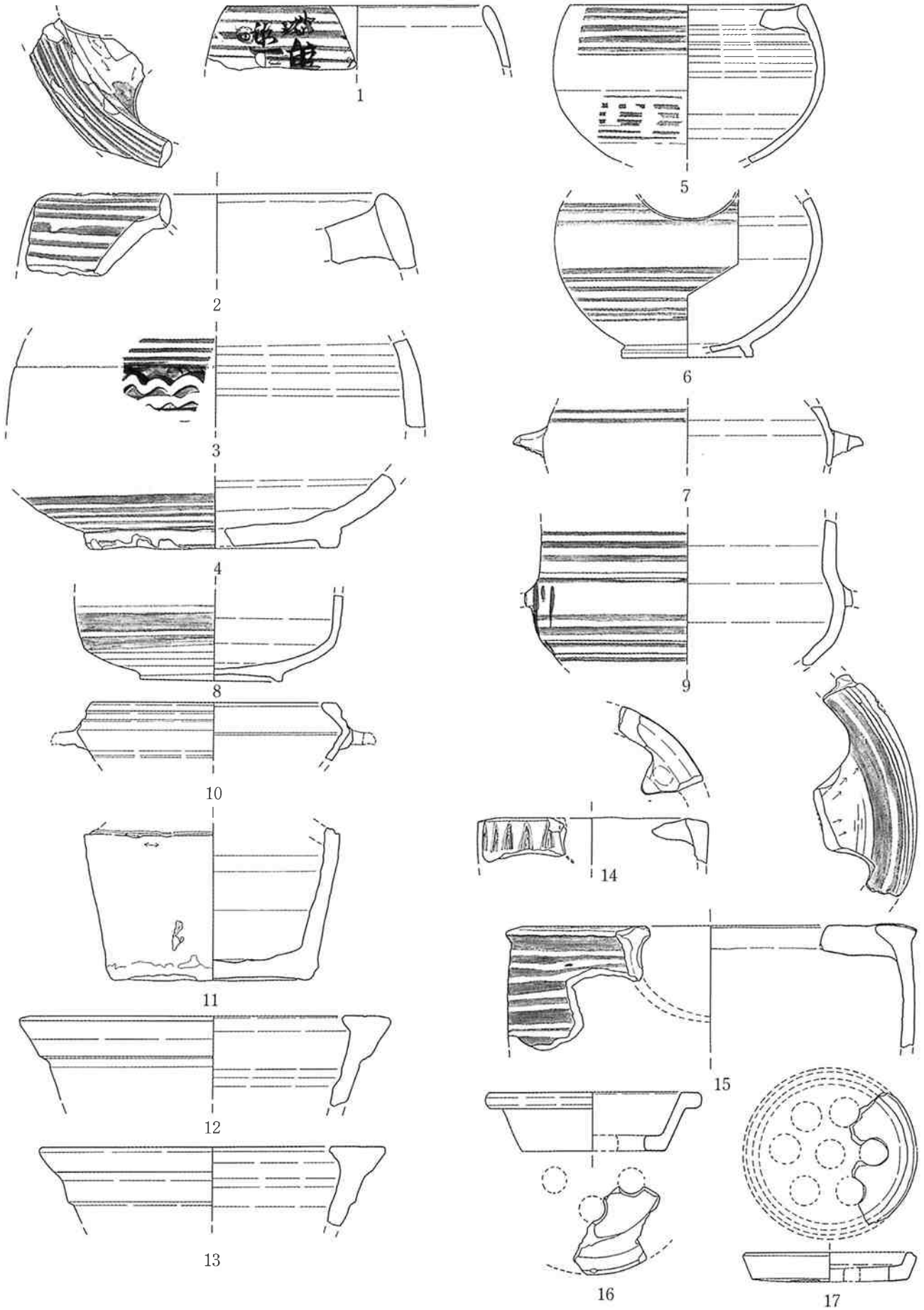
不明　第76図35～40は器種不明の底部である。同図35は火炉・鍋、同図36は杯、同図37・38は碗、同図39は花鉢、同図40は角鉢の様であるが、全形が伺える資料を今回の調査では確認できなかった。

第25表　陶質土器　観察一覧表

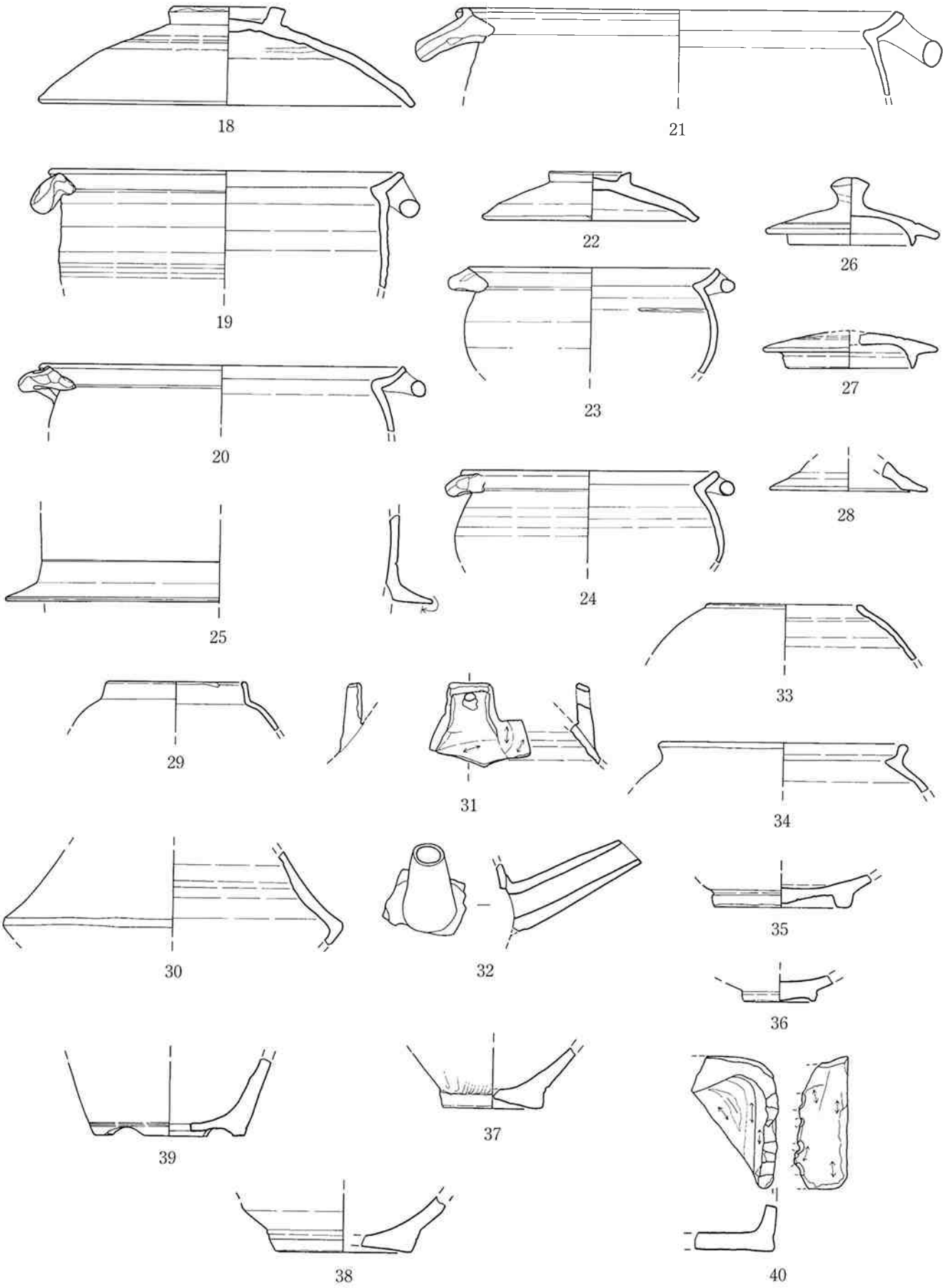
単位：cm

図／図版	番号	器種		部位	口径	底径	高さ	特徴	器色	混入物	出土地
第75図・第76図版	1	火炉Ⅰ		口	15.4	—	—	口唇：丸い。胴部：白色化粧土の圏線あり。黒書あり。	両面：暗褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	2			口	20	—	—	口唇：丸い。胴部：白色化粧土の圏線あり。	両面：暗褐色	白色粒、黒色粒、雲母	廣M0117
	3			胴	—	—	—	胴部：白土化粧土の圏線（直線＋波状）あり。	外面：暗褐色、内面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M1-136
	4			底	—	14.9	—	胴部：白土化粧土の圏線あり。底部：高台を作る。	外面：暗褐色、内面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	不明
	5			口	14.2	—	—	口唇：丸い。胴部：白土化粧土の圏線あり。	両面：暗褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	6			底	—	8	—	胴部：火窓を設ける。白土化粧土の圏線あり。底部：高台を作る。	両面：暗褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	7			胴	—	—	—	胴部：白土化粧土の圏線あり。把手：穴を上面から穿つ。	両面：暗褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	8	火炉Ⅱ		底	—	8.7	—	胴部：白土化粧土の圏線あり。底部：高台を作る。	両面：暗褐色、素地：灰色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	9	火炉Ⅲ		胴	—	—	—	胴部：白土化粧土の圏線あり。	外面：暗褐色、内面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	10	火炉Ⅳ		口	14.6	—	—	口唇：舌状。	外面：黄褐色、内面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木L10-143
	11			底	—	—	11.6	底部：底面中央が僅かに浮いている。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木L10-143
	12	火炉Ⅴ		口	21.3	—	—	口唇：平ら。口縁：内側が肥厚する。	両面：橙褐色、素地：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M-139
	13			口	20.6	—	—	口唇：平ら。口縁：内側が肥厚する。	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M0-145
	14	火炉Ⅵ		口	13.9	—	—	口唇：平ら。口縁：内側が肥厚する。二等辺三角状の文様あり。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	15			口	24.6	—	—	口唇：ほぼ平ら。口縁：内外が肥厚する。胴部：白色化粧土の圏線あり。	両面：暗褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	16	手焙り		蓋	13	8	3.6	端部：水平に折る。	上面：灰色、下面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	カク
	17			蓋	10	9.4	1.9	端部：破損しており不明。穴：七つ程つくる。	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	カク
第76図・第77図版	18	鏃	蓋	撮／端	5.5(撮径)	18.1(端径)	4.9	撮み：僅かに外傾する。端部：僅かに外側に折れる。	両面：褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	19		身Ⅰ	口	17	—	—	受け加：A。口唇：丸い。胴部：膨らみが弱い(口径よりも胴径が小さい)	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	20			口	22	—	—	受け皿：A。口唇：舌状。胴部：膨らむ(口径よりも胴径が広い)	両面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	21			口	17.8	—	—	受け皿：B。口唇：平ら。胴部：膨らむ(口径よりも胴径が大きい)	両面：茶褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	22		蓋	撮／端	4(撮径)	10.3(端径)	2.4	撮み：僅かに外傾する。端部：僅かに外側に折れる。上面に漆痕が付着。	両面：褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	23		身Ⅰ	口	12.5	—	—	受け皿：C。口唇：丸い。胴部：膨らむ(口径よりも胴径が大きい)	両面：褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	24			口	12.5	—	—	受け皿：C。口唇：丸い。胴部：膨らむ(口径よりも胴径が大きい)	両面：暗褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	25		身Ⅱ	胴	—	—	—	胴部：羽条状の鍔を貼付。外面の胴上半に朱が塗られている。	内面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下L8-120
	26	急須	蓋Ⅰ	撮／端	1.9(撮径)	8.5(端径)	3.3	撮み。饅頭形。	上面：黄褐色、下面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M1-147
	27		蓋Ⅱ	端	無し(撮径)	8(端径)	1.9	撮み。無し。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	28		蓋Ⅲ	端	—	7.7(端径)	—	撮み。有無不明。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	廣北西カク
	29		身Ⅰ	口	6.7	—	—	口唇：丸い。頚部：長頚。	外面：黄褐色、内面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M9-147
	30		身Ⅰ	胴	—	—	—	胴部：「く」の字に折れる。	外面：黄褐色、内面：灰褐色	黒色粒、雲母	下カク
	31		—	外耳	—	—	—	把手：紐を通す為に上方から穴を穿つ。撫でて貼付。	外面：黒褐色、内面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒	下カク
	32		—	注口	—	—	—	注口：撫でて貼付。下面に煤が付着。	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M0-132
	33		身Ⅱ	口	7.7	—	—	口唇：平ら。頚部：短頚。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M1-147
	34		身Ⅲ	口	12	—	—	口唇：丸い。口縁：外反して蓋受けを作る。	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	カク
	35	不明		底	—	6.5	—	内面を丁寧に仕上げる。	外面：黒黄褐色、内面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木L7-118
	36			底	—	3.5	—	内外面ともに丁寧に仕上げる。	両面：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	川L9-124
	37			底	—	4.9	—	底部に高台を作る。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M0143
	38			底	—	6.4	—	底部に高台を作る。	外面：灰褐色、内面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木L10-148
	39			底	—	7.3	—	底面に穴を設ける。内外面に朱を塗装。	両面：赤褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M1-134
	40			底	—	—	—	上面観が方形になる。	両面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	廣北西カク
第77図・第78図版	41	鉢Ⅰ		口	24.4	—	—	口唇：外側に肥厚。文様：二条の丸彫り圏線の間に櫛描波状文。	両面：黄褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	下カク
	42			口	20.8	—	—	口唇：丸い。文様：一条の丸彫り圏線の下に櫛描波状文。	両面：橙褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	川L7-124
	43	鉢Ⅱ		口	17.5	—	—	口縁：水平に外反する。	両面：橙褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	北西カク
	44	鉢Ⅲ		口	23.2	—	—	胴部：器体の内側に輪積み痕が明瞭に残る。	両面：橙褐色、素地：灰褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	廣北カク
	45			口／底	24.1	18	11	胴部：器体の内側に輪積み痕が明瞭に残る。	両面：橙褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木M1-126
	46	Ⅲ		口	11	—	—	口唇：丸い。外面にアルミナが付着。	両面：黒褐色、素地：黄褐色	白色粒、黒色粒	木
	47			口	15.4	—	—	口唇：尖る。内外面に煤が付着。	両面：黄褐色、素地：乳白色	白色粒、黒色粒、雲母	木
	48			口	20	—	—	口唇：丸い。	両面：乳白色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	49			口	18.4	—	—	口唇：尖る。外面に煤が付着。	両面：乳白色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	50			口／底	14.2	10	3.3	口唇：丸い。内外面に煤が付着。	両面：黄褐色	白色粒、黒色粒、雲母	木
	51			口	15.2	—	—	口唇：丸い。口唇に煤が付着。	外面：橙褐色、内面：暗褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母	木L6-129
	52			口	20.8	—	—	口唇：尖る。	両面：乳白色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	53			口	15.6	—	—	口唇：丸い。口縁：胴部よりも僅かに細い。	外面：黒褐色、内面：褐色	白色粒、灰色粒、黒色粒	木
	54			口／底	13.2	8	1.8	口唇：尖る。	両面：黒褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	55			口	18.1	12.4	2.4	口唇：尖る。	両面：茶褐色	白色粒、黒色粒	木
	56			底	—	11.4	—	底部：稜が不明瞭。	両面：乳白色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	57			底	—	10.8	—	底部：稜が明瞭、内外面に煤が付着。	外面：茶褐色、内面：乳白色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木L10-143
	58			底	—	8.6	—	底部：稜が明確、底面に糸切り痕。	外面：黒褐色、内面：黄褐色	白色粒、赤色粒、黒色粒	木
	59			底	—	8.2	—	底部：稜が不明瞭。	外面：黄褐色、内面：茶褐色	白色粒、灰色粒、黒色粒	木

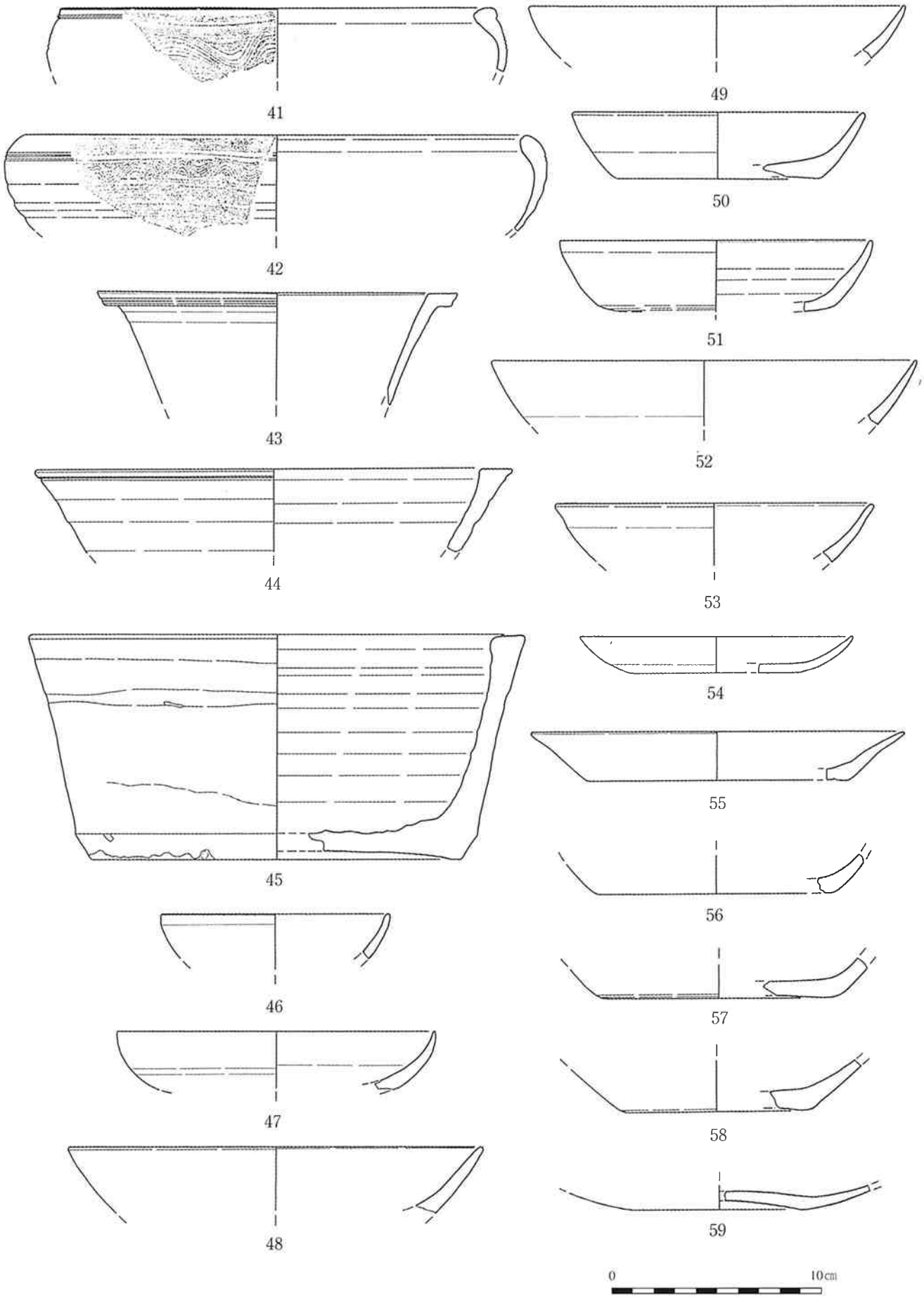
※下之御庭＝下、用持座＝用、廣福門＝廣、木曳門＝木、カク＝撹乱と略記



第75図　陶質土器


18
21
19
22
26
23
27
20
28
24
25
33
29
31
34
30
32
35
36
39
37
38
40
0
10cm

第76図　陶質土器



第77図　陶質土器

第27節　瓦質土器

今回の調査では浅鉢・植木鉢・擂鉢・内湾鉢・角鉢・奈良火鉢（風炉・火鉢）・馬蹄形火炉などが確認できた。詳細は下記の通りである。

浅　　鉢　ベタ底の底部が外傾しながら口縁部へ至る器形（第78図１）で、形態的特長から今回は浅鉢としているが用途は不明である。

植 木 鉢　底部から胴部へ膨らみをもって至り、口縁部は外傾する器形（第78図２～13）で、口縁部には一～二条の波状凸帯を貼付し、その下に草花浮文、牡丹唐草文、菊花文などが印刻されている。同図７のように底面の中央に水抜きの穴を設けている事から用途は植木鉢と考えられる。

擂 り 鉢　底部から口縁部へ直線的に外傾して至る器形で、その形態から擂り鉢の口縁部と考えられる資料であるが、第79図14・16の資料からは擂り目は確認できず、擂り目が確認できた口縁部は同図15のみであった。同図17・18は底面に擂り目を明確に残す底部である。

内 湾 鉢　底部から胴部へ膨らみをもって至り、口縁部は内傾する器形（第79図19）で、今回の調査では同じ器形で小型の資料（同図20・21）も確認できた。形態的特徴から今回は内湾鉢として扱ったが用途は不明である。

角　　鉢　底部から口縁部へ直線的に移行し、上面からの平面観が方形に近い形となる。同図22は外面に文様を施した高台をつくり、同図23は底部中央が僅かに上げ底になる資料である。

奈良火鉢　第79図24～29は中世後期に大和国内において生産された奈良火鉢と呼称されるものに類似する資料である。奈良火鉢は陸奥国から薩摩国まで全国を範囲に流通し、それを各地で模倣した在地産の「模倣奈良火鉢」が生産されて在地の圏内で流通していたようである。今回の資料が奈良火鉢なのか模倣品なのか判別が難しいが、今回は奈良火鉢の範疇に属するものとして扱った。同図24・25は奈良火鉢の中でも「風炉」と呼称されるもので湯沸かしとして用いられたものである。同図４はその口縁部で、同図25は胴部になると考えられるが、全形が伺える資料に乏しく詳細は不明である。参考に概説「中世の土器・陶磁器（註１）」の中から風炉の全形図を引用して第79図に参考図として転載した。同図26・27は胴部が球状に膨らみ口縁は内側に折れて水平になる器形で、口縁に二条の圏線で巡らし、その間に菊花文の印刻を巡らす。同図28は平面観が楕円に近くなる資料で、口縁部には同図26・27と同じように二条の圏線で巡らし、その間に菊花文の印刻を巡らす。同図29は底面に多量の砂が付着している底部片で奈良火鉢の範疇に収まるかは不明だが、今回は器形や胎土等の特徴から県外からの移入品として捉え、本項で一括して扱った。

馬蹄形火炉　喜友名貝塚・喜友名グスク（註２）では陶質土器の火炉で報告されているものの中から、馬蹄形火炉の全形図を引用して第80図に参考図として転載した。前例を踏まえれば陶質土器の項で扱われるべき資料であるが、本資料が陶質の範疇か瓦質なのか判断が難しい為、今回は本稿項で扱った。器体は上面観が円形になる本体部分（第80図33）と本体部分より突出した上面観が方形となる部分（同図34）の２つの部分で成り立つもので、同図30は本体部から突出部へ階段状に下がる口縁部で、同図32は籾殻を含んだ本体部分の口縁部である。

用途不明　第80図35・36・37は何らかの器の底部で、同図36は底面に刻み目を有する。同図38・39・40は瓦の一部のような板状の製品で、同図38・39は梅花が印刻され、同図40は牡丹が印刻されている。同図41は胎土などの特徴が瓦質土器の範疇に近いものである。同図42は擂り目のような刻みを焼成後に刻んでいる製品である。上記のいずれも製品も用途が判然とせず、今回は用途不明として一括し扱った。

註１：1998年　真陽社

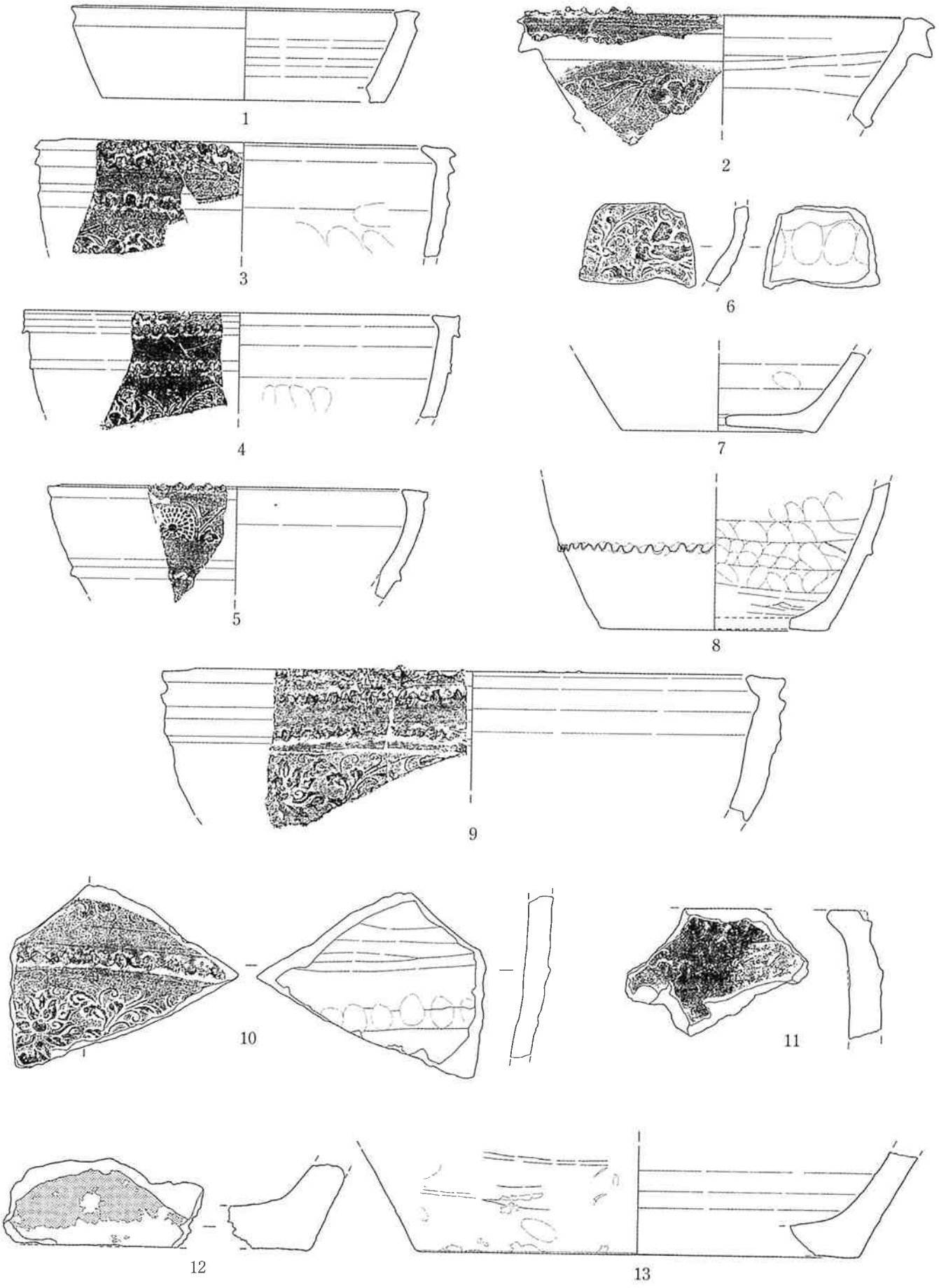
註２：1990年（平成11年）沖縄県教育委員会

第26表　瓦質土器　観察一覧表

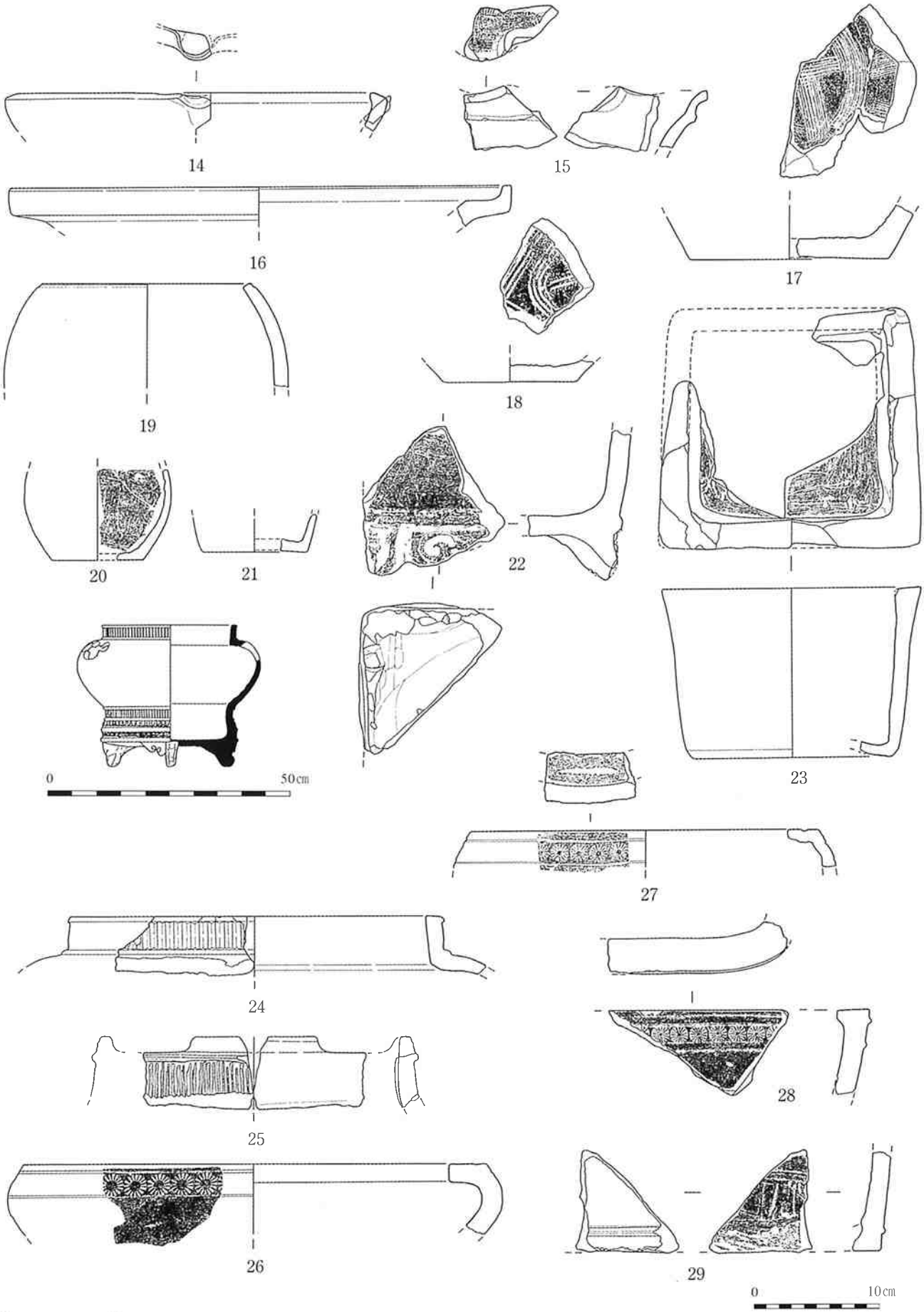
単位：cm

図版	番号	器種	部位	口径	底径	器高	特徴	器色	調整・成形	混入物	出土地
第78図・第79図版	1	浅鉢	口／底	32	26.2	84	口唇:平ら、わずかに内側に肥厚。 底部:稜が明瞭。	両面:灰褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 雲母	廣
	2	植木鉢	口	36	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文、牡丹唐草文。	両面:暗黄褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕、櫛目痕	**白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母**	木M0145
	3		口	37.4	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文、草花浮文。	両面:灰褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 赤色粒	下カク
	4		口	37.6	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文、草花浮文。	両面:黄褐色 素地:灰褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	廣北西カク
	5		口	34.8	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文、菊花文。	両面:灰色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	**白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母**	廣北西カク
	6		胴	—	—	—	文様:牡丹唐草文。	両面:黒褐色 素地:灰色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 赤色粒	用K6-122
	7		底	—	17.6	—	底部:稜が明瞭。 底面:穴を穿つ。	両面:黒褐色 両面:灰色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 赤色粒	用K9-123
	8		底	—	20.8	—	底部:稜が明瞭。 文様:波状凸帯文。	外面:茶褐色 内面:灰褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕（多い）	白色粒、黒色粒 赤色粒	下L8-117
	9		口	56.8	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文。	両面:黄褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	不明
	10		胴	—	—	—	文様:波状凸帯文、牡丹唐草文。	両面:灰褐色 素地:黒褐色	成形:轆轤痕 内面:指圧痕、櫛目痕	**白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母**	廣カク
	11		口	—	—	—	口唇:平ら、内側に肥厚。 文様:波状凸帯文。	両面:茶褐色 素地:灰褐色	成形:轆轤痕	**白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母**	下L8-120
	12		底	—	5.3	—	底部:ベタ底で稜が明瞭。 外面に漆喰?が付着。	両面:灰褐色 素地:黒褐色	成形:轆轤痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	廣カク
	13		底	—	40.3	—	底部:ベタ底で稜が明瞭。	両面:灰褐色 素地:黒褐色	成形:轆轤痕 外面:櫛目痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	廣北カク
第79図・第80図版	14	擂鉢	口	31.4	—	—	口唇:舌状。	外面:黄褐色 内面:暗褐色	成形:轆轤痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	ロウ小学階段
	15		口	—	—	—	口唇:舌状。	両面:黒褐色 素地:灰色	成形:轆轤痕 外面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒	用K9-125
	16		口	41.4	い	—	口唇:平ら。 口縁:ほぼ垂直に立ち上がる。	外面:灰黄褐色 内面:黒褐色	成形:轆轤痕	**白色粒、黒色粒 赤色粒**	不明
	17		底	—	—	—	底部:稜が明瞭。 擂り目:七ー八条。	**両面:黄褐色**	成形:轆轤痕	白色粒、黒色粒 赤色粒	廣北西カク
	18		底	—	16.4	—	底部:稜が明瞭。 擂り目:四条。	両面:灰色 素地:黒褐色	成形:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒	木L10-134、
	19	鉢	口	17	11	—	口唇:平ら。	両面:灰黄褐色 素地:灰色	**成形:轆轤痕 内面:削り**	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木L9-134
	20	小鉢	底	—	—	—	底部:稜が明瞭。	両面:灰色	外面:撫で 内面:櫛目痕	白色粒、黒色粒 赤色粒	不明
	21		底	—	7.4	—	底部:稜が明瞭、稜の一部に削り。	両面:灰褐色 素地:灰色	外面:削り、撫で 内面:削り	白色粒、黒色粒 赤色粒	用
	22	角鉢	底	—	8.6	—	底部:装飾の足をつくる。	両面:黒褐色 素地:灰褐色	両面:削り、撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒	下廣北西カク
	23		口／底	21.5	—	14	底部:中心が上げ底になる。	両面:黄褐色 素地:灰褐色	外面:櫛目 内面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	下カク
	24	風炉	口	30.4	16.3	—	口唇:平ら。 文様:八状の凸帯を帯び状に囲繞。	両面:黒褐色 素地:黄褐色	成形:轆轤痕	白色粒、黒色粒 雲母	木L10-133
	25		口	25.2	—	—	火窓を設ける。 文様:八状の凸帯を帯び状に囲繞。	両面:灰色	成形:轆轤痕 内面:撫で	白色粒、黒色粒	廣北西カク
	26	火鉢	口	38	—	—	文様:二条の圏線。 菊花文を印刻。	両面:灰色	成形:轆轤痕	白砂	小学階段下3層
	27		口	28.6	—	—	文様:二条の圏線。 菊花文を印刻。	両面:灰褐色 素地:黒褐色	成形:轆轤痕 内面:撫で	白砂	木L7-131
	28		口	—	—	—	文様:二条の凸帯。 菊花文を印刻。	両面:黄褐色	内面:粗い削り	白色粒、黒色粒 赤色粒	木L5-132
	29		底	—	—	—	底部:凸帯を貼付。 底面に砂が多量に付着。	両面:黄褐色 素地:灰褐色	内面:粗い削り	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木
第80図・第81図版	30	馬蹄形火炉	口	—	—	—	籾殻が混入。 突起上面に煤付着。	両面:橙褐色 素地:灰褐色	両面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木M1-137
	31		口	—	—	—	籾殻が混入。 口唇に煤付着。	両面:黄褐色 素地:灰褐色	両面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	廣北西カク
	32		口	—	—	—	籾殻が混入。	両面:橙褐色 素地:灰褐色	成形:轆轤痕 内面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木
	33		底	—	—	—	胴部:内面に輪積みの痕が明確。	両面:橙褐色 素地:灰褐色	成形:輪積み痕 外面:櫛目痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木M1-147
	34		口／底	—	—	—	口縁:水平に外反する。	両面:橙褐色 素地:灰褐色	外面:篦削り 内面:撫で	**白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母**	木L8-133
	35	不明	底	—	—	—	底部:底に糸切りのような痕を残す。	外面:黒褐色 内面:灰色	外面:磨き 内面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	木M1-143
	36		底	—	—	—	表面に朱を塗装。 底面:刻み目を作る。	両面:茶褐色	外面:磨き	白色粒、黒色粒	試
	37		底	—	—	—	底部:内面に糸切り痕。	両面:黄褐色	外面:磨き	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	下カク
	38		不明	—	—	—	文様:花文を印刻する。	両面:黒褐色 素地:灰褐色	両面:磨き、撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒	木
	39		不明	—	—	—	文様:花文を印刻する。	両面:黒褐色 素地:灰褐色	両面:磨き、撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒	ロウM3-126
	40		不明	—	—	—	文様:花文を印刻する。	両面:灰褐色 素地:黒褐色	両面:磨き、撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	廣北西
	41		不明	—	—	—	文様:胴部一条の圏線。	両面:灰色 素地:黒褐色	成形:轆轤痕	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	用L3-126
	42		不明	—	—	—	焼成後に刻み目の施す。	両面:灰褐色 素地:黄褐色	両面:撫で	白色粒、黒色粒 赤色粒、雲母	下

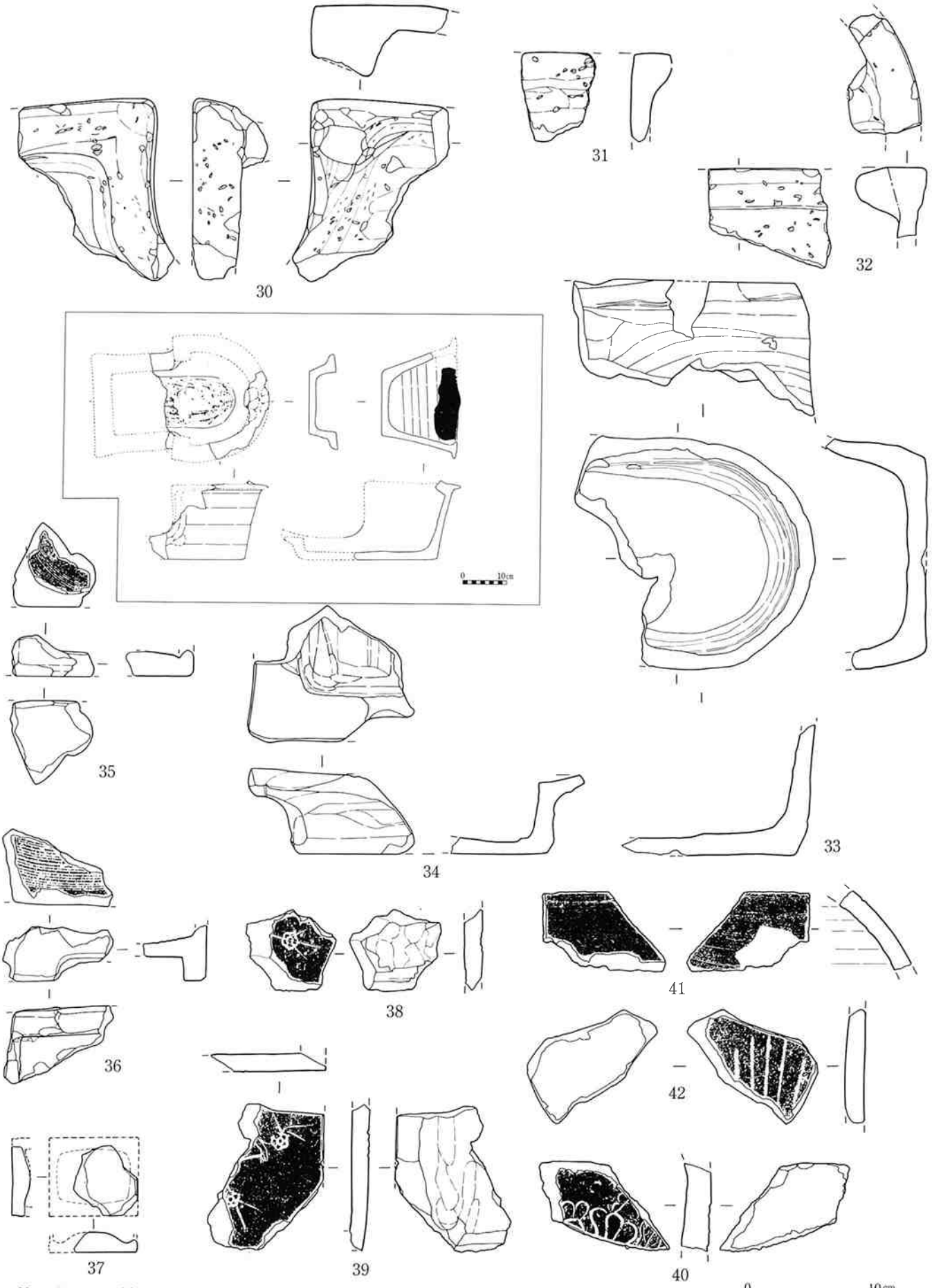
※1　—＝計測不能を表す。
※2　下之御庭＝下、用物座＝用、廣福門＝廣、木曳門＝木、湯刻門＝ロウ、試掘＝試と略記。



第78図　瓦質土器



第79図　瓦質土器



第80図　瓦質土器

第28節　硯・石製品

硯は第82図１～８、石製品は同図９～19及び第96図46である。

硯はすべて石硯で、破片を含めて112点出土、下之御庭跡が74点と最も多い。石質は赤色頁岩が72点と最も多い。形態は長方硯で縦横の比により、３：１になるもの（１・２）、２：１（３～５）になるもの、１：１に近いもの（６・７）にわけられる。墨池や硯唇といった薄い部分の破損が目立つ。３は覆手（硯背の窪み）を形成し、８は硯背全体を窪ませる。６は墨堂が若干摩滅する。５は表裏面に名前を記したもので、同様な例は他にもみられる。

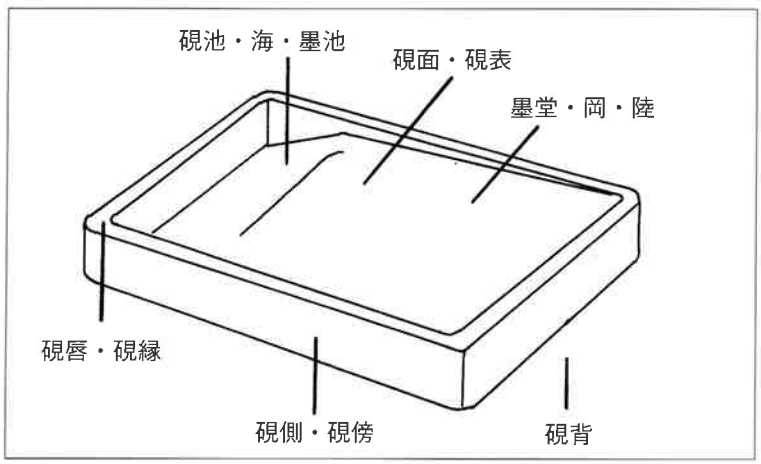
９・10は砥石である。９は磨刀石と称される類のもので、上端をソケット状に形成する。10は薄手の砥石である。

13～15及び第96図46は石製容器である。13～15は台湾産の翡翠の容器で、ボウル状の丸みを帯びた器形をなす。第96図46は皿状の容器で、底面に小さな脚状突起がある。

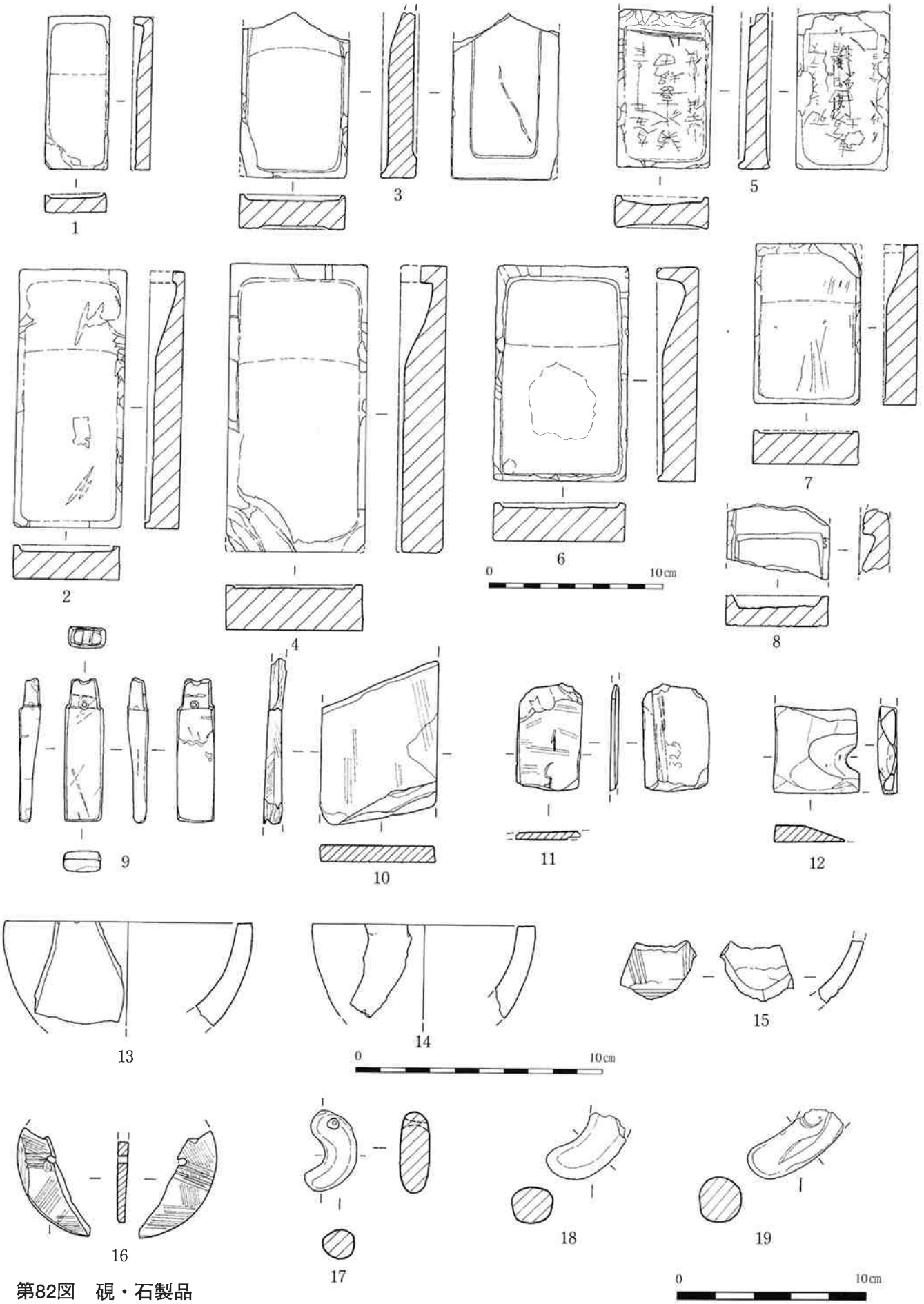
12・16は有孔石製品で、12の器種は不明であるが、砥石と石質が似ていることから砥石の破片とも考えられる。16は垂飾品であろうか。11は不明のスレート状製品で西表島の慶来慶田城遺跡などに類例がみられる。17～19は曲玉である。17・18は玉製、19はガラス製で沈線による文様を有する。

第27表　硯・石製品観察表

図/図版番号		種類	出土地区		特徴
			地区	グリッド	
第82図・第82図版	1	硯	廣福門		長軸8.8cm、短軸3.6cm、厚さ1.1cm。輝緑凝灰岩。
	2		下之御庭		長軸15.0cm、短軸6.2cm、厚さ2.0cm。硯唇、硯縁は破損。
	3		漏刻門	M3-126	短軸6.3cm、厚さ2.1cm。覆手を形成。墨池が破損。
	4		下之御庭		長軸16.7cm、短軸8.0cm、厚さ2.7cm。硯唇、硯縁の部分破損。粘板岩。
	5		下之御庭		短軸5.4cm、厚さ1.9cm。墨池、硯縁が破損。硯背全体を浅く窪ませる。表裏に釘書き多(「大正五年一月」、「菊水喜場田」など）。輝緑凝灰岩。
	6		不明		長軸12.5cm、短軸7.7cm、厚さ2.3cm。墨堂が若干摩滅。凝灰岩。
	7		下之御庭		長軸9.3cm、短軸6.2cm、厚さ1.5cm。硯唇は破損。粘板岩。
	8		下之御庭		短軸6.0cm、厚さ2.3cm。墨池の一部が残る。硯唇側も窪む。輝緑凝灰岩。
	9	砥石	用物座	K6-123	長軸5.7cm、短軸1.5cm、厚さ0.8cm、重さ2.5g。上位はソケット状で、孔と抉り。
	10		下之御庭		短軸4.2cm、厚さ0.8cm、重さ43.1g。薄手の砥石の破損品。
	11	不明	下之御庭	K8-121	厚さ0.4cm、重さ9.6g。スレート状の製品。千枚岩。
	12		下之御庭		重さ17.3g。有孔製品。破損した砥石？
	13	容器	木曳門	L2-132	小型のボウル状容器。口径は10.0cm。台湾産の翡翠。
	14		表採		小型のボウル状容器。口径は9.0cm。台湾産の翡翠。
	15		用物座	K10-124	小型のボウル状容器。腰部に縦と横の浅い溝。台湾産の翡翠。
	16	有孔	下之御庭	L9-120	重さ1.3g。半円形になると思われる。孔が１つと浅い溝。化石を利用。
	17	曲玉	木曳門		重さ4.2g。完形資料。上端に一孔。玉製。
	18		表採		重さ6.4g。下端部の資料。玉製。
	19		用物座	K6-125	重さ8.2g。下端部の資料。ガラス製。



第81図　硯の各部名称



第82図　硯・石製品

第29節　円盤状製品

円盤状製品とは、日常生活において身のまわりにあるものを円形に打割調整した二次製品である。

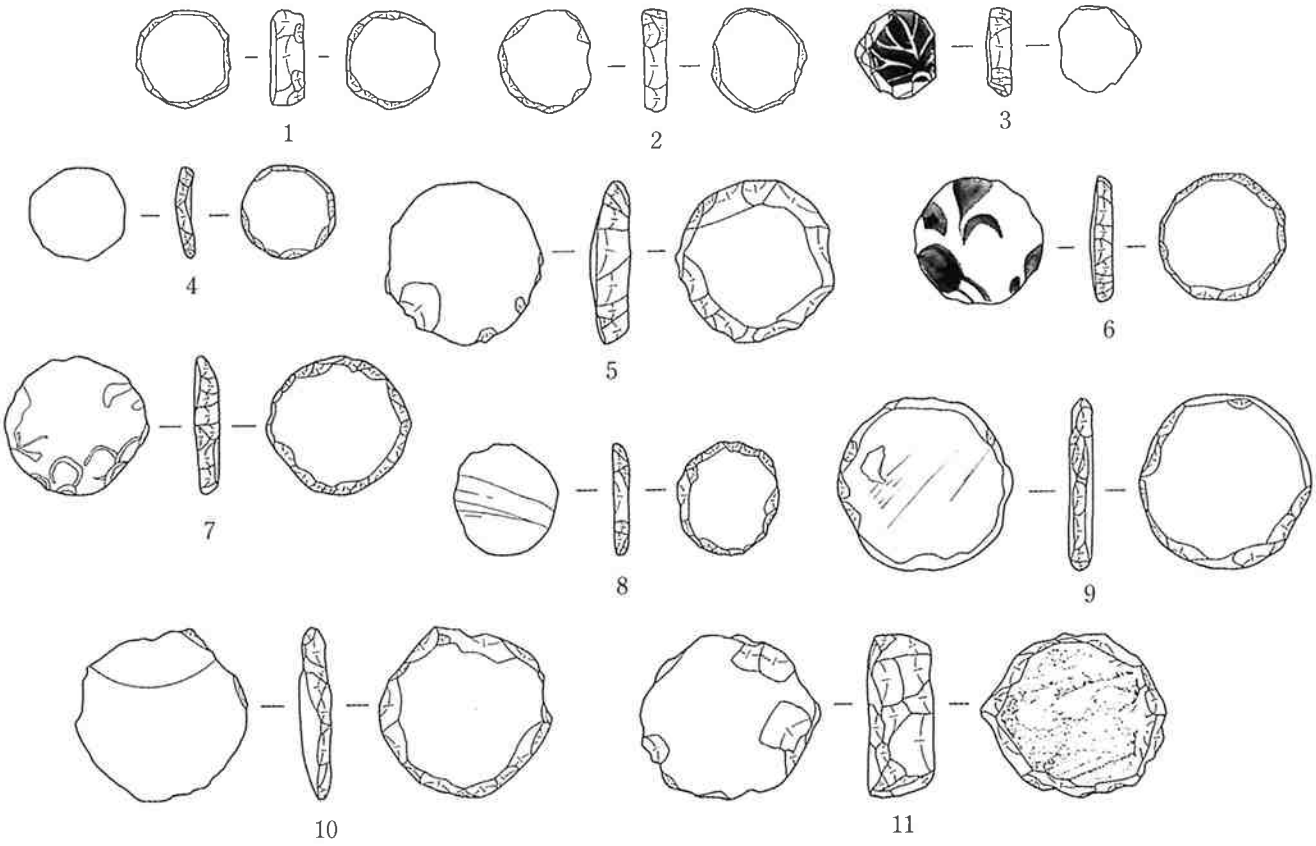
製品はほぼ全域から総数にして318点出土した。下之御庭と廣福門からはまとまって製品が得られた。しかし、そのほとんどは撹乱層からであり、層位的なことは不明である。

素材は褐釉陶器、沖縄産無釉陶器など比較的大きな器種になるものが多い。しかし、6㎝を越すような大型の製品は少なく、中型（2～4㎝）の製品の割合が多い傾向がある（表28）。特に下之御庭、用物座、廣福門では、褐釉陶器を利用した製品が多く、それらは遺跡の特色となる。（同表）

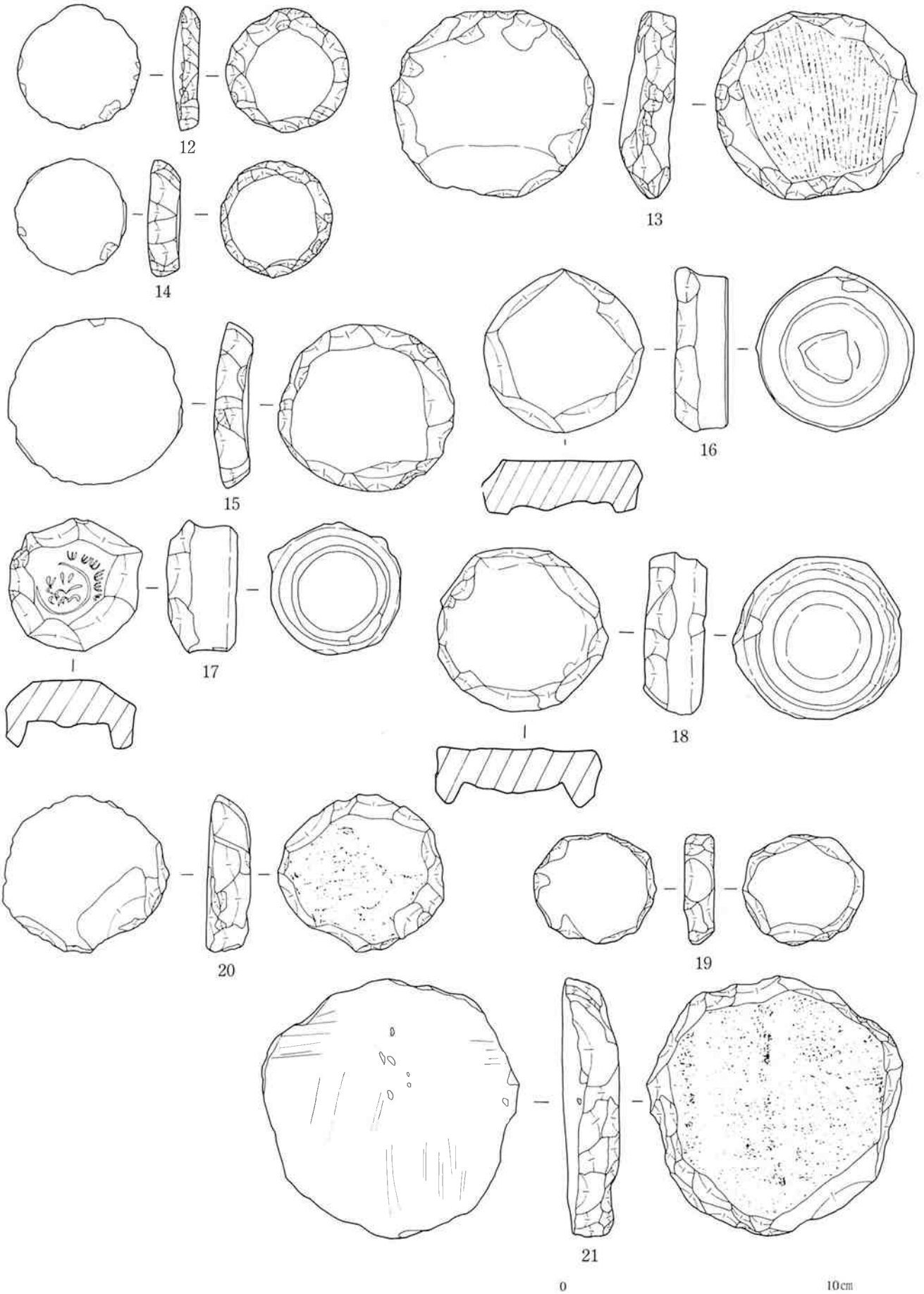
ここでは、特徴的なものを図示した。

表28完形品299点の各大きさの個体数

大きさ	1㎝台	2㎝台	3㎝台	4㎝台	5㎝台	6㎝台	7㎝台	8㎝台	9㎝台
個体数	6	69	121	53	34	10	5	0	1



第83図　円盤状製品



第84図　円盤状製品

第30節　坩堝

今回の調査では用物座３点、木曳門18点、出土している。紙面の都合上全体復元が可能な資料２点、そして特徴的な資料７点を図示する。

第１図は口径5.8㎝、底径1.4㎝、高さ6.0㎝、重さ23ｇ、器厚0.5㎝、木曳門地区出土。器形は口縁部が直口する。黄灰白色で色の変化は無し。

第２図は口径4.9㎝、木曳門地区出土。器形は口縁部がすぼまる。外面は薄い灰色、内面は茶褐色。

第３図は底径1.2㎝、木曳門地区出土。口縁部が破損していて底部のみ。内面に横位の成形痕が明瞭に残る。色調は内面が薄い灰色、外面が黄灰白色を呈する。

第４図は底径1.4㎝、木曳門地区出土。口縁部が破損していて底部のみ。底部から胴部へは急な立ち上がりをみせる。内外面ともに青銅粒が多く溶着しており、内面はアバタ状となる。内面は赤褐色、灰白色に外面は赤褐色、灰白色、黄白色に変色している。

第５図は底径3.2㎝、用物座地区出土。胴下部と底部の一部のみ。胴下部まで釉薬がかかる。底面には糸切痕が確認される。釉薬はやや暗い灰白色で露胎部は灰白色。

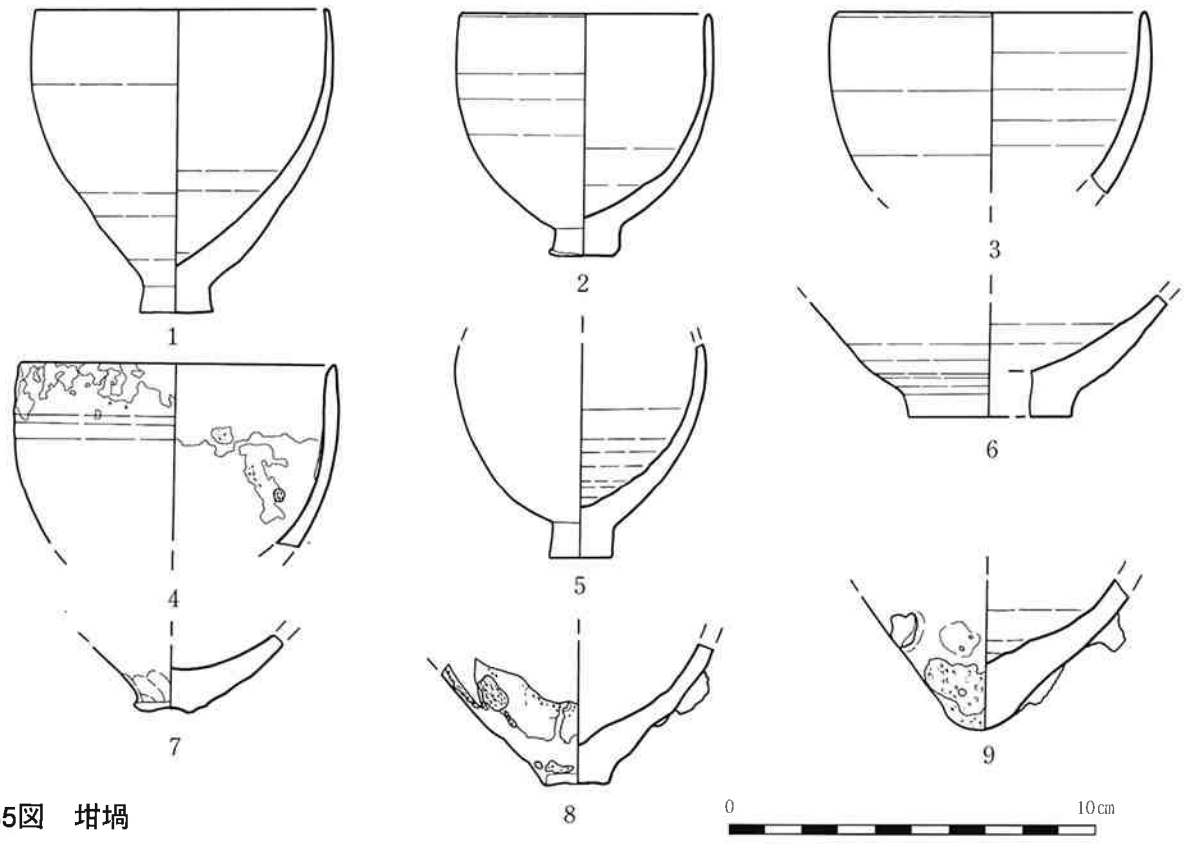
第６図は底径1.4㎝、木曳門地区出土。口縁部が破損していて底部のみ。内外面ともに青銅粒が多く溶着している。内面は全体的に、外面は部分的に赤褐色、灰白色に変色している。

第７図は木曳門地区出土。口縁部が破損していて底部のみ。底部は成形が不十分で歪な形状を呈する。色調は内面が黄灰白色、外面は黄白色に変色している。

第８図は口径6.1㎝、木曳門地区出土。器形は口縁部がすぼまる。底部が破損していて口縁部のみ。胴部に回転篦成形痕が見られる。黄灰白色で色の変化は見られない。

第９図は口径6.2㎝、木曳門地区出土。底部は破損しており口縁部並びに胴部のみ。器形は口縁部が若干すぼまり、口唇部は舌状となる。内外面の口縁部から胴上部にかけて自然釉がかかる。

全体の様相として、器面が変色しているものや、青銅粒が溶着している物が見られる。これは溶解炉として実際に使用されていた痕跡だと考えられる。一方で、全くそれらの痕跡を残さないものも見られた。形態的には坩堝の範疇に収まるものの、これらの資料が実際、何に使用されていたのかは今後の資料増加を待たなければならない。



第85図　坩堝

第31節　武具

資料数、種類共に多く出土している。紙面に都合上、完形品並びに特徴的な資料のみを図示する。尚、頁末には各地区より出土した武具の集計表を掲載する。

小札

小札は総数57点が得られた。鉄製で多くは錆化が進行し破損した状態である。完形は４点を図示した。小札が３点連続した状態のもの１点。小札を分類すると、

Ⅰ類　札頭が２つの半円からなるもの。

Ⅱ類　札頭が斜め状になるもの。Ⅱ類はさらに紐孔２列と３列のものに細分できる。

第87図16、本小札。完形。札頭は斜め状となる。錆化が進行し紐孔は２列。法量14ｇ。廣福門地区出土。

同図19は札頭が２つの半円からなる、いわゆる２山碁石頭伊予札。完全な状態。褐色に変色。紐孔２列14孔。法量８ｇ。用物座地区出土。

同図15、本小札、札頭は斜め状。錆化、上部が欠損。紐孔３列。法量15ｇ。下之御庭地区出土。

同図17、本小札、紐孔２列。錆に覆われ孔は塞がっている。下部が欠損。法量10ｇ。用物座地区出土。

同図18は小札が重なっているもの。札頭の形式は確認できず。紐孔は２列で、３つの小札が接着した状態。小札は半分ずつ重ねられている。下部欠損。用物座地区出土。

八双金物

銅製の八双金物は総数37点が出土した。状態良好のもの６点を図示する。形状が片側のみ魚尾状になったもの３点、両端が魚尾状になったもの２点、不明が１点。

第86図１、八双金物。鍍金がよく残る。鋲２個付属、鎧の端部分への付属品。太い線刻で牡丹と魚々子が彫刻されている。法量４ｇ下之御庭地区出土。

同図３、八双金物。若干曲がった状態で鍍金されている。青錆化、鋲が付属する孔の周辺は盛り上がり。菊花をかたどる。端付属品。法量６ｇ。木曳門地区出土。

同図４、八双金物。完形。唐草と魚々子が彫刻されている。太い線刻、鍍金がよく残っている。端付属、孔は２孔見られる。法量６ｇ。木曳門地区出土。

同図６、八双金物。端部が湾曲する。鍍金が残るが、孔付近にわずかに青錆が付着する。線刻で唐草と思われる文様が彫刻され、魚々子が打たれる。中央に付属するものである。孔は２孔見られる。法量７ｇ。木曳門地区出土。

同図７、八双金物。青錆に覆われ、銅鉄分と石灰分が付着している。わずかに端部が欠損する。中央に付属。法量７ｇ。廣福門地区出土。

同図10、八双金物と思われる。両端部分が欠損し、青錆上に石灰分が付着している。三巴文が刻まれている。付属個所は不明。

兜

兜は前立３点、鍬形１点を図示する。

第86図12、鍬形の一部、先端部部分。鍍金が所々に残り、先端部の片側が湾曲する。全体的に青錆が付着しているが、鍍金が剥がれた各所に銅が露出する。用物座地区出土。

同図13、兜前立の台座。鍍金は表部分のみ、青錆が全体的に付着する。中央に大振りの花紋が線刻されている。孔は１孔、端部はハート形の孔が見られ、魚尾状をなしている。もう一方の端部は欠損している。台座の左側部分と思われる。廣福門地区出土。

同図９、前立台座の一部。わずかに鍍金の痕跡が見られる。形態は屈曲しており、孔が２孔、端部はハート形の孔に魚尾状を呈する。所々に錆、そして石灰分が付着する。端部は湾曲する。文様は太い線刻で菊花紋、蔓草が彫られ、魚々子が打たれる。台座の右側部分と思われる。廣福門地区出土。

同図11、兜の前立台座と思われる。金具の両端は魚尾状となり、孔は２孔。また中央部分に取り付けようと思われる左右対称の小孔が見られる。細い線刻で蓮と思われる花紋と、魚々子が打たれるが、明瞭ではない。本品は他の金具と比較して小振りでくの字状に折れ、中央部分は隆起している。左上部は欠損。法量15ｇ。用

物座地区出土。

その他の武具

その他の武具については環座、切子頭、笠鞐、菱形笠鋲、責鞐、環状の銅製品、銅弾、切羽などが得られた。

第86図２　菱形笠鋲。鍍金されており、両端は潰されて曲がった状態。鎧の鋲であろうか。裏側には中央からやや端部よりに鋲が付く。法量２ｇ。木曳門地区出土。

同図８　笠鞐。わずかに鍍金が残る。状態は良好である。法量13ｇ。木曳門地区出土。

同図５　責鞐。銅製品、完形。形状はハの字状で全体的に錆と石灰分が付着。法量２ｇ。用物座地区出土。

同図14　木瓜形の切羽。銅製品、完形。全体的に錆が付着。法量は14ｇ。木曳門地区出土。

第87図20　環座。大小２つの菊花を重ね切子頭が通る。環が付属する。大菊花の周辺部には鍍金が残る。裏面は全体的に青錆に覆われる。類似資料として浦添ようどれ出土の環座がある。法量14ｇ。下之御庭地区出土。

同図21　切子頭。全体的に青錆に覆われ、石灰分が所々に付着。突起部は破損する。法量２ｇ。木曳門地区出土。

同図24　覆輪の一部か。断面形態はくの字状となる。所々に青錆と石灰分が見える。半分途中で曲がっており端部の金具は蹄鉄状に湾曲している。法量６ｇ。廣福門地区出土。

同図22　環状の青銅製品、真円形。片側の一部に青錆。比較的、状態は良好。松・竹・梅が陽刻で表裏面に彫られている。一条の接合線と思われる切れ目が見られる。法量６ｇ。廣福門地区出土。

同図23　銅弾。法量11ｇの銅製弾である。表面の状態は比較的良好。長円形。用物座地区出土。

第29表　武具

	廣福門	木曳門	用物座	下之庭	漏刻門	表採	計
鍔		2	1	1			4
切羽		2		1			3
銅弾		9	7	2			18
小札	6	24	11	12		4	57
鎖			1	1			2
兜前立	2	1	2				5
鍬形			1	1			2
八双金物	5	23	5	1		3	37
笠鞐		5	1	3			9
責鞐	1	2	1		1		5
覆輪	3	20	7	9		2	41
環座	1			1			2
切子頭	1	1					2
茱萸金具		2		3			5
鋲	1	10	4	6			21
座金	1	5		2			8
計	21	106	41	43	1	9	221

第32節　石球

石球は総数17点が得られた。石球は大別して大型の石球と小型の石球に分類できる。ここでは大型の石球３点と小型の石球５点を図示する。

第88図１、大型の石球。砂岩で約３分の１が欠落する。全体的に明瞭な叩き痕を確認することができる。一部に煤が付着。法量2.3kg。下之御庭地区出土。

同図２、中型の石球。砂岩で完形品。面を有する個所が２面ある。よって叩き石の可能性も挙げられる。表面全体に叩き痕が見られる。法量0.85kg。廣福門地区出土。

同図３、大型の石球。砂岩である。球体の一部分は欠落、全体に細かい叩き痕が施され、きれいに整形されている。法量2.05kg。廣福門地区出土。

同図４、小型石球。法量23ｇ。珊瑚石灰岩である。全体に叩き痕がみられ、球形に成形されている。木曳門

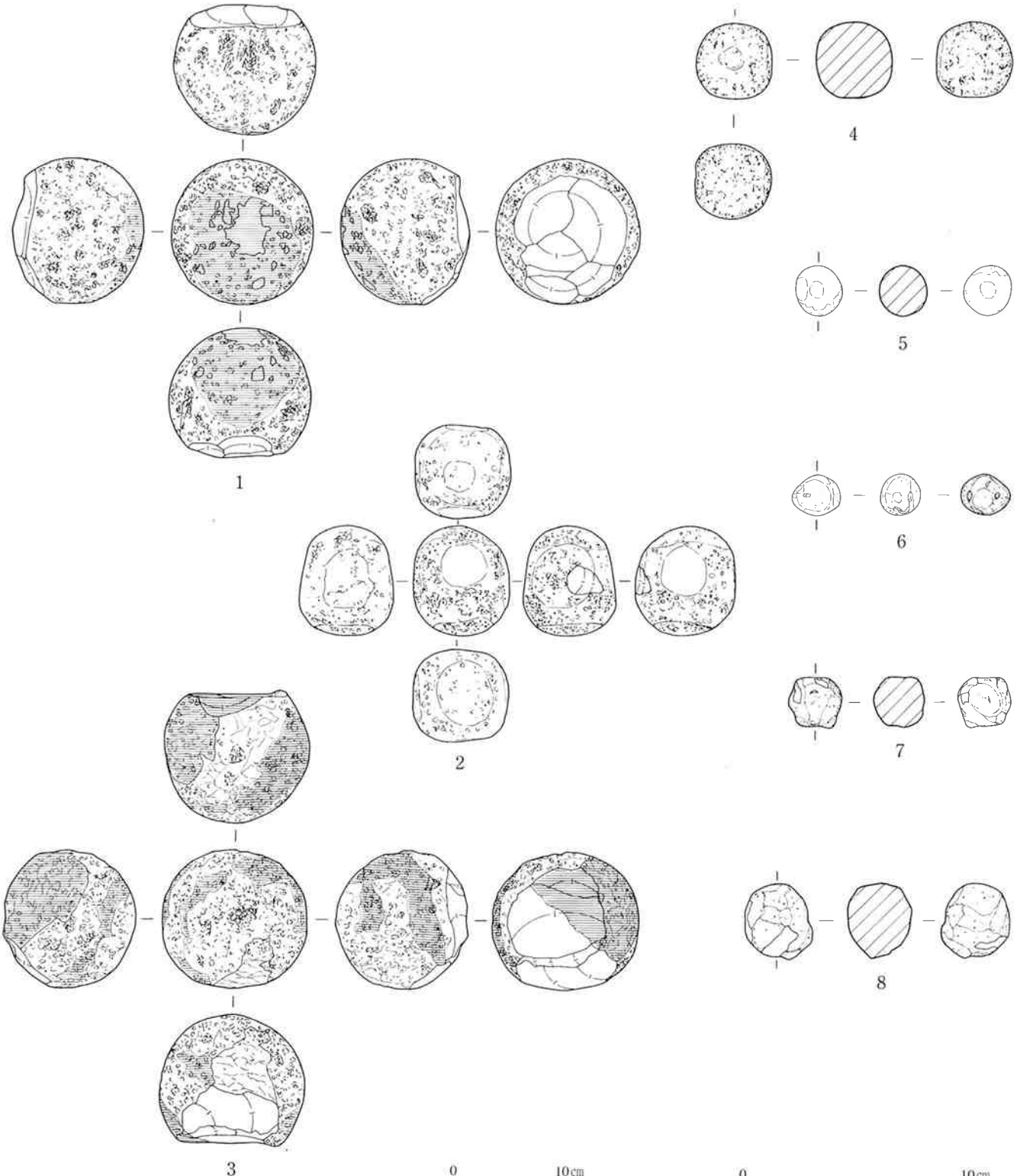
地区出土。

同図５、小型石球。不定形で研かれている。４カ所にくぼみがあり、そのうち１カ所は穴になっている。法量４ｇ。廣福門地区出土。

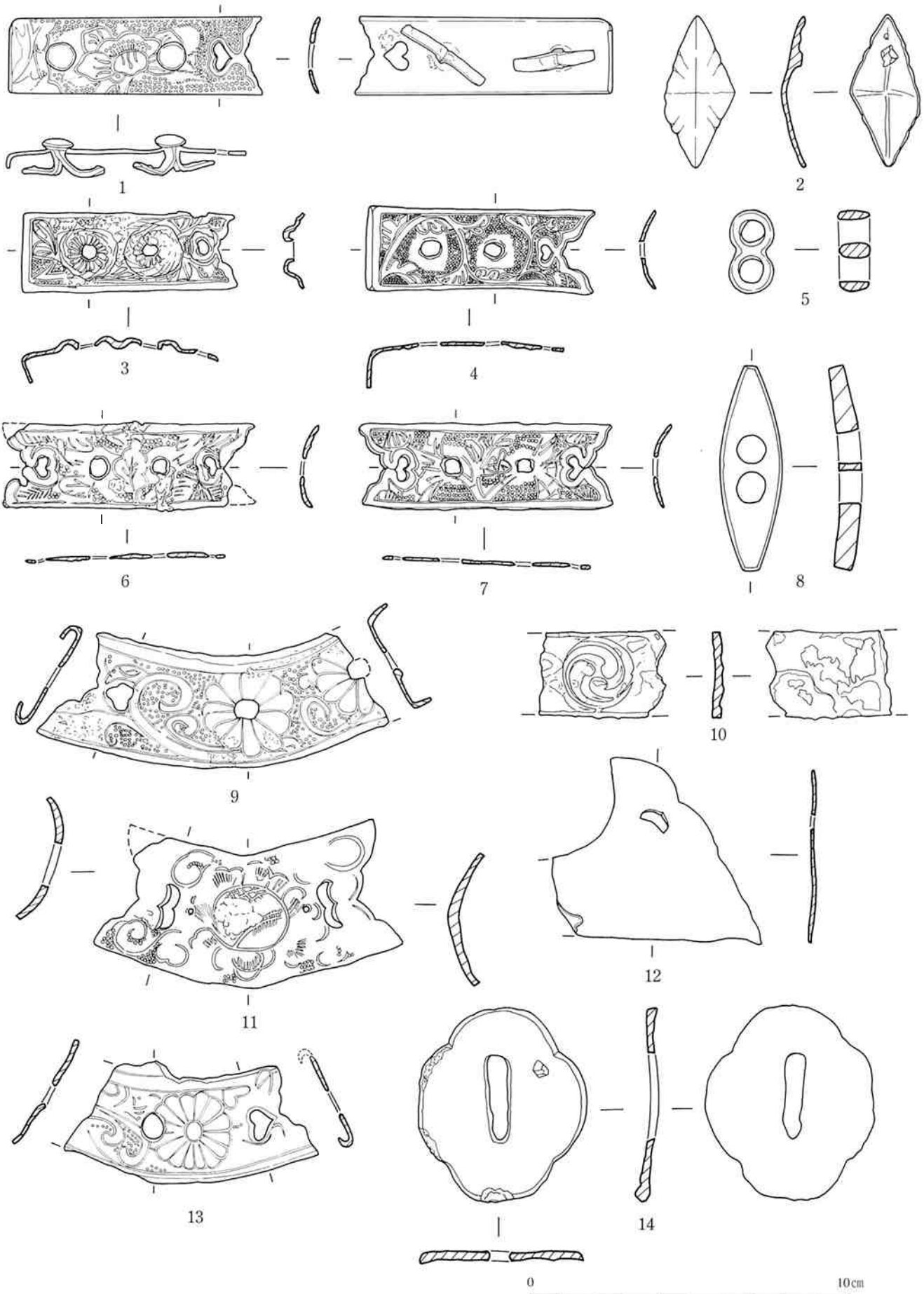
同図６、小型石球。表面はなめらかで研かれている。ほぼ球形。表面の半分は黒く変色しており、もう半分は白色である。材質は不明。法量５ｇ。廣福門地区出土。

同図７、小型石球。石灰岩であり、やや不定形。明確な整形の跡は見られない。法量７ｇ。用物座地区出土。

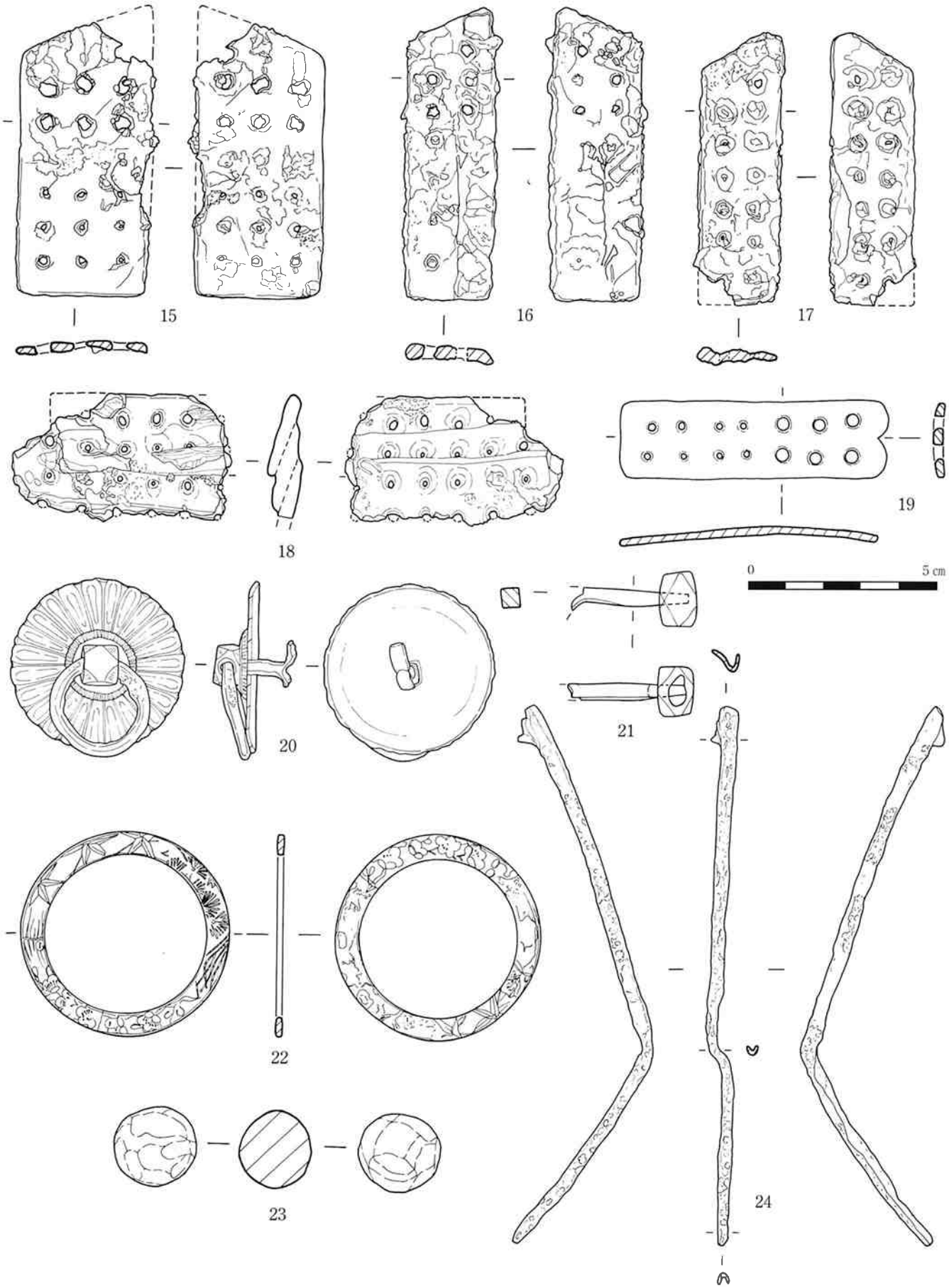
同図８、小型石球。石灰岩で形はいびつである。整形の跡は見られない。法量22.5ｇ。用物座地区出土。



第86図　石球



第87図　武具



第88図　武具

第33節　釘・釘状製品

鉄製品961本、青銅製品24本出土している。出土資料は長さ・形態により下記の通りに 分類を行ったが、鉄製品は欠損・錆・腐食が著しく、出土数の約７割である626本が分類 不可能であった。また、錆・腐食のためこれら以外に分類・本数共に不明な釘状の製品が大量に出土している。出土数の多い調査区は鉄製品で木曳門376点、下之御庭201点、用物座116点、廣福門115点であり、形態１ａが97点でうちＣ－１ａが41点、形態３が99点でうちＬ－３が30点と多い。形態１は廣福門・下之御庭でそれぞれ27点・24点出土し、形態３は木曳門で66点が出土しうち26点がＬ－３である。青銅製品は木曳門６点、下之御庭・用物座・漏刻門が各４点出土している。分類別では形態１が９点で瑞泉門で３点、漏刻門で２点、木曳門・廣福門・下之御庭で各１点、形態２が６点で木曳門・用物座で各３点ずつ出土している。形態３も同じく６点で下之御庭で２点で木曳門・用物座・漏刻門で各１点出土している。

長さ　（寸を基準に前後0.75cmを分類基準とした。）

A	７寸	(20.25～21.75cm)	F	４寸半	(12.75～14.25cm)
B	６寸半	(18.75～20.25cm)	G	４寸	(11.25～12.75cm)
C	６寸	(17.25～18.75cm)	H	３寸半	(9.75～11.25cm)
D	５寸半	(15.75～17.25cm)	I	３寸	(8.25～ 9.75cm)
E	５寸	(14.25～15.75cm)	J	２寸半	(6.75～ 8.25cm)

K	２寸	(5.25～ 6.75cm)	
L	１寸半	(3.75～ 5.25cm)	
M	１寸	(2.25～ 3.75cm)	
N	分類不可能出土品		
O	破損品（数量不明）		

形態（鉄製品）

1 a　頭部が短くほぼ直角に屈曲。胴部は方形。
1 b 1aに類似。頭部根本が胴部より細い。
2　頭部は短くほぼ直角に屈曲。胴部は方形。
3　頭部は先細り巻き込むように屈曲。胴部は方形。
4　頭・胴部は区別なく柱状。胴部は長方形。
5　頭部は楔状で屈曲する。胴部は方形。
6　登頂部が台形様に広がる。胴部は長方形。
7　頭部は長くほぼ直角に屈曲。胴部は方形。
8　頭部はほぼ直角に折れ先端が外反。胴部は方形。
9　登頂部は半円形。胴部は方形。
10　頭部は銀杏形で楔状。胴部は方形。
11　頭部上面形は長方形で胴部より広い。胴部は方形。
12　頭部は楔状で屈曲。胴は方形。
13　頭部の上面形は５角形。胴部は方形。
14　頭部は笠形。胴部は円形で、表面を異なる金属で覆っていると考えられる。先端部は四角錐形で２つの対角の稜にかえしを刻んである。

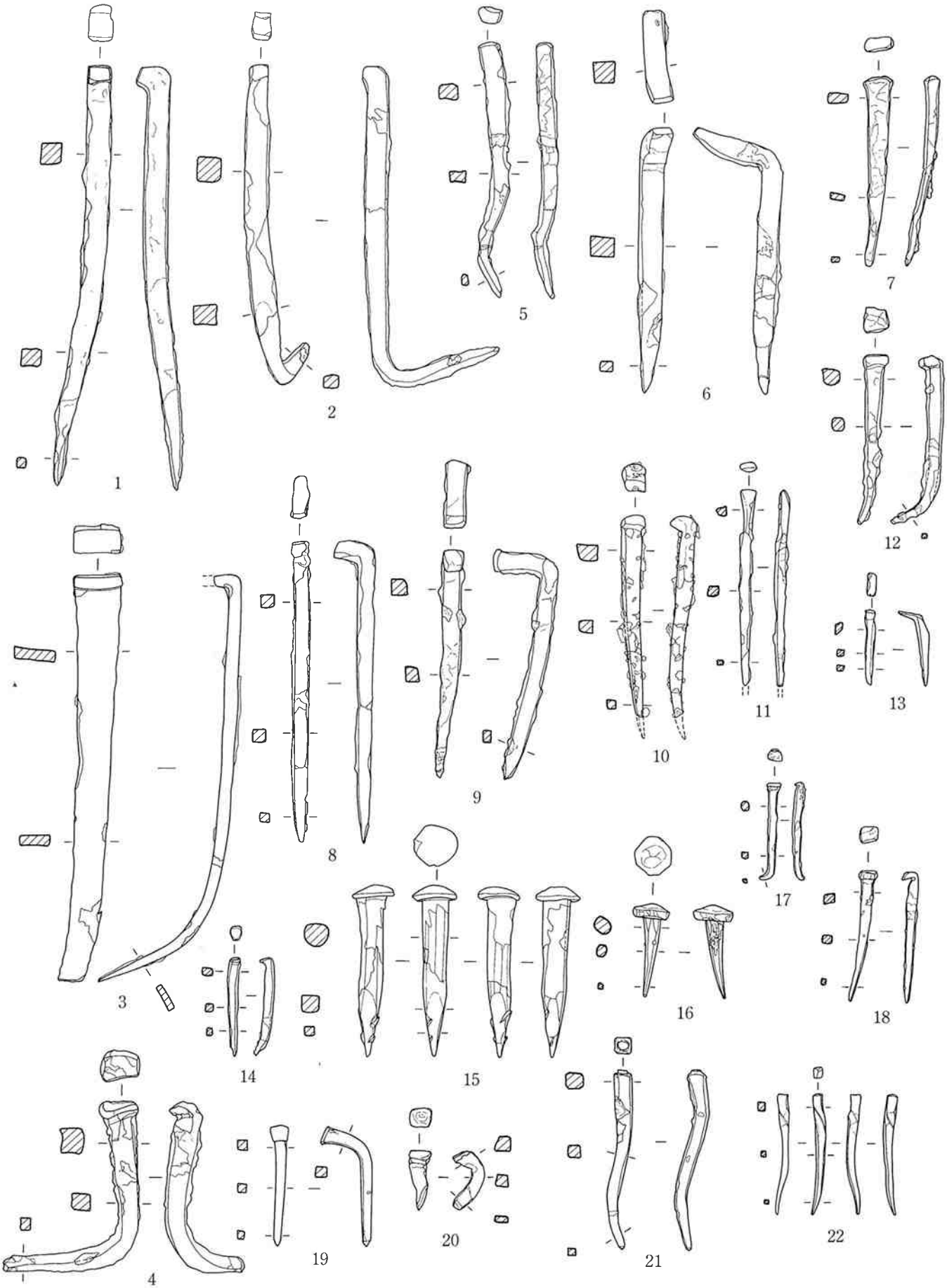
形態（青銅製品）

1　頭部は笠状。胴部は多角錐。
2　頭部は先細り巻き込むように屈曲。胴部は長方形。釘製品の形態３に類似。
3　頭部が台形に広がる。胴部は方形。
4　頭部の上面形は方形で胴部より広い。胴部は方形だが、先端部は頭部の長軸に対して逆の楔形。
5　頭部欠損。柱状。登頂部に円形の凸部がある。
6　頭・胴部の区別無く柱状。胴部にねじれを持つ。

第30表　釘・釘状製品観察表

図番号	分類	材質	残存長	頭部a軸	頭部b軸	幅	厚さ	残存重量	備考	出土地点
1	C－1 a	鉄	17.66	1.29	1.01	0.92	0.93	83.2	頭部・胴部は幅・厚さともに顕著な差はない。胴先端部は四角錐形。	廣M0-126
2	C－1 b	鉄	0.74	1.03	17.54	0.97	0.94	80.4	頭部根本の幅が胴部より細くなる。同じ部分の厚さには顕著な差はない。	首攪乱
3	A－2	鉄	20.10	1.06	1.89	1.69	0.55	89.9	頭部に打痕と考えられる湾曲が見られる。胴の断面は長方形で先端部は楔形。	用L2-123
4	F－3	鉄	13.14	1.06	1.50	0.97	0.98	40.5	頭部は屈曲方向の面を覆うようにほぼ直角に折れる。先端は四角錐形。	木L1-129
5	H－4	鉄	10.84	0.86	0.65	0.80	0.61	21.6	頭部は打痕と思われる凹凸が見られる。胴先端部は四角錐形。	木L7-132
6	H－5	鉄	11.04	0.93	3.13	0.96	0.87	62.4	頭部先端は楔形。頭－胴屈曲部は細くなる。胴先端部は四角錐形。	首攪乱
7	J－6	鉄	7.97	1.20	0.58	0.89	0.42	10.3	頭部は打痕と思われる凹凸が見られる。胴は長方形だが先端部では方形に近くなる。	首攪乱
8	G－7	鉄	12.63	0.68	1.18	0.56	0.53	30.4	頭部はほぼ直角に屈曲する。頭部・胴部はともに幅・厚さに顕著な差はない。胴先端部は楔形。	木K9-129
9	H－8	鉄	9.68	0.81	2.06	0.77	0.71	25.6	折釘形で頭部先端は外反する。胴は方形だが、先端部は楔形。	廣M1-119
10	J－9	鉄	8.46	0.85	1.18	0.78	0.65	15.9	頭部は半円状、腐食が著しいが胴は方形と考えられる。先端部は欠損。	廣表土攪乱
11	I－10	鉄	8.26	0.33	0.65	0.46	0.50	7.1	頭部は楔状であり、根本はくびれ胴より細くなる。胴は方形で、先端は細く錐状。	木L8-146
12	J－11	鉄	8.05	1.00	0.80	0.58	0.61	10.1	頭部幅が胴部よりも広く扁平。胴は方形で先端部は四角錐形。	下
13	M－12	鉄	3.23	0.37	0.90	0.36	0.41	1.6	頭部は扁平で長い。胴の断面形は菱形だが変形の可能性有り。先端部は四角錐。	木L6-131
14	L－13	鉄	4.24	0.49	0.58	0.44	0.39	2.4	頭部上面形は六角形で、先端部がすぼまる。胴は方形で、先端部は扁平に変形。	木
15	J－14	鉄	7.17	1.71	1.75	0.96	1.02	32.7	頭部は笠状。胴は鋳造時の稜が残る。表面は柱状で異なる金属で覆われる。先端は四角錐で対角の2稜にかえしが2つずつ施される。	木L8-132
16	L－1	青銅	3.89	1.61	1.53	0.71	0.70	11.3	頭部は笠状で凹凸が著しい。胴部は錐形で頭部との接続部は中央よりずれる。	木L9-134
17	L－2	青銅	4.21	0.62	0.47	0.35	0.38	2.6	頭部は胴部より広く、屈曲方向の面を覆うように正面に折れる。胴は方形。先端部は潰れており不明。	木L6-131
18	K－2	青銅	5.50	0.78	0.45	0.49	0.38	5.6	頭部が胴部より細く屈曲方向の面を覆うように折れる。胴は頭部付近で扁平、中央付近で方形・先端部で頭部付近とは反対の面が扁平となる。	下
19	K－3	青銅	5.84	0.71	0.71	0.45	0.48	8.3	頭部は台形状に広がる。胴は方形で先端側は細くなる。先端部は四角錐形。	下
20	M－4	青銅	2.72	0.94	0.80	0.55	0.54	6.6	全体に屈曲する。頭部上面形は方形に近く胴より広い。先端部は側面より閉じる楔形。	下L8-121
21	J－5	青銅	7.49	－	－	0.73	0.70	17.1	頭部は欠落していると考えられ、接続用の凸がある。胴は方形の稜を面取りした八角形だが、途中より方形となる。先端部は四角錐形。	用L8-122
22	L－6	青銅	5.14	0.34	0.38	0.32	0.30	3.1	頭頂より約7mm下方より左方向へのねじりが1/4回転施される。胴部は方形で先端部は錐状。	下

注1　残存長・頭部a軸・b軸・幅・厚さの単位はcm、残存重量の単位はg。
注2　頭部について、屈曲している場合は屈曲方向を、屈曲のない場合は長軸を頭部a軸、対角を頭部b軸とし、胴部については、頭部a軸に対応する面を幅、その側面を厚さとする。
※　下之御庭＝下、用物座＝用、廣福門＝廣、木曳門＝木、首里城＝首と略記。



第89図　釘・釘状製品

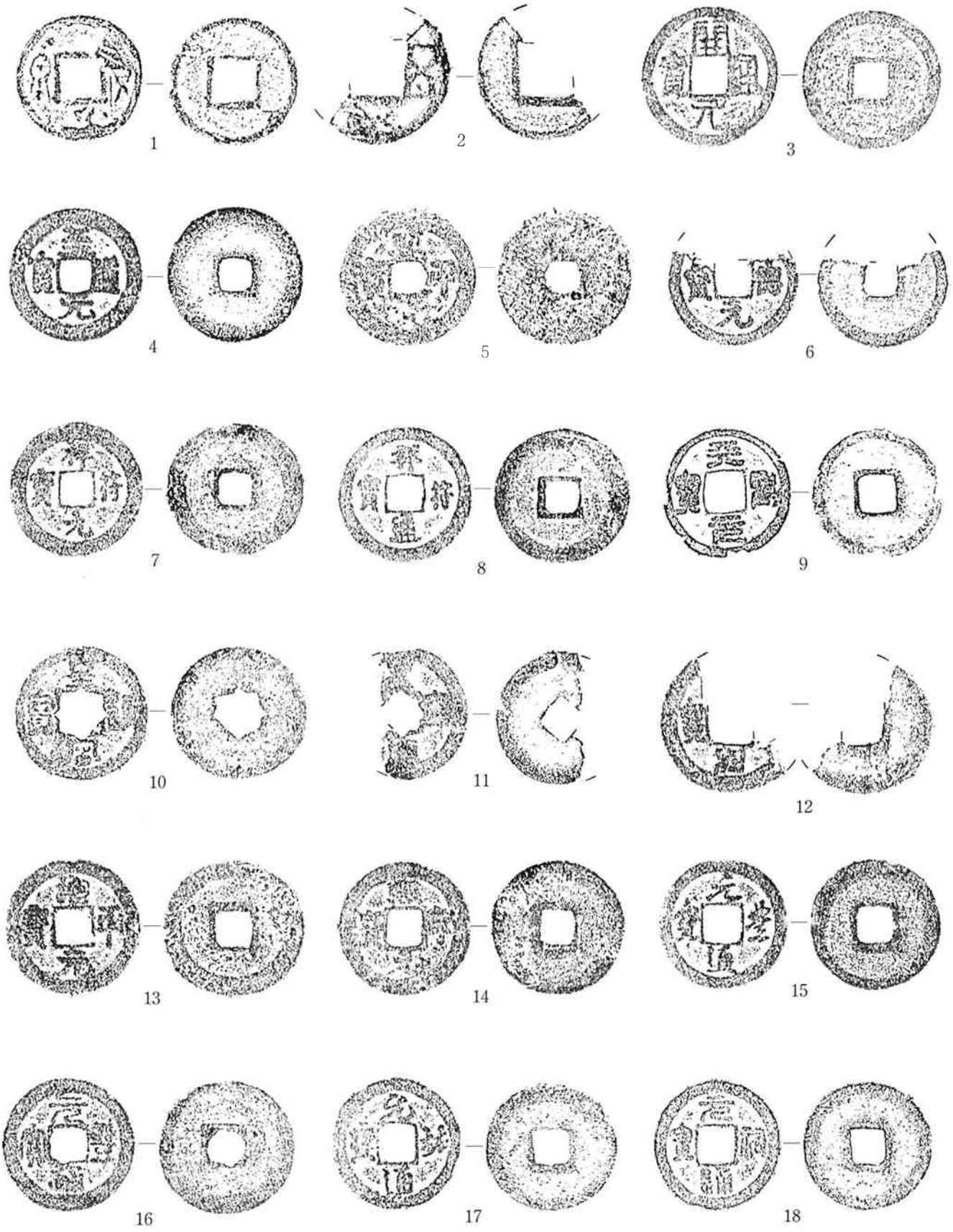
第34節　銭貨

銭貨は付着銭・小破片等の不明資料672点を含む、1163点が出土している。木曳門地区で585点、下之御庭地区265点、用物座地区105点、廣福門地区92点、漏刻門地区29点、瑞泉門地区７点、ほか攪乱・表採等で80点出土しており、その約５割が木曳門地区より出土する。検出された銭貨のうち分類のできた中国銭は29種で、北宋銭が19種と最も多い。第31表への記載以外に北宋銭の宋通元寶・天禧通寶・嘉祐通寶・聖宋元寶・大観通寶、南宋銭の淳祐元寶が検出されている。琉球銭は尚秦久代の大世通寶が木曳門地区と下之御庭地区より６点、尚徳代の世高通寶が下之御庭地区より１点出土している。日本銭は江戸の寛永通寶Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期の各期が確認されている。他に無文銭・輪銭（鳩目銭）、雁首銭、明治以降の日本銭、米国貨が出土している。銭種別数では明の永樂通寶が95点と最も出土数が多く、次いで洪武通寶50点、開元通寶・皇宋通寶・熙寧元寶・元寶通寶・元祐通寶・政和通寶・寛永通寶Ⅲ期が10点前後出土しており、木曳門地区よりそれぞれ約５割出土し、他の銭種もその約９割は木曳門地区に集中する。

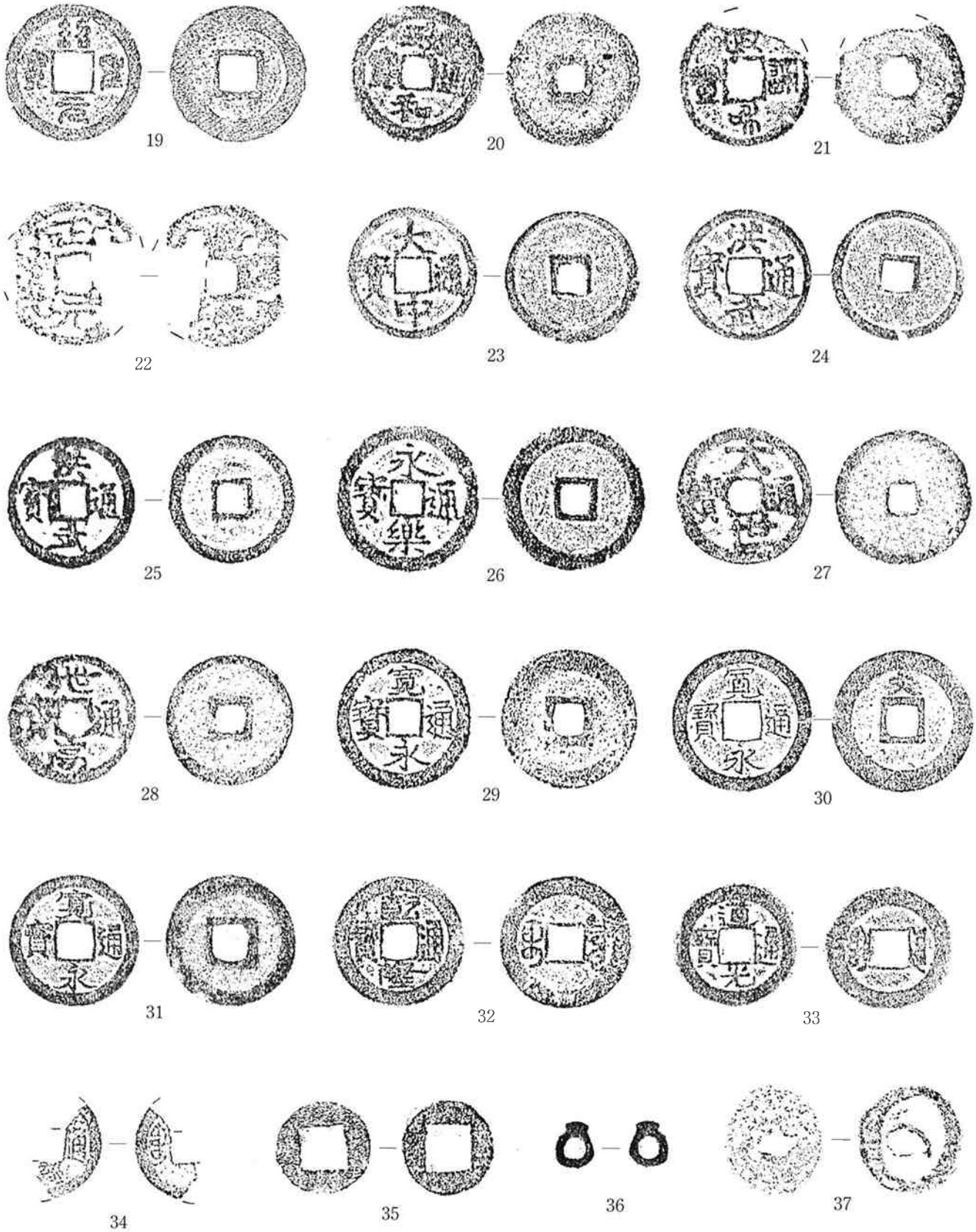
第31表　銭貨観察表

図/図版	番号	銭種	銭文	1	背文字	初鋳年代	書体	外縁外径(mm) a/b		外縁内径(mm) c/d		孔径(mm) 縦×横	厚み(mm) 外・内		残存重量(g)	観察事項	出土地点	
第90図・第89図版	1	貨泉	○泉	完	—	新AD14年	—	23.4	23.5	18.9	20.2	7.7×7.5	1.89	1.00	3.0	「貨」は付着物により半分潰れる。	木	不明
	2	五銖	○五	1／2	—	後漢AD24年	—	—		—		9.0×8.6	1.16	1.00	1.6	薄肉で輪郭が一部不明瞭。	木	不明
	3	開元通寶	開元通寶	完	背上月	唐621年	真書	25.1	25.0	20.9	20.9	6.5×6.4	1.41	0.50	3.3	緑褐色の錆が付着。円形の背上月。	木	L.7-131
	4	至道元寶	至道元寶	完	—	北宋995年	真書	25.1	25.0	18.6	18.3	5.8×5.9	1.13	0.50	3.4	濶縁。暗緑色の錆が付着し、特に背は輪郭ともに不明瞭。	木	L.7-131～132
	5	咸開元寶	咸開元寶	完	—	北宋998年	真書	24.9	25.0	18.9	19.7	5.4×4.9	1.38	0.75	3.7	全体が緑褐色の錆に覆われるが、「咸・平・元」が判読可能。	木	L.7-131
	6	景德元寶	□德元寶	3／4	—	北宋1004年	真書	—	24.1	—	19.7	—×5.6	1.20	0.75	2.3	「景」は欠損するが銭文より確定。「寶」の部分で屈曲する。細縁。	木	L.6-133～135
	7	祥符元寶	祥符元寶	完	—	北宋1008年	真書	24.9	24.7	18.8	18.4	5.9×5.8	1.23	0.75	3.6	濶縁。緑褐色の錆が付着し、特に背は輪郭ともに不明瞭。	木	L.9-132
	8	祥符通寶	祥符通寶	完	—	北宋1008年	真書	24.9	24.8	19.7	19.6	5.9×6.0	1.21	0.75	3.4	表の輪より背の輪の方が広い。「通」の右側に円形の小孔あり。	下	不明
	9	天聖元寶	天聖元寶	完	—	北宋1023年	篆書	24.4	23.3	20.2	20.2	7.0×6.9	1.48	0.75	3.3	鋳不足により径が欠ける。細縁。郭高が銭文・輪より低い。	瑞	不明
	10	皇宋通寶	皇宋通寶	完	—	北宋1038年	篆書	24.4	24.6	20.2	21.1	—×7.6	1.10	0.50	2.9	孔形が８角形を呈す。銭文は不明瞭だが判読可能。薄肉。表より背の輪の幅が広い。	木	L.9-134
	11	皇宋通寶	皇宋通□	3／4	—	北宋1038年	篆書	24.8	—	18.8	—	5.7×6.1	1.30	1.00	2.3	鋳造時の孔の位置と穿孔が90°ずれている。銭文より皇宋通寶と考えられる。	木	不明
	12	至和通寶	□和□寶	1／2	—	北宋1054年	篆書	—		—		—×6.8	1.46	1.00	2.2	輪・郭ともに背の方が広い。銭文より至和通寶と確定。	木	不明
	13	治平元寶	○平元寶	完	—	北宋1064年	真書	24.3	24.6	19.6	20.1	6.3×6.3	1.43	0.75	3.5	鋳不足により欠損部がある。付着物により銭文はやや不明瞭。	木	L.7-132
	14	熙寧元寶	熙寧元寶	完	不明	北宋1068年	真書	24.2	24.4	19.4	18.4	6.5×6.2	1.20	0.50	3.3	付着物が多く緑青色の錆に覆われる。	木	L.5-132
	15	元豊通寶	元豊通寶	完	無	北宋1078年	行書	23.8	23.8	18.6	18.9	6.7×6.7	1.36	0.50	3.4	緑白色の錆に覆われる。背は浅彫り。	木	M7-147
	16	元豊通寶	元豊通寶	完	不明	北宋1078年	篆書	24.7	24.3	18.9	19.2	5.7×6.1	1.45	1.00	4.4	鋳不足により縁が欠損。穿孔が歪む。	木	不明
	17	元祐通寶	元祐通寶	完	不明	北宋1086年	行書	23.8	24.0	0.8	0.5	6.5×6.4	1.51	1.00	3.9	深彫り。付着物が多く背は不明瞭。	木	1140
	18	元祐通寶	元祐通寶	完	無	北宋1086年	篆書	23.8	23.9	19.3	19.1	6.3×6.1	1.38	0.75	4.1	全体が暗緑色を呈す。背は浅彫り。	木	M1-129
第91図・第90図版	19	紹聖元寶	紹聖元寶	完	不明	北宋1094年	篆書	24.5	24.5	19.8	19.8	6.6×6.4	1.28	0.25	3.4	薄肉。全体が黒色を呈す。背は浅彫りで、輪が表より広い。	木	L.8-132
	20	政和通寶	政和通寶	完	—	北宋1111年	分楷	24.4	24.4	19.4	19.4	4.9×5.7	1.46	0.25	3.2	不明瞭だが銭文より確定。背は浅彫りで輪・郭ともに不明瞭。	木	L.8-132
	21	政和通寶	政和通寶	4／5	—	北宋1111年	篆書	23.8	—	20.9	—	6.8×6.0	1.30	0.75	2.6	孔形が８角形になる。細縁で薄肉。浅彫り。背は輪・郭ともに不明瞭。	下	不明
	22	正隆元寶	正□元寶	3／4	不明	金1157年	真書	25.3	—	21.6	—	6.0×5.0	1.41	0.50	2.0	二次加工により各字間の計４ヵ所に穿孔され、「隆・寶」の外側は切り取られる。	廣	不明
	23	大中通寶	大中通寶	完	不明	明1361年	楷書	23.7	23.7	19.6	20.4	5.0×5.4	2.02	1.00	4.7	表・背ともに細縁・深彫りで厚肉。	木	L.5-129
	24	洪武通寶	洪武通寶	完	無	明1368年	楷書	23.6	23.3	20.9	20.6	5.8×5.4	1.42	0.50	2.9	表・背ともに細縁・深彫りで厚肉。暗褐色の錆が付着する。	木	L.4-129
	25	洪武通寶	洪武通寶	完	背上月？	明1368年	楷書	23.4	22.9	19.2	18.4	5.1×4.8	1.80	0.50	3.6	背上月と思われる凸がある。24と比べ銭径はほぼ同じだが輪が広く均一でない。また銭文が小さくやや不明瞭である。	下	不明
	26	永樂通寶	永樂通寶	完	—	明1408年	楷書	25.5	25.2	20.1	20.0	4.9×4.9	1.43	0.25	3.8	深彫り・厚肉で銭文は明瞭。背の輪の幅が均一ではない。	木	L.3-129
	27	大世通寶	大世通寶	完	—	琉球1454年	不明	23.8	23.9	19.3	20.0	4.9×4.7	1.84	1.00	5.0	銭文・郭は鋳潰れやや不明瞭。背は浅彫りで輪・郭ともに不明瞭。	下	不明
	28	世高通寶	世高通寶	完	—	琉球1461年	不明	22.7	23.2	19.5	19.1	5.0×4.8	2.04	1.25	4.6	銭文・郭は鋳潰れやや不明瞭。背は広郭。	下	L.6-119
	29	寛永通寶	寛永通寶	完	—	江戸Ⅰ期 1636～1659年	楷書	24.9	24.8	19.8	19.3	5.7×5.4	1.32	0.75	3.2	背は濶縁で砂が付着する。１ヵ所輪より穿への亀裂が入る。	廣	不明
	30	寛永通寶	寛永通寶	完	背上文	江戸Ⅱ期 1668～1683年	楷書	25.0	25.0	19.7	19.9	5.5×5.7	1.34	0.75	4.1	背の輪幅が表より広く背文がやや不明瞭。	用	L.8-132
	31	寛永通寶	寛永通寶	完	無	江戸Ⅲ期 1697～1747年 1767～1781年	楷書	23.8	23.3	19.6	18.5	6.4×6.3	0.89	0.75	2.4	薄肉。背は浅彫りで、輪・郭が表より広く幅は均一ではない。	下	表土攪乱
	32	乾隆通寶	乾隆通寶	完	満文	清1736年	不明	23.7	23.7	17.8	17.8	5.6×5.6	1.44	1.00	3.8	浅彫り。付着物により銭文が一部不明瞭。	用	不明
	33	道光通寶	道光通寶	完	満文	清1821年	不明	22.3	22.6	15.9	16.5	5.8×5.3	1.79	0.75	4.1	表・背ともに濶縁で深彫り。	木	不明
	34	不明	□○通□	1／3	満文	不明	不明	—		—		—	0.86	0.25	0.4	薄肉で浅彫り。銭文より嘉慶通寶の可能性あり。	木	4061
	35	無文銭		完	—	—	—	16.4	16.8	—		7.9×8.0	0.75	—	0.6	黄緑色を呈す。緑より穿へ亀裂が入る。	木	L.7-131
	36	輪銭		完	—	—	—	8.8	6.5	—		4.1×3.9	1.03	—	0.1	鋳造時のバリが残る。計測はバリ幅が狭。	用	不明
	37	雁首銭		完	—	—	—	21.7	22.2	—		5.6×5.4	1.46	1.25	2.4	穿孔は火皿の底よりされたと考えられる。	廣	不明

注１　背文字の項で、元々背文字が確認されてない銭種には「—」、確認されている銭種で無文のものには「無」、残存状態により確認できないものには「不明」を記入してある。
注２　外縁外径のａ及び外縁内径のｃは銭文に対して直軸、外縁外径のｂ及び外縁内径のｄは同じく傾軸の計測値。
注３　銭文の項で、不明文字を「○」、欠損文字を「□」で表した。
※　下之御庭＝下、用物座＝用、廣福門＝廣、木曳門＝木、瑞泉門＝瑞と略記。



第90図　銭貨拓影



第91図　銭貨拓影

第35節　簪

簪は25点出土した。民俗例では大きく男性用の本簪（髪差）・副簪（押差）、女性用の本簪（ジーファー）・副簪（側差）と分類されるが、これらには更に年齢や身分による材質・意匠の違いが見られる。各資料の特徴を元に民俗例との比較を行い下記の５類に分類した。残存状態の良好で特徴的な資料を第92図に示し、第32表にその計測表を記す。

Ⅰ類…花部（頭部の花型の飾り）・首・ムディ・竿（四角柱）の四部からなる。ムディは首より細く螺施模様（ねじり）が施され、竿の先端は四角錐となる。髪差に類する形態。

Ⅱ類…カブ（耳掻き状）・首・ムディ・竿の四部からなる。首・竿は六角柱で竿の先端は六角錐となる。ムディは首・竿の稜が山形に交差する部位である。押差に類する形態。

Ⅲ類…カブ（匙状）・首・ムディ・竿の四部からなる。カブ以外の部位はⅡ類に準ずるが、竿はⅡ類とは異なり徐々に太くなり先端で六角錐となる。ジーファーに類する形態。

Ⅳ類…形態はⅡ類に準ずるが、小型でカブが小さく匙状を呈する。

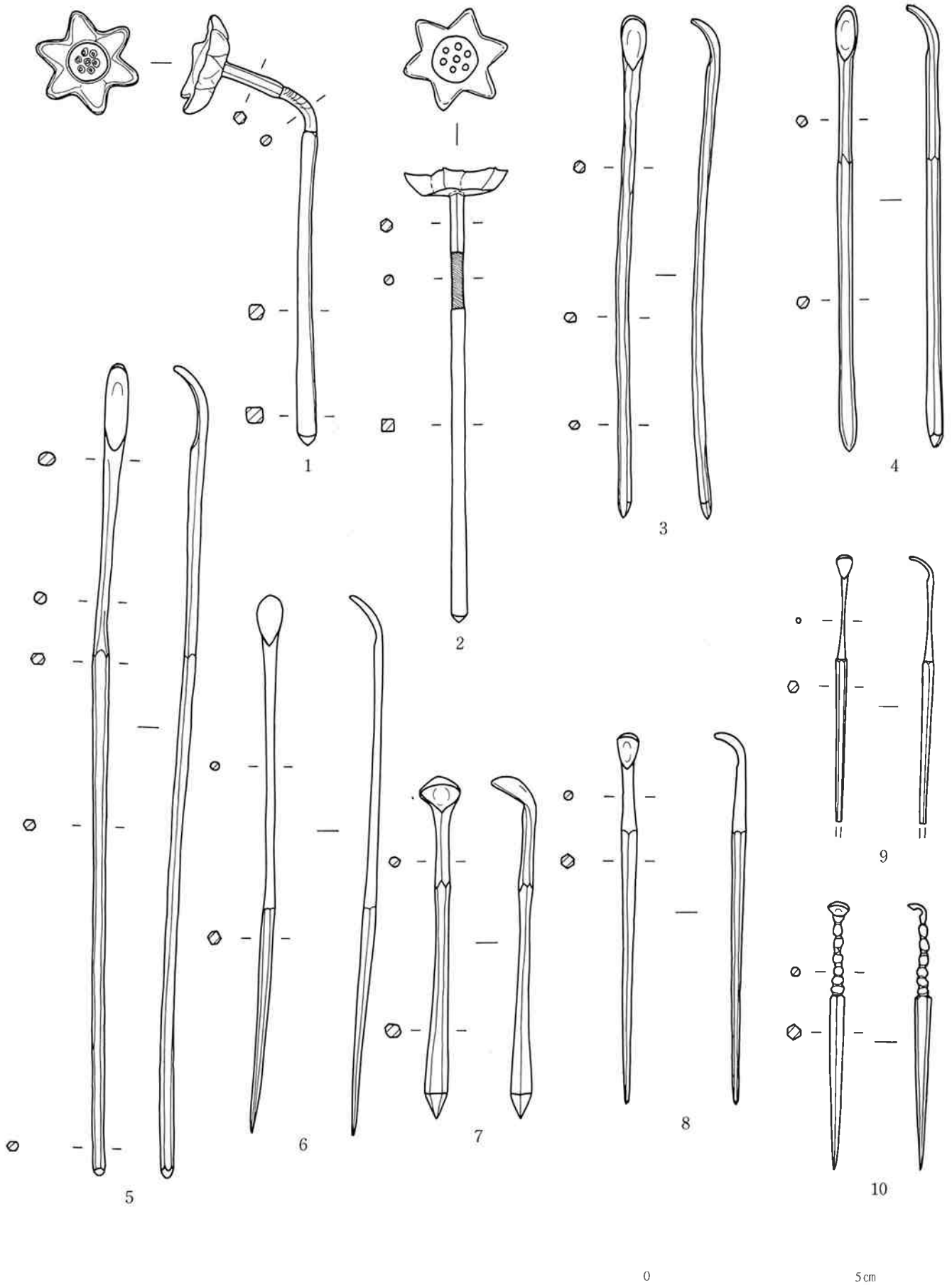
Ⅴ類…不明。竿部のみ残存し、分類が行えない資料。Ⅱ類或いはⅣ類の可能性を持つ。

第92図１：Ⅰ類。ムディ部より屈曲するが欠損部はない。花部の花弁は六枚。中央に７つの円を組み合わせ花心を表す装飾がなされている。首は六角柱形。ムディにはやや不明瞭だがねじりが認められる。竿は四角柱形で先端部は四角錐をなす。２：Ⅰ類。各所に錆による凸部が見られる。花部は接合部がはずれ、首との接続部が確認できる。花弁は六枚。資料１と同様に中央に７つの円を組み合わせ花心を表す装飾がなされているが、各円の径は資料２の方が大きく花心全体に広がる。首は六角柱形でムディにはねじりが認められる。竿四角柱形で先端部は四角錐をなす。３：Ⅱ類。器面各所に灰白色の付着物が見られる。カブ外面に首へと繋がる稜が認められる。ムディは不明瞭。竿はやや扁平で先端部が六角柱状をなす。４：Ⅱ類。全体に肉厚で、各所に暗黄褐色の地金が露呈する。首の稜は不明瞭で円柱状であり、竿はやや扁平で先端部が六角柱状をなす。５：Ⅱ類。他のⅡ類資料と比べ全長が２倍弱ある。首に稜は認められず、首の径はカブから徐々に細くなり、ムディから竿にかけて太くなる。竿先端部は球状をなすが摩滅によるものかは不明。６：Ⅱ類。首部が全長の約半分を占める。ムディは不明瞭で竿先端は針状に細く尖る。７：Ⅲ類。各部とも明瞭。カブ外面には首へと繋がる稜が一本認められる。竿は徐々に太くなり先端部は六角錐をなす。民俗事例において男女兼用の未成年用（女物本簪の同型小型）がある。８：Ⅳ類。カブは耳掻き状をなす。ムディが最も太く、竿は先端にいくに従い細くなる。竿は六角錐。９：Ⅳ類。竿先端部が欠損するが、その形状から針状をなしたと推測する。首は円柱形。ムディは段状で、竿側の径が太くなる。10：Ⅳ類。カブは丸い耳掻き状をなす。首は球を六個数珠状に繋げた形状で、ムディにいくに従い扁平になる。竿は六角錐状で、先端部の径が最も細い。

第32表　簪観察一覧

図/図版	番号	分類	器種	完・破	残存長(cm)	残像重量(g)	花 縦軸 横軸 厚さ(cm)	カブ 長軸 短軸 深さ(cm)	首 最大幅 最小幅 長さ(cm)	ムディ 幅 長さ(cm)	竿 最大幅 最小幅 長さ(cm)	出土地点		遺物番号
第92図・第91図版	1	Ⅰ	髪差	完	10.85	8.90	2.41 1.50 0.51		0.33 0.28 1.70	0.27 1.38	0.41 0.31 7.26	木	N1-150	5
	2	Ⅰ	髪差	完	10.70	10.55	2.50 1.56 0.58		0.34 0.29 1.51	0.27 1.32	0.41 0.29 7.29	下	不明	1
	3	Ⅱ	押差類	完	11.67	5.40		1.16 0.57 —	0.36 0.26 2.76	0.30 0.19	0.32 0.21 7.69	木	L6-159	8
	4	Ⅱ	押差類	完	10.30	6.45		1.15 0.52 —	0.36 0.28 2.23	0.31 0.26	0.32 0.28 6.70	用	西側表土撹乱	4
	5	Ⅱ	押差類	完	18.96	4.50		1.99 0.53 —	0.40 0.24 4.66	0.33 0.13	0.34 0.24 1.21	下	不明	2
	6	Ⅱ	押差類	完	12.49	4.30		1.31 0.58 —	0.34 0.22 6.12	0.29 0.08	0.32 0.09 5.19	木	不明	9
	7	Ⅲ	ジーファー類	完	7.98	5.30		1.00 0.93 0.28	0.39 0.21 1.70	0.33 0.42	0.49 0.23 5.25	用	M2-127	6
	8	Ⅳ	不明	完	8.62	3.70		0.91 0.48 —	0.33 0.23 1.37	0.35 0.28	0.38 0.13 6.38	木	不明	10
	9	Ⅳ	不明	破	6.20	1.50		0.65 0.39 —	0.23 0.13 1.85	0.26 0.14	0.27 0.15 3.74	木	L1-129	7
	10	Ⅳ	不明	完	6.18	2.50		0.37 0.50 0.05	0.31 0.16 1.76	0.32 0.08	0.35 0.06 4.02	用	L1-122	3

※下之御庭＝下、用物座＝用、木曳門＝木と略記。



第92図　簪

第36節　煙管

煙管は一体型が２点で他は各部位ごとに出土している。出土資料は完形品及び破損品の合計が72点であり、その内訳は一体型２点、雁首は44点、羅宇１点、吸い口25点となる。　出土資料は材質・形態より分類を行った。材質は石製・金属製・陶製で、金属製煙管は真鍮製と不明金属製に、陶製煙管は瓦質土器・無釉陶器・施釉陶器に分類される。施されている釉は灰釉・透明釉・緑釉・瑠璃釉と、青銀色または緑銀色の光沢を持つ釉の５類となる。形態は雁首から羅宇への接続部がＬ字状になるパイプ型と火皿に直接羅宇を差し込む柱状型及び雁首－羅宇－吸い口の一体型の３類を設定した。特徴的な出土資料を選出して第93図に示し、観察状況を第33表に表す。

出土傾向として陶製煙管の出土が多く中でも緑釉の施された製品が多い。石製・瓦質土器製煙管は柱状型の雁首のみ各１点の出土である。無釉の陶製煙管は雁首のみ１１点、褐釉陶製煙管も雁首のみ６点と偏りがみられる。雁首と吸い口の出土数の割合は石製と無釉・褐釉の陶製煙管を除き、各分類ごとにほぼ同率であった。

注：図版番号１（遺物番号６）の計測値はその形状より、ｃ＝羅宇接続孔面幅、ｄ＝羅宇接続孔面に対し右側面幅、ｅ＝全高とする。

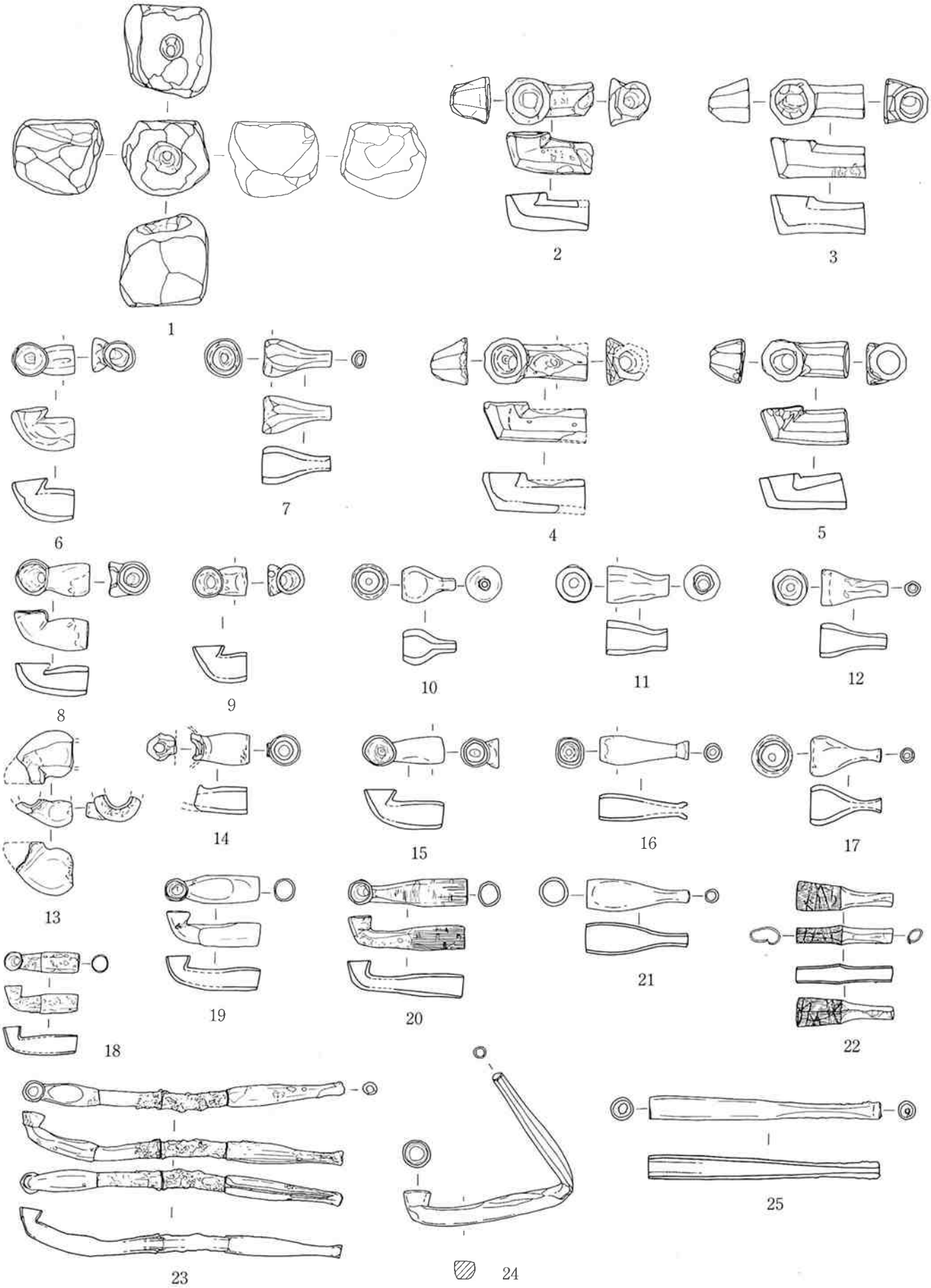
第33表　煙管観察一覧

図番号	遺物番号	完/破	型式	器形	材質	長さ／接続部直径／吸口・火皿・直径													重さ（g）	出土地		備考
						a	a'	b	b'	c	c'	d	e	f	f'	g	g'	h				
1	6	不明	柱状型	雁首	石	22.30	8.56	—	—	32.97	10.87	32.89	—	—	—	—	—	34.40	40.50	木	H2 5	器面の破損が多く、５面或いは４面の面取りと考えられる。穿孔部は円錐形をなす。
2	11	破	パイプ型	雁首	無釉	19.71	13.50	15.40	2.50	14.18	6.48	13.39	—	—	—	—	—	—	10.40	下	撹乱	８面に面取りされる。火皿から羅宇接続部にかけ浅条かの条痕が認められる。
3	3	破	パイプ型	雁首	無釉	19.24	14.00	17.86	2.00	14.05	6.15	13.06	38.74	—	—	—	—	—	11.10	木	不明	８面に面取りされる。器面全体に調整痕が残る。胴部がくびれる。
4	1	破	パイプ型	雁首	無釉	19.17	12.91	15.47	3.00	13.74	7.82	14.77	44.55	—	—	—	—	—	10.20	木	L7-134	８面に面取りされる。器面の約半分に黒色の自然釉がかかる。
5	17	破	パイプ型	雁首	無釉	17.27	1073	13.47	2.00	15.68	8.05	14.74	35.18	—	—	—	—	—	9.80	不明	不明	11面に面取りされる。器面全体に暗緑灰褐色の自然釉がかかる。
6	10	完	パイプ型	雁首	透明釉	14.42	11.10	17.28	4.32	12.45	8.05	12.92	—	—	—	—	—	—	3.70	下	撹乱	器形はやや歪で、羅宇接続部を除き器面全体に透明釉がかかる。
7	15	完	パイプ型	吸口	透明釉	—	—	—	—	—	—	—	—	16.20	9.78	7.21	4.22	27.52	3.70	下	撹乱	羅宇接続部の口縁部に筒状器具の圧痕が残る。全体に釉が施される。
8	13	破	パイプ型	雁首	緑釉	14.83	12.28	13.36	—	13.15	8.03	13.67	30.34	—	—	—	—	—	4.90	下	撹乱	器面全体に緑釉が施されるが、胴部から羅宇接続部にかけて徐々に薄くなる。
9	16	完	パイプ型	雁首	緑釉	12.71	10.32	15.50	3.50	12.07	7.49	12.61	22.38	—	—	—	—	—	2.80	下	撹乱	釉はほぼ器面全体に施されるが、羅宇接続部及び火皿内部には施されていない。
10	2	完	パイプ型	吸口	緑釉	—	—	—	—	—	—	—	—	15.31	9.64	6.36	3.10	27.89	3.20	木	M0-138	器形は胴部から吸い口部にかけ極端に細くなる。暗緑色の釉が掛けられるが、吸い口部には施されていない。
11	4	完	パイプ型	吸口	緑釉	—	—	—	—	—	—	—	—	14.90	9.23	8.77	5.13	25.86	3.10	木	不明	釉はほぼ剥落するが、数ヵ所に淡い緑釉が認められる。器形は歪で、吸い口がやや外反する。
12	14	完	パイプ型	吸口	緑釉	—	—	—	—	—	—	—	—	14.55	8.25	5.10	2.18	21.94	3.00	下	撹乱	羅宇接続部を除き器面全体に釉が施される。器形は漏斗型。
13	8	破	パイプ型	雁首	瑠璃釉	14.83	12.28	13.30	—	13.15	8.03	13.67	30.34	—	—	—	—	—	3.70	廣	撹北西	火皿内部及び器面全体に濃青色の釉が施される。胴部は丸く膨らみ、火皿は低い。
14	5	破	パイプ型	雁首	瑠璃釉	—	—	—	—	13.02	6.75	12.73	—	—	—	—	—	—	3.60	木	L8-132	火皿内部及び器面全体に淡青色の釉が施される。羅宇接続部付近にアルミナ様の砂が付着する。
15	9	完	パイプ型	雁首	瑠璃釉	13.57	10.78	13.67	4.50	12.41	7.76	12.35	33.99	—	—	—	—	—	4.10	下	撹乱	全体に白色の胎土が露呈するが、数ヵ所に深青色の釉が残る。器面全体に調整痕が残る。
16	12	完	パイプ型	吸口	瑠璃釉	—	—	—	—	—	—	—	—	12.71	8.08	7.23	4.02	37.37	3.80	下	撹乱	吸い口周辺を含め数ヵ所に淡青色の釉が残存する。吸い口部はメガホン状に外反する。
17	7	完	パイプ型	吸口	瑠璃釉	—	—	—	—	—	—	—	—	16.95	9.99	5.93	2.70	29.99	4.20	不明	不明	器面全体にまばらに淡青色の釉が残存する。吸い口部は細く先端で外反する。
18	C268	完	パイプ型	雁首	真鍮製	7.04	5.49	10.28	4.30	7.88	6.07	8.17	30.70	—	—	—	—	—	3.90	下	不明	暗黄褐色を呈すが数ヵ所に青白色の錆が生じ、一部に砂が付着。火種落としの敲打面は顕著ではない。
19	D264	完	パイプ型	雁首	真鍮製	9.48	7.73	10.42	3.11	10.07	6.94	10.07	39.39	—	—	—	—	—	7.20	下	表採	火種落としの敲打面は顕著。器形は歪で胴部に段がある。暗緑色を呈すが全体に青白色の錆が生じる。
20	B267	完	パイプ型	雁首	真鍮製	9.56	7.62	12.29	5.36	10.58	8.27	9.98	48.96	—	—	—	—	—	9.70	下	M1-129	全体に銀メッキが残るが数ヵ所に青白色の錆が生じる。胴部には長軸方向の条とミンサー様の彫刻が施される。
21	F272	完	パイプ型	吸口	真鍮製	—	—	—	—	—	—	—	—	13.18	9.18	5.97	3.50	43.14	10.00	木	M6-136	暗黄褐色を呈するが数ヵ所に淡緑白色の錆が生じる。吸い口部はやや外反する。
22	G273	完	パイプ型	吸口	真鍮製	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.88	3.20	40.70	4.40	廣	表採	扁平に潰れる。接続部から筒状に成形したことを確認。羅宇接続部に長軸に沿る条と、胴を巡る条が刻まれる。
23	L278	完	一体型	完形	真鍮製	9.00	6.96	11.42	5.68	8.17	—	7.57	59.30	8.55	5.40	5.45	2.96	47.96	13.30	木	M1-133	組み立て式、各部位とも真鍮製で羅宇は中央より２つに分かれる。火種落としの敲打面は顕著。
24	K272	完	一体型	完形	真鍮製	11.35	9.32	13.70	5.41	10.62	—	8.80	33.90	8.29	5.62	5.45	3.72	14.50	22.20	木	M1-139	一体型で、筒状に成形される。火種落としの敲打面が認められる。暗茶褐色を呈するが、青白色の錆が生じる。
25	275	完	パイプ型	吸口	真鍮製	—	—	—	—	—	—	—	—	9.90	7.57	7.08	2.27	96.43	16.80	漏	M3-126	数ヵ所に銀メッキが残存、器面全体に淡緑白色の錆が生じる。羅宇接続内部に竹と思われる羅宇が残存する。

第34表　キセル計測項目

a	火皿（外径）	b'	火皿（高緑－胴部上面）	d	雁首　胴部（高）	f'	吸い口　胴部　内径	h	吸い口　長軸値
a'	火皿（内径）	c	雁首　胴部（幅）	e	雁首　長軸値	g	吸い口　先端部　外径		長＝mm単位
b	火皿（高緑－胴部底部）	c'	雁首　胴部（内径）	f	吸い口　胴部　最大径	g'	吸い口　先端部　内径		重＝g単位

注１　図版１の計測値ｃは羅字接続面の幅、ｄはｃ計測面の側面幅、ｅは高さの値とする。
注２　遺物番号Ｌ278（第93図23）の羅字径は最大値6.95、最小値5.34、長さ2.70となる。
※　下之御庭＝下、廣福門＝廣、木曳門＝木、漏刻門＝漏、と略記。



第93図　煙管

第37節　歯ブラシ様製品

歯ブラシ様製品が71点得られている。骨製とプラスチック製に大別でき、骨製は第94図１～14、プラスチック製は同図15～18に示した。いずれも欠損品であるが、１、２は柄部先端を欠くが完形に近い資料である。

１はブラシ部が隅丸方形の扁平状をなし、上面に三列になった植毛孔が見られる。頸部で一旦くびれた後、頸部から柄にかけてやや開き柄部は緩やかな直線状を示す。柄尻は舌状を呈すると思われるが破損の為詳細は不明。柄部上面は中央でやや膨らみを持たせ、裏面は平坦に仕上げる。断面形はカマボコ状をなす。

２はブラシ部の先端が楕円形をなし断面は偏平状を示す。ブラシ部上面に植毛孔が三列見られる。頸部は一旦僅かにくびれ、柄に向かい開く。柄部は緩やかな直線状を示し、上面中央で膨らみを持たせ、裏面は平坦に仕上げる。断面形はカマボコ状をなす。

３、４はブラシ部のみ残す欠損品で、３は１とほぼ同様な形状を示すが、４は小形のブラシで、植毛孔を上面から裏面まで穿ち、上面の長軸に平行に３列の溝がみられるなど、他のブラシと様相をやや異にする。

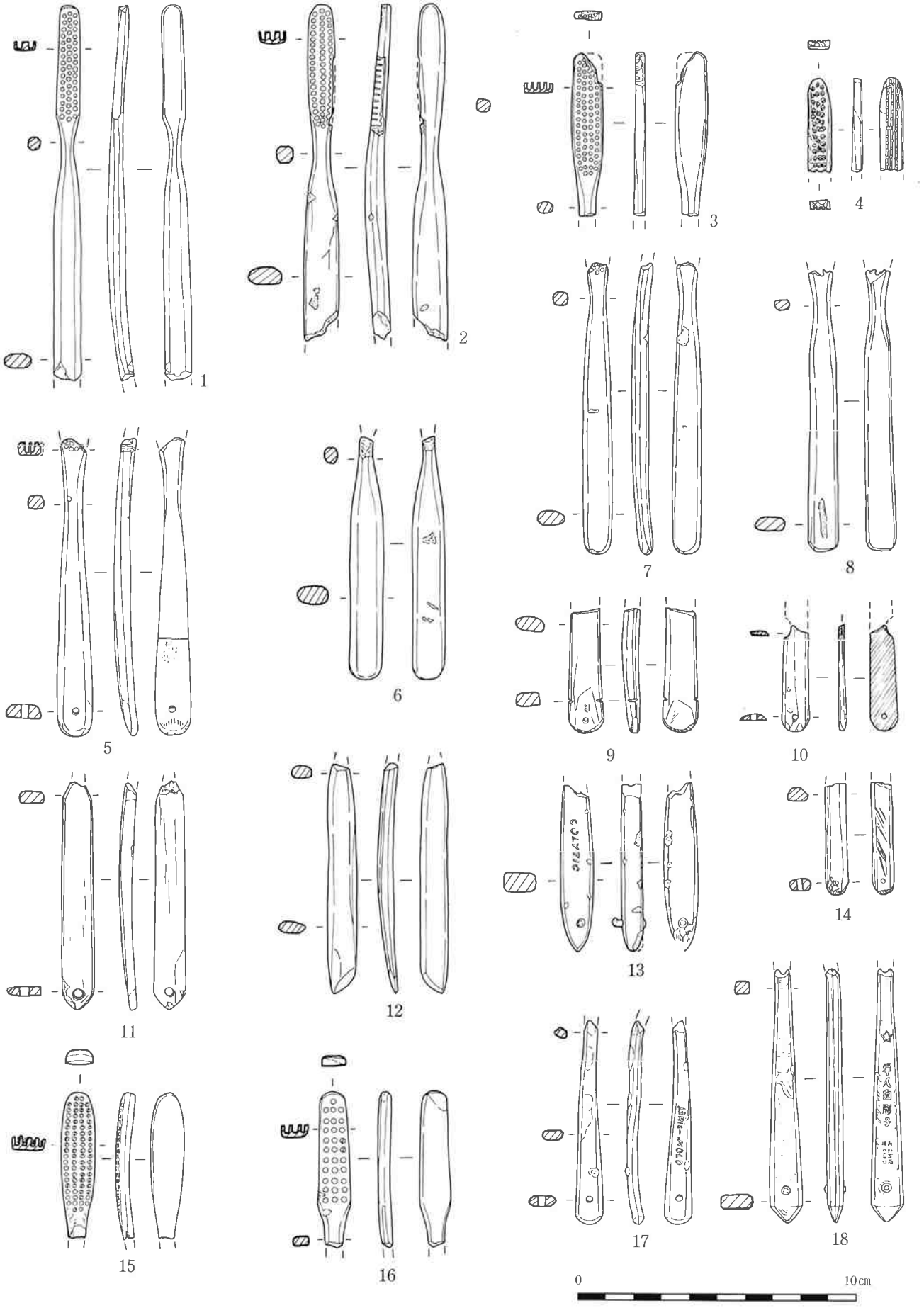
5～14はブラシの柄部のみの破損品である。6～8、10は１とほぼ同様な形状を示し、柄尻形は6、7、10が舌状、８は隅丸方形を呈する。５は頸部が緩やかにくびれ徐々に開きながら柄尻に至る。先端は舌状をなす。断面形はカマボコ状、柄尻の中央に直径２㎜の小孔が穿たれている。11は頸部から肩が張るように柄部に至る。柄部は平行な直線状を示めし、柄尻先端で三角に尖る。柄部中央上面で膨らみを持たせ、裏面は平坦に仕上げる。断面形は楕円形状をなす。柄尻のほぼ中央に直径４㎜の小孔が穿たれている。12は頸部から柄にかけてやや開き柄部は緩やかな直線状を示す。柄尻先端を小刀状に表裏面から削り出し尖らせている。これは本来の形状とは考えにくく、破損後ヘラとして二次使用した可能性がある。断面形は楕円形状をなす。13は柄尻のみ残すもので、柄尻先端が尖り、断面形は方形をなす。柄尻先端に２㎜の孔を穿ち、プラスチックの鋲状のものが通されている。上面に「COLYTIO」の商標とおもわれる文字が見られる。９は柄部が先端に向かい徐々に広がる。先端の両側に刻みを施している。断面形は方形、ヘラの柄部かとも思われる。14は２枚一組を張り合わせて作るブラシの柄部と考えられるが判然としない。柄尻に２㎜弱の孔を穿ち、柄部中央に半月状の抉れが認められる。

15、16はブラシ部のみの破損品である。15が楕円形状16は先端が細くなる隅丸方形を呈する。いずれも断面形は偏平な方形を示す。17は柄部の先端に向かい徐々に幅を増し、断面形は楕円形状をなす。柄尻先端は三角に尖り、柄尻の中央に直径２㎜の小孔が穿たれている。柄部上面に「BRIS－HOLD」の商標と思われる文字が見られる。18は頸部から直線状に開きながら柄尻に至る。柄尻先端は三角状に尖り、柄尻の中央に直径２㎜の小孔が穿たれている。柄部上面に「隼人歯刷子」の商標と社名と思われる「丙外互商株式会社」の文字が認められる。

表35　歯ブラシ様製品法量一覧

単位：cm、g

図図版	番号	素材	ブラシ部		柄部		長さ	幅	重さ	出土地	
			植毛孔	断面形状	柄尻形状	断面 頸部／柄尻					
第94図・第93図版	1	骨	3列	—	不明	楕円／四角	13.8	1	8	下之御庭	攪表土
	2	骨	3列	—	不明	扁平／楕円	12.4	1.3	9.6	下之御庭	攪乱
	3	骨	4列	—	不明	扁平／四角	6	1.1	2.4	木曳門	M9-148
	4	骨	3列	—	不明	扁平／四角	3.4	0.85	1	下之御庭	攪表土
	5	骨	不明	—	楕円／有孔	楕円	11.9	1.3	7.9	不明	
	6	骨	不明	—	楕円	楕円	8.9	1.2	10.1	下之御庭	表土攪乱
	7	骨	3列	不明	楕円	扁平／楕円	10.7	1	7.4	下之御庭	表土攪乱
	8	骨	4列	不明	隅丸方形	扁平／楕円	10.3	1.1	8.7	下之御庭	表土攪乱
	9	骨	不明	—	楕円	楕円	4.6	1.3	3.5	下之御庭	攪乱
	10	骨	不明	—	楕円／有孔	—	3.9	1	1	下之御庭	表土攪乱
	11	骨	不明	—	不明	扁平－四角	8.4	1.15	5.5	廣福門	北西表土攪
	12	骨	—	不明	—	扁平－楕円	8.5	1	5.2	下之御庭	表土攪乱
	13	骨	—	不明	剣先	四角	6.1	1.2	6.3	下之御庭	表土攪乱
	14	骨	—	不明	楕円／有孔	楕円／四角	4.1	0.8	2.1	下之御庭	攪乱
	15	プラスチック	4列	楕円	不明	扁平／四角	5.4	1.2	2.6	下之御庭	攪乱
	16	プラスチック	3列	楕円	不明	扁平／四角	5.8	1.15	2.6	不明	
	17	プラスチック	—	不明	楕円／有孔	扁平／楕円	7.5	1	2.5	試掘	—
	18	プラスチック	—	不明	剣先／有孔	四角	9.3	1.2	5.4	下之御庭	表土攪乱



第94図　歯ブラシ

第38節　石碑

第95図１は1801年に立てられた『琉球国新建国学碑』の一部で「…門之北龍潭…／…續之飾而輪奐…」の部分である。本来は国学（現在の県立芸大）にあったと考えられるが、国学移転の際に移されたのでは、とのことであった。木曳門出土。

同図２は「…唐(？)□…」及び判読不明の文字。どの石碑に当たるか確認できなかった。用物座L5-124出土。

同図３～ｂは高欄羽目板で仮名を主体に記されている。３は羽目板の上部で、「いちやち…／此御三し…／御いち□(やカ)…／おかて…／か□(らカ)…」の文字が記されている。木曳門出土。４は羽目板左下の部分でわずかであるが「土」もしくは「王」の旁を持つ文字が記されていると思われる。木曳門L4-133出土。５は羽目板下部で「…こゑ大きミ／…あそひ／…□御ちやう／…□おしろひろ／…□□□(ちカ)へ(いカ)ちしらん」の文字。用物座L3-124出土。６も羽目板下部で、「…□□ひ／…からめ□(かカ)ちやれは／…□あひたハ日々に／…しよおへか」の文字。瑞泉門出土。

３～５は同一個体もしくは一連の羽目板と思われる。うち３・５・６は書体が類似しており古手の書体に属するとのことであった。ただ、今回出土した内容の金石文は現時点では確認に至っておらず、城内のどの施設に属したものか不明である。未報告分に正殿の龍柱片があることから、造成のため本来所在した場所から動いたと考えられよう。また、北殿跡の調査で出土した羽目板は城外に所在する龍淵橋のもので、戦前、北殿にあった沖縄郷土博物館の収蔵品とされている。今回の羽目板片も同様なものであろうか。

第39節　骨製品・貝製品・土製品

骨製品は鏃・棒状製品・札状製品・筒状製品・ボタン状製品の５種16点が得られた。ボタン状製品の一点を除き総て破損品であった。

鏃は20～25に示すものを含む６点が得られ、総て平形、有茎の鏃である。平面形はいずれも身部が菱形で基部に向かい一旦搾まった後、更に広がり基部端縁で水平になる。鏑は鏃の中心線を境に両側に付くもの20・21・23・24と、身部中央に平坦な面を持つもの22がある。茎部を円推状に尖らせるもの24・25、と基部側は四角柱状を呈し、先端は尖るものの２タイプがある。26は破損のため詳細は不明であるが、粗加工を施したのみの未製品と考えられる。表面にススが付着している。素材はジュゴンの可能性が高い。

27～29に示すものは札状の製品である。27は断面形がかまぼこ状をなす長方形の製品で、端部に径1.5mmの小孔を穿っている。片方の端部は破損しており全形を窺うことができない。詳細は不明である。28は扁平な長方形をなし、中央に鋲のような金具が見られる。29は残る２辺が平行しない扁平なものであるが、破損が著しい為詳細は不明。30はハブラシの柄部分が二つに分かれたものと思われる。

19は四角柱の棒状を呈するものである。かなり丁寧に研磨された製品であるが両端が破損していることから詳細は不明である。31も19と同様な製品と考えられる。

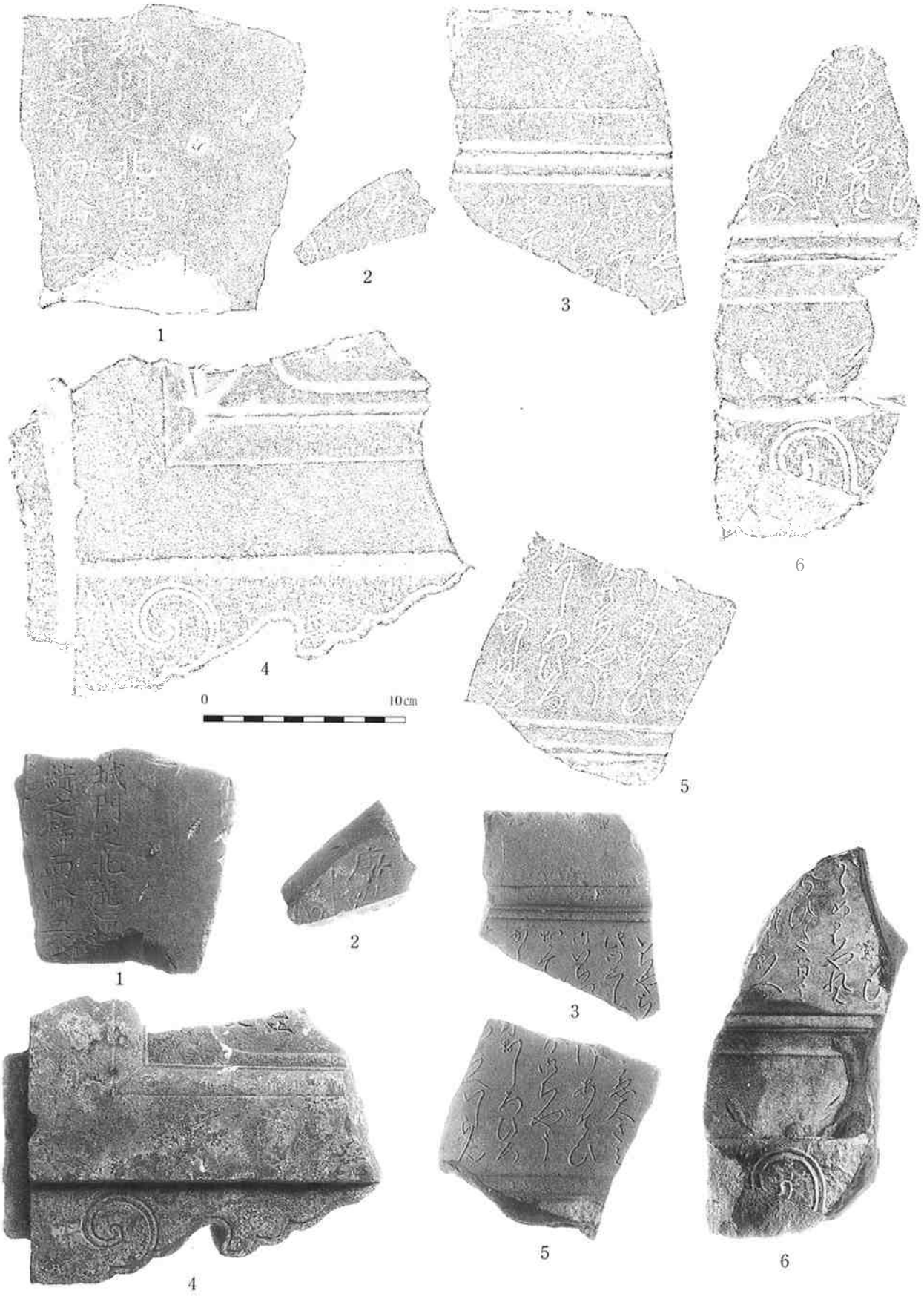
33は断面形が環状をなす、先細りの筒状のものと思われる。筒の縁部が有段になり、中央から先端に向かい三条の凹帯を廻らしている。先端は丸みを持つ。32は断面形が三角に近い楕円形を示す筒状製品と思われる。縁部は有段になっている。

45はボタン状の製品である。円形の偏平状をなし、中央部とその周辺に計５個の１～1.6mmの粗孔を穿っている。

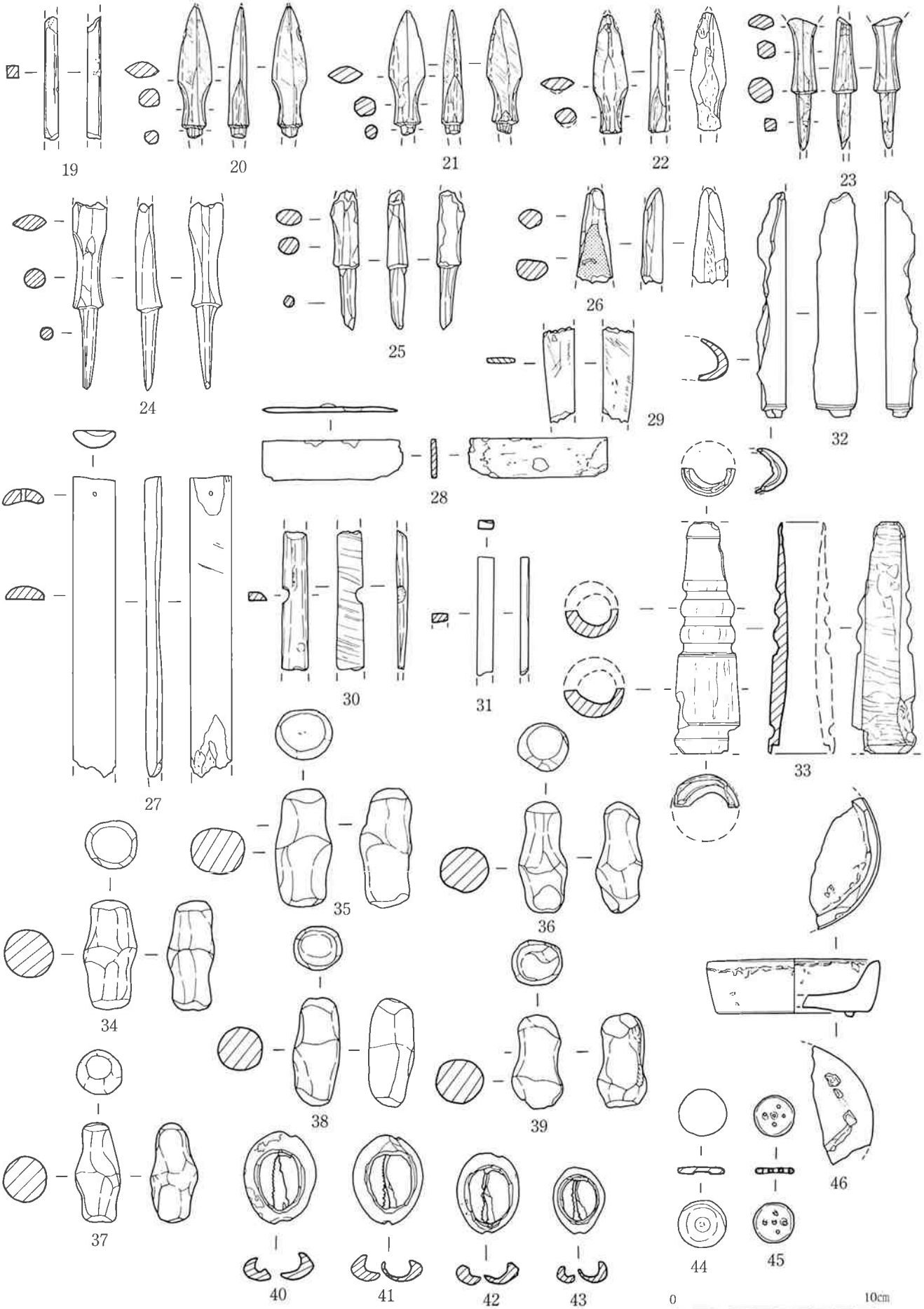
土製品は34～39に示す6点を含む20点が得られた。いずれも中心部がやや膨らむ円柱状の製品で手練りにより作られている。用途などまだまだ不明な点の多いものである。

貝製品は40～43・44を含む５点得られた。40～43に示したものは小形のタカラガイ科の貝殻の背面を打ち欠き、粗孔を穿ったもので、従来、民族事例などから錘と考えられているものである。４点得られた。
44は偏平な円形のボタン状製品である。一面に丸い凹面が見られる。

参考文献
安里　嗣淳他　「勝連城跡—南貝塚および二の丸北地点の発掘調査—」沖縄県勝連町教育委員会1984



第95図　図版３　石碑・高欄羽目板



第96図　骨製品・貝製品・土製品

第36表　骨製品（鏃）法量一覧

（単位：cm・g）

図・図版番号		器種	完／破	身部			くびれ		茎部			重さ	全体の長さ	出土地
				長さ	厚さ	幅	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ			
第96図図版94	20	鏃	破	4.37	0.59	1.2	0.76	0.64	0.34	0.55	0.53	2.6	4.7	漏刻門
	21	鏃	破	4.1	0.56	1.2	0.76	0.63	0.28	0.48	0.9	2.3	4.41	漏刻門
	22	鏃	破	2.6	0.5	0.99	0.69	0.61	2	0.5→0.3	0.87	2.2	4.7	漏刻門
	23	鏃	破	4.2	裏損	1.2	?0.8	0.6	—	—	—	2.4	4.2	用物座
	24	鏃	破	3.7	0.6	1.2	0.8	0.7	3	0.5→0.2	0.9	3.9	6.7	漏刻門
	25	鏃	破	2.8	0.6	—	0.7	0.6	2.2	0.5→0.3	0.8	2.1	5	用物座
	26	鏃未製品	破	3.4	0.77	1.2	—	—	—	—	—	2.5	3.4	木曳門

第37表　骨製品法量一覧

（単位：cm・g）

図・図版番号		器種	完／破	長さ	幅	厚	重さ	出土地
第96図図版94	27	札状製品	破	10.77	1.47	0.6	11.8	木曳門
	285	札状製品	破	4.94	1.42	0.21	2.1	木曳門
	29	札状製品	破	3.4	1.1	0.2	—	下之御庭
	30	札状製品	破	4.97	0.85	0.31	1.7	下之御庭
	31	棒状製品	破	4.27	0.58	—	1.2	廣福門
	19	棒状製品	破	4.33	0.47	0.48	1.7	下之御庭
	32	筒状製品	破	8.03	1.44	0.29	6.5	漏刻門
	33	筒状製品	破	8.23	2.24	1.03	10.7	下之御庭
	45	ボタン状製品	完	1.39	1.37	0.21	0.5	木曳門

第38表　土製品法量一覧

（単位：mm・g）

図・図版番号		完/破	外径		厚さ		重さ	出土地
			縦(a)	横(b)	最大(c)	最小(d)		
第96図図版94	34	完	3.9	1.8	1.5	1.4	10	木曳門
	35	完	4.2	2.0	1.7	1.5	15	木曳門
	36	3/4	4.0	1.7	1.3	1.2	10	木曳門
	37	完	3.6	1.6	1.3	1.2	10	木曳門
	38	完	3.8	1.7	1.5	1.4	10	木曳門
	39	1/2	3.3	1.9	1.5	—	10	木曳門

凡例：　外径　縦（a）＝長さ
　　横（b）＝真ん中の膨らみの幅

　　厚さ　最大（c）＝真ん中の膨らみの両側の最大
　　最小（d）＝真ん中の膨らみの両側の最小

第39表　貝製品法量一覧

（単位：cm・g）

図・図版番号		貝種	器種	縦長	横長	厚さ	重さ	孔径		出土地
								縦	横	
第96図図版94	40	タカラガイ科	貝錘	3.3	2.5	1.0	7.3	2.1	1.6	用物座
	41	タカラガイ科	貝錘	3.2	2.4	0.9	7.2	1.9	1.7	試掘
	42	タカラガイ科	貝錘	2.9	2.2	0.9	4.8	2.2	1.7	木曳門
	43	タカラガイ科	貝錘	2.3	1.8	0.2	2.8	1.6	1.4	木曳門
	44	不明	ボタン状	1.7	1.7	0.3	1.5	—	—	木曳門

第40節　貝類

本遺跡の貝類は巻貝26科73種、二枚貝15科36種の計41科109種が検出され、個体数としては巻貝3243個、二枚貝1288個、が得られている。

固体数の算出方法は巻貝・一枚貝は完形、殻頂（殻頂を残すもの）、破片（殻頂を残していない破片）に分け集計し、（完形＋殻長）を最小個体数とした。二枚貝は左右の殻に分け集計し、左右の内、（完形＋殻頂）の値の多い方を最小個体数とした。

貝類生息地

Ⅰ：外洋・サンゴ礁域
- 0：潮上帯
  - a：岩盤
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底
- 1：潮間帯中・下部
  - a：岩盤
  - b：転石
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底
- 2：亜潮間上縁部
  - a：岩盤
  - b：転石
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底
- 3：干瀬
  - a：岩盤
- 4：礁斜面及び下部
  - a：岩盤
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底

Ⅱ：内湾・転石地域
- 1：潮間帯中・下部
  - a：岩盤
  - b：転石
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底

Ⅲ：河口干潟・マングローブ域
- 0：潮上帯
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底
  - d：マングローブ植物上
- 1：潮間帯中・下部
  - c：岩礫底・砂底・砂泥底
  - e：淡水に流入する礫底

Ⅳ：淡水域

Ⅴ：陸域

参考文献

久保弘文・黒住耐二　「生態／検索図鑑　沖縄の海の貝・陸の貝」1995年　沖縄出版

島袋洋・他　「平敷屋トウバル遺跡―ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告―」1996年　沖縄県教育委員会

ヤコウガイ

ヤコウガイは殻（474個）と蓋（412個）がある。地区別には木曳門が他の地区に比べて多く、下之御庭は蓋が多く、用物座は殻・蓋とも前二者に次いで出土量が多い。各地区の機能を示唆する資料と思われる。殻は412個出土したが、完形はほとんどなく、細片が多く、殻頂と殻口がおおい。Ⅱb（殻頂～次体層）の中には2㎝前後の穿孔があり、採肉方法を想定できる資料である。また、Ⅰa（殻頂から殻口までのもの）は図版95に示すように、御細工所跡・湧田古窯跡で同様な割れ方が共通していることから、食用よりは殻自体を使用するものであろうと考える。第42表に蓋の残り方を分け集計した。これによると残率は25.3%であるが、特に多い割れ方は細片(162個)を除くと2分の1（A・D）で厚い部分の残りである。

第41節　脊椎動物遺体

本地区で出土した動物遺存体は、脊椎動物門・Ⅰ軟骨魚綱2目1科、Ⅱ軟骨魚綱4目10科9種、Ⅲ爬虫綱1科、Ⅳ鳥類綱1目1科1種、Ⅴ哺乳綱、6目8科8種が検出されている。以下に各々の遺存体の種名リストを示しその概要を簡述する。

第40表　貝類出土状況（巻貝）

巻号	科名	貝種名	生息地	下之御庭 L・M・K 完形	下之御庭 L・M・K 殻頂	下之御庭 L・M・K 破片	下之御庭 試掘 完形	下之御庭 試掘 殻頂	下之御庭 不明 完形	下之御庭 不明 殻頂	下之御庭 不明 破片	用物座 L・M・K 完形	用物座 L・M・K 殻頂	用物座 L・M・K 破片	用物座 不明 破片	瑞泉門 完形	瑞泉門 殻頂	瑞泉門 破片	漏刻門 M 殻頂	漏刻門 M 破片	漏刻門 不明 完形	漏刻門 不明 殻頂	漏刻門 不明 破片	廣福門 M・L 完形	廣福門 M・L 殻頂	廣福門 M・L 破片	木曳門 L・M・K 完形	木曳門 L・M・K 殻頂	木曳門 L・M・K 破片	木曳門 不明 完形	木曳門 不明 殻頂	木曳門 不明 破片	不明 完形	不明 殻頂	不明 破片	総計 完形	総計 殻頂	総計 破片
1	ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ												1																						0	0	1
2	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ										1															1									2	0	0
3	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a			1			2							3		3			2		1				2	5	4	1		2			1	10	5	11
4		ギンタカハマ	Ⅰ-4-a							1																	5	9	1		2	1		1		5	13	2
5		サラサバティ	Ⅰ-4-a		1				15	11	2	2	2	5						2	1	1		1	3	2	39	26	54	2	5	3	4	5	6	64	54	74
6	リュウテン科	オキナワイシダタミ																														2				0	0	2
7		チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	5	4		5		44	62	3	6	8	6				1		1				2	5	1	155	60	24	12	8	4	6	7	4	235	154	44
8		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	7					41	2		4				2								3			69	6	2	4	1		4	1		134	10	2
9		カンギク	Ⅱ-1-b	1					1									2			7	1					57	18	11	500	498	570		1	1	566	518	584
10		カンギクの蓋																									2			289	4	2				291	4	2
11	アマオブネ科	オオマルアマオブネ																									1									1	0	0
12		アマオブネ	Ⅰ-1-b						1																		2									3	0	0
13		コシタカアマガイ																									1									1	0	0
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c							9		1	3			3		5			2	2	1				17	8	5		2			1		23	25	6
15		カヤノミカニモリ																									9		41	375	185	149				384	185	190
16		ウミニナカニモリ														1		1																		1	0	1
17		クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a						8	3		1			1						4	1					6	12	8							19	16	9
18	ウミニナ科	イトカケヘナタリ																													1					0	1	0
19		カワアイ																								1	2	1	4							2	1	5
20		センニンガイ	Ⅲ-1-d							2																	2									2	2	0
21		ウミニナ	Ⅲ-n																	1							1	3	17	8	28	31				9	31	49
22	ツデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-e	1					3				1	1													3									7	1	1
23		マガキガイ	Ⅰ-2-e	5	4	1		2	22	46		2	9	2		31	2		1					1	4		43	65	7	8	4	6	2	4	1	114	141	17
24		ネジマガキ	Ⅰ-2-e									0	1												1		1		1					2		1	4	1
25		クモガイ	Ⅰ-2-e							2		1		1	1												3	1	1						6	4	3	8
26		スイジガイ																																	1	0	0	1
27	タカラガイ科	ナツメダカラモドキ							1																											1	0	0
28		ヤクジマダカラ	Ⅰ-2-a	1																							1		1							2	0	1
29		ハナマルユキ	Ⅰ-3-a	1					8	3														2			18	1	1	1	1	1	1			31	5	2
30		キイロダカラ																						1			3									4	0	0
31		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	4			1		6			1												2			3					2	1			18	0	2
32		ヒメホシダカラ																																		0	0	0
33		ホシキヌタ	Ⅰ-2-a	1																							1	3								2	3	0
34		タカラガイ不明																														1				0	0	1
35	タマガイ科	シロヘソアキトミガイ																												1						1	0	0
36		ホウシュノクマガイ																												1						1	0	0
37	フジツガイ科	ツミカドボラ	Ⅰ-2-a										1														1	1	1	1						2	2	1
38		シオボラ																			1															1	0	0
39		ホラガイ																							1	1						1				0	1	2
40	オキニシ科	オキニシ																									1									1	0	0
41	アクキガイ科	ガンセキボラ																											1				1			1	0	1
42		コゲレイシガイダマシ																												2						2	0	0
43		ムラサキイガレイシ																									1									1	0	0
44		ツノレイシ	Ⅰ-3-a						2																		4		1	1						7	0	3
45		シラクモガイ	Ⅰ-3-a				1		1							1								1			6			2			1			13	0	0
46	エゾバイ科	シマベッコウバイ																									4	1	2	22		4				26	1	6
47	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a			1			13	4		4		1													24	7	3	2		1	2	2	1	45	13	7
48		ナガイトマキボラ																									3	1								3	1	0
49		リュウキュウツノマタ																	1																	0	1	0
50		チトセボラ																									1									1	0	0
51	フデガイ科	キバフデ																									1									1	0	0
52	ショクコウラ科	ショクコウラ																											2							0	0	2
53	オニコブシ科	オニコブシ																																		0	0	0
54		コオニコブシ	Ⅰ-3-a	1												3											7	1	5							11	1	5
55		アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c										1																1					1		0	2	1
56		クロフモドキ																									1		1							1	0	1
57		ミカドミナシガイ		1																							1									2	0	0
58		マダライモ	Ⅰ-1-a						3																		4		1	1						8	0	1
59		ジュズカケサヤガタイモ																									1	1								1	1	0
60		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a						1																											1	0	0
61	イモガイ科	ゴマフイモ																									1									1	0	0
62		ベニイモガイ																									1									1	0	0
63		アカシマミナシガイ																																		0	0	0
64		サラサミナシガイモドキ																									3		1	1						4	0	1
65		ヤナギシボリイモ																									1				1					1	1	0
66		キヌカツギ														3																	1			4	0	0
67		アジロイモガイ																									1									1	0	0
68		イモガイ科不明												1														1	3			3			1	0	1	8
69	タケノコガイ科	ベニタケガイ																										1	1							0	1	1
70	ナツメガイ科	ナツメガイ																									1									1	0	0
71	巻貝不明																												3							0	0	3
72	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	V-8						3	2						15		7						1			21	7	18	85	1	7			1	125	10	33
73	キセルガイ科	ツヤキセルガイ																										1	1		2	2				0	3	3
74	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ																														1				0	0	1
75	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ																									1	1	1			2				1	1	3
76		アマノヤマタカマイマイ																												1						1	0	0
77	オナジマイマイ科	バンダナマイマイ																												2	1					2	1	0
78		オキナワウスカワマイマイ																												1						1	0	0
79	陸産貝不明																												1							0	0	1
80	ナガウニ科	ハイブウニ				2																														0	0	2
小計				28	9	5	7	2	175	147	5	23	26	18	2	62	2	19	2	4	17	5	2	14	14	5	537	241	229	1323	744	795	23	25	23	2209	1217	1107

第41表　貝類出土状況　（二枚貝）

| 番号 | 科名 | 貝種名 | 生息地 | 下之御庭 L・K 完形 L | 下之御庭 L・K 完形 R | 下之御庭 L・K 殻頂 L | 下之御庭 L・K 殻頂 R | 下之御庭 L・K 破片 | 下之御庭 表土撹乱 殻頂 L | 下之御庭 表土撹乱 殻頂 R | 下之御庭 表土撹乱 破片 | 川物座 K・L 完形 L | 川物座 K・L 完形 R | 川物座 K・L 殻頂 L | 川物座 K・L 殻頂 R | 川物座 K・L 破片 | 瑞泉門 完形 L | 瑞泉門 完形 R | 瑞泉門 破片 | 漏刻門 M 完形 L | 漏刻門 M 完形 R | 漏刻門 M 破片 | 漏刻門 上在小学校石階段直下第3層 完形 L | 漏刻門 上在小学校石階段直下第3層 完形 R | 漏刻門 上在小学校石階段直下第3層 殻頂 L | 漏刻門 上在小学校石階段直下第3層 殻頂 R | 漏刻門 上在小学校石階段直下第3層 破片 | 漏刻門 不明 完形 R | 漏刻門 不明 破片 | 広福門 M・L 完形 L | 広福門 M・L 完形 R | 広福門 M・L 殻頂 L | 広福門 M・L 殻頂 R | 広福門 M・L 破片 | 広福門 不明 完形 R | 広福門 不明 殻頂 L | 広福門 不明 殻頂 R | 広福門 不明 破片 | 木曳門 L・M 完形 L | 木曳門 L・M 完形 R | 木曳門 L・M 殻頂 L | 木曳門 L・M 殻頂 R | 木曳門 L・M 破片 | 木曳門 撹乱・不明 完形 L | 木曳門 撹乱・不明 完形 R | 木曳門 撹乱・不明 殻頂 L | 木曳門 撹乱・不明 殻頂 R | 木曳門 撹乱・不明 破片 | 不明 完形 R | 不明 殻頂 L | 不明 殻頂 R | 不明 破片 | 総計 完形 L | 総計 完形 R | 総計 殻頂 L | 総計 殻頂 R | 総計 破片 |
|---|---|---

第42表　ヤコウガイ　蓋

	完形	1/2					1/3					1/4							1/8					
			A	A·D	B·C	C·D	A·B	A·D	C	C·D	D	A	A·B	A·D	B	B·C	C	D	A	A·D	B	B·C	C	D
下之御庭	40			9	2	3		1		1	1		1		2	1	1	1		1			1	
用物座	22	1	1	1	1	1			1		1					1				2				
瑞泉門																								
漏刻門																					1			
廣福門	6			1						1													1	
木曳門	41	1		9	3	2	1	1	2	2	3	2	1	1	3	2	3	4	1			1		1
試掘	4			3																				
不明	7	2	1		1	1	1							1	2			1			1			
合計	120	4	2	23	7	7	2	2	3	4	5	2	2	2	7	4	4	6	1	3	2	1	2	1

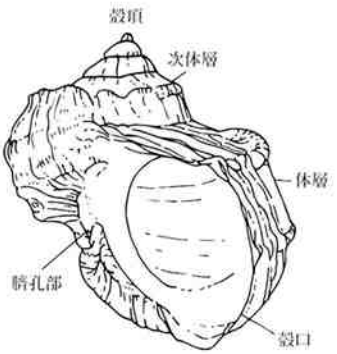
	2/3					3/4		3/8			4/5		9/10	破片	合計
		A·D	C	C·D	D		A·D	A·D	B·C	D		A·D			
下之御庭	3		1	5		6	1	2	1		7		60	1	152
用物座	1					1	1	1				1	33	4	74
瑞泉門													1		1
漏刻門													1		1
廣福門						1					2		6	2	20
木曳門	1	6		1	1	9	3				10		49	12	176
試掘													2		9
不明		1				5		1		1	2		10	2	40
合計	5	7	1	6	1	22	5	4	1	1	21	1	162	21	474

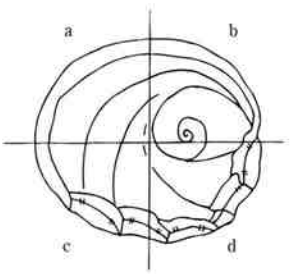
第43表　ヤコウガイ

	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ	合計
	a	b	a	b	c	a	b	c		a	b	a	b		
下之御庭	1		2							1			6	1	11
用物座			10	2		3	2	1	1	3			39		61
瑞泉門													1	6	7
漏刻門			3			2				2			5		12
廣福門			2			1				1			5		9
木曳門	5		42	6	8	21	2	1	3	21	2	4	85	1	201
試掘	1		13				3			2			23		42
不明		1	16	1	6	9	1	1	2	7			23	2	69
合計	7	1	88	9	14	36	8	3	6	37	2	4	187	10	412

第44表　ヤコウガイ　残留部位

Ⅰ－a	殻頂
Ⅰ－b	殻頂～体層、臍残
Ⅱ－a	殻頂～次体層
Ⅱ－b	殻頂～次体層、体層残
Ⅱ－c	殻頂～次体層、臍残
Ⅳ	次体層
Ⅴ－a	結節
Ⅴ－b	結節～体層
Ⅶ	細片・殻口片





第97図　ヤコウガイの各部名称

第45表　イノシシ出土表

部位	出土地点	下之段B区			旧川内A			旧川内			高原B[1]			堀之内[2]			本段[3]			武橋			石仏			原丸			不　明			合　計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	頭蓋骨																		1													0	0	1
	眼窩以上																1															1	0	0
	側頭骨頬骨突起									1			3				1	2											1			5	3	0
	側頭頭骨後頭部										2							1														0	1	2
下顎骨	破片			1							1								2											2	0	0	6
肩甲骨	関節（完存）													1																	0	0	1
	関節（破片）																		4												0	0	4
	肩甲																		2												0	0	2
	肩甲（棘突起）			1															2												0	0	3
	関節						1												5												0	0	6
	軸部																		2												0	0	2
	完存破片						1				1								7											1	0	0	10
肋　骨	破片			1															3												0	0	4
上腕骨	骨体					1													1												1	1	0
	骨体—遠位端												1																		0	1	0
	骨体—遠位部	1																	1												1	0	1
	遠位部												1				3	1			2										3	4	0
	遠位端				1												2														3	0	0
	破片	1			2													2	1												3	2	1
橈　骨	近位													1	3		1	3					1			1	1		3	8	0
	遠位部													1				1												1	1	0
	遠位部—骨体																	1												0	1	0
	遠位部—遠位部						1	3			1			2	1	3	3	5	2	1										6	8	8
	骨体		2				1								2		1	1													1	7	0
	骨体—遠位部	2												1	1		1				1										4	2	0
	骨体—遠位端	3	2	1	1									1	2	1	5	4								1					11	8	2
	遠位部	1			1									2			2	1													6	1	0
	遠位部（破片）	1	2																												1	2	0
	遠位端																	1													0	1	0
	遠位骨端のみ			1										1	2		2	1													3	3	1
尺　骨	完存		2												1		2	1								1					2	5	0
	近位端	1						1						1			1														4	0	0
	遠位部	3													1		4	1													7	2	0
	近位端—骨体		1					1									2														3	1	0
	近位端—遠位部	3	3		3	2		3	1		2	2						1													9	8	0
	骨体																2	1													2	1	0
	骨体（破）																1														1	0	0
	骨体—遠位部										1																				1	0	0
	骨体—遠位端	1	1							1					2			1													1	5	0
	遠位部														1	2															0	1	2
尺　骨	完存										1																				1	0	0
	近位端		2								1						2	2													3	4	0
	近位部		1								0						2	1													2	2	0
	近位端—骨体										1	2																			1	2	0
	遠位部—骨体				1						1						8	5													13	5	0
	骨体																1														1	0	0
	骨体—遠位部																1														1	0	0
	骨体—遠位端				1													1													1	1	0
	遠位部											1																			0	1	0
手根骨	破片																		1												0	0	1
中手骨	近位端—遠位部　Ⅲ		1																												0	1	0
	近位端—骨体　Ⅲ	1									1																				2	0	0
	近位端—遠位端　Ⅳ	1										2																			1	3	0
	遠位部—遠位部　Ⅳ											1																			0	1	0
	近位端—骨体　Ⅳ	1										2																			1	2	0
	完存　Ⅴ											1																			0	1	0
	近位端—遠位部　Ⅴ										1	1																			1	1	1
	骨体—遠位部																		1												0	0	1
	破片		1																												0	1	0
寛　骨	遠位端—遠位部　Ⅴ		2			2					2	2					1	2													5	8	0
	上前腸																	2													0	2	0
	坐骨	1	1		1		1			1							3	1													6	3	1
大腿骨	遠位部—遠位部	5			1	2			2	3		3	3	1																	17	6	1
	骨体		2						1																						1	2	0
	骨体—遠位部				2							1	1																		3	1	0
	遠位部		1																												0	1	0
	遠位端																						1								1	0	0
	遠位骨端のみ						1												1												0	0	2
脛骨骨	破片						1																								0	0	1
足　根	完存				2	2			1				3							1											4	5	0
	近位部	1										2					1														4	0	0
	近位端																	1													0	1	0
	近位部—遠位端		2		1	2											2														3	4	0
	近位部—遠位部																1														1	0	0
	近位部—骨体																1														1	0	0
	近位端—骨体	1				1								2	3																3	4	0
	骨体—遠位端		1											2			1	2						1							4	3	0
	骨体—遠位部	1	3		3	3								1	3	2	9	10			1								1	14	20	3
	骨体													1														1		1	1	0
	遠位端		1			1											2														2	2	0
	遠位部																		1												0	0	1
膝　骨	破片	1	1		1	1											1	1	1												3	3	1
脛　骨	完存	2	1														1	3		1											4	4	0
	近位部—遠位端																		1												0	0	1
	近位部—遠位部	1									1										1										3	0	0
	近位部—骨体		1																												0	1	0
	近位端—骨体																												1		0	1	0
	骨体								1								3	1													4	1	0
中手骨	遠位部																1														1	0	0
	近位端—遠位部										1																				1	0	0
	破片																		1												0	0	1
	遠位端—遠位部　Ⅱ					1							1				2														3	2	0
	完存　Ⅲ				1	1											1	1													2	2	0
	近位端—遠位部　Ⅲ				1	1							1				1														2	2	0
	遠位端　Ⅲ									1								2													0	3	0
	遠位部—骨体　Ⅲ																2	1													2	1	0
	完存　Ⅳ																1	2													1	2	0
	近位端—骨体　Ⅳ													2	1																2	1	0
	遠位部—遠位部　Ⅳ						1								1		1														1	2	0
	遠位端—遠位部　Ⅳ				1												1														2	0	0
	遠位端　Ⅳ																1														1	0	0
	完存　Ⅴ																	1													0	1	0
中足骨	近位端	1													1		2														3	1	0
	近位端—遠位部					1																									0	1	0
	骨体—遠位端																1		1												1	0	1
	遠位部																	1													0	1	0
	近位端—骨体　Ⅱ									1																					0	1	0
	近位端—遠位部　Ⅱ				1																										1	0	0
	遠位部—遠位端　Ⅱ																1														1	0	0
	完存　Ⅲ																	1													0	1	0
	近位端—骨体　Ⅲ													1																	1	0	0
	遠位端—遠位部　Ⅲ				1												2	3													3	3	0
	完存　Ⅳ																	1													0	1	0
	遠位端—遠位部　Ⅳ	1	1						2			1	2		2																6	3	0
	近位端—骨体　Ⅳ					1						1					1														2	1	0
	完存　Ⅴ													1																	1	0	0
	遠位端—遠位部　Ⅴ					1												2													0	3	0
中手・中足骨	近位端—骨体　Ⅴ																		1												0	0	1
	近位端　Ⅱ・Ⅴ？																		5												0	0	5
中足骨	骨体						1												2												0	0	3
	遠位端						1																								0	0	1
趾　骨				1						1																					0	0	2
指　骨	基節骨　完存					2	1		1					1	1		1	2	1										1		3	6	2
	基節骨　遠位部																1														1	0	0
	中節骨　完存																	3													0	3	0
	末節骨																		2												0	0	2
合　計		35	39	6	27	26	11	1	11	8	5	49	54	10	96	82	51	3	4	2	1	1	1	4	4	1	329	316	87					

第46表　ウマ出土表

部位＼出土地		下之御庭		用物座		廣福門			木曳門			表採		合　計		
		左	不明	右	左	右	左	不明	右	左	不明	左	不明	右	左	不明
肩甲骨	骨体									1				0	1	0
橈骨	近位端			1										1	0	0
	遠位部						1							0	1	0
中手骨	破片							1						0	0	1
寛骨	臼部						1							0	1	0
膝蓋骨	破片		1											0	0	1
脛骨	遠位端(破片)	1												0	1	0
指骨	基節骨			1	2	1	1					1		2	4	0
	中節骨									1				0	1	0
合　計		1	1	2	2	1	3	1	0	2	0	1	0	3	9	2

第47表　ヤギ出土表

部位＼出土地		下之御庭		用物座		漏刻門		廣福門			木曳門		不明	合　計		
		左	不明	左	不明	右	不明	右	左	不明	右	左	右	右	左	不明
上腕骨	遠位端							1	1					1	1	0
	破片												1	1	0	0
橈骨	近位端～骨体			2							1	1		1	3	0
中手骨			1		3		2			1				0	0	7
大腿骨	近位端～骨体										1			1	0	0
	遠位端											1		0	1	0
中足骨		2												0	2	0
合　計		2	1	2	3	0	2	1	1	1	2	2	1	4	7	7

第48表　ウシorウマ出土表

部位＼出土地		下之御庭		用物座		漏刻門		廣福門			木曳門			試掘		表採		撹乱	不明	合　計		
		左	不明	右	不明	右	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	不明	左	不明	右	不明	右	左	不明
椎体	破片									3			3							0	0	6
肋骨	近位部	5		3		1		4	4		4	2								12	11	0
	破片		60		33		15			56			137		1		5	1	2	1	0	309
合　計		5	60	3	33	1	15	4	4	59	4	2	140	0	1	0	5	1	2	13	11	315

第49表　イノシシorブタ出土表

部位＼出土地		下之御庭			用物座			漏刻門		廣福門			木曳門			試掘		表採		合　計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	左	不明	右	左	不明
肋骨	近位部	2	1		3	1		1		1	1	3	2	4			1	1		9	9	3
	破片			33			42		7			26	1		123		4		4	1	4	235
橈骨	遠位部				1															1	0	0
脛骨	遠位部								1											0	0	1
合　計		2	1	33	4	1	42	1	8	1	1	29	3	4	123	0	5	1	4	11	13	239

第50表　カメ出土表

部位＼出土地	下之御庭		用物座		漏刻門		廣福門	木曳門		試掘	表採	合　計		
	左	不明	右	不明	右	不明	不明	左	不明	不明	不明	右	左	不明
上腕骨			1									1	0	0
尺骨	1					1		1				0	2	1
指骨		1				4	1				1	0	0	7
腹甲板		1		1			1		4		1	0	0	8
腹甲板突起							1		1			0	0	2
緑甲板				10		1			2	1		0	0	14
背甲板		2				6	13		14		5	0	0	40
剣状突起					1							1	0	0
合　計	1	4	1	11	1	12	16	1	21	1	7	2	2	72

第51表　ネコ出土表

部位＼出土地		下之御庭	廣福門	木曳門		試掘	合計	
		左	左	右	左	右	右	左
上腕骨	骨体～遠位部		2		1		0	3
	骨体～遠位端				1		0	1
脛骨	遠位端			1			1	0
	近位端～骨体	1					0	1
	近位部～遠位部					1	1	0
合計		1	2	1	2	1	2	5

第52表　ネズミ出土表

下顎骨		右	1	木曳門
大腿骨	遠位端	右	1	木曳門

第53表　イヌ出土表

部位＼出土地		廣福門	木曳門		不明	合計	
		不明	左	不明	不明	左	不明
尺骨	近位端	1				0	1
中手骨	近位端　Ⅲ		3			3	0
	完存　Ⅳ		1			1	0
中手・中足骨	遠位端			1		0	1
基節骨	完存				1	0	1
合計		1	4	1	1	4	3

第54表　ジュゴン出土表

部位＼出土地		下之御庭	用物座	木曳門		不明	合計	
		不明	不明	右	不明	不明	右	不明
椎体	胸椎				1		0	1
	腰椎				1		0	1
	棘突起		1		4		0	5
肋骨	破片	1	2		3	1	0	7
大腿骨	遠位部			1			1	0
破片		2	1		1		0	4
合計		3	4	1	10	1	1	18

第55表　イルカ・クジラ出土表

椎体	左右不明	1	用物座

第56表　ウシ出土表

部位＼出土地		下之御庭			用物座			漏刻門			廣福門			木曳門			試掘		表採		不明			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨	角												1			4								0	0	5
下顎骨															1									0	1	0
脊椎骨	軸椎															1								0	0	1
	頚椎						1			2						2								0	0	5
	胸椎									1			2											0	0	3
	腰椎			1			2			1			2			1								0	0	7
	仙椎												1											0	0	1
	尾椎															2								0	0	2
	突起破片						1																	0	0	1
	破片									3														0	0	3
肩甲骨	骨体								1		2			1	1									3	2	0
	遠位端								1			2		3	1									3	4	0
上腕骨	完形	1																						1	0	0
	近位部														1									0	1	0
	骨体								1						1									0	2	0
	遠位部							1				1												1	1	0
	遠位部（破片）																					1		0	1	0
	遠位端													3	4	1						1		3	5	1
	破片			2					1															0	1	2
橈骨	近位端			1		2		1	1			1		2	2									3	6	1
	骨体						1																	0	0	1
	遠位端													2										2	0	0
尺骨	完存														1									0	1	0
	近位部							1			1				1									2	1	0
	骨体							1			1										1			3	0	0
手根骨	第２＋３手根骨														1									0	1	0
中手骨	近位端～骨体													1										1	0	0
	近位端～遠位部														1									0	1	0
	近位端～骨体								1															0	1	0
	骨体												1											0	0	1
	遠位端															1								0	0	1
寛骨	臼部							1	1				1	1	1									2	2	1
	腸骨				1																			1	0	0
	破片									1					1									0	1	1
大腿骨	近位部	1																						1	0	0
	近位端						1																	0	0	1
	骨体																		2				1	0	2	1
	遠位部				1										1									1	1	0
	遠位端								1			1		1	2					1				1	4	1
	破片															1								0	0	1
膝蓋骨	破片												1	1	1									1	1	1
脛骨	近位部		1											1										1	1	0
	近位端						1																	0	0	1
	骨体～遠位端				1									1	1									2	1	0
	骨体			1				1	1			2		1		1								2	3	2
	遠位端								1					1										1	1	0
	遠位端（破片）			1														1						0	1	1
	遠位部							1																1	0	0
	破片															1								0	0	1
距骨	完存													1	1									1	1	0
踵骨	完存		2			1		1						2										3	3	0
	近位部～骨体							1																1	0	0
中足骨	近位端							1	1		1				1									2	2	0
	近位部								1															0	1	0
	骨体						1									2								0	0	3
	近位部～骨体							1																1	0	0
	骨体～遠位部											1												0	1	0
	遠位端（破片）												1			1								0	0	2
足根骨	第４中心足根骨		1																					0	1	0
中手・中足骨（破片）				1												2								0	0	3
腓骨												1												0	1	0
指骨	基節骨（完存）		3			4		4				4		8	4		1		1					13	16	0
	基節骨（近位端）													1										1	0	0
	基節骨（骨体～遠位部）													1										1	0	0
	中節骨	1	2		1							4		5	3									7	9	0
	末節骨				1			1	2			2		3	2									5	6	0
合計		3	9	7	5	7	8	16	14	8	5	19	10	40	33	20	1	1	3	1	1	2	1	71	88	55

第57表　サカナ出土表

部位 ＼ 出土地					下之御庭		用物座		端裏門	漏刻門		廣福門		木曳門		試掘		表採		攪乱		不明		合計	
サメ目	科不明	サメ	脊椎		3					1		8		4										16	
エイ目	トビエイ科	種不明	歯板											1										1	
ダツ目	ダツ科	ダツ	顎骨	R																				0	0
				L								1												1	0
		種不明	歯骨	R L 不明																		7		7	
スズキ目	フエダイ科	A	顎骨	R										1										1	0
				L		2								3										3	2
		B	顎骨	R																				0	0
				L										1										1	0
	タイ科	クロダイ	顎骨	R		1		1			1			1	3							1	1	2	7
				L	2					1			1	1	3							1		5	4
		ヘダイ	顎骨	R						1	1													1	1
				L	1					1														2	0
	フエフキダイ科	ハマフエフキ	顎骨	R	2	2		2		1	2	2	3	12	12							1		18	21
				L	1	4		1			2	2	3	8	8							1		12	18
			破片	R L 不明										3								1		4	
		ヨコシマクロダイ	顎骨	R																				0	0
				L																				0	0
			咽頭骨	R									1											0	1
				L																				0	
	ベラ科	コブダイ	顎骨	R	1		1	1		1			1	1	3							1		5	5
				L		1				1		1	2	4								1	1	7	4
			咽頭骨	R	1																			1	0
				L			2			2		1		3										8	
			破片	R L 不明										3										3	
		タキベラ	咽頭骨	R																				0	0
				L								1		2										3	
		A	顎骨	R											1									0	1
				L										3	2									3	2
			咽頭骨	R																				0	0
				L								1		3										4	
		B	顎骨	R										1										1	0
				L																				0	0
			咽頭骨	R										1										1	0
				L																				0	
		不明	顎骨	R	1										1									1	1
				L																				0	0
	ブダイ科	イロブダイ	顎骨	R	1		2						1	3										4	3
				L	5					1		1												7	0
			咽頭骨	R								1												1	0
				L																				0	
		ナンヨウブダイ	顎骨	R										2	4									2	4
				L				3		1			2	1	3							1		3	8
			咽頭骨	R	1																			2	
		ナガブダイ	咽頭骨	R	1	3									1									1	4
				L								1		1										2	
		A	顎骨	R		1	1					2		1	10							1		5	12
				L									1	3	2							1	1	3	4
		B	顎骨	R			2				2	3	2	9	17			1				1	2	15	24
				L			1	2		1	2	1	4	9	9							2	4	14	21
			咽頭骨	R		1																		0	1
				L																				0	
		不明	顎骨	R									1	6	12									6	13
				L										3	1							1		4	1
				R L 不明										2								2		4	
	ハタ科	A	顎骨	R		2	1							4	6									5	8
				L	1	1	1	1			1	1	1	8	13							2		13	17
				R L 不明										1										1	
		B	顎骨	R	1	2	1																	2	2
				L										1										1	0
				R L 不明										1										1	
	ニザダイ科	ニザダイ	尾部棘		2		1																	3	
		不明	破片											2										2	
フグ目	カワハギ科	モンガラカワハギ	顎骨	R		1																		0	1
				L		1								1	1									1	2
			背鰭棘											1										1	
	ハリセンポン科	ハリセンポン	破片		1																			1	
カサゴ目	コチ科	コチ	顎骨	R																				0	0
				L										1								1		0	0
種不明		脊椎			91		72			22		37		291		2								515	
		尾椎			2		2		1	3		1		27										36	
		棘			61		10			1		25		304		1						2		404	
		血管間棘												2								1		3	
		鋤骨										1												1	

凡例　上顎骨 / 歯骨　　R前上顎骨 / R歯骨　　L前上顎骨 / L歯骨　　R上咽頭骨 / 下咽頭骨　　L上咽頭骨

第58表　ウシ歯牙出土表

出土地＼部位		右														左														切歯骨	破片	合計
		I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3			
		1	2	3	c	m2	m3	m4								1	2	3	c	m2	m3	m4										
上顎骨	下之御庭											1			1										1			1	1		4	9
								1																								1
	用物座												2												1		1	1	1		2	8
																																0
	漏刻門																														1	1
																																0
	廣福門														1																1	2
																																0
	木曳門											2	1	2											1	2	1	2			1	12
																																0
	試　掘																														1	1
																																0
	表　採													1																		1
																																0
下顎骨	下之御庭													1														1	1		2	5
																																0
	用物座												2	1													1	1	3		4	12
																																0
	漏刻門																												1		1	2
																																0
	廣福門												1															1	1	1	4	8
																																0
	木曳門													1	1													1				3
																																0
	表　採												1																	1		2
																																0
	不　明																														3	3
																																0
合　計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	3	8	8	2	24	69
		0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

第59表　ウマ歯牙出土表

出土地＼部位		右														左														切歯骨	破片	合計
		I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3			
		1	2	3	c	m2	m3	m4								1	2	3	c	m2	m3	m4										
上顎骨	下之御庭																														4	4
																																0
	用物座																														7	7
																																0
	廣福門																														1	1
																																0
	木曳門																										1	1			4	6
																																0
	試　掘														1																1	2
																																0
	不　明																														1	1
																																0
下顎骨	下之御庭	1		1												1										2						5
																																0
	用物座	1																									1				4	6
																																0
	廣福門																														4	4
																																0
	漏刻門												1															1				2
																																0
	木曳門															1		1										2				4
																																0
合　計		2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	0	26	42
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第60表　イノシシ歯牙出土表

部位 / 出土地		右														左														切歯骨	破片	合計
		I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3			
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4										
上顎骨	木曳門	1	1											1																		3
																																0
	不明																1															1
																																0
下顎骨	下之御庭				♂1														1							1	1					4
																																0
	用物座		1																													1
																																0
	漏刻門		1		♀1												2										2	2	(1)			9
																																0
	廣福門													1																		1
																																0
	木曳門	2	2		♀1						1	1			2								1	1		1	2	2	(1)			19
																																0
	表採		2																											2		4
																																0
	不明																									1						1
																																0
合計		3	7	0	3	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2	0	3	0	1	0	0	0	1	1	0	3	5	4	(2)	2	0	39
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

凡例：〈〉未萌出　♀雌、♂雄

第61表　ヤギ歯牙出土表

部位 / 出土地		右														左														切歯骨	破片	合計
		I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3			
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4										
上顎骨	用物座														1																	1
																																0
下顎骨													1																			1
																				1	1	1										3
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3

第62表　イヌ歯牙出土表

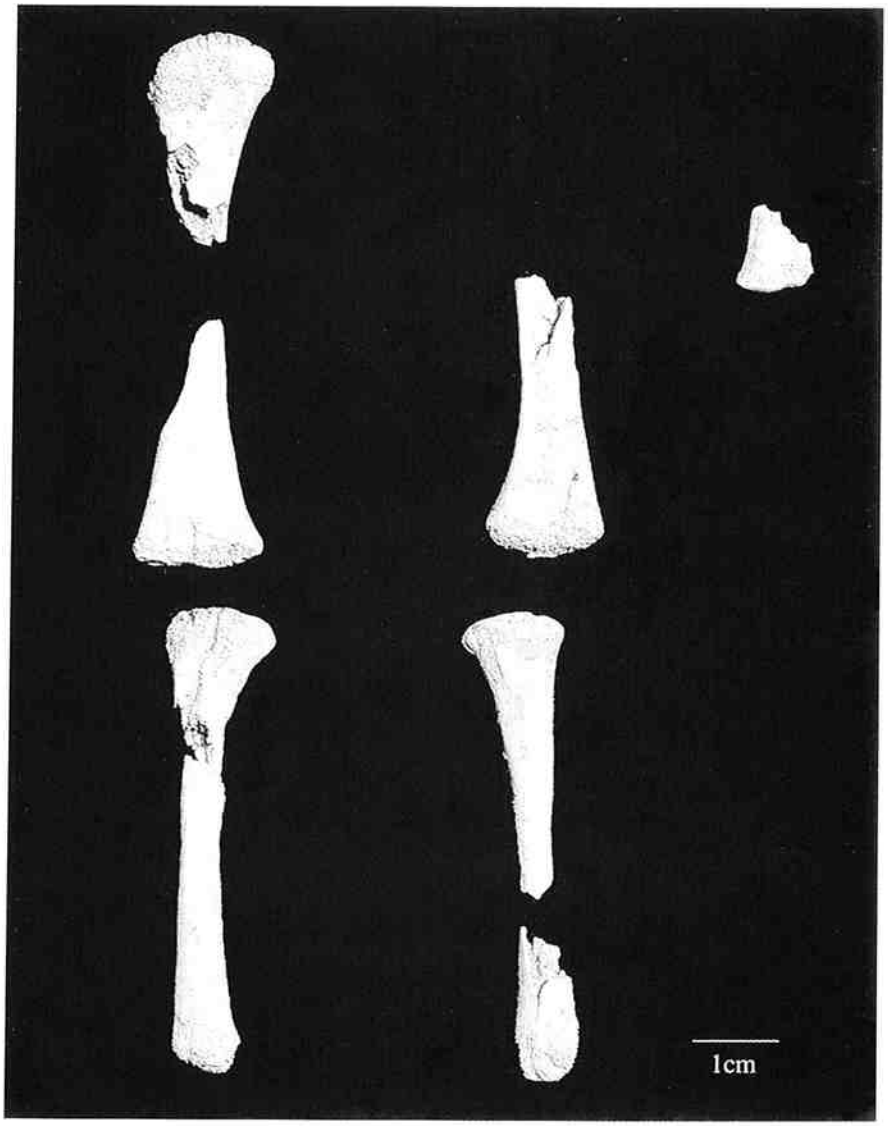
部位 / 出土地		右														左														切歯骨	破片	合計
		I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3			
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4										
下顎骨	木曳門				2					1	1	1	1	1									1									8
				1	1	1	1	1												1	1	1										8
	不明				1																		1									2
																				1	1	1										3
合計		0	0	0	3	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	10
		0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11

第42節　人骨

漏刻門M4-124埋土中より出土した人骨は、高さ約8cmの緑色をした蓋付きのガラス瓶に納められていた。破損部位が多く、また焼かれていて若干の収縮や変形が見られた。確認された部位は頭蓋骨片、左上腕骨片、左右大腿骨片、左右脛骨片等で、おそらく1個体分が葬られていたと思われる。
残存する四肢骨を計測したところ、右大腿骨上端幅が16mm、大腿骨下端幅が右で16mm、左で15mm、右脛骨最大長が57mm、脛骨上端幅は右で13mm、左で12mmと推定された。破損や変形の影響を考慮した上で、AKIYOSHI（1976）の胎児骨を用いた研究を参照すると、妊娠９ヶ月から10ヶ月程度の胎児の大きさに近い結果となった。このことから、この個体は少なくとも死産か、出産後あまり時間をおかずに死亡したと推定される。

引用文献

AKIYOSHI T 1976 : Studies on fetal bone extremities and the derivation of an equation for estimating fetal body length. Acta med. Nagasaki. 20 pp15-18



図版４　人骨

第Ⅴ章　結　　語

以上、平成元年～平成２年度にかけて実施した首里城跡下之御庭跡・ほかの調査を報告した。報告の概要を記す。

遺構は、第Ⅲ章でも述べたように戦前および戦後の造成のため一帯は大きく攪乱を受けており、門跡、建物跡を確認することは難しかった。廣福門跡、用物座跡では礎石や建物に伴う石積みをわずかに確認することができた。また、遺物の項でも述べるが、隣接する京の内跡出土の遺物（平成10年度報告分）と接合可能な遺物がみられ、造成のためかなりの土量が動いたことが考えられる。

今回報告した出土遺物は遺物収納コンテナで約1,600箱以上にも及ぶ膨大なもので、瓦・磚が約600箱余を占めていた。次いで、褐釉陶器や青磁が多く出土した。また、木曳門跡と下之御庭跡からの出土が比較的多くみられた。遺物の概要は次のとおりである。

青磁は碗・皿が多く得られ、その他の器種も豊富であった。特筆すべきものとしては、内面に貼り付け文を施した鉢で、蓮池を表したものとのことである。白磁は碗が主体で、定窯のものと思われる資料がある。京の内跡出土の資料と比較した結果、同一個体もしくは近似する資料と考えられた。

褐釉陶器は中国産とタイ産のものがみられ、多くはこれまでに報告されている例と大過がないものであったが、わずかにミャンマー産と思われる褐釉白帯陶器が得られた。県下では初の確認例であり特筆すべき遺物である。今回、褐釉陶器に分類した中には本土産、もしくは産地不明と考えられる資料があり、これらについては再検討したい。

その他の陶磁器では、ベトナム産磁器の中には良品もみられ、高麗青磁は比較的時期の確定ができるようである。また、瑠璃釉には梅瓶、酒海壺といった確認例の少ない器種がみられ、銅緑釉の中には産地を確定しがたい資料もみられるとのことであった。本土産の陶磁器も多様であり、これまで多く報告されていた肥前系のほかに、関西系、瀬戸・美濃系など西日本の陶磁器がみられるといえる。

土器は、沖縄前期の土器が面縄東洞式、嘉徳Ⅱ式および仲泊式と思われる資料が得られ、後期土器も若干得られている。首里城跡からはこれまでの調査においても先史土器が出土しており、先史遺跡が存在したことを示唆するものと考えられる。また、報告はできなかったが磨製石斧も数点得られている。

自然遺物は概略のみを示したが、ヤコウガイの出土量は目を見張るものがあった。首里城跡北西の現城西小学校地内には「王府御用の総合製作所」とされる御細工所跡[1]があり、発掘調査では多量のヤコウガイが得られ、螺鈿の材料に使用したものとされ、今回は特に殻の部分が多く出土した。このような、近世におけるヤコウガイの多量出土の傾向は王府関連の遺跡に多く[2]、食料残滓としてよりも加工品や交易品としての位置づけが必要とされる[3]。

石碑等は『新建国学碑』のほかに不明の高欄羽目板がある。この資料はこれまでの金石文調査等で確認されていないものである。今後の確認を要する資料である。また、記銘資料としては、中国産褐釉陶器に「□高麗」、沖縄産陶器の外底面に「寄」、「南京□□」などの墨書を施す事例がみられる。特に沖縄産陶器に多くみられるようで、墨書を施す例はこれまでにも首里城跡をはじめとして、湧田古窯跡等で確認されている。このような記銘にどのような意味があったのか考えたい。

上述した京の内跡出土遺物との接合状況は、青花と褐釉磁器の間で確認できた。青花は高足杯が木曳門K10-133、L3-134、L7-131グリッド、褐釉磁器は木曳門L4-132出土のものが接合可能であった。その他にも、青花大合子（下之御庭・木曳門出土）が同一個体と思われる。その他に、京の内跡出土資料と同様に被熱痕がみられる資料があり、これらは京の内跡に由来するものと考えられよう。その他にも接合可能資料はあると考えられるが、今回の接合作業は一部に止まったため充分ではなかった。

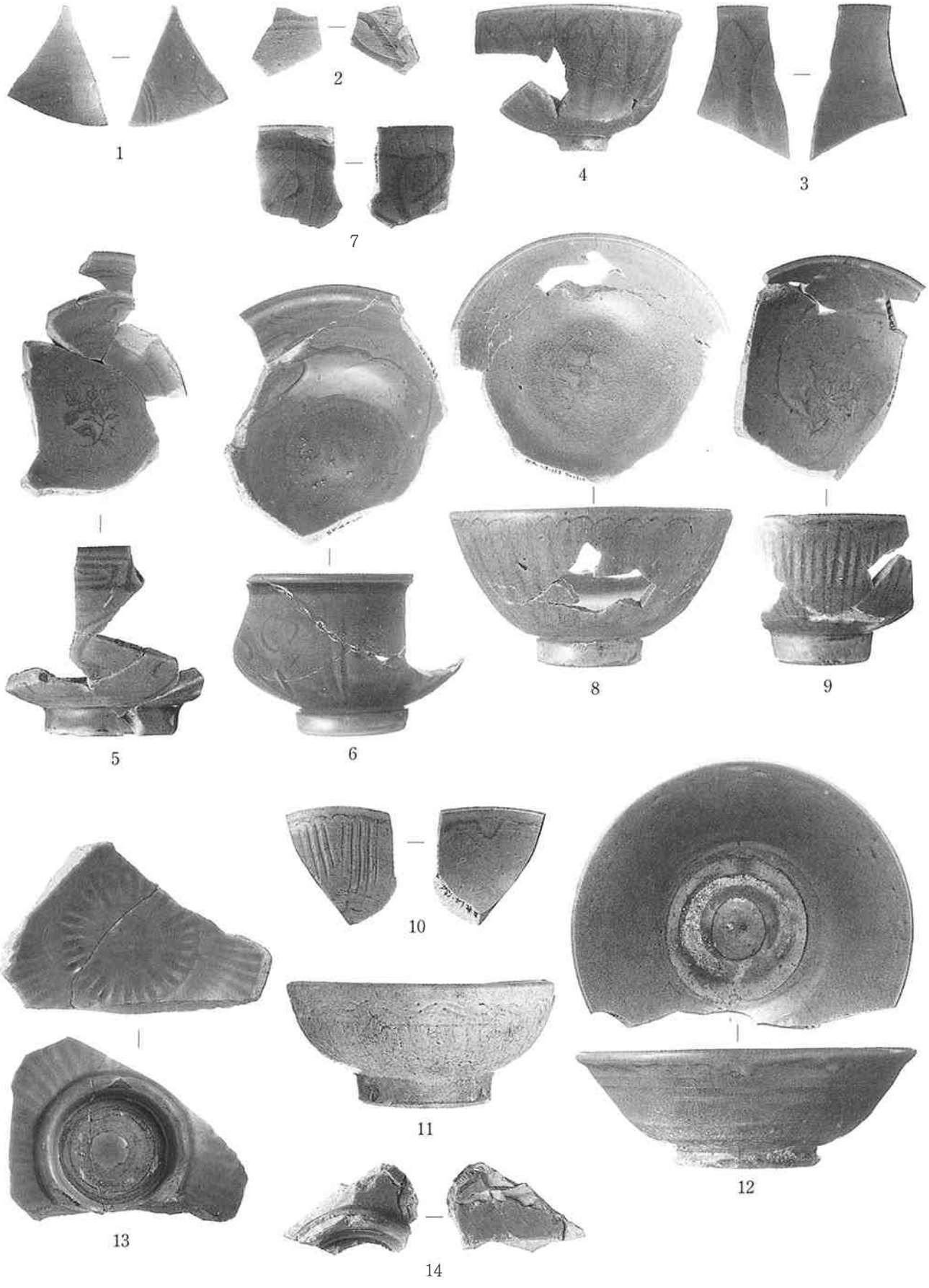
今回は、亀井明徳先生をはじめとした諸先生方より貴重なご指導とご教示を頂き、報告をまとめることができました。末尾となりますが、心より感謝申し上げます。

引用文献

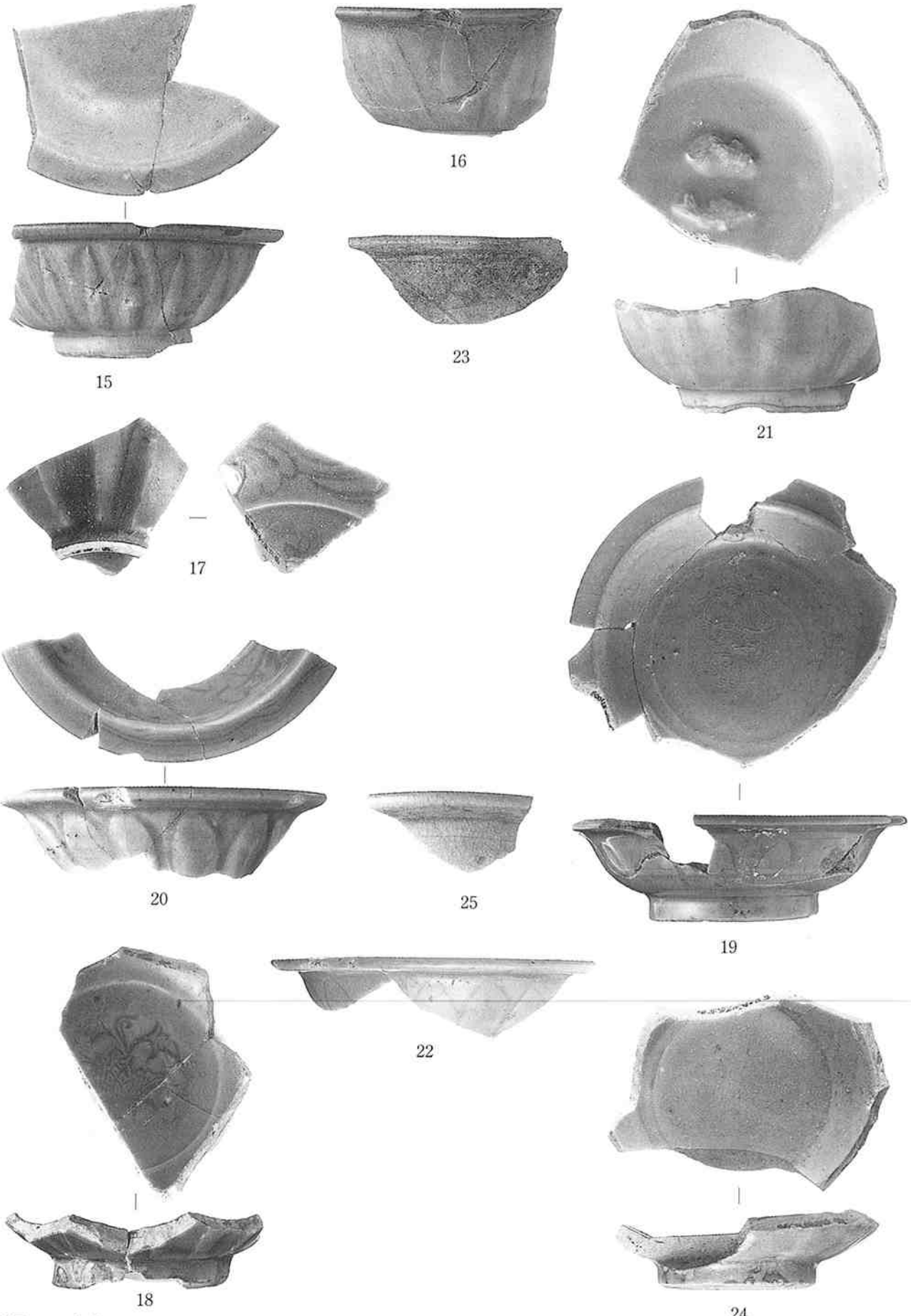
１）那覇市教委　『御細工所跡』　1991年　　２）沖縄県教委　『湧田古窯跡』Ⅱ　1995年
３）沖縄県教委　『湧田古窯跡』Ⅳ　1999年

追記：脱稿後、第24図1、第25図1はベトナム産白磁と確認。また、『湧田古窯跡』Ⅰ所収第36図1も同。

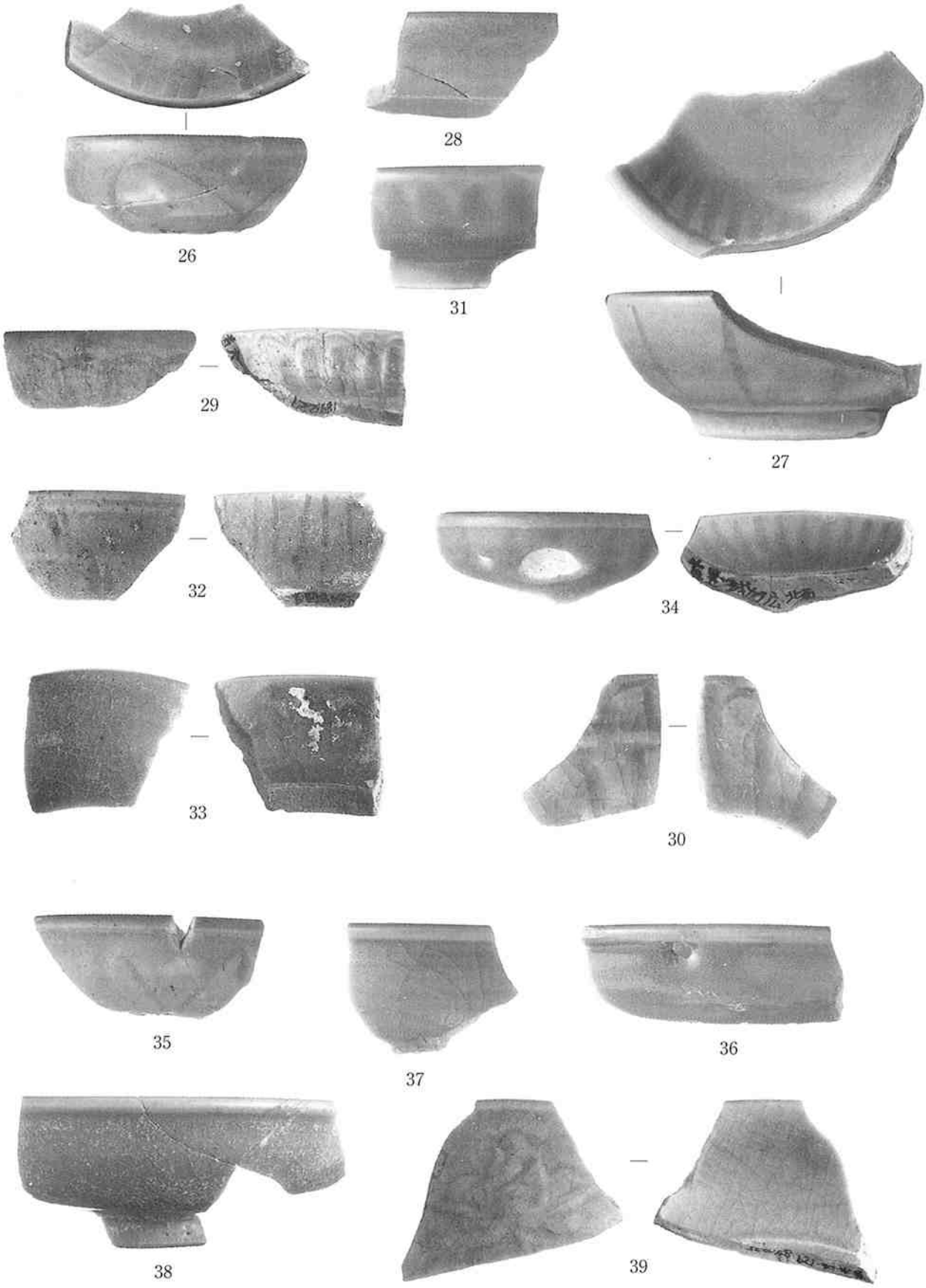
図版 5　調査状況



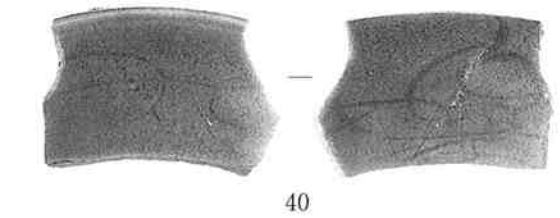
図版6　青磁



図版 7　青磁



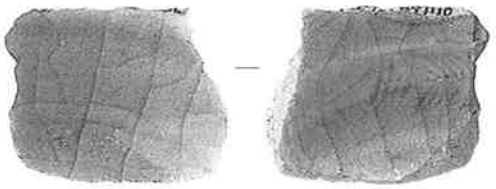
図版 8　青磁



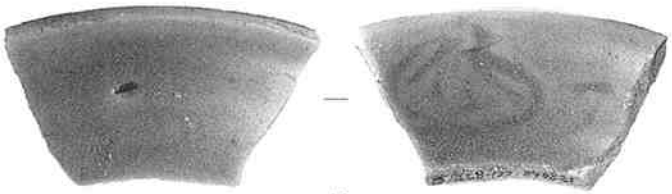
40

42

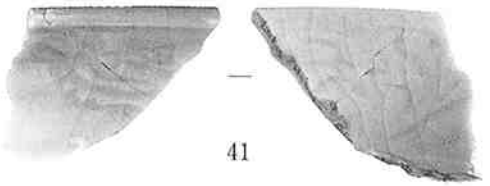
44



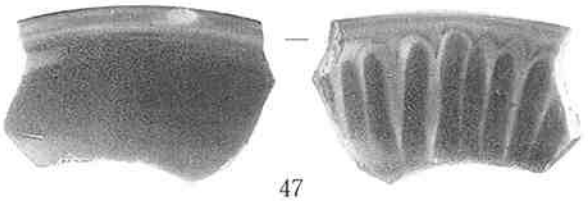
45



46



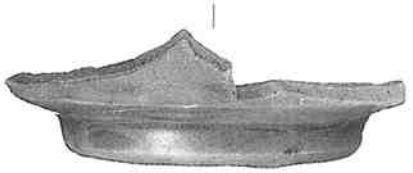
41



47

48

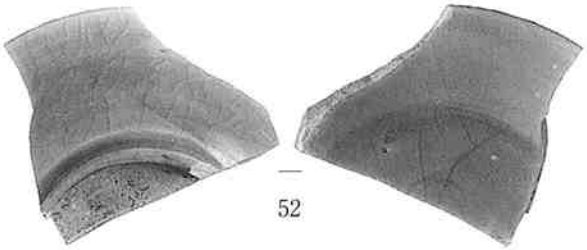
43



49

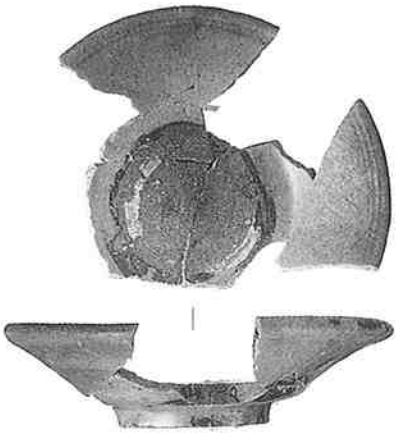
図版 9　青磁

50

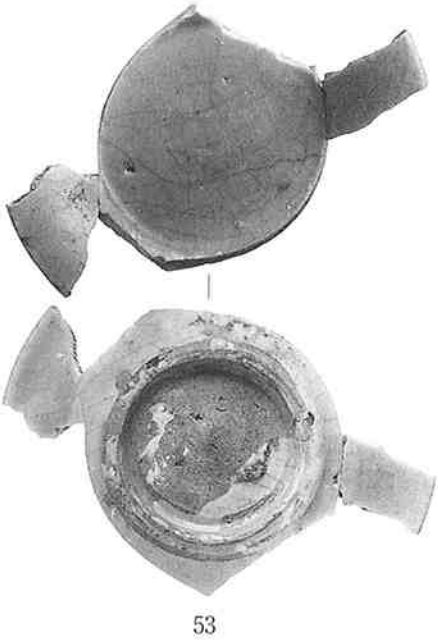


52

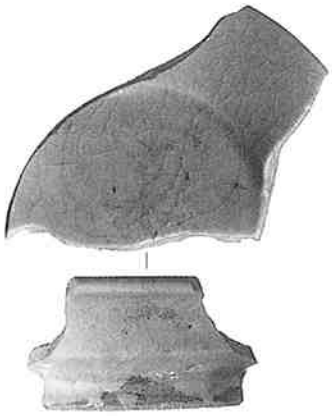
51



55



53

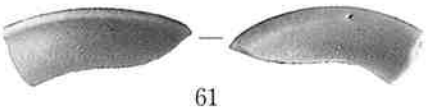


54

58

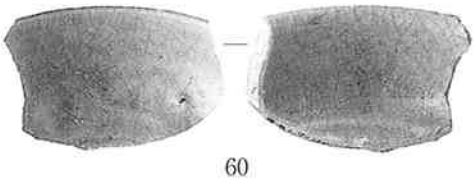
56

57



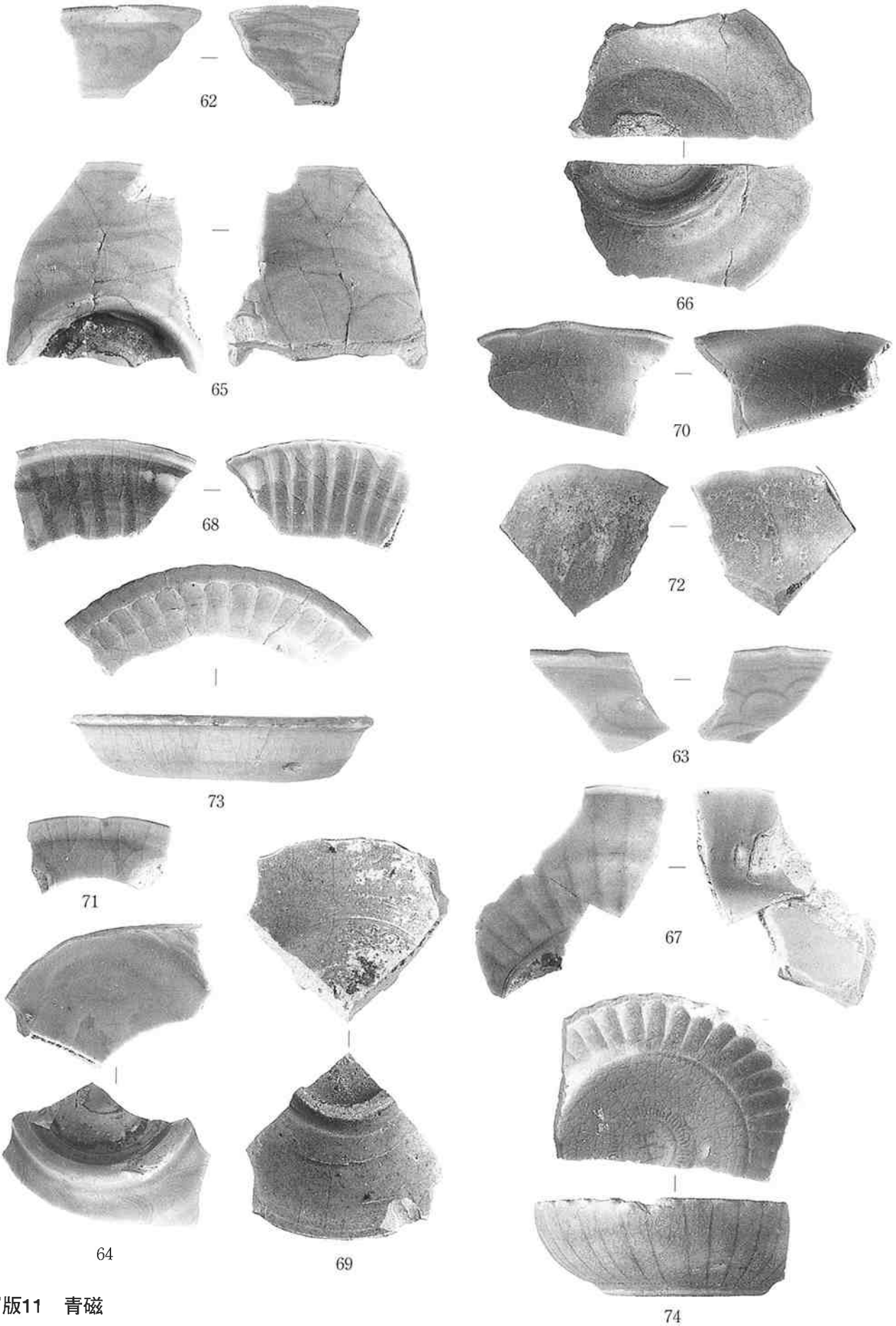
61

59

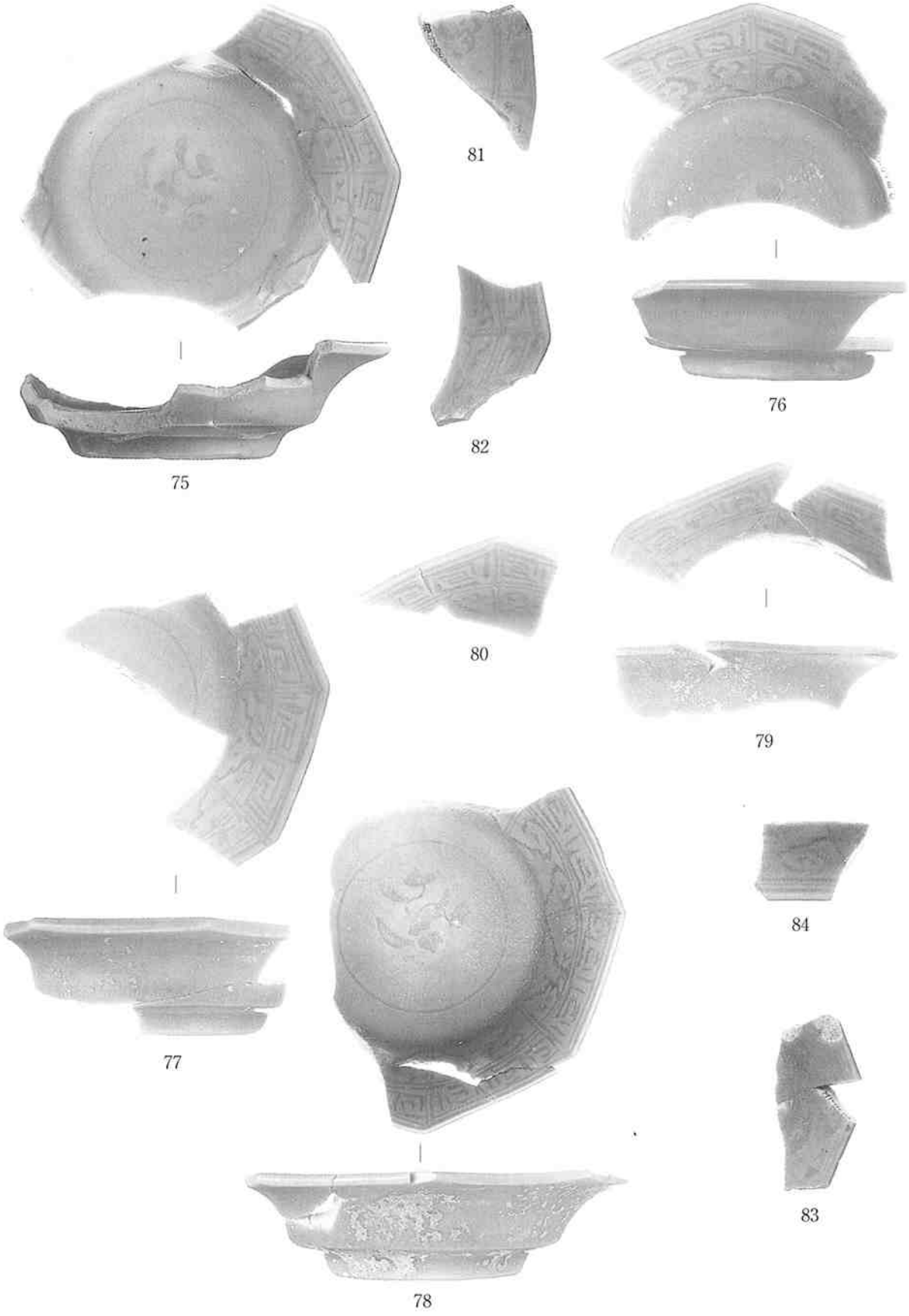


60

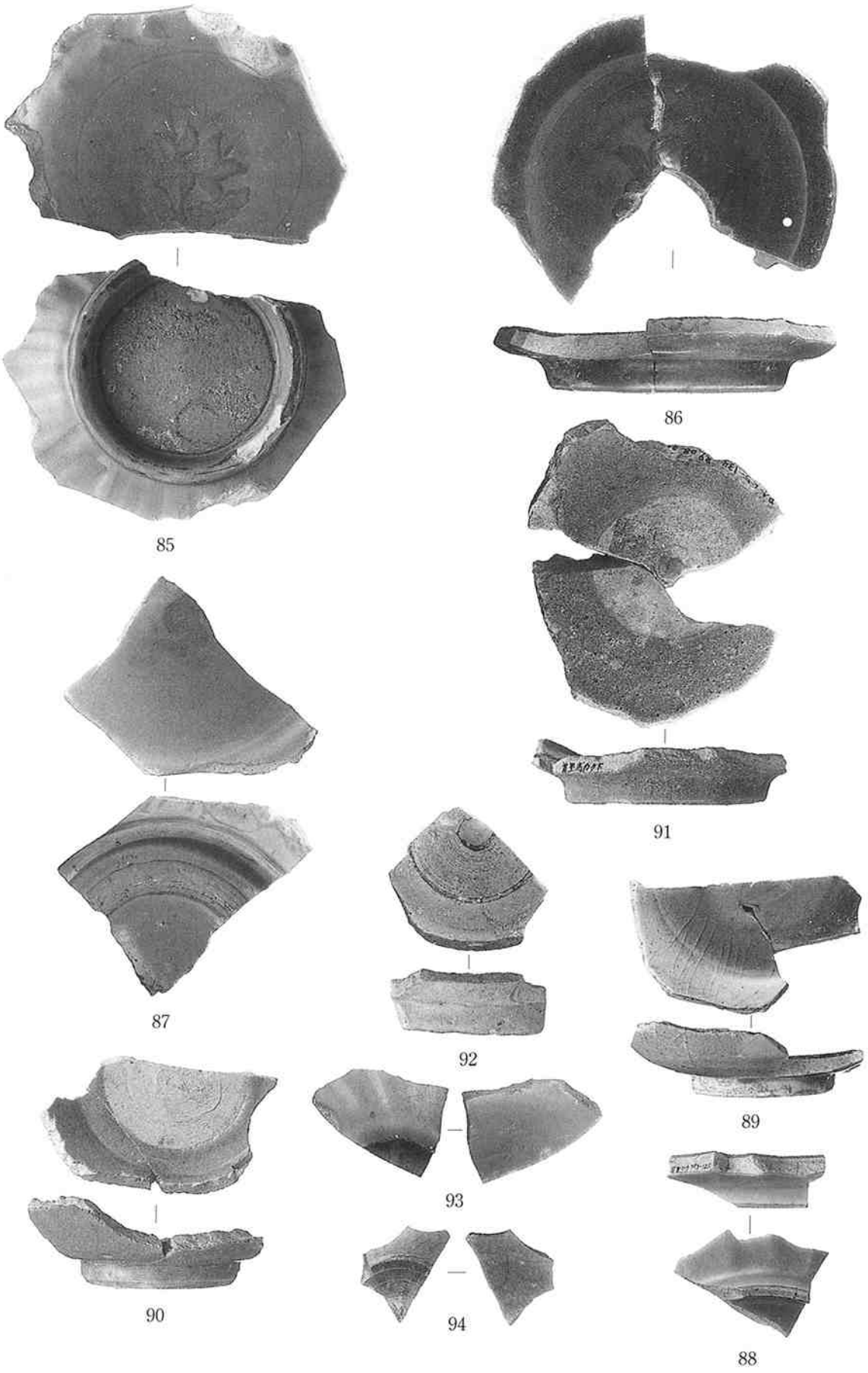
図版10　青磁



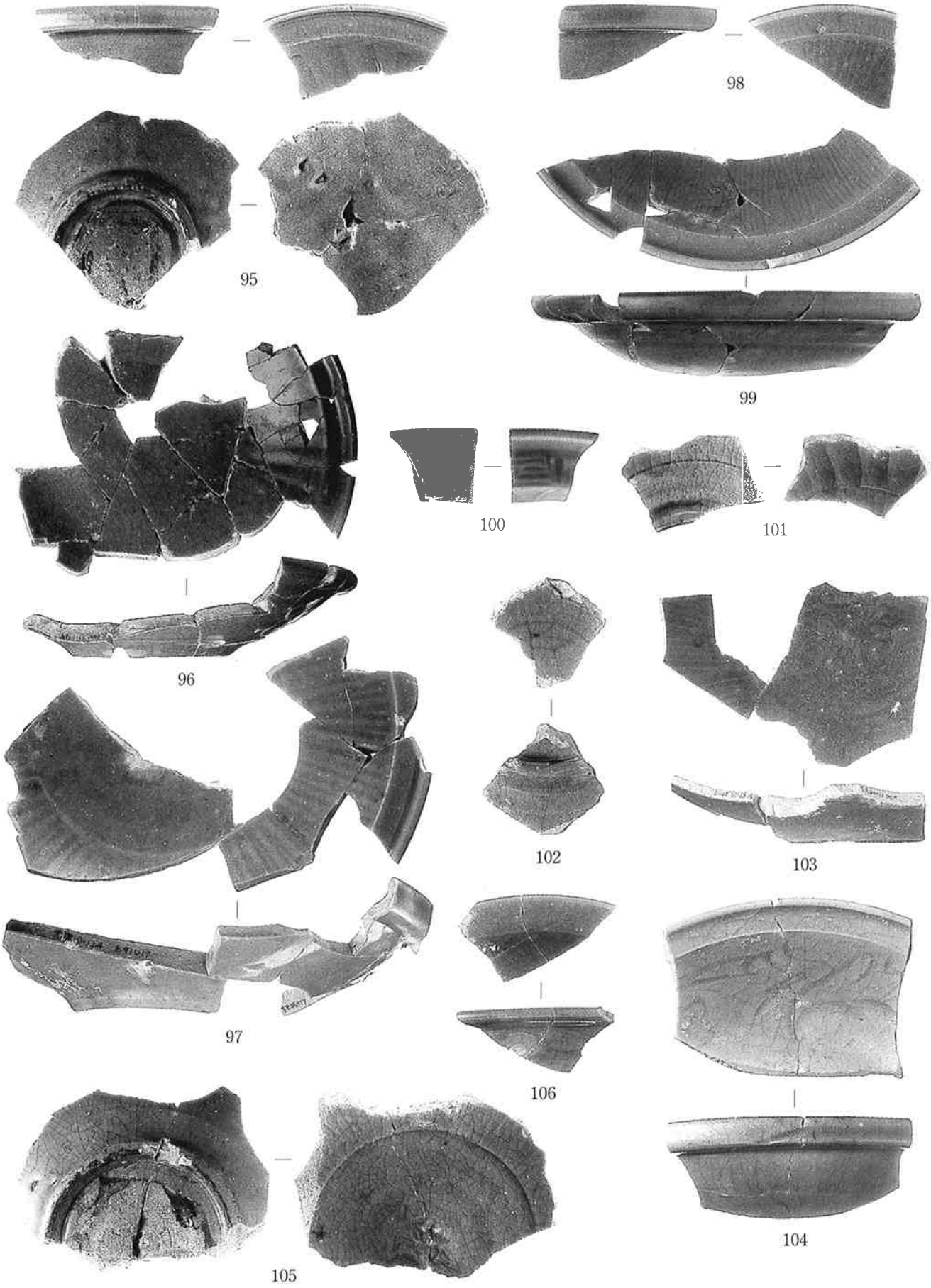
図版11　青磁



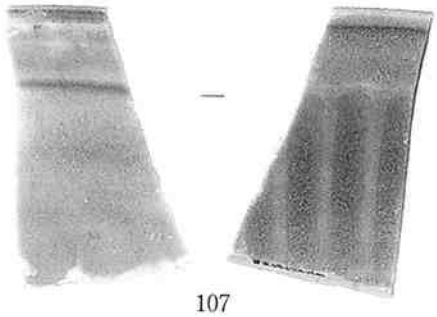
図版12　青磁



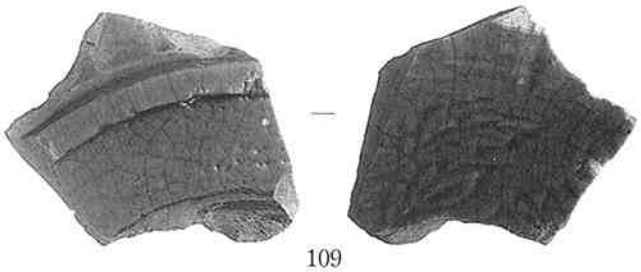
図版13　青磁



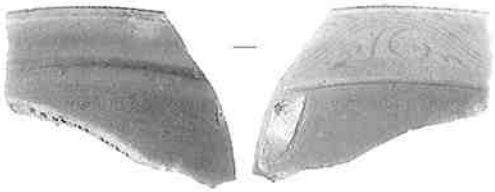
図版14　青磁



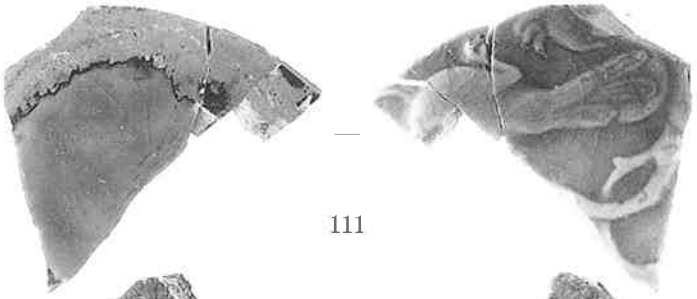
107



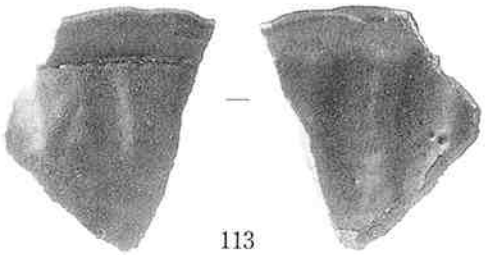
109



115

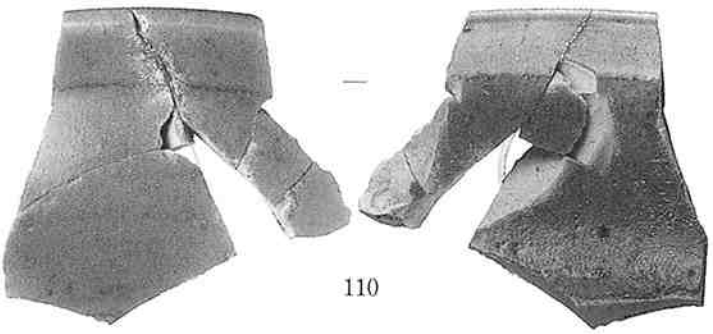


111

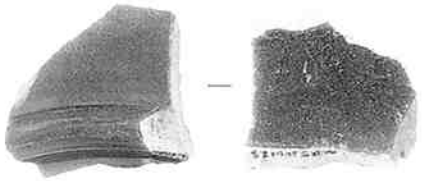


113

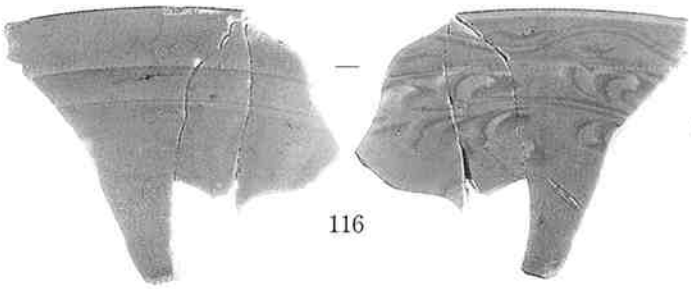
117



110

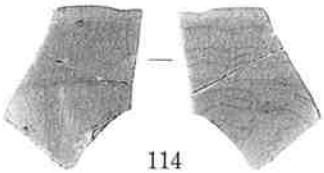


108



116

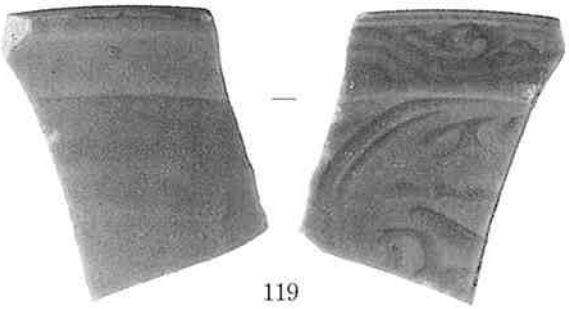
112



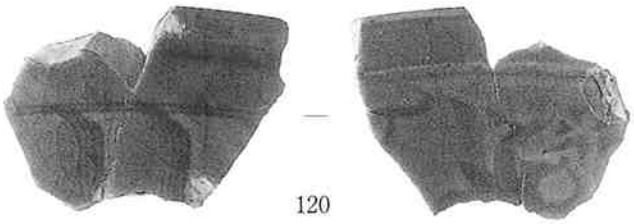
114

図版15　青磁

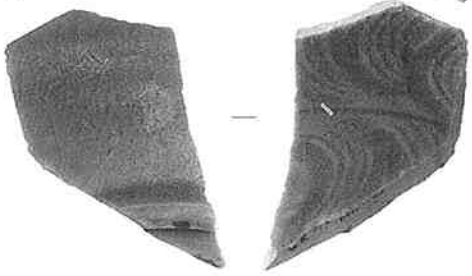
118



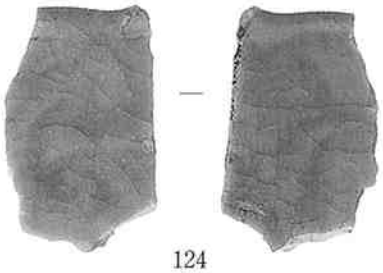
119



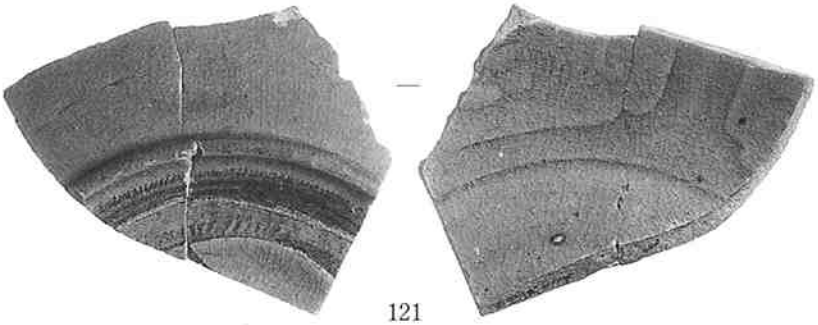
120



123



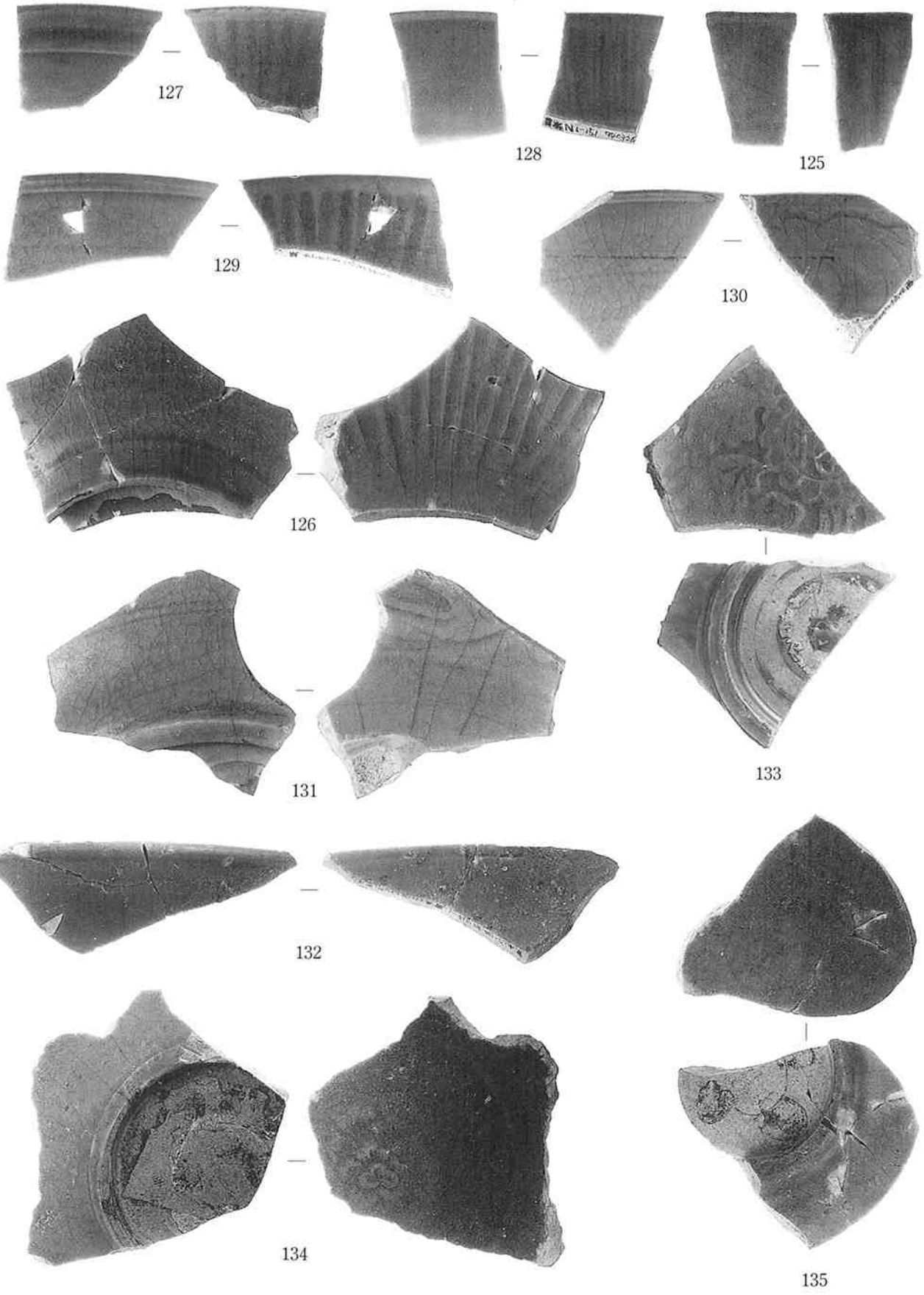
124



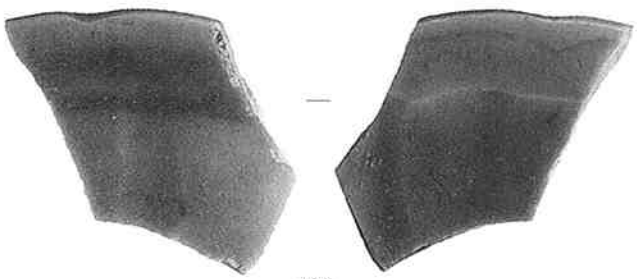
121

122

図版16　青磁

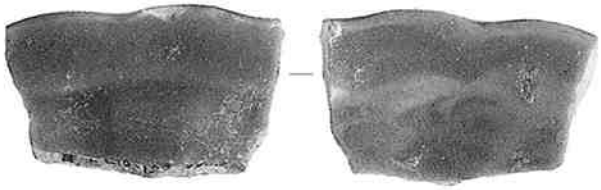


図版17　青磁

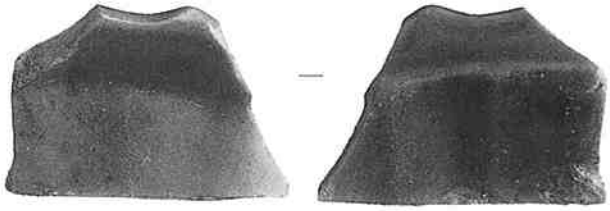


136

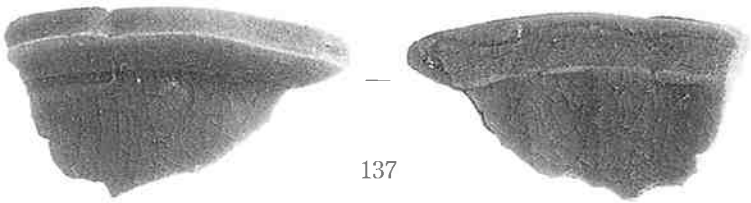
138



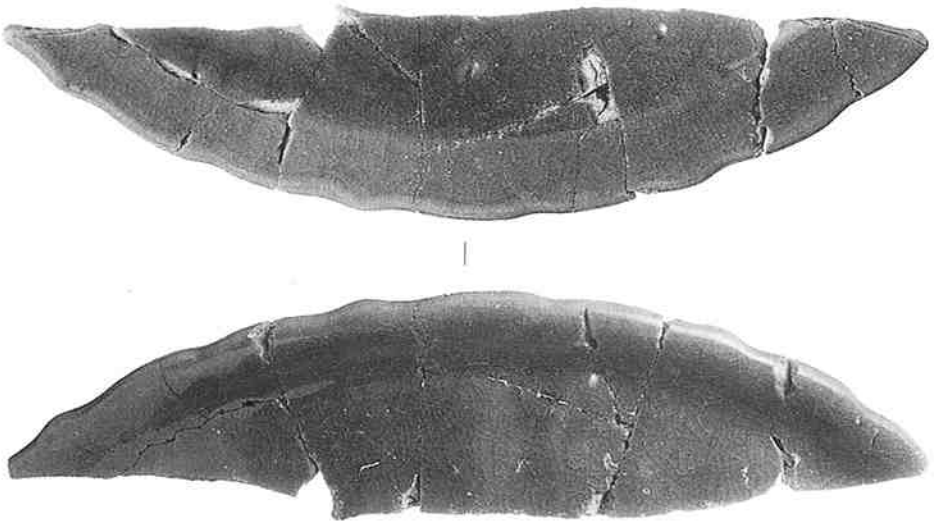
141



140

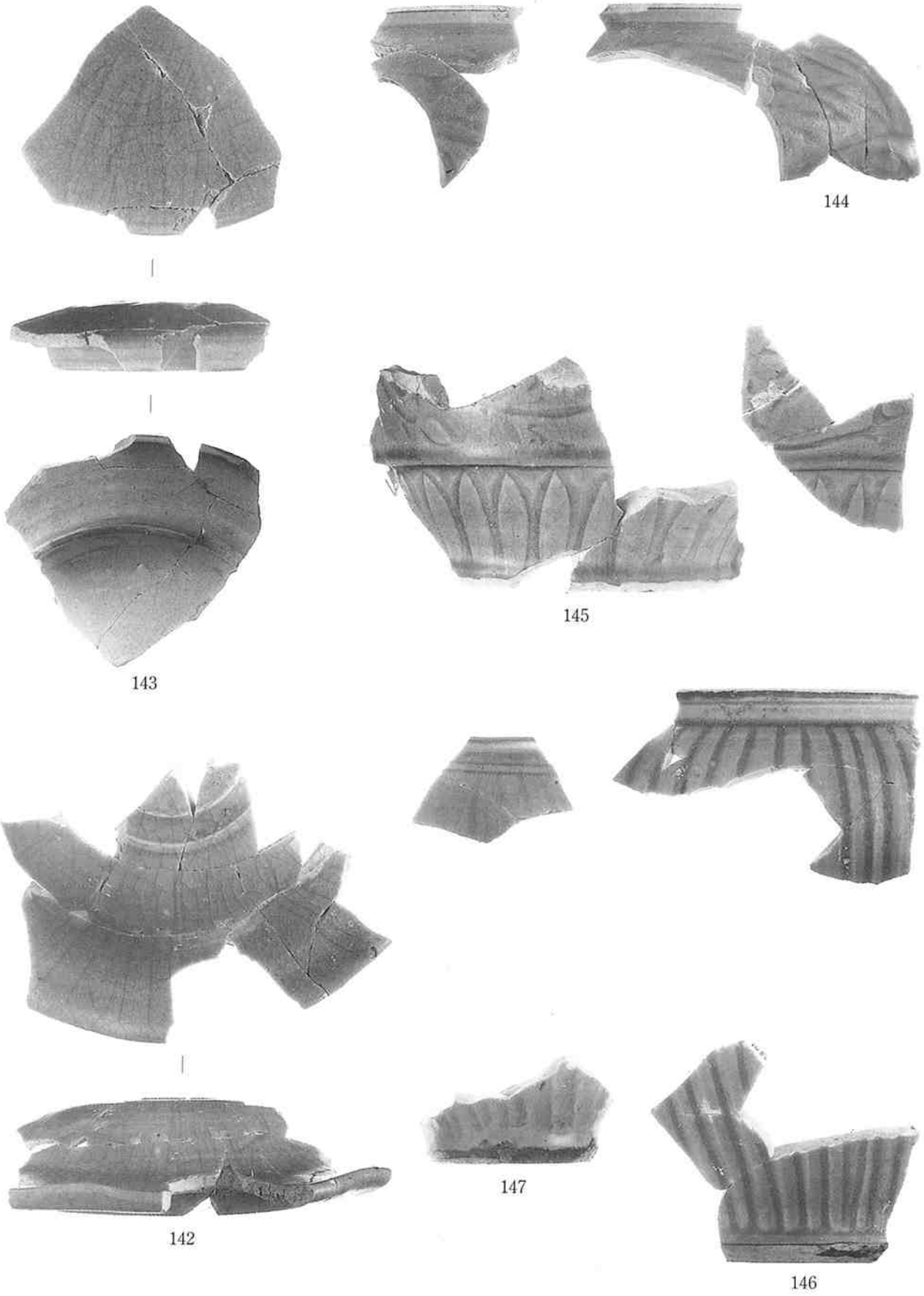


137



139

図版18　青磁

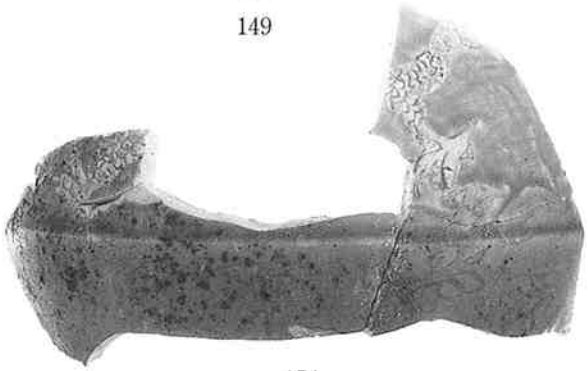


図版19　青磁

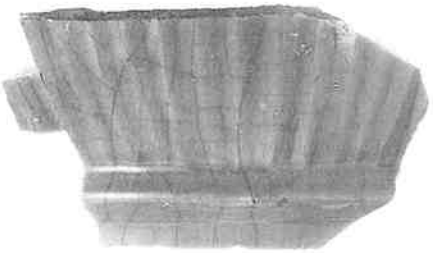
148

152

149



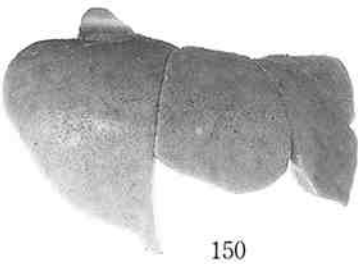
154



153

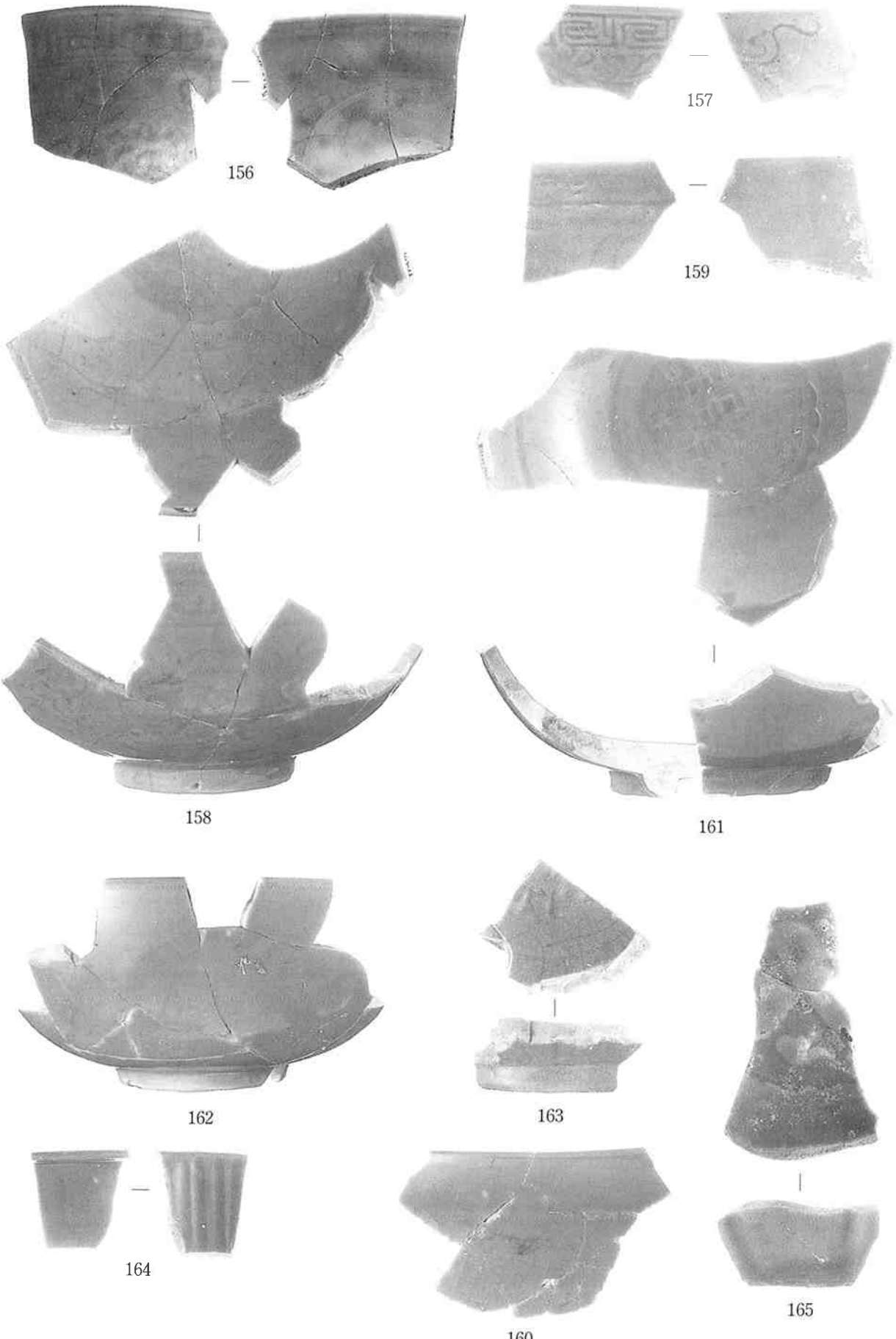
155

151

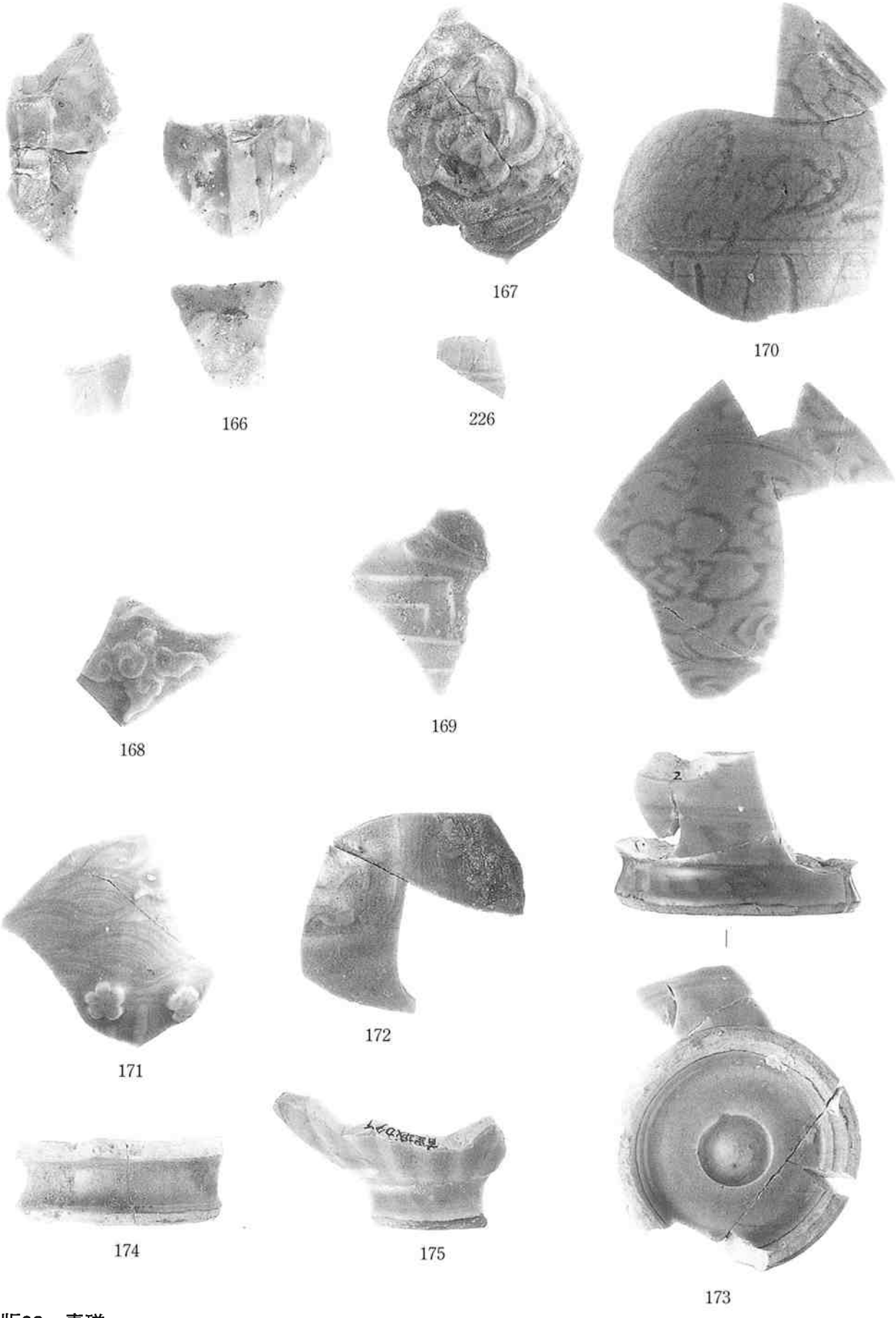


150

図版20　青磁



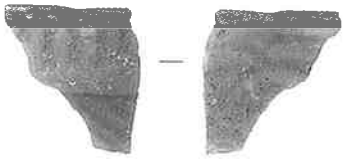
図版21　青磁



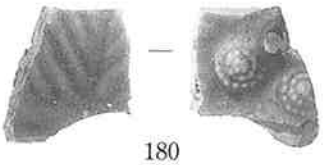
図版22　青磁

176

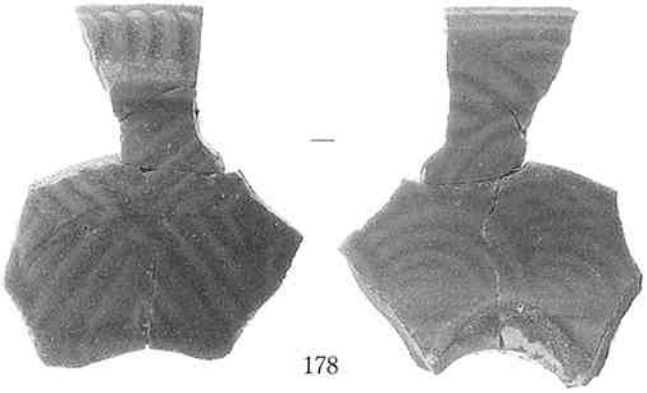
177



179



180

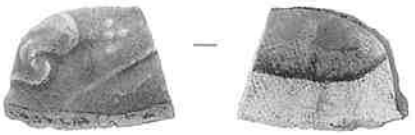


178

183

181

182



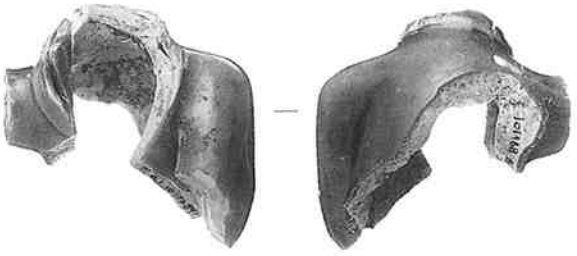
184

185

187

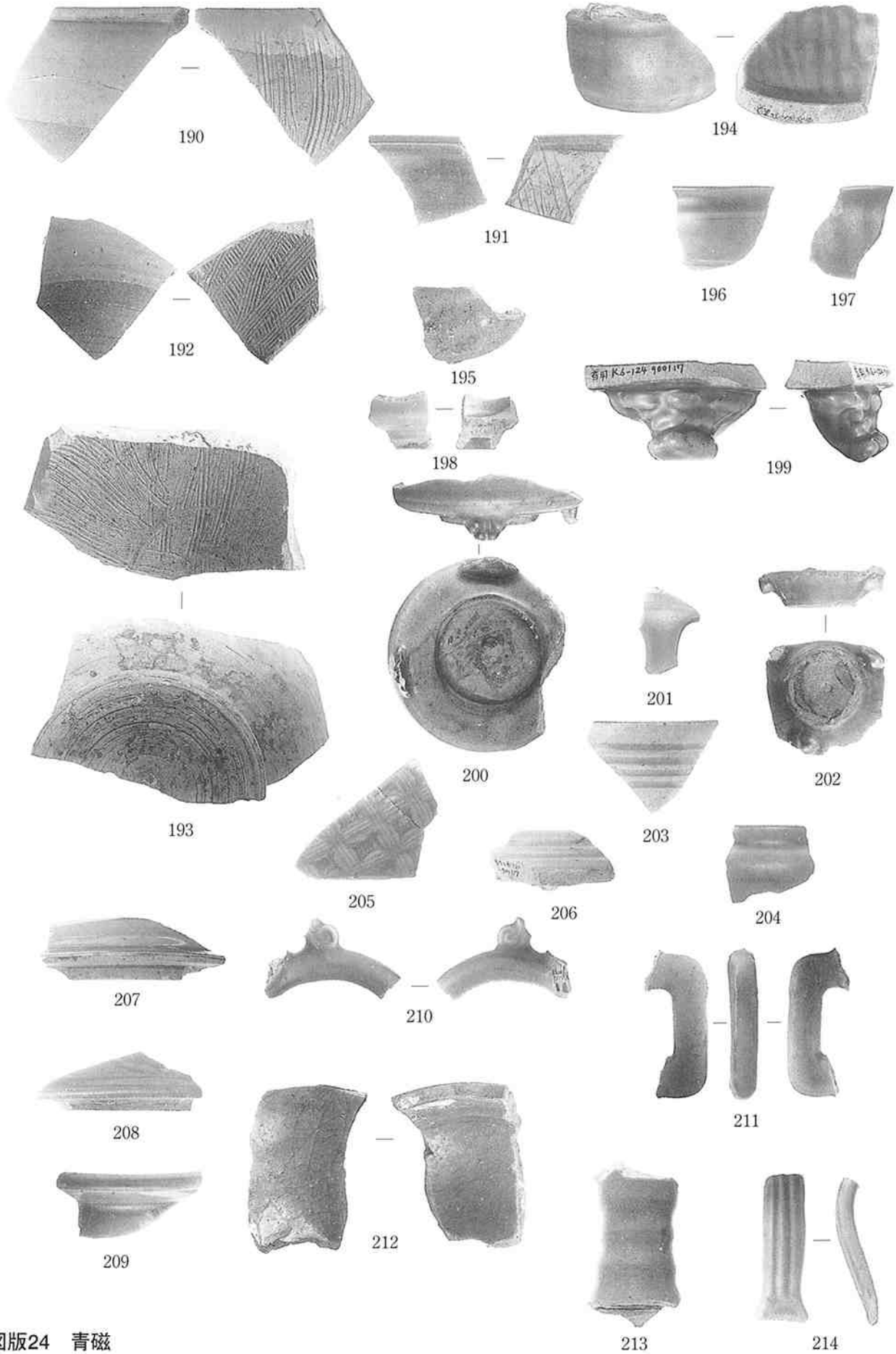
186

188

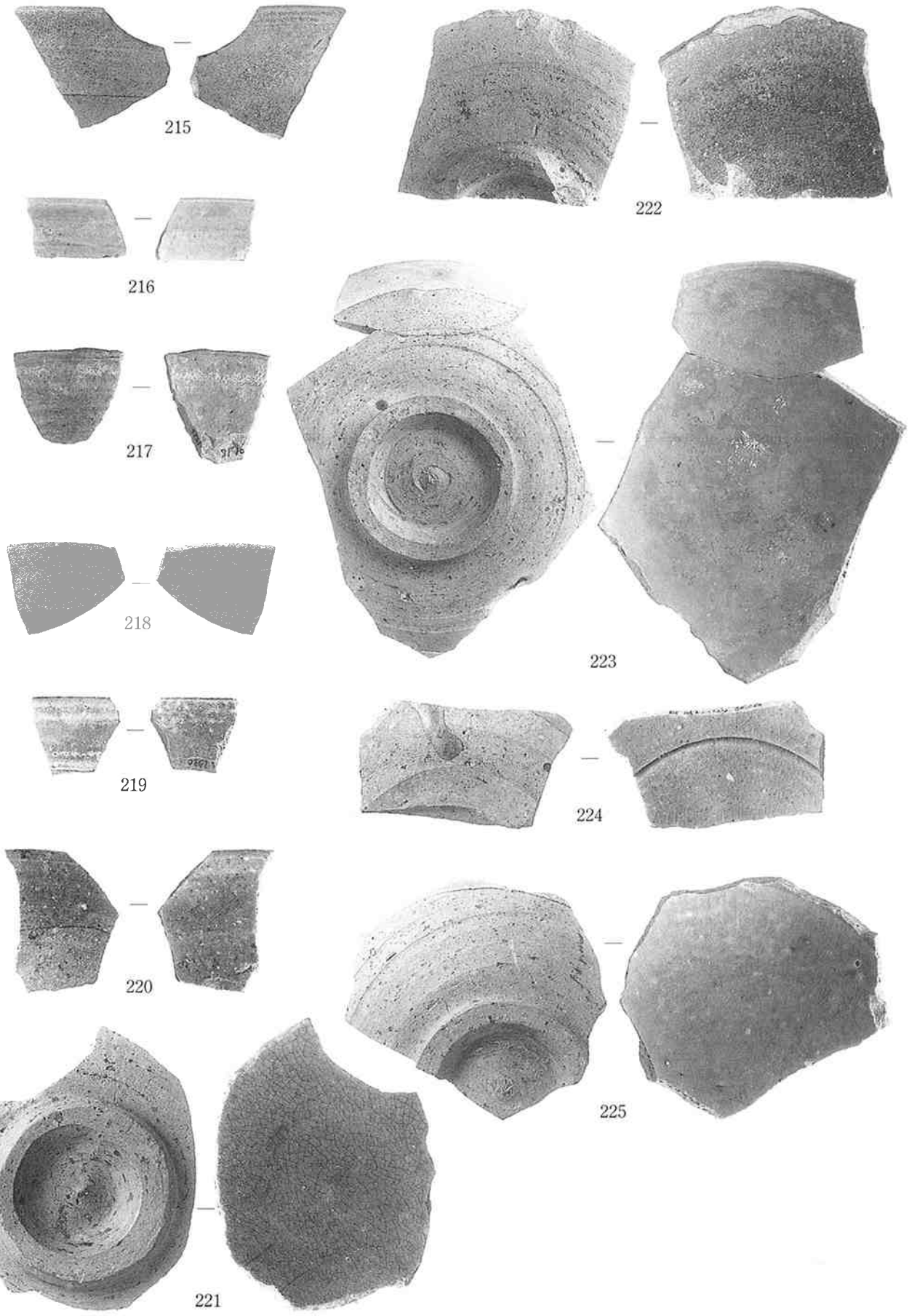


189

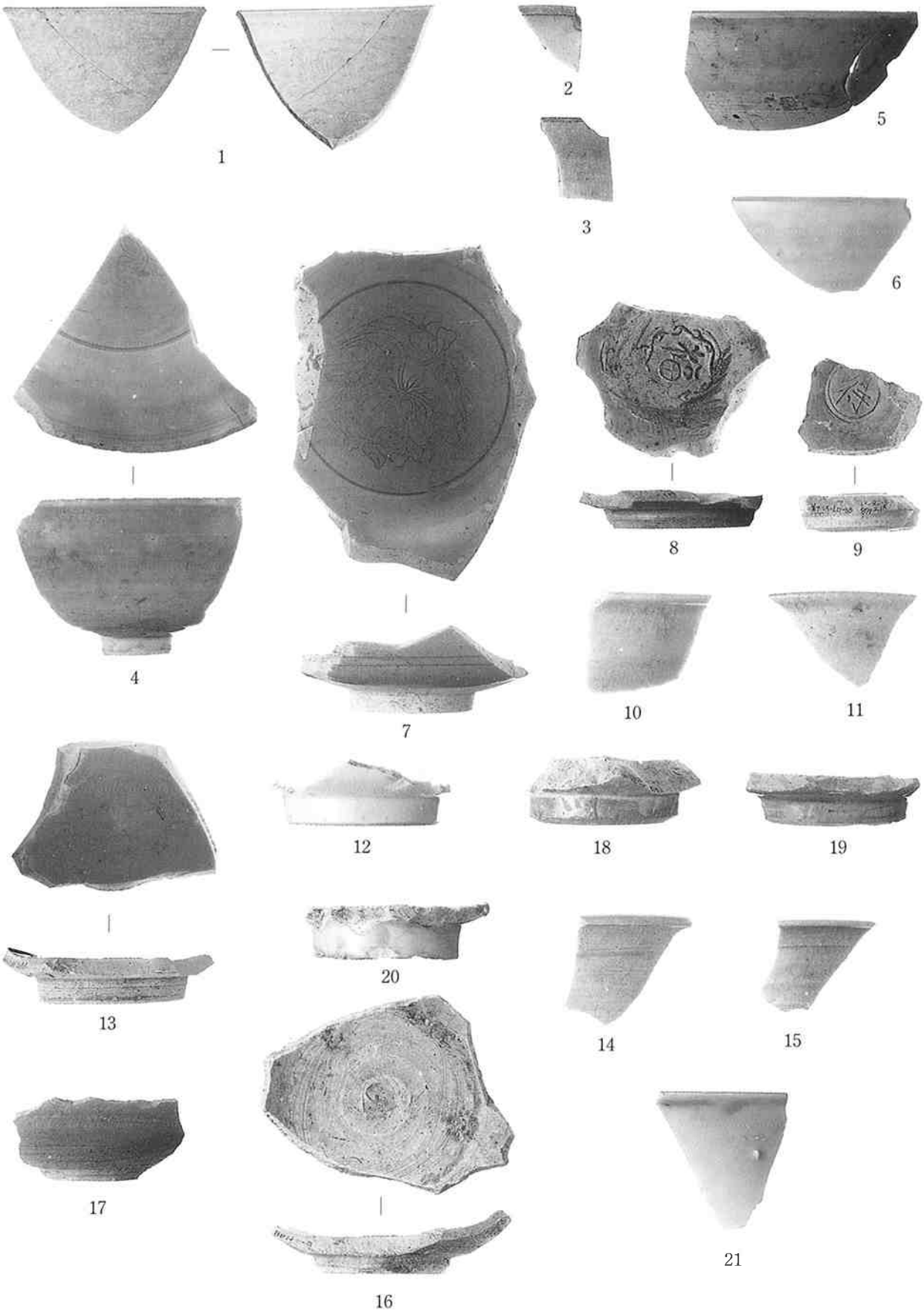
図版23　青磁


190
194
191
196
197
192
195
198
199
193
200
201
202
203
205
206
204
207
210
211
208
212
209
213
214

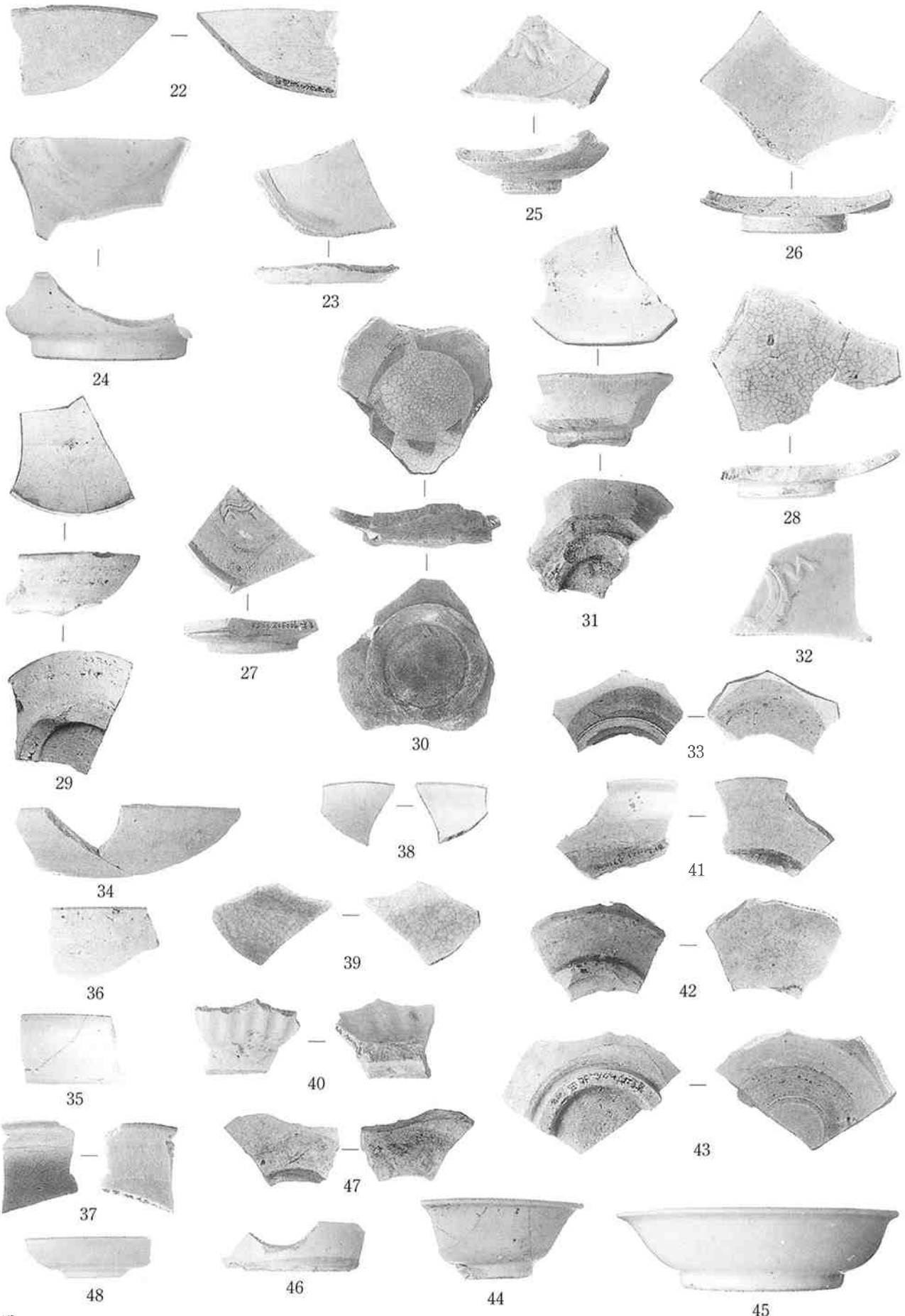
図版24　青磁



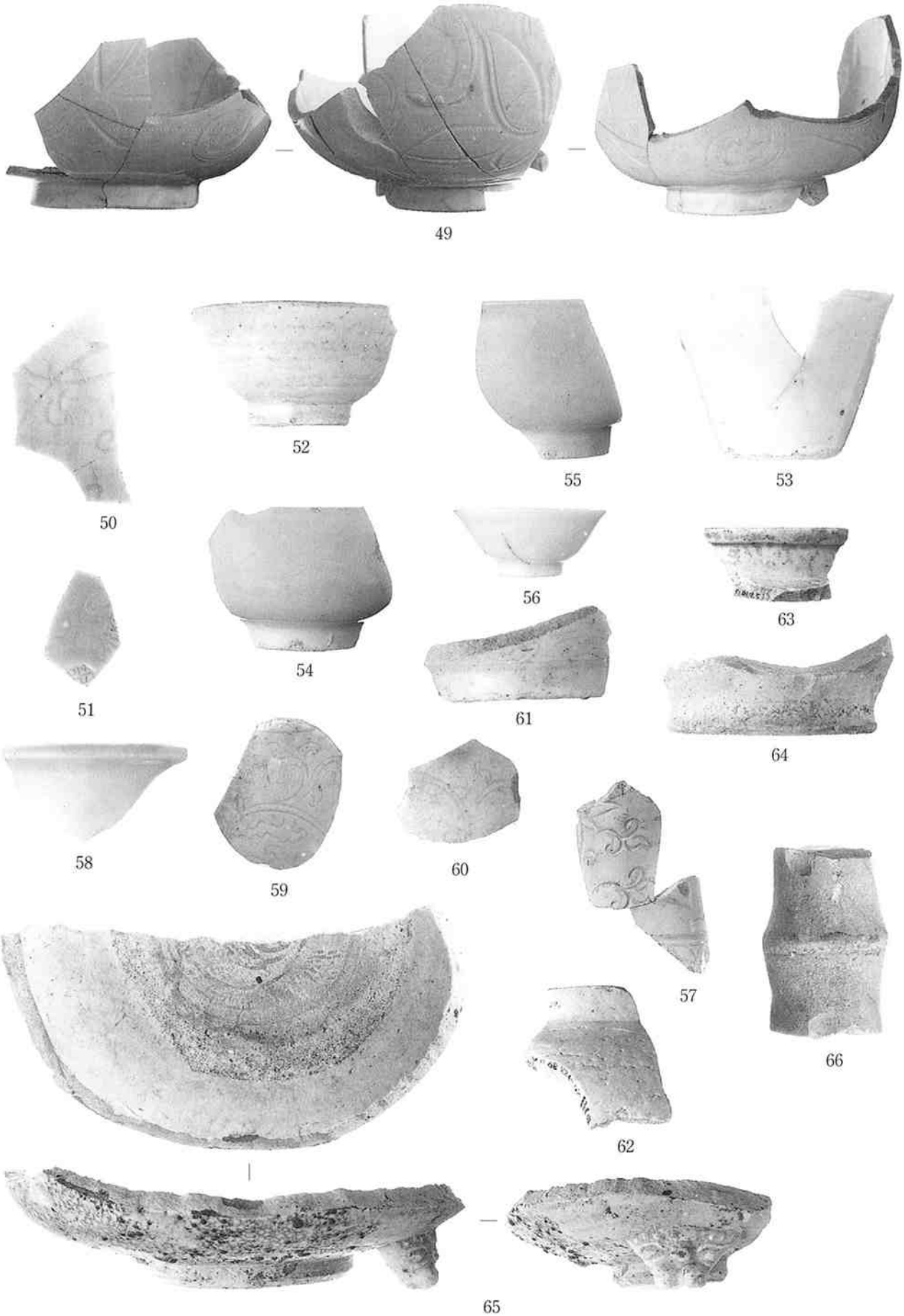
図版25　泉州窯系青磁



図版26　白磁


22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

図版27　白磁



図版28　白磁

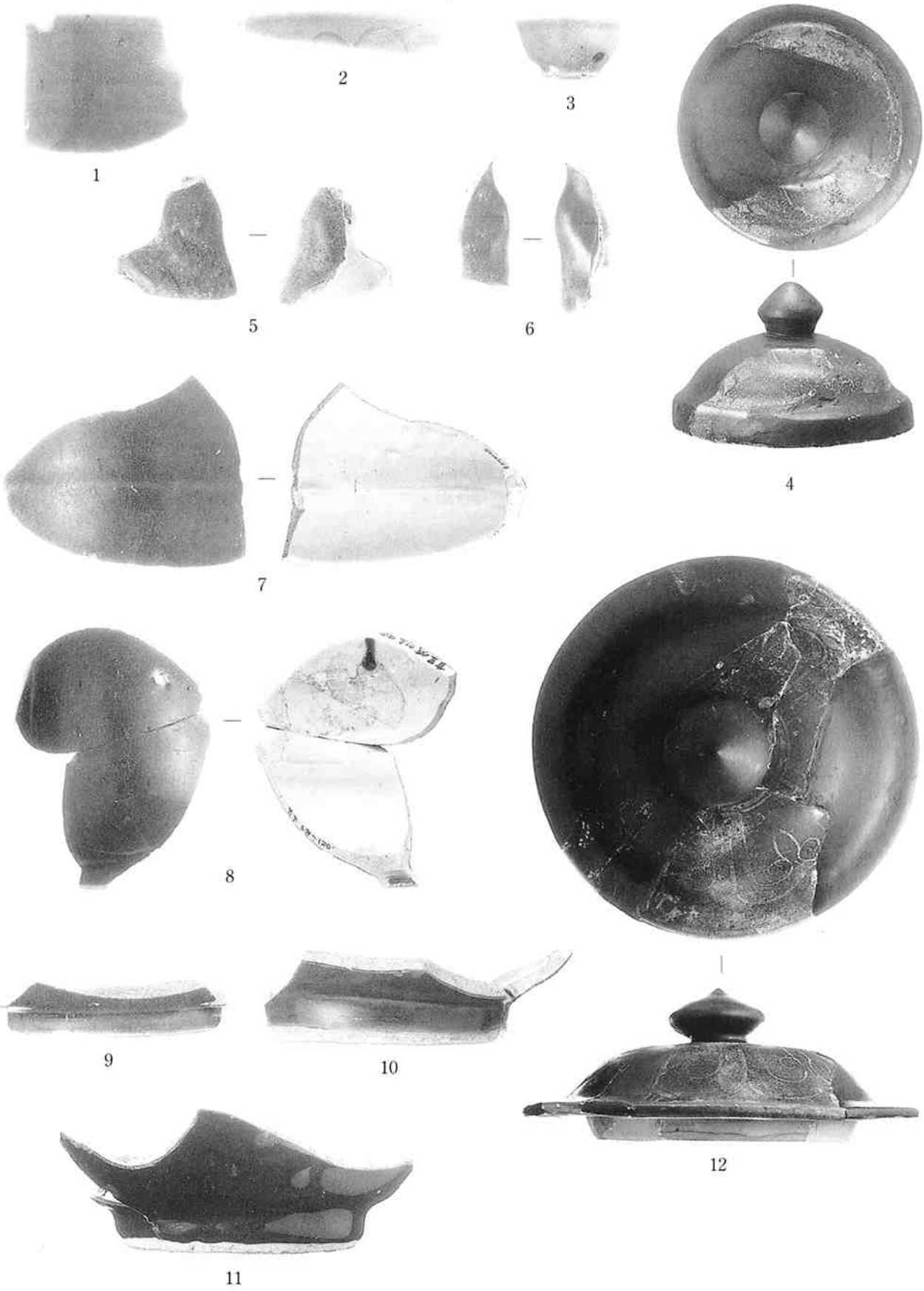
1
3
4
14
15
2
6
16
5
17
9
7
10
22
12
8
23
11
24
13
25
19
26
18
28
21
20
27
29
30

図版29　青花

図版30　青花

図版31　青花

図版32　青花



図版33　瑠璃釉・紅釉

13

18

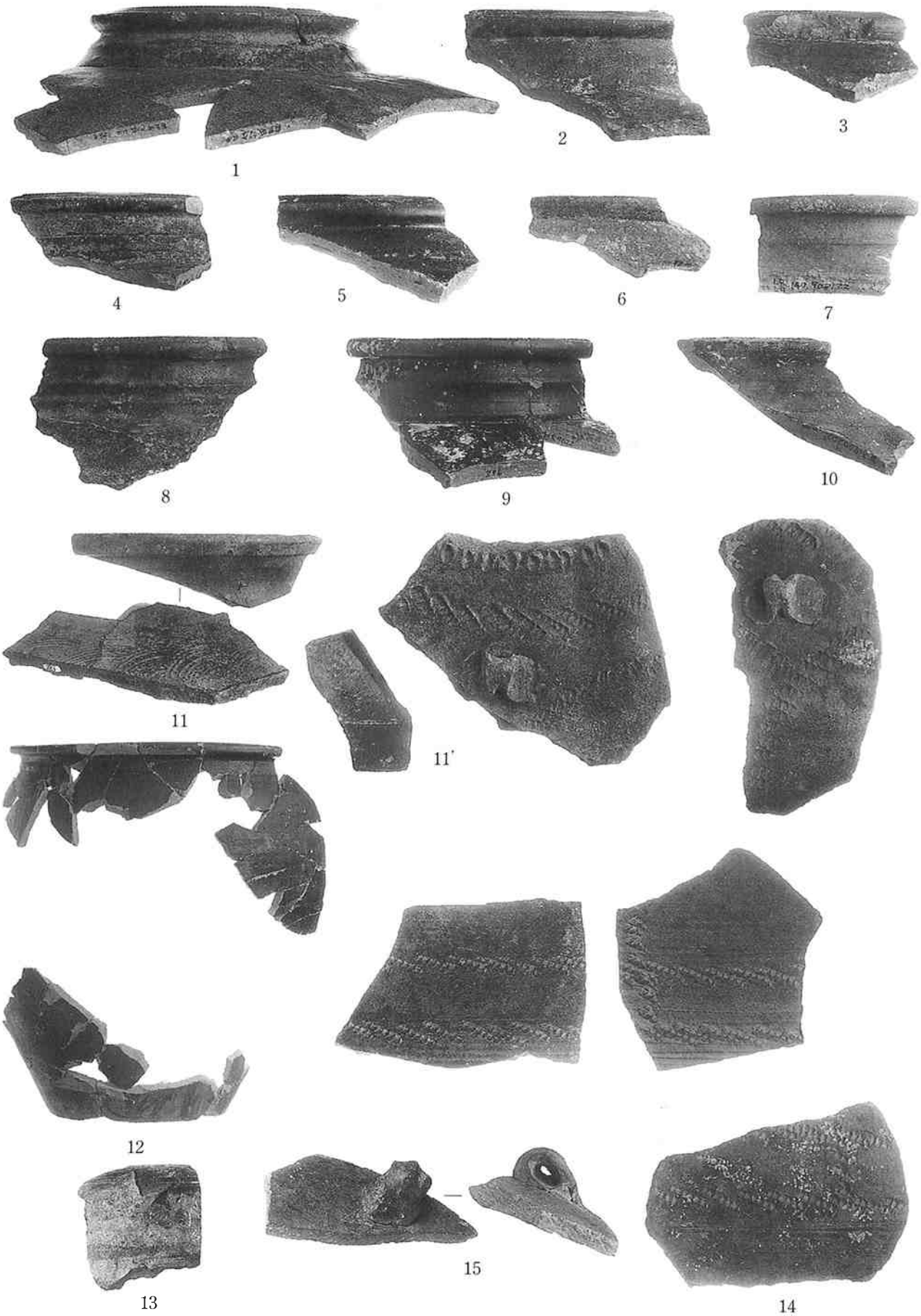
14

15

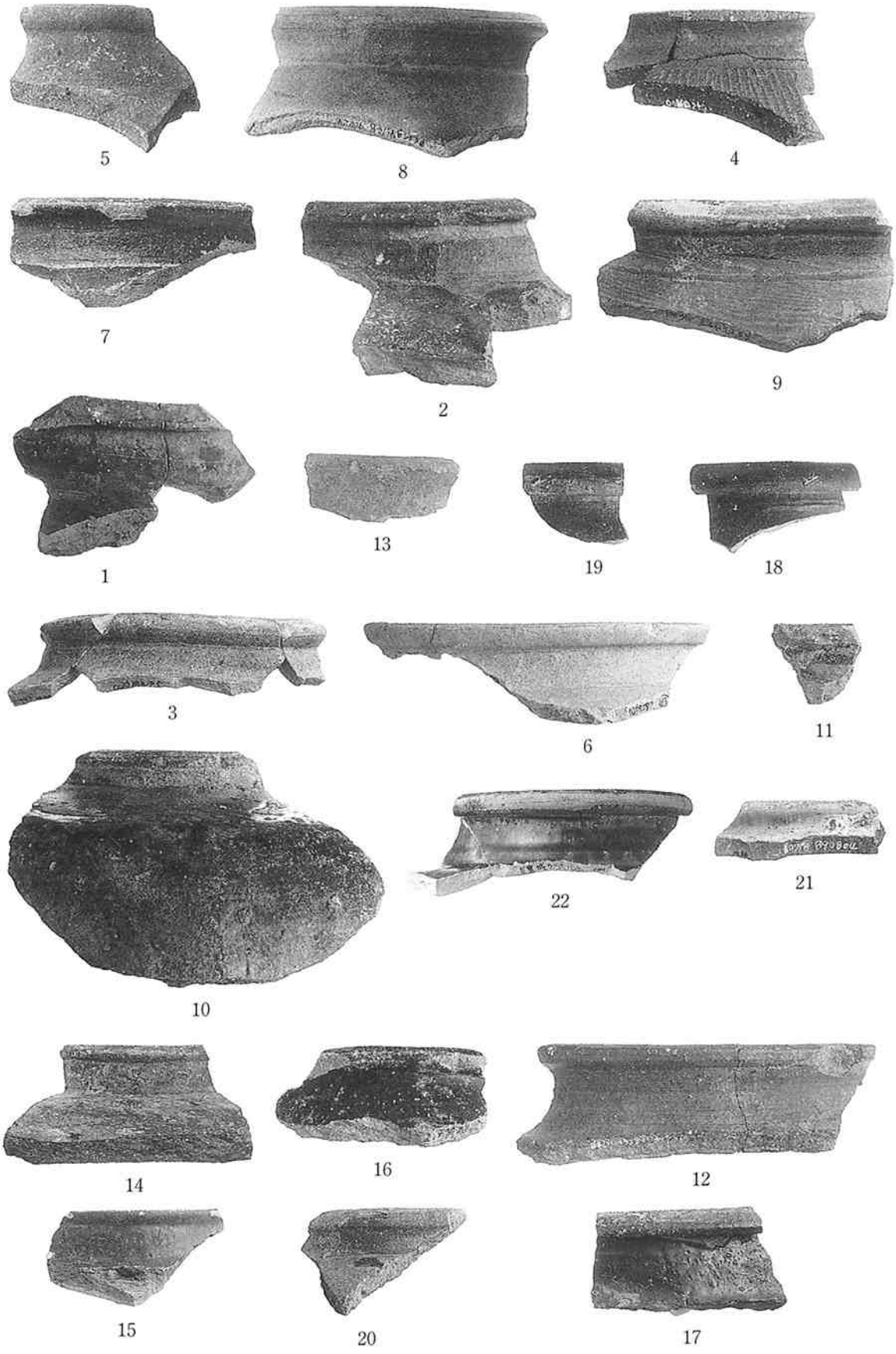
16

17

図版34　瑠璃釉・紅釉

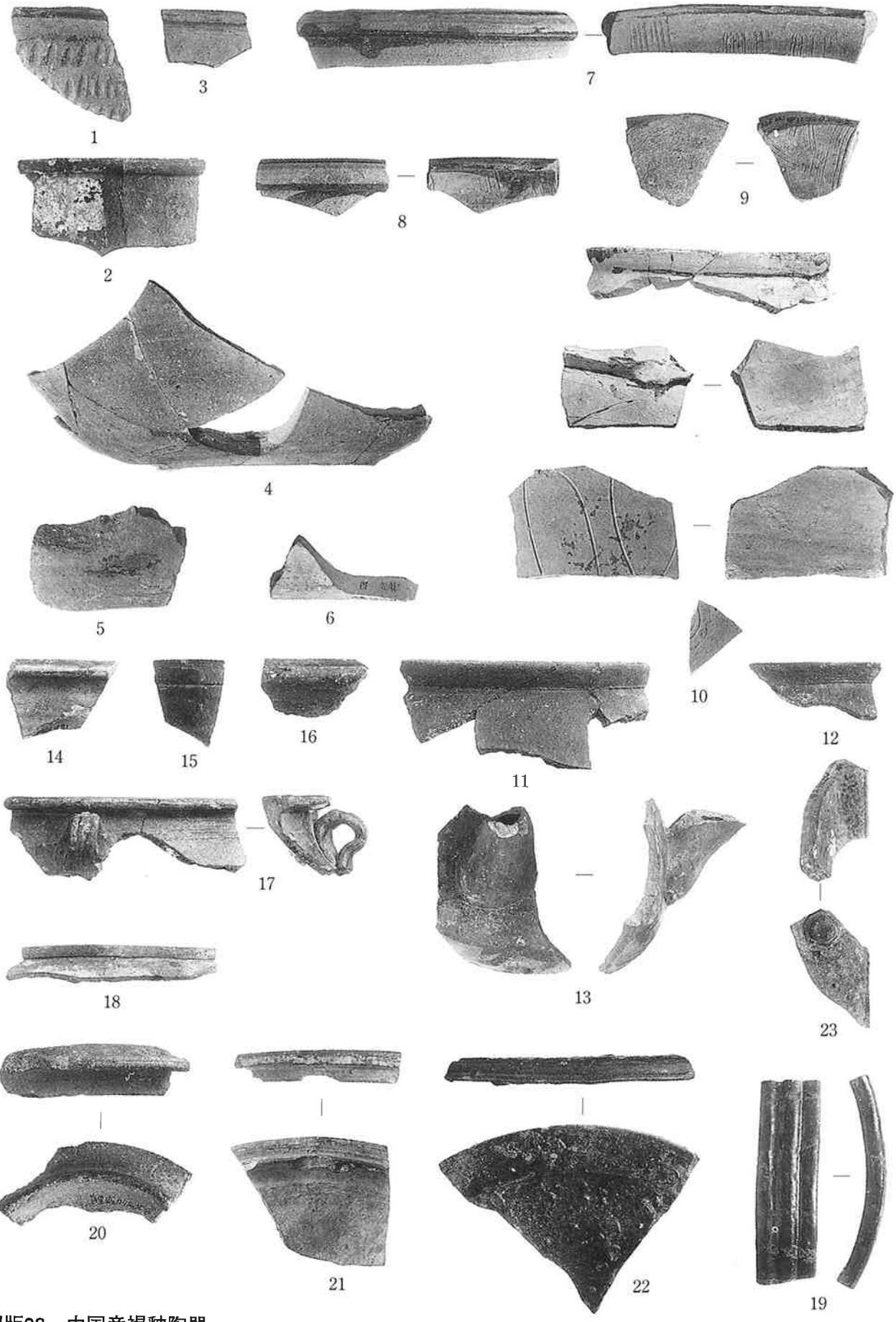


図版35　中国産褐釉陶器

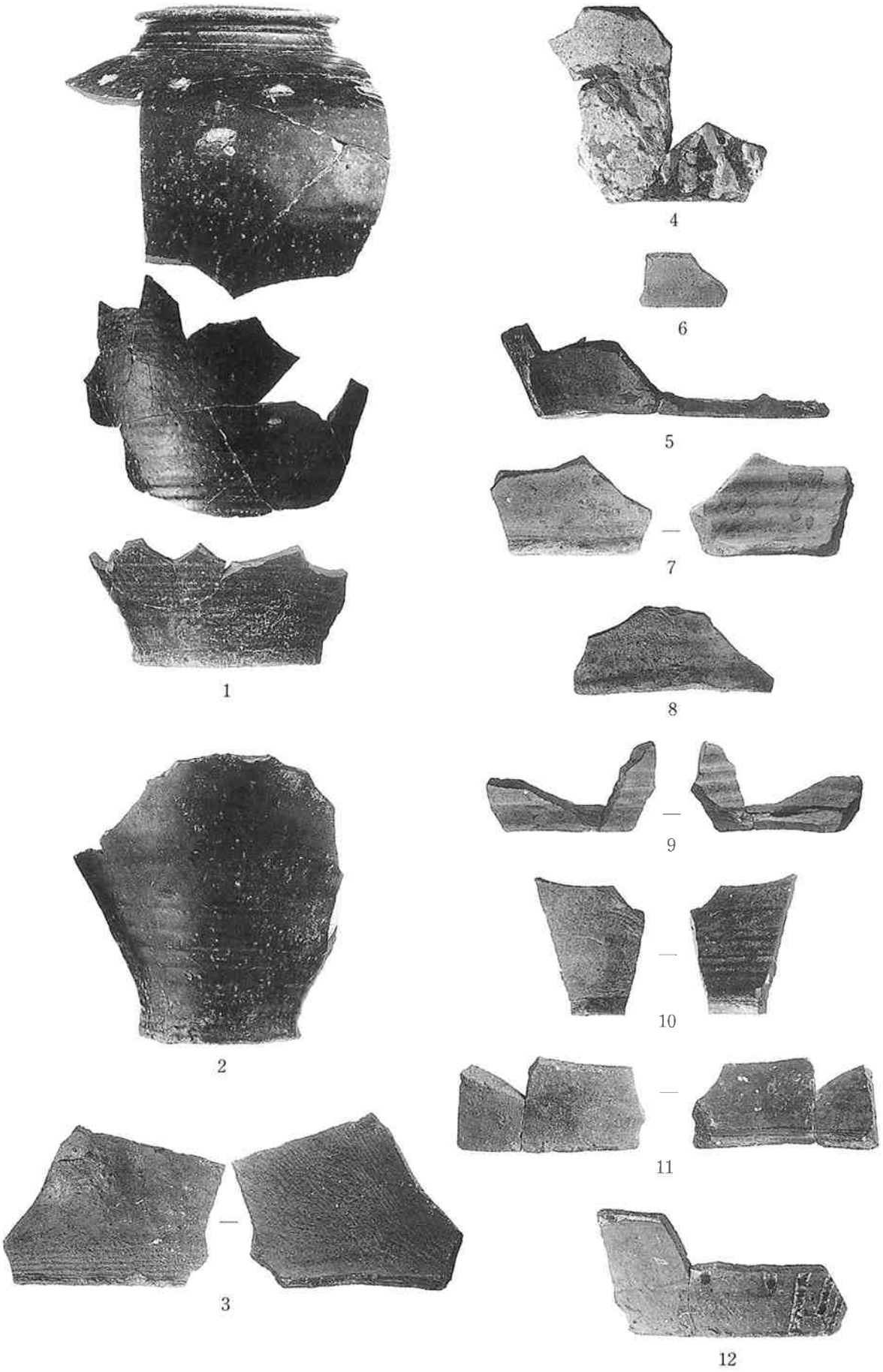


図版36　中国産褐釉陶器

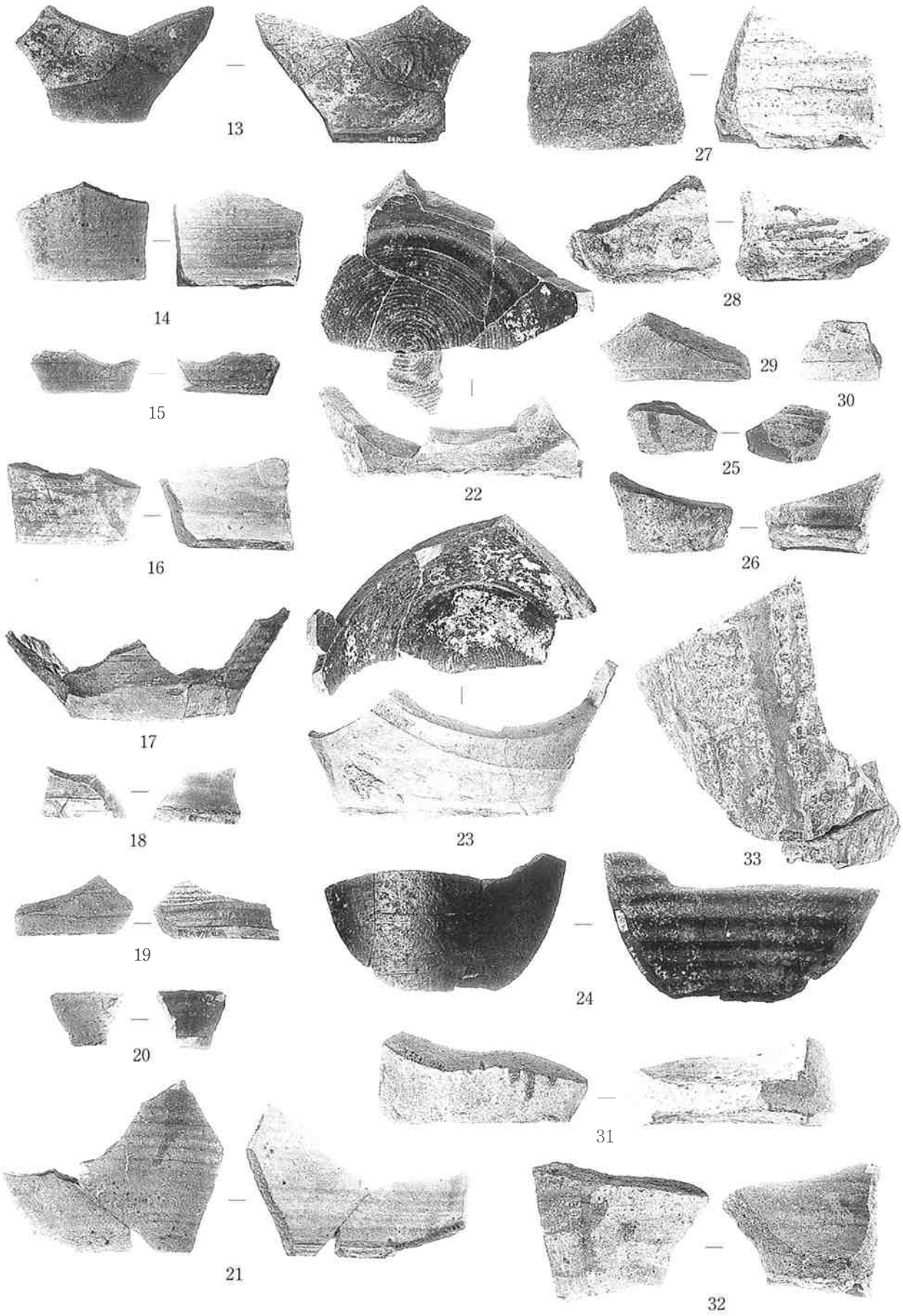
図版37　中国産褐釉陶器



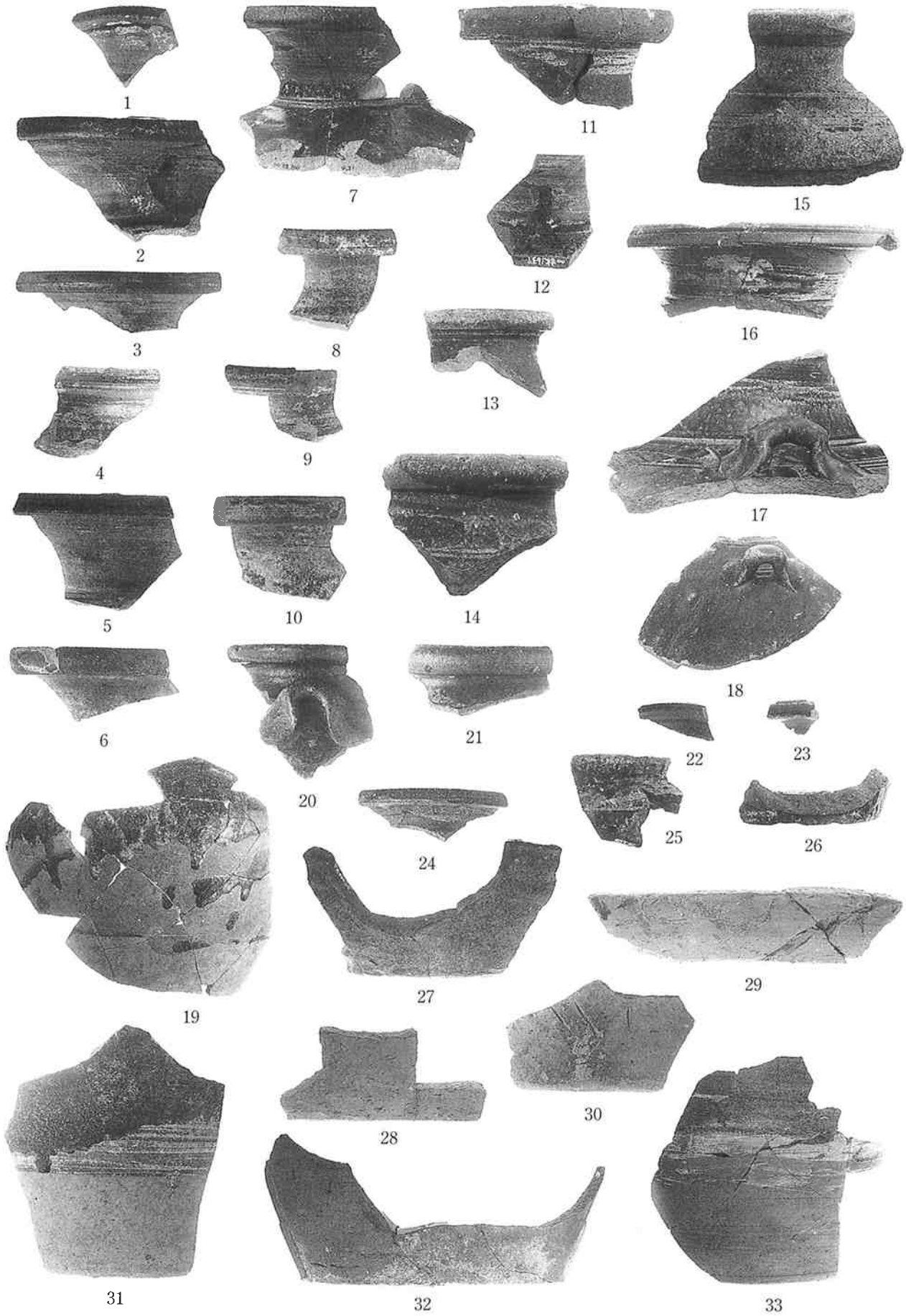
図版38　中国産褐釉陶器



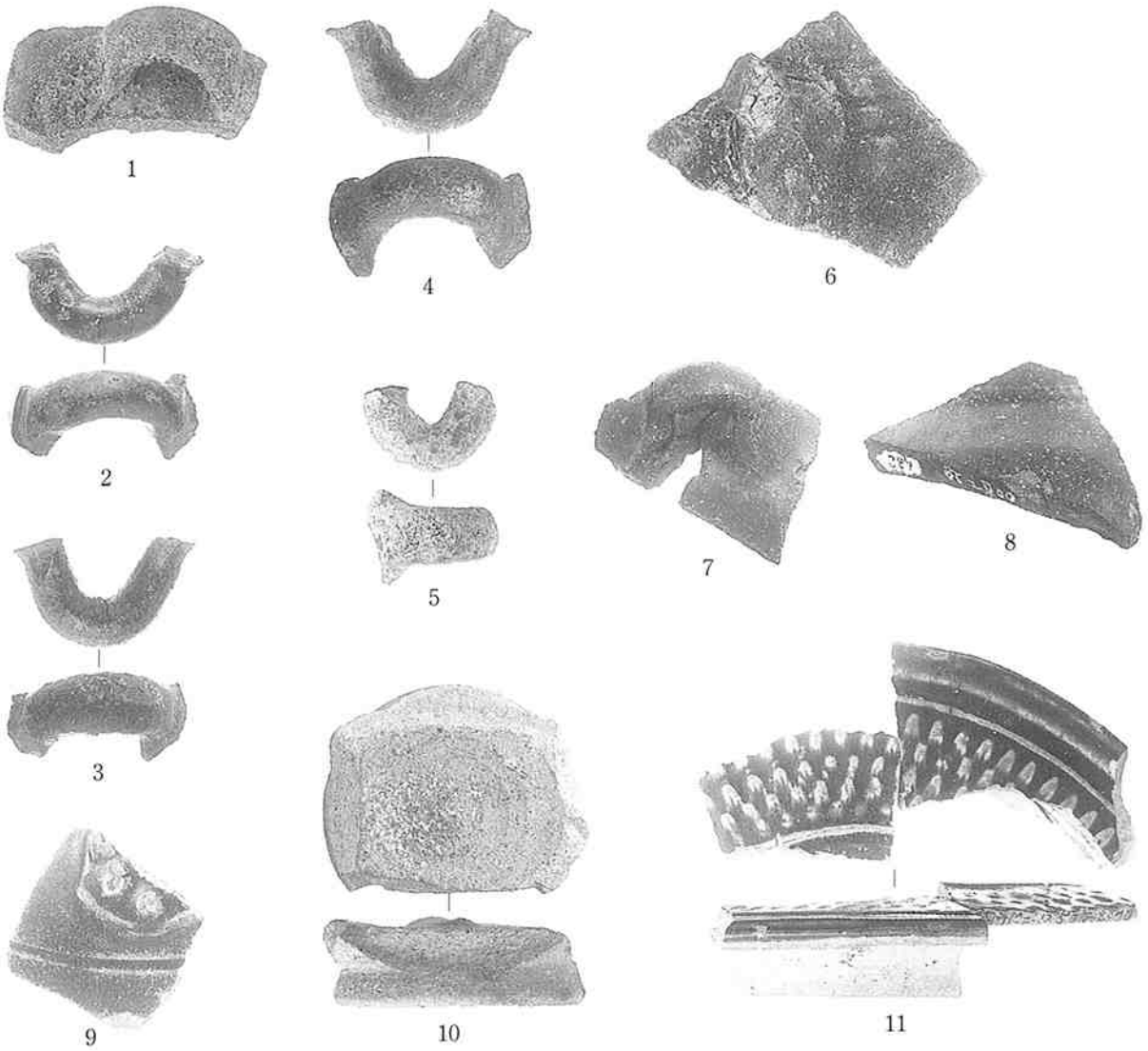
図版39　中国産褐釉陶器



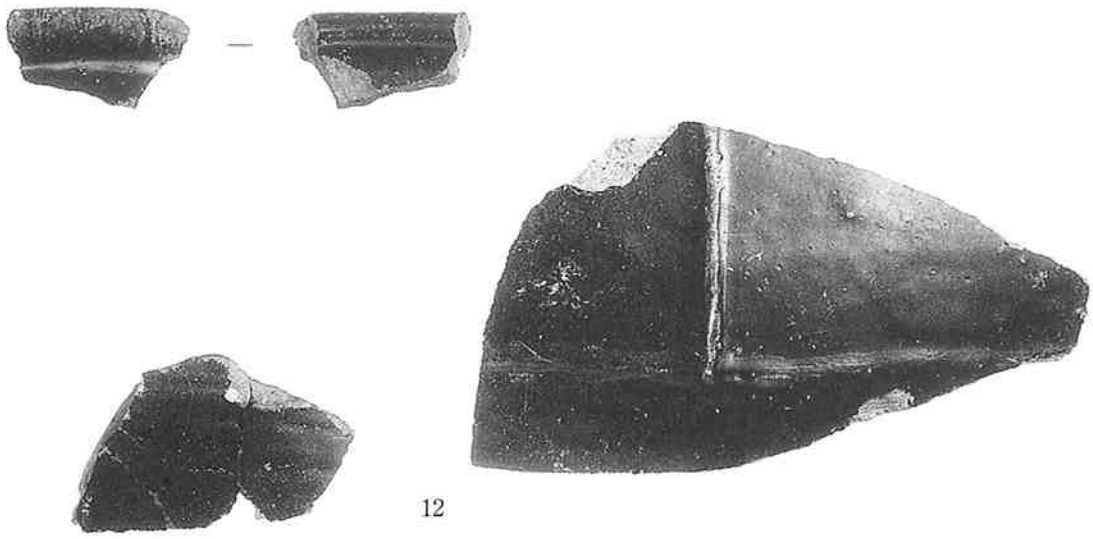
図版40　中国産褐釉陶器



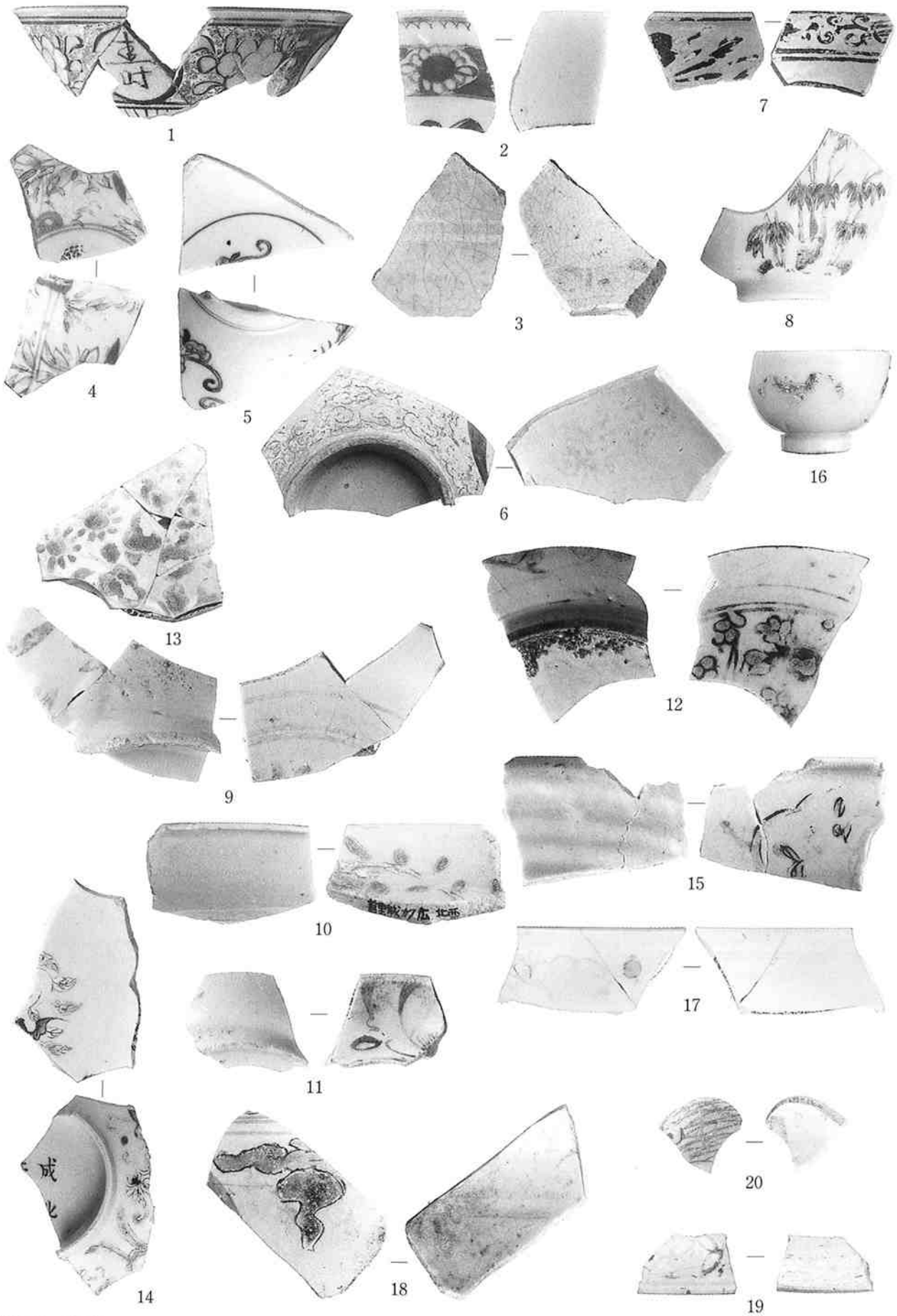
図版41　タイ産褐釉陶器



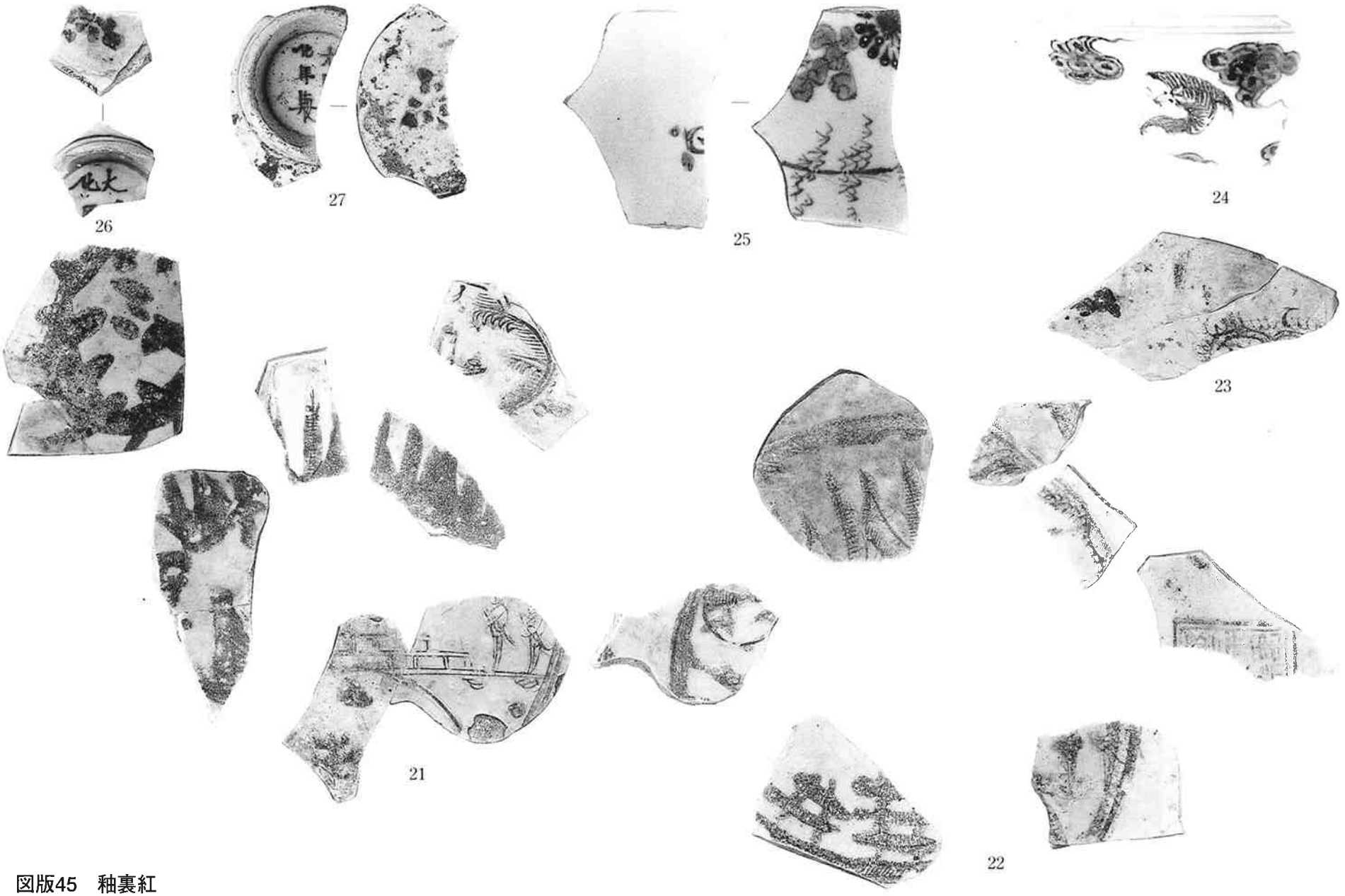
図版42　タイ産褐釉陶器



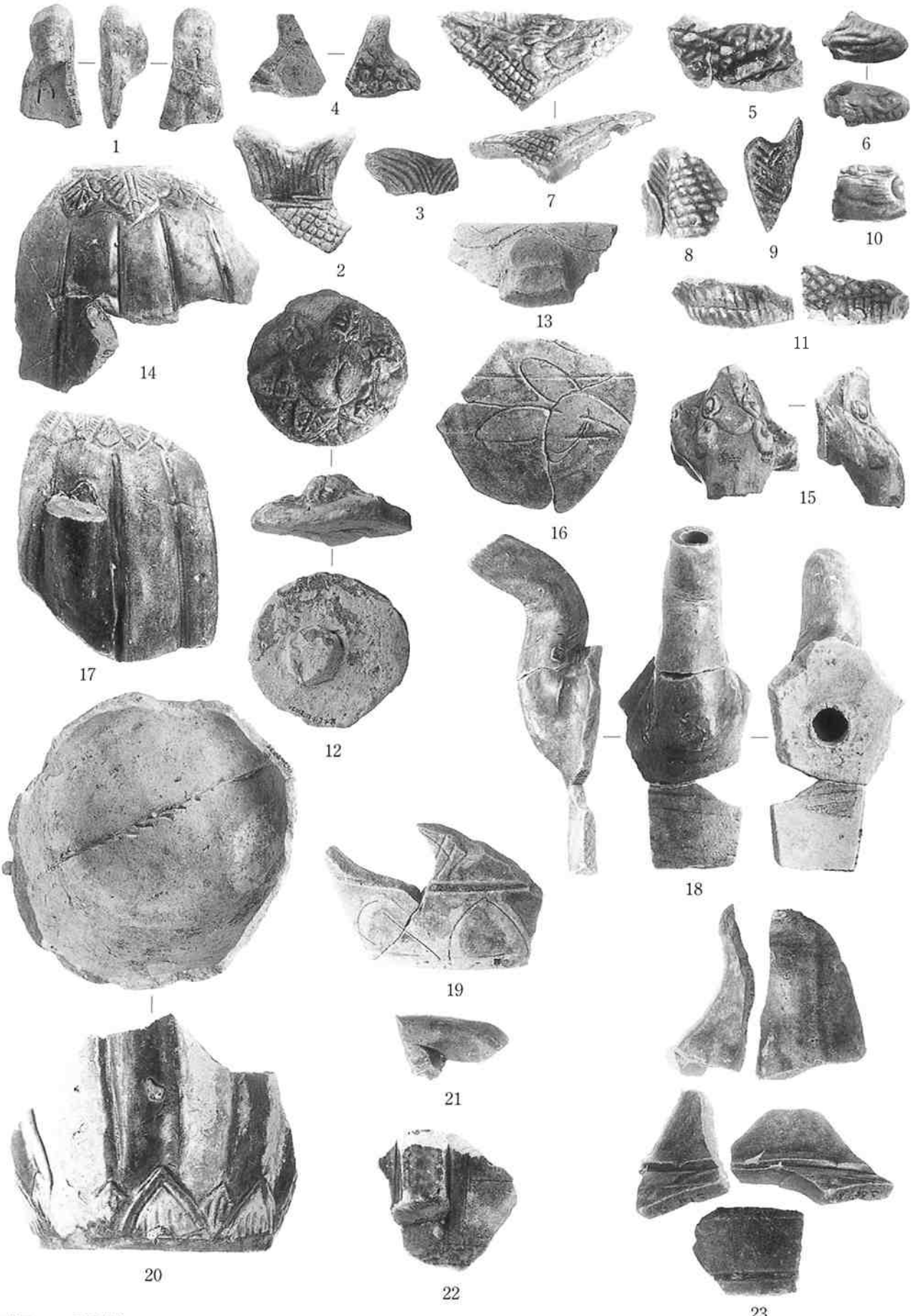
図版43　ミャンマー産褐釉陶器



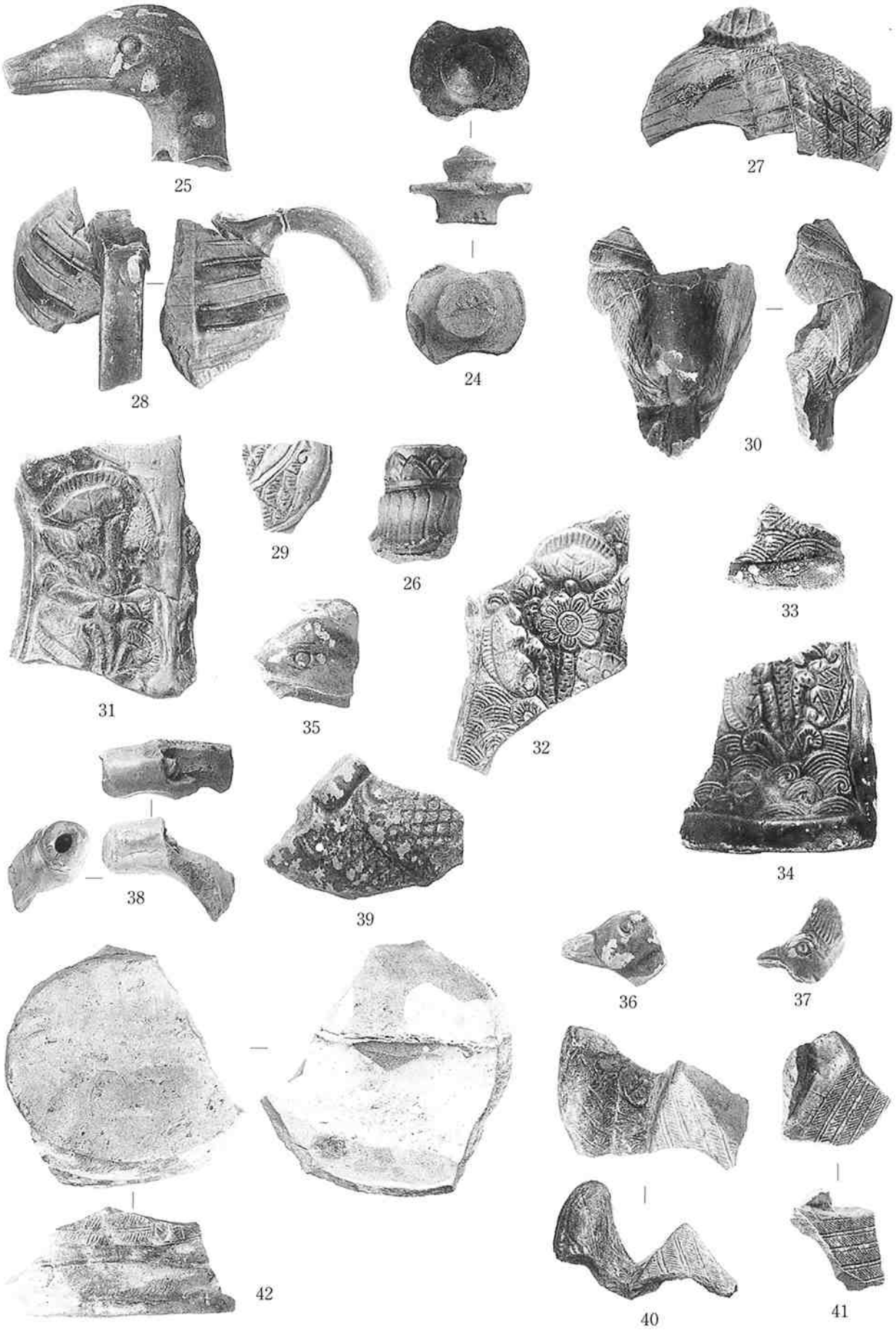
図版44　色絵



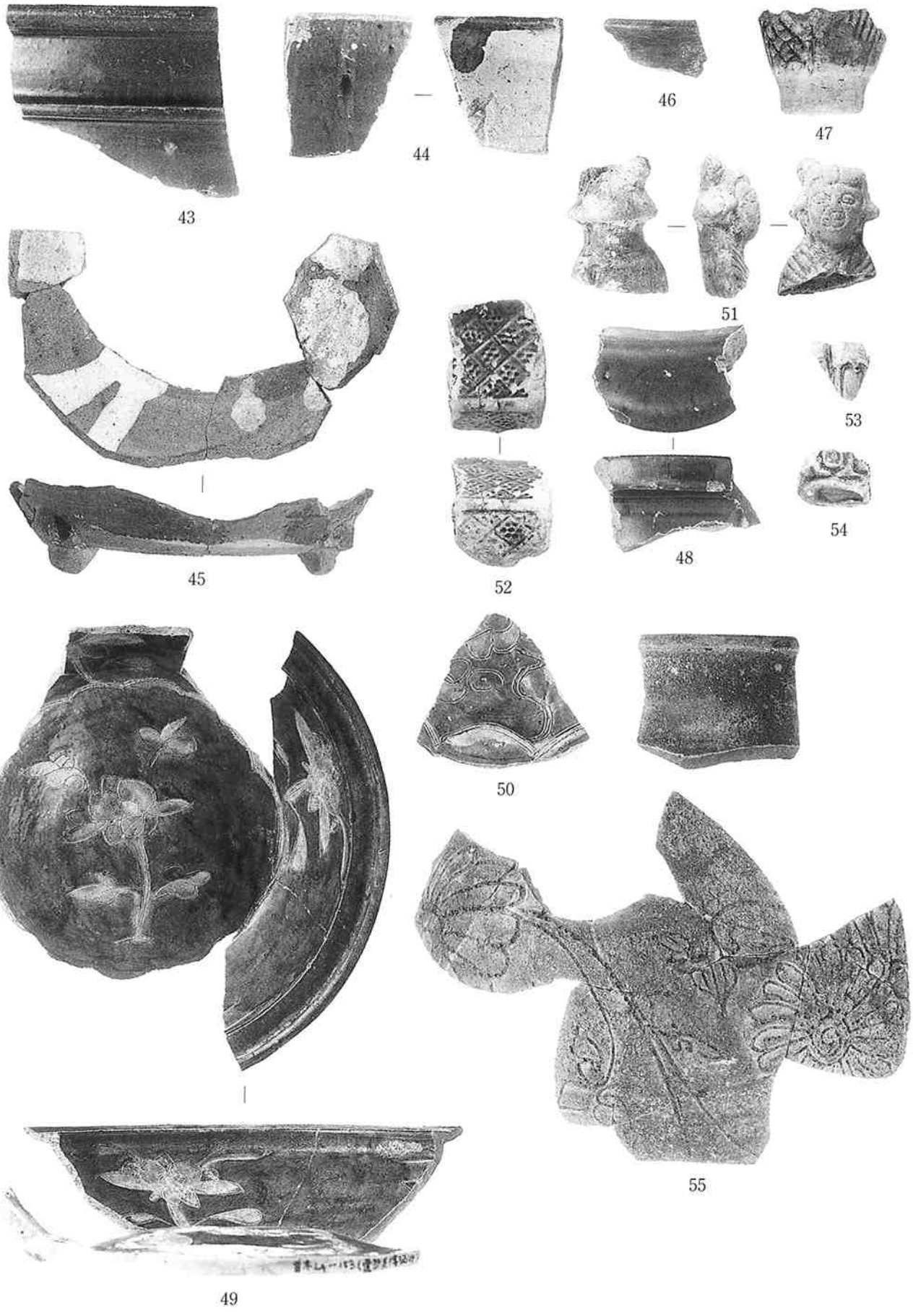
図版45　釉裏紅



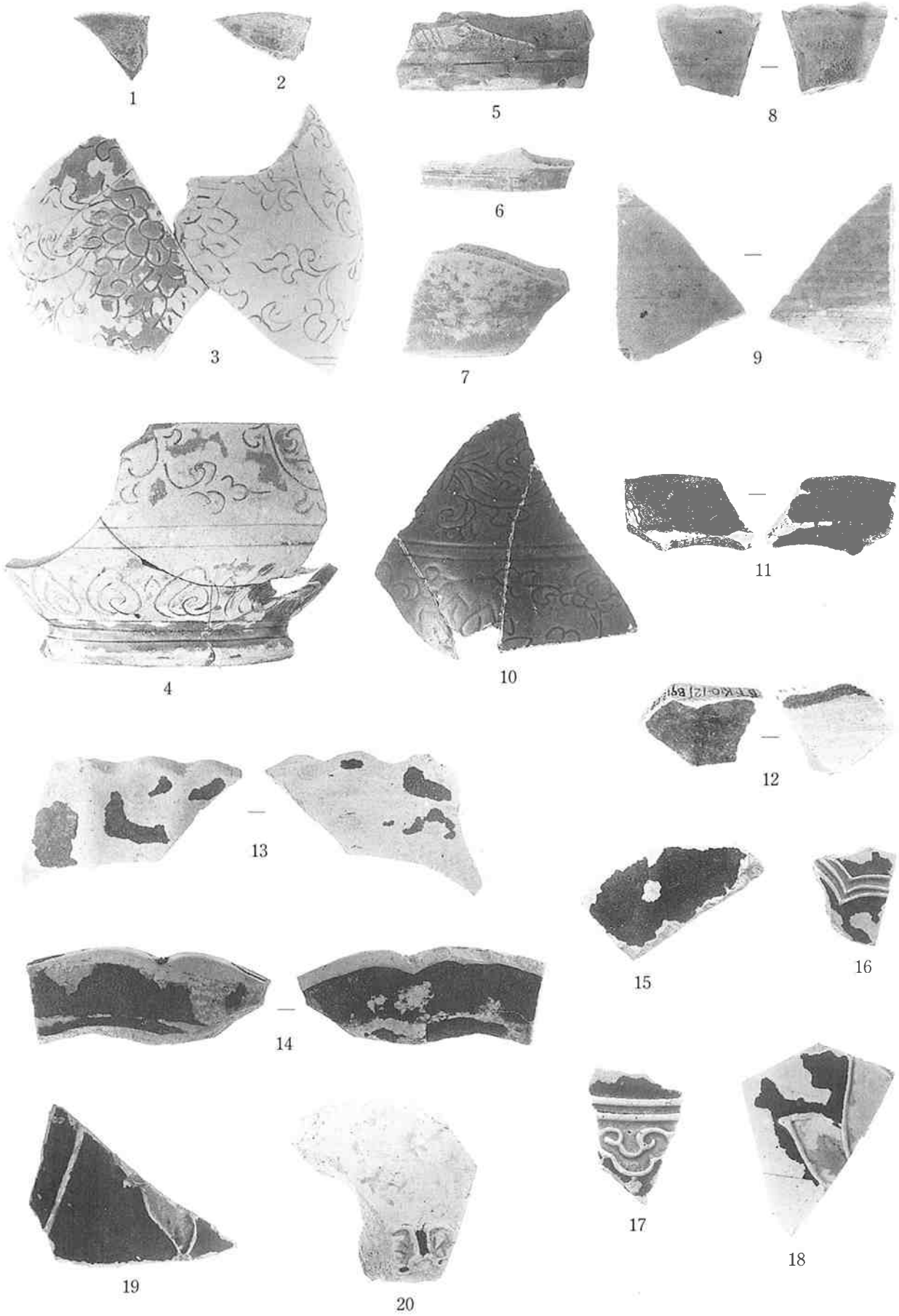
図版46　彩釉陶



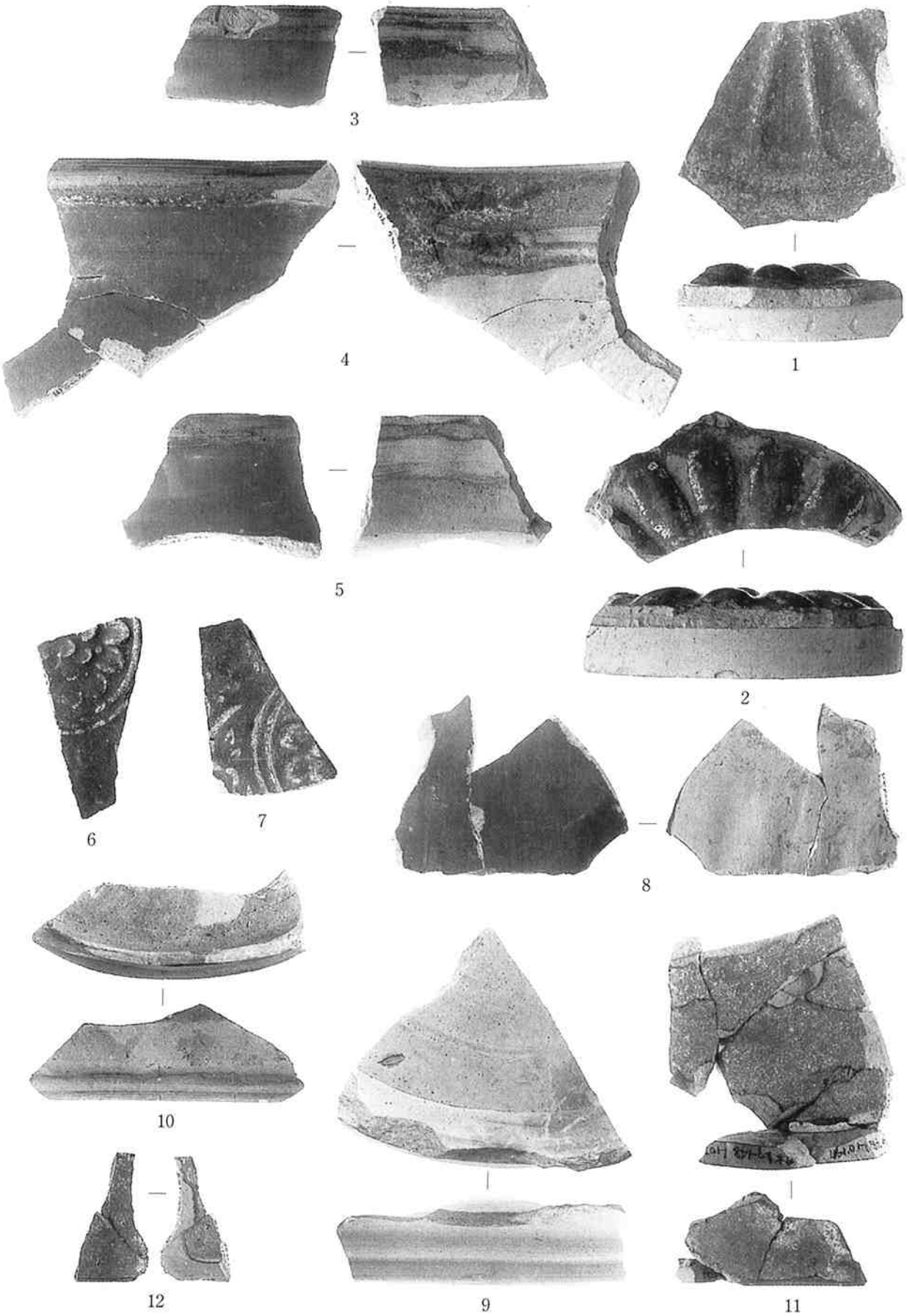
図版47　彩釉陶



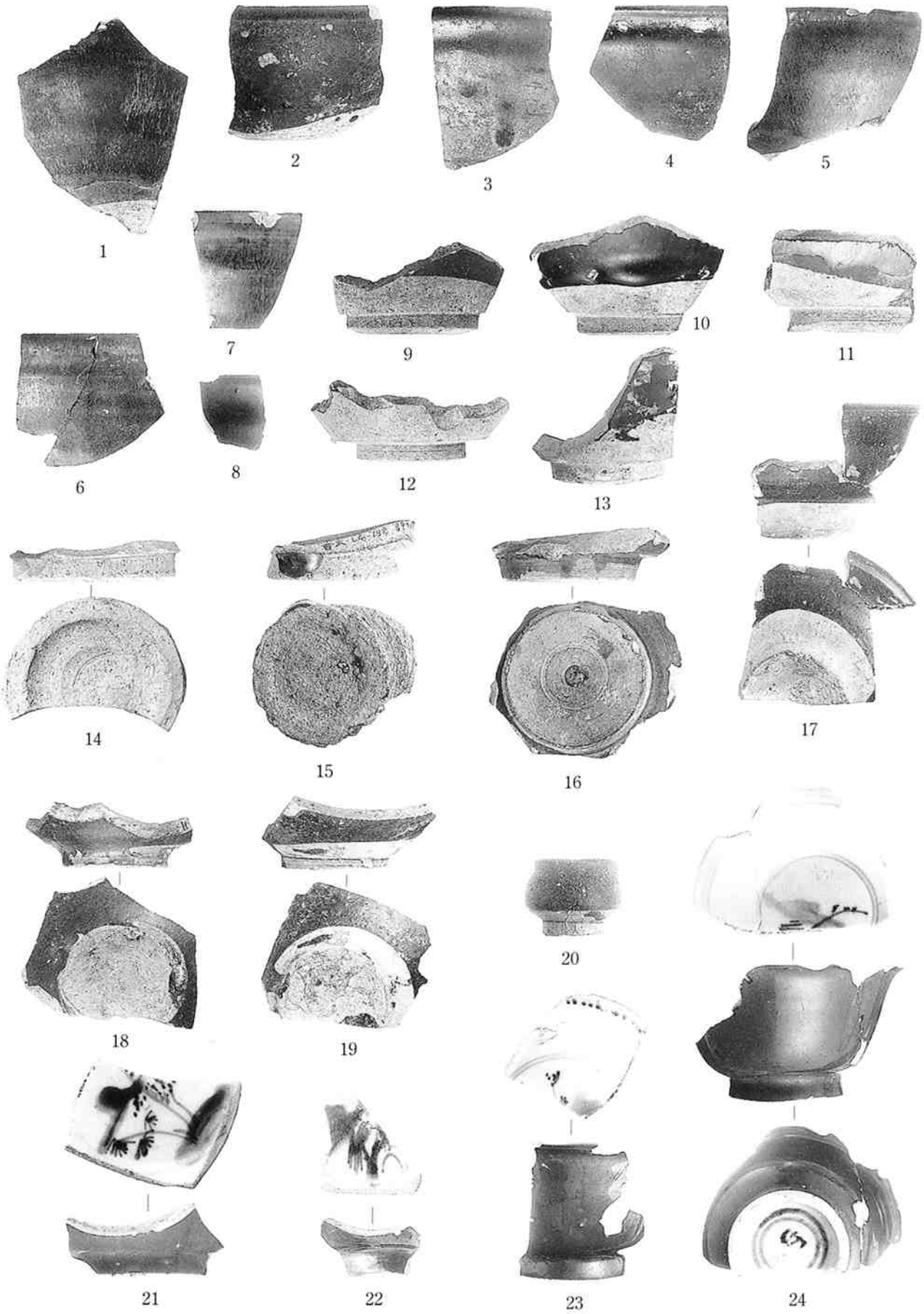
図版48　彩釉陶



図版49　彩釉陶



図版50　彩釉陶



図版51　黒釉陶器・鉄釉染付

1～5

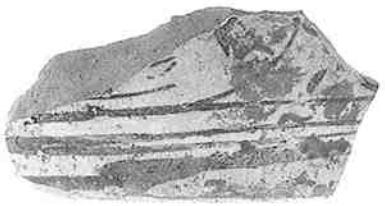
7

6

9

8

11



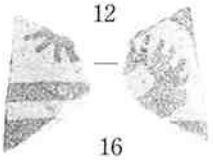
10

14

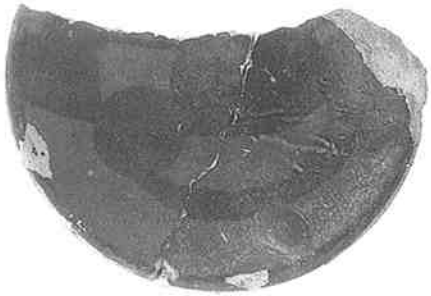
15

13

12



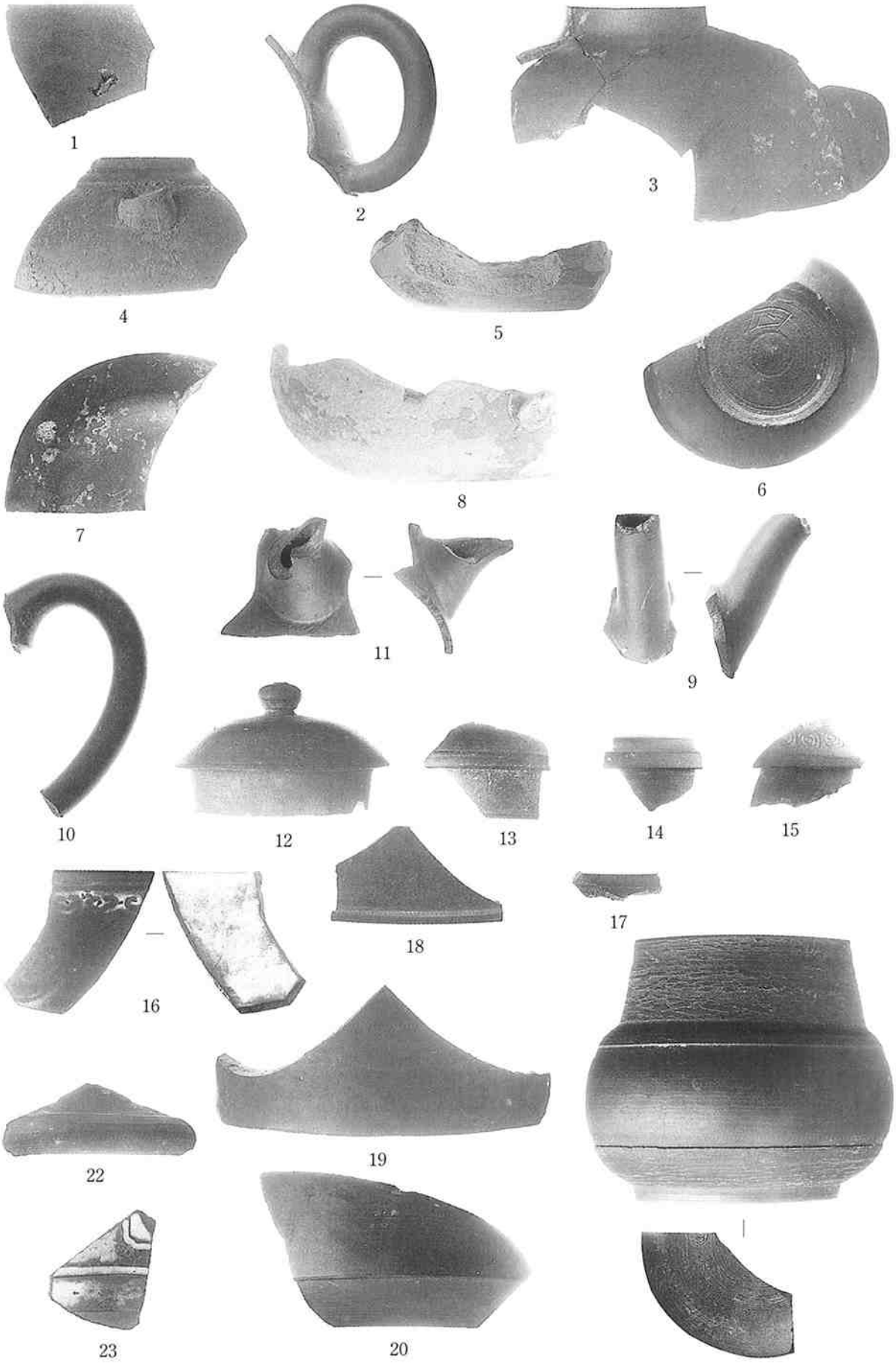
16



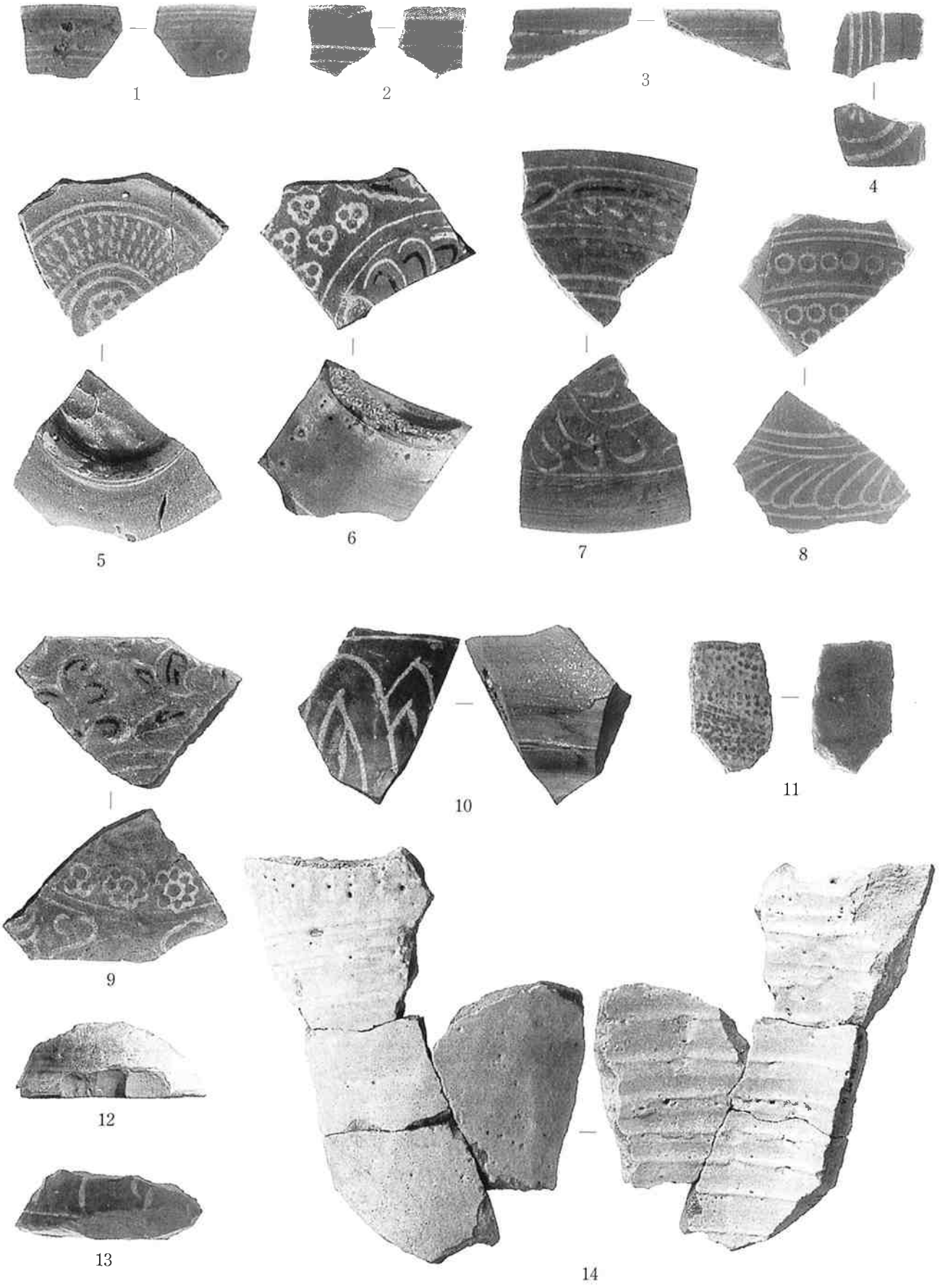
17

18

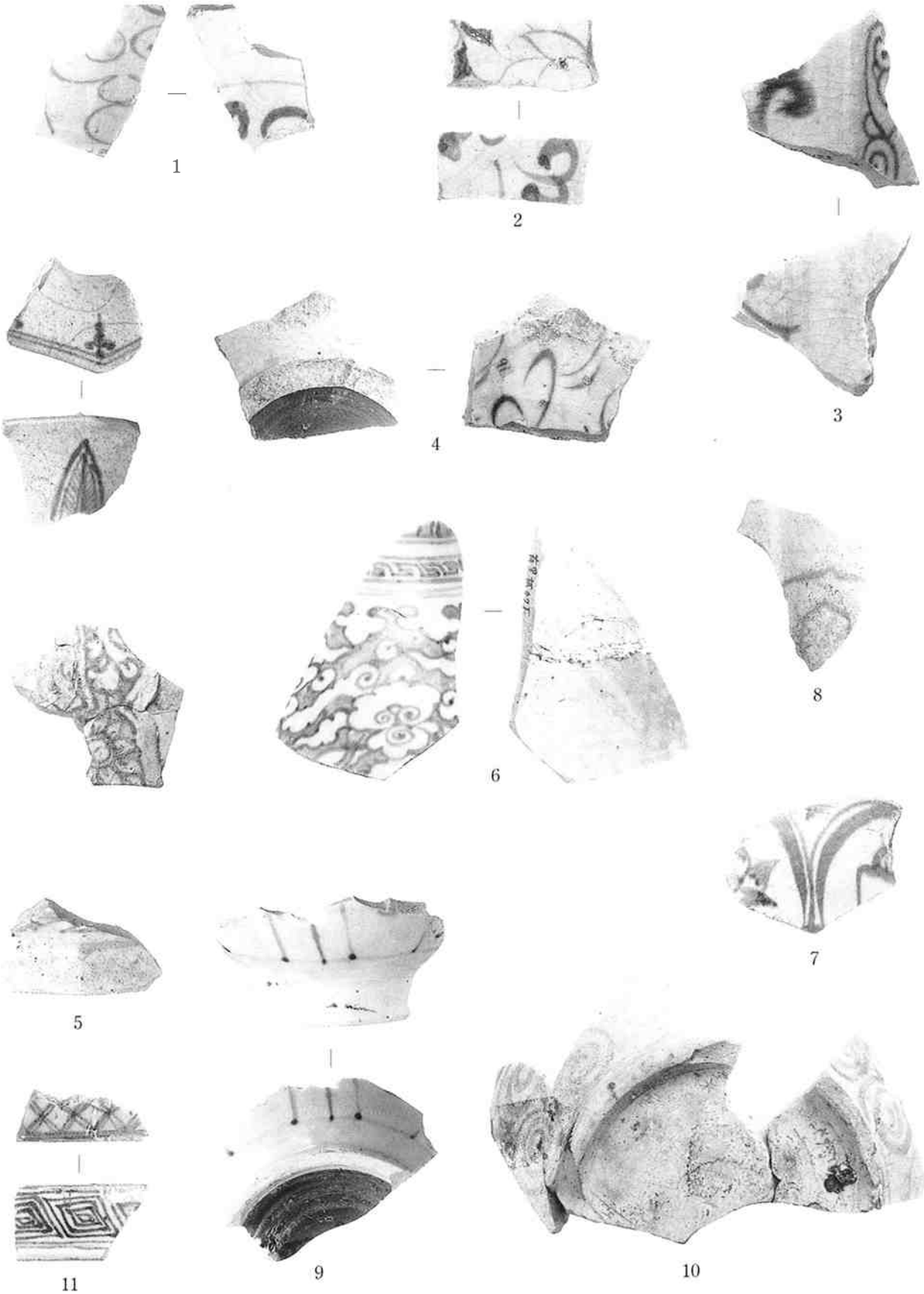
図版52　鉄絵



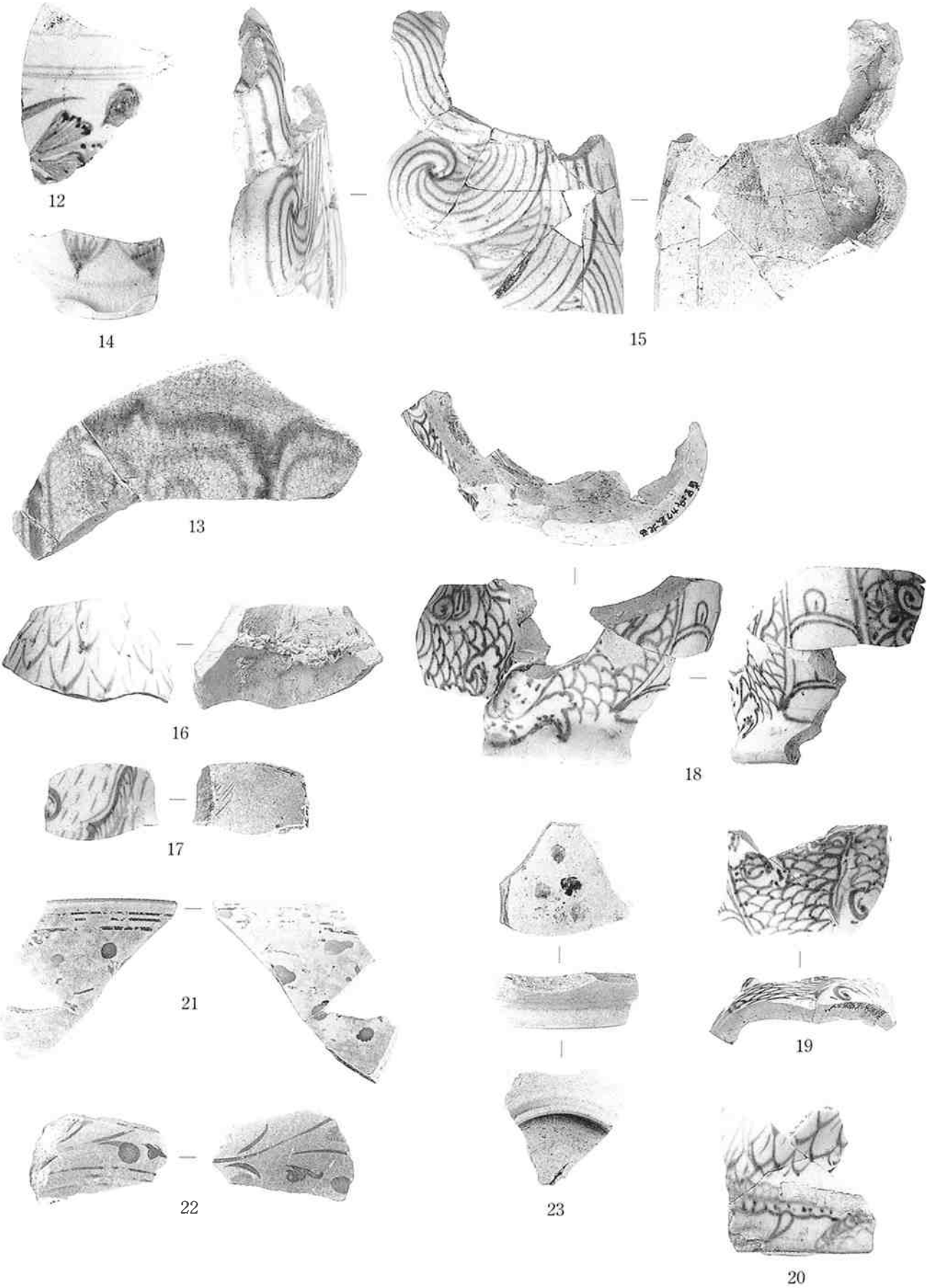
図版53　中国産無釉陶器



図版54　高麗青磁



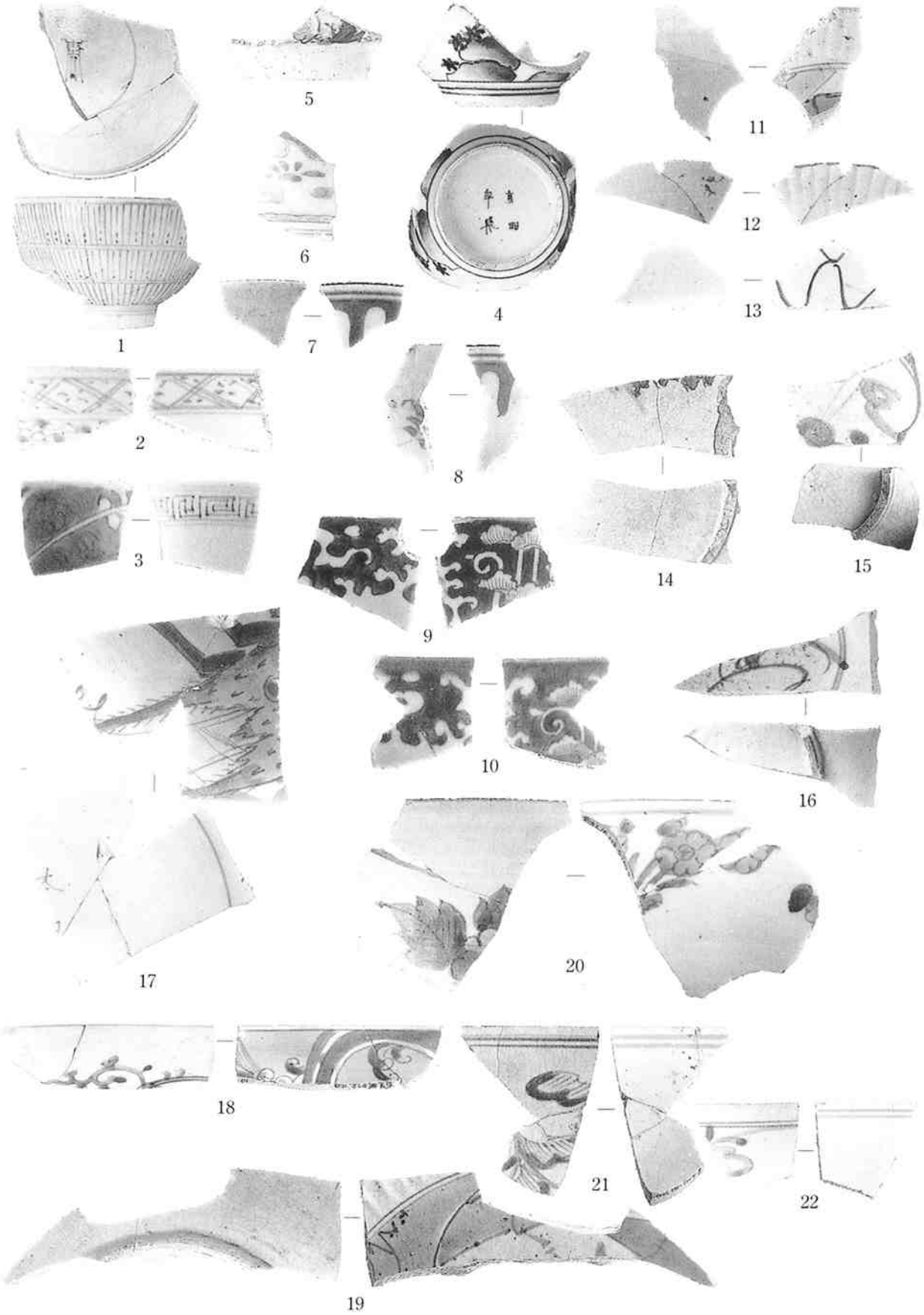
図版55　ベトナム産磁器



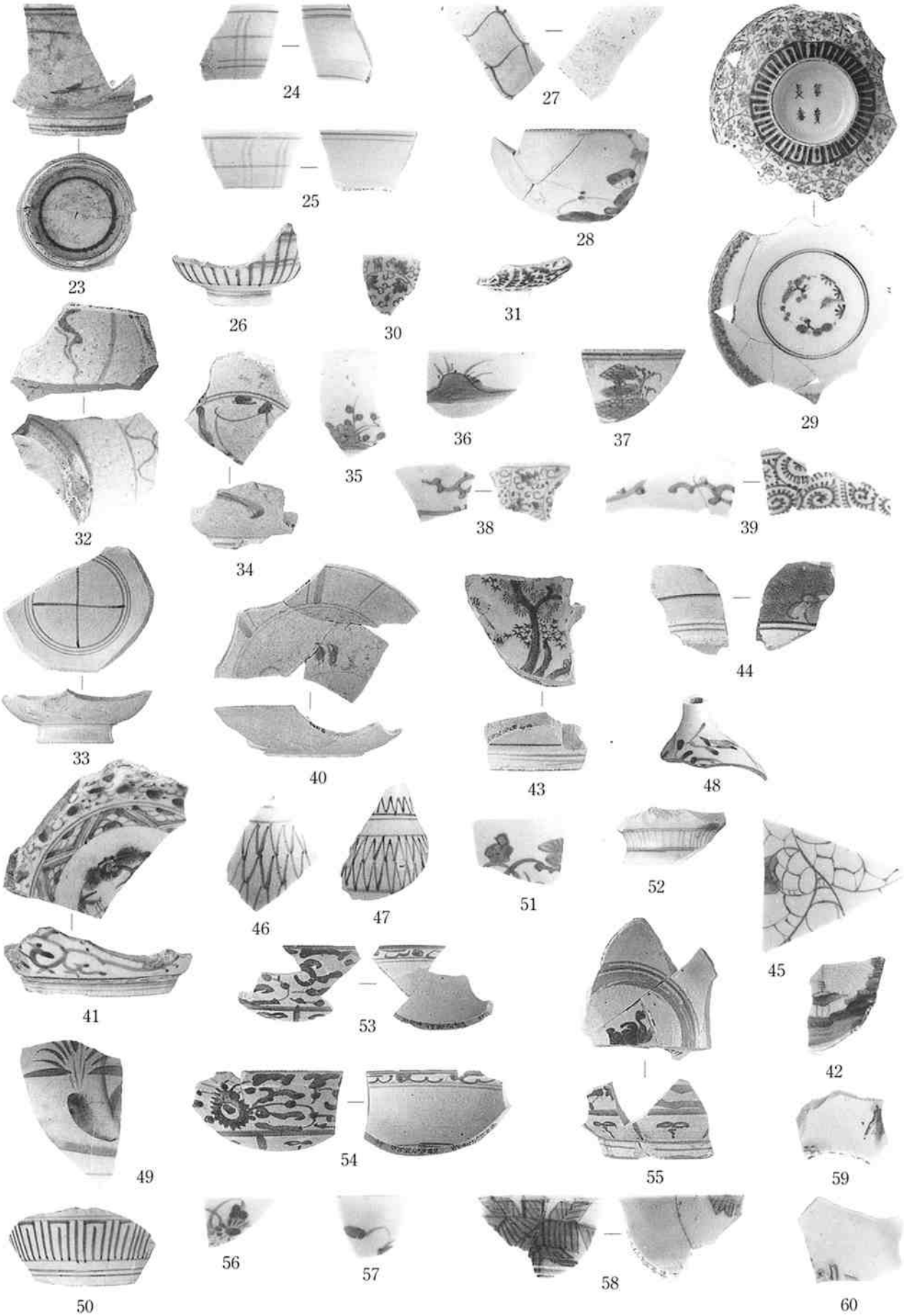
図版56　ベトナム産磁器

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

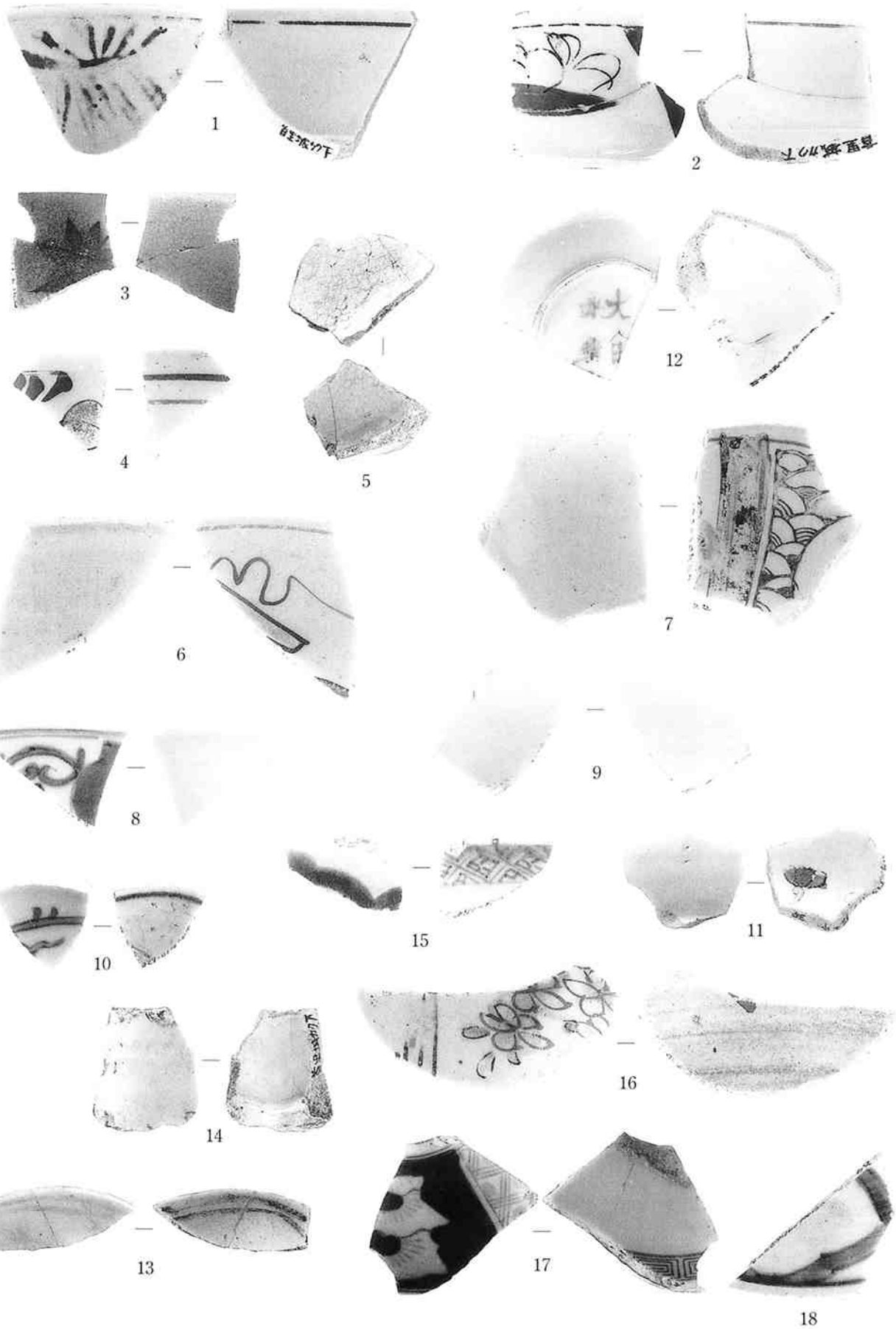
図版57　タイ産半練



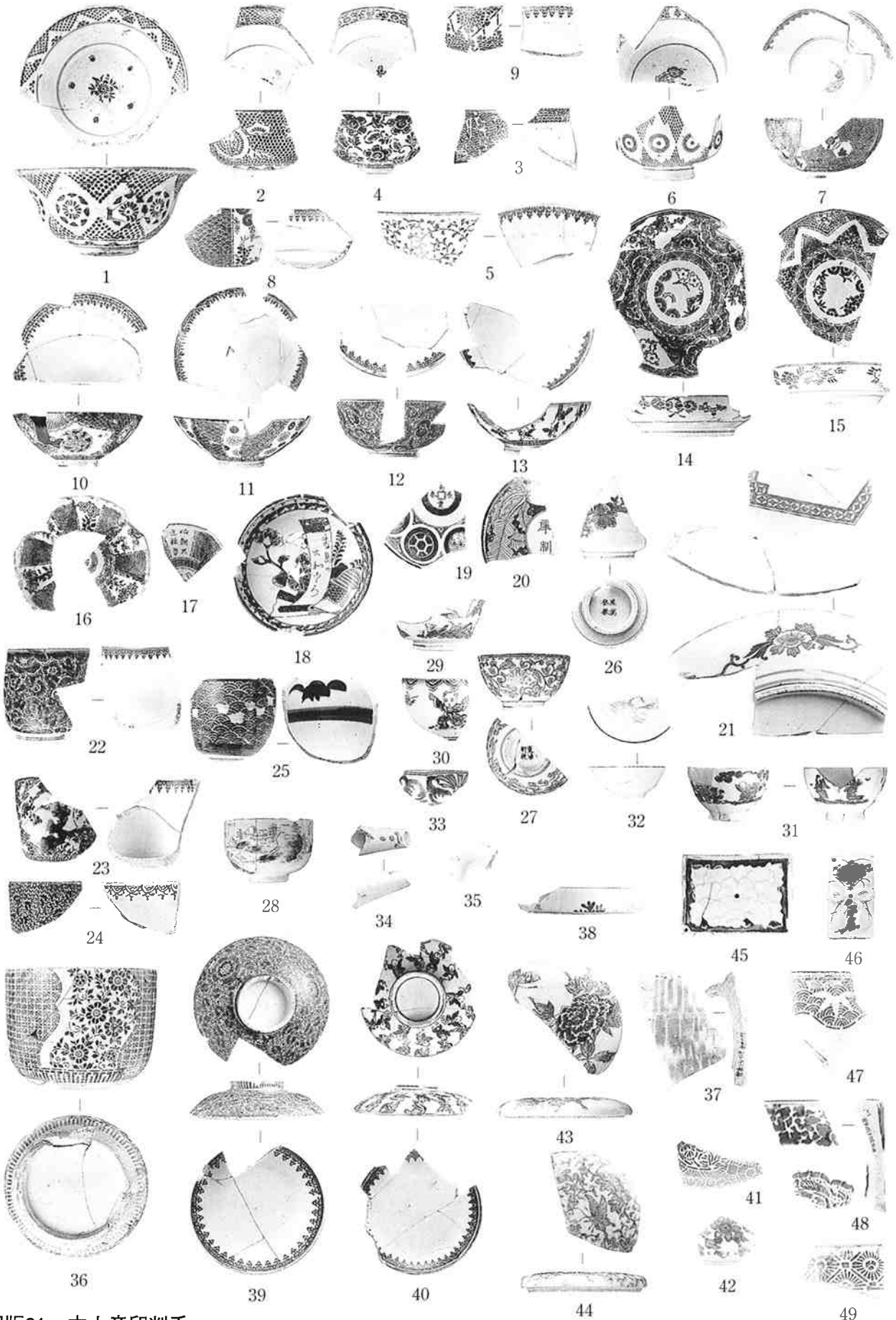
図版58　本土産染付


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60

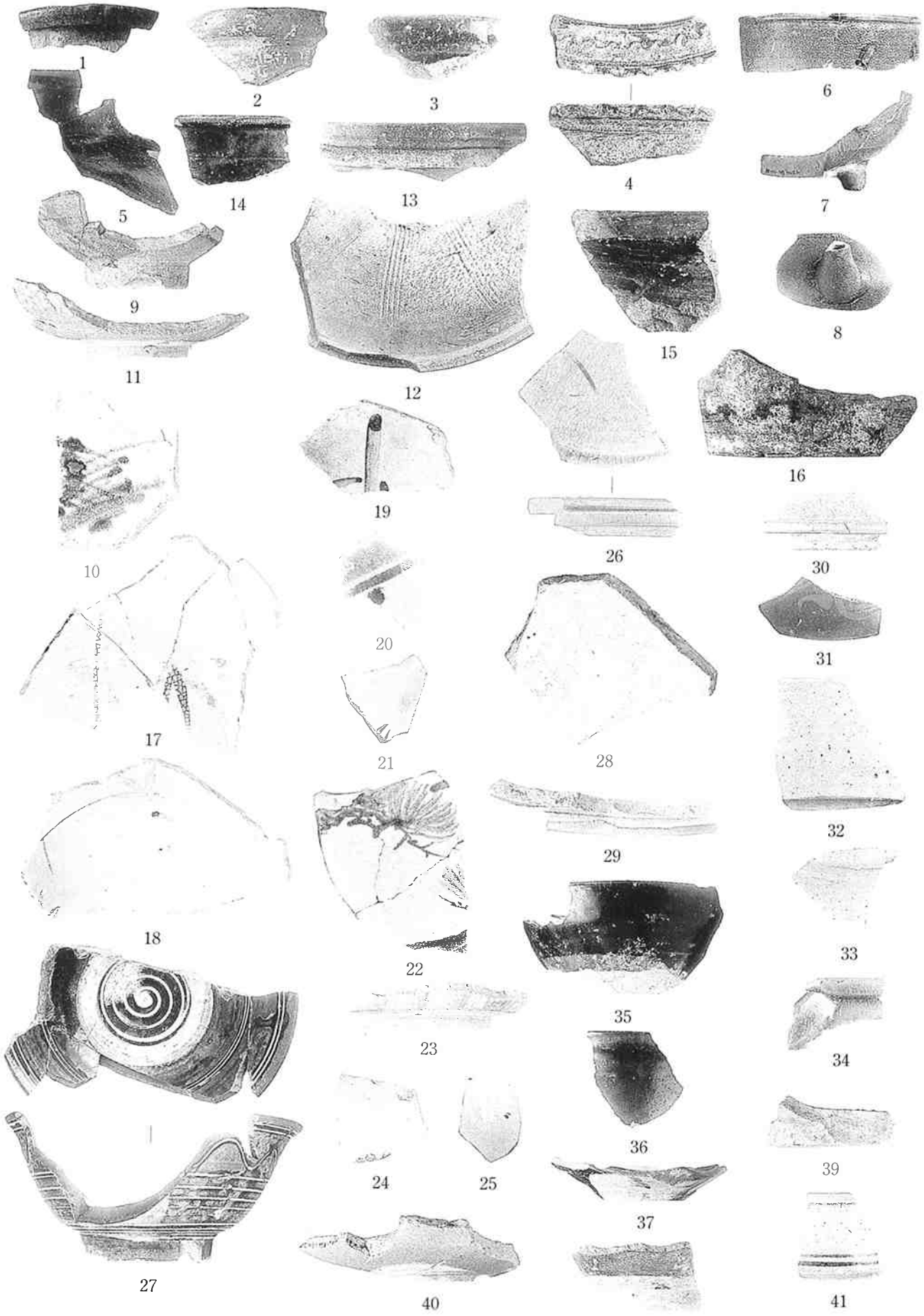
図版59　本土産染付



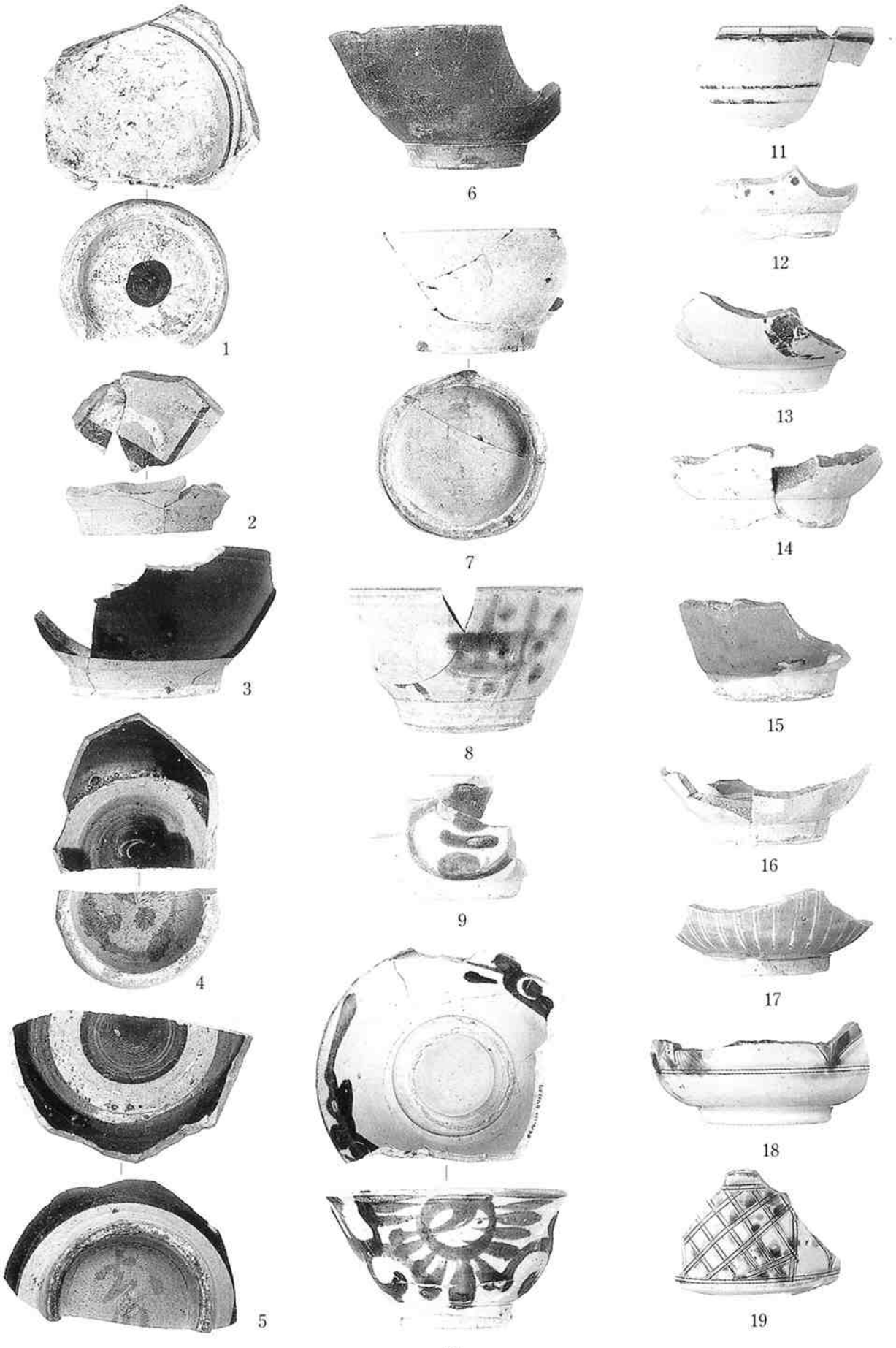
図版60　本土産色絵


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

図版61　本土産印判手

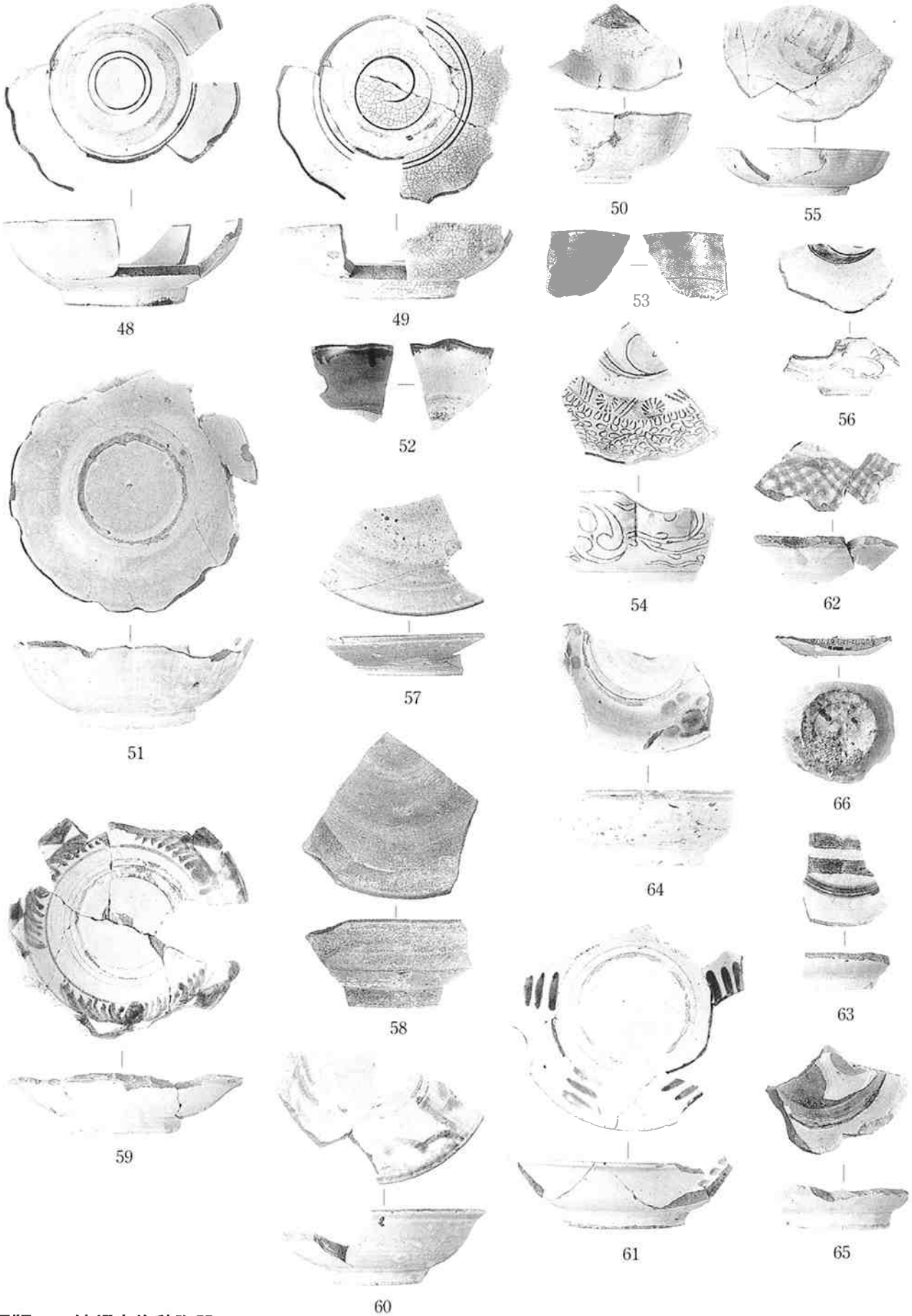

1
2
3
6
5
14
13
4
7
9
12
15
8
11
19
16
10
26
30
20
31
17
28
21
32
29
18
33
35
22
23
34
36
24
25
39
37
27
40
38
41

図版62　本土産陶器

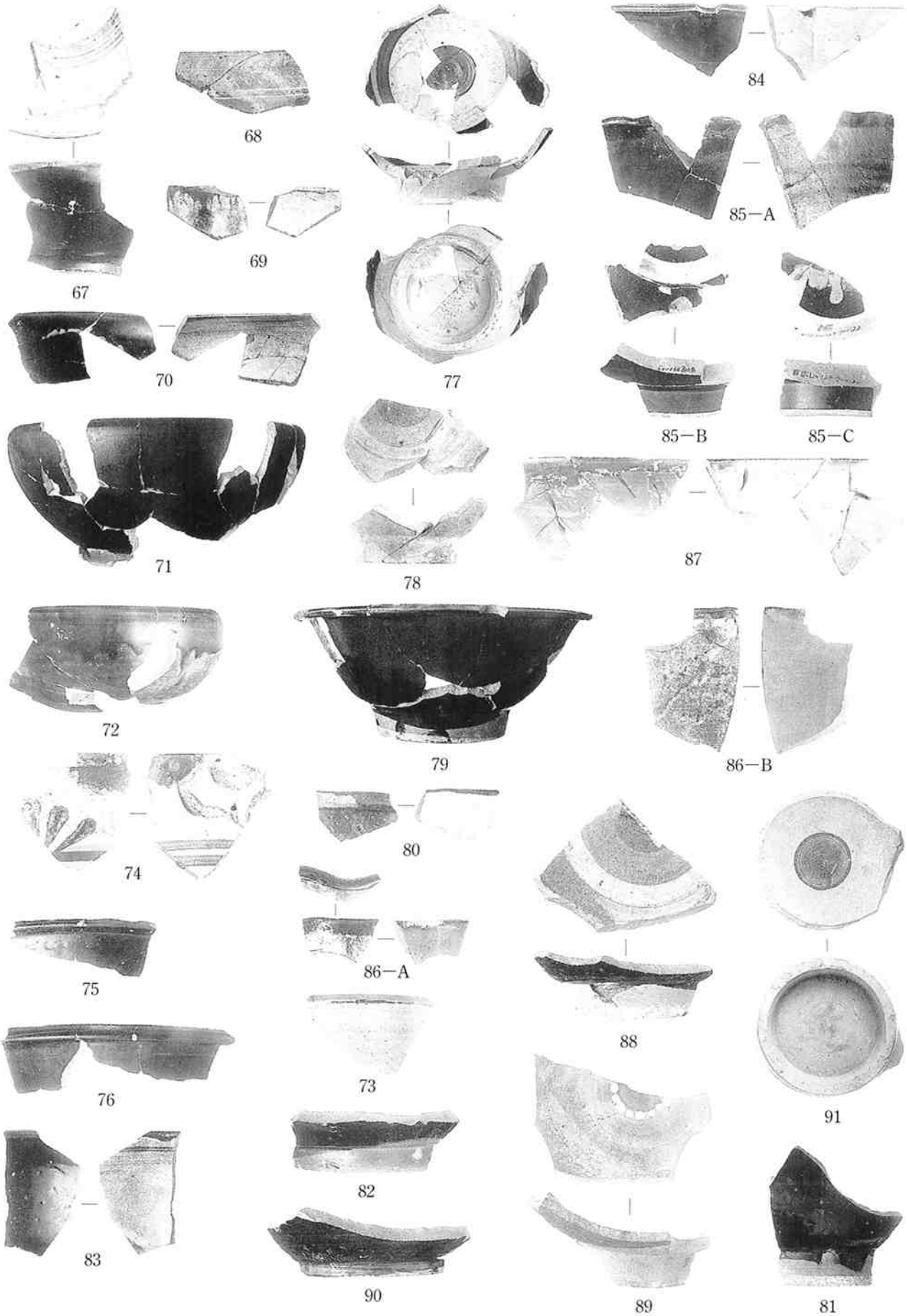


図版63　沖縄産施釉陶器

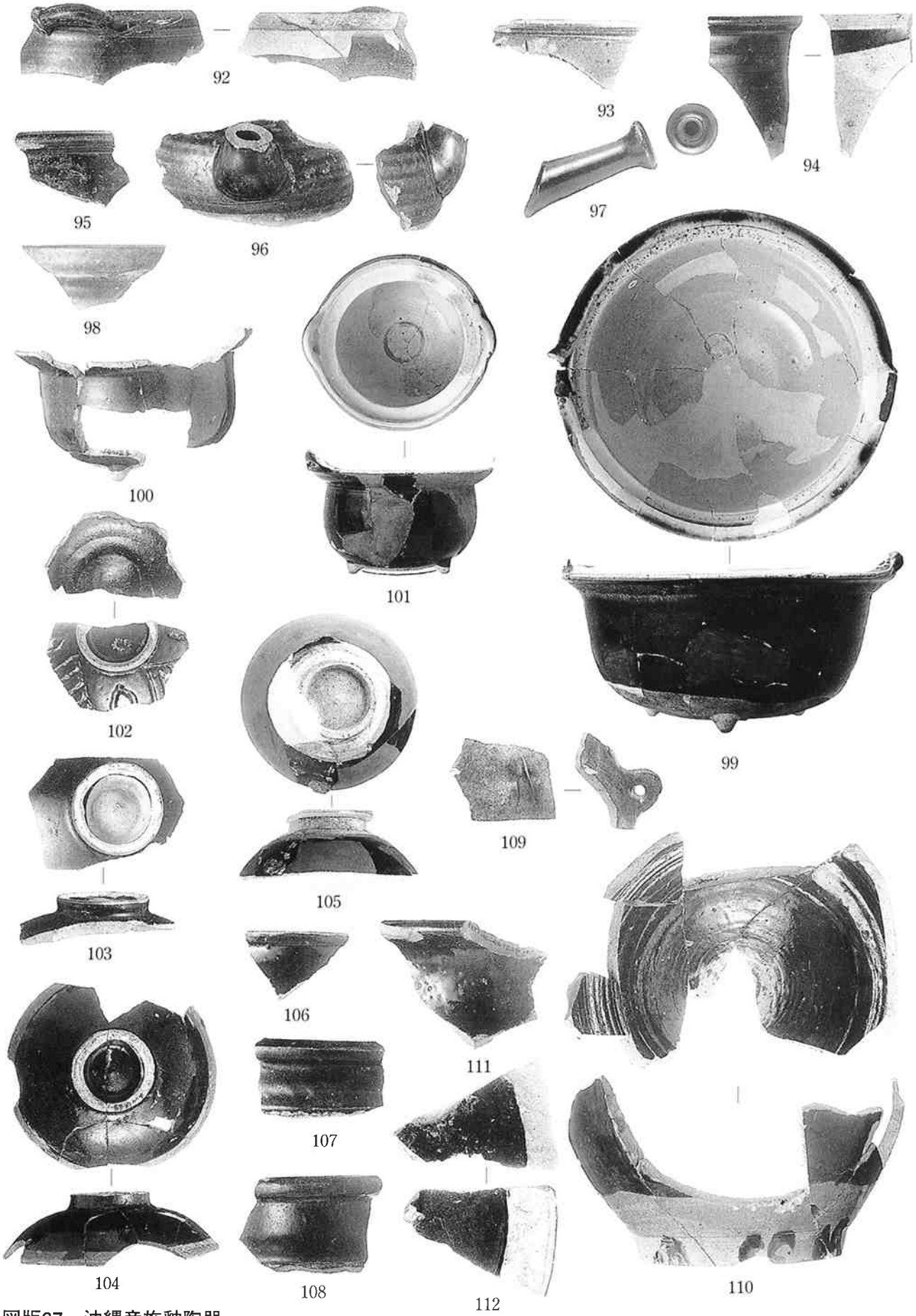
図版64　沖縄産施釉陶器



図版65　沖縄産施釉陶器

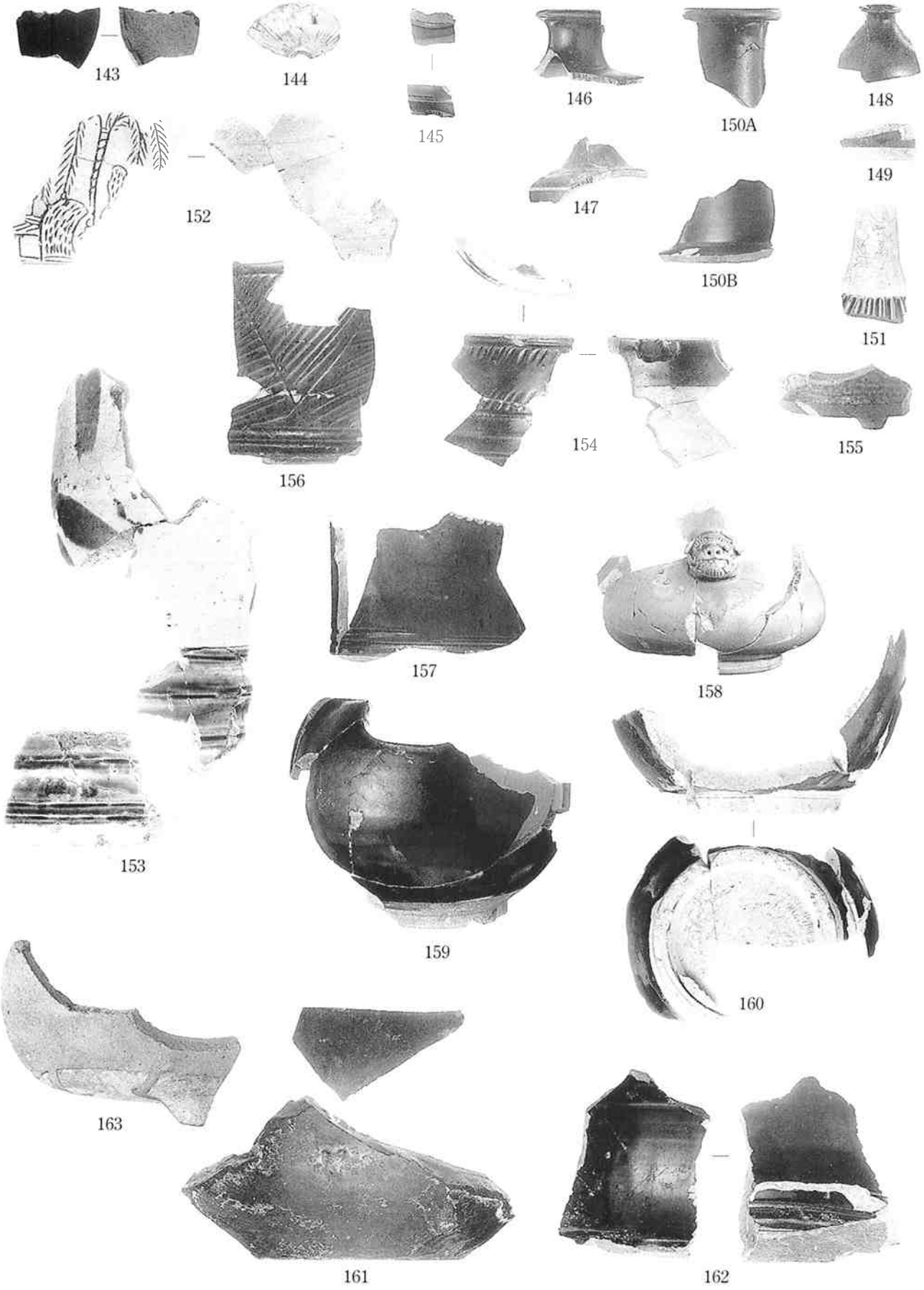


図版66　沖縄産施釉陶器



図版67　沖縄産施釉陶器

図版68　沖縄産施釉陶器



図版69　沖縄産施釉陶器

164

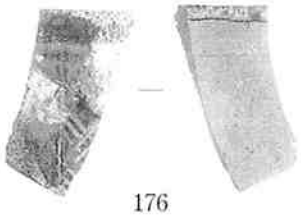
169

174

175

165

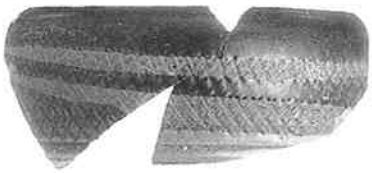
170



176

166

171



177

178

167

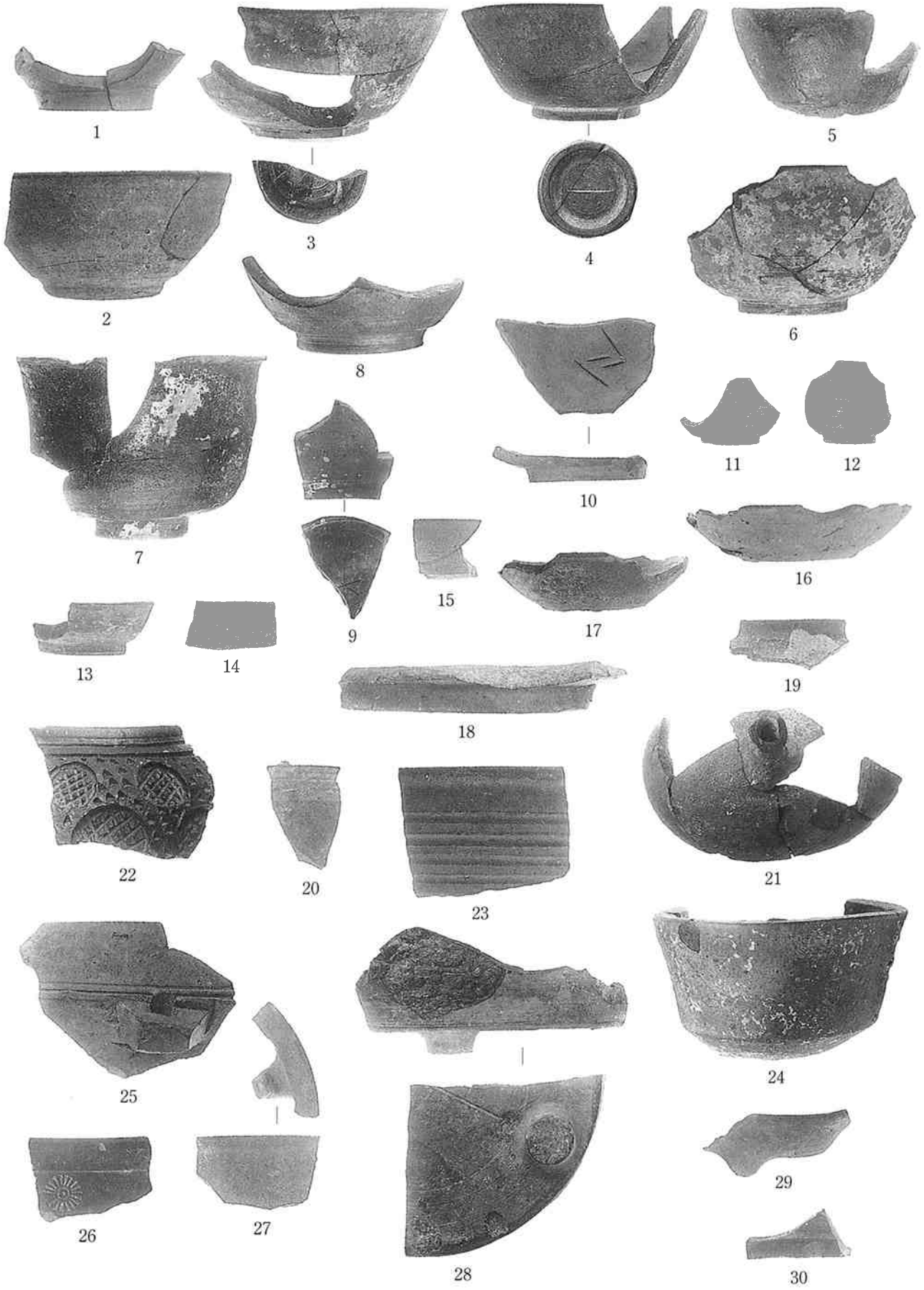
172

168

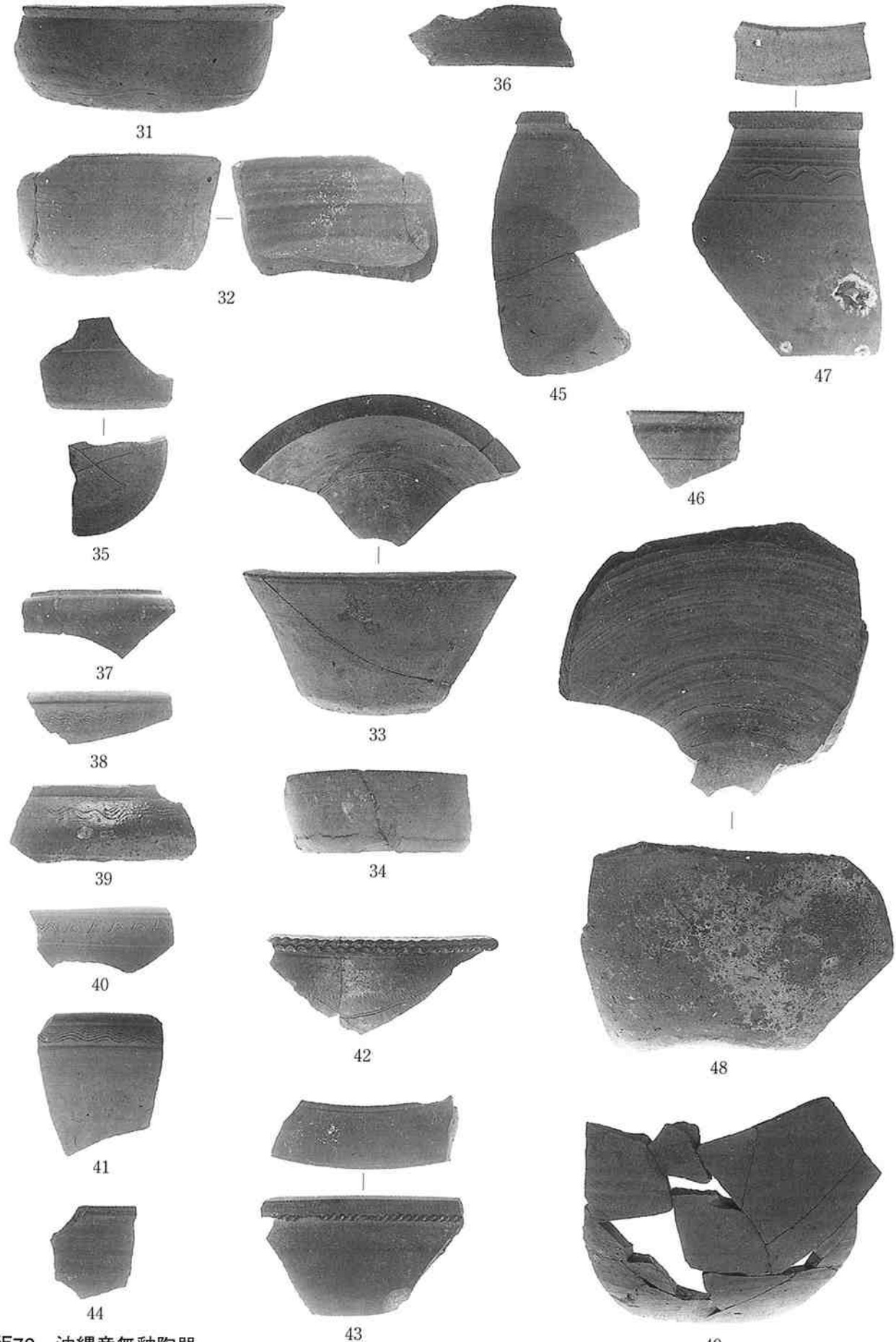
173

179

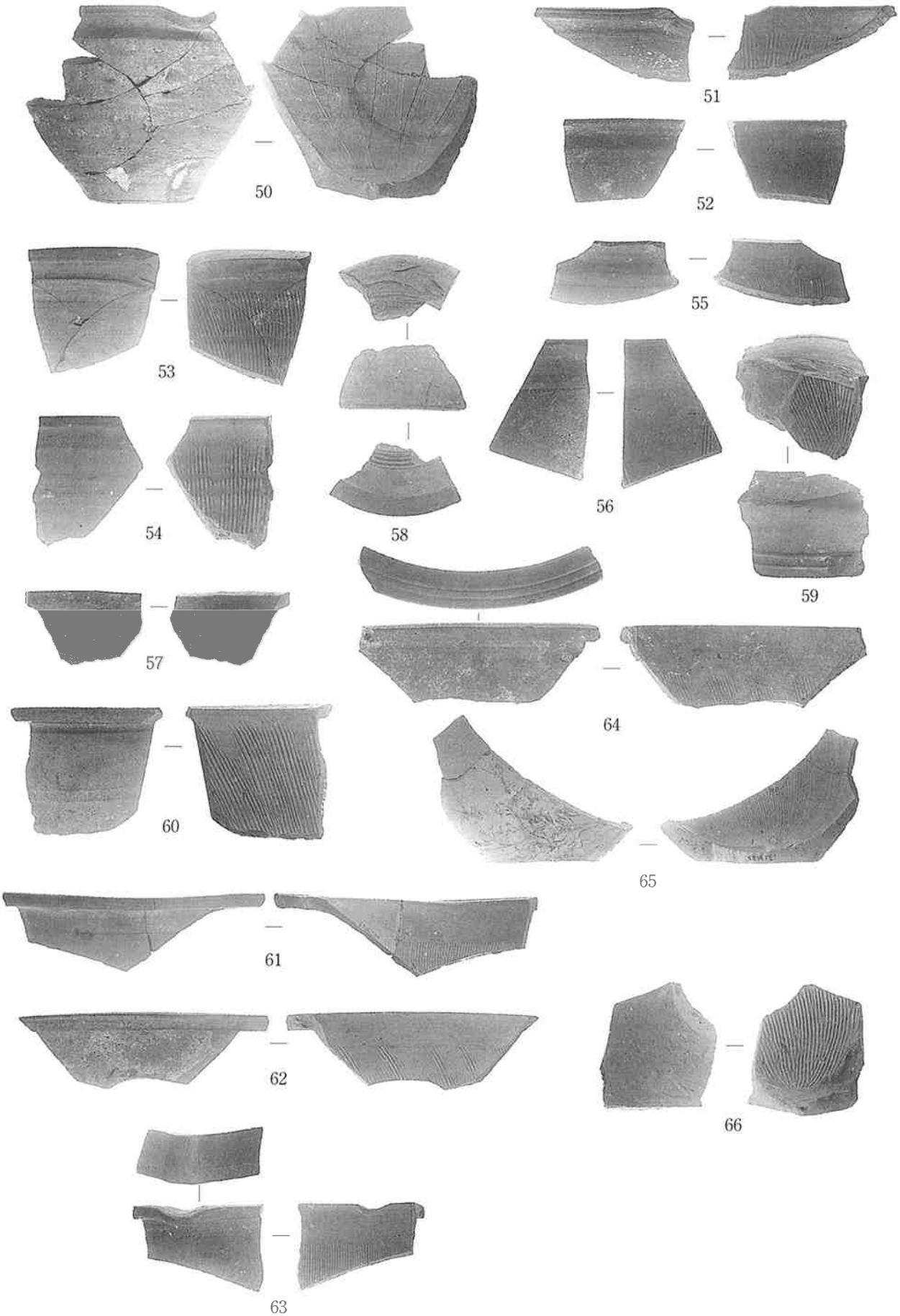
図版70　沖縄産施釉陶器



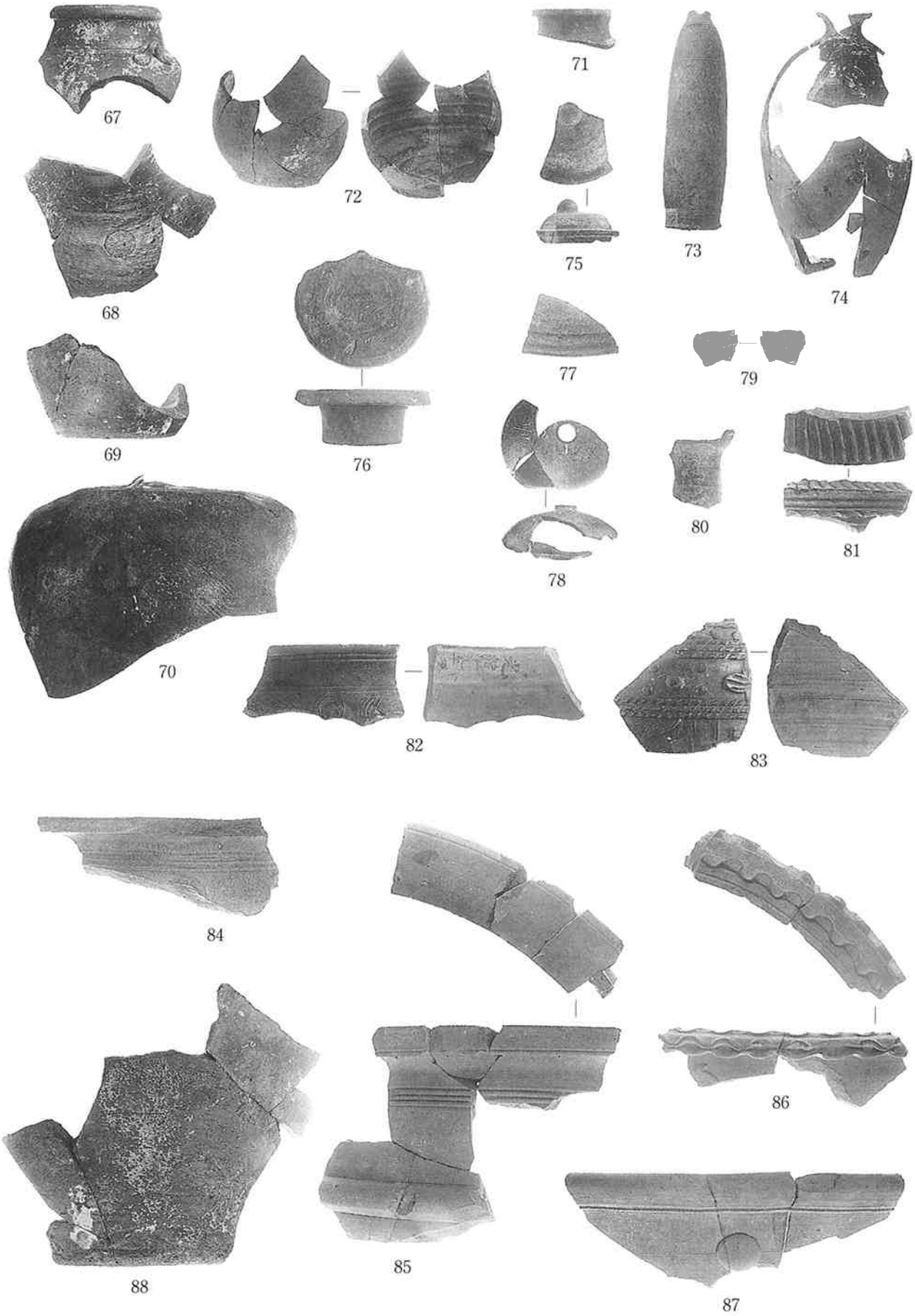
図版71　沖縄産無釉陶器



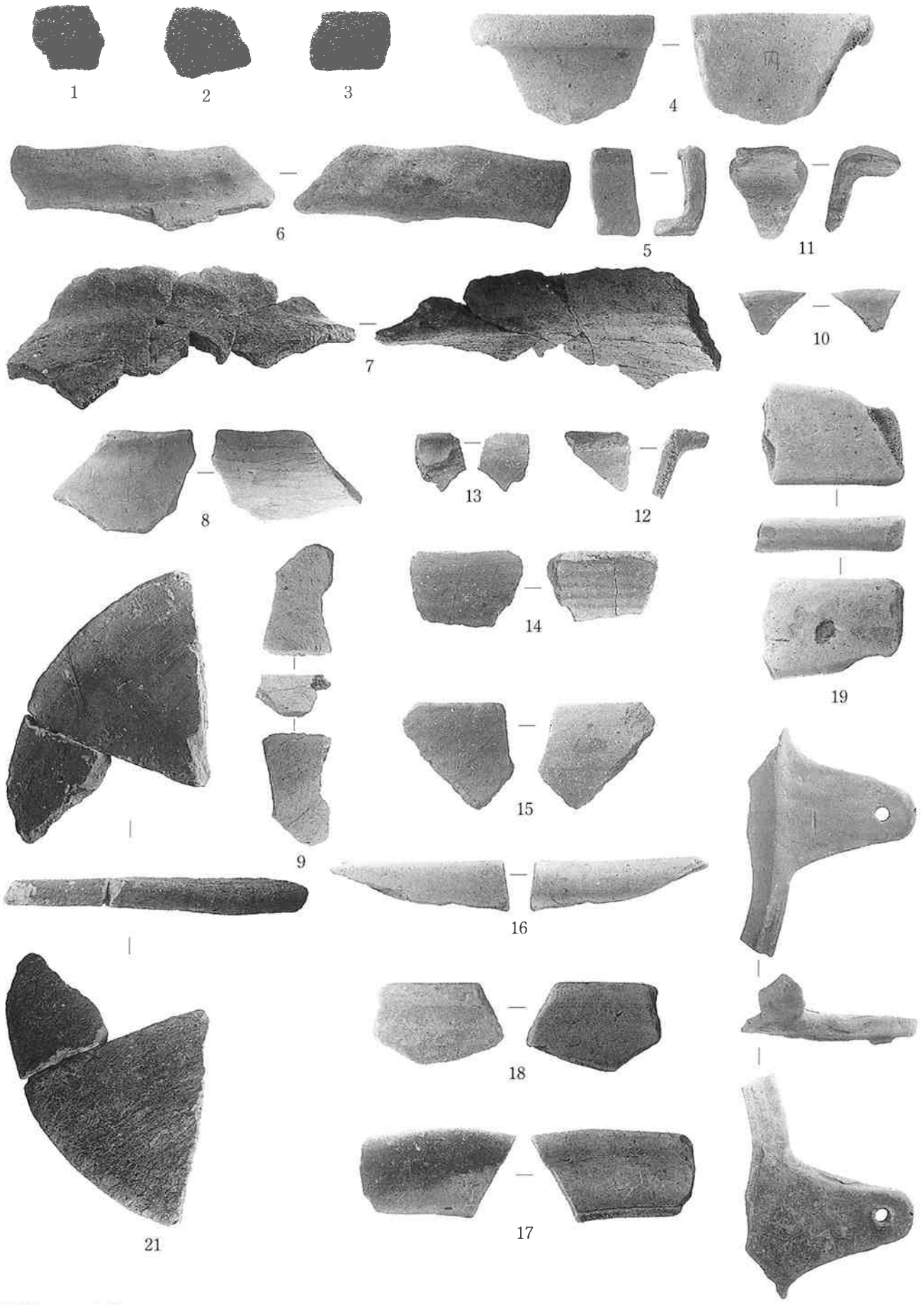
図版72　沖縄産無釉陶器



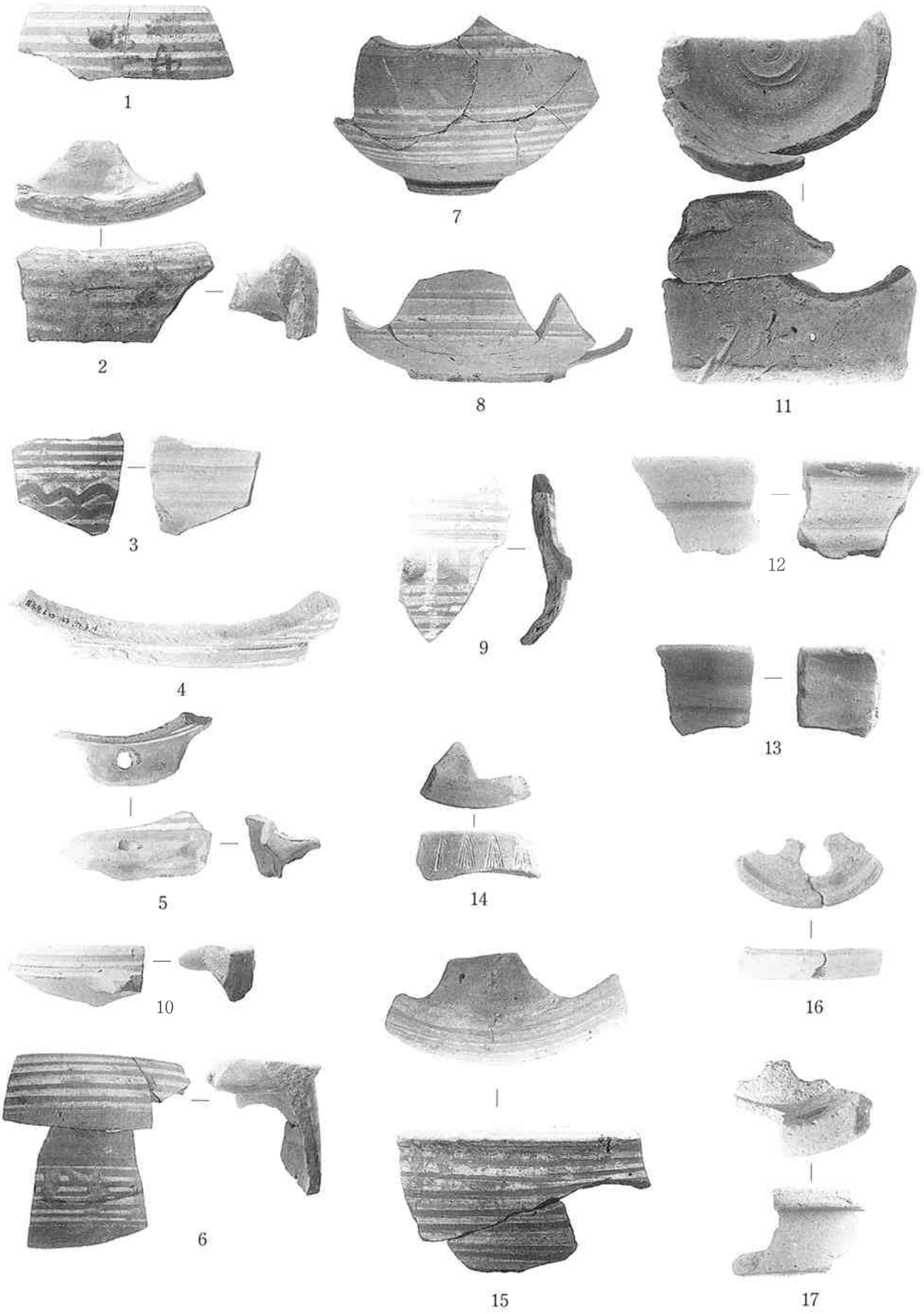
図版73　沖縄産無釉陶器



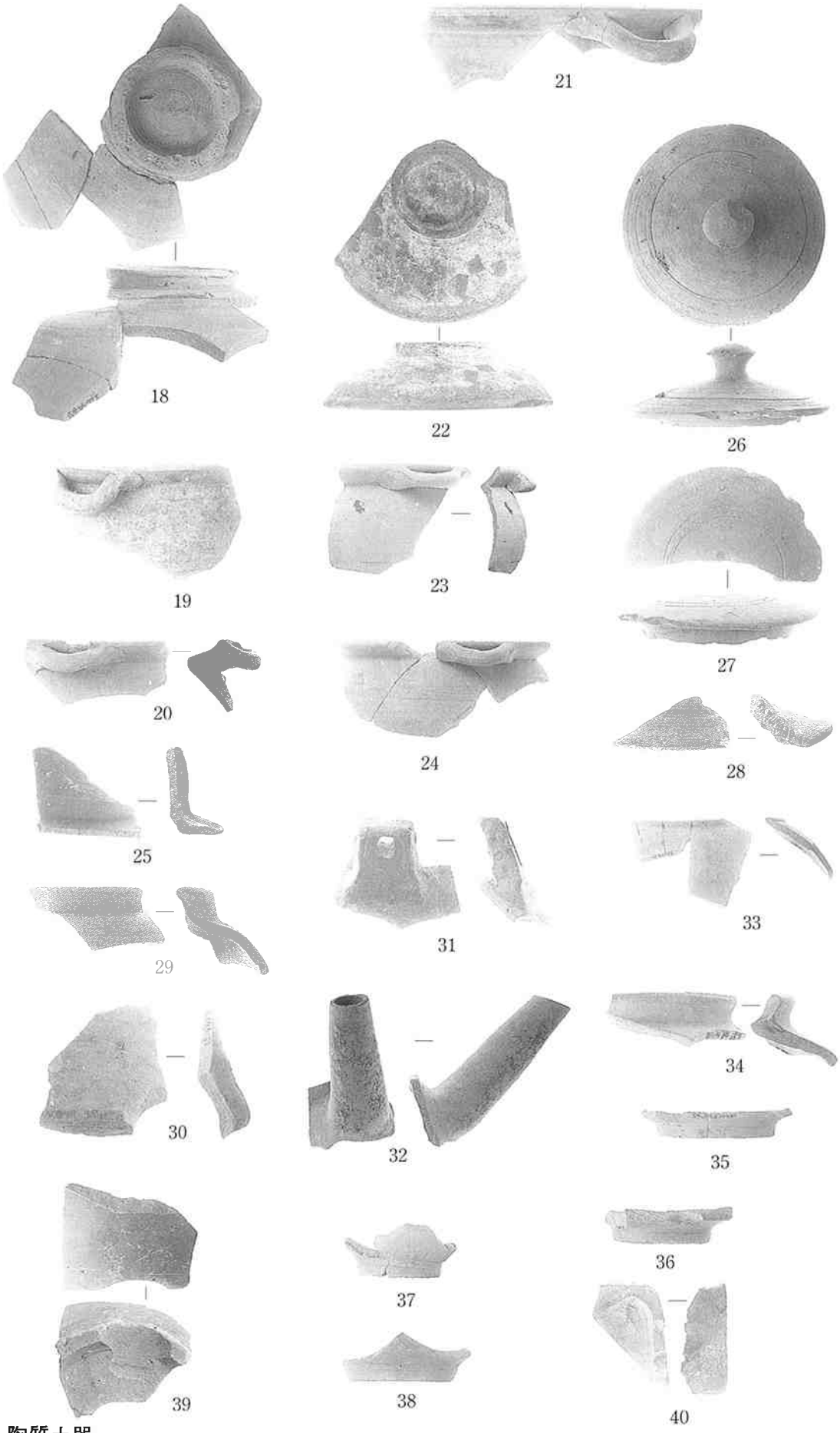
図版74　沖縄産無釉陶器



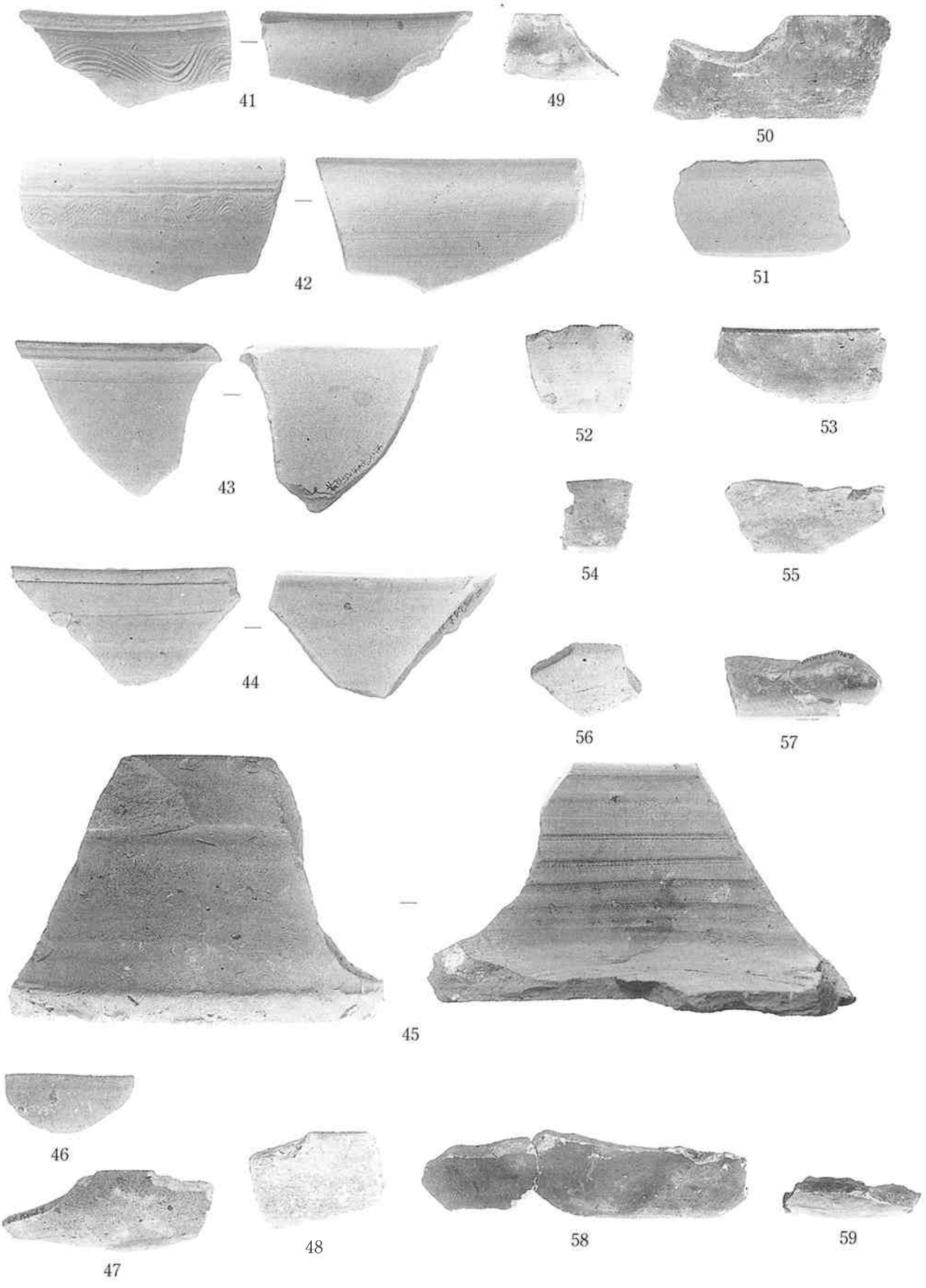
図版75　土器



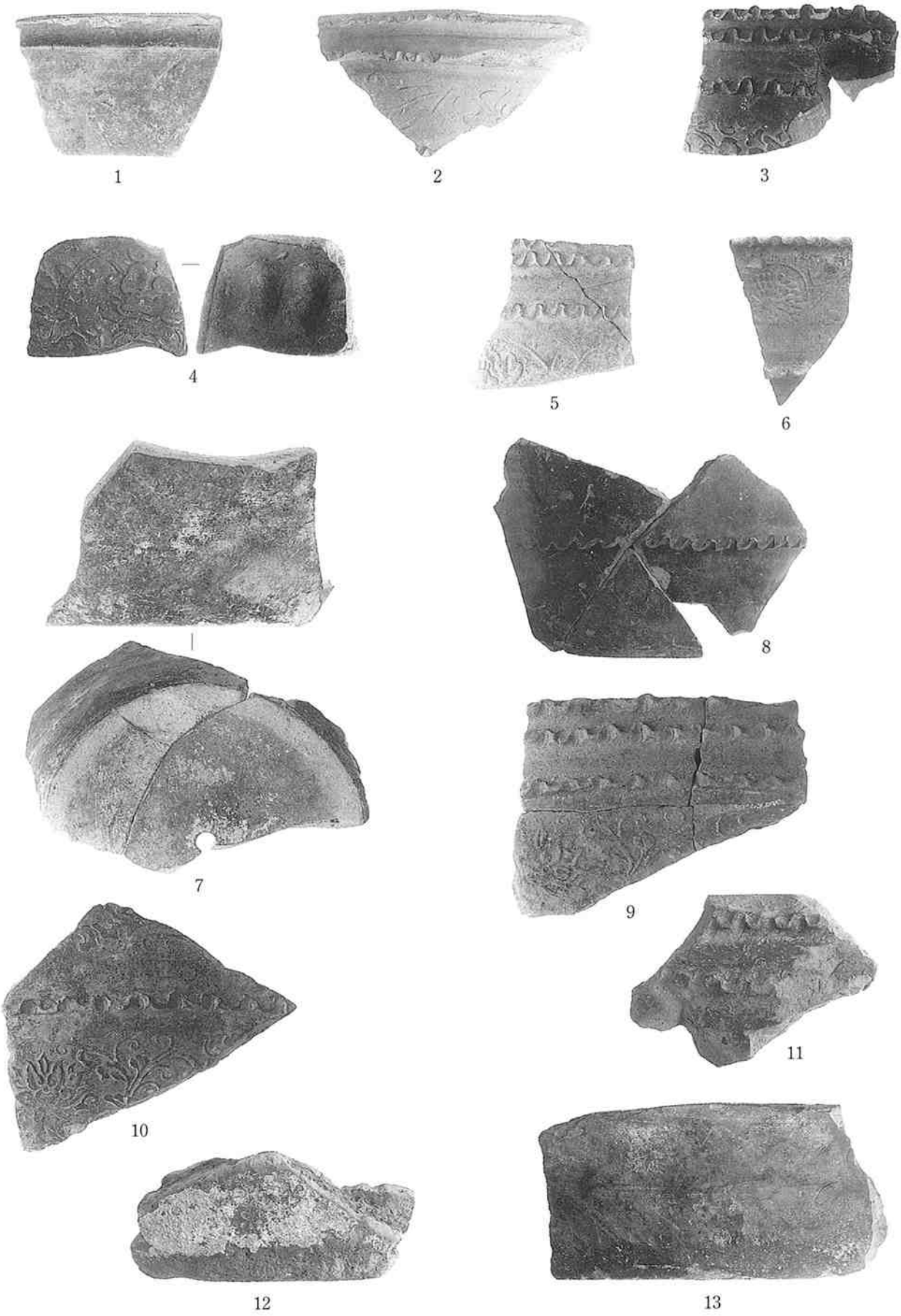
図版76　陶質土器



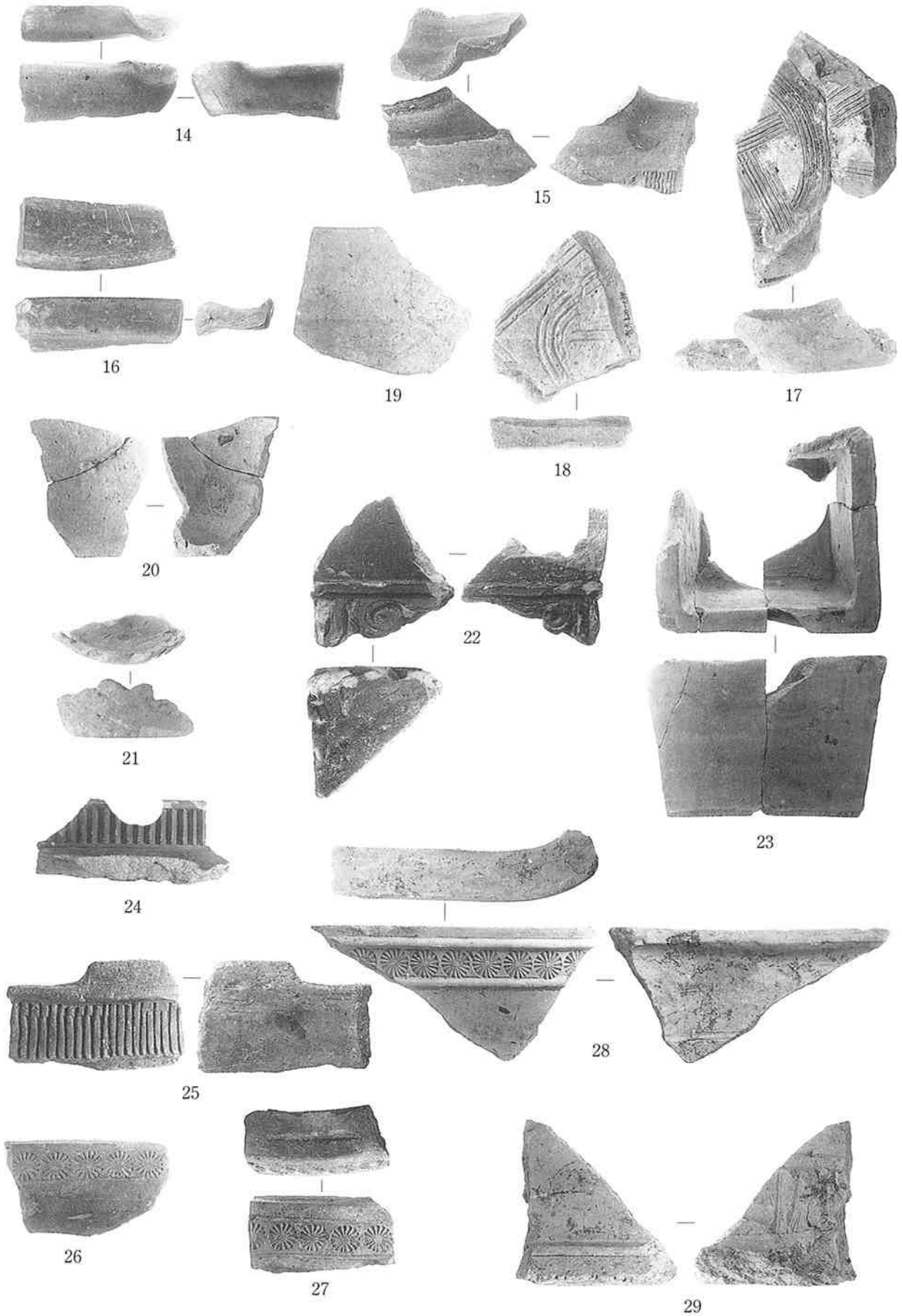
図版77　陶質土器



図版78　陶質土器

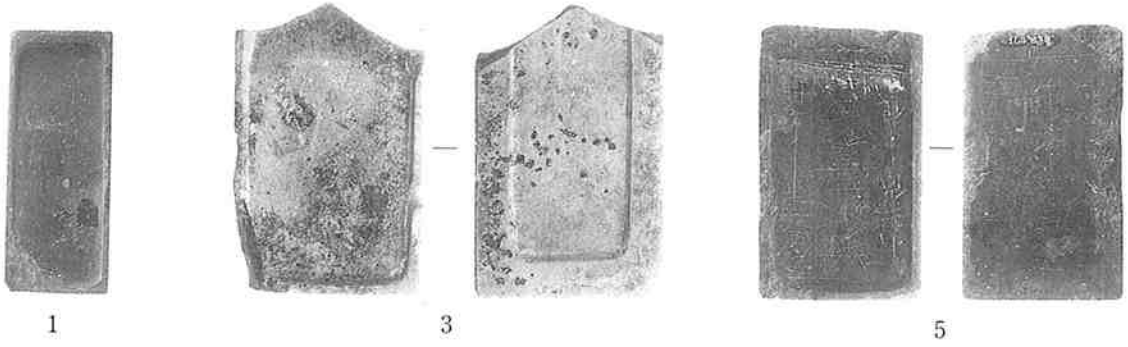


図版79　瓦質土器



図版80　瓦質土器

図版81　瓦質土器

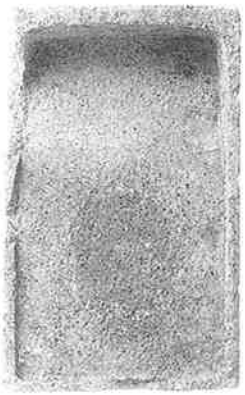

1

3

5

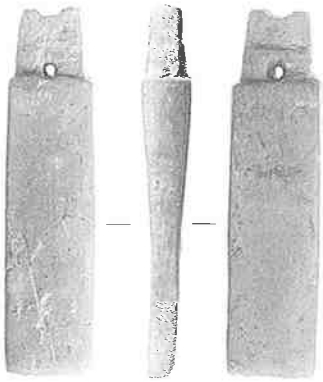
2

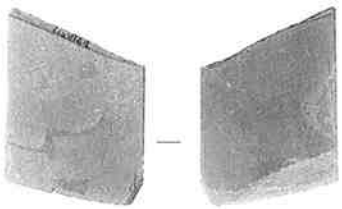
4


6

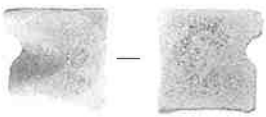
7

8


9


10

11


12

13

14

15

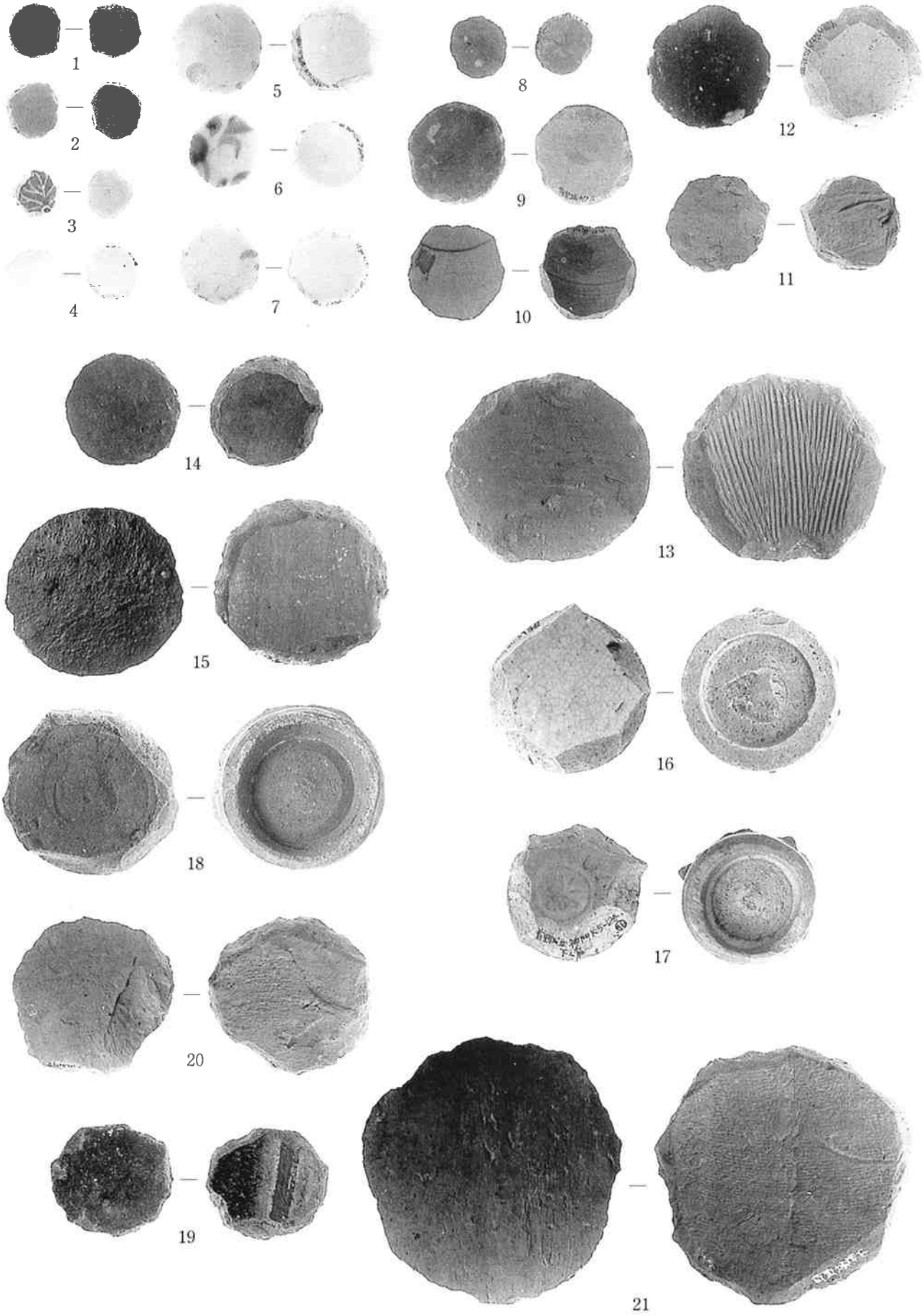
16

17

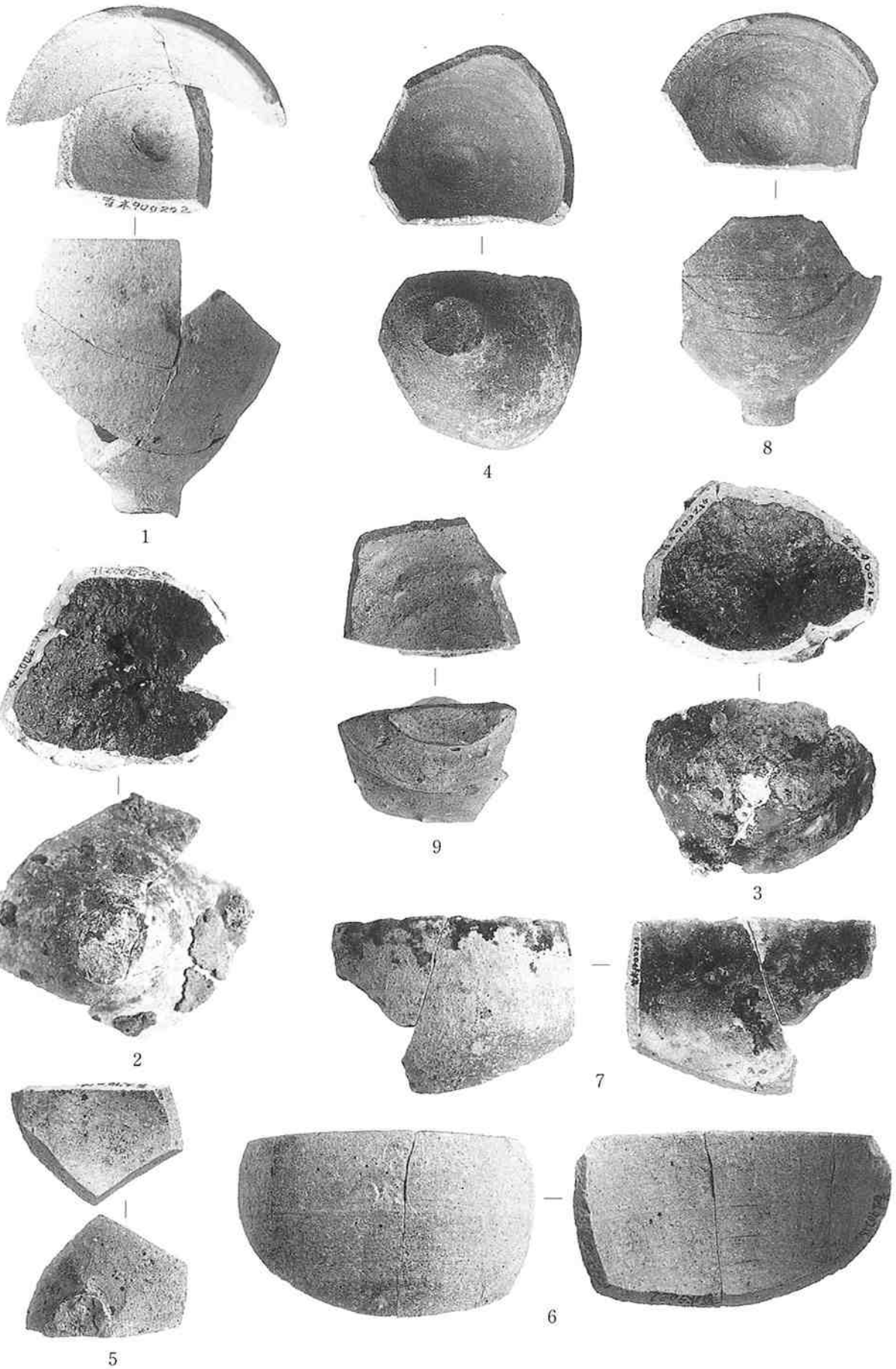
18

19

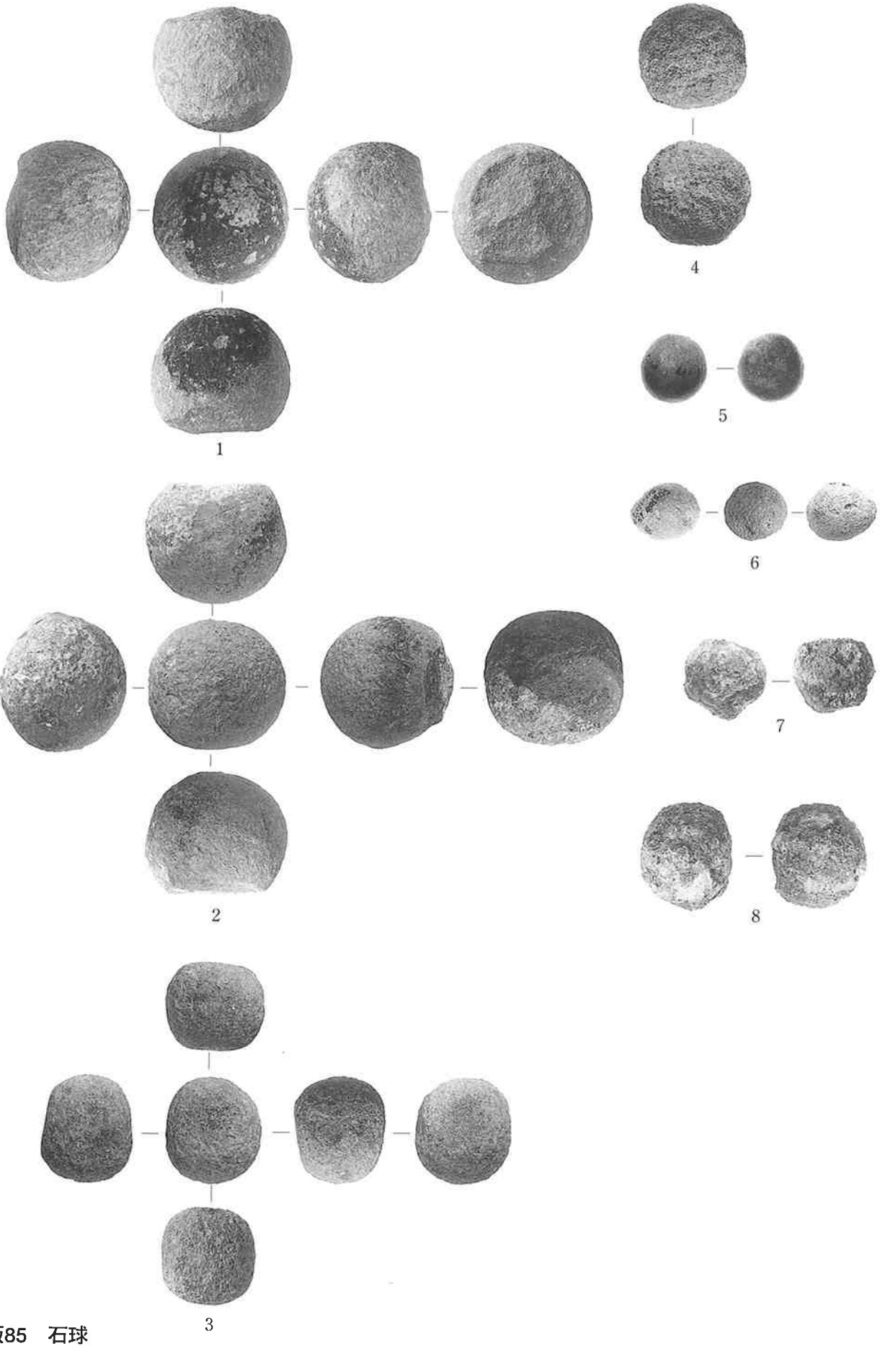
図版82　硯・石製品



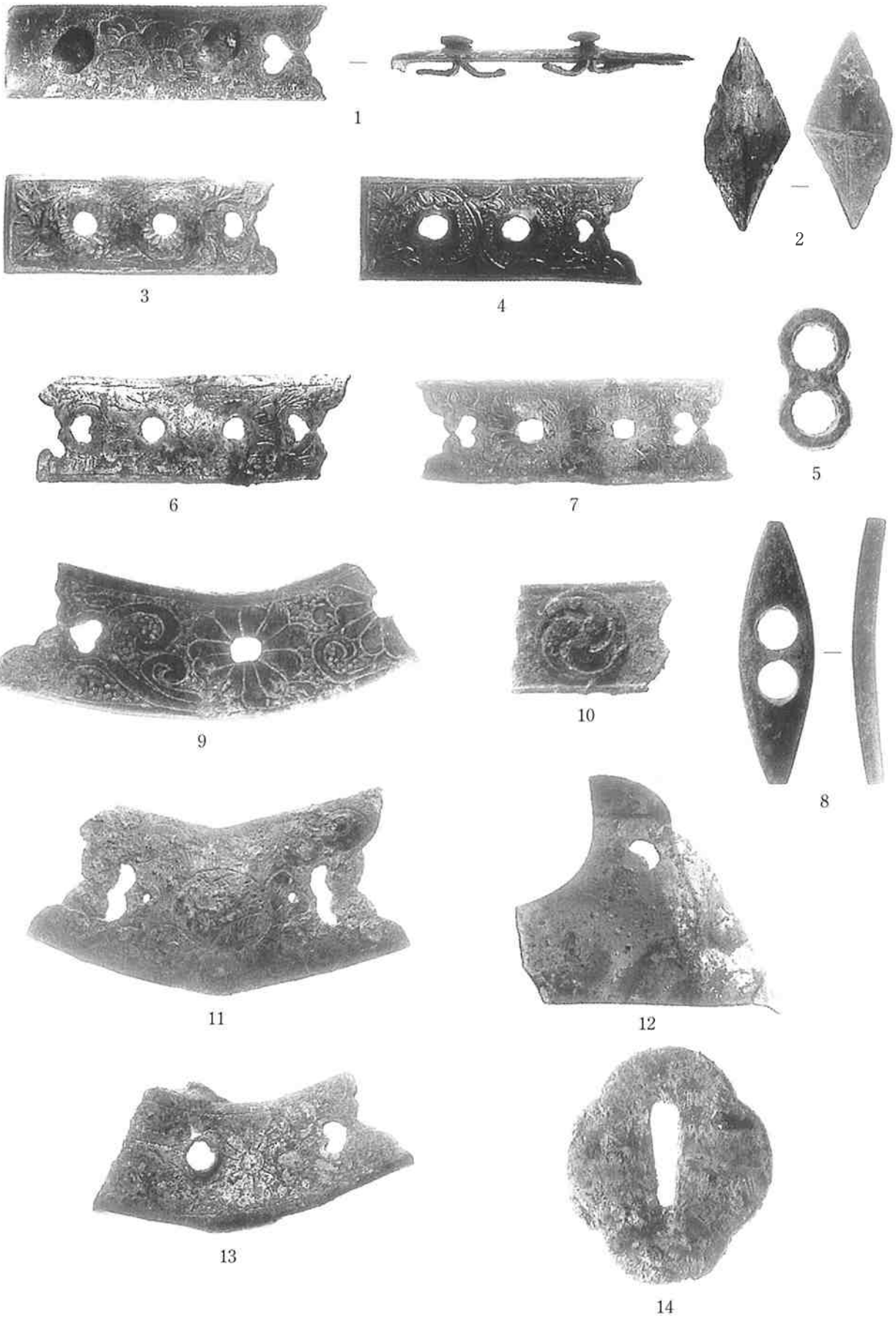
図版83　円盤状製品



図版84　坩堝



図版85　石球



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

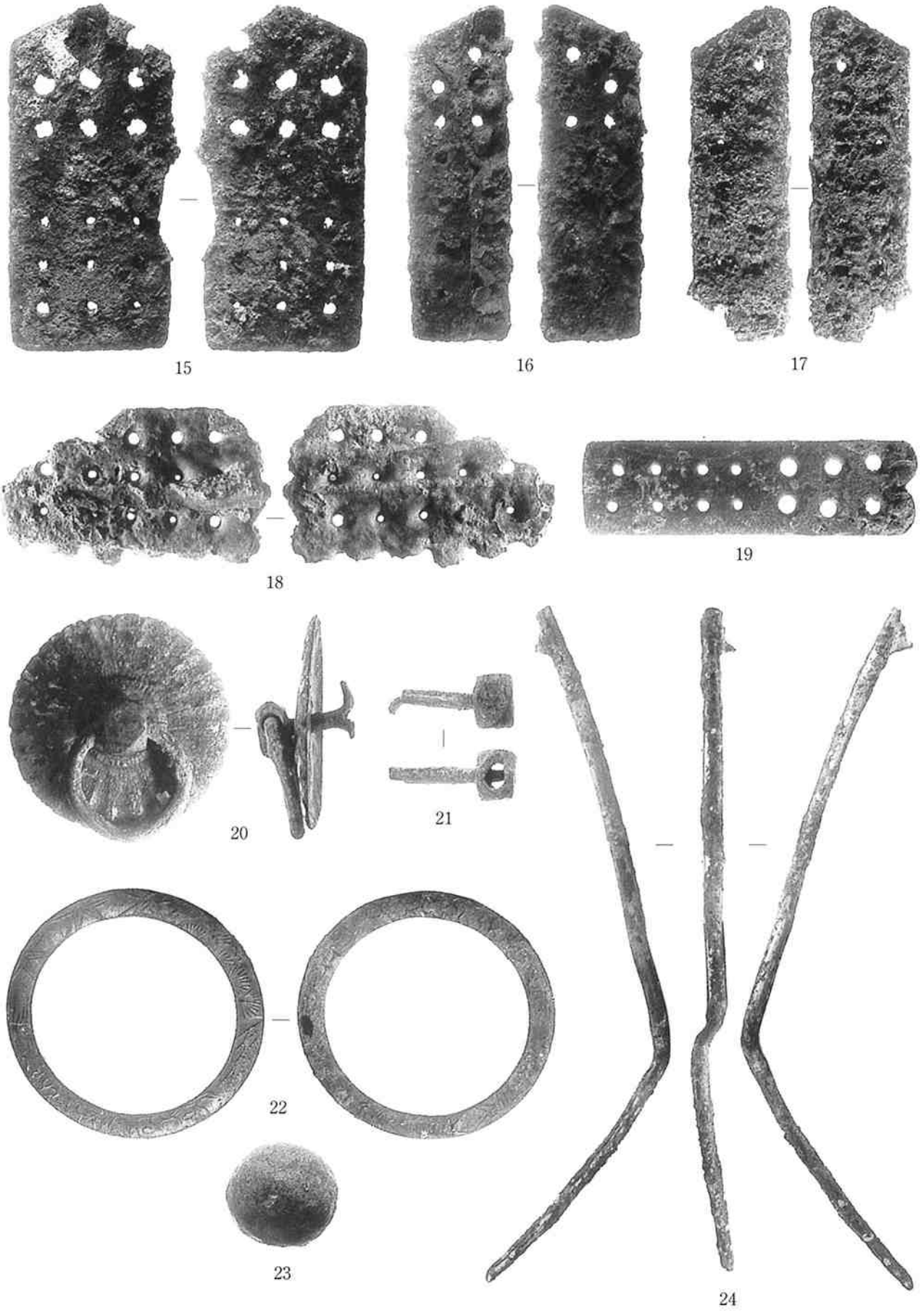
11

12

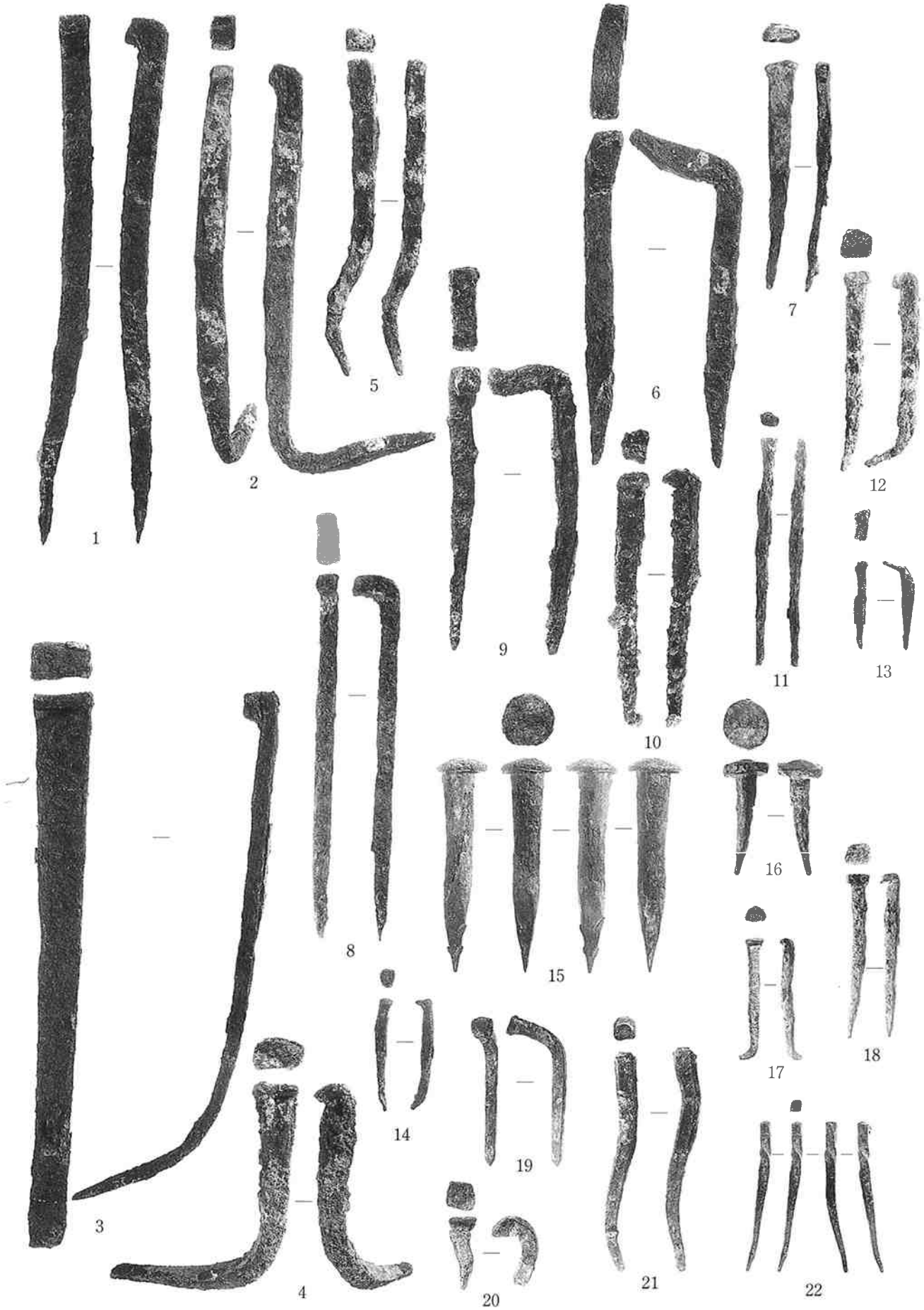
13

14

図版86　武具



図版87　武具



図版88　釘・釘状製品

1

2

3

4

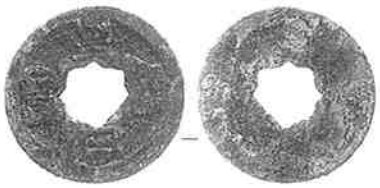
5

6

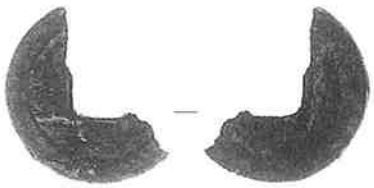
7

8

9


10

11


12

13

14

15

16

17

18

図版89　銭貨

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

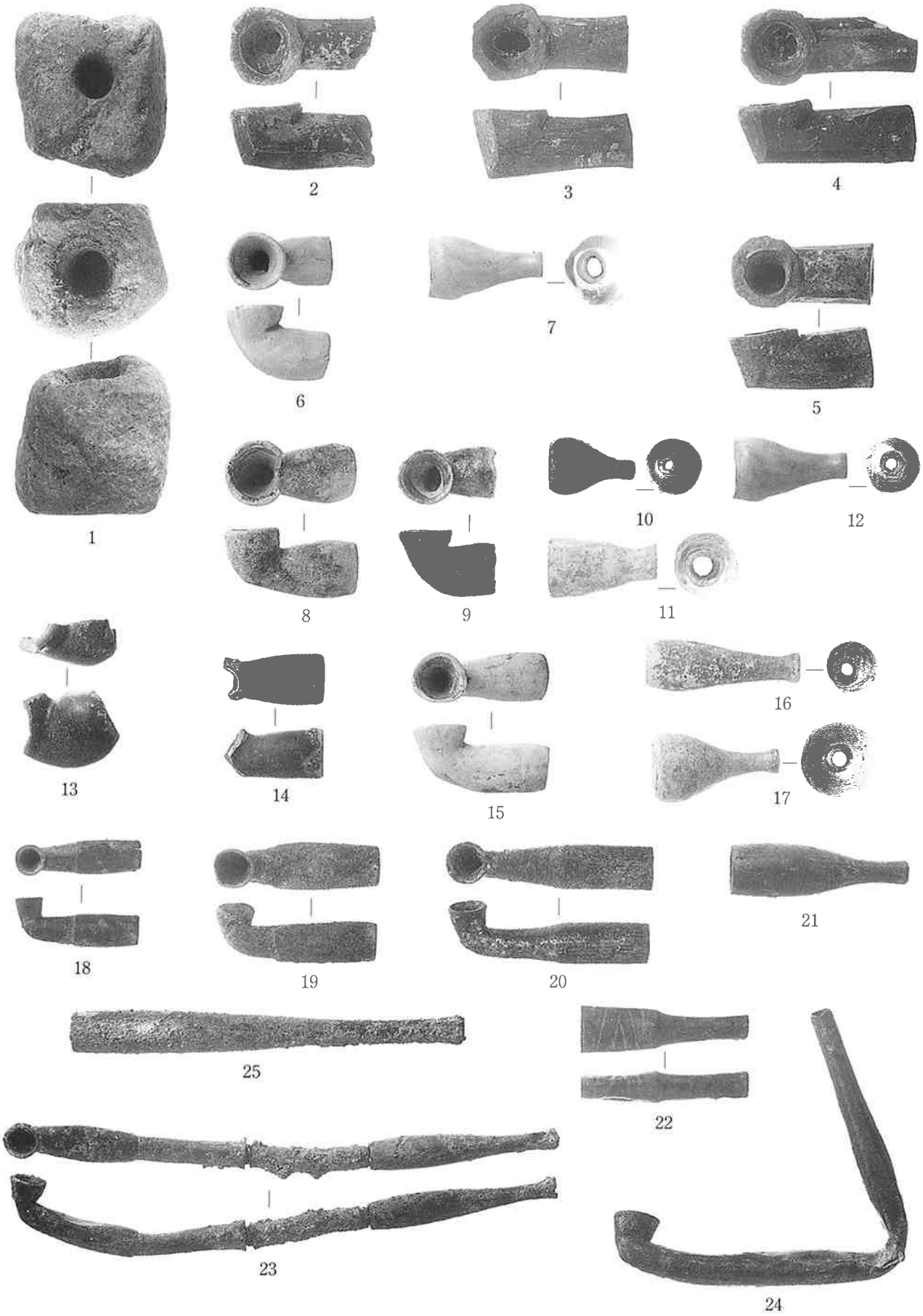
35

36

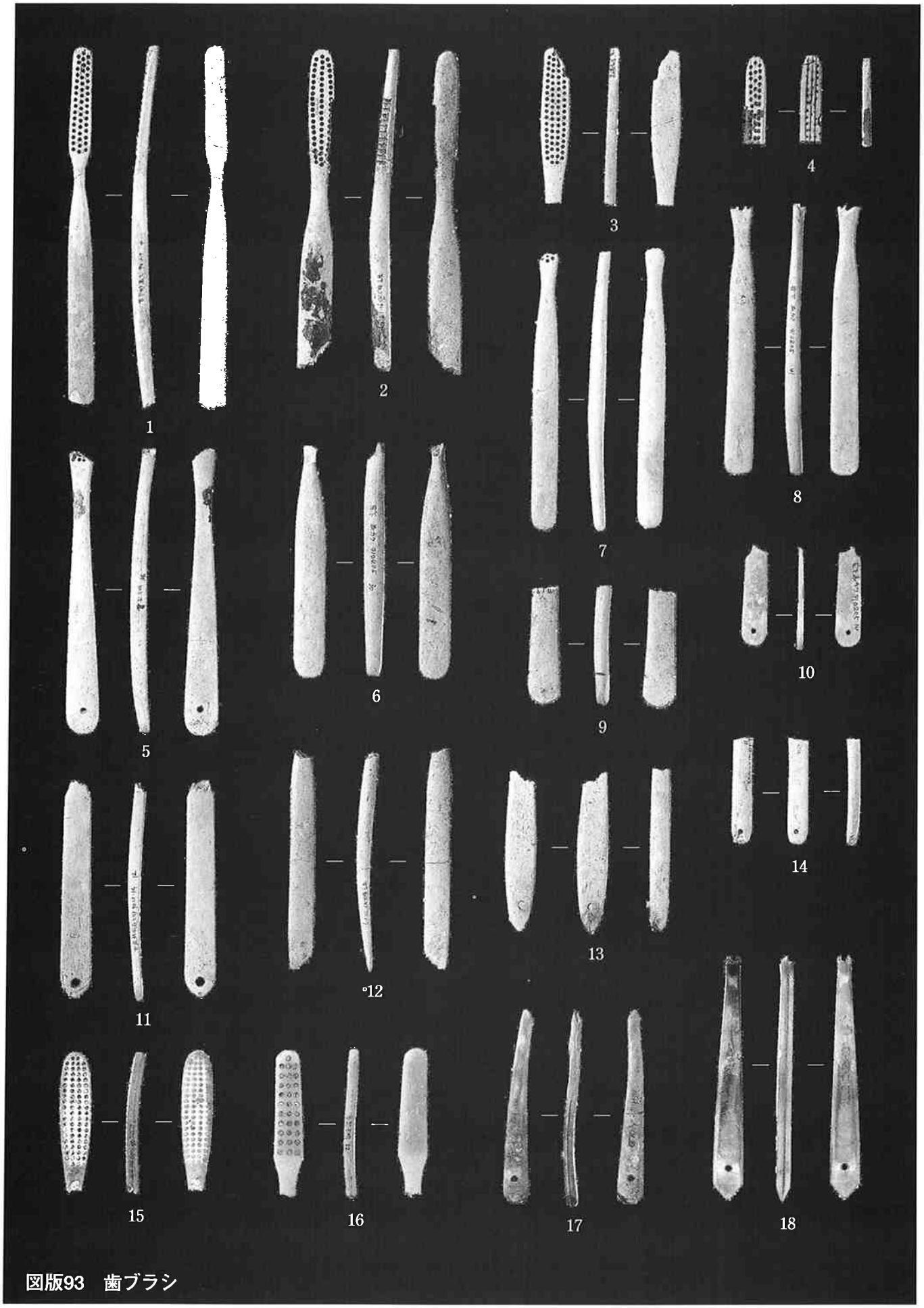
37

図版90　銭貨

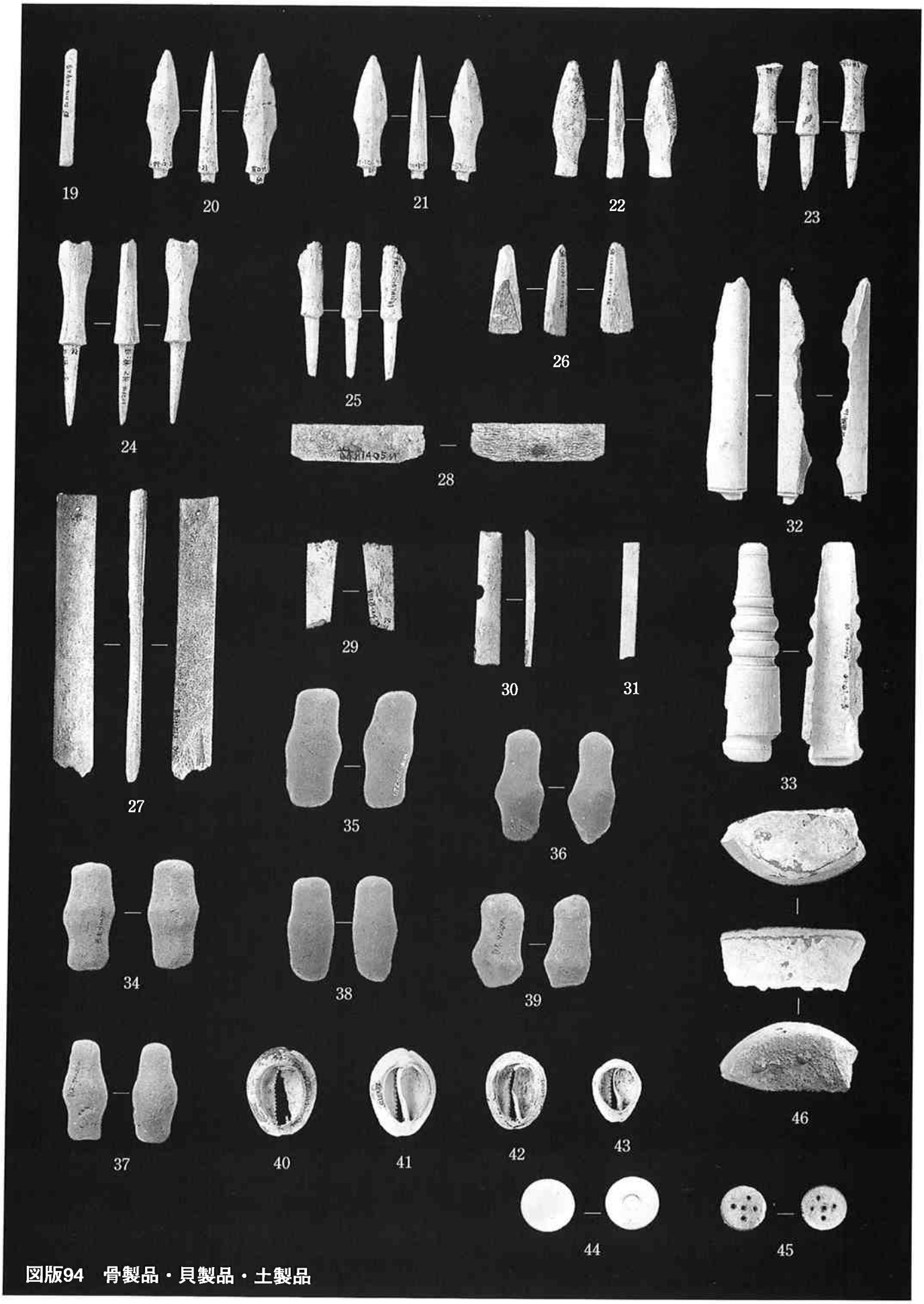
図版91　簪



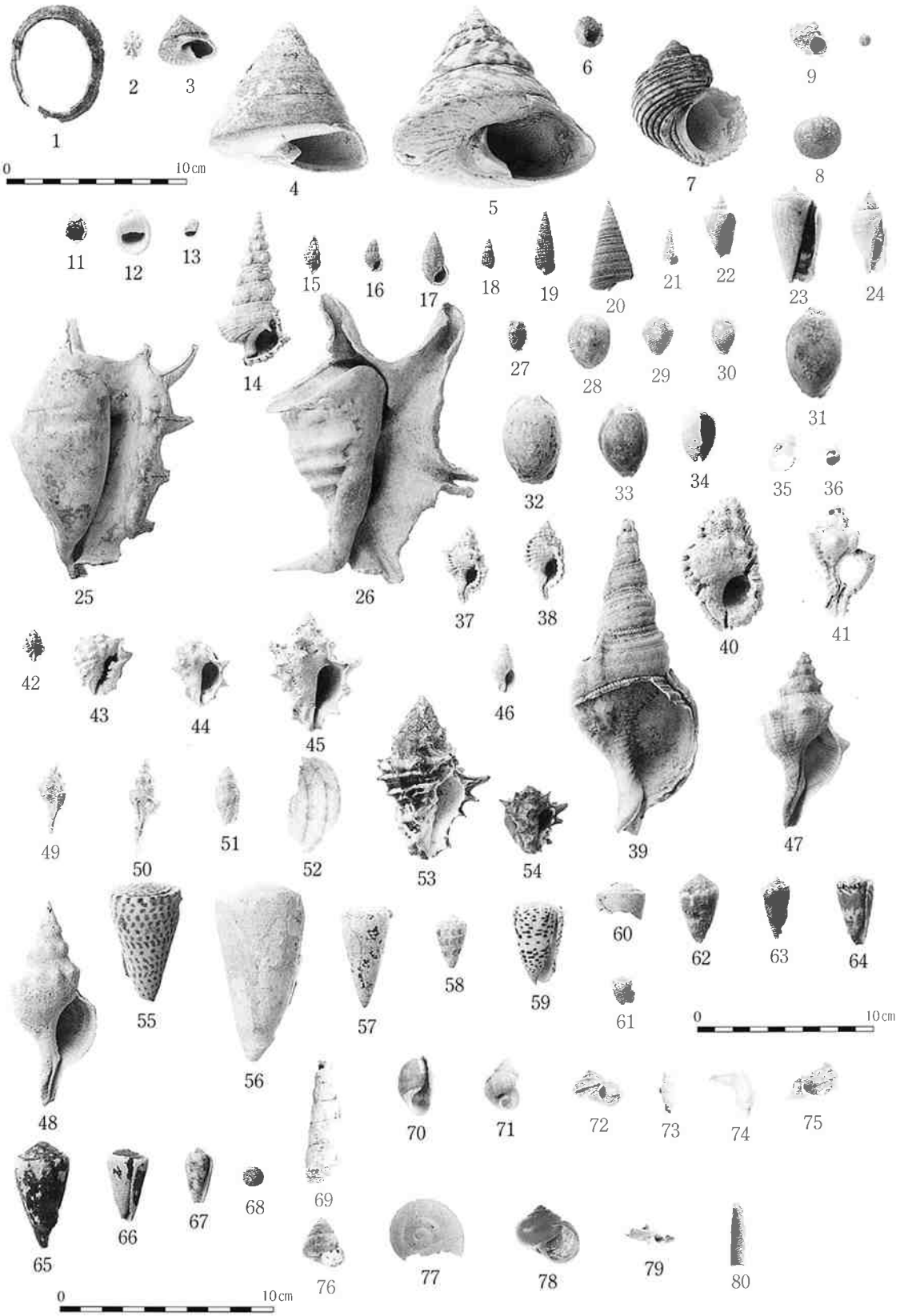
図版92　煙管



図版93　歯ブラシ

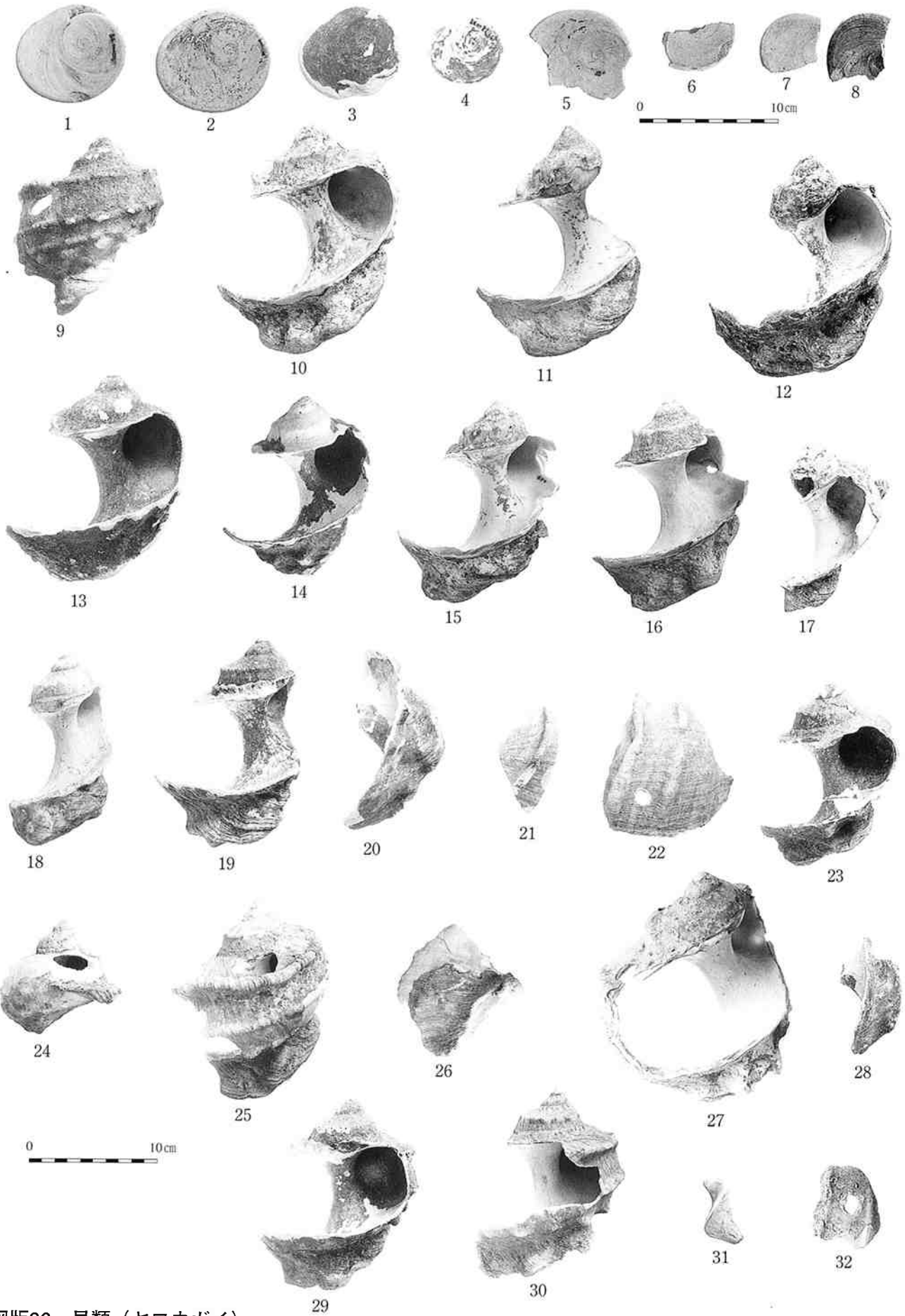


図版94　骨製品・貝製品・土製品

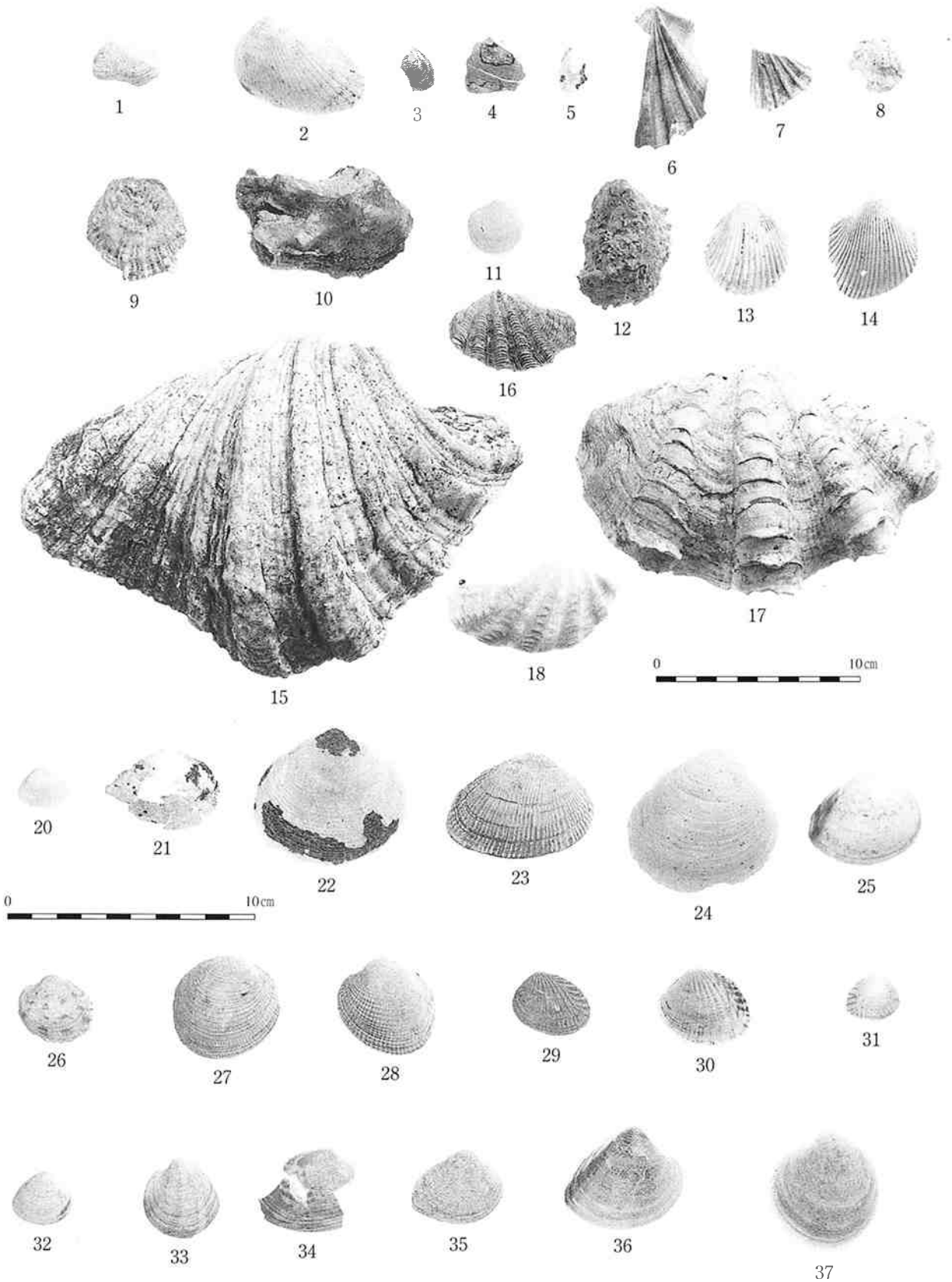


図版95　貝類（巻貝）

1．オオベッコウガサガイ　2．リュウキュウウノアシ　3．ニシキウズ　4．ギンタカハマ　5．サラサバティ　6．オキナワイシダタミ　7．チョウセンサザエ　8．チョウセンサザエの蓋　9．カンギク　10．カンギクの蓋　11．オオマルアマオブネ　12．アマオブネ　13．コシダカアマガイ　14．オニノツノガイ　15．カヤノミカニモリ　16．ウミニナ　カニモリ　17．クワノミカニモリ　18．イトカケヘナタリ　19．カワアイ　20．センニンガイ　21．ウミニナ　22．オハグロガイ　23．マガキガイ　24．ネジマガキ　25．クモガイ　26．スイジガイ　27．ナツメダカラモドキ　28．ヤクジマダカラ　29．ハナマルユキ　30．キイロダカラ　31．ハナビラダカラ　32．ヒメホシダカラ　33．ホシキヌタ　34．タカラガイ不明　35．シロヘソアキトミガイ　36．ホウシュノタマガイ　37．ミツカドボラ　38．シオボラ　39．ホラガイ　40．オキニシ　41．ガンゼキボラ　42．コゲレイシガイダマシ　43．タカラガイ科不明　44．ツノレイシ　45．シラクモガイ　46．シマベッコウバイ　47．イトマキボラ　48．ナガイトマキボラ　49．リュウキュウツノマタ　50．チトセボラ　51．キバフデ　52．ショクコウラ　53．オニコブシ　54．コオニコブシ　55．アンボンクロザメ　56．クロフモドキ　57．ミカドミナシガイ　58．マダライモ　59．ジュズカケサヤガタイモ　60．サヤガタイモ　61．ゴマフイモ　62．ベニイモガイ　63．アカシマミナシガイ　64．サラサミナシガイモドキ　65．ヤナギシボリイモ　66．キヌカツギ　67．アジロイモガイ　68．イモガイ科不明　69．ベニタケガイ　70．ナツメガイ　71．巻貝不明　72．オキナワヤマタニシ　73．ツヤギセル　74．アフリカマイマイ　75．シュリマイマイ　76．アマノヤマタカマイマイ　77．パンダナマイマイ　78．オキナワウスカワマイマイ　79．陸産貝不明　80．パイプウニ



図版96　貝類（ヤコウガイ）

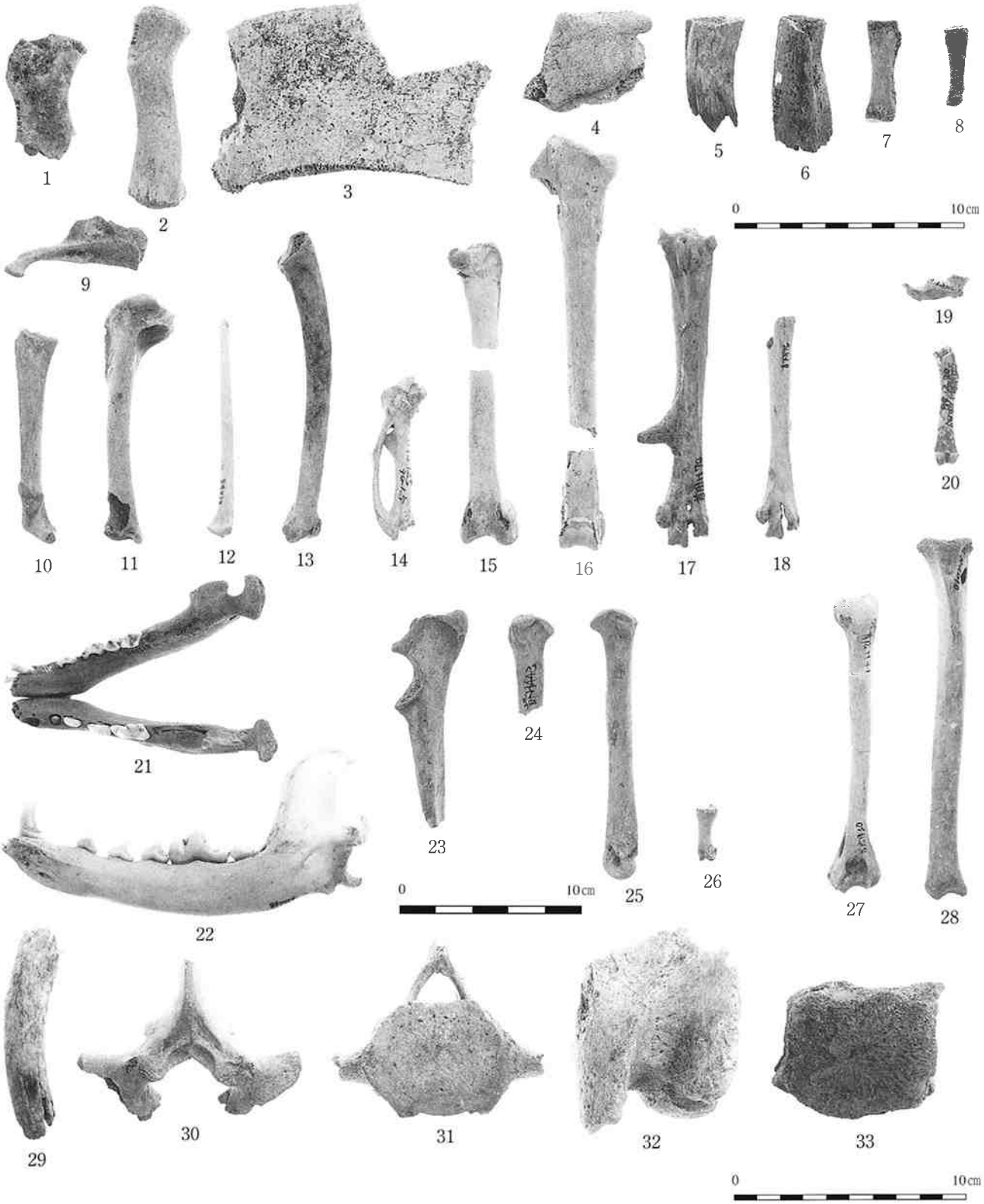


図版97　貝類（二枚貝）

1．エガイ　2．リュウキュウサルボウ　3．リュウキュウヒバリ　4．クロチョウガイ　5．ミドリアオリガイ　6．イタヤガイ　7．ホタテガイ　8．ショウジョウガイ　9．メンガイの一種　10．カキの一種　11．ウラキツキガイ　12．シロザル　13．リュウキュウザルガイ　14．カワラガイ　15．シャゴウ　16．ヒメジャコ　17．ヒレジャコ　18．シラナミ　20．イソハマグリ　21．リュウキュウシラトリ　22．モチズキザラガイ　23．リュウキュウマスオガイ　24．シレナシジミ　25．リュウキュウバカガイ　26．マルスダレガイ　27．ヌノメガイ　28．アラヌノメガイ　29．ホソスジイナミガイ　30．アラスジケマンガイ　31．ヒメイナミガイ　32．ユウカゲハマグリ　33．オイノカガミガイ　34．スダレガイ　35．スダレハマグリ　36．ハマグリ　37．オキシジミ

図版98　刃物痕のある獣魚骨・魚骨・ニワトリ・イノシシ・ウシ

1．魚骨
2．左ニワトリ脛骨
3．助骨　4．棘突起　5．脛骨　6．大腿骨　骨頭片　7．左大腿骨
8．助骨　9．助骨　10．肩甲骨　11．右上腕骨　12．13．14．15．16．左脛骨
17．左中足骨　18．19．破片



図版99

ウミガメ
1．右上腕骨　2．尺骨　3．肋骨板　4．腹甲板　5．右剣状突起　6．縁甲板　7．8　指骨

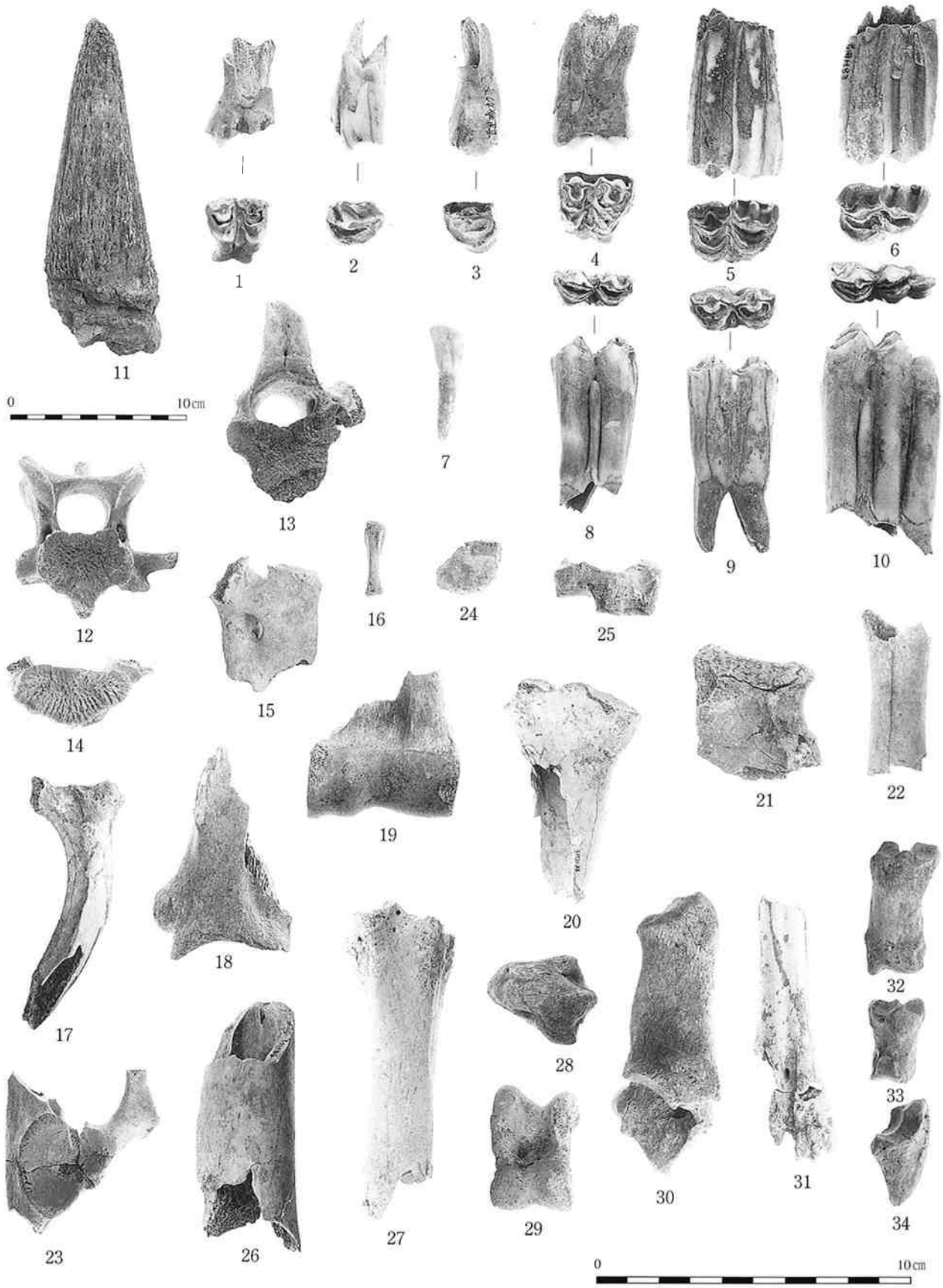
ニワトリ
9．胸骨　10．右鳥口骨　11．左　上腕骨　12．橈骨　13．右尺骨　14．中手骨　15．左大腿骨　16．脛骨　17．右中足骨♂　18．右中足骨♀

ネズミ
19．右下顎骨　20．右大腿骨

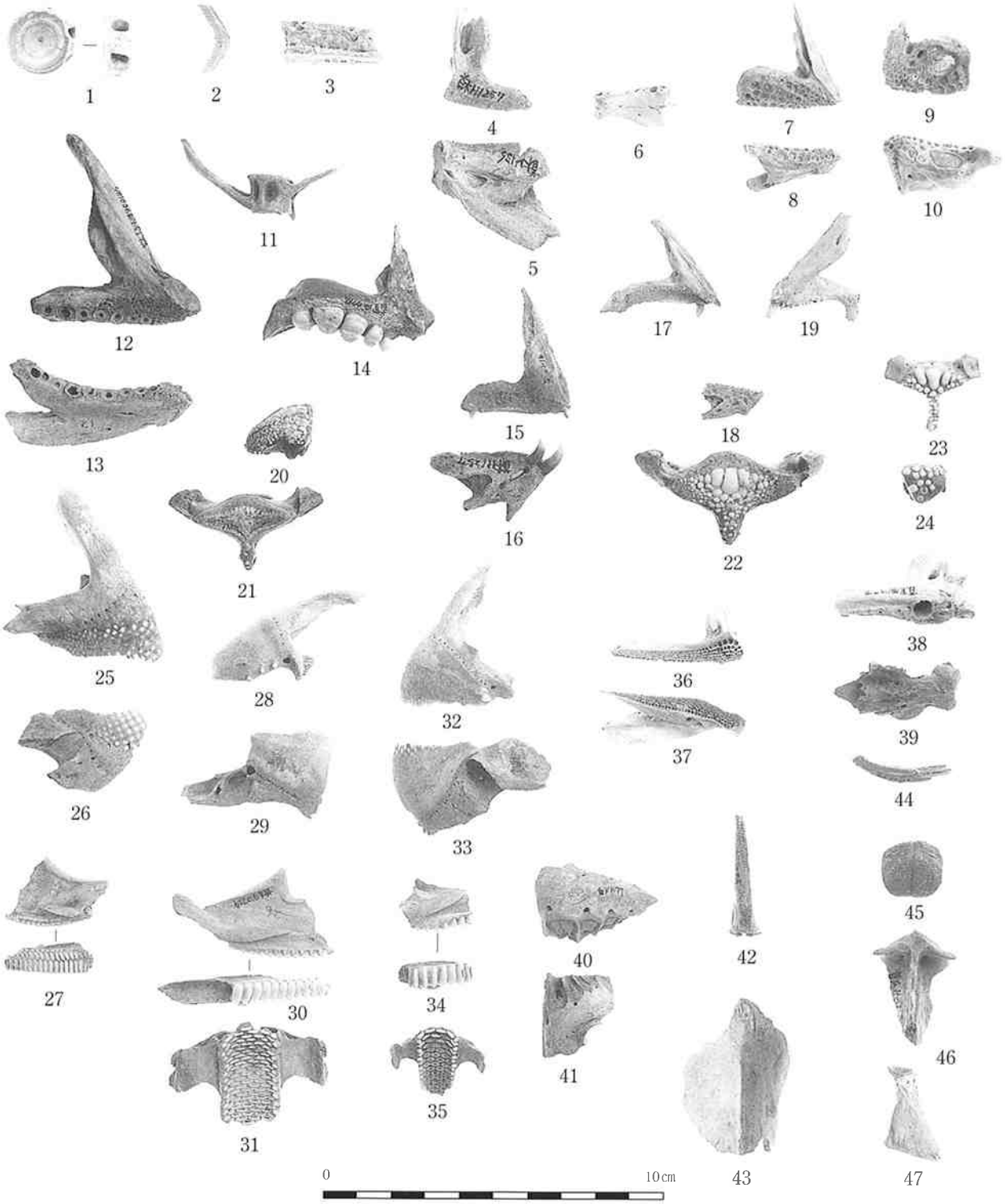
イヌ
21．下顎骨〈右 i3,c,dm3,4 M1左〈p2〉dm3,4,M1　22．下顎骨右p2,3,4,M1,2　23．右尺骨　24．中手骨　25．左中手骨Ⅳ　26．左基節骨

ネコ
27．左上腕骨　28．右脛骨

ジュゴン
29．肋骨　30．胸椎　31．腰椎　32．右大腿骨　33．海獣椎体



図版100　ウシ　1.右上顎骨dm4　2.右上顎骨p3　3.右上顎骨p4　4.左上顎骨M１　5.左上顎骨M２　6.左上顎骨M３　7.切歯骨　8.左下顎骨M１　9.左下顎骨M２　10.左M３　11.右角　12.頸椎　13.胸椎　14.腰椎　15.仙椎　16.尾椎　17.左肋骨　18.左肩甲骨　19.右上腕骨　20.右橈骨　21.右尺骨　22.中手骨　23.右寛骨　24.左手根骨2+3　25.左第４中心足根骨　26.右大腿骨　27.右脛骨　28.右膝蓋骨　29.右距骨　30.右踵骨　31.左中足骨　32.左基節骨　33.左中節骨　34.左末節骨



図版101　魚類

1.サメ　脊椎　2.トビエイ科　歯板　3.ダツ科　右歯骨　4.フエダイ科（A）右前上顎骨　5.フエダイ科（A）右歯骨　6.フエダイ科（B）右歯骨　7.タイ科クロダイ　左前上顎骨　8.タイ科クロダイ　左歯骨　9.タイ科ヘダイ右前上顎骨　10.タイ科ヘダイ　右歯骨　11.脊椎　12.フエフキダイ科ハマフエフキ左前上顎骨　13.フエフキダイ科ハマフエフキ左歯骨　14.フエフキダイ科ヨコシマクロダイ　左前上顎骨　15.ベラ科　コブダイ　左前上顎骨　16.ベラ科　コブダイ　右歯骨　17.ベラ科（A）左前上顎骨　18.ベラ科（A）右歯骨　19.ベラ科（B）右前上顎骨　20.ベラ科コブダイ右上咽頭骨　21.ベラ科コブダイ　下咽頭骨　22.ベラ科（A）下咽頭骨　23.ベラ科タキベラ下咽頭骨　24.ベラ科（B）上咽頭骨　25.ブダイ科　イロブダイ　右前上顎骨　26.ブダイ科　イロブダイ　右歯骨　27.ブダイ科　イロブダイ　右上咽頭骨　28.ブダイ科（A）右前上顎骨　29.ブダイ科（A）右歯骨　30.ブダイ科ナンヨウブダイ　左上咽頭骨　31.ブダイ科ナンヨウブダイ下咽頭骨　32.ブダイ科（B）左前上顎骨　33.ブダイ科（B）左歯骨　34.ブダイ科ナガブダイ　左上咽頭骨　35.ブダイ科ナガブダイ　下咽頭骨　36.スズキ科　ハタ類（A）左前上顎骨　37.スズキ科ハタ類（A）左歯骨　38.スズキ科ハタ類（B）右前上顎骨　39.スズキ科ハタ類（B）右歯骨　40.モンガラカワハギ科左前上顎骨　41.モンガラカワハギ科左歯骨　42.モンガラカワハギ科　背鰭棘　43.ニザダイ類　尾部鱗　44.コチ　左歯骨　45.ハリセンボン科　上．下不明歯骨　46.種不明　鋤骨　47.尾椎

付篇：瓦

瓦は出土した遺物の中では多い方でその内訳はコンテナ[註1]で高麗瓦[註1]は92個、明式瓦は192個分、大和瓦30個分、その他（特殊瓦を含む）６個分である。今回は掲載頁の都合上、文様のバリエーションに富む明式軒瓦について報告し、他は後日検討したい。

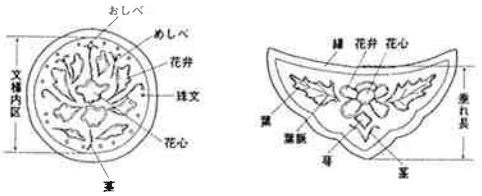
軒丸・平とも幾種かの花をモチーフ[註1]にしていると思われる。花の種類を大分類、その花の変化を小分類した。各々の記述は模式図[註2]（第98図）に各部位を仮称し、項ごとに比較して第63・64表にまとめ、その出土状況は第66・67表にしめしたが、その際、赤褐色と灰褐色と両方に含めきれないものに分け、分類は作業段階で小分類が確認できなかったものについては大分類の枠でまとめた。

軒平瓦は1018個出土したが、そのうち分類可能なものは832個（81.7%）でその内訳は第63表に示したとおりである。第100・101図に示したが、大きくは11類に分けられる。Ⅰ類はもっともバリエーションに富み、８種に細分でき、他は２種か１種である。

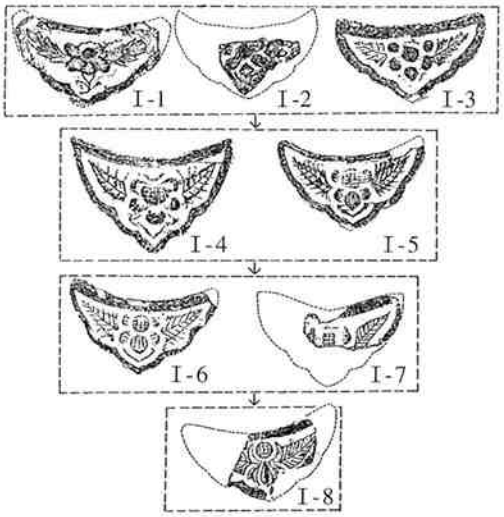
Ⅰ類[註3]は８種あり、１～３種までは茎が残り、花も具象のままである。４・５種は下端の花弁・葉の葉脈を誇張して表現する。６・７種は上の花弁が弧状になり、花芯と下弁が同大の円形になる。８種は全体に花弁の形を残さず、花芯は下弁より小さくなり他の花弁もかなり抽象化する。以上の状況から第99図上のような変遷が想定される。Ⅱ類（第１図９・10）、Ⅲ類（11・12）Ⅳ類（13・14）、Ⅴ類（15）、Ⅵ類（16）、Ⅶ類（17）、Ⅷ類（18）、Ⅸ類（19）、Ⅹ類（20・21）、ⅩⅠ類（22）、ⅩⅡ類（23・24）ⅩⅢ類（25・26）で、主に灰色瓦に多く、花の文様の変化も少ない。

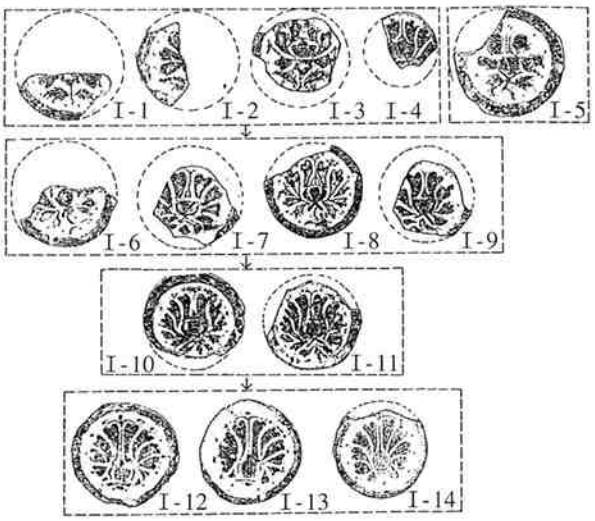
軒丸瓦は1494個出土したが、そのうち分類可能なものは1156個（77.3%）でその内訳は第64･65表に示す。第102図と第101図の一部に示したが、図版作成の都合上、分類の順序とは一致しない。

Ⅰ類[註4]は14種に分けた。１種～５種までは葉を残し、６種～９種は花心「ｘ」状、花弁はやや幅がある。葉は省略され、茎は「く」字状に曲がる。10種～11種は花弁は左右各４枚であるが弁は凹凸が混じり、花心は愕とつながり「Ｘ」状になり、葉は小さく残り、茎は消える。12種～14種は花弁は凹弁で左に４枚、右に６枚、花心は格子文に変わり、愕は「一」状に略化し、具象→抽象への変化が窺える。第99図下のような変遷が想定される。Ⅱ～Ⅴ類はⅠ類と同じく多弁花で詳細は観察表に示す。Ⅳ～ⅩⅤ類は基本的に双弁で花心、茎の向き、葉の形状、蔓の有無に差異があり、原体となる植物が異なることが想定されるので分類を異にした。詳細の観察・集計は前述した通りである。軒丸の第102図60は瓦に装着する位置が天地逆になる。これは首里城西のアザナ[註5]１例みられる。いずれも軒丸で、あることから製作時のミスとして考えられよう。



第98図　明式瓦軒丸・平模式図各名称





第99図　文様の変遷（上軒平・下軒丸）

註：1　コンテナは大は1.5倍、小は0.5倍として中サイズに換算して算出した。
註：1　上原分類の大和系瓦も含む
註：1　上原1994は牡丹・蓮華・菊を想定。（「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』no.14沖縄考古学会　1994.11）
註：2　上に同じ
註：3　上原1994の第Ⅰ文様と第Ⅶ文様にあたる。詳細は観察表に記述。
註：4　上原1994の第Ⅲ文様系にあたる。
註：5　１に同じ

第63表　軒平観察一覧

単位：cm、「－」：不明or計測不可、（ ）：推定

図番号	大分類	小分類	花弁	花芯	顎	葉	茎	色	法量	類例
1	I	①	6枚、立体的。	饅頭型	「V」	複葉左右各1枚。	一本十小葉左右各1枚。右曲。	褐色、軟質	弦幅：(20.8)、谷深：(2)、垂長：(12.15)、縁幅：1.10	西ア（第11図Ⅲ01）、湧Ⅰ（第98図21）、天東（第93図8）
2		②	5枚、面的、上は横線、下は菱形に成りつつある、上部丸味、下部逆三角。	饅頭型	「V」	左右各1枚。	左曲。	褐色、軟質	弦幅：(20.2)、谷深：(2.7)、垂長：(10.3)、縁幅：－	西ア（第11図Ⅲ02）、北殿（第63図3）御細（第51図64）、天東（第93図7）
3		③	5枚、面的、上は内に弧状、下は大きくなり、丸味。	饅頭型少し大きくなる	「V」	左右各1枚、葉脈明瞭。	一本（不明瞭）左曲。	灰色、硬質	弦幅：(22.4)、谷深：(1.4)、垂長：(11.5)、縁幅：1.7	西ア（第11図Ⅲ04）、湧Ⅰ（第98図22）那天（第41図B5）、首管（第75図5）
4		④	5枚、上は「V」に変化、下は花弁大。	逆饅頭型。格子文。	「V」	左右各2枚、葉脈明瞭、はみ出す。	「V」字状。	灰色、硬質	弦幅：23.9、谷深：3.2、垂長：(14.5)、縁幅：1.6	西ア（第11図Ⅲ05）首管（第75図13）
5		⑤	花弁4枚は同大、上は弧状、下は玉状で花芯より若干小。縦線。	隅丸方形、格子文。	「V」	左右各2枚、葉脈明瞭、はみ出す。	無	赤色、硬質	弦幅：(20.8)、谷深：2.9、垂長：(11)、縁幅：1.0	西ア（第11図ⅢB01）、湧Ⅰ（第98図1）南殿（第21図1）那天（第52図C6）、北殿（第98図8）畝久（第52図1）大川1962（別表2-1,2）首管（第75図8-9-11）、天東（第93図9）
6		⑥	花弁は4枚で上位は下位より花弁が小さい、上は退化、下は花芯と同形・大、縦線。	円形、格子文。	「V」	左右2枚、葉脈明瞭、はみ出す。	無	赤色、硬質	弦幅：(20)、谷深：2.5、垂長：11.1、縁幅：1.6	西ア（第11図Ⅲ03）首管（第75図14）
7		⑦	花弁4枚か、上は横線、下は丸形で下にしぼむ。花芯と同大。	方形、格子文。	不明	左右2枚、葉脈明瞭。	無	灰色、硬質	弦幅：(22.4)、谷深：(2.5)、垂長：(9.7)、縁幅：－	北殿（第63図9）首管（第75図10,12）
8		⑧	花弁4枚。三日月線状、下は玉ねぎ型で花芯より大。	円形、格子文。左右に「 」がつく。	無	左右2枚、葉脈明瞭。はみ出ない。	無	赤色、硬質	弦幅：(22)、谷深：(2.7)、垂長：(10.4)、縁幅：－	西ア（第11図02-2）湧Ⅰ（第98図5）北殿（第63図13,14）
9	Ⅱ	①	2枚、銀杏葉状、立体的。雄しべ：1本。	円形	磨耗	小葉と葉、左右各1枚、葉脈あり。	一本直線と小葉。	灰色、硬質	弦幅：(22.4)、谷深：(2.65)、垂長：(13.05)、縁幅：－	西ア（第11図H01）
10		②	2枚、銀杏葉状、弁は3枚の線状。雄しべ：3叉か花弁。	長楕円、縦線状。	破損	小葉と葉、左右各1枚で葉は3叉。	破損不明	赤色、軟質	弦幅：(23)、谷深：(2.3)、垂長：(12.7)、縁幅：1.09	
11	Ⅲ	①	2枚、3叉状つよい外反。	円形、斜め格子文。	破損	小葉と葉（複）左右各1枚、葉脈明瞭。	破損	褐色、硬質	弦幅：(21.8)、谷深：4.3、垂長：(12.6)、縁幅：1.8	
12		②	3叉状、外反は弱い。	破損	破損	複葉、立体的。小葉は破損不明。	破損不明	灰色、硬質	弦幅：(23.4)、谷深：(1.9)、垂長：(12.3)、縁幅：－	天東（第93図12）
14	Ⅴ	①	上に同じだが、面的。	正円形、格子文。	三叉	面的小葉2枚、複葉2枚は葉脈有り。	2本、左に湾曲	褐色、軟質	弦幅：(21.1)、谷深：(3.1)、垂長：(13)、縁幅：2.2	
13		②	上左右各1枚は3叉、上向き。	瓢円形、格子	左右各1枚斜位	複葉、左右各1枚、小葉、左右各2枚、立体的。	2本、左に湾曲	褐色、硬質	弦幅：(23.3)、谷深：(2.85)、垂長：(12.8)、縁幅：2.0	西ア（第11図A01ⅡA01-1・ⅡA01-2）湧Ⅰ（第98図12-25）首管（第75図1）
15	Ⅵ	①	3叉状。上左右各1枚、下弁横向き。	逆饅頭型、格子文。	無	小葉一三叉で下向き、複葉、左右各1枚で面的。	2本、僅かに右に湾曲	褐色、硬質	弦幅：(21.4)、谷深：(2.5)、垂長：(11.8)、縁幅：－	西ア（第11図ⅡC01）御細（第51図2）湧Ⅰ（第98図28）、天東（第93図2）
16	Ⅶ	②	2枚、2叉、立体的。	横楕円、格子文。	無	小葉、複葉左右各1枚、葉脈は上向き「く」に曲がる。	破損、不明	褐色、硬質	弦幅：(22)、谷深：(2.2)、垂長：(12.1)、縁幅：1.0	西ア（第11図D01）、首管（第75図2）天東（第93図3）
17	Ⅷ	①	3叉状、面的、左右各1枚。	破損不明	無	小葉3叉状、複葉で分葉、左右各2枚か、面的。	破損不明	赤色、硬質	弦幅：(26.55)、谷深：(1.9)、垂長：(13.2)、縁幅：－	
18	Ⅸ	①	上向き斜め、3叉状、立体的。左右各2枚。	横楕円、上方形。	無	小葉3叉状、下斜め向き、複葉左右各1枚、抉り浅い。蔓：左右に各1本、内巻き、小葉近くに左右各1本内巻き。	2本、左曲。	褐色。軟質	弦幅：(21.2)、谷深：(2.5)、垂長：(12.8)、縁幅：1.86	西ア（第11図E01）湧Ⅰ（第98図8）
19		②	破損不明	破損不明	破損不明	複葉。面的、抉り深い。	破損不明	赤色。軟質中は灰色	弦幅：(24.3)、谷深：(2.8)、垂長：(12.5)、縁幅：－	
20	Ⅹ	①	左右各2枚、面的、複弁。雄しべ：2本、上に外巻き。左右に各1本、内巻き、小葉近くに左右各1本内巻き。	山型	破損不明	複葉、上向く、小葉有。	破損不明	サンド、軟質中は灰色	弦幅：(23)、谷深：(2.8)、垂長：(13.5)、縁幅：－	
21		②	破損不明	破損不明	破損不明	複葉上に向く、抉り深い。立体的葉脈有り。	破損不明	褐色、軟質粉	弦幅：(23)、谷深：(2.2)、垂長：(13.7)、縁幅：－	
22	ⅩⅠ		左右2枚、立体的、上向マウンド状。	横楕円	左右各1枚	複葉、左右各2枚、抉り浅い。小葉は、蔓状外巻き左右各1枚。	直線、2本線、外巻き。	褐色、軟質	弦幅：(22.5)、谷深：(2.9)、垂長：(12.75)、縁幅：1.96	西ア（第11図Ⅰ01）、天東（第93図6）
23	ⅩⅡ		多弁で面的。牡丹か。	楕円	破損不明	複葉、左右各1枚。抉り深い。面的。	破損－無	赤色、硬質	弦幅：(21)、谷深：(3)、垂長：(11.3)、縁幅：0.9	
24			小振り。多弁－9枚。弁は棒状。	楕円	無	複葉、抉り深い。	無	赤色、硬質	弦幅：(21)、谷深：(3.1)、垂長：(10.8)、縁幅：－	
26	ⅩⅢ	①	無。小振りで文様は具象化。	簡略化された花芯	無	単葉、左右に各一枚、真ん中に葉脈1本走る。	破損不明	灰色、軟質	弦幅：(16.8)、谷深：(1.4)、垂長：(6.4)、縁幅：1.35	
25		②	無。小振り、やや抽象化 無。小振り、やや抽象化 無。小振り、やや抽象化	玉型	無	単葉、先端丸味。中央に線。	無	褐色、軟質器面崩落	弦幅：(16.8)、谷深：(1.1)、垂長：(6.7)、縁幅：1.78	

第64表　軒丸観察一覧（1）

単位：cm、「－」：不明or計測不可

図番号	大分類	小分類	花弁・雄しべ	花　芯	顎	葉・蔓	茎	色	法　量	類　例
44	Ⅰ	①	凸弁、幅広、破損一枚数不明。 雄しべ：破損不明	破損不明	逆饅頭型	葉：複葉左右各１枚。 蔓：無	１本、途中で「く」に曲がる	灰色、軟質	外径：15.9、縁幅：1、珠文径：0.25、珠文間隔：1.3、珠文数：(22)	西ア（第10図Ⅲ02）、天東（第92図9）
45		②	凸弁幅広。 雄しべ：破損不明	破損不明	破損不明	葉：複葉左右各１枚、斜めに出る。 蔓：無	破損一有	褐色、軟質	外径：14.7、縁幅：1、珠文径：0.2、珠文間隔：1.6、珠文数：(18)	
46		③	凸弁左右６枚 雄しべ：有	山型	有、山	葉：複葉左右各２枚。 蔓：無		灰色、軟質	外径：14.6、縁幅：1、珠文径：0.2、珠文間隔：1.6、珠文数：(13)	西ア（第10図Ⅲ01）、湧Ⅰ（第96図6）、大川1962（別表3-6）、天東（第92図8）
47		④	凸弁 雄しべ：有	山型46より大	有	葉：破損不明、蔓：無	破損不明	赤～灰、サンドイッチ状、軟質	外径：10.9、縁幅：－、珠文径：－、珠文間隔：－、珠文数：－	
48		⑤	凹弁 雄しべ：２本	格子文	「Ｖ」	葉：３割れ２枚。 蔓：無	「く」	灰～褐色、サンドイッチ状、軟質	外径：15.8、縁幅：1.5、珠文径：0.2、珠文間隔：2.9～3.8、珠文数：(10)	このタイプは例を見ない、他の分類の可能性もある
49		⑥	凸弁 雄しべ：破損不明	円形	有	葉：左右２枚、複葉。 蔓：無	湾曲、下に小葉	灰～褐色、サンドイッチ状、軟質	外径：15.6、縁幅：1、珠文径：0.25、珠文間隔：2.1～2.2、珠文数：(16)	西ア（第10図Ⅲ03）
50		⑦	凹弁：左右各４枚 雄しべ：１本、上下とも２叉になる。	横楕円	「Ｘ」	葉：３枚。 蔓：無	崩れ	暗茶色、硬質	外径：14.7、縁幅：0.9、珠文径：－、珠文間隔：－、珠文数：－	南殿（第20図2）西ア（第10図Ⅲ04）
51		⑧	左右各３枚、凹凸弁の組み合わせ、線的。 雄しべ：	タマネギ状に３割れ。	「Ｘ」	葉：左右に２枚、複葉。 蔓：無	「く」下位に横線	褐色、軟質	外径：14.5、縁幅：1.2、珠文径：0.5、珠文間隔：2.3、珠文数：(14)	天東（第92図10）
52		⑨	左右に凹凸弁の組み合わせ。 雄しべ：上は２叉、下に３叉状。	タマネギ３割れ上ほどはっきりしない	「Ｘ」	葉：左右に２枚、くずれ初めはっきりしない。 蔓：無	「く」葉と一緒になる。	褐色、軟質	外径：15.4、縁幅：1.2、珠文径：0.4、珠文間隔：2.4、珠文数：(15)	
53		⑩	左右に凹凸の弁の組み合わせ細身。 雄しべ：1本、上下とも2本	山型	有	葉：左５右４枚。 蔓：無	１本上下とも２本。	褐色、軟質	外径：13.9、縁幅：1.4、珠文径：0.2、珠文間隔：2.2～2.4、珠文数：(13)	湧Ⅰ（第96図9）西ア（第10図07）
54		⑪	左右に凹凸の弁の組み合わせ細身。雄しべ：１本上叉状、下は三角形	タマネギ状３に割れる	「Ｘ」	葉：３枚。 蔓：無	無	赤～茶褐色、軟質	外径：14、縁幅：1.2、珠文径：0.2、珠文間隔：2.3～2.5、珠文数：(13)	湧Ⅰ（第96図8-10）那天（第40図5-6）西ア（第10図Ⅲ07）
55	Ⅱ	⑫	凹弁左右９枚 雄しべ：１本上珠文と合体三葉状、下は三角形	格子文やや方形、左右は()状	横１本	葉：かなり省略化、左右に２枚。 蔓：無	略化	灰～暗黄土褐色、軟質	外径：14.9、縁幅：1.1、珠文径：0.2、珠文間隔：2.1、珠文数：(14)	那天（第40図8-9）、北殿（第62図6）、大川1962（別表3-8）、西ア（第10図Ⅲ08）、天東（第92図12）
56		⑬	凹弁左右10枚 雄しべ：１本、上叉状に外反、下３本。	格子、左右()状。	横１本	葉：略か２枚。 蔓：無	略化、点	赤色、軟質	外径：14.3、縁幅：1.1、珠文径：0.2、珠文間隔：2.3～2.7、珠文数：(12)	北殿（第62図4）、首奉（第52図1）、大川1962（別表3-9）、西ア（第10図Ⅲ09）、天東（第92図11）
57		⑭	凹弁左右10枚で基部は実る。 雄しべ：１本、上叉状に外反、下三角状？	格子文、	横１本より、線的	葉：無 蔓：無	略化、点	赤色、硬質	外径：13.7、縁幅：1、珠文径：0.2、珠文間隔：2.3～2.6、珠文数：(12)	
67		⑮	多弁、凹弁か 雄しべ：有	破損不明	破損不明	葉：破損、蔓：不明	破損	灰～褐色、サンドイッチ状、軟質	外径：22.3、縁幅：1.5、珠文：無	
58	Ⅱ	①	バラ状、立体 雄しべ：破損不明	三つ葉状	破損不明	葉：破損不明 蔓：	破損不明	赤～茶褐色、軟質	外径：15.8、縁幅：1、珠文径：0.55、珠文間隔：2.8～3.5、珠文数：(12)	
59		②	バラ状、面的 雄しべ：破損不明	破損不明	破損不明	葉：破損不明 蔓：	破損不明	赤色、軟質	外径：16.5、縁幅：1、珠文径：0.4、珠文間隔：3.0～3.7、珠文数：(10)	
60		③	バラ状、左右対称、重ね、弁を線で表現、 雄しべ：中央に面で表現	縦長の方形、線で表現	無	葉：無 蔓：無	無	赤色、やや硬質	外径：16.2、縁幅：1.1、珠文径：0.6、珠文間隔：3.5、珠文数：(10)	
61		④	バラ状、線が明瞭、左下の弁が強調される 雄しべ：無	方形、線が明瞭	無	葉：無 蔓：無	無	赤色～暗茶色、硬質	外径：14.8、縁幅：1、珠文径：0.4、珠文間隔：3.6～4.1、珠文数：9	北殿（第62図10-11）、那天（第40図10-11）、首奉（第52図4）飯久（第51図7）南殿（第20図7）首笞（第74図8）大川1962（別表3-18）、天東（第92図13）
62		⑤	**大、バラ状、面的。** **雄しべ：無**	縦長の方形	破損不明	葉：破損－無 蔓：破損－無	破損－無	赤～茶褐色、硬質	外径：15.2、縁幅：－、珠文径：0.75、珠文間隔：－、珠文数：(10)	
63	Ⅲ	①	小、バラ状 雄しべ：無	山型	無	葉：無 蔓：無	無	赤～茶褐色、硬質	外径：15.8、縁幅：0.9、珠文径：0.3、珠文間隔：4.1、珠文数：(10)	南殿（第20図8）大川1962（別表3-15）西ア（第10図Ａ01・Ａ02）
64		②	小、バラ状、線的表現が強い 雄しべ：無	方形。Ⅱ類に近い	有	葉：無 蔓：無	無	赤～茶褐色、やや硬質	外径：15.8、縁幅：1、珠文径：0.8、珠文間隔：3.7、珠文数：(10)	首笞（第74図9）大川1962（別表3-17）
66	Ⅴ		菊状 雄しべ：無	円形か	無	葉：無 蔓：４～６本	蔓が花の下に複数	灰～茶褐色、サンドイッチ状、軟質	外径：15.5、縁幅：1.4、珠文径：0.5、珠文間隔：1.9、珠文数：(10)	大川1962（別表3-5）湧Ⅰ（第96図6）西ア（第10図01）
65	Ⅵ		**バラ状、64に近い** **雄しべ：無**	三つ葉状、線で囲む	無	葉：其象的。 蔓：無	無	灰褐色、軟質	外径：12.2、縁幅：－、珠文径：0.4、珠文間隔：1.2、珠文数：(22)	
27		①	２枚、左は２段抉りが強い。立体的 雄しべ：無	「Ｖ」	無	葉：左右各２枚先端３叉状。横と下斜に向く。 蔓：左右外巻き	２本、左に湾曲。	暗灰褐色、軟質	外径：15.8、縁幅：1.4、珠文径：0.6、珠文間隔：1.3、珠文数：(34)	首奉（第52図6）、西ア（第10図Ⅰ A06-1）、天東（第92図5）
28	Ⅶ	①	２枚、左右とも内側２段抉り 雄しべ：無	「Ｖ」	無	葉：左右に各１枚３叉状。 蔓：左右外巻き	２本、右に湾曲。	暗灰色、硬質	外径：13.8、縁幅：1.2、珠文径：0.6、珠文間隔：1.09、珠文数：(22)	西ア（第10図Ⅰ B01）、大川1962（別表3-11）、天東（第92図6）
29	Ⅷ	①	２枚、膨らむ、内側に左右浅い抉り。 雄しべ：	棒状、やや面的。三本。	無	葉：棒状３枚。 蔓：左右に小さく外巻き。	２本か右に湾曲。	灰色、軟質、磨耗	外径：14.3、縁幅：1.1、珠文径：0.7、珠文間隔：1.37、珠文数：(20)	飯久（第51図10）西ア（第10図Ⅰ B02-1）首笞（第74図7）
30		②	２枚、線状やや面的。 雄しべ：破損一無	破損不明	無	葉：無 蔓：破損不明	破損不明	茶褐色、軟質、磨耗	外径：(14.8)、縁幅：1.17、珠文径：0.7、珠文間隔：0.81、珠文数：(24)	
32		③	２枚、線状。 雄しべ：破損一無	破損不明	無	**葉：破損不明** 蔓：破損不明	破損不明	茶褐色、軟質	外径：(15.5)、縁幅：1.1、珠文径：1、珠文間隔：1.7、珠文数：(28)	天東（第92図1）
31		④	２枚、線状くずれる。 雄しべ：無	棒状３本。	無	葉：破損不明 蔓：破損一無	破損不明	褐色、軟質、磨耗	外径：(14.9)、縁幅：1.2、珠文径：0.95、珠文間隔：0.93、珠文数：(24)	西ア（第10図Ⅰ B03）、天東（第92図2）
33	Ⅸ	①	弁細身２枚。内側に浅い抉り。面的。 雄しべ：無	円形格子文	無	**葉：左右各２枚、山型。** 蔓：上葉から出る。左右外巻き。	**２本、小葉**外巻き。	茶褐色、軟質、丁寧	外径：14.5、縁幅：1.2、珠文径：0.5、珠文間隔：1.2、珠文数：(34)	那天（第40図3）首奉（第52図9）西ア（第10Ⅰ A04）
34		②	弁細身２枚。外側に浅いくびれ。面的。 雄しべ：無	格子文崩れ	無	葉：左右各１枚。 蔓：外葉から出る。はっきりしない。	２本、小葉ははっきりしまい	暗灰色、軟質	外径：(15.0)、縁幅：1.3、珠文径：0.8、珠文間隔：0.6～1.5、珠文数：(33)	
35	Ⅹ		弁は丸味２枚。先端に浅いくびれ。 雄しべ：無	横楕円。格子文、小さくなる。	無	葉：左右各２枚３叉状。 蔓：上葉から出る。外巻き。	２本、小葉出る。外巻き。	**灰色、軟質**	外径：(14.7)、縁幅：1.2、珠文径：0.3、珠文間隔：1.2、珠文数：(29)	西ア（第10図Ⅰ A01）、天東（第92図3）
36	ⅩⅠ	①	２枚、弁は外内くびれる。 雄しべ：無	隅丸方形、格子文。	無	葉：左右３枚、放射状。細葉。 蔓：上葉から出る、外巻	破損	灰色、軟質	外径：(15.9)、縁幅：－、珠文径：0.6、珠文間隔：1.3、珠文数：(25)	西ア（第10図Ⅰ A07）

第65表　軒丸観察一覧（2）

単位：cm、「－」：不明or計測不可

図番号	大分類	小分類	花弁・雄しべ	花芯	顎	葉・蔓	茎	色	法量	類例
37	XⅠ	②	2枚、弁は細身、僅かにくびれる。 雄しべ：無	円形、格子文。	無	葉：左右6枚 蔓：上葉から出る内巻	2本左湾曲	灰色、軟質	外径：(16.5)、縁幅：1.3、珠文径：0.5、珠文間隔：1.2、珠文数：(31)	首奉（第52図13） 西ア（第10図ⅠA08）
38	XⅡ		2枚、弁はふくらんで先端段を作ってしぼむ、珠文と合体。雄しべ：無	隅丸方形。格子文。	無	葉：足形－珠文と合体。 蔓：はっきりしない	破損不明	灰～茶褐色、軟質	外径：(12.0)、縁幅：－、珠文径：0.6、珠文間隔：2.9～4.0、珠文数：(12)	西ア（第10図01）
39	XⅢ		立体的、2枚、先端舌状 雄しべ：破損不明	破損不明	無	葉：三叉、左右各2枚。 蔓：副葉に変化か。	破損不明	赤灰色、サンドイッチ状、軟質	外径：(12.5)、縁幅：－、珠文径：－、珠文間隔：－、珠文数：－	
40	XⅣ		破損不明 雄しべ：不明	円形、格子文。	無	葉：棒状3枚以上。 蔓：2叉に割れ、外巻き	破損	灰色、軟質	外径：(16.8)、縁幅：1.3、珠文径：0.6、珠文間隔：1.2、珠文数：(33)	
41	XⅤ		破損不明 雄しべ：破損不明	破損不明	無	葉：面的、山状。 蔓：2叉に割れ、外巻き	破損	灰色、軟質	外径：(15.0)、縁幅：1.3、珠文径：0.5、珠文間隔：0.8～1.2、珠文数：(28)	
42	XⅥ		複弁 雄しべ：無	複弁上に尖り、縦に棒状。全体に広がる。	無	葉：2枚、線が明瞭。 蔓：無	無	赤～茶褐色、硬質	外径：(10.5)、縁幅：1.2、珠文：無	首管（第74図4）
43	XⅥ		複弁（10枚）、棒状。 雄しべ：無	円形、縦三条棒線。	無	葉：花と合体か。 蔓：無	無	赤～黄土褐色、軟質	外径：(9.7)、縁幅：1.1、珠文：無	
68	XⅦ		摩滅不明－4枚以上か 雄しべ：2重、2叉に外巻大	破損不明	破損	葉：単葉か。 蔓：破損不明	破損不明	褐色	内径11.5、珠文は摩滅して不明。	図示なし。西ア（第10図Ⅴ01）

第66表　軒丸地区・分類別出土状況

出土地	分類	Ⅰ										Ⅱ				Ⅲ				Ⅴ	Ⅶ	Ⅶ				Ⅸ				X		XⅠ		XⅡ	XⅢ	XⅣ	XⅤ		XⅥ		XⅦ	破片		合計
		Ⅰ	①	②	④⑤		⑥	⑧		⑫⑬⑭		①②③		④⑤		①		②				①		②		①		②																
		赤	灰	灰	赤	灰	灰	赤	灰	赤	灰	赤	赤	赤	灰	赤	灰	赤	灰	灰	灰	赤	灰	灰	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	赤	灰	灰	—	赤	灰	灰	赤	灰	
下之御庭	K・L・M・N									4	7			19				1		1			1				3				1											11	9	57
	撹					1		3	6	43	29		5	142	54	1		5			1	1	4		1						6						2	1				51	29	385
	撹下3層																											1																1
	撹下5層																										1																	1
	—																	1								1	3											1				2	2	10
用物座	K・L・M・N							4	2	23	17	2		31		4	1	3	1	1	1					2			1	1	1		1									15	11	122
	撹							2	4	4	8			22		1											1				1	2									1	13		59
	—									1	1																															7		9
漏刻門	K・L・M・N								1	2								1																								2	4	10
	階段下3層													9																														9
	龍樋																																											
	—																																											
廣福門	K・L・M・N					1								13													1				1											5	2	23
	首撹広北西																										1															2		3
	撹西溝																																											
	撹東西溝									1				3									1																					5
	西									1													1																			6	1	9
	北							1	1	1	3			5		1					1																					2	2	17
	撹広北西																																										1	1
	広（3号穴）																																										1	1
	北西							4		4	2			12																	1											17	6	46
	撹乱																	7					1																			8		16
	—																	1																	1							1	2	5
木曳門	K・L・M・N	1			3	4		3	29	29	60		1					1		1	1	2	7	1		1	1	2	6	1	3		1						2			69	51	280
	表土撹										1																																	1
	周撹								1																																	1		2
	首木																																1	1						1				3
	撹・表		1		1	2	1		7	5	3																		1		1	2				1						2	11	38
	—		3		6	2	7	21	26	19	10										1	4	1				4		1	3	2								9			22	29	170
試掘	撹								1																																			1
	—				2	1	1	3	2	2	1			6	1			1		1	1		2		1		1		1	1	1											3	4	36
表・撹	階段下2層								1																																			1
	—	1	4	0	12	11	9	41	81	139	142	2	6	262	55	7	1	21	1	4	6	7	18	1	2	4	16	3	10	6	18	4	5	1	1	1	2	2	11	1	1	239	165	632
合計		2	8	0	24	22	18	82	162	278	284	4	12	524	110	14	2	42	2	8	12	14	36	2	4	8	32	6	20	12	36	8	8	2	2	2	4	4	22	2	2	478	330	1953

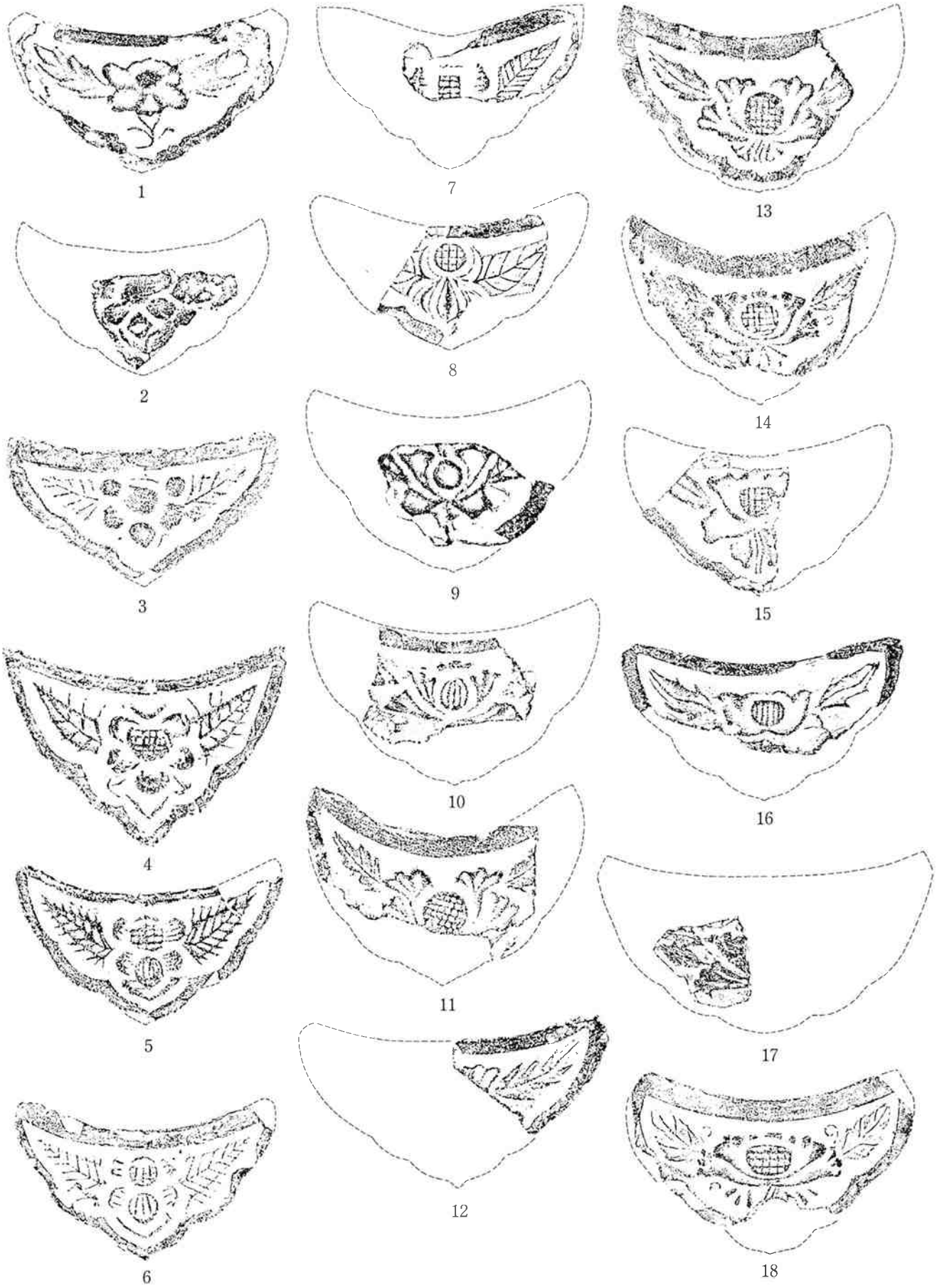
注：図示した分は含んでない

第67表　軒平地区・分類別出土状況

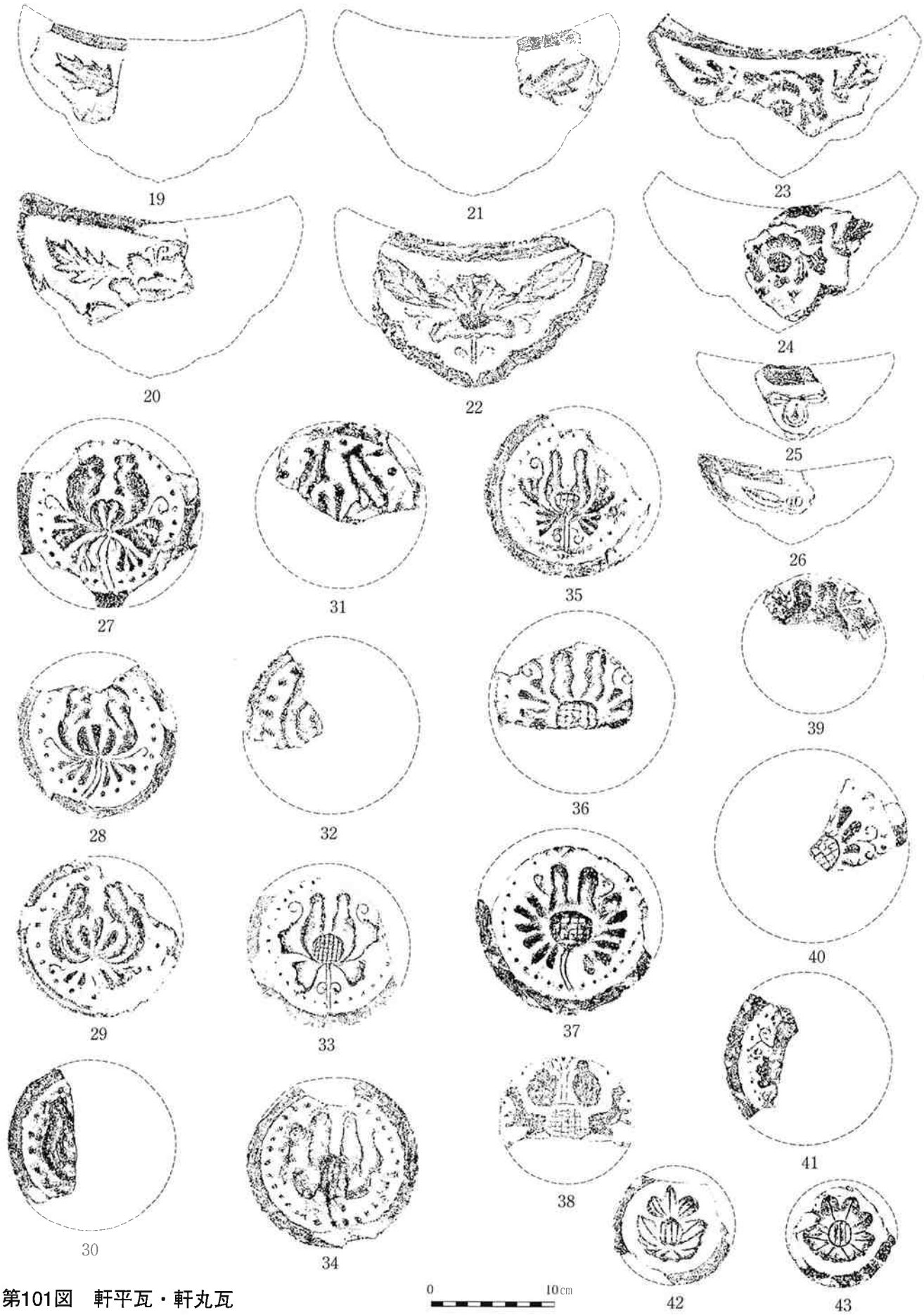
出土地	分類	Ⅰ																Ⅱ			Ⅲ	Ⅳ・Ⅴ		Ⅴ	Ⅵ		Ⅶ	Ⅷ		Ⅸ		合計
		①		②		③	④	⑤		⑥		⑦		⑧		破		①		②												
		赤	灰	赤	灰	灰	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	灰	赤	灰	灰	赤	灰	赤	灰	
下之御庭	K・L・M・N				1			9		48						1															5	70
	撹		10	3	2			46		8		10	8			78	53						2								1	269
	撹下3層																															2
	撹下5層																															0
	撹下									1							2									2			3		1	13
	下表								2																							2
	—									1																						4
用物座	K・L・M・N	2			1			10	10	28			10		1							5	3	1						1	2	89
	撹				3			11	2								3		2													29
	—																															1
漏刻門	K・L・M・N			2				3								2																9
	撹下3層															1																1
	撹下															1																1
	階段下3層		1																													1
	龍樋				1	1																										4
	—															1																1
廣福門	K・L・M・N							7	4	18							3													1	1	36
	撹乱																															0
木曳門	K・L・M・N	15	2	2	30		4	79	1	82	9	3	15	1			51	1	2		1	2	3	4		1					1	364
	撹用											1																				1
	撹下											1																				2
	表土撹							1		2																						3
	撹・表				1			11		6						1		1	1	1						3	1				1	42
	—	7	2	17	7		1			1							3		1			1	1		1			1				82
試掘	—		5	1	3			1		4													4	3							2	29
表・撹	—						1	2					1				1						1									12
合計		24	20	25	49	1	6	180	19	199	9	15	34	1	1	85	116	2	6	1	1	8	14	8	1	6	1	1	3	2	14	1067

注：図示した分は含んでない

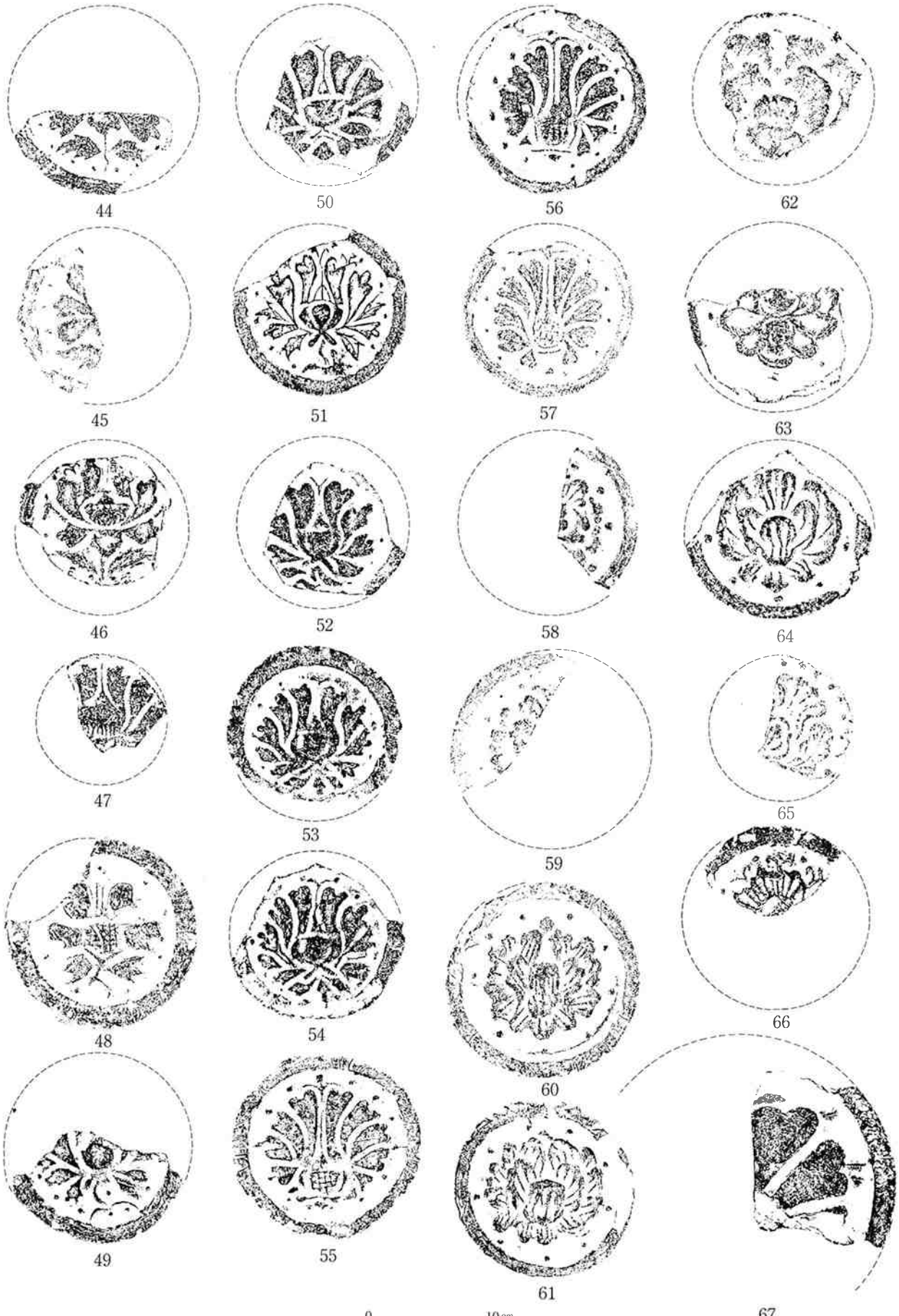
軒平・丸瓦観察表「類例」の項－凡例
西ア：上原　靜「首里城西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』NO.14、沖縄考古学会1994　南殿：上原　靜「首里城跡　南殿・北殿の遺構調査報告」『沖縄県文化財調査報告書』第120集　1995.3
北殿：上に同じ
湧Ⅰ：大城　慧・島袋　洋・金城　亀信「湧田古窯跡(Ⅰ)－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書』第111集1993.3
那天：島　弘　他「天界寺」『那覇市文化財調査報告書』第42集(1999.3)・第43集(2000.3)
天東：島袋　洋・當銘清乃・島袋春美他「天界寺跡(Ⅰ)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001.3



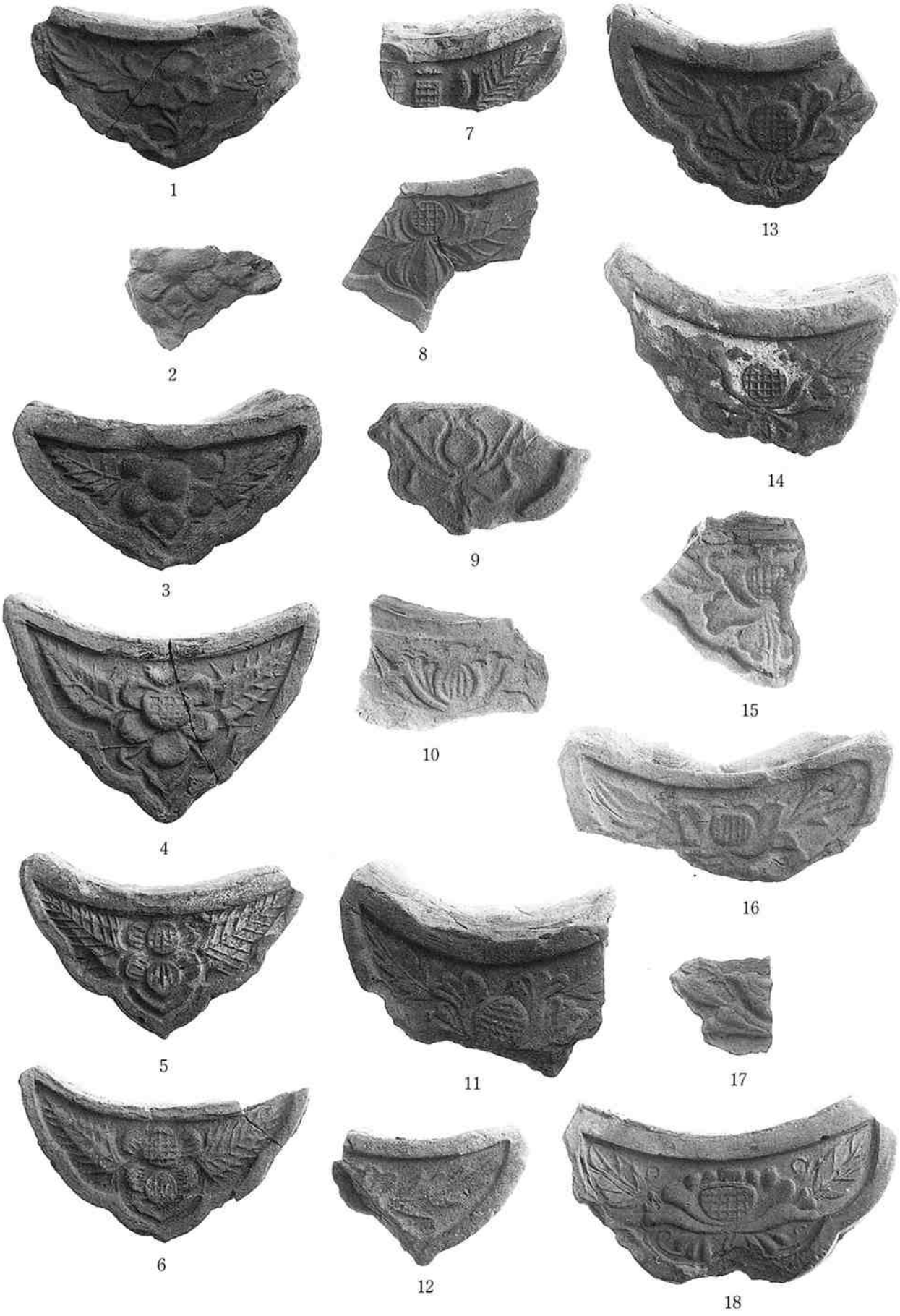
第100図　軒平瓦



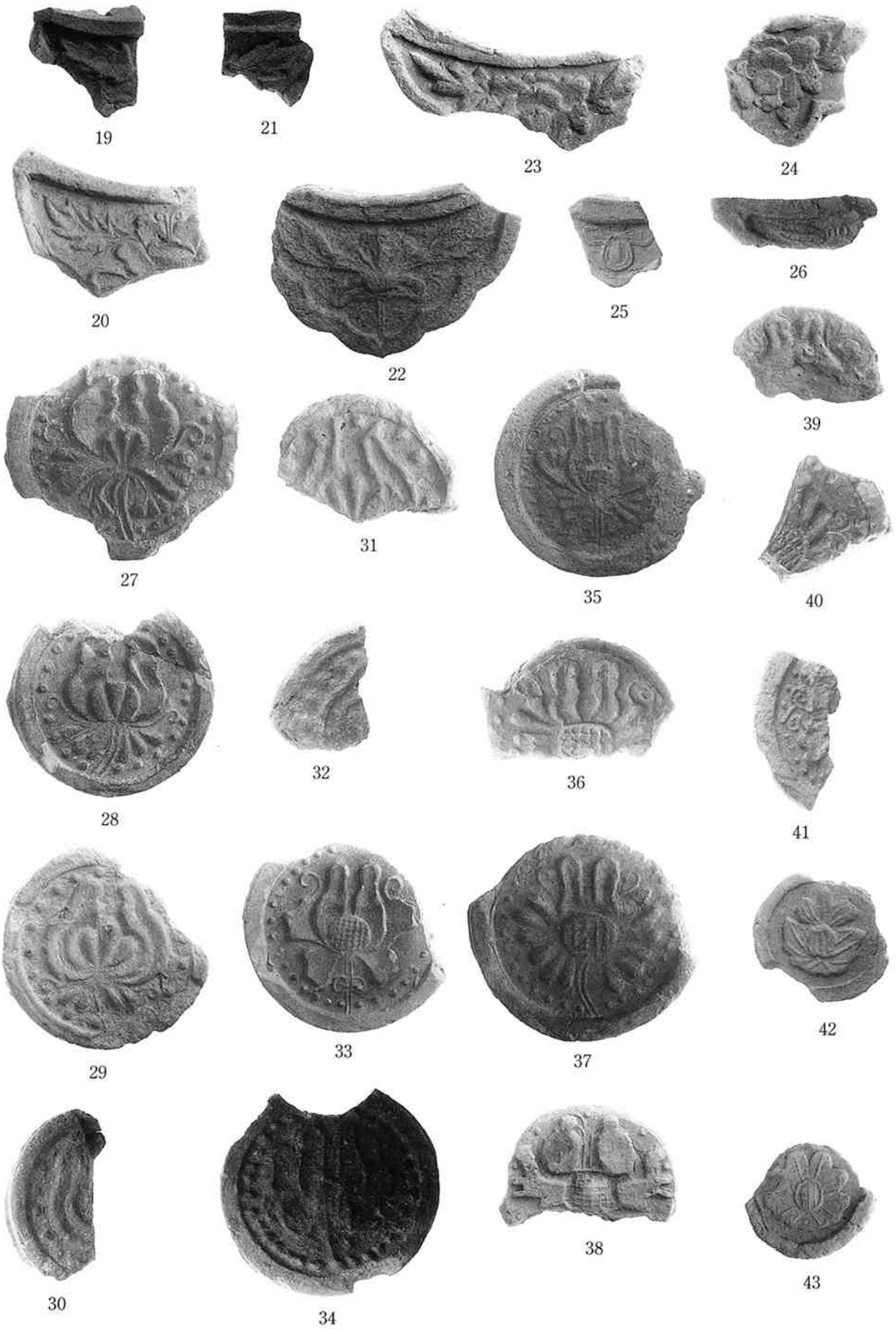
第101図　軒平瓦・軒丸瓦


44
50
56
62
45
51
57
63
46
52
58
64
47
53
59
65
48
54
60
66
49
55
61
67
0
10cm

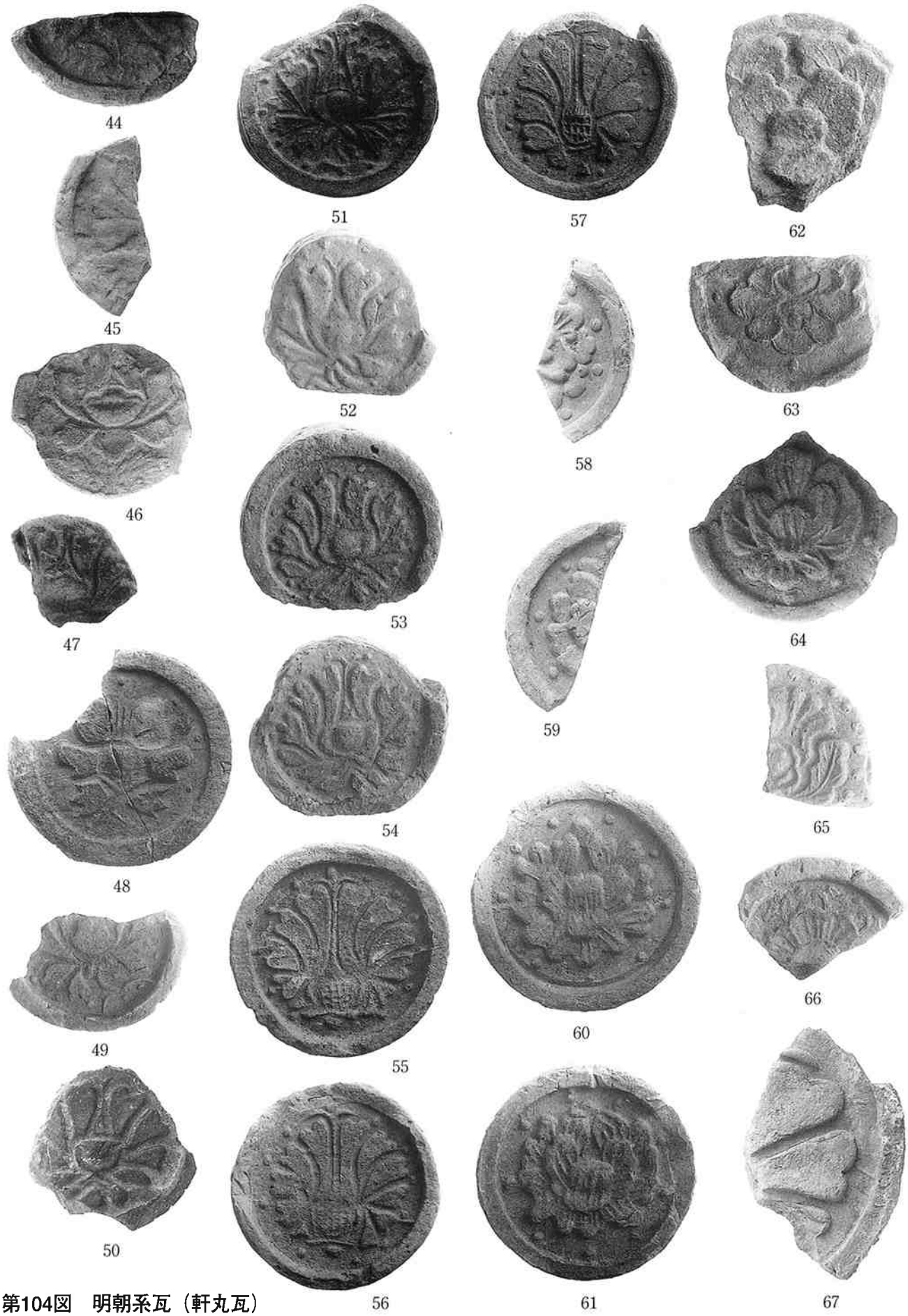
第102図　軒丸瓦



第102図　明朝系瓦（軒平瓦）



第103図　明朝系瓦（軒平瓦・軒丸瓦）



第104図　明朝系瓦（軒丸瓦）

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第３集

首　里　城　跡

－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－

発　行　年　　平成13（2001）年３月30日
発行・編集　　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の３
Tel 098-835-8751
印　　刷　　沖縄高速印刷株式会社
〒901-1111　沖縄県島尻郡南風原町字兼城577番地
Tel 098-889-5513

『首里城跡－下之御庭跡ほか－』正誤表

頁数	行数	誤	正	備考
例言	37	譜久嶺忠彦　第Ⅳ章第41節	譜久嶺忠彦　第Ⅳ章第42節	
128	5	5	6	
134	番号1	84	8.4	表中
	番号16	い	（トル）	表中
	番号17	－	16.4	表中
	番号18	16.4	11	表中
	番号19	11	－	表中
	番号20	－	7.4	表中
	番号21	7.4	8.6	表中
	番号22	8.6	－	表中
	番号23	－	16.3	表中
	番号24	16.3	－	表中
151	5	尚秦久代	尚泰久代	
	番号2	○五	□五	表中
158	30	隼人歯刷毛	軍人歯刷毛	
160	6	同図3～b	同図3～6	
160	40	民族事例	民俗事例	
175	11	AKIYOSHIT	AKIYOSHI.T	
266	図右上	（番号なし）	10	9右隣
276	右下	首里城西のアザ● その推移」『● 学会19● 金城●	首里城西のアザナ その推移」『南 学会1994 金城亀	第67表右

うめもさくや
こよみのうへは